

青森県埋蔵文化財調査報告書 第114集

かみ お ぶち
上尾馬交(2)遺跡 (I)

昭和62年度

青森県教育委員会

青森県埋蔵文化財調査報告書 第114集

かみ お ぶち
上尾馬交(2)遺跡(I)

むつ小川原開発事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

昭和62年度

青森県教育委員会

序

むつ小川原開発予定地域内には、縄文時代から歴史時代に至るまで、数多くの遺跡が発見されております。青森県教育委員会は、開発に先立ち、これらの遺跡の記録保存のため、昭和46年から継続的に調査を進めてまいりました。

昭和60年度、61年度の2年次に亘り、同開発予定地域内に所在する上尾駮 2 遺跡 A 地区の発掘調査を実施いたしました。

調査の結果、縄文時代早期から弥生時代にかける複合遺跡であることが明らかになりました。本報告書は、その結果を集録したものであります。限られた時間内での作成でありますので充分とは申せませんが、本書が地方史研究や文化財保護に寄与することができれば幸いに存じます。

最後に、本書の刊行に当たり、発掘調査から報告書作成まで、多大な御協力をいただいた関係者各位に対しまして、心からの感謝の意を表します。

昭和63年 3 月

青森県教育委員会

教育長 本 間 茂 夫

例 言

(1) 本報告書は、昭和60・61年度に発掘調査を実施した、むつ小川原開発事業予定地内「上尾駸2遺跡A地区」の報告書である。

(2) 本報告書の執筆者の氏名は、文頭もしくは文末に付した。

(3) 遺構内の焼土・火山灰・ローム・炭火物・焼石等はスクリーントーンを用いて示し、その度図中に注記した。

(4) 標準層序、遺構内堆積土の色調は『新版標準土色帖』(小山、竹原編 1967)に基づいて記載した。

(5) 出土遺物には観察表を付し、観察表中の計測値の()の中に入れた数字は推定値である。

(6) 竪穴住居跡の床面積の計測については、 $S = 1/20$ の実測図を用い、壁の下端と床面との接点を基準として、プランメーターで3回測り、その平均値を使用した。なお、その数値は、床面(柱穴等含む)全体の面積である。

(7) 図版縮尺は、原則として次のようにした。これ以外の縮尺を用いた場合には、その度図中に示した。

竪穴住居跡 $1/60$ 、土壌 $1/50$ 、焼土状遺構・屋外炉・埋設土器・配石遺構 $1/25$ 、
土器実測図 拓影 $1/2.5$ 、 $1/3$ 、剥片石器 $1/1.5$ 、 $1/2$ 、礫石器 $1/3$ 、土製品 $1/1.5$ 、 $1/3$

(8) 引用・参考文献は一括収録した。

(9) 石質の鑑定・同定及び分析等は次の方々に依頼した。

- ・石質鑑定 青森県立八戸高等学校教諭 松山 力
- ・樹種同定 前奈良教育大学教授 嶋倉 巳三郎
- ・放射性炭素年代測定 学習院大学教授 木越 邦彦

(10) 本遺跡出土の遺物、実測図面、撮影写真等は、現在当センターで保管してある。

(11) 発掘調査及び整理作業に際しては、下記の機関や方々から教示を得た。

熊谷常正・秋元信夫・桜田隆・大沼忠春・鶴丸俊明・河野本道・前田正憲・田中良宣・辻本崇夫・利部修・雪田孝・本間宏・工藤竹久・小笠原善範・小笠原忠久・谷地薫・小田野哲憲・藤田亮一・橘善光・新谷雄蔵・久保泰・大島直行・種市幸生・大野憲司・船木義勝・酒井宗孝・中村良幸

目 次

序	
例 言	
目 次	
第 1 章 調査経過と調査要項	1
第 1 節 調査に至る経過	1
第 2 節 調査要項	2
第 2 章 調査の概要	3
第 1 節 調査の方法	3
第 2 節 調査の概要	4
第 3 節 遺物の分類	7
第 3 章 遺跡の地形と層序	10
第 1 節 遺跡周辺の地形	10
第 2 節 遺跡周辺の地質と層序	12
第 4 章 検出遺構と出土遺物	21
第 1 節 縄文・弥生時代の検出遺構と出土遺物	21
1、検出遺構と遺構内出土遺物	21
(1) 竪穴住居跡	21
(2) 土 壇	83
(3) 焼土状遺構	115
(4) 屋外炉	117
(5) 配石遺構	121
(6) 溝状ピット	122
2、遺構外出土遺物	124
(1) 土 器	124
(2) 石 器	176
(3) 土製品	210
第 2 節 平安時代の検出遺構と出土遺物	217
1、検出遺構と遺構内出土遺物	217
(1) 埋設土器	217
(2) ピット群	218
2、遺構外出土遺物	220
(1) 土師器・須恵器	220
第 5 章 調査の成果	222
1、縄文・弥生時代の遺構	222
(1) 竪穴住居跡	222
(2) 土 壇	224
2、縄文・弥生時代の遺物	226
(1) 土 器	226

(2) 石 器	232
(3) 土製品	234
3、平安時代の遺物	236
(1) 平安時代の遺物	236
第 章 自然科学的分析	237
1、炭化材樹種同定(第8号竪穴住居跡について).....	238
2、年代測定	238
第 章 まとめ	239
引用参考文献	240

図版 目次

第 1 図	六ヶ所村内報告書関連遺跡	5
第 2 図	調査区全体図	6
第 3 図	遺跡周辺の地形分類図	10
第 4 図	遺跡周辺の鳥瞰図	11
第 5 図	遺跡内及び周辺遺跡の土層の模式柱状図とその対比	12
第 6 図	基本層序(1)	15
第 7 図	基本層序(2)	16
第 8 図	遺構配置図	17
第 9 図	第 1 号竪穴住居跡 1)	22
第 10 図	第 1 号竪穴住居跡 2)	23
第 11 図	第 1 号竪穴住居跡出土遺物 1)	23
第 12 図	第 1 号竪穴住居跡出土遺物 2)	24
第 13 図	第 2 号竪穴住居跡 1)	25
第 14 図	第 2 号竪穴住居跡 2)	26
第 15 図	第 2 号竪穴住居跡出土遺物 1)	27
第 16 図	第 2 号竪穴住居跡出土遺物 2)	28
第 17 図	第 2 号竪穴住居跡出土遺物 3)	29
第 18 図	第 3 号竪穴住居跡	30
第 19 図	第 3 号竪穴住居跡出土遺物 1)	31
第 20 図	第 3 号竪穴住居跡出土遺物 2)	31
第 21 図	第 4 号竪穴住居跡 1)	32
第 22 図	第 4 号竪穴住居跡 2)	33
第 23 図	第 4 号竪穴住居跡出土遺物 1)	34
第 24 図	第 4 号竪穴住居跡出土遺物 2)	35
第 25 図	第 4 号竪穴住居跡出土遺物 3)	36
第 26 図	第 4 号竪穴住居跡出土遺物 4)	37
第 27 図	第 5 号竪穴住居跡 1)	39
第 28 図	第 5 号竪穴住居跡 2)	40
第 29 図	第 5 号竪穴住居跡出土遺物 1)	41
第 30 図	第 5 号竪穴住居跡出土遺物 2)	42
第 31 図	第 5 号竪穴住居跡出土遺物 3)	43
第 32 図	第 6・7 号竪穴住居跡 1)	44
第 33 図	第 6・7 号竪穴住居跡 2)	45

第 34 图	第 6 号豎穴住居跡出土遺物 1)	46
第 35 图	第 6 号豎穴住居跡出土遺物 2)	47
第 36 图	第 8 号豎穴住居跡 1)	48
第 37 图	第 8 号豎穴住居跡 2)	49
第 38 图	第 8 号豎穴住居跡出土遺物 1)	49
第 39 图	第 8 号豎穴住居跡出土遺物 2)	50
第 40 图	第 8 号豎穴住居跡出土遺物 3)	51
第 41 图	第 8 号豎穴住居跡出土遺物 4)	52
第 42 图	第 8 号豎穴住居跡出土遺物 5)	53
第 43 图	第 8 号豎穴住居跡出土遺物 6)	54
第 44 图	第 9 号豎穴住居跡	55
第 45 图	第 9 号豎穴住居跡出土遺物	56
第 46 图	第 10 号豎穴住居跡	58
第 47 图	第 10 号豎穴住居跡出土遺物 1)	59
第 48 图	第 10 号豎穴住居跡出土遺物 2)	60
第 49 图	第 10 号豎穴住居跡出土遺物 3)	61
第 50 图	第 10 号豎穴住居跡出土遺物 4)	62
第 51 图	第 10 号豎穴住居跡出土遺物 5)	63
第 52 图	第 10 号豎穴住居跡出土遺物 6)	63
第 53 图	第 11 号豎穴住居跡出土遺物 1)	64
第 54 图	第 10 号豎穴住居跡	65
第 55 图	第 11 号豎穴住居跡出土遺物 2)	66
第 56 图	第 12 号豎穴住居跡	67
第 57 图	第 12 号豎穴住居跡出土遺物 1)	67
第 58 图	第 12 号豎穴住居跡出土遺物 2)	68
第 59 图	第 12 号豎穴住居跡出土遺物 3)	69
第 60 图	第 13 号豎穴住居跡	70
第 61 图	第 13 号豎穴住居跡出土遺物 1)	71
第 62 图	第 14 号豎穴住居跡出土遺物 1)	72
第 63 图	第 14 号豎穴住居跡出土遺物	73
第 64 图	第 15 号豎穴住居跡	74
第 65 图	第 15 号豎穴住居跡出土遺物 1)	75
第 66 图	第 15 号豎穴住居跡出土遺物 2)	76
第 67 图	第 15 号豎穴住居跡出土遺物 3)	77
第 68 图	第 15 号豎穴住居跡出土遺物 4)	78

第 69 图	第15号竖穴住居跡出土遺物 5)	78
第 70 图	第16号竖穴住居跡	79
第 71 图	第16号竖穴住居跡出土遺物 1)	80
第 72 图	第16号竖穴住居跡出土遺物 2)	80
第 73 图	第17号竖穴住居跡	82
第 74 图	第 1 号 土 壤	83
第 75 图	第 2 号 土 壤	83
第 76 图	第 4 号 土 壤	84
第 77 图	第 5 号 土 壤	85
第 78 图	第 6 号土壤出土遺物	86
第 79 图	第 7 号 土 壤	86
第 80 图	第 8 · 9 号土壤	87
第 81 图	第11 · 12 · 13号土壤	88
第 82 图	第 14 号 土 壤	90
第 83 图	第15 · 16 · 17号土壤	91
第 84 图	第18 · 19 · 20号土壤	92
第 85 图	第 21 号 土 壤	94
第 86 图	第 22 号 土 壤	94
第 87 图	第 23 · 24 号土壤	95
第 88 图	第25号土壤出土遺物	97
第 89 图	第26号土壤出土遺物	98
第 90 图	第27号土壤出土遺物	99
第 91 图	第28号土壤出土遺物 1)	100
第 92 图	第28号土壤出土遺物 2)	101
第 93 图	第28号土壤出土遺物 3)	102
第 94 图	第29号土壤出土遺物	103
第 95 号	第30号土壤出土遺物 1)	104
第 96 图	第30号土壤出土遺物 2)	105
第 97 图	第 31 号 土 壤	106
第 98 图	第32号土壤出土遺物	107
第 99 图	第 33 · 34 号土壤	108
第100图	第 35 号 土 壤	109
第101图	第36号土壤出土遺物	110
第102图	第37号土壤出土遺物 1)	111
第103图	第37号土壤出土遺物 2)	112

第104図	第38号土壙出土遺物	113
第105図	第 39 号 土 壙	114
第106図	第 2 号焼土状遺構	115
第107図	第 3 号焼土状遺構	115
第108図	第 4 号焼土状遺構	116
第109図	第 1 号屋外炉	117
第110図	第 2 号屋外炉	118
第111図	第 3 号屋外炉	118
第112図	第 4 号屋外炉	119
第113図	第 1 号配石遺構	121
第114図	第 1 号溝状ピット出土遺物	122
第115図	遺構外出土土器 1)	133
第116図	遺構外出土土器 2)	134
第117図	遺構外出土土器 3)	135
第118図	遺構外出土土器 4)	136
第119図	遺構外出土土器 5)	137
第120図	遺構外出土土器 6)	138
第121図	遺構外出土土器 7)	139
第122図	遺構外出土土器 8)	140
第123図	遺構外出土土器 9)	141
第124図	遺構外出土土器 10)	142
第125図	遺構外出土土器 11)	143
第126図	遺構外出土土器 12)	144
第127図	遺構外出土土器 13)	145
第128図	遺構外出土土器 14)	146
第129図	遺構外出土土器 15)	147
第130図	遺構外出土土器 16)	148
第131図	遺構外出土土器 17)	149
第132図	遺構外出土土器 18)	150
第133図	遺構外出土土器 19)	151
第134図	遺構外出土土器 20)	152
第135図	遺構外出土土器 21)	153
第136図	遺構外出土土器 22)	154
第137図	遺構外出土土器 23)	155
第138図	遺構外出土土器 24)	156

第139図	遺構外出土土器25)	157
第140図	遺構外出土土器26)	158
第141図	遺構外出土土器27)	159
第142図	遺構外出土土器28)	160
第143図	遺構外出土土器29)	161
第144図	遺構外出土土器30)	162
第145図	遺構外出土土器31)	163
第146図	遺構外出土土器32)	167
第147図	遺構外出土土器33)	168
第148図	遺構外出土土器34)	169
第149図	遺構外出土土器35)	170
第150図	遺構外出土土器36)	171
第151図	遺構外出土土器37)	172
第152図	遺構外出土土器38)	173
第153図	遺構外出土土器39)	174
第154図	遺構外出土土器40)	175
第155図	石器の大きさ・重さと石材傾向1)	188
第156図	石器の大きさ・重さと石材傾向2)	189
第157図	遺構外出土石器1)	190
第158図	遺構外出土石器2)	191
第159図	遺構外出土石器3)	192
第160図	遺構外出土石器4)	193
第161図	遺構外出土石器5)	194
第162図	遺構外出土石器6)	195
第163図	遺構外出土石器7)	196
第164図	遺構外出土石器8)	197
第165図	遺構外出土石器9)	198
第166図	遺構外出土石器10)	199
第167図	遺構外出土石器11)	200
第168図	遺構外出土石器12)	201
第169図	遺構外出土石器13)	202
第170図	遺構外出土石器14)	203
第171図	遺構外出土石器15)	204
第172図	遺構外出土石器16)	205
第173図	遺構外出土石器17)	206

第174図	遺構外出土石器(18)	207
第175図	遺構外出土石器(19)	208
第176図	遺構外出土石器(20)	209
第177図	遺構外出土製品(1)	211
第178図	遺構外出土製品(2)	215
第179図	土器片錘計測グラフ・加工工程模式図	216
第180図	第1号埋設土器	217
第181図	第1号ピット群	219
第182図	遺構外出土土器(土師器・須恵器)	221
第183図	石器組成	233

表 目次

第1表	大石平・上尾駁遺跡内における土層の対比	12
第2表	出土石器一覧表	176
第3表	遺構外出土石器計測表	185
第4表	竪穴住居跡一覧表	224
第5表	土壌観察表	226
第6表	県内土器片錘出土遺跡	235

写真 目次

- 写真1 遠景・基本層序
- 写真2 竪穴式住居跡1)
- 写真3 竪穴式住居跡2)
- 写真4 竪穴式住居跡3)
- 写真5 竪穴式住居跡4)
- 写真6 土壌1)
- 写真7 土壌2)
- 写真8 土壌・焼土状遺構・屋外炉
- 写真9 屋外炉・配石遺構・溝状ピット・ピット群・埋設土器
- 写真10 遺構内出土土器1)
- 写真11 遺構内出土土器2)
- 写真12 遺構内出土土器3)
- 写真13 遺構内出土土器4)
- 写真14 遺構内出土土器・石器
- 写真15 遺構内出土石器
- 写真16 遺構外出土土器1) 第 群土器
- 写真17 遺構外出土土器2) 第 群土器
- 写真18 遺構外出土土器3) 第 群土器
- 写真19 遺構外出土土器4) 第 群土器
- 写真20 遺構外出土土器5) 第 群土器
- 写真21 遺構外出土土器6) 第 ・ 群土器
- 写真22 遺構外出土土器7) 第 群土器・土師器
- 写真23 遺構外出土石器1)
- 写真24 遺構外出土石器2)
- 写真25 遺構外出土石器3)
- 写真26 遺構外出土石器4)
- 写真27 遺構外出土石器5)
- 写真28 遺構外出土石器6)
- 写真29 遺構外出土製品
- 写真30 上尾駁2 遺跡出土の炭化木

第 章 調査の経過

第 1 節 調査に至る経過

北太平洋に面した上北郡六ヶ所村周辺は、小川原湖のほか沼沢や森林が多く大変自然に恵れた地域である。

昭和44年度、国は新全国総合開発計画を策定し、その中にむつ小川原地域を有力候補地と定めた。同年本県ではその計画に即応して「陸奥湾・小川原湖地域の開発」を計画し発表した。昭和46年度には第1次基本計画として「むつ小川原地域開発構想の概要」を発表した。同時に県教育委員会では、開発に伴って破壊の恐れのある遺跡の所在や範囲を確認するため、分布試掘調査を実施してその成果の概要を発表してきた。

昭和49年度には、むつ小川原開発第二次基本計画の骨子が発表され、幹線道路に含む工業基地利用図が公表された。昭和52年3月、むつ小川原開発第二次基本計画に係る環境影響評価報告（環境アセスメント）が住民に示され、同年8月閣議了解を径て開発は本格的に着工の見通しとなった。

以来、この開発事業に係るむつ小川原開発株式会社所有地内の発掘調査は昭和49年、50年に実施した新住区建設に伴う千歳（13）遺跡を初め昭和54年、55年には石油国家備蓄基地建設に伴うパイプライン敷設に係る表館、発茶沢の両遺跡、昭和56年、57年の石油備蓄基地消火用水確保に係る弥栄平（2）遺跡、昭和59年にはむつ小川原開発工業用地に所在する大石平遺跡、沖附（1）（2）遺跡、昭和60年には大石平1遺跡A、B、C、D地点、弥栄平4）（5）遺跡の発掘調査が実施され、同年8月7日むつ小川原開発工業用地に所在する発掘調査予定地域の調査区の追加変更が関係機関の協議によりきまりその結果上尾駸2遺跡をA、B、C地区に分け、本遺跡のA地区は同年9月24日から同年10月31日まで、B地区は同年8月21日から10月31日まで発掘調査を実施することになり昭和61年度は昨年に引続き、4月22日から同年10月31日まで2年間にわたり青森県埋蔵文化財調査センターが調査を担当し実施することになった。（市川金丸）

第 2 節 調査要項

1 調査目的

むつ小川原開発事業に先立ち、当該地区に所在する埋蔵文化財の発掘調査を行い、その記録保存をはかり、地域社会の文化財活用に資する。

2 調査期間

昭和60年9月24日から同年10月31日まで

昭和61年4月22日から同年10月31日まで

3 遺跡名及び所在地

上尾駸2遺跡A地区、青森県上北郡六ヶ所村大字尾駸字上尾駸

4 調査対象面積

10.000m²

5 調査面積

16,736m²（昭和60年1,264m²・昭和61年15,462m²）

6 調査委託者

むつ小川原開発株式会社

7 調査受託者

青森県教育委員会

8 調査担当機関

青森県埋蔵文化財調査センター

9 調査協力機関

六ヶ所村 六ヶ所村教育委員会 上北教育事務所

10 調査参加者

調査指導員 村越 潔 引前大学教育学部教授

調査協力員 田中 澄 六ヶ所村教育委員会教育長

調査員 小山陽造 八戸工業高等専門学校教授

滝沢幸長 八戸市文化財審議会委員

佐藤 巧 県立郷土館学芸員

青森県埋蔵文化財調査センター

調査第一課長 新谷 武（現、青森県立木造高等学校稲垣分校教頭）

調査第三課長 市川金丸（現、調査第一課長）

主 幹 北林八州晴（現、調査第三課長）

主 査 成田滋彦（第2次）

主 事 畠山 昇（第1次）

主 事 奈良昌毅（第2次）

調査補助員（第1次） 古屋敷則雄、阿部誠、今村美智子、松橋智佳子、吉田美紀

（第2次） 蝦名徳彦、新谷幸三郎、津川奈子、長谷部明美、八木橋富子

第 章 調査の概要

第 1 節 調査の方法

上尾駮 2 遺跡 A 地区は、昭和60年に調査区南側の一部の発掘調査を行なった。今回は、昭和60年に引き続き他の調査区の発掘調査を実施した。

調査区の設定にあたっては、前年に設定したBK - 19とBG - 19の杭を南北の基準線に用い、4 m四方のグリッドを設定した。南北の基準線はN - 18° - Eである。グリッドの呼称については、南北方向にアルファベット、東西方向に算用数字（算用数字は 0 から始め、西側にかけてはカタカナを用いた）を付した。各グリッドの呼称は、南西隅の杭番号より使用し、たとえばBA - 20区等と呼称した。グリッドの設定、呼称は、上尾駮 2 遺跡 B・C 地区も同一の名称を用いている。

調査は、グリッド法、トレンチ法を用い分層発掘とし、遺物が含まれている第 〃 層の遺物を記録した後に、遺構確認面の第 〃 層まで掘り下げた。

遺構の実測は、簡易遣り方測量で行ない、住居跡、土壌を20分の1で、他の遺構を10分の1の縮尺を用いて記録し図化した。遺構の精査は、堆積土層観察実測用断面を残し、住居跡を四分法、他の遺構は二分法を用い、層序ごとに掘り下げた。土層の注記には『標準土色帖』を使用した。

第2節 調査の概要

昭和60年度は、10月1日から10月31日までBP - 20グリッド付近を1,264㎡調査した。基準杭は、B地区から延長したものをを用いた。

昭和61年度は、4月16日、調査関係機関の担当者、調査指導員、調査員及び埋蔵文化財調査センター職員による発掘調査についての打ち合わせ会議が六ヶ所村公民館で開催された。

4月22日から調査が開始された。調査区の中央部を走る道路から東側にかけての立木（防風林）は、防風林の解除がなされておらず、前年調査を行なった地区の南側の調査区から調査を行なった。

しかし、この調査地域は、遺構は検出されず、また遺物も数片程度しか出土せず、当初、グリッド法を用いて全面調査を行なう予定であったが、4m間隔のトレンチ法を用い遺構・遺物が出土した時点で全面調査を行なうという調査方法に変更した。

5月中旬からは、調査区の北側部分に着手した。AIラインから北側にかけて、遺構を検出し精査を行なった。

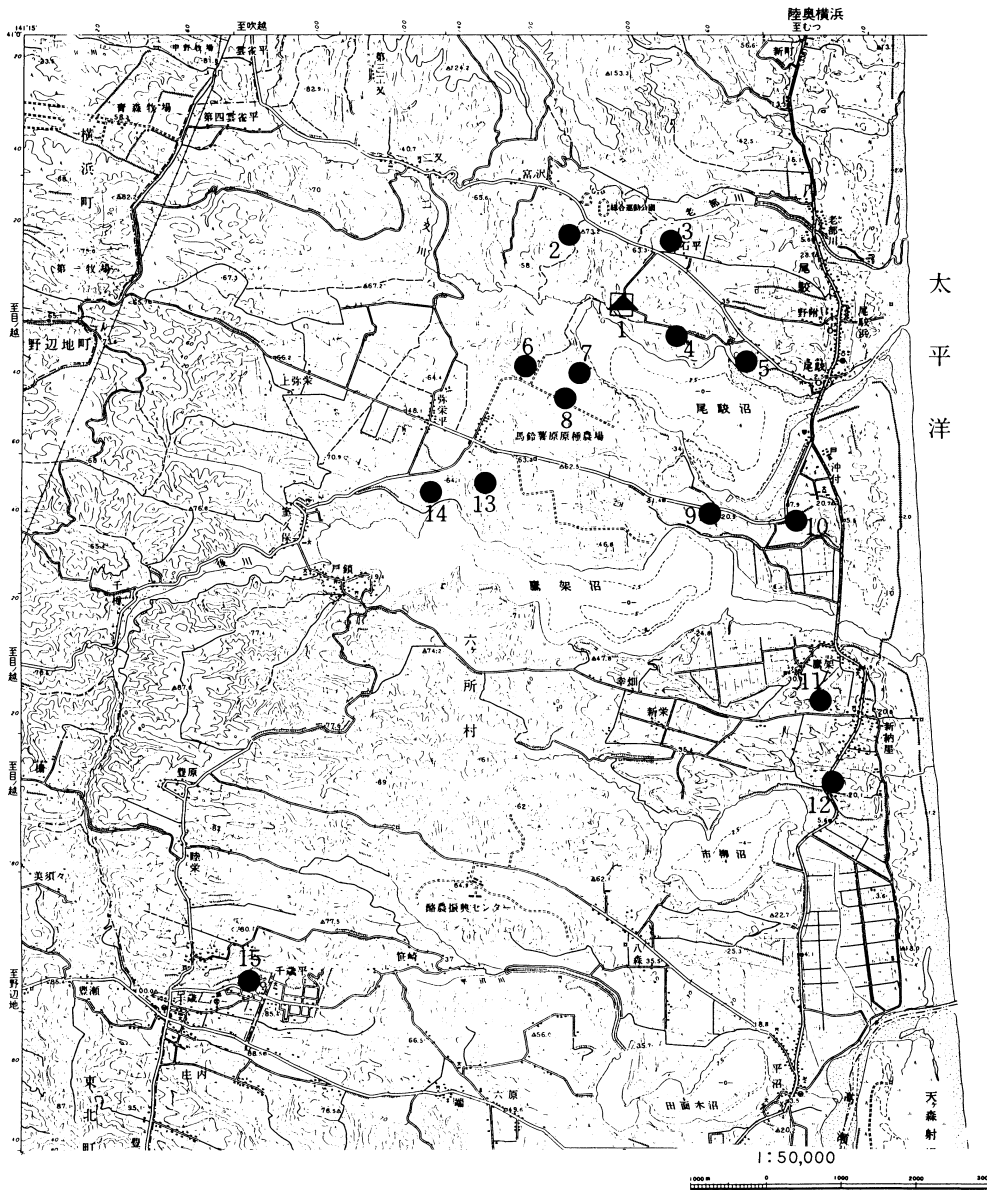
6月に入って、E - 15グリッドを中心に縄文時代後期の包含層が出土し、精査・実測を行ない周辺の土壌の精査も合わせて実施した。

7月下旬、防風林の伐採が許可になり、道路から東側の調査に取りかかったが、抜根に手間どり調査に手間どった。

8月21日～9月1日にかけて、BSラインから南側にかけての調査区に機械を導入して抜根作業に取りかかった。抜根作業後にトレンチ法を用い調査を行なったが、遺構は検出されず、また遺物も数片の土器しか出土しなかった。

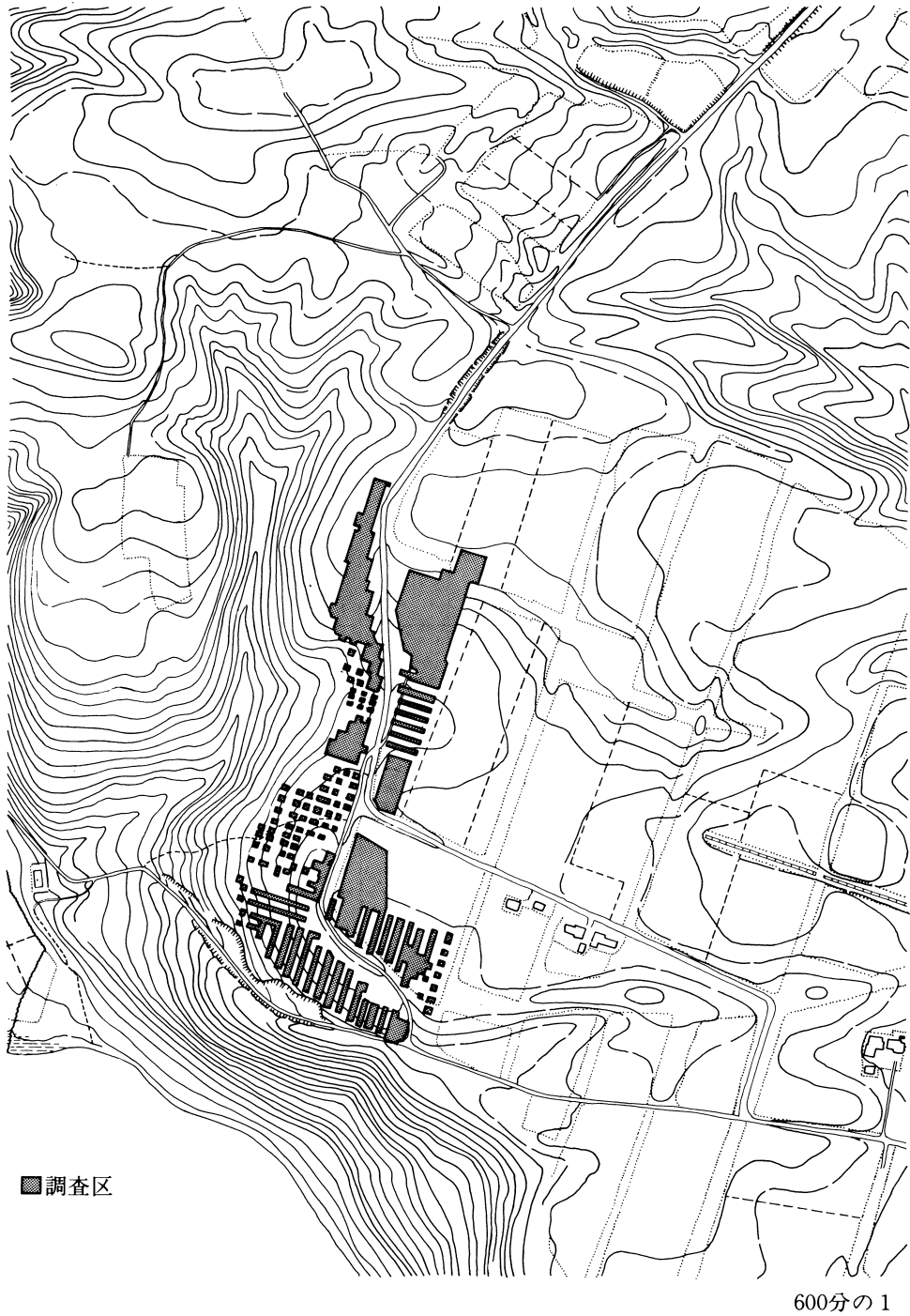
しかし、10月に入って、調査区北側から多数の住居跡を検出した。その後ただちに北側部分に調査を集中し、鋭意遺構の精査に努め10月31日すべて調査を終了した。

（成 田）



- | | | | |
|---------------|--------------|--------------|-----------------|
| 1. 上尾駱(2)遺跡 A | 2. 富ノ沢(2)遺跡 | 3. 大石平(1)遺跡 | 4. 上尾駱(2)遺跡 B・C |
| 5. 家ノ前遺跡 | 6. 弥栄平(4)遺跡 | 7. 沖附(1)遺跡 | 8. 沖附(2)遺跡 |
| 9. 発茶沢遺跡 | 10. 表館遺跡 | 11. 鷹架遺跡 | 12. 新納屋(1)遺跡 |
| 13. 弥栄平(1)遺跡 | 14. 弥栄平(2)遺跡 | 15. 千歳(13)遺跡 | |

第1図 六ヶ所村内本報告書関連遺跡



第2図 調査区全体図

第3節 遺物の分類

土器

本報告書で取り扱った土器は、縄文時代早期から晩期・弥生時代・平安時代に至る時期である。便宜的に縄文時代早期を第 群土器・縄文時代前期を第 群土器、縄文時代中期を第 群土器、縄文時代後期を第 群土器、縄文時代晩期を第 群土器、弥生時代を第 群土器と大別し、群の中で文様構成・時期差などから更に類を用いて類別を行ない類別の中でも種を用いて細分を行なった。また、平安時代の土師器・須恵器については、大別せず新たに項目を用け記載する。

第 群土器（縄文時代早期）

貝殻文・沈線文を主体的に施文する土器であり、白浜・小船渡平式に併行するものである。

- | | | | |
|-------|------------------|-------|--------------|
| 1 類土器 | 沈線文を主体的に施文するもの | 6 類土器 | 貝殻条痕文を施文するもの |
| 2 類土器 | 爪形刺突文を主体的に施文するもの | 7 類土器 | 無文のもの |
| 3 類土器 | 縄文を施文するもの | 8 類土器 | 貫通孔を有するもの |
| 4 類土器 | 貝殻表圧痕文を施文するもの | 9 類土器 | 底部・底辺部のもの |
| 5 類土器 | 貝殻腹縁文を主体的に施文するもの | | |

第 群土器（縄文時代前期）

本群土器は、1 類～3 類土器と類別を行なった。1・2 類土器は、早稲田 6 類・春日町式・鷹架第 土器・和野前山第 8 群土器に併行し、3 類土器は円筒下層 d₁ 式に併行するものである。

- 1 類土器 連続押し引き竹管文及び沈線を施文するもの
- 2 類土器 縄文のみ施文するもの
- 3 類土器 円筒下層 d₁ 式に併行するもの

第 群土器（縄文時代中期）

本群土器は、1 類～5 類土器と類別を行なった。1・2 類土器は円筒上層 a 式、3 類土器は円筒上層 c 式、4 類土器は円筒上層 d 式、5 類土器は大木 10 式に併行するものである。

- 1 類土器 縄文原体の圧痕によって文様帯を構成するもの
- 2 類土器 縄文原体の圧痕を多用し、口頸部に結節回転文が施文されるもの
- 3 類土器 刺突文が施文されるもの
- 4 類土器 貼り付け隆帯が細くなり、波状・網目状に施文されるもの
- 5 類土器 大木 10 式土器に併行するもの

第 群土器（縄文時代後期）

本群土器は、1 類～5 類土器と類別を行なった。1 類土器は後期初頭～前葉期、2 類土器は前十腰内 1 式・弥栄平 2 第 群土器、3 類土器は十腰内 式、4 類土器は十腰内 式、5

類土器は1類～3類土器のいずれかに併行するものである。

- 1類土器 粘土紐・撚糸圧痕を多用する後期初頭～前葉期のもの
- 2類土器 前十腰内1・弥栄平2)に併行するもの
- 3類土器 沈線文を主体にした十腰内 式に併行するもの
- 4類土器 十腰内 式に併行するもの
- 5類土器 1類～3類土器に併行する粗製土器を本類とした

第 群土器（縄文時代晩期）

本群土器は、1・2類土器と類別を行なった。1類土器は大洞C₁式、2類土器は大洞A式に併行するものである。

- 1類土器 雲形文を用いて文様構成するもの
- 2類土器 横位の平行沈線を用いて文様構成するもの

第 群土器

本群土器は、1類～10類土器と類別を行なった。田舎館・念仏間（大石平1群）・天王山式に併行するものである。

- 1類土器 平行沈線と連続山形文により文様を構成するもの
- 2類土器 磨消縄文で文様帯を構成するもの
- 3類土器 充填縄文により文様を構成するもの
- 4類土器 縄文のみを施文するもの
- 5類土器 交互刺突をもつもの
- 6類土器 刺突を用いているもの
- 7類土器 重菱形文を施しているもの
- 8類土器 綾絡文を施文しているもの
- 9類土器 撚糸文を施文しているもの
- 10類土器 無文あるいは縄文に沈線を施しているもの

石器

本遺跡からは、石鏃、石槍、石錐、石匙、石篋、不定形石器、磨製石斧、打製石斧、石錘、敲磨器類、石冠、半円状偏平打製石器、礫器、石皿、三角形岩版、有孔石製品、棒状石製品、石刀が出土した。

石器は種類ごとに下記のように分類した。

- | | | |
|-------|-------|----------|
| A類 石鏃 | B類 石槍 | C類 石錐 |
| D類 石匙 | E類 石篋 | F類 不定形石器 |

G類 磨製石斧	H類 打製石斧	I類 石錘
J類 敲磨器類	K類 石冠	L類 半円状偏平打製石器
M類 礫器	N類 石皿	O類 三角形岩版
P類 有孔石製品	Q類 棒状石製品	R類 石刀

石器観察表の石材の項目には、下記の略号を用いた。

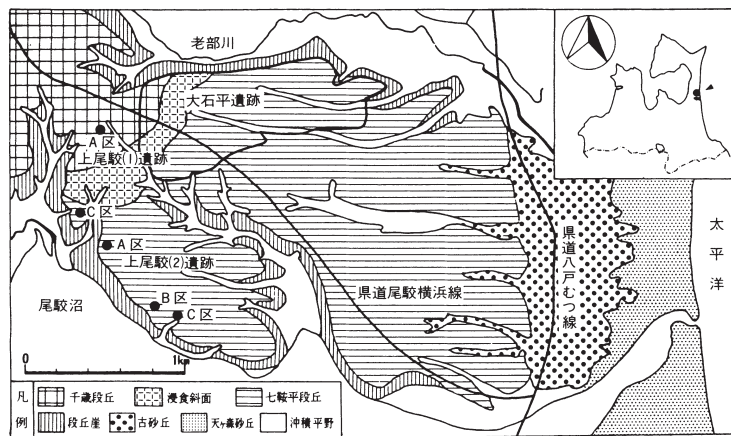
玉 - 玉髄 頁 - 頁岩 珪 - 珪質頁岩 玉珪 - 玉髄質の珪質頁岩
凝 - 凝灰岩 輝凝 - 輝緑凝灰岩 緑凝 - 緑色凝灰岩 緑細 - 緑色細粒凝灰岩
粘 - 粘板岩 砂 - 砂岩 流 - 流紋岩 安 - 安山岩 輝 - 輝緑岩
閃 - 閃緑岩 チャ - チャート 鉄石 - 鉄石英

(成田・奈良・川岸)

第 章 遺跡の地形と層序

第 1 節 遺跡周辺の地形 (第 3・4 図)

上北郡六ヶ所村は下北半島頸部の太平洋側にあつて、この付近には北方から、尾駁沼、鷹架沼、市柳沼、田面木沼、内沼そして小川原湖の湖沼群がみられる。太平洋沿岸にはこれらの湖沼を閉塞するような形で天ヶ森破丘が現汀線に沿ってほぼ南北方向に約200mの幅で分布し、さらに内陸側には標高 5 ~ 23mにも及び古砂丘が同じく南北方向に200m ~ 300mの幅で分布している。現在、古砂丘は松林となつていて防風・防砂林の役割を果している。また、この付近は海岸段丘の発達も顕著であつて、およそ 4 段の段丘面が確認できる。このうち、本遺跡が立地しているのは最下位の七鞍段丘 (標高12 ~ 50m) である (第 3 図)。



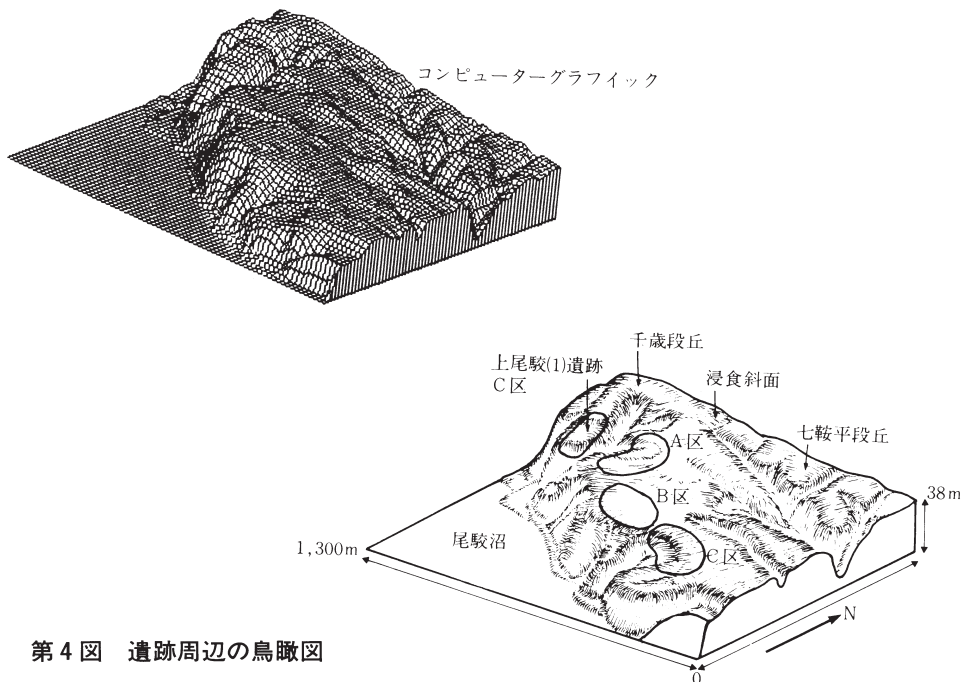
第 3 図 遺跡周辺の地形分類図

本遺跡の位置している地域は、北方に東流して太平洋に注ぐ老部川があり、南方には尾駁沼があつて、いずれも急峻な段丘崖で臨んでいる。その南北の幅はおおよそ 2 km である。また、本地域の中央部及び西端には浸食谷があつて、いずれも尾駁沼に注いでいる。この地域に広く分布している段丘は最下位の七鞍平段丘であり、北西方には上位の千歳段丘が広く分布する。

七鞍平段丘は、上尾駁 2 遺跡 C 地区内の標高 26 ~ 30m 付近に比高 6 ~ 8 m の急傾斜地が存在するために段化している。さらに、本遺跡南方の尾駁沼と鷹架沼の間に舌状に張り出した本段丘の標高 14 ~ 18m 付近にも比高 2 ~ 4 m の急傾斜地が存在し段化している。ただ、本地域の東方には段化するほどの急傾斜地は存在しないものの、標高 18 ~ 24m 付近がやや急勾配の傾斜面となっている。このことから、本段丘はおそらく上位面 (標高 30 ~ 50m)、中位面 (18 ~ 26m)、

下位面（12～18m）の3段に段化しているものと考えられる。本段丘上位面は一般的には東方への暖傾斜面であり、浸食谷の発達で開析度が大きく起伏に富む地形である。起伏面の凹部は低湿地帯になっている。なお、北西方に分布する上位の千歳段丘とは比高差約10mの急傾斜な浸食斜面をもって接している。中位面は上位面よりも傾斜が緩く、開放度も小さい。ただ、上尾駮2遺跡C地区の立地する面は尾駮沼沿いに帯状に分布し、南方への傾斜面となっている。そして、下位面はきわめて平坦な地形であって、開析度もより小さく小谷には古砂丘砂が堆積している。

なお、尾駮沼に臨む急峻な段丘崖の縁辺部には縄文海進時に形成されたと考えられる沖積段丘（標高2～5m）が小規模に分布しているのを確認できた。（第4図）



第4図 遺跡周辺の鳥瞰図

本遺跡は現汀線より約3.7km内陸側にあつて、尾駮沼西端の北岸に位置している。標高40～46mの七鞍平段丘上位面に立地する。本遺跡西方には南流して尾駮沼に注ぐ浸食谷があり、この谷の東斜面のほぼ中央部には馬蹄状の低湿地帯が展開している。このため、本遺跡周辺は南北に波打つような起伏する地形を呈し、そして南端が尾駮沼に臨む急峻な段丘崖となっている。本遺跡はこの低湿地帯を中心に南北に帯状に位置し、特に、本遺跡から検出された縄文時代前期～後期の竪穴住居跡はこの低湿地帯に臨む傾斜地に占地している。

なお、この南流する浸食谷の対岸に分布する段丘面には上尾駮1遺跡C地区が立地し、また本遺跡東方の段丘面には上尾駮2遺跡B・C地区が立地している。

最後に、第4図の遺跡周辺の鳥瞰図は、弘前大学教授塩原鉄郎氏、柴田女子高等学校教諭崎

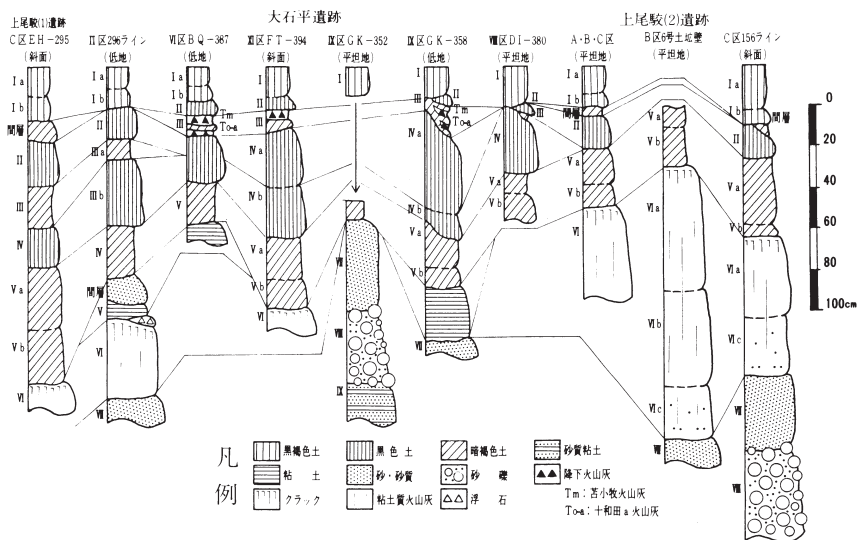
野三太郎氏の御教示によってコンピュータ処理し、これをもとに青森市立甲田中学校教諭長内善明氏が作図したものである。ここに、諸氏に謝意を表する。

第2節 遺跡周辺の地質と層序(第5図)

下北半島の頸部を構成する地層のうち、基盤をなす地層は新第三系中新統の泊安山岩類及び鷹架層である。また、本地域に最も広く分布する地層は新第三系鮮新統の浜田層と第四系下部洪積統の野辺地層である。泊安山岩類は安山岩質溶岩と同質角礫岩及び集塊岩からなり、老部

基本層序	上尾駮Site		大石平Site			備 考
	(1)C区	(2)A・B・C区	II区	IX区・XI区	VIII区	
I	黒褐色土	I	I	I	I	表土、耕作土I b層に苔の発生
II	黒色土	欠	欠	II	欠	やや腐植質、斜面～低地に分布
III	暗褐色土	間層	間層	欠	III	風成層、ソフト、低地に分布、T _{0-a} 、T _m の堆積
IV	黒色土	II	II	IV上	II	腐植質、クラックの発達、縄文後～晩期の包含層
V	黒褐色土	III	欠	III a	欠	風成層、やや火山質、斜面～低地に分布
VI	黒色土	IV	欠	III b	IV下	腐植質で粘土質、クラックなし、縄文早～前期の包含層
VII	暗褐色土	V	V	IV	V	火山灰質、上部は早期、下部は旧石器
VIII	浮石層 火山灰層 砂礫層	VI	VI	VI	VI	千曳浮石(C b, P)層上北中部火山灰層 段丘砂礫層

第1表 大石平、上尾駮遺跡内における土層の対比



第5図 遺跡内及び周辺遺跡の土層の模式柱状図とその対比

川や尾駁沼に臨む段丘崖にみられるが、主に遺跡北方の山岳地に広く分布している。なお、遺跡内から出土する礫石器等で安山岩製のはほとんど本層中の安山岩と同質であると考えられる。鷹架層は主として塊状のシルト質砂岩からなり、泊安山岩類の上部と指交関係にあって、鷹架沼を中心にほぼ南北に分布している。浜田層は塊状無層理の砂質シルト岩と砂岩との互層からなり、下位層を不整合におおっている。また、野辺地層は全体的に砂とシルトの互層からなり、下位の新第三系を不整合におおい、ほぼ水平に堆積している。なお、本層は段丘構成層におおわれている。

本遺跡の立地する七鞍平段丘の構成層は段丘砂礫層と火山灰層とからなり、基盤岩を不整合におおっている。このうち、火山灰層は、よくしまった粘土質の褐色火山灰と上位の黄褐色ラピリ質浮石からなる。層厚は50～100cmと薄く、特にラピリ（lapilli）質浮石層は尾駁沼以北では局部的に堆積しているのみである。褐色火山灰は上北中部火山灰層の上部に、ラピリ質浮石は上北上部火山灰層基底部分にある千曳浮石（Cb.p）に各々対比される。なお、尾駁沼以南においては火山灰層が2～4mと厚く堆積していて、千曳浮石の上位にも黄褐色火山灰が堆積しているのが確認できた。

次に、遺跡内の土層について述べたい。遺跡内及び周辺遺跡の土層とその対比を第3図、第1表に示した。これに基づき、各層の特徴を概略的に述べることにする。なお、本遺跡内においては欠如する土層があるため、本遺跡と基本的に一致する上尾駁1遺跡C地内の層序を引用する。（第6・7図）

層 黒褐色土層（10～15cm） 草根を多量に含み、全体的にしまりなくソフトである。層相変化から a層、 b層に分層できる。 a層は表土及び耕作土であり、多少かたさはあるがしまりに欠ける。乾くと灰黒色に変色する。 b層は粘性、湿性が多少みられるがソフトである。大石平遺跡ではやや腐植質となっていてところもあって苔の発生を確認できた。

間層 暗褐色土層（0～10cm）風成堆積物であって、しまりがなくソフトである。下位の火山灰層を粒子状やブロック状に含んだり砂質であったりして場所による層相変化が著しい。本遺跡では一般に粒子状の火山灰の混入が目立ち、多少砂質な状況である。なお、大石平遺跡では本層中に歴史時代の降下火山灰（苫小牧火山灰Tm及び十和田 a降下火山灰To-a）がレンズ状に堆積しているのが確認できた。低湿地帯では本層上位に薄層の黒色腐植土が堆積していることがある。

層 黒色腐植質土層（10～20cm） 粘土質でしまりがある。乾くと亀裂の大きいクラック（crack）がみられる。平坦地では下位の火山灰層を粒子状に含んだり多少砂質であったりして土壌化の進行した暗黒褐色土に層相変化している。なお、本層は縄文時代

後期から弥生時代の遺物包含層である。

層 黒褐色土層（0～30cm） 風成堆積物であるが、上位の間層よりはややしまりがあり粘土質となっている。斜面から低地にかけて堆積し、下位の火山灰層及び砂層がブロック状に包含していることが多い。本遺跡においては確認することができなかった。

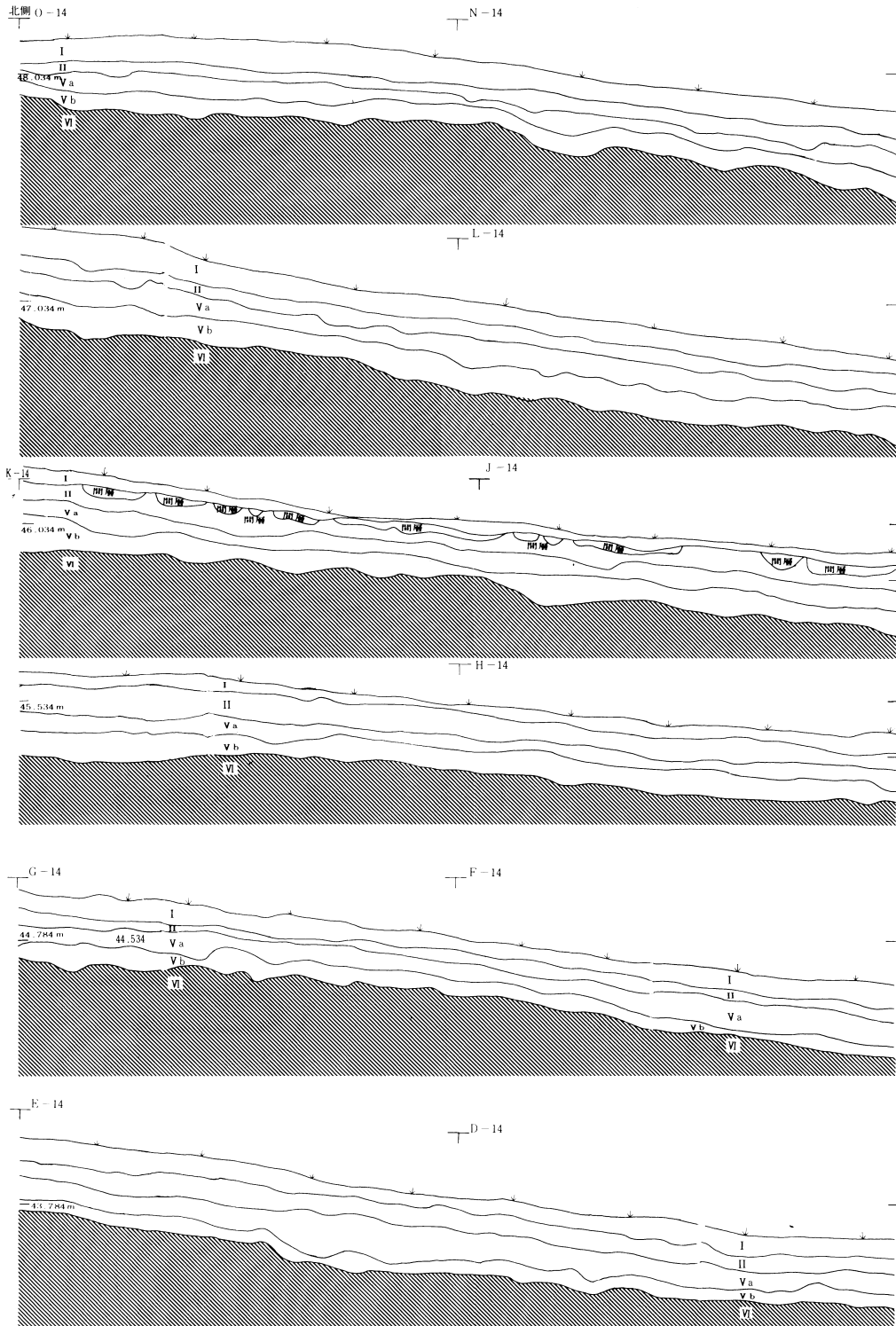
層 暗黒褐色粘土質土層（15～20cm） 層同様に斜面から低地にかけて堆積する。上位の層に酷似するが、腐植質でかなり粘土質である。crack がみられず、表面がなめらかである。本遺跡では確認することができなかった。

層 暗褐色火山灰質土層（30～50cm） 全体的に火山灰質であって、しまりに欠けもろい。本層は火山灰粒の混入状況により分層できる。上位の a 層は粒子状の火山灰が多量に混入し、色調が暗くやや土壌化が進行している。 b 層はブロック状の火山灰が多く色調が明るい。なお、 a 層は縄文時代早期の遺物包含層である。

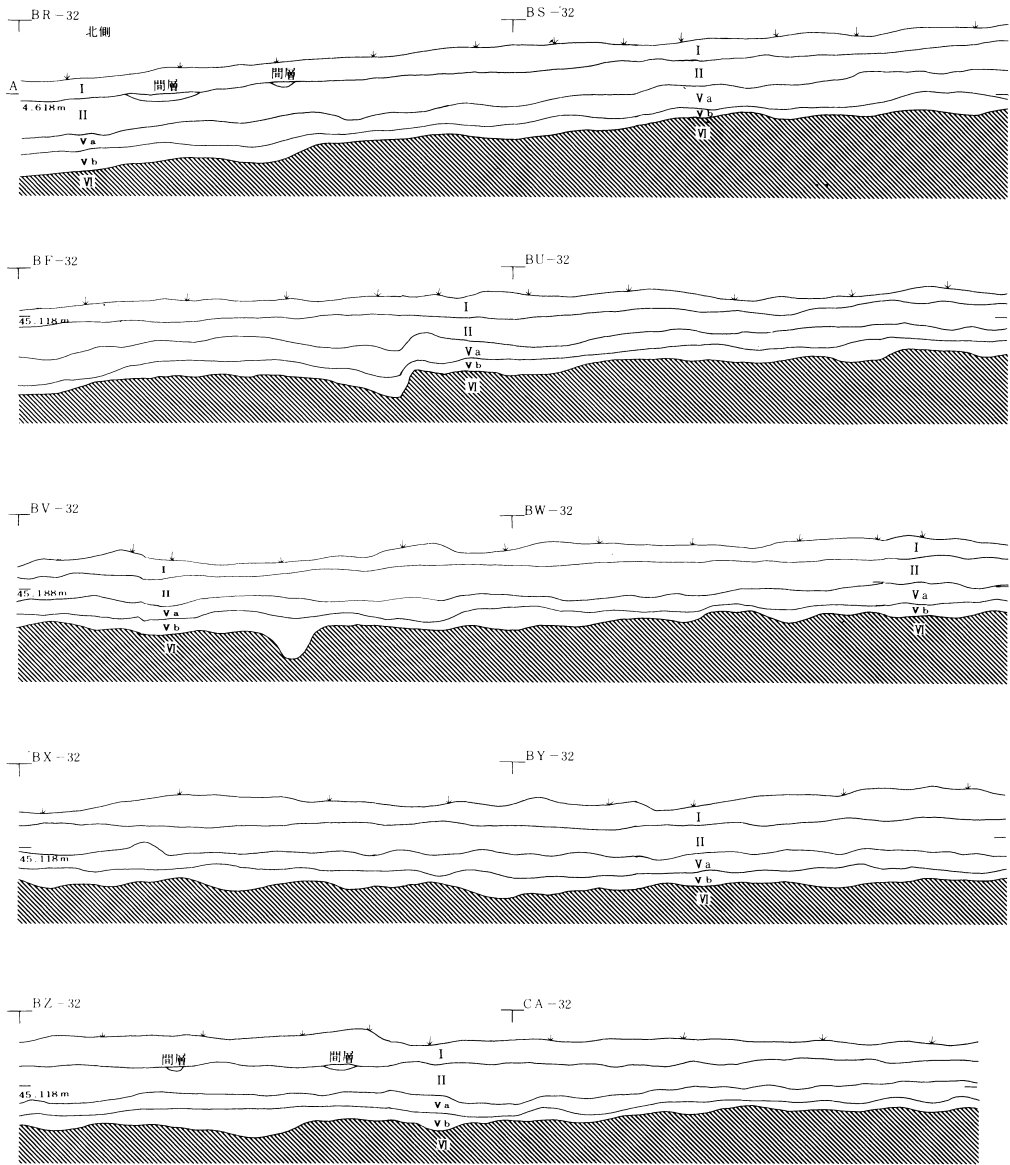
層 褐色火山灰層（約100cm）かたくよしまっている粘土質火山灰である。下部は砂質火山灰（粘土質）となり、七鞍平段丘の段丘砂礫層へ漸移している。段丘砂礫層は、緑灰色中～粗粒砂層（層、層厚20～50cm）、拳大～牛頭大の安山岩礫を多量に含む砂礫層（層、層厚およそ100cm）、砂質粘土層（層、層厚50～60cm）などからなっている。段丘砂礫層は基盤岩を不整合におおっている。（山口義伸）

参考文献

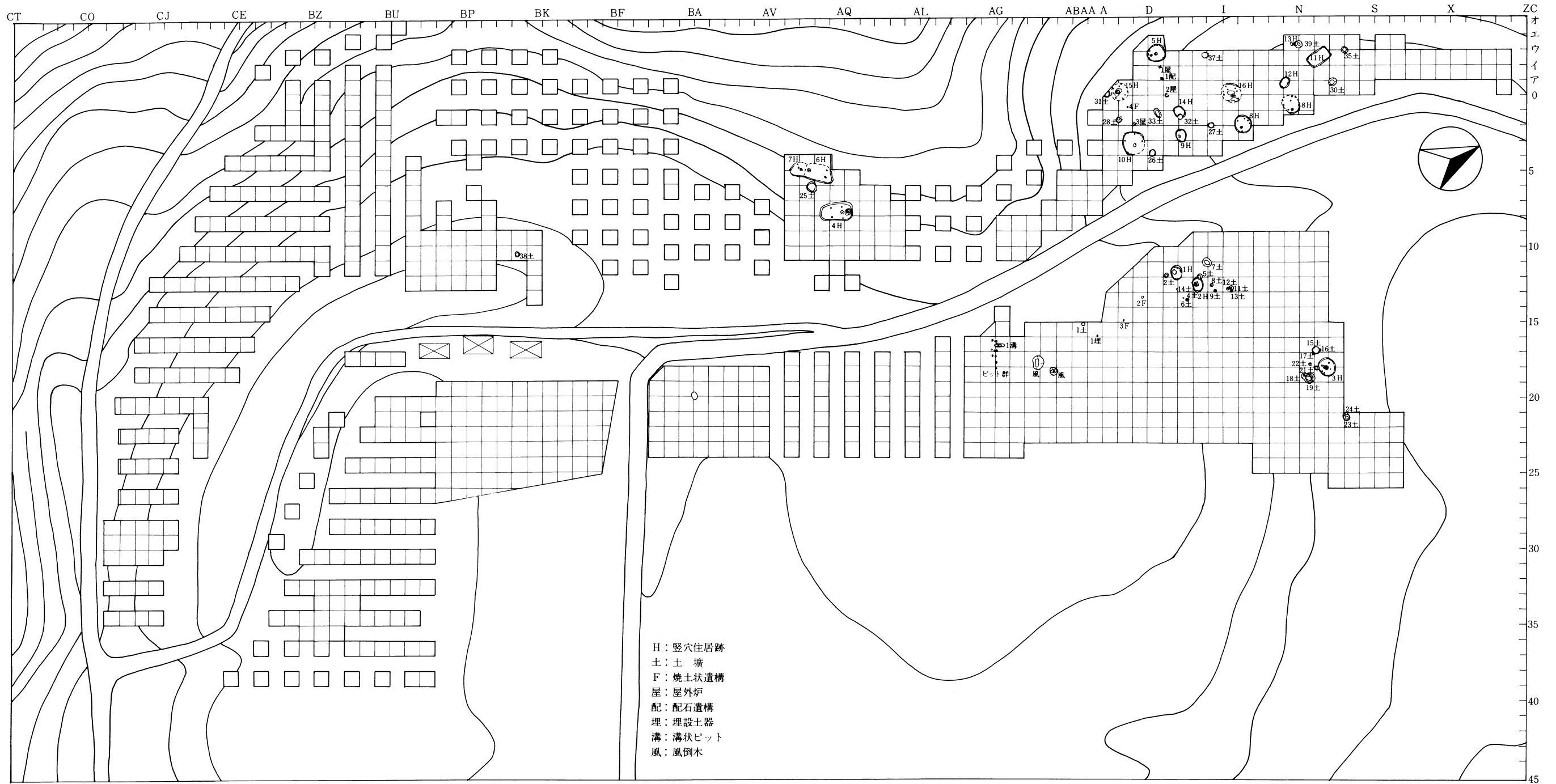
- 青森県教育委員会 1976 『千歳13遺跡発掘調査報告書』 青森県埋蔵文化財調査報告書第27集
- 青森県教育委員会 1982 『発茶沢遺跡発掘調査報告書』 青森県埋蔵文化財調査報告書第67集
- 青森県教育委員会 1983 『鶉窪遺跡発掘調査報告書』 青森県埋蔵文化財調査報告書第76集
- 青森県教育委員会 1984 『大石平遺跡発掘調査報告書』 青森県埋蔵文化財調査報告書第90集
- 青森県教育委員会 1985 『大石平遺跡発掘調査報告書』 青森県埋蔵文化財調査報告書第97集
- 青森県教育委員会 1986 『大石平遺跡発掘調査報告書』 青森県埋蔵文化財調査報告書第103集
- 町田・新井・森脇 1981 「日本海を渡ってきたテフラ」 『科学』VOL. 51 9
- 三辻・松山・山本・高林 1983 「青森県下の遺跡に堆積する火山灰の蛍光X線分析」 『古文化財教育研究報告』 12



第6図 基本層序(1)



第7図 基本層序(2)



第8図 遺構配置図

第 章 検出遺構と出土遺物

第 1 節 縄文・弥生時代の検出遺構と出土遺物

1. 検出遺構と遺構内出土遺物

(1) 竪穴住居跡

第 1 号竪穴住居跡 (第 9 ~ 12 図)

位置と確認 第 1 号住居跡は、本調査区の北側の台地緩斜面で、E・F - 11・12グリッドに位置している。第 a 層中を精査中に、円形の落ち込みを確認し、精査したところ竪穴住居跡を確認した。

平面形・規模 平面形は、東西がややいびつな円形を呈している。規模は、長径が354cm・短径が296cmで床面積7.38㎡を測る。住居跡の規模としては、小型な住居跡である。

壁・床 壁は、北壁が床面から上端にかけて、垂直に立ちあがっており、他の壁はすべて上端から床面にかけてゆるやかに傾斜している。壁高は、東壁14cm・西壁28cm・南壁25cm・北壁27cmを測り、壁の構築は軟弱なつくりである。床面は、全体的にほぼ平坦であり、炉の周辺は堅緻であるが、壁寄りには堅緻な構築では無い。

柱 穴 ピットは18個検出した。柱穴と思われるものはP 1・P 4 ~ P 17の15個であり、他の 3 個のピットについては、付属施設・出入口の項目で記載する。柱穴は、住居跡の壁寄りに約 1 m間隔で配置されている。形態は、円形・楕円形を呈し深さ10cm内外と浅いピットが多い。これらのピットは、配置等から判断すると壁柱穴と思われる。

ピット計測表

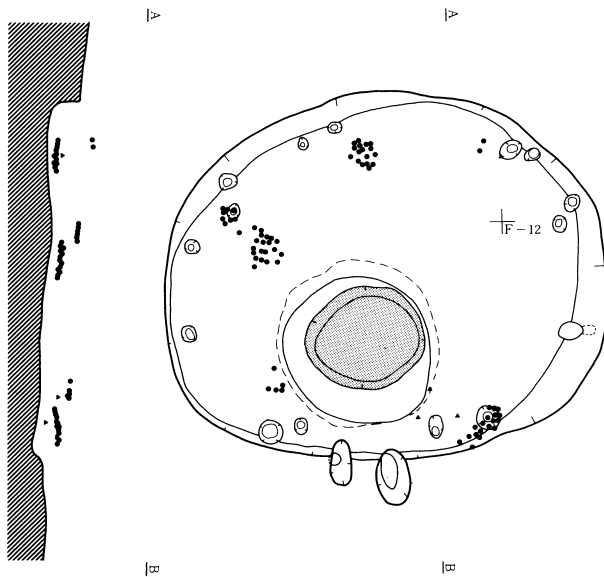
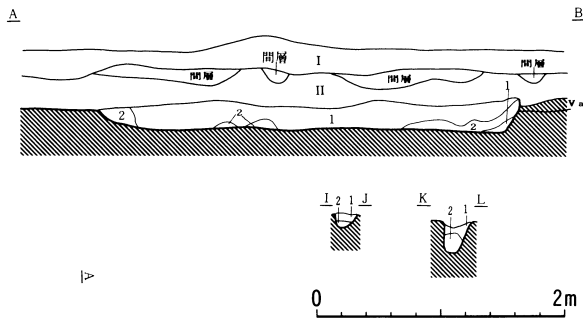
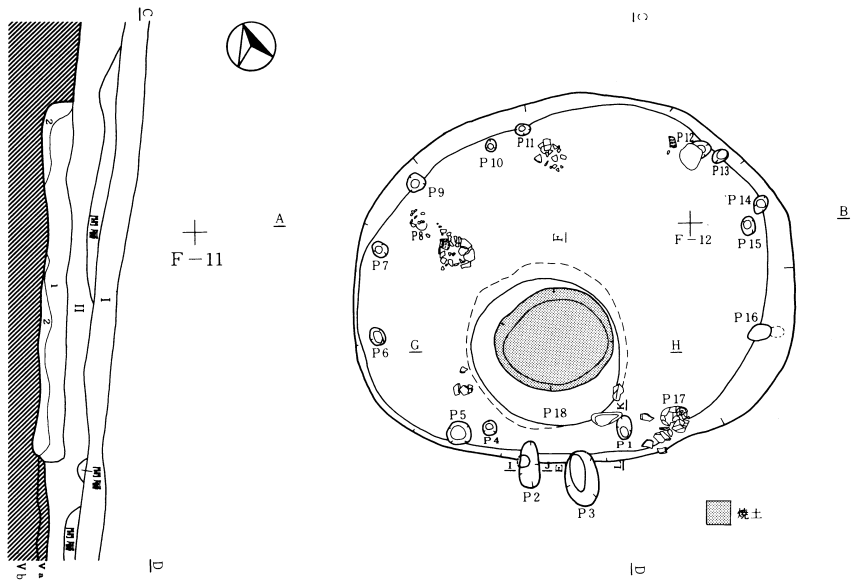
No.	形態	規模(cm)	深さ(cm)	No.	形態	規模(cm)	深さ(cm)	No.	形態	規模(cm)	深さ(cm)
1	楕円形	20×14	32.6	4	円形	14×12	11.8	5	円形	21×20	8.6
6	円形	15×11	6.0	7	"	12×12	9.4	8	"	12×10	10.9
9	"	15×14	6.2	10	"	10×9	6.4	11	"	11×10	12.2
12	楕円形	19×14	7.0	13	楕円形	14×11	5.4	14	楕円形	16×12	7.5
15	"	15×12	7.0	16	"	20×15	23.2	17	円形	21×19	24.0

炉 炉は、住居跡の中央部から南寄りに位置している地床炉である。規模は長径92cm・短径81cmを測り楕円形を呈する。炉内からは不定形石器が出土した。

付属施設 炉の下部から、P18と付したフラスコ状ピットを 1 基検出した。開口部で長径133cm・短径126cm、下端で長径138cm・短径136cmを測る。フラスコ状ピット内からは、何等遺物が出土せず、また、堆積土の観察から人為堆積のピットである。

出入口 住居跡の南側で、P 2・3 と名称を付した対のピットを検出した。2 個のピットは、住居跡の下端から外側に約50cm張り出した楕円形のピットである。P 2・3 の間隔は約20 cmであり、形状から出入口部の施設と考えられる。

出土遺物 (第11・12図) 本住居跡内の土器出土状況は、堆積土中第 1 層中からの出土であり、床面・床直からは、出土していない。1・2 は、横位に潰れた状態で出土しており、住居

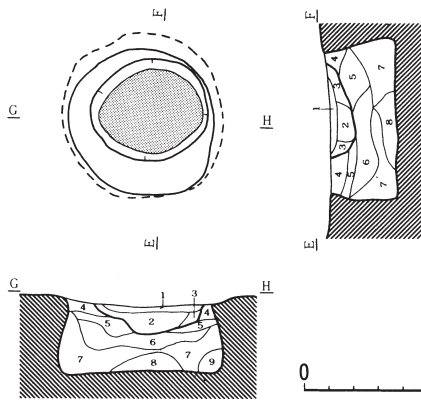


第1号竖穴住居跡土層注記			
第1層	暗褐色	10YR3/3	ローム粒・炭化物を少量含む、粒性・しまりあり
第2層	黄褐色	10YR5/8	暗褐色土混入、粒性・しまりあり。

第1号竖穴住居跡ピット土層注記			
第1層	褐色	10YR4/4	ローム粒・炭化物を含む。粒性・しまりあり。
第2層	黄褐色	10YR6/8	ロームブロック、炭化物を若干含む、粒性・しまりあり。

第1号竖穴住居跡ピット2土層注記			
第1層	褐色	10YR4/6	ローム粒・炭化物を若干含む、粘性なし・しまり有り。
第2層	明黄褐色	10YR6/6	褐色土混入、粘性なし・しまりあり。

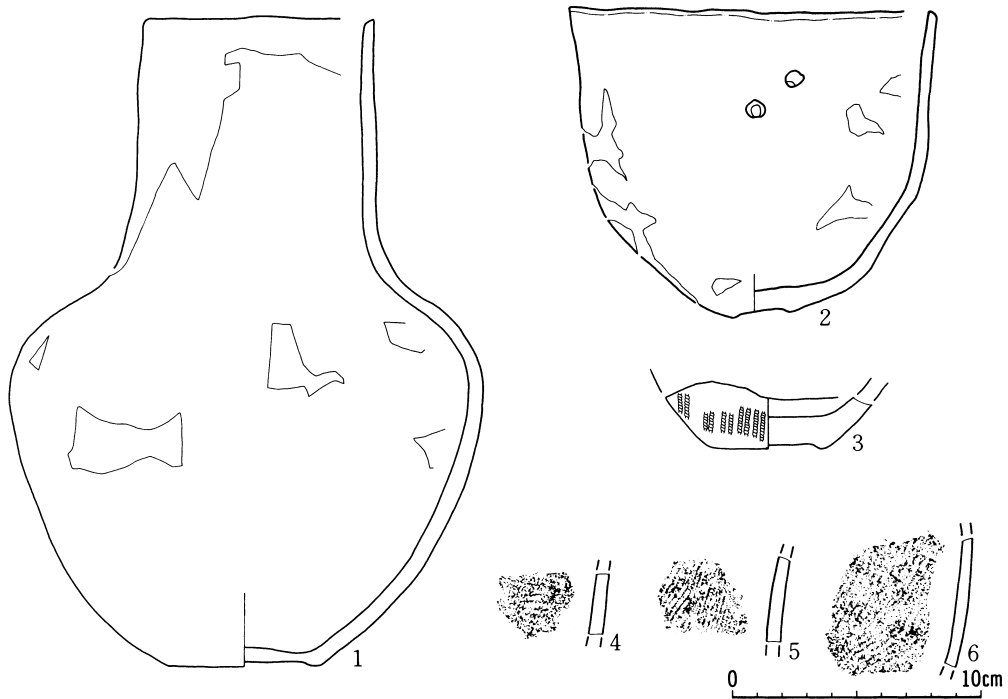
第9図 第1号竖穴住居跡(1)



第1層	暗褐色	10YR3/3	焼土粒・炭化物・ローム粒を少量含む。粘性なし・しまりあり。
第2層	明赤褐色	5YR5/8	焼土層、粘性なし・しまりあり。
第3層	暗褐色	7.5YR3/3	炭化物・焼土粒を含む。粘性なし・しまりあり。
第4層	黒褐色	10YR3/2	黄褐色土混入。炭化物・焼土粒を含む。粘性なし・しまりあり。
第5層	黒褐色	10YR2/2	ローム粒多量・炭化物少量含む。粘性有り・しまりなし。
第6層	黒褐色	10YR2/2	ローム粒多量・炭化物・焼土粒若干含む。粘性有り・しまりなし。
第7層	暗褐色	10YR3/4	黄褐色土混入。粘性有り・しまりなし。
第8層	黒褐色	10YR2/3	ロームブロックを多量に含む。粘性・しまりなし。

第10図 第1号竪穴住居跡(2)

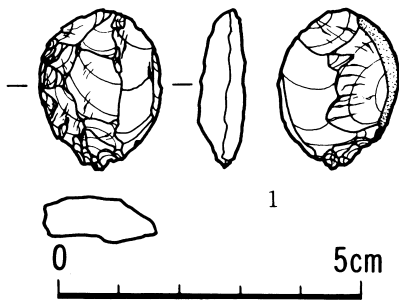
跡廃棄後に一括廃棄された同一時期の所産のものと思われる、両土器共に無文であるが、あげ底の土器であり土器全体のプロポーシオンから、後期後葉の要素を含んだ土器である。石器は、炉内から不定形石器、住居跡堆積土中から石皿が出土した。(成田)



第1号竪穴住居跡土器観察表

番号	地区・層位	部位	外面施文文様	分類
1	1 H・1層	壺形	無文 スス状炭附着	IV群5類
2	1 H・1層	鉢形	無文補修孔 スス状炭附着	IV群5類
3	1 H・1層	底部	縄文(LR) スス状炭附着	IV群5類
4	1 H・1層	胴部	縄文(LR) スス状炭附着	IV群5類
5	1 H・1層	"	縄文(LR)	IV群5類
6	1 H・1層	"	縄文(LR) スス状炭附着	IV群5類

第11図 第1号竪穴住居跡出土遺物(1)

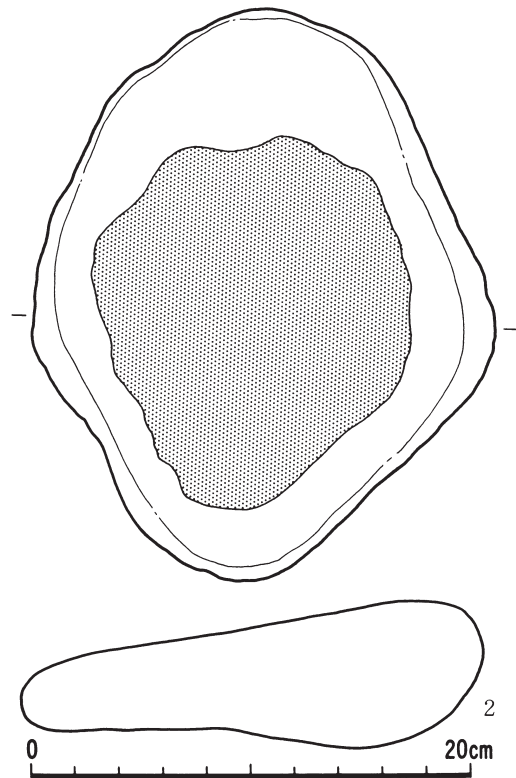


第12図 第1号竪穴住居跡出土遺物(2)

第2号竪穴住居跡(第13~17図)

位置と確認 本住居跡は、本調査の北側緩斜面にあるE・G-12グリッドに位置している。第a層を精査中に円形の落ち込みを確認し、精査したところ竪穴住居跡を確認した。

重複 住居跡の東側で第4号土壌・西側で第5号土壌と切り合っている。新旧関係は、本住居跡が新しい。



第1号竪穴住居跡石器観察表

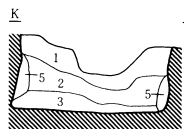
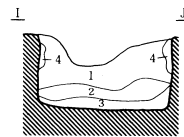
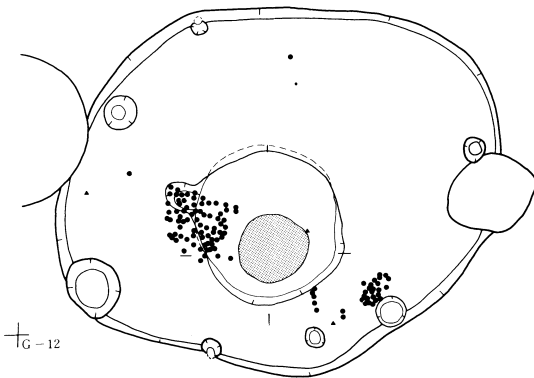
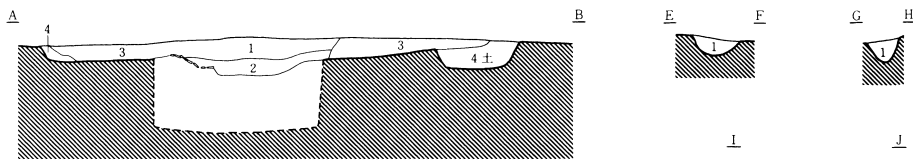
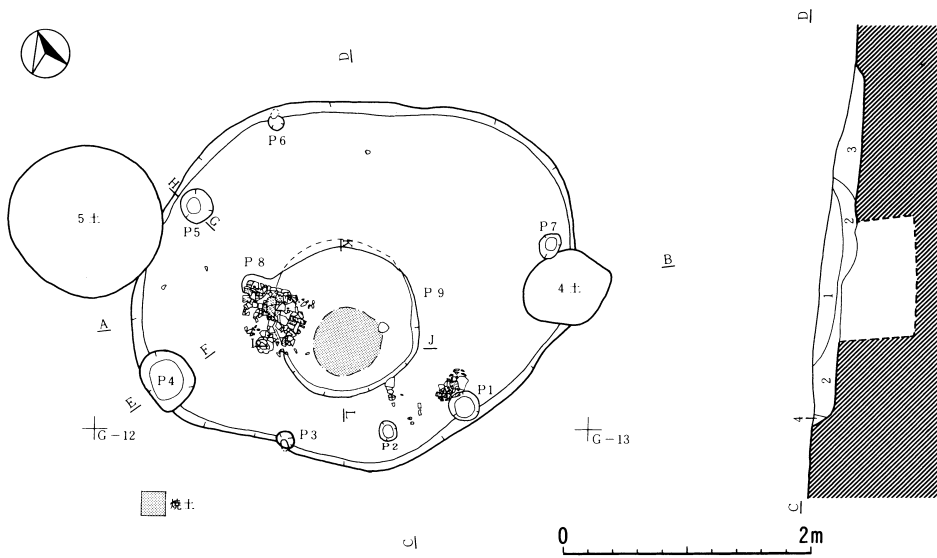
図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)			
第12図-1	1 H 炉	覆土	26	20	6	3.2	珪	F	
第12図-2	1 H	2	258	208	64	3900	安	N	

平面形・規模 平面形は、南側が張り出す不整形円形を呈している。規模は、長径350cm・短径が295cmで床面積7.77㎡を測る。住居跡の規模としては、第1号竪穴住居跡と同様に小型な住居跡である。

壁・床 壁は、すべて上端から床面にかけて、ゆるやかに傾斜しており、軟弱な作りである。床は、竪穴住居跡の中央部から北側部分が一段高くなっており、段差がみられる。床面は、貼り床がみられず堅緻な構築では無い。

柱穴 ピットは8個検出された。柱穴と思われるものはP1~7の7個であり、P8については、付属施設の項目で記載する。柱穴の配置は、住居跡の壁寄りに約1m間隔で位置し、北側には柱穴がみられない。これらのピットは、配置等から判断すると壁柱穴と思われる。

ピット計測表



第2号竪穴住居跡ピット4土層注記			
第1層	褐色	10YR4/4	炭化物・ローム粒を若干含む。粘性なし・しまり有り

第2号竪穴住居跡ピット5土層注記			
第1層	褐色	10YR4/4	炭化物・ロームブロックを若干含む、粘性なし・しまり有り。

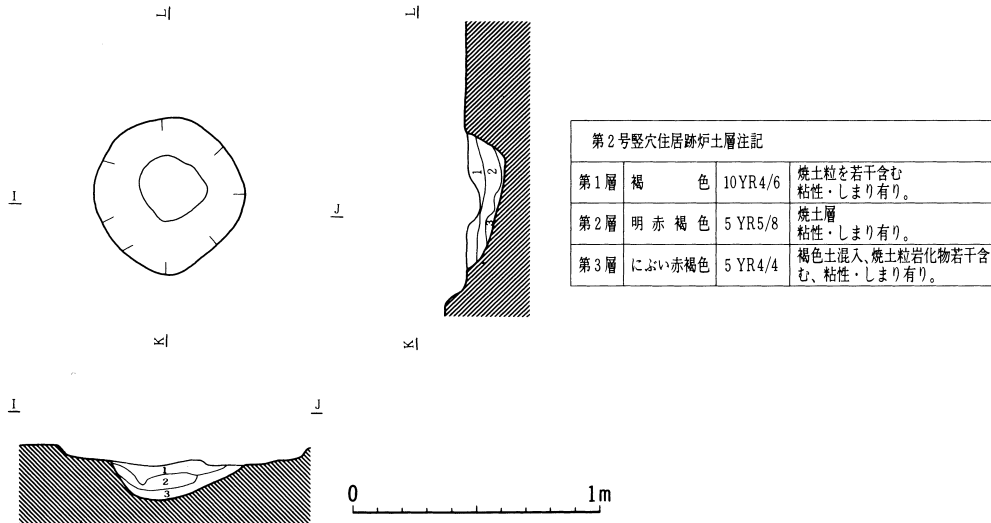
第2号竪穴住居跡ピット9土層注記			
第1層	暗褐色	10YR3/4	炭化物・ローム粒少量含む、粘性なし・しまり有り。
第2層	暗褐色	10YR3/3	炭化物・ローム粒若干含む、粘性なし・しまり有り。
第3層	黒褐色	10YR3/2	ローム粒多量・炭化物若干含む。粘性なし・しまり有り。
第4層	褐色	10YR4/6	ローム粒若干含む、粘性なし・しまり有り。
第5層	褐色	10YR4/6	炭化物・ローム粒若干含む、粘性なし・しまり有り。

第2号竪穴住居跡土層注記			
第1層	黒褐色	10YR2/2	ローム粒・焼土粒・炭化物少量含む、粘性なし・しまり有り。
第2層	暗褐色	10YR3/3	焼土・炭化物を多量に含む、粘性なし・しまり有り。
第3層	暗褐色	10YR3/4	黄褐色土混入、粘性・しまり有り。
第4層	黄褐色	10YR5/8	焼土粒若干含む、暗褐色土混入、粘性・しまり有り。

第13図 第2号竪穴住居跡(1)

No.	形態	規模(cm)	深さ(cm)	No.	形態	規模(cm)	深さ(cm)	No.	形態	規模(cm)	深さ(cm)
1	円形	25×24	11.9	2	円形	17×15	14.9	3	円形	16×15	7.0
4	不整形	50×42	11.0	5	"	27×24	24.0	6	"	14×12	19.0
7	"	21×17	11.1								

炉 炉は、住居跡の中央部から南寄りに位置している地床炉である。規模は、長径64cm・短径61cmを測り円形を呈する。炉は3層に分層でき、3層下面が火熱面である。炉内からは、遺物は出土しなかった。



第14図 第2号竖穴住居跡(2)

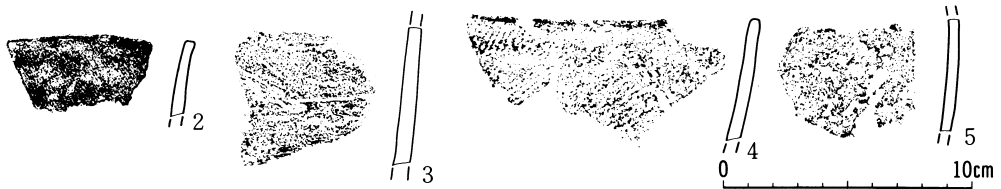
付属施設 炉の下部から、フラスコ状ピットを1基検出した。規模は、開口部長径124cm・短径120cm、下端部長径128cm・短径116cmを測る。フラスコ状ピット内からは、何等遺物が出土せず、また、堆積土の観察から人為堆積を呈する。

出土遺物 (第15図～第17図) 本住居跡の土器出土状況は、炉の東側の床面から横位の状態で、1個体の大型深鉢土器が出土し、他はすべて堆積土中の出土である。1は、器外面の全面にR・LRの二種の原体を交互に施文しており、口唇部寄りが内反する器形を呈する土器であり、器形等から十腰内式に相当する粗製土器と思われる。他の堆積土中から出土した粗製土器も、この時期にほぼ併行する土器である。石器は、床面から調整が荒い石鏃と、堆積土中から敲・磨器類が出土した。(成田)

第3号竖穴住居跡(第18～20図)

位置と確認 第3号竖穴住居跡は、本調査区の北側台地平坦面で、O・P-17・18グリッドに位置している。第a層を精査中に、円形の落ち込みを確認し、精査したところ竖穴住居跡を確認した。

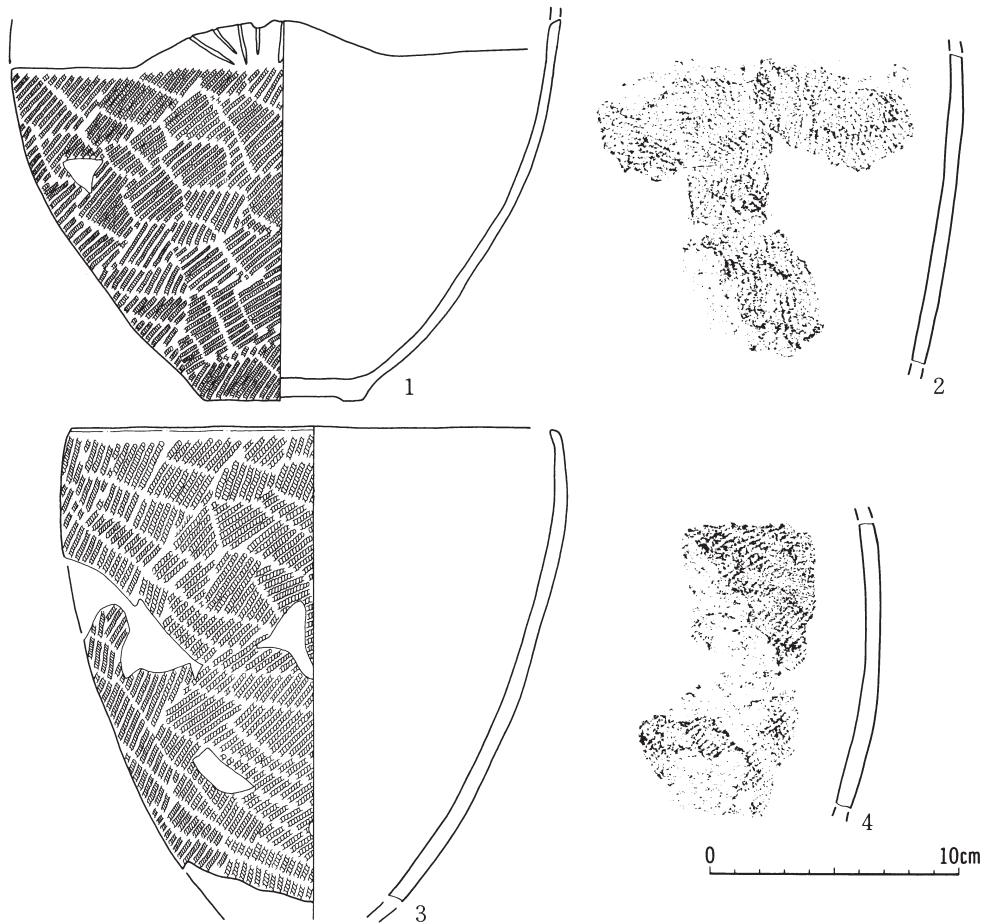
重複 竖穴住居跡の東側で、第21号土壌・中央部で第39号土壌と切り合っている。新旧



第2号竖穴住居跡土器観察表

番号	地区・層位	部位	外面施文文様	分類
1	2 H・床層	深鉢形	縄文(R・LR)二種の原体を使用	IV群5類
2	2 H・1層	口縁部	無文	IV群5類
3	2 H・4層	胴部	無文	IV群5類
4	2 H・1層	口縁部	縄文(LR) スス状炭附着	IV群5類
5	2 H・1層	口縁部	無文 スス状炭附着	IV群5類

第15図 第2号竖穴住居跡出土遺物(1)



番号	地区・層位	部位	外面施文文様		分類
1	2 H・4 層	深鉢形	縄文 (LR)	縦位・斜位沈線	IV群5類
2	2 H・1 層	胴部	縄文 (LR)	横・斜位回転	IV群5類
3	2 H・1 層	深鉢形	縄文 (LR)		IV群5類
4	2 H・1 層	胴部	縄文 (LR)	スス状炭附着	IV群5類

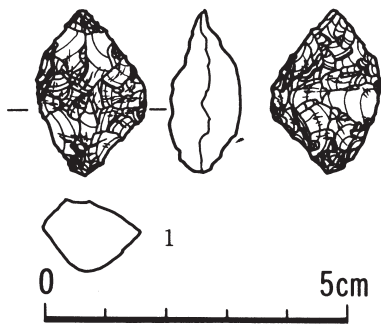
第16図 第2号竪穴住居跡出土遺物(2)

関係は、すべて本住居跡が新しい。

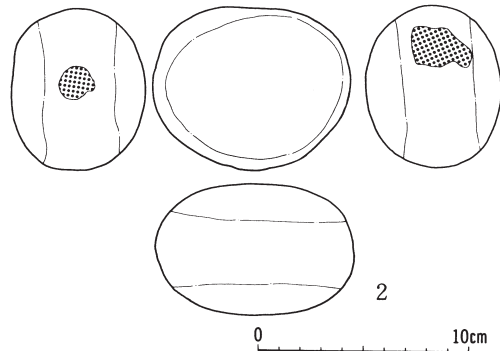
平面形・規模 平面形は、西側がやや張り出す円形を呈している。規模は、長径475cm・短径438cmで、床面積15.58m²を測る。

壁・床 壁は、すべて上端から床面にかけて、ゆるやかに傾斜しており、軟弱なつくりである。床は、全体的にほぼ平坦な構築である。炉の周辺部は堅緻な構築であるが、壁寄りには軟らかい。

柱穴 ピットは5個検出した。ピットの配置は、炉を中心として5個位置し、柱穴と思われる。P1・3・4・5の4個は、4本柱を主体とした支柱穴と思われる。



第17図 第2号竪穴住居跡出土遺物(3)



第2号竪穴住居跡石器観察表

図版	出土地点	層	最大計測図				石質	分類	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)			
第17図-1	2 H 床面		27	17	12	4.1	珪	A	
第17図-2	2 H 2		93	75	64	668	安	J	

ピット計測表

No.	形態	規模(cm)	深さ(cm)	No.	形態	規模(cm)	深さ(cm)	No.	形態	規模(cm)	深さ(cm)
1	円形	24×24	44.0	2	円形	25×23	18.3	3	楕円形	30×26	44.1
4	楕円形	48×28	42.5	5	〃	26×25	47.5				

炉 炉は、住居跡のほぼ中央部に位置している地床炉である。規模は長径96cm・短径92cmを測り円形を呈する。炉内からは、2層中から石器1片・1層中から土器1片が出土した。

出土遺物 (第19・20図) 本住居跡の遺物は、住居跡の東・西側の壁寄りに散布し、住居跡内の遺物量は少ない。遺物出土地点は、床直からの出土が多い。土器は、縄文施文の土器が多く、1の縄文の条が縦方向に施文されるなど、第 群(弥生式土器)の特徴を含んでいる土器と思われる。石器は、有柄石鏃と不定形石器が出土した。(成田)

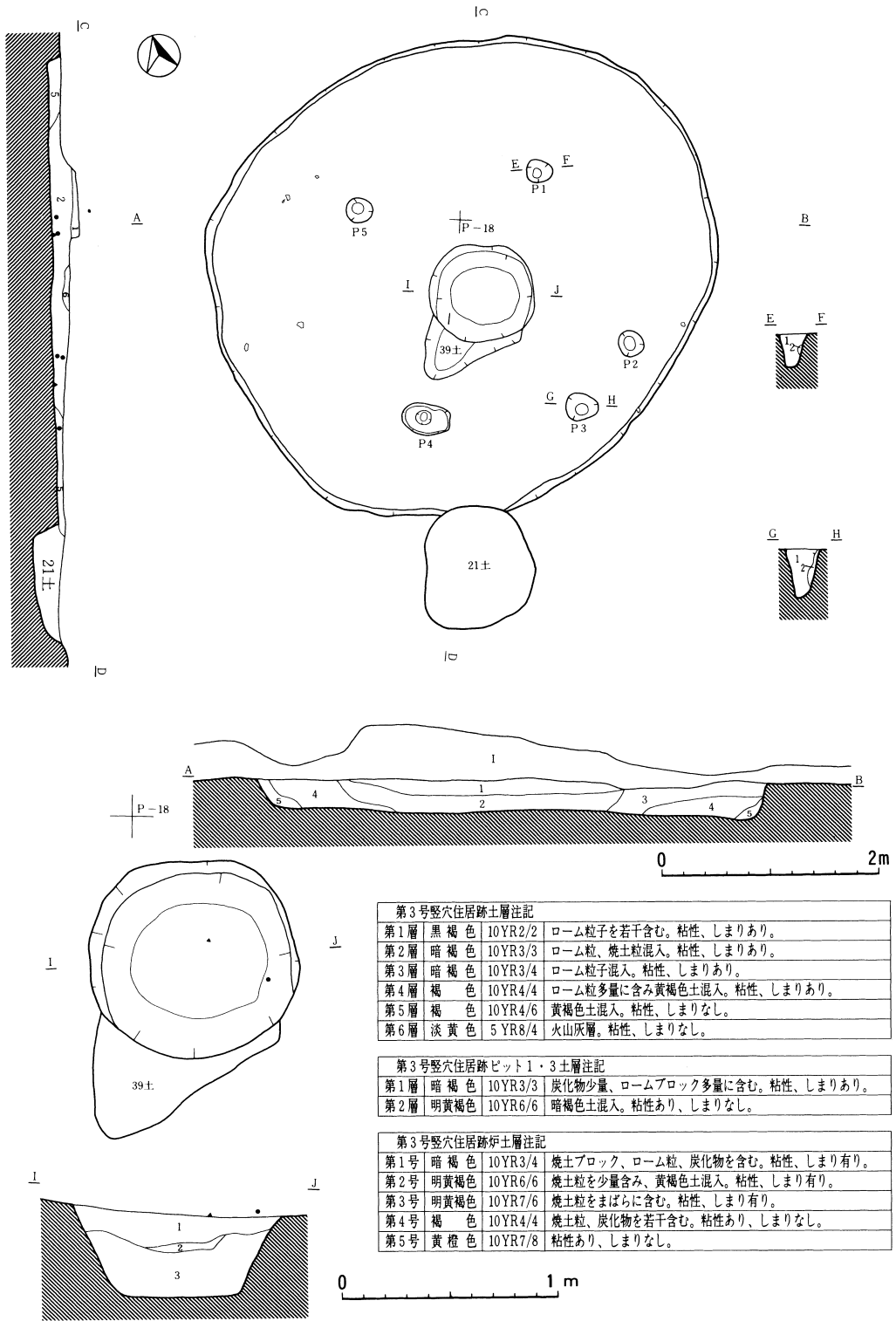
第4号竪穴住居跡(第21~26図)

位置と確認 本住居跡は、調査地区西側の緩斜面でAQ・AR-7・8グリッドに位置し、基本層序 層を精査中に黒褐色土の落ち込みを確認した。西側約4mに第6・7号竪穴住居跡・南西側約3mに第25号土壌が位置している。

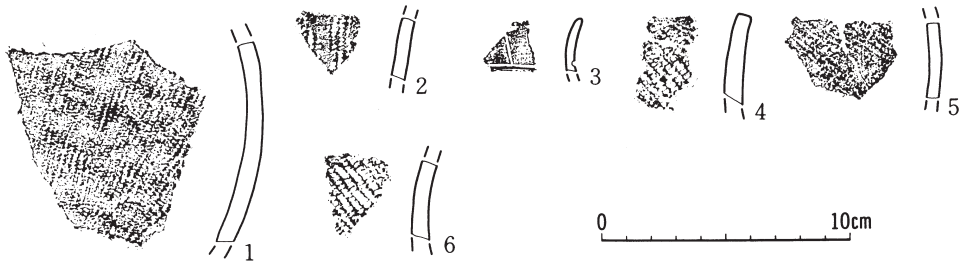
平面形・規模 平面形は、南北に長い楕円形にちかい長方形を呈する。長径750cm・短径490cmで床面積28.14㎡を測る。

壁・床 壁は、各壁ともほぼ垂直に立ち上がり、西側の壁はやや軟弱、その他の壁は堅緻なつりである。壁高は、東壁96cm・西壁60cm・南壁72cm・北壁56cmを測る。床は、ほぼ平坦で一般的に堅緻な貼り床である。

柱 穴 ピットは5個検出した。柱穴と思われるものは、P2~4の4個であり、ピット



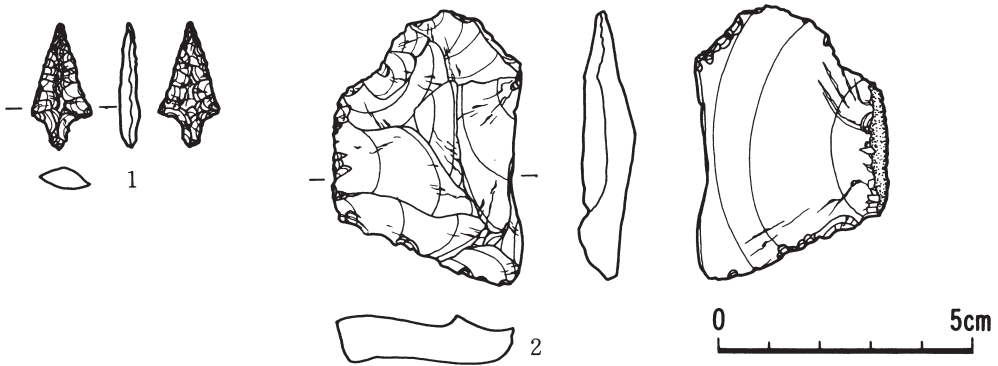
第18図 第3号竖穴住居跡



第3号竪穴住居跡土器観察表

番号	地区・層位	部位	外面	施文	文様	公類
1	3 H・床直	胴部	縄文 (LR)	スス状炭附着		VI群4類
2	3 H・床直	胴部	縄文 (LR)	スス状炭附着		VI群4類
3	3 H炉・1層	口縁部	横・縦位沈線	赤色顔料附着		VI群(?)
4	3 H・5層	口縁部	縄文 (RL)			IV群4類
5	3 H・床直	胴部	縄文 (RL)	スス状炭附着		VI群4類
6	3 H・床直	口頸部	縄文 (RL)	スス状炭附着		IV群4類

第19図 第3号竪穴住居跡出土遺物(1)

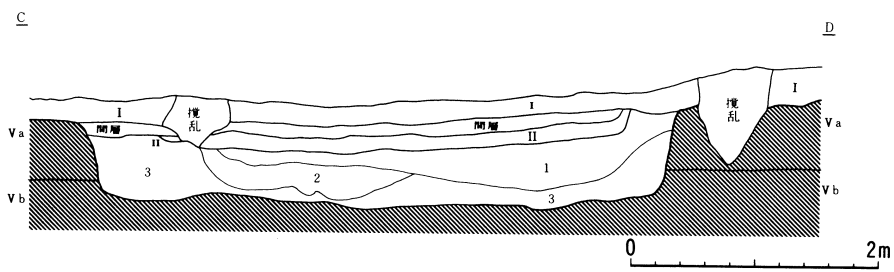
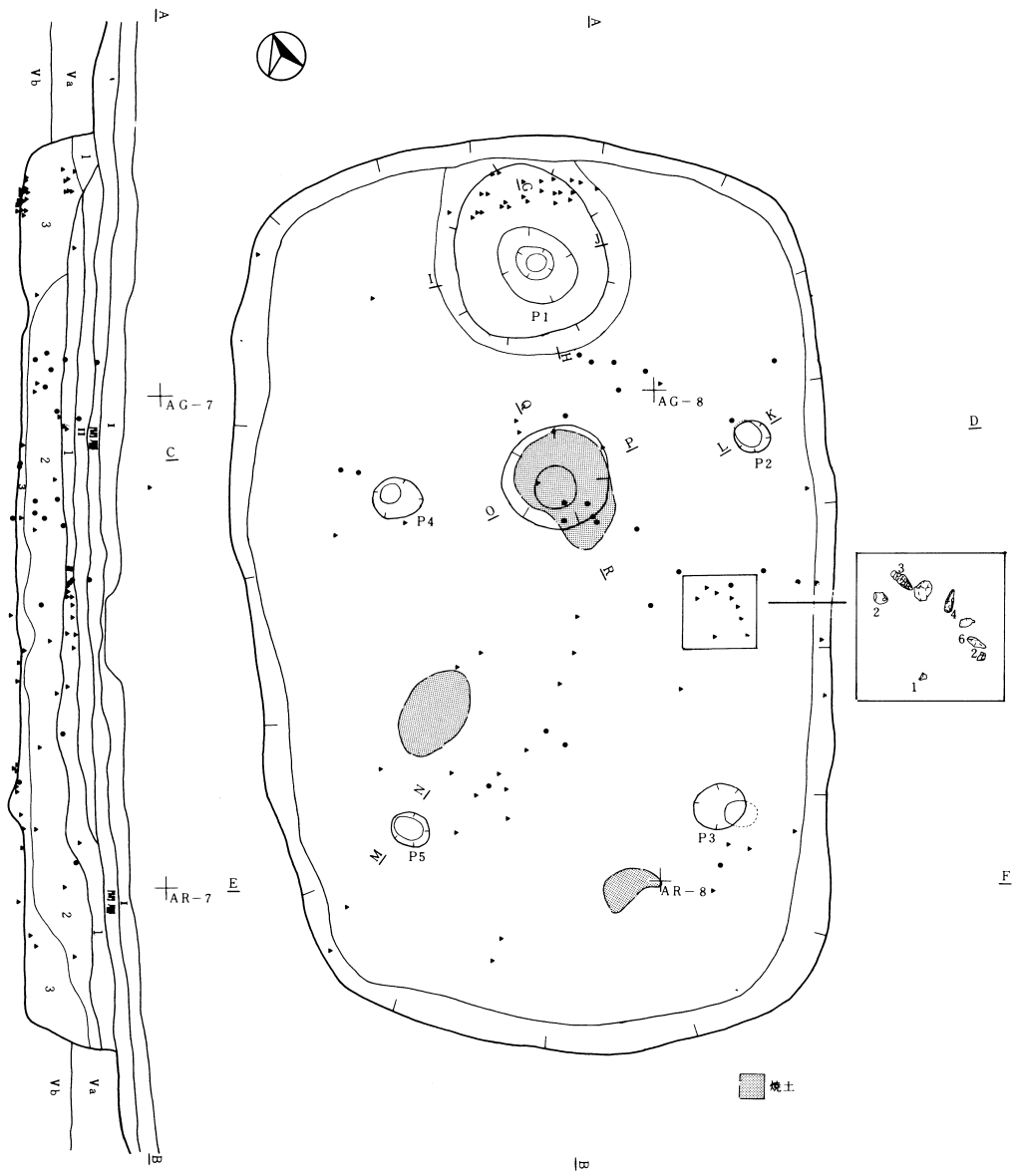


第13号竪穴住居跡石器観察表

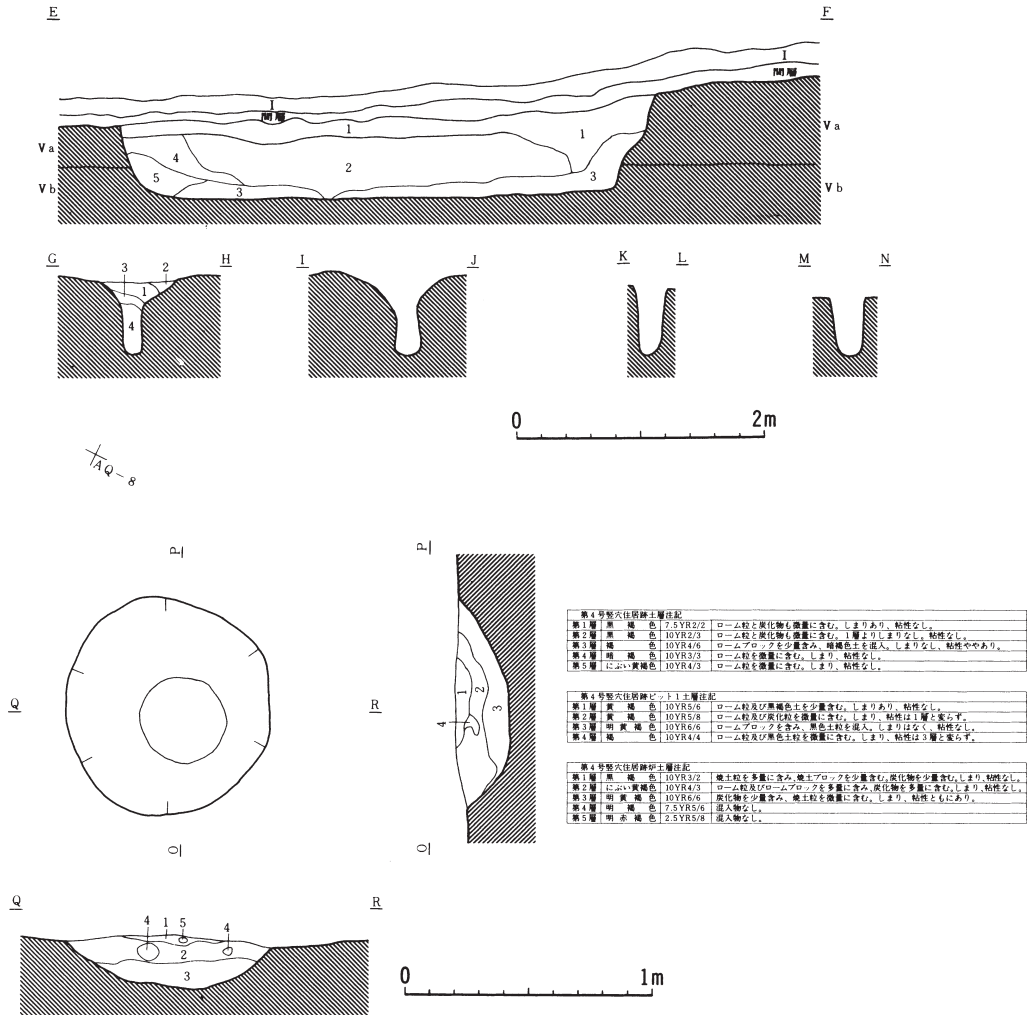
図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)			
第20図-1	3 H炉	2	25	12	4	0.5	珪	A	
第20図-2	3 H	5	48	37	10	4.1	珪	F	

第20図 第3号竪穴住居跡出土遺物(2)

1は 付属施設 の項目で記載する。柱穴の配置は、東側の壁寄りにP 2・3、西側の壁寄りにP 4・5を配置した4本柱の主柱穴である。(当初、貼り床面上では柱穴は確認できず、貼り床を除去し、柱穴を確認した。)



第21図 第4号竪穴住居跡(1)



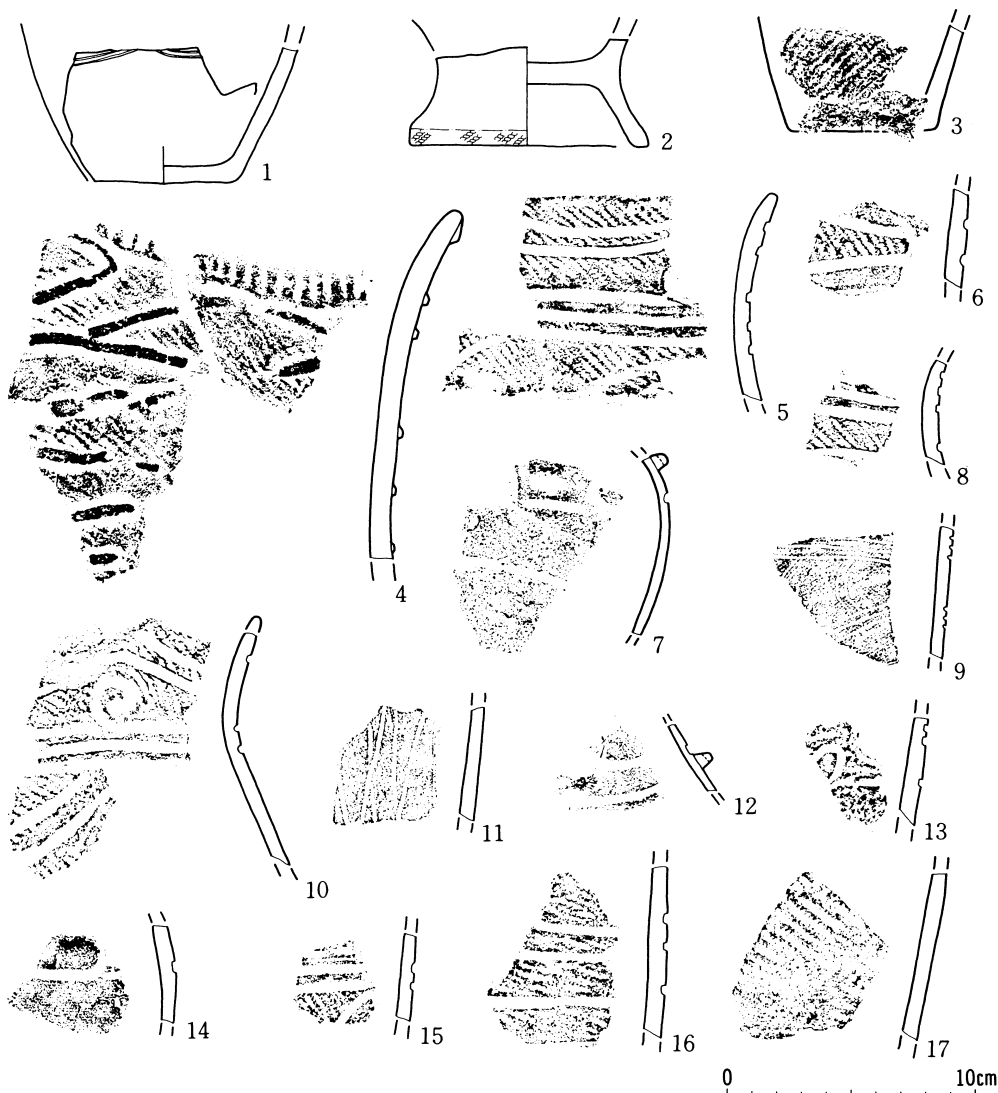
第22図 第4号竪穴住居跡(2)

ピット計側表

No.	形態	規模(cm)	深さ(cm)	No.	形態	規模(cm)	深さ(cm)	No.	形態	規模(cm)	深さ(cm)
2	円形	28×27	56.0	3	円形	40×37	66.0	4	円形	36×36	58.0
5	〃	30×29	47.0								

炉 炉は、住居跡の中央部からやや北寄りに位置している。規模は、長径86cm・短径84cmのほぼ円形を呈する地床炉である。壁は各壁ともなだらかに傾斜し、断面形はすり鉢形である。床面は軟弱である。火熱面は、焼土が少量のために確認できなかった。

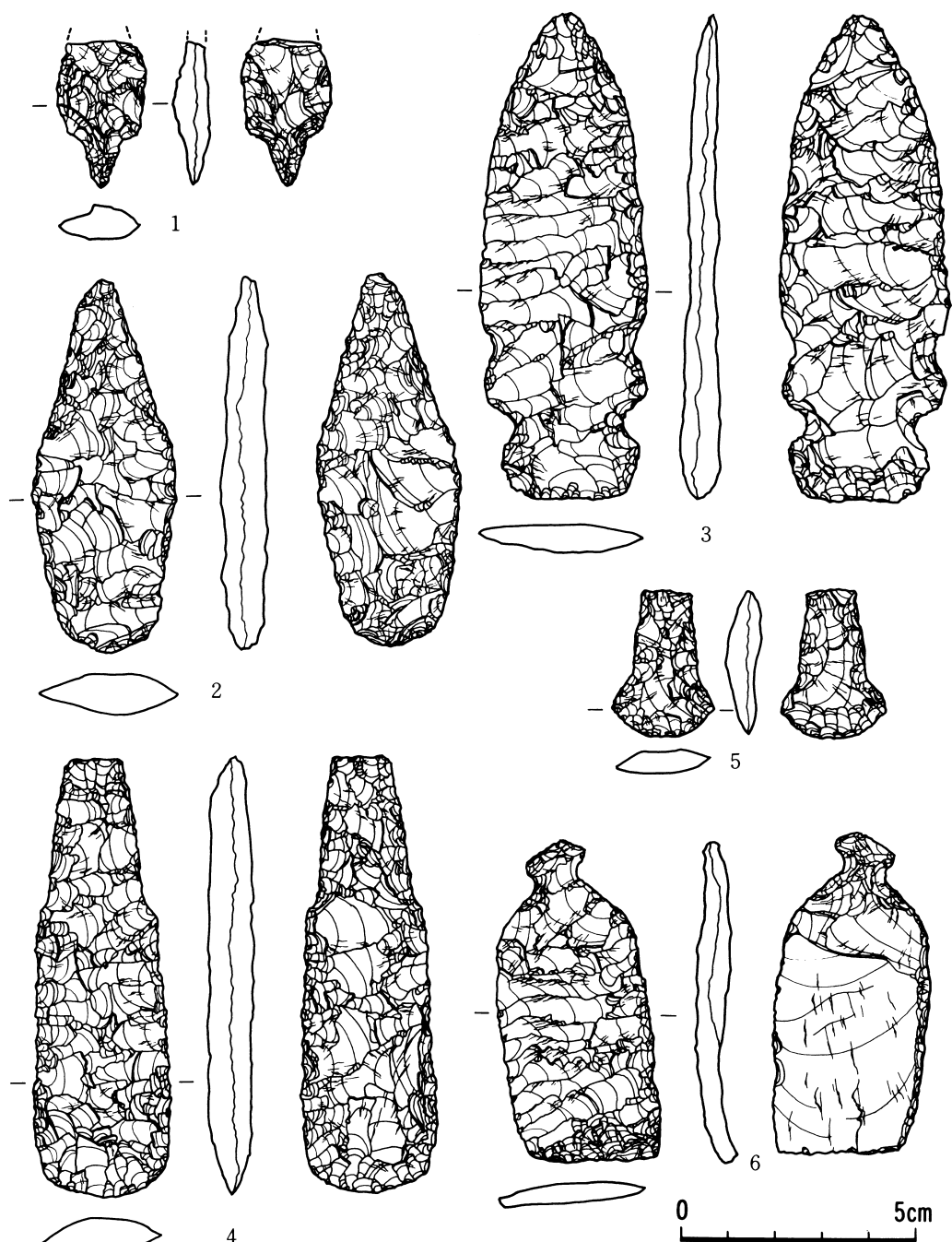
付属施設 住居跡北壁寄りに、160cm×160cmの円形を呈するピットを検出した。ピット上端から床面にかけて周囲50～60cmは、非常に堅緻で粘土を貼っている。さらに、ピット上端か



第4号竪穴住居跡土器観察表

番号	地区・層位	部位	外面施文文様	分類
1	4 H・覆土	鉢形	横位沈線	Ⅳ群3類
2	4 H・1層	台付鉢形	縄文(LR)	Ⅳ群5類
3	4 H・1層	底部	縄文(LR)	Ⅳ群5類
4	4 H・1層	口縁部	縄文(RL) 横位粘土紐 波状口縁	Ⅲ群4類
5	4 H・1層	口縁部	縄文(RL) 横位・弧状沈線一部磨消	Ⅳ群2類
6	4 H・1層	口頸部	縄文(RL) 横位・斜位沈線	Ⅳ群2類
7	4 H・2層	壺形	横位沈線 突起(貫通孔)	Ⅳ群1類
8	4 H・1層	口頸部	縄文(RL) 横位・斜位沈線	Ⅳ群2類
9	4 H・覆土	胴部	横位・斜位・弧状沈線	Ⅳ群3類
10	4 H・1層	口縁部	縄文(RL) 波状口縁の下部渦卷文	Ⅳ群2類
11	4 H・1層	胴部	交差状沈線 スス状炭付着	Ⅳ群4類
12	4 H・1層	蓋部	横位沈線 突起(貫通孔)	Ⅳ群1類
13	4 H・覆土	胴部	縄文 横位弧状沈線	Ⅳ群2類
14	4 H・2層	口頸部	横位・弧状沈線 赤色顔料塗布	Ⅳ群1類
15	4 H・覆土	口頸部	縄文(RL) 横位・弧状沈線	Ⅳ群2類
16	4 H・覆土	胴部	縄文(RL) 横位沈線	Ⅳ群2類
17	4 H・床直	胴部	縄文(LR・RL) 羽状縄文	Ⅲ群4類

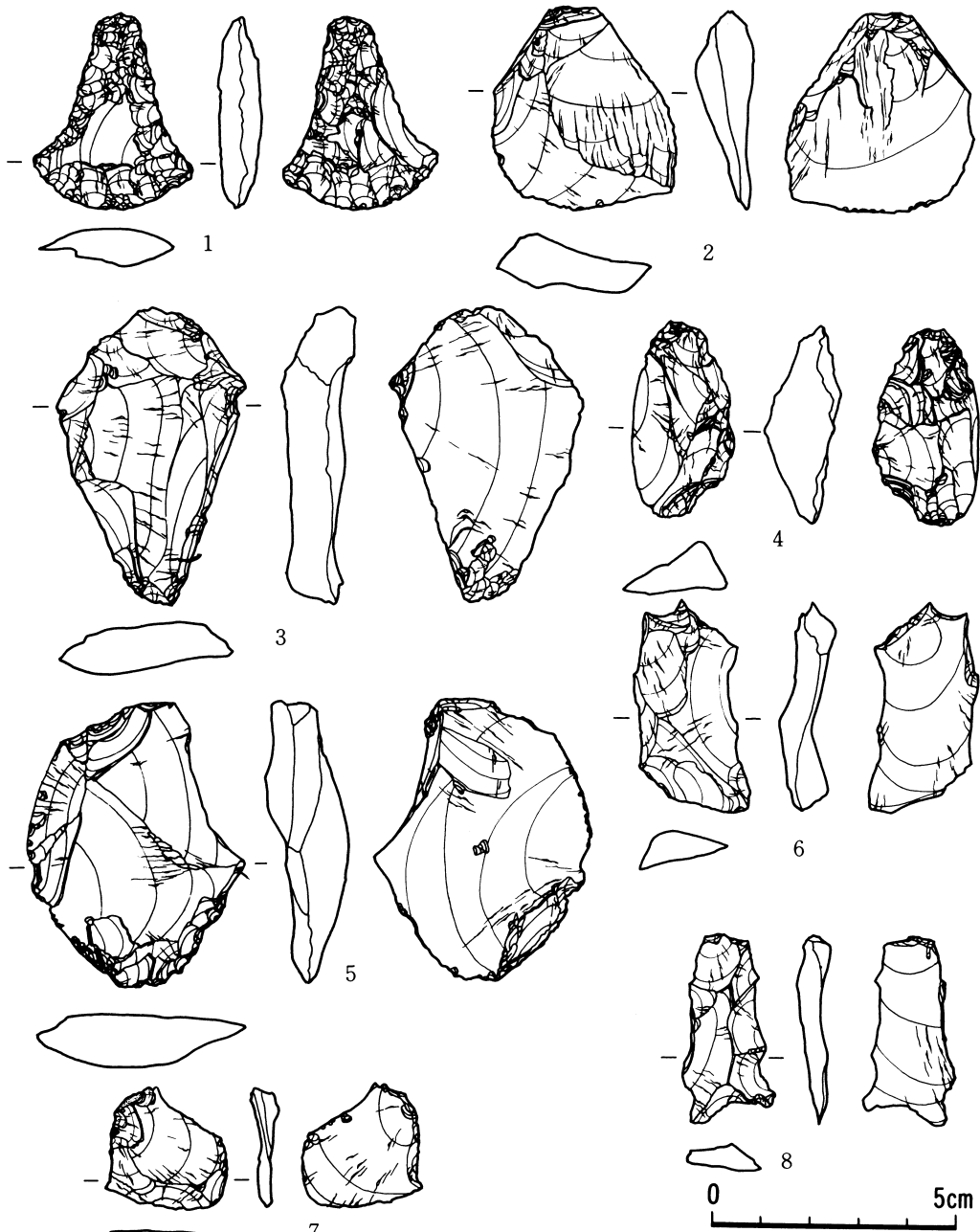
第23図 第4号竪穴住居跡出土遺物(1)



第4号竖穴住居跡石器観察表(1)

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)			
第24図-1	4 H	1	(32)	19	7	(3.2)	珪	A	欠損
第24図-2	4 H	1	80	31	9	3.1	珪	B	
第24図-3	4 H	1	104	36	7	33.5	珪	B	
第24図-4	4 H	1	93	29	9	28.3	珪	E	
第24図-5	4 H	1	32	22	7	3.9	珪	E	
第24図-6	4 H	1	69	33	6	13.8	珪	D	

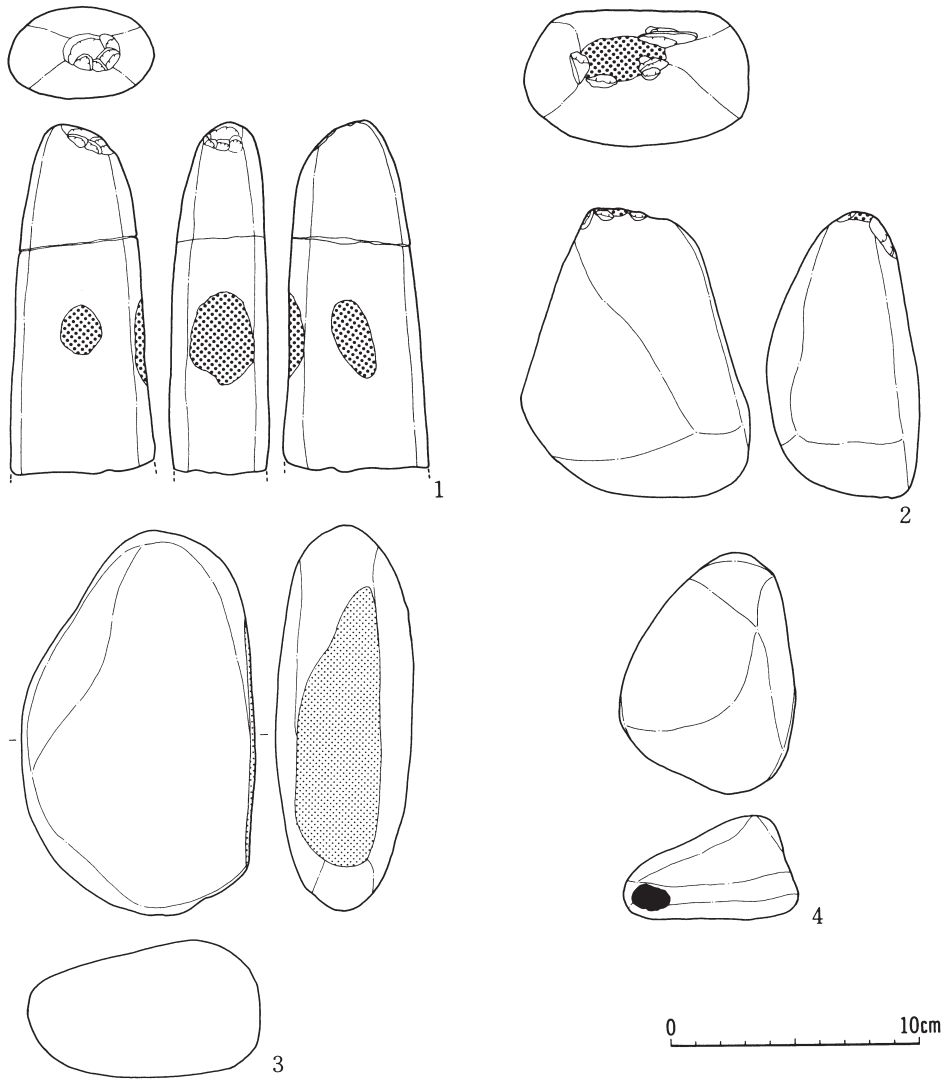
第24図 第4号竖穴住居跡出土遺物(2)



第4号竖穴住居跡石器観察表(2)

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)			
第25図-1	4 H	1	40	32	8	6.9	珪	E	
第25図-2	4 H	1	42	38	12	12.2	珪	F	
第25図-3	4 H	2	61	38	11	25.0	珪	F	
第25図-4	4 H	床直	40	20	14	8.3	珪	F	
第25図-5	4 H	1	58	45	12	31.6	珪	F	
第25図-6	4 H	1	42	22	6	5.4	珪	F	
第25図-7	4 H	2	25	25	3	1.5	珪	F	
第25図-8	4 H	床直	39	17	5	2.6	珪	F	

第25図 第4号竖穴住居跡出土遺物(3)



第4号竪穴住居跡石器観察表(3)

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)			
第26図-1	4 H	床面	(141)	57	39	(530)	閃	G	刃部欠損
第26図-2	4 H	1	123	86	58	837	安	J	
第26図-3	4 H	1	154	92	51	1097	安	J	
第26図-4	4 H	2	97	71	40	329	チャ	J	

第26図 第4号竪穴住居跡出土遺物(4)

ら周囲40cmの部分は、床面から10cm程度の盛り上がりを見せている。ピットの断面は円筒形で、深さ58cmである。

出土遺物（第23～26図） 本住居跡の遺物は、住居跡の全面に分布し、炉の北側に石器が多く分布している。堆積土中の第1層中から多く出土し、床面・床直からの出土は少ない。土器は、堆積土中から・群土器が混在して出土し、住居跡廃棄後に遺物が廃棄されたと思わ

れる。床直からの出土は、17の二種の原体を用いた羽状縄文の土器が1片であり縄文時代中期（円筒上層式）に相当すると思われる。石器は、石槍、石匙、石篋、不定形石器、磨製石斧、敲・磨器類が出土した。特に住居跡の東壁寄りの第1層からまとめて出土しており、出土状況から石器を意識的に廃棄したと思われる。（奈良・成田）

第5号竪穴住居跡（第27～31図）

位置と確認 本住居跡は、調査区の北側台地平坦面から南側に向けて傾斜する斜面のC・D・E-U・エグリッドに位置する。第a層中を精査中に、黒褐色土の円形の落ち込みを確認し、精査したところ竪穴住居跡を確認した。

平面形・規模 平面形は、南北がやや長めの円形を呈している。規模は、長径が474cm・短径が446cmで床面積15.28㎡を測る。

壁・床 壁は、北壁と南壁は、床面から上端にかけて垂直に立ち上がり、その他の壁は、緩やかにたちあがっている。壁高は、東壁11cm・西壁22cm・南壁15cm・北壁42cmを測る。床は、ほぼ平坦であり、住居跡の炉の周辺は、貼り床がみられ堅緻であるが、壁寄りの部分は、貼り床が弱く床が軟弱になっている。

柱穴 住居跡内から、大小あわせて9個のピットを検出した。P2～9は、配置等から推定すると柱穴である可能性が高いと思われる。しかし、どのピットからも柱痕は確認されなかった。柱穴の配置は、P2・3・4・9が南側の壁寄りに片寄っており、柱穴は約2m間隔で壁寄りに配置しており、壁柱穴と思われる。

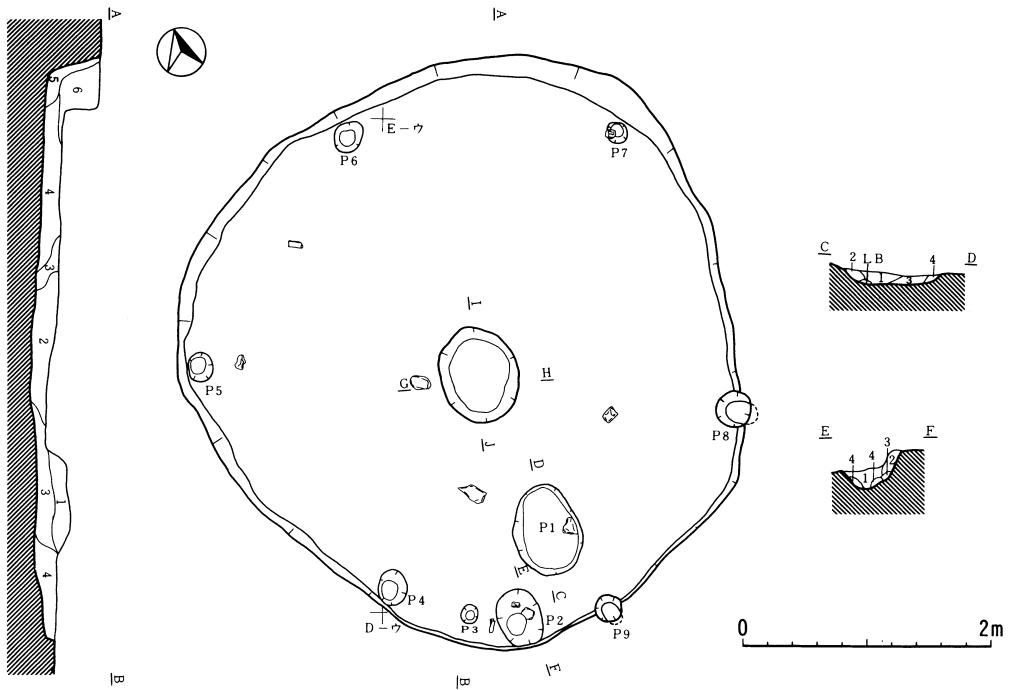
ピット計測表

No.	形態	規模(cm)	深さ(cm)	No.	形態	規模(cm)	深さ(cm)	No.	形態	規模(cm)	深さ(cm)
2	楕円形	46×36	13.1	3	円形	14×16	7.2	4	円形	28×24	13.9
5	円形	24×20	16.4	6	〃	26×22	15.4	7	〃	18×16	14.5
8	〃	30×28	20.6	9	〃	24×24	19.4				

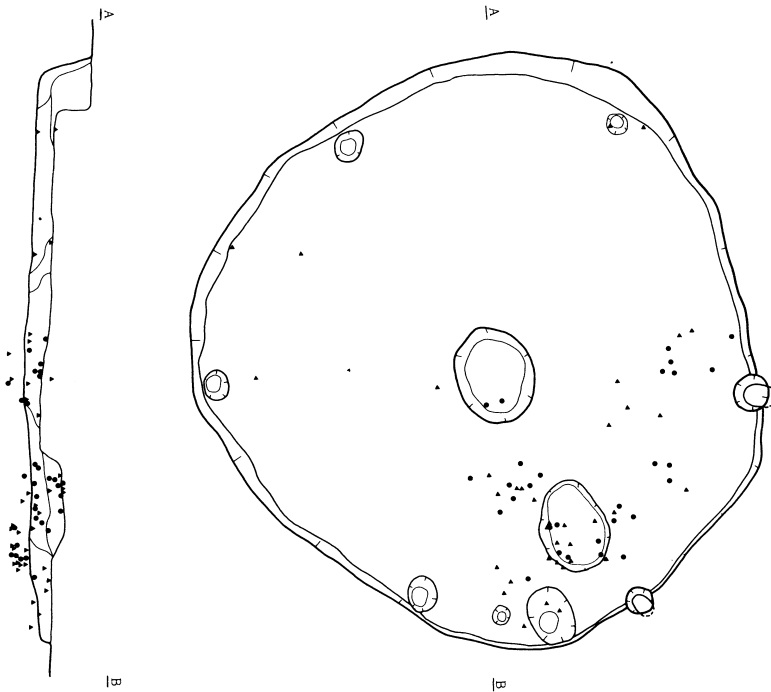
炉 炉は、住居跡のほぼ中央部に位置する地床炉である。規模は、長径が78cm・短径が64cmを測り、楕円形を呈する。炉内には、土器片2個、礫2個、炭化材1個が出土した。

付属施設 炉の南側約60cmの位置に、長径74cm・短径54cmで深さ12cmを測る、楕円形の土壇を確認した。土壇内からは遺物は出土せず、用途・性格については不明である。

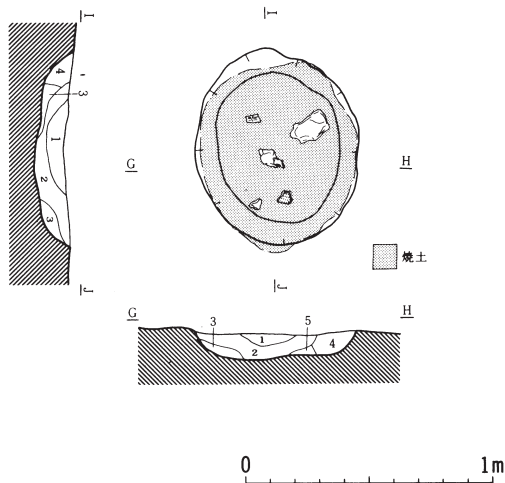
出土遺物（第29～31図） 本住居跡の遺物は、炉の南側から多量に出土し、炉の北側では石器が若干散布している状態である。土器は、波状口縁で口縁部文様区画帯を有し、区画帯内部に撚糸圧痕を多用し、文様構成を行なっている。縄文時代中期（円筒上層a式）の土器が多く出土した（3・4・16）。石器は、石錐、不定形石器、敲・磨器類と、円筒上層期に多くみられる半円形状偏平打製石斧が出土した。（新谷・成田）



第5号竖穴住居跡土層注記			
第1層	黒褐色	10YR2/2	ローム粒を少量含む。しまり、粘性なし。
第2層	暗褐色	10YR3/3	ローム粒を少量含む、焼土ブロック、炭化物を微量に含む。しまり、粘性なし。
第3層	黒褐色	10YR3/2	ローム粒をやや多量に含む。しまり、粘性ややあり。
第4層	褐色	10YR4/4	ローム粒を少量含む。しまり、粘性なし。
第5層	褐色	10YR4/6	黄褐色土を混入。しまりあり、粘性なし。
第6層	暗褐色	10YR3/4	ローム粒をやや多量に含む。しまり、粘性あり。



第27図 第5号竖穴住居跡(1)



第28図 第5号竪穴住居跡

層	色	10YR	注記
第1層	褐色	10YR4/4	ローム粒を多量に含み、炭化物を微量に含む。しまりあり、粘性なし。
第2層	暗褐色	10YR3/4	黄褐色土混入。しまりあり、粘性ややあり。
第3層	暗褐色	10YR3/3	炭化物を微量に含み、ローム粒を多量に含む。しまりあり、粘性なし。

層	色	10YR	注記
第1層	暗褐色	10YR3/3	焼土粒を少量含む、黄褐色土混入。しまり、粘性あり。
第2層	黒褐色	10YR2/3	炭化物を微量に含む。しまり、粘性あり。
第3層	褐色	10YR4/6	黄褐色土を含む。しまり、粘性あり。
第4層	明黄褐色	10YR6/8	暗褐色土が混入。しまり、粘性あり。

層	色	10YR	注記
第1層	褐色	10YR4/6	焼土粒を多量に含む。しまり、粘性なし。
第2層	赤褐色	5YR4/8	黄褐色土が混入し、暗褐色土も少量混入。しまりあり、粘性なし。
第3層	黄褐色	10YR5/8	焼土粒を少量含む。しまり、粘性あり。
第4層	暗褐色	10YR3/4	焼土を多量に含み、黄褐色土が混入。しまり、粘性なし。

第6号竪穴住居跡（第32～35図）

位置と確認 本住居跡は、調査区の北側の緩斜面で、AR・AS・AT - 4・5グリットに位置している。第 a 層を精査中に落ち込みを確認し、精査したところ竪穴住居跡を確認した。

重複 竪穴住居跡の南側部分で第7号竪穴住居跡と切り合っており、新旧関係は、本住居跡が新しい。

平面形・規模 平面形は、西側部分の壁を確認する事ができず推定ラインとなっているが、北・南側が丸みを持ち、東・西側が直線的な長方形を呈すると思われる。規模は、長径751cm・短径430cmで床面積(28.11)㎡を測る。住居跡の規模としては、大型な住居跡である。

壁・床 壁は、北壁が中ほどで段を有しており、東・南壁が上端から床面にかけてゆるやかに傾斜している。壁高は、東壁16cm・南壁20cm・北壁25cmを測り、壁の構築は軟弱なつくりである。床面は、全体的にほぼ平坦であり、やわらかく堅緻な構築ではない。

柱穴 ピットは2個検出した。ピットは、住居跡の北側に約1mの幅で対になって位置しており柱穴と思われる。

ピット計測表

No.	形態	規模(cm)	深さ(cm)	No.	形態	規模(cm)	深さ(cm)	No.	形態	規模(cm)	深さ(cm)
1	円形	53×50	26.0	2	円形	55×54	30.0				

炉 炉は、住居跡の南壁寄りに位置している地床炉である。規模は長径74cm・短径72cmを測り円形を呈する。炉内からは遺物は出土しなかった。

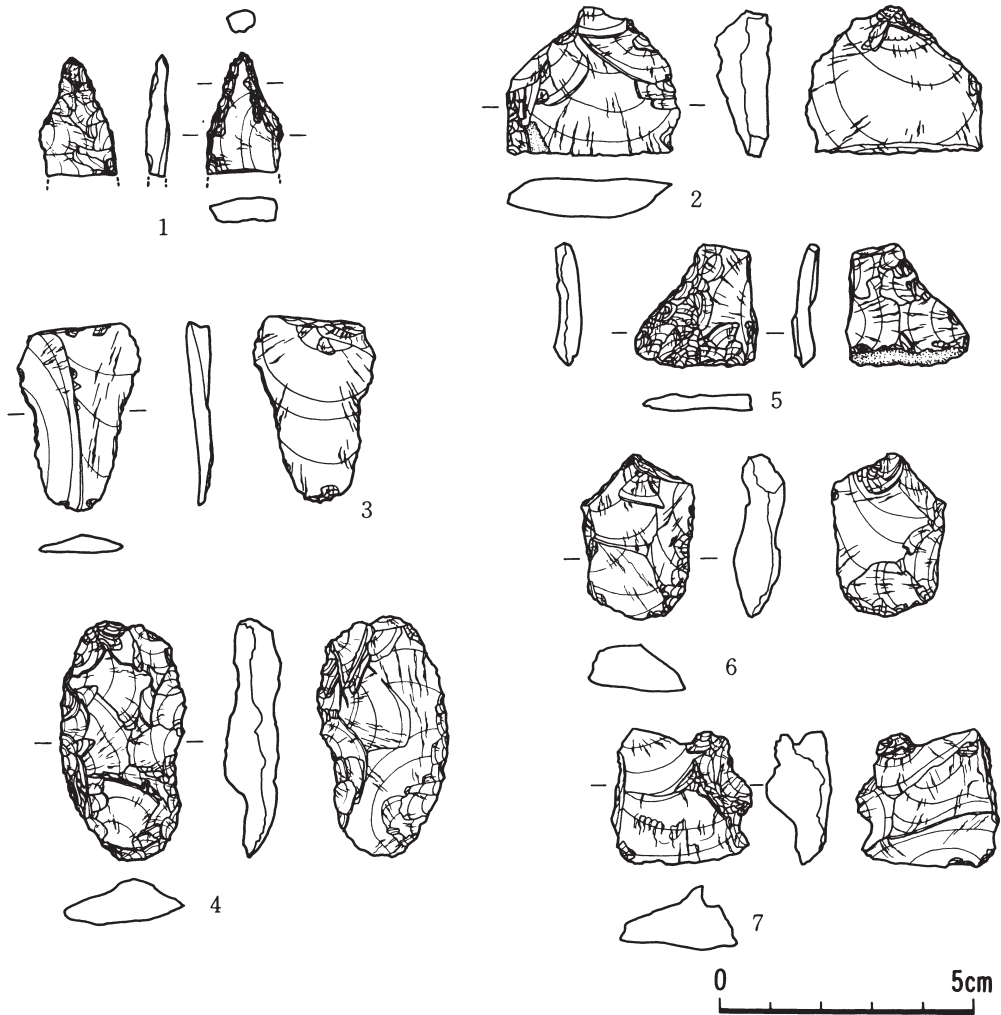
出土遺物（第34・35図） 堆積土中から、第、群土器が出土し、石器は不定形石器、敲・磨器類が出土した。（成田）



第5号竖穴住居跡土器観察表

番号	地区・層位	部位	外面施文文様	分類
1	5 H・1層	鉢形	縄文(RL) 渦巻文様2個の波状口縁 円形竹管 磨消縄文	Ⅳ群2類
2	5 H・4層	口縁部	縄文(LR) 横・斜位の捺糸圧痕 綾絡文	Ⅲ群1類
3	5 H・4層	口縁部	波状口縁 捺糸圧痕 縦位の粘土紐	Ⅲ群1類
4	5 H・4層	口縁部	波状口縁 捺糸圧痕 スス状炭附着	Ⅲ群1類
5	5 H・4層	口頸部	縄文(LR) 横位粘土紐 スス状炭附着	Ⅲ群1類
6	5 H・1層	口頸部	縄文(RL) 斜位沈線 スス状炭附着	Ⅳ群2類
7	5 H・4層	底辺部	縄文(LR) 縦位綾絡文	Ⅲ群
8	5 H・4層	胴部	縄文(RL)	Ⅲ群
9	5 H・4層	口縁部	波状口縁 捺糸圧痕 スス状炭附着	Ⅲ群1類
10	5 H・1層	口縁部	縄文(RL) スス状炭附着	Ⅳ群4類
11	5 H・4層	胴部	磨消縄文 縄文(RL)	Ⅳ群1類
12	5 H・5層	胴部	縄文(RL) スス状炭附着	Ⅲ群
13	5 H・4層	底辺部	縄文(RL)	Ⅲ群
14	5 Hピット1・1層	底辺部	縄文(RL) スス状炭附着	Ⅲ群4類
15	5 Hピット1・1層	胴部	縄文(LR) スス状炭附着	Ⅲ群4類
16	5 H炉・2層	口縁部	波状口縁 横位・斜位捺糸圧痕	Ⅲ群1類
17	5 Hピット1・1層	口縁部	横位・斜位捺糸圧痕 スス状炭附着	Ⅲ群1類
18	5 H炉・2層	口頸部	横位・斜位捺糸圧痕 縄文(LR) スス状炭附着	Ⅲ群1類

第29図 第5号竖穴住居跡出土遺物(1)



第5号竖穴住居跡石器観察表(1)

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)			
第 図-1	5 H	1	(23)	14	5	(1.7)	珪	C	欠損
第 図-2	5 H	1	29	34	11	10.9	珪	F	
第 図-3	5 H	4	36	24	4	3.0	珪	F	
第 図-4	5 H	5	48	25	10	12.0	珪	F	
第 図-5	5 H	4	23	24	4	2.6	珪	F	
第 図-6	5 H	1	32	22	9	6.3	珪	F	
第 図-7	5 H	1	27	27	13	7.1	珪	F	

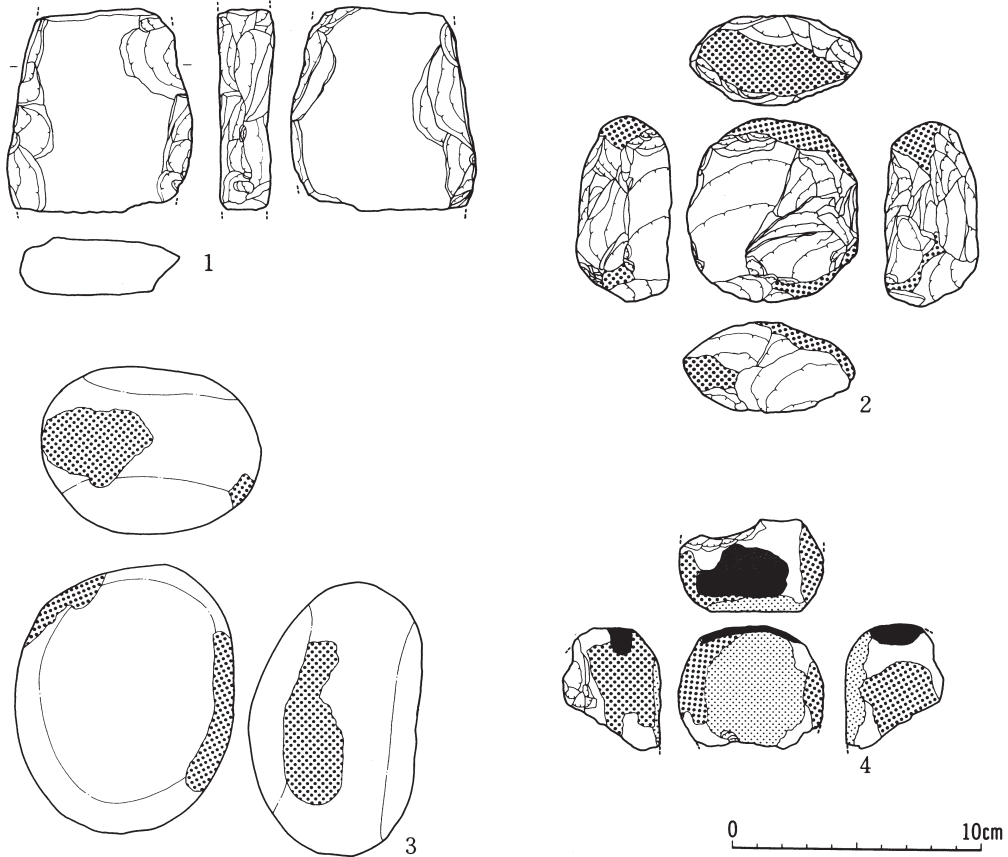
第30図 第5号竖穴住居跡出土遺物(2)

第7号竖穴住居跡(第32・33図)

位置と確認 本住居跡は、北側の緩斜面で、AT・AU - 4・5グリッドに位置している。

第 a層を精査中に落ち込みを確認し、精査したところ竖穴住居跡を確認した。

重複 竖穴住居跡の北側部分で第6号住居跡と切り合っており、新旧関係は本住居跡が



第5号竪穴住居跡石器観察表(2)

図 版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	備 考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)			
第31図-1	5 H	4	(81)	(73)	27	215	安	L	欠損
第31図-2	5 H	5	(73)	(68)	(38)	(227)	チャ	J	欠損
第31図-3	5 H	4	110	87	65	783	安	J	
第31図-4	5 H	3	(49)	55	(37)	(134)	チャ	J	欠損

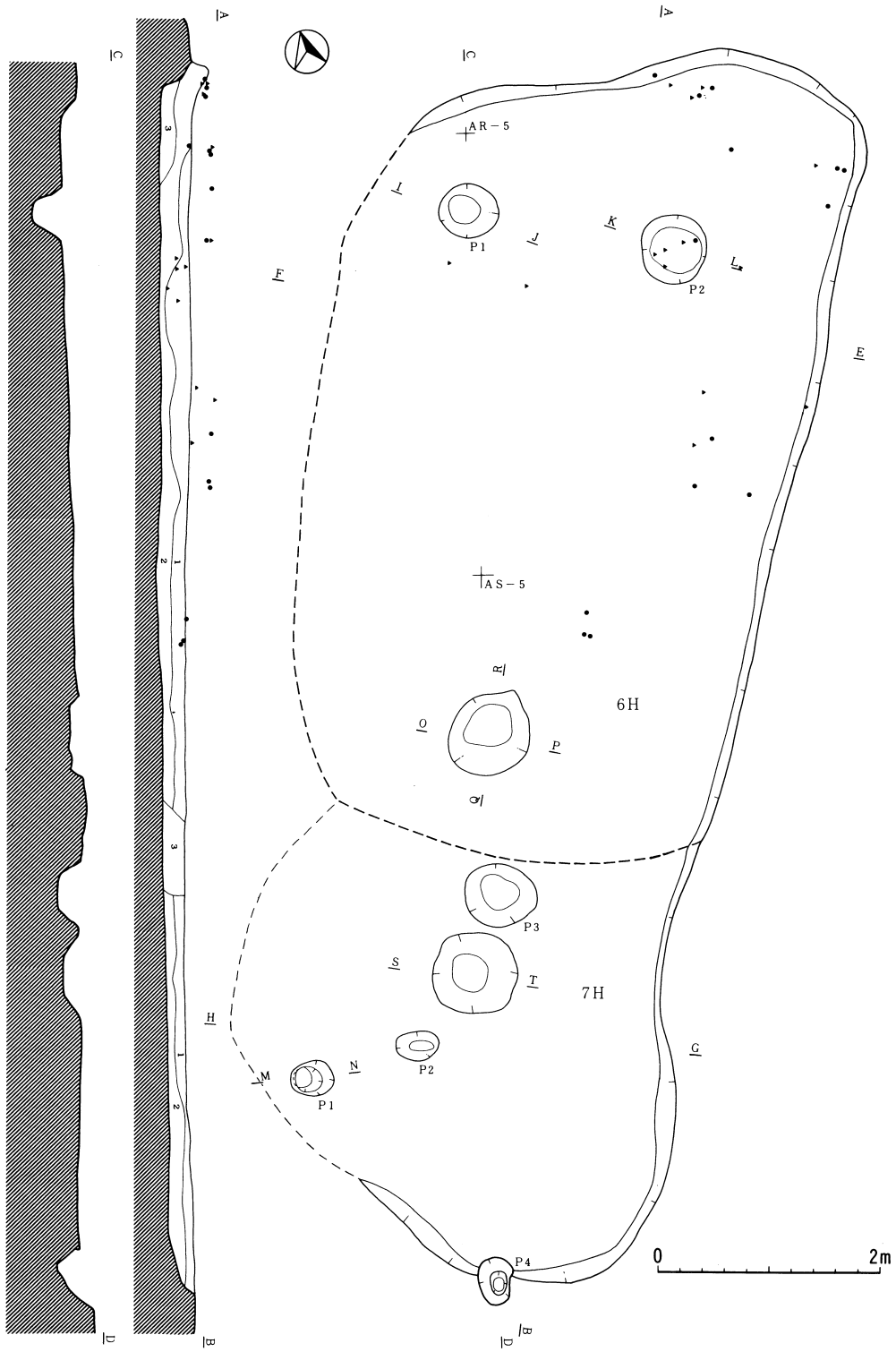
第31図 第5号竪穴住居跡出土遺物(3)

古い。

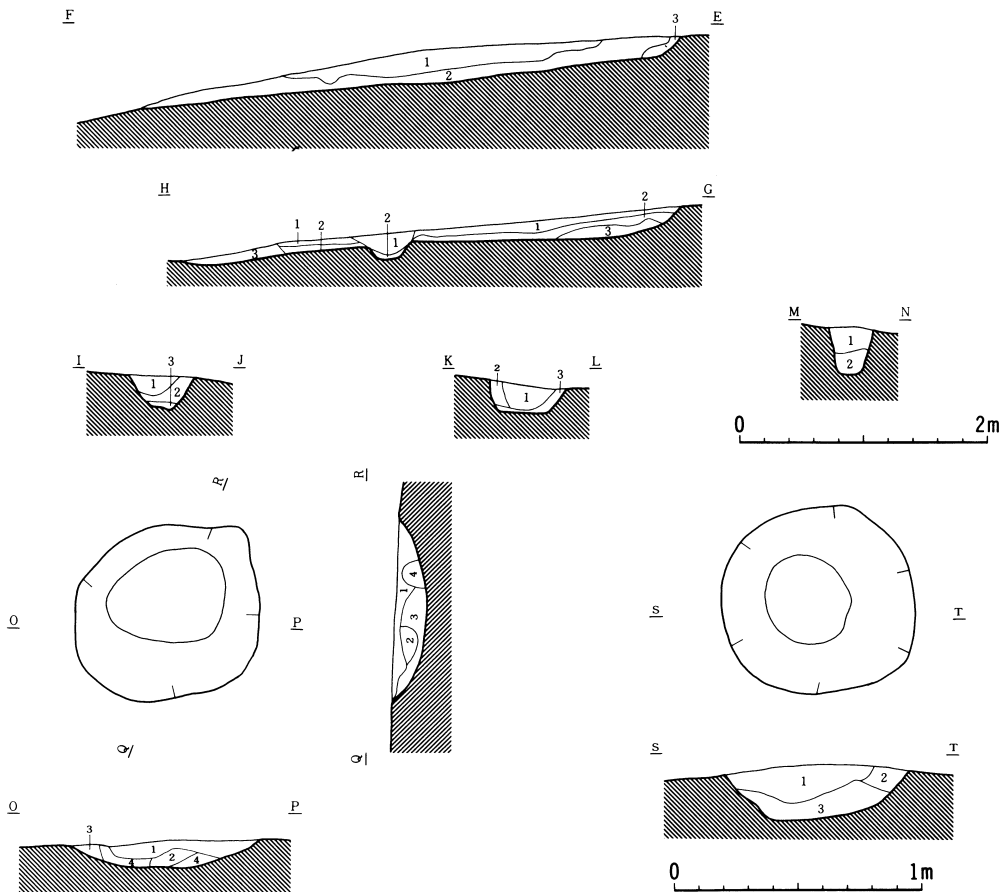
平面形・規模 平面形は、北・西側が確認できなかったが、残存部から判断すると全体的にいびつな円形を呈すると思われる。規模は、長径が(384)cm・短径が(376)cmで床面積(12.38)m²を測る。

壁・床 壁は、東・西壁が上端から床面にかけて、ゆるやかに傾斜しており、軟弱な作りである。西・南壁は不明である。壁高は、東壁が20cm・南壁が15cmを測る。床面は、全体的にほぼ平坦であり、堅緻な構築では無い。

柱 穴 ピットは4個検出した。炉の囲りに3個・北壁寄りに1個位置し、配置に規則性がみられない。本住居跡の柱穴かどうかは判断がむずかしい。



第32图 第6・7号竖穴住居跡(1)



第6号竖穴住居跡土層注記			
第1層	暗褐色	10YR3/4	ローム粒、炭化物を少量含む、褐色土混入。粘性なし、しまりあり。
第2層	褐色	10YR4/6	ローム粒、炭化物を少量含む、黄褐色土混入。粘性なし、しまりあり。
第3層	黄褐色	10YR5/6	ローム粒、炭化物を若干含む、褐色土混入。粘性、しまりあり。

第7号竖穴住居跡土層注記			
第1層	暗褐色	10YR3/3	ローム粒、炭化物を多量に含む。粘性なし、しまりあり。
第2層	褐色	10YR4/6	ローム粒、炭化物を少量含む、黄褐色土混入。粘性、しまりあり。
第3層	黄褐色	10YR5/6	ローム粒を若干含む。粘性、しまりあり。

第6号竖穴住居跡炉土層注記			
第1層	褐色	7.5YR4/4	焼土粒、炭化物、ローム粒を多量に含む。粘性、しまりあり。
第2層	赤褐色	5YR4/8	焼土層。粘性、しまりあり。
第3層	明褐色	7.5YR5/6	焼土粒、炭化物、ローム粒を含む。粘性、しまりあり。
第4層	明褐色	10YR6/8	焼土粒、炭化物、ローム粒を含む。黄褐色土混入。粘性なし、しまりあり。

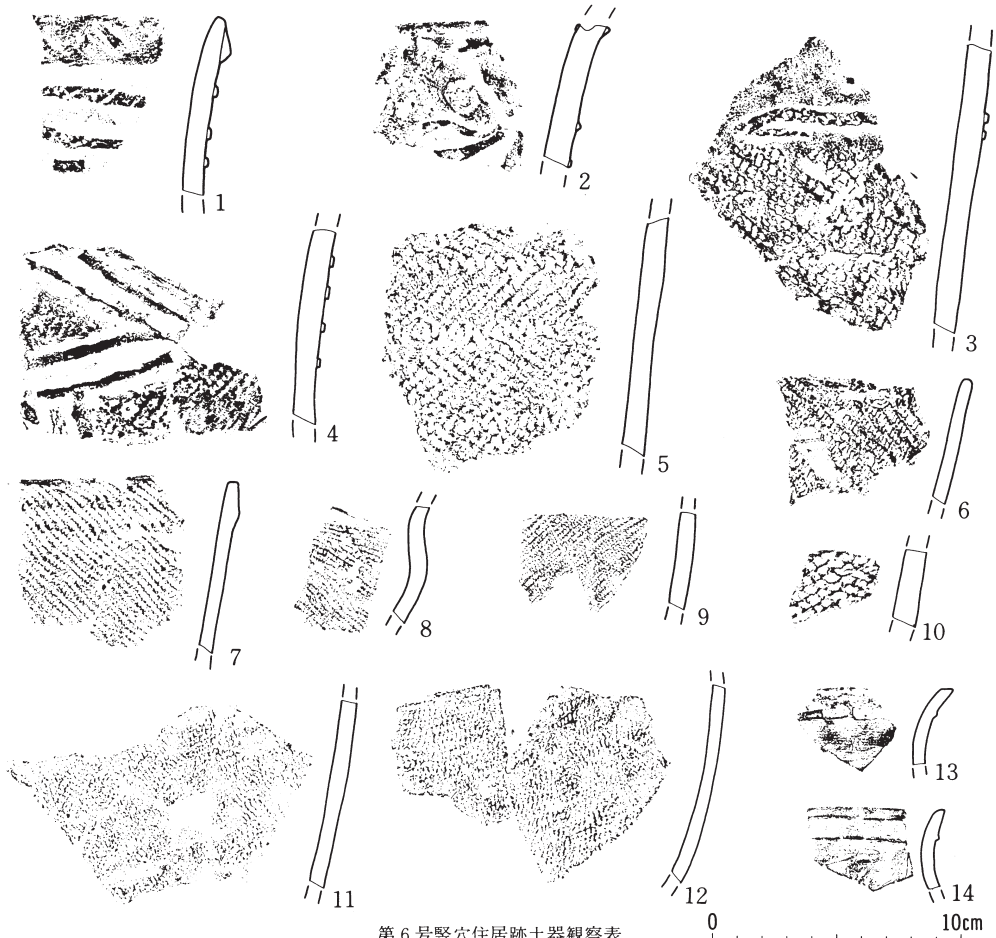
第7号竖穴住居跡炉土層注記			
第1層	明褐色	7.5YR5/8	焼土粒を若干含む。粘性なし、しまりあり。
第2層	明褐色	10YR6/6	焼土粒を少量含む、暗褐色土混入。粘性なし、しまりあり。
第3層	黄褐色	10YR5/8	焼土粒、炭化物を若干含む、褐色土混入。粘性なし、しまりあり。

第6号竖穴住居跡ピット1土層注記			
第1層	黄褐色	10YR5/6	炭化物、ローム粒を少量含む。粘性なし。
第2層	褐色	10YR4/6	炭化物、ロームアロックを少量含む。粘性、しまりなし。
第3層	明黄褐色	10YR6/6	混入物なし。粘性、しまりあり。

第7号竖穴住居跡ピット1土層注記			
第1層	褐色	10YR4/6	炭化物、ローム粒を多量に含む。暗褐色土混入。粘性なし、しまりあり。
第2層	黄褐色	10YR5/8	炭化物、ローム粒を若干含む。粘性、しまりあり。

第6号竖穴住居跡ピット2土層注記			
第1層	黄褐色	10YR5/6	炭化物、ローム粒を多量に含む。粘性なし、しまりあり。
第2層	褐色	10YR4/6	炭化物、ローム粒を少量に含む。粘性なし、しまりあり。
第3層	明黄褐色	10YR6/8	炭化物を多量に含む。粘性、しまりあり。

第33図 第6・7号竖穴住居跡(2)



第6号竖穴住居跡土器観察表

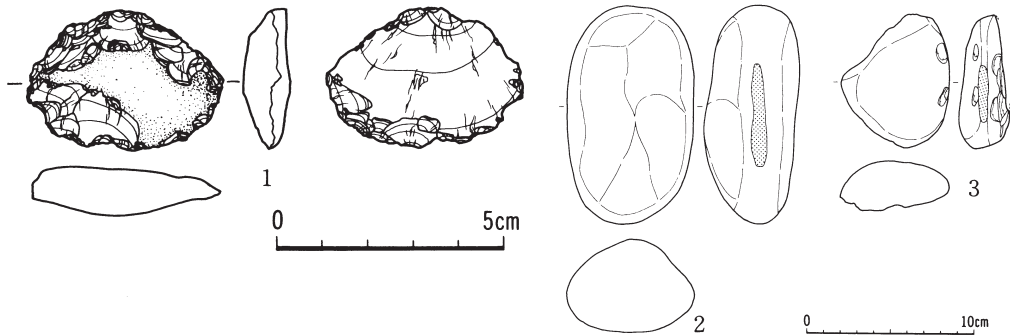
番号	地区・層位	部位	外面施文文様	分類
1	6 H・2層	口縁部	山形・横位粘土紐 縄文(LR)	Ⅲ群4類
2	6 H・2層	口縁部	扇状把手 横位・斜位粘土紐	Ⅲ群4類
3	6 H・2層	胴部	縄文(RLR) 横位粘土紐	Ⅲ群4類
4	6 H・2層	口頸部	縄文(LR) 横・斜位粘土紐 スス状炭付着	Ⅲ群4類
5	6 H・2層	胴部	羽状縄文(LR・RL)	Ⅲ群4類
6	6 H・2層	口縁部	縄文(RL) スス状炭付着	Ⅳ群4類
7	6 H・1層	口縁部	縄文(RL) スス状炭付着	Ⅳ群4類
8	6 H・2層	口頸部	縄文(LR)	Ⅳ群4類
9	6 H・2層	胴部	縄文(LR) スス状炭付着	Ⅳ群5類
10	6 H・2層	胴部	縄文(LRL)	Ⅲ群4類
11	6 H・2層	胴部	縄文(LR)	Ⅳ群4類
12	6 H・2層	胴部	縄文(LR)	Ⅳ群4類
13	6 H・2層	口縁部	無文	Ⅳ群5類
14	6 H・2層	口縁部	無文	Ⅳ群5類

第34図 第6号竖穴住居跡出土遺物(1)

ピット計測表

No.	形態	規模(cm)	深さ(cm)	No.	形態	規模(cm)	深さ(cm)	No.	形態	規模(cm)	深さ(cm)
1	円形	40×30	39.4	2	楕円形	40×26	15.4	3	円形	66×57	26.1
4	楕円形	42×30	36.0								

炉 炉は、住居跡の中央部からやや北寄りに位置する地床炉である。規模は、長径75cm・



図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)			
第35図-1	6H	2	43	31	10	12.8	珪	F	
第35図-2	6H	2	130	75	53	771	流	J	
第35図-3	6H	2	79	(64)	(28)	(155)	チャ	J	欠損

第35図 第6号竪穴住居跡出土遺物(2)

短径72cmを測り円形を呈する。炉内からは遺物は出土しなかった。

(成田)

第8号竪穴住居跡(第36~43図)

位置と確認 本住居跡は、調査区北側の平坦面で、I・J-1・2グリッドに位置している。第層を精査中に落ち込みを確認し、精査したところ竪穴住居跡を確認した。

平面形・規模 平面形は、全体的に丸みを持つ円形である。規模は、長径が440cm・短径が432cmで床面積14.72㎡を測る。

壁・床 壁は、すべて上端から床面にかけて、なだらかに傾斜しており、堅緻なつくりである。床面は、全体的にほぼ平坦であり、炉の周辺は固く、壁寄りが軟らかい。

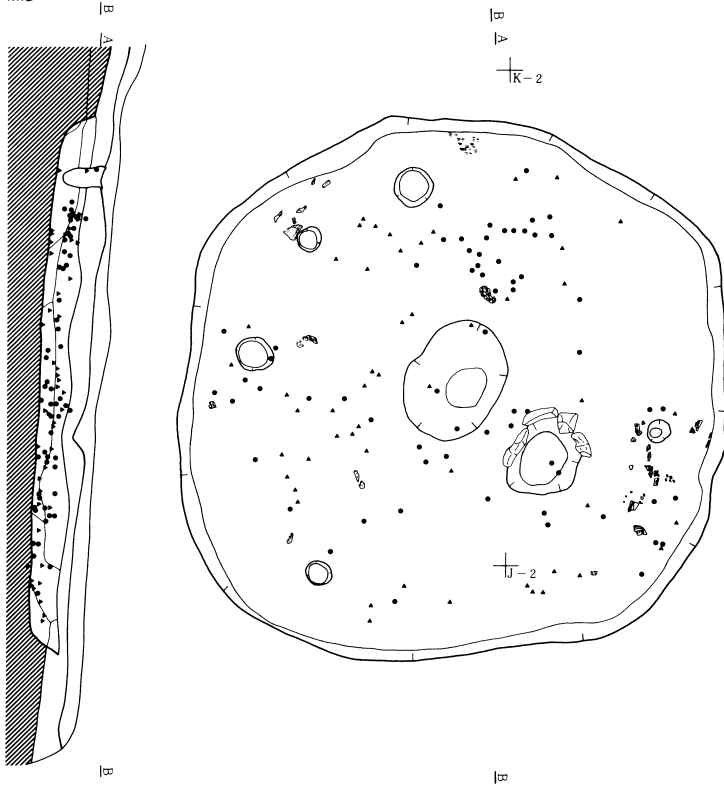
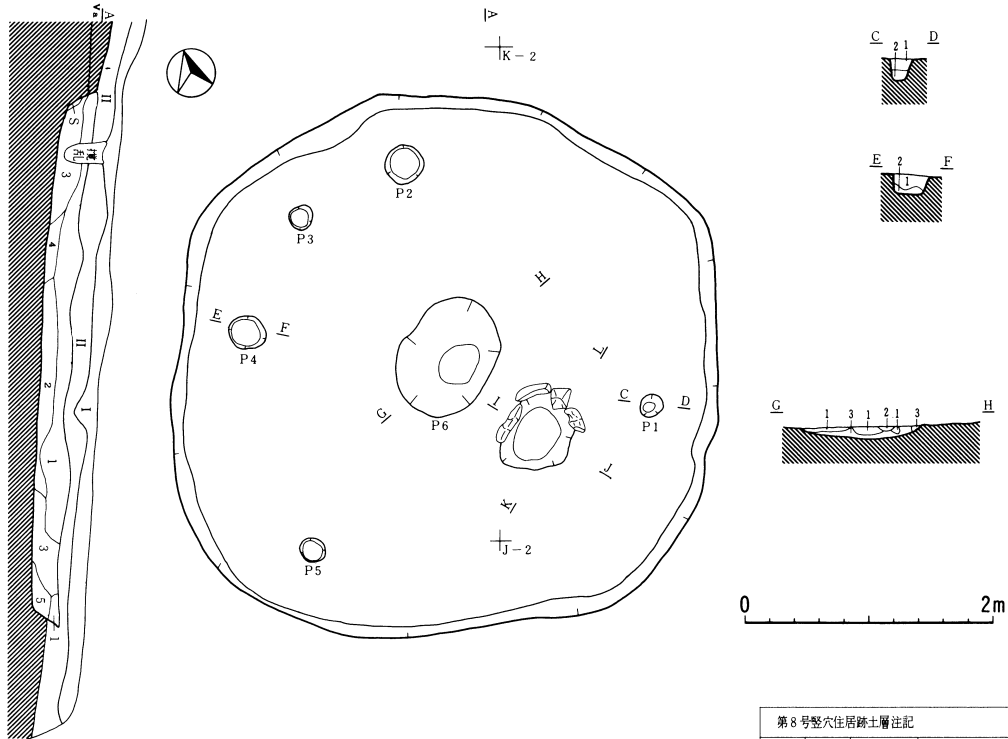
柱穴 ピットは6個検出した。柱穴と思われるものは、P1~5の5個であり、P6については、付属施設の項目で記載する。ピットは、北側に3個・南側に2個位置し、P1・2・4・5の4本を主体とした4本柱の主柱穴と思われる。

ピット計測表

No.	形態	規模(cm)	深さ(cm)	No.	形態	規模(cm)	深さ(cm)	No.	形態	規模(cm)	深さ(cm)
1	円形	19×18	19.0	2	円形	33×31	14.0	3	円形	20×20	11.0
4	"	31×28	16.0	5	"	20×19	13.0				

炉 炉は、住居跡の中央部からやや南側に位置している石組炉である。石組炉は、4個の礎を用いて口状に配置しており、規模は、長径78cm・短径59cmを測る。炉の第2・3層の下面が火熱面であり、火熱面は火熱をあまり受けておらず弱く、長期にわたり使用したとは思われない。炉は下部に長径113cm・短径90cmで、楕円形の掘り方を呈している。

付属施設 炉の北側に平面形が楕円形で、長径99cm・短径75cm・深さ9cmの浅いピットを検出した。ピットの堆積土中には焼土粒を含んでおり、炉の付属施設とも考えられるが、火熱を



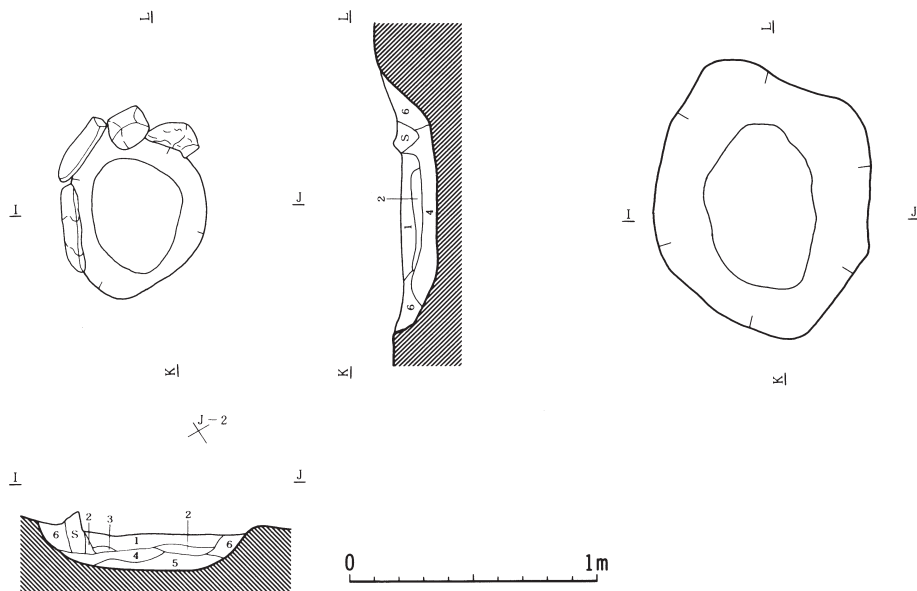
第8号竪穴住居跡土層注記			
第1層	黒褐色	7.5YR2/2	ローム粒、焼土粒、炭化物を含む。粘性なし、しまり有り。
第2層	暗褐色	7.5YR3/4	炭化物、焼土粒を多量、ローム粒を少量含む。粘性なし、しまり有り。
第3層	褐色	7.5YR4/4	焼土粒を多量、炭化物を少量含む。粘性なし、しまり有り。
第4層	暗褐色	7.5YR3/3	炭化物、焼土粒を多量に含む。黄褐色土混入。粘性なし、しまり有り。
第5層	褐色	7.5YR4/3	炭化物、ローム粒少量含む。黄褐色土混入。粘性なし、しまり有り。

第8号竪穴住居跡ビット1土層注記			
第1層	褐色	10YR4/4	ローム粒、炭化物、焼土粒を少量含む。粘性、しまりなし。
第2層	にふい 黄褐色	10YR5/4	炭化物、ローム粒を若干含む。粘性、しまりなし。

第8号竪穴住居跡ビット4土層注記			
第1層	黄褐色	10YR5/6	炭化物、ローム粒、焼土粒を若干含む。粘性なし、しまり有り。
第2層	明黄褐色	10YR6/8	炭化物を若干含む。粘性なし、しまり有り。

第8号竪穴住居跡ビット6			
第1層	明赤褐色	5YP5/8	炭化物、焼土粒を少量含む。粘性なし、しまり有り。
第2層	明黄褐色	7.5YR5/6	炭化物、焼土粒を多量に含む。粘性なし、しまり有り。
第3層	黄褐色	10YR5/8	炭化物、焼土粒を若干含む。粘性なし、しまり有り。

第36図 第8号竪穴住居跡(1)

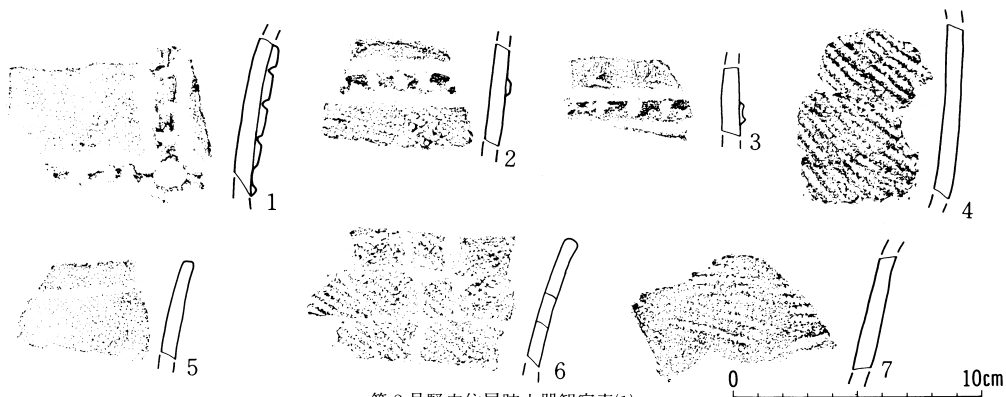


第1層	褐色	7.5YR4/4	炭化物、焼土粒、ローム粒を多量に含む。粘性なし、しまり有り。
第2層	明褐色	7.5YR5/6	炭化物、焼土粒、ローム粒を若干含む。粘性なし、しまり有り。
第3層	明赤褐色	5 YR5/8	炭化物、焼土粒を若干含む。粘性なし、しまり有り。
第4層	橙色	7.5YR6/8	焼土粒を少量含む、褐色土混入。粘性なし、しまり有り。
第5層	明黄褐色	10YR6/8	炭化物を若干含む、褐色土混入。粘性、しまりなし。
第6層	褐色	10YR4/4	ローム粒、炭化物を多量、焼土粒を若干含む。粘性、しまりなし。

第37図 第8号竪穴住居跡(2)

受けておらず、炉の付属施設とは断定できなかった。

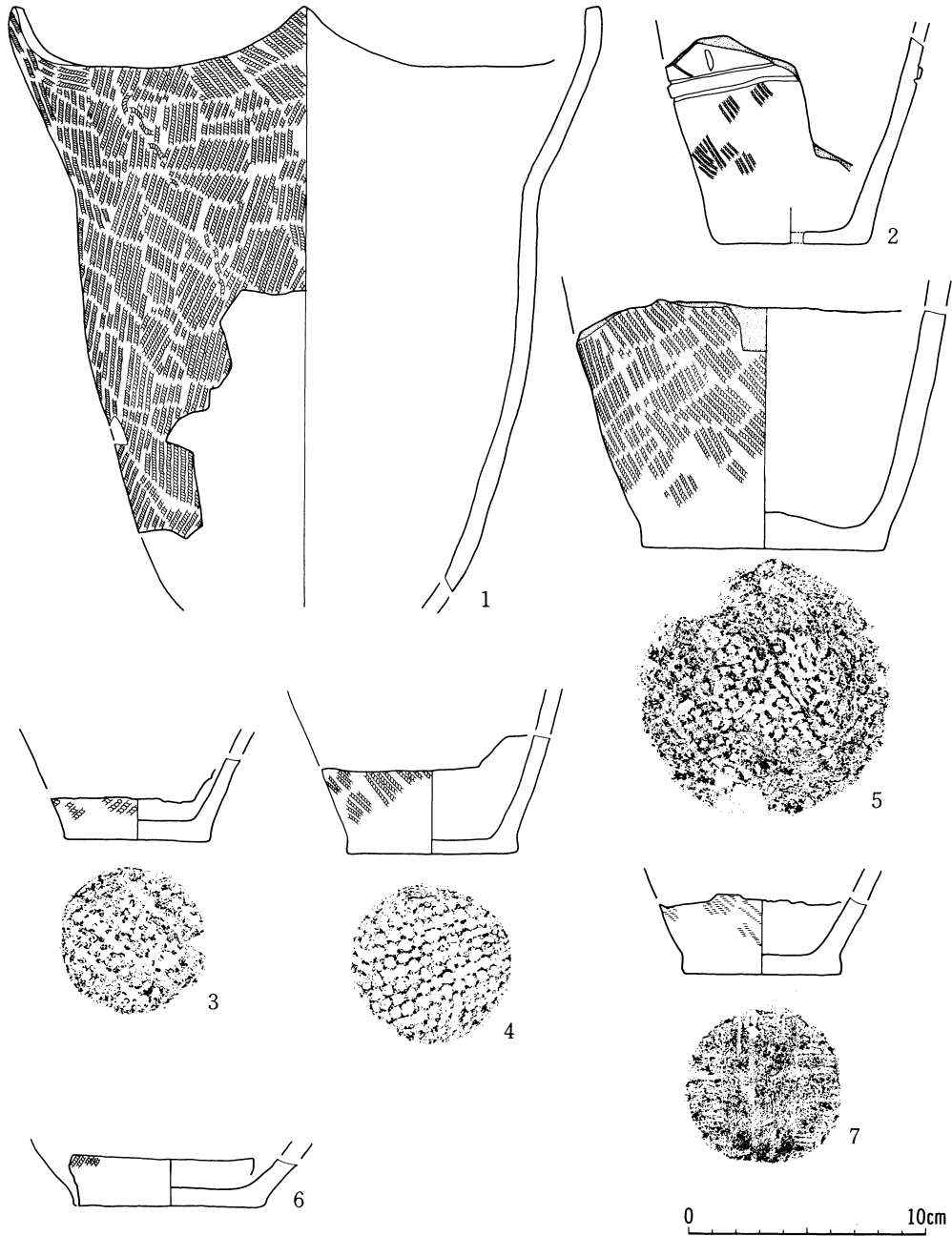
出土遺物 (第38図~43図) 本住居跡の出土遺物は、住居跡の全面に散布した状態で出土し、堆積土の第1・2層中からの出土が多く、床面・床直からの出土は少ない。土器は、底面に網代痕(3・5・7)を有する土器が多い。また、第群土器8・11もみられるが、第群土器



第8号竪穴住居跡土器観察表(1)

番号	地区・層位	部位	外面	施文	文様	分類
1	8 H・床直	口縁部	横・縦位粘土紐	原体末端圧痕	スス状炭附着	IV群1類
2	8 H・床直	口頸部	横位粘土紐	原体末端圧痕	縄文(RL) スス状炭附着	IV群1類
3	8 H・床直	口頸部	横位粘土紐	原体末端圧痕	スス状炭附着	IV群1類
4	8 H・床直	胴部	縄文(RL)			IV群4類
5	8 H・床直	口頸部	撚糸圧痕	スス状炭附着		IV群4類
6	8 H・床直	口縁部	縄文(RL)	スス状炭附着		IV群4類
7	8 H・床直	胴部	縄文(RL)	スス状炭附着		IV群4類

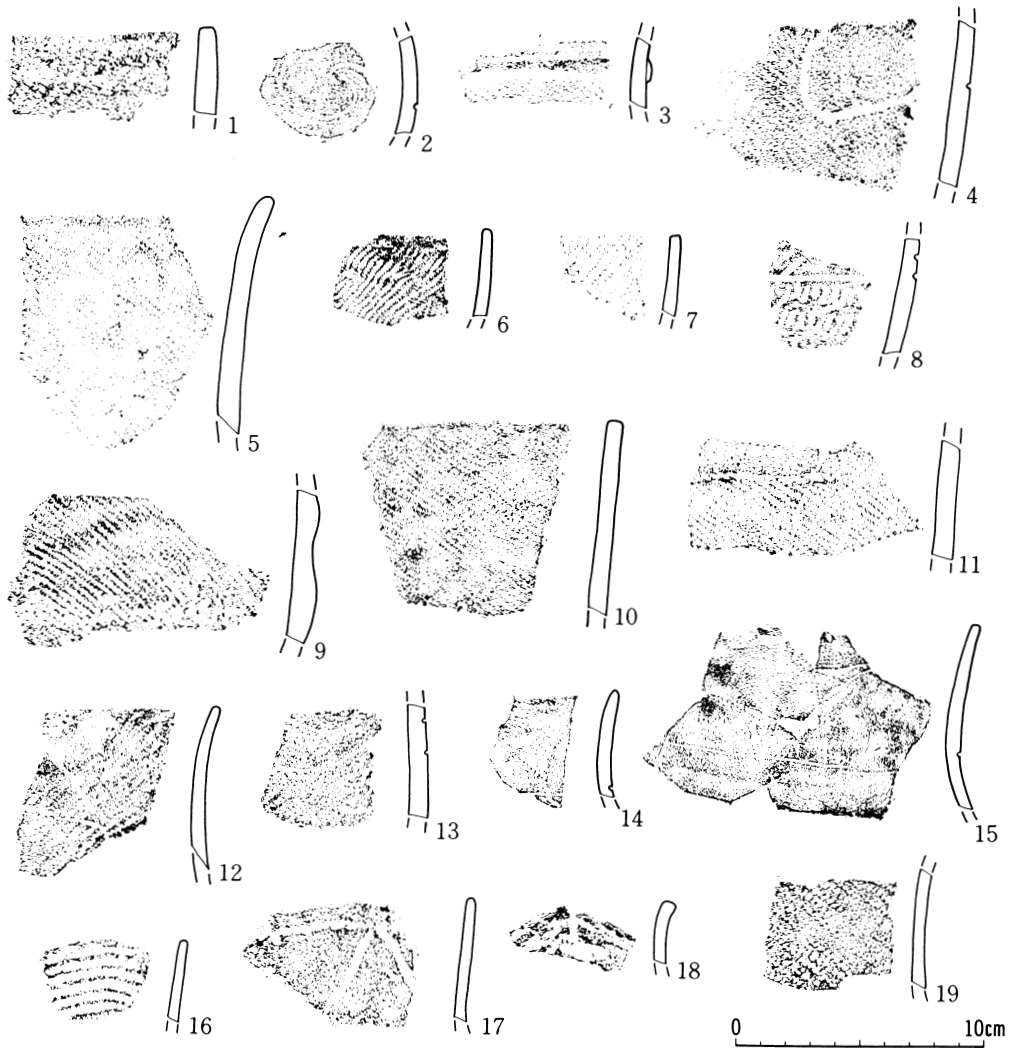
第38図 第8号竪穴住居跡出土遺物(1)



第 8 号竖穴住居跡土器観察表(2)

番号	地区・層位	部位	外面施文文様	分類
1	8 H・覆土	深鉢形	4 個の波状口縁 縄文 (LR) 綾絡文 スス状炭附着	IV 群 4 類
2	8 H・覆土	深鉢形	縄文 (RL) 縦・横位沈線	IV 群 1 類
3	8 H・覆土	深鉢形	縄文 (LR) 網代痕 スス状炭附着	IV 群 4 類
4	8 H・覆土	深鉢形	縄文 (RL) 網代痕 スス状炭附着	IV 群 4 類
5	8 H・覆土	深鉢形	縄文 (RL) 網代痕 スス状炭附着	IV 群 4 類
6	8 H・覆土	深鉢形	縄文 (LR) スス状炭附着	IV 群 4 類
7	8 H・覆土	深鉢形	縄文 (L) 底面に擦痕 スス状炭附着	IV 群 4 類

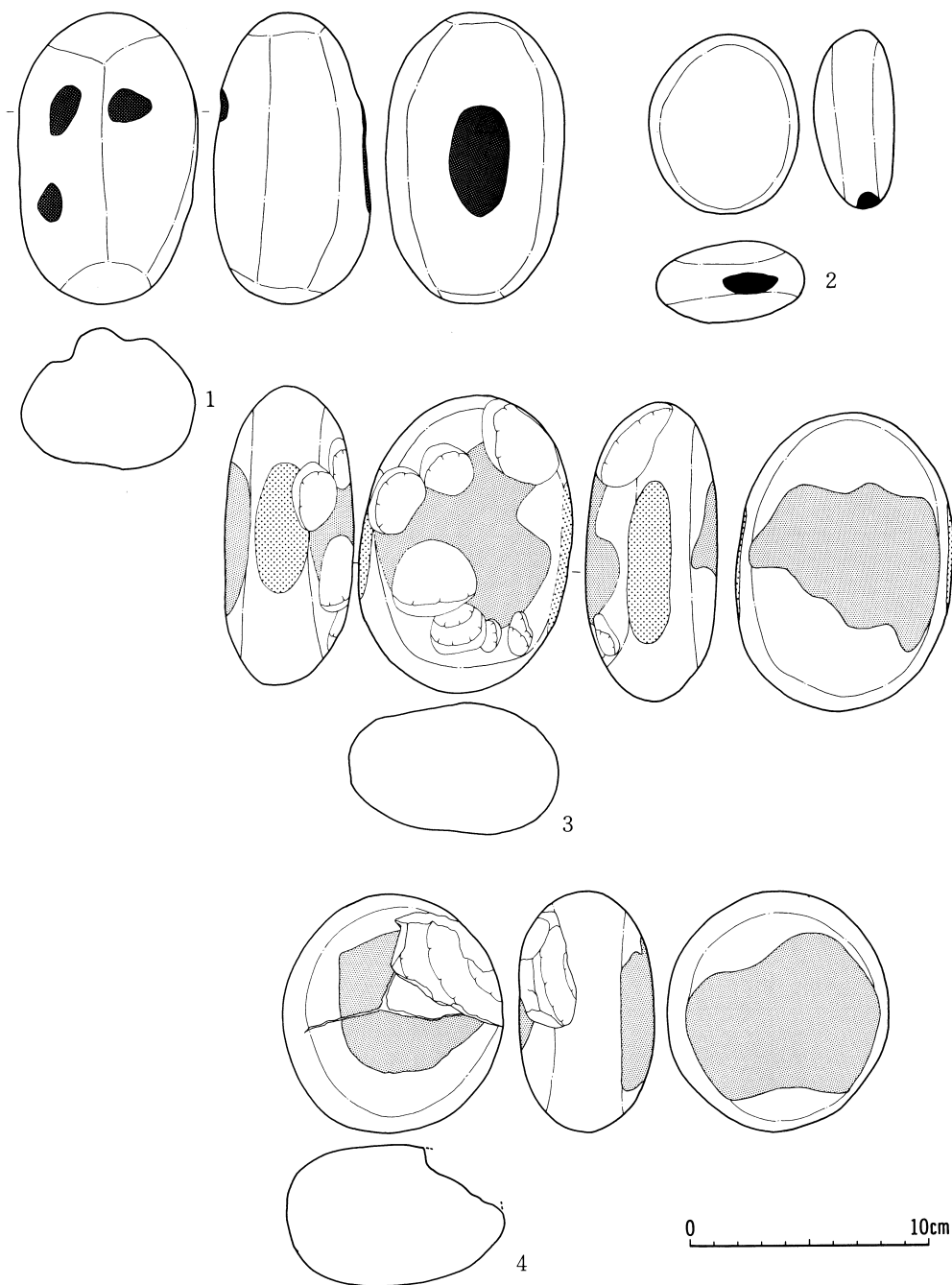
第39図 第 8 号竖穴住居跡出土遺物(2)



第 8 号竖穴住居跡土器観察表(3)

番号	地区・層位	部位	外面施文文様	分類
1	8 H・1 層	口縁部	縄文 (LR)	IV群 4 類
2	8 H・1 層	胴部	渦巻沈線 赤色顔料塗布	IV群 3 類
3	8 H・2 層	胴部	横位粘土紐 擦糸圧痕 縄文 (LR)	IV群 1 類
4	8 H・2 層	胴部	縄文 (RL) 曲線沈線 スス状炭附着	IV群 1 類
5	8 H・3 層	口縁部	縄文 (RL) スス状炭附着	IV群 4 類
6	8 H・3 層	口縁部	縄文 (LR) スス状炭附着	IV群 4 類
7	8 H・覆土	口縁部	縄文 (LR) スス状炭附着	IV群 4 類
8	8 H・覆土	口頸部	ループ文 連続押し引き竹管文	II群 1 類
9	8 H・4 層	胴部	縄文 (RL) スス状炭附着	IV群 4 類
10	8 H・4 層	口縁部	縄文 (RL) スス状炭附着	IV群 4 類
11	8 H・覆土	口頸部	縄文 (RL) 擦糸圧痕 スス状炭附着	IV群 4 類
12	8 H・覆土	口縁部	縄文 (LR) スス状炭附着	IV群 4 類
13	8 H・覆土	胴部	縄文 (LR) 磨消縄文 スス状炭附着	IV群 4 類
14	8 H・覆土	口縁部	無文	IV群 4 類
15	8 H・覆土	口縁部	横位沈線	IV群 1 類
16	8 H・覆土	口縁部	横位連続押し引き竹管文	II群 1 類
17	8 H・覆土	口縁部	横位山形状文 擦糸圧痕 スス状炭附着	IV群 1 類
18	8 H・覆土	口縁部	波状口縁 擦糸圧痕 スス状炭附着	IV群 1 類
19	8 H・床直	胴部	縄文 (LRL) スス状炭附着	IV群 4 類

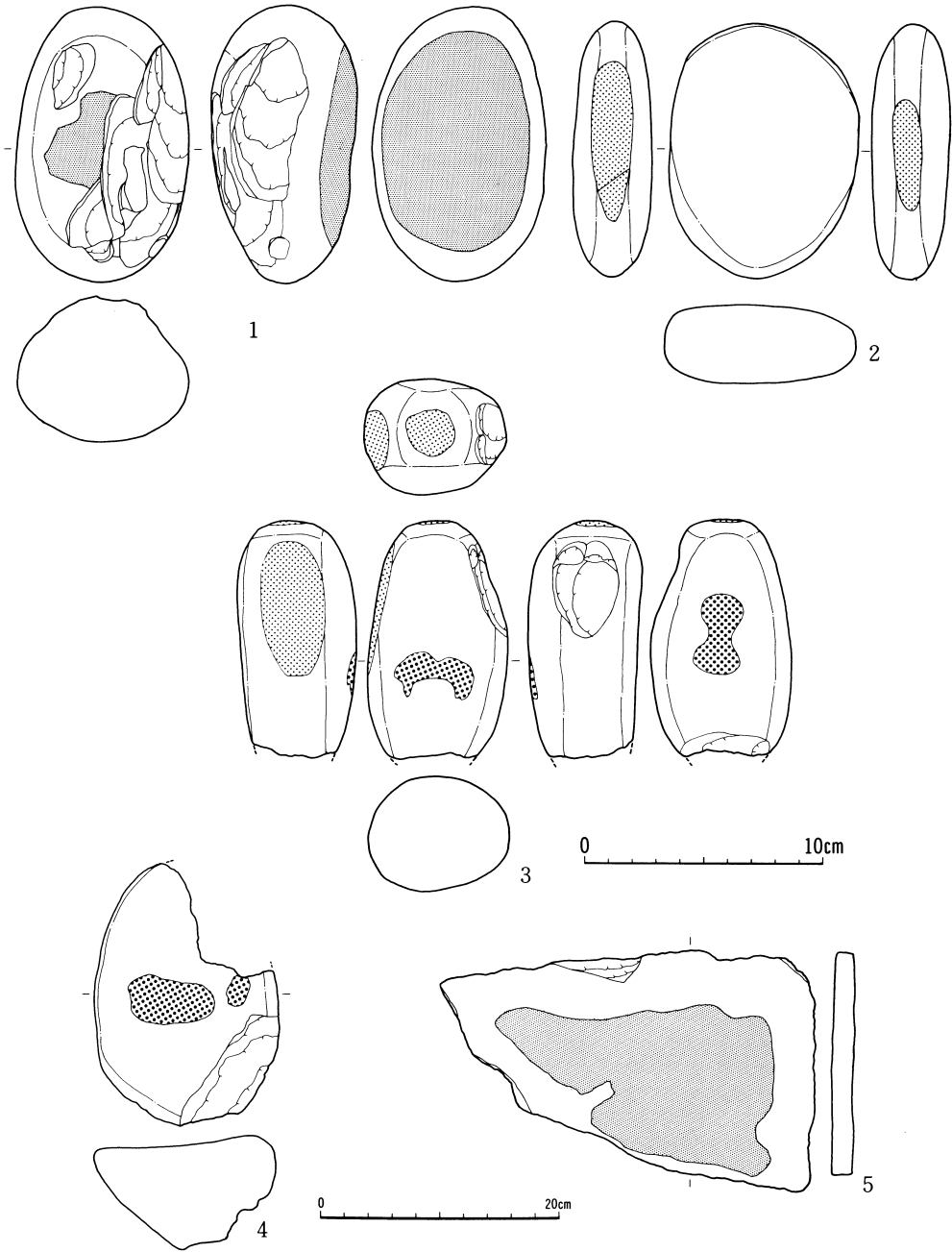
第40図 第 8 号竖穴住居跡出土遺物(3)



第 8 号竖穴住居跡石器観察表(1)

図 版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	備 考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)			
第41図-1	8 H	床面	121	71	68	695	安	J	
第41図-2	8 H	4	75	63	32	216	チャ	J	
第41図-3	8 H	覆土	124	88	54	870	安	J	
第41図-4	8 H	床直	99	91	56	674	安	J	

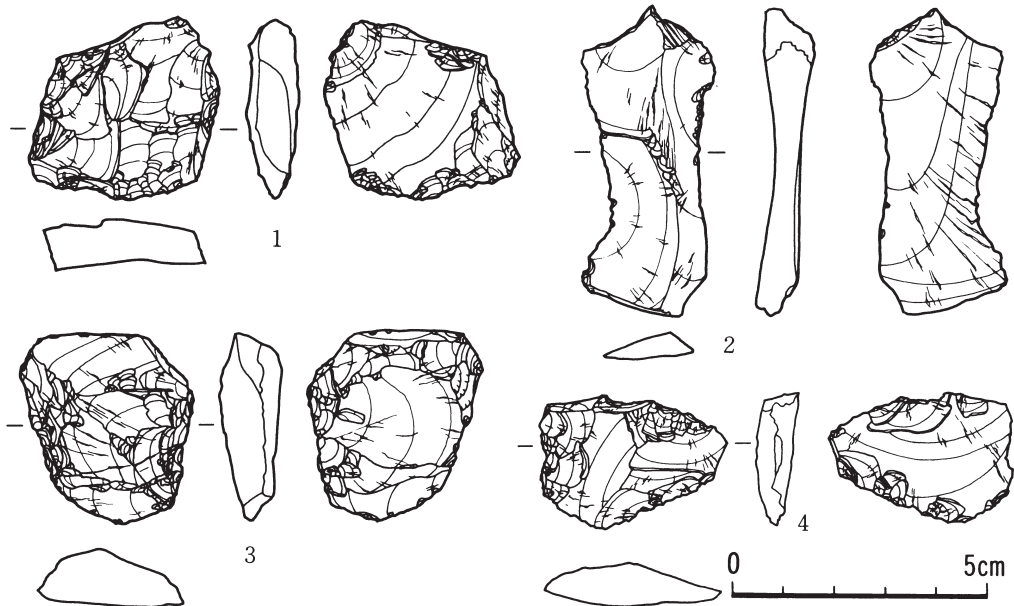
第41図 第 8 号竖穴住居跡出土遺物(4)



第8号竖穴住居跡石器観察表(2)

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)			
第42図-1	8 H	床直	115	71	60	670	安	J	スス状炭付着。
第42図-2	8 H	3	105	79	31	457	閃	J	
第42図-3	8 H	2	(98)	58	47	(421)	安	J	欠損や、あり
第42図-4	8 H	2	(217)	150	96	(3100)	安	N	欠損
第42図-5	8 H	3	(314)	(197)	21	(1900)	安	N	欠損

第42図 第8号竖穴住居跡出土遺物(5)



第8号竪穴住居跡石器観察表(3)

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)			
第43図-1	8 H	覆土	35	33	8	13.3	珪	F	
第43図-2	8 H	覆土	60	26	8	10.0	珪	F	
第43図-3	8 H	2	38	31	12	14.5	珪	F	
第43図-4	8 H	2	27	36	8	7.7	珪	F	

第43図 第8号竪穴住居跡出土遺物(6)

が主体を占め、縄文のみ施文の土器が多くみられる。石器は、不定形石器、敲・磨器類、石皿、砥石類が出土し、敲・磨器類が多く出土した。(成田)

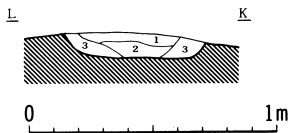
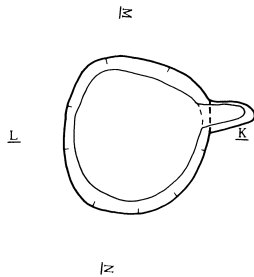
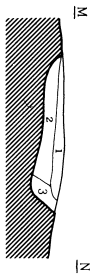
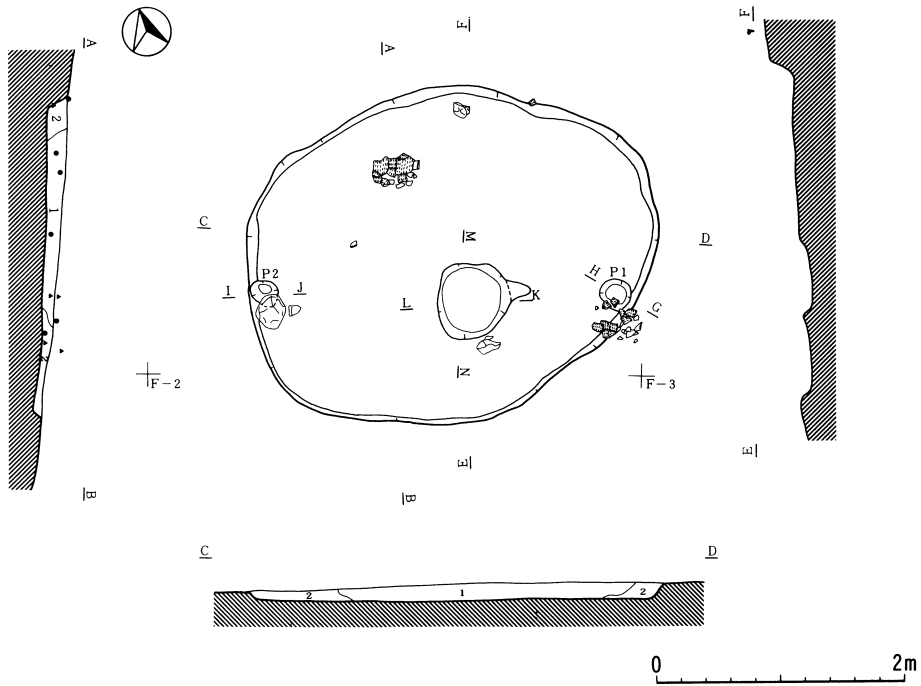
第9号竪穴住居跡(第44・45図)

位置と確認 本住居跡は、調査区北側の平坦面で、E・F-2グリッドに位置している。第a層を精査中に、落ち込みを確認し、精査したところ竪穴住居跡を確認した。

平面形・規模 平面形は、東西に最大幅を持ち全体的に丸みを有する楕円形である。規模は、長径が342cm・短径が268cmで床面積6.59㎡を測る。住居跡の規模としては、小型な竪穴住居跡である。

壁・床 壁は、すべて上端から床面にかけて、なだらかに傾斜しており、北側部分が堅緻な構築であるが、他の壁は軟弱な作りである。壁高は、東壁12cm・西壁6cm・南壁8cm・北壁16cmを測る。床面は、全体的にほぼ平坦であり、炉から北側にかけて堅いが、南側が軟らかくはっきりとしていない。

柱穴 ピットは2個検出した。ピットの配置は、東壁寄りと西壁寄りに各々1個位置し、2本柱を主体とした柱穴と思われる。



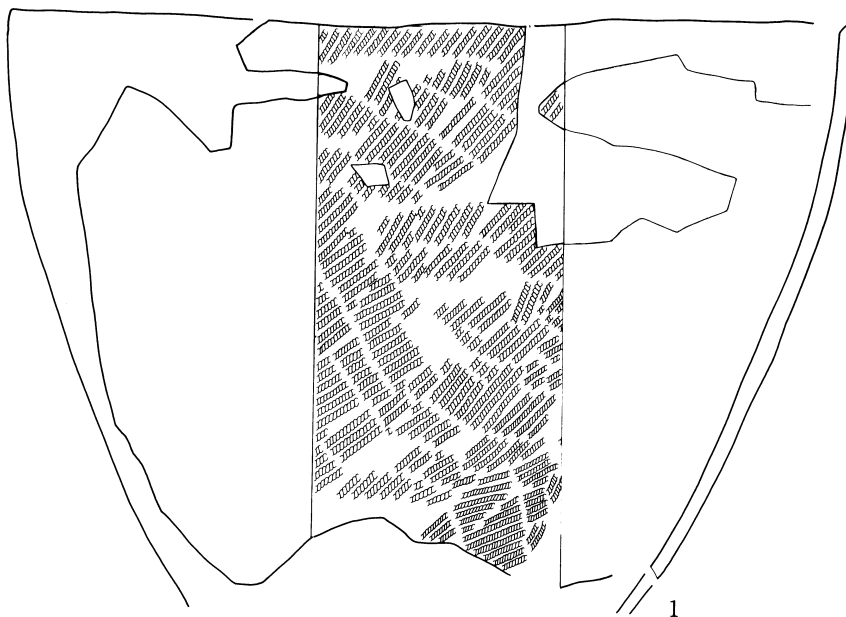
第9号竪穴住居跡土層注記			
第1層	暗褐色	10YR3/3	炭化物・ローム粒を多量に含む。黄褐色土混入。粘性なし・しまり有り。
第2層	褐色	10YR4/6	炭化物・ローム粒を少量含む。粘性・しまり有り。

第9号竪穴住居跡ビット1土層注記			
第1層	褐色	10YR4/6	炭化物・ローム粒を若干含む。粘性なし・しまり有り。
第2層	黄褐色	10YR5/6	炭化物若干含む、ロームブロック混入。粘性なし・しまり有り。

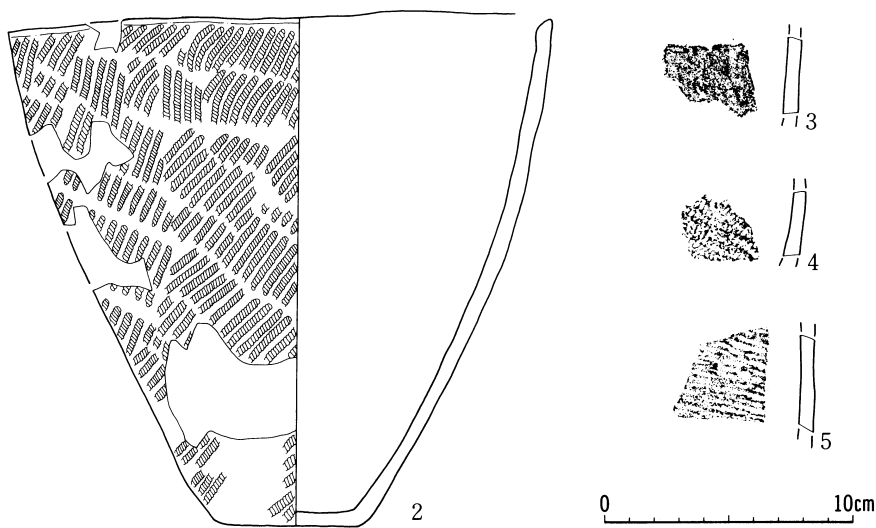
第9号竪穴住居跡ビット2土層注記			
第1層	暗褐色	10YR3/4	炭化物・ローム粒若干含む。粘性なし・しまり有り。

第9号竪穴住居跡炉土層注記			
第1層	暗褐色	10YR3/4	炭化物少量・焼土粒多量に含む。粘性なし、しまりあり。
第2層	褐色	10YR4/6	炭化物・焼土粒を少量含む。粘性なし、しまりあり。
第3層	褐色	7.5YR4/4	ロームブロック少量・炭化物・焼土粒若干含む。粘性・しまりあり。

第44図 第9号竪穴住居跡



1



2

第9号竖穴住居跡土器観察表

番号	地区・層位	部位	外面施文文様		分類
1	9 H・2層	深針形	縄文 (LR)	スス状炭附着	IV群5類
2	9 H・2層	鉢形	縄文 (LR)	スス状炭附着	IV群5類
3	9 H・2層	胴部	無文		IV群4類
4	9 H・2層	胴部	縄文 (RL)	スス状炭附着	IV群4類
5	9 H・1層	胴部	縄文 (LR)	スス状炭附着	IV群4類

第45図 第9号竖穴住居跡出土遺物

ピット計測表

No.	形態	規模(cm)	深さ(cm)	No.	形態	規模(cm)	深さ(cm)	No.	形態	規模(cm)	深さ(cm)
1	円形	25×25	18.3	2	楕円形	24×22	17.6				

炉 炉は、住居跡の中央部からやや南寄りに位置している地床炉である。平面形は円形を呈し、長径63cm・短径57cmを測る。炉の第1層の下面が火熱面である。火熱面の状況は、長期にわたって火熱を受けておらず弱い。

出土遺物（第45図）本住居跡からの出土遺物は、住居跡の北壁・東壁寄りから出土し、堆積土中からの出土で床面・床直からの遺物は出土していない。1・2の土器は、横位の状態で出土した。両土器ともに器外面に縄文のみを施文した土器であり、縄文時代後期（十腰内式）に相当すると思われる。石器は出土しなかった。（成田）

第10号竪穴住居跡（第46～52図）

位置と確認 本遺構は、調査区北側のB・C - 3・4グリッドに位置する。第a層上面で確認した。

平面形・規模 調査の際に、北東側を掘り下げてしまった為に、正確な規模とプランはわからないが、残存部から推定すると、規模は長径600cm・短径590cm・床面積（29.05）㎡を測り、ほぼ円形のプランを呈する大型住居跡である。

壁・床 壁は、やわらかくもろいつくりである。壁高は、北壁30cm・南壁30cm・東壁16cm・西壁28cmを測る。北・西壁がゆるやかに立ち上がり、他の壁は、ほぼ垂直に立ち上がる。床面は、ほぼ平坦で、全体的にやわらかく、炉の周辺部分のみがかたくしまっている。

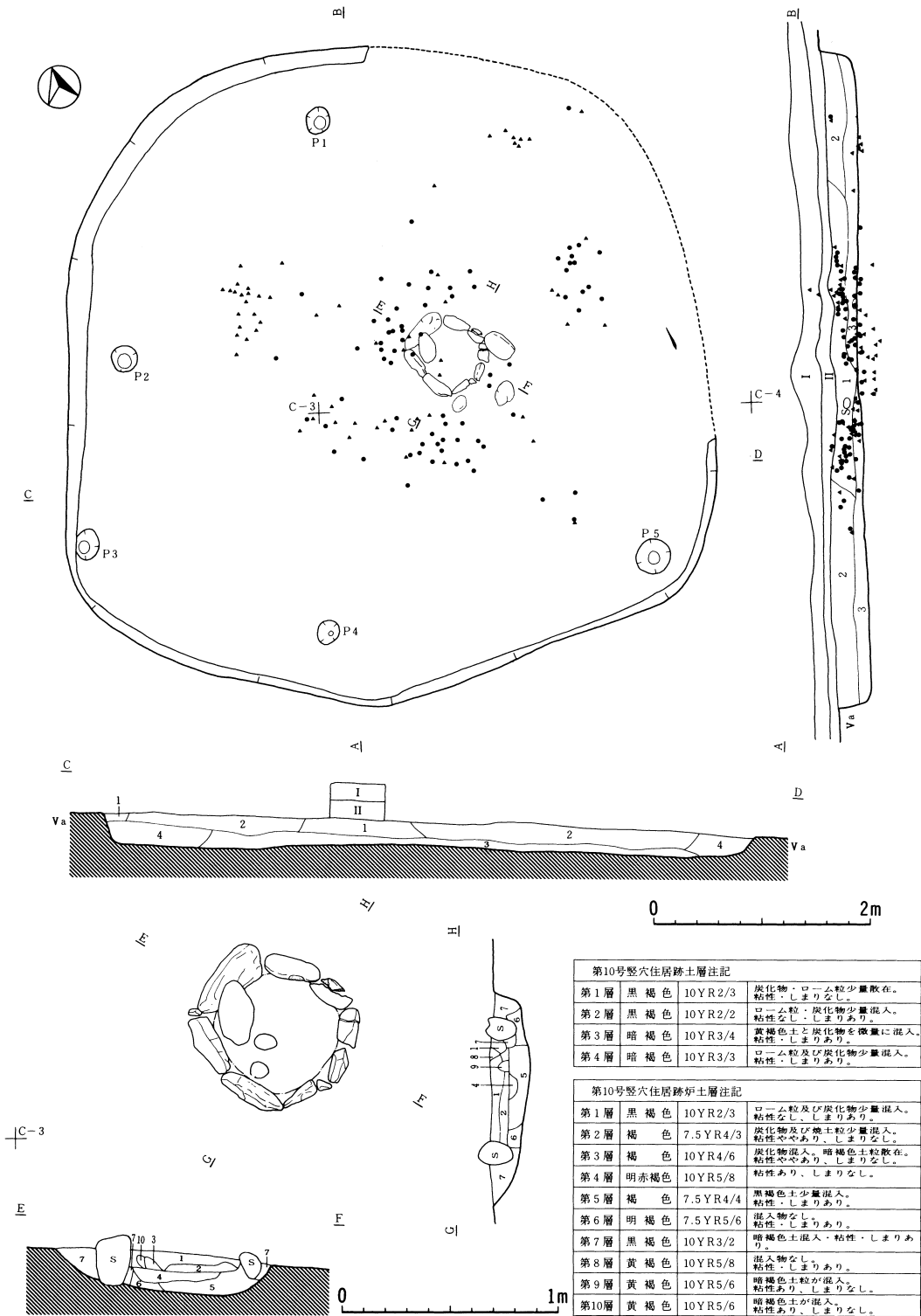
柱穴 ピットは5個検出し、柱穴と思われる。ピットの配置は、壁から30cm内外のところに位置し、東側が確認できなかったが、約2m程の間隔で配置しており、壁柱穴と思われる。

ピット計測表

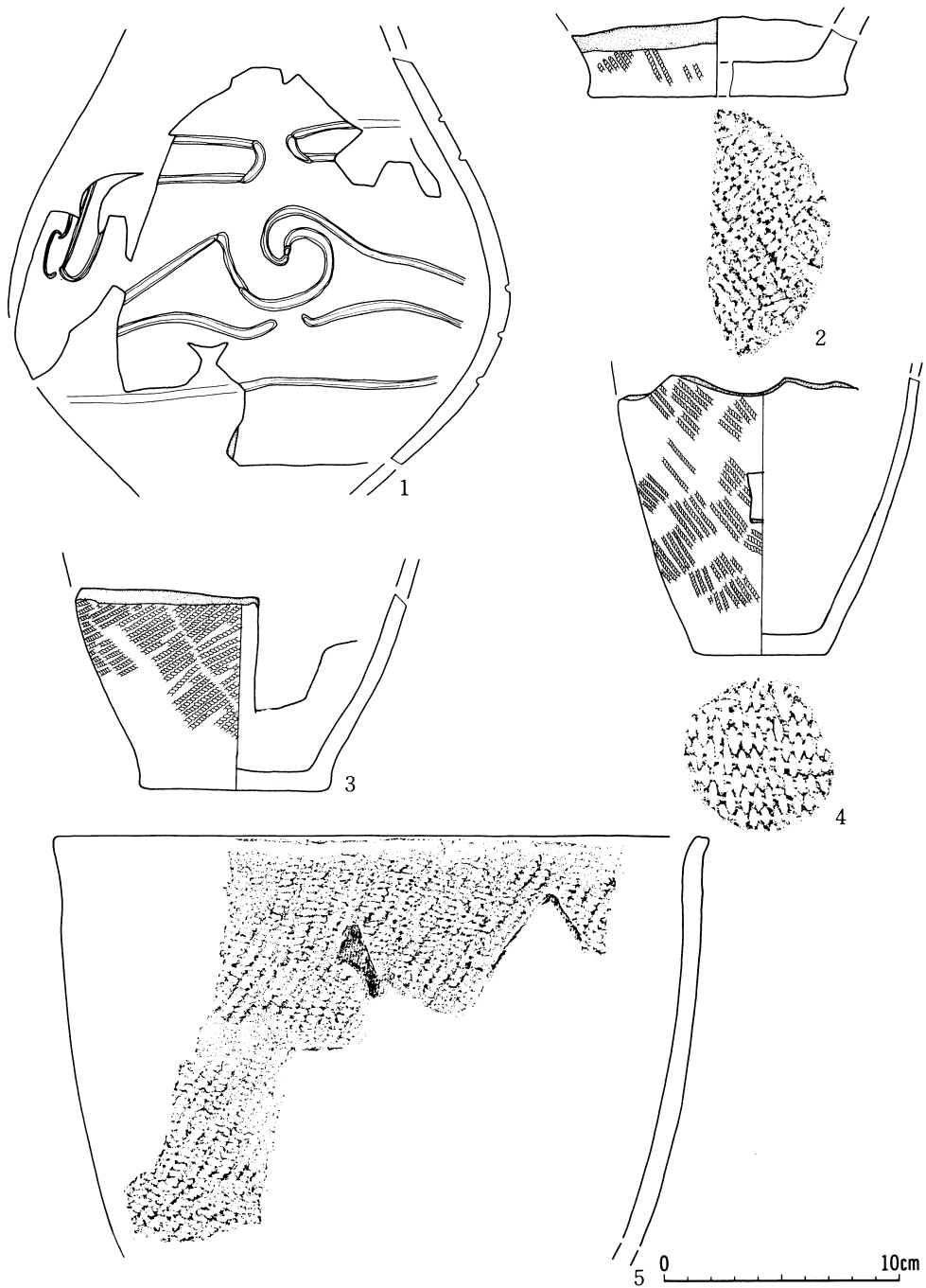
No.	形態	規模(cm)	深さ(cm)	No.	形態	規模(cm)	深さ(cm)	No.	形態	規模(cm)	深さ(cm)
1	円形	26×24	15.0	2	円形	24×24	22.0	3	楕円形	28×21	10.0
4	"	23×20	12.0	5	"	32×31	13.0				

炉 炉は、住居跡の中央部からやや東寄りに位置し、礫を用いた円形の石囲炉である。炉の規模は、長径80cm・短径75cmを測り、全体的プランは円形を呈する。石囲炉は、10個の礫で構築され、最小のもので長さ5cm・幅4cm、最大のもので長さ40cm・幅18cmを測る。

出土遺物（第47～52図）本住居跡からの出土遺物は、住居跡の炉を中心として半径1m内に多く分布し集中している。土器は、波状口縁で地文縄文に太い沈線で、渦巻状に施文する3・4の土器が主体を占める。この様な文様構成をもつ土器は、弥栄平2遺跡（青森県1984）で多く出土し、縄文時代後期十腰内式以前に位置づけられる土器である。また、1の土器も地文には縄文を施文していないが、文様構成等から同時期に併行する土器と思われる。石器は、石



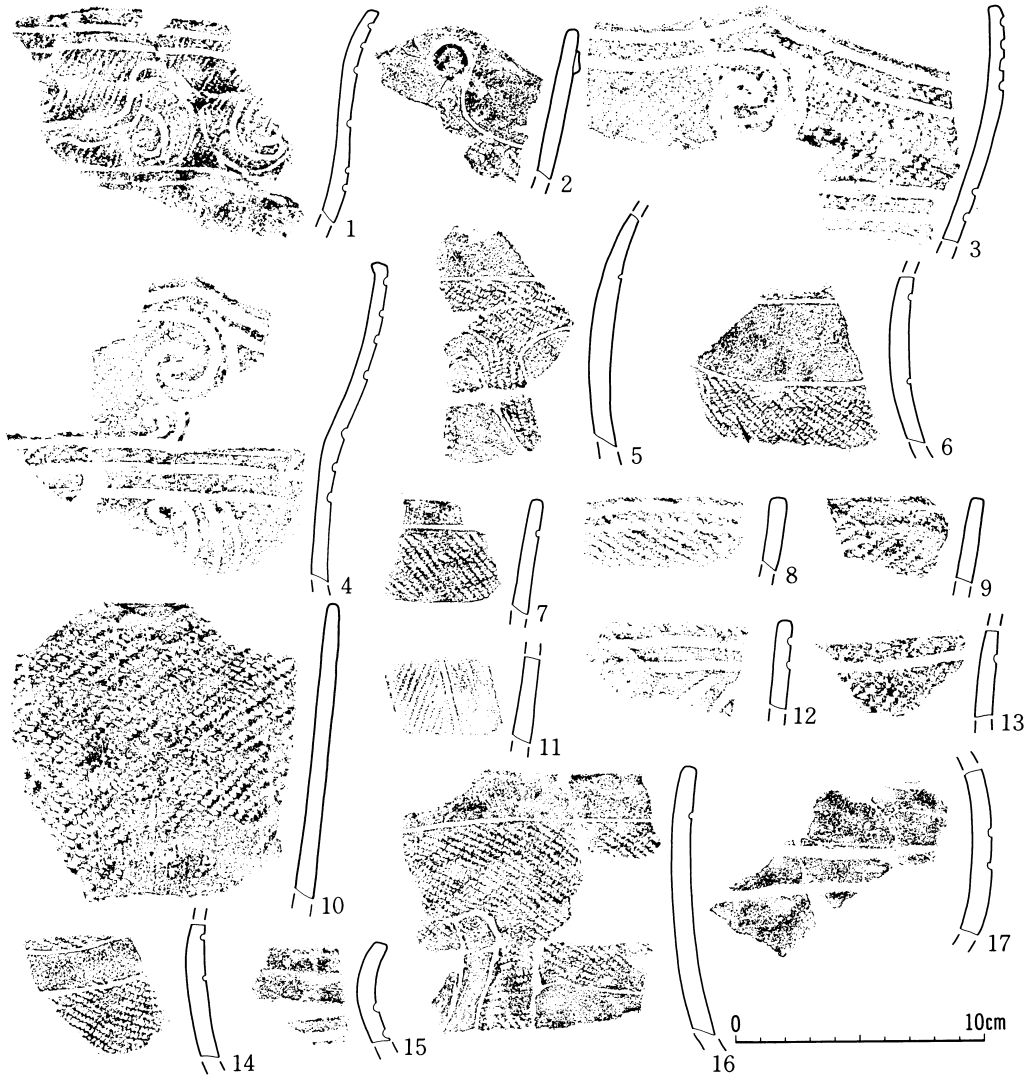
第46図 第10号竪穴住居跡



第10号竖穴住居跡土器観察表(1)

番号	地区・層位	部位	外面施文文様	分類
1	10 H・2層	壺形	渦巻沈線 赤色顔料塗布	IV群1類
2	10 H・床直	深鉢形	縄文(RL) スス状炭付着 網代痕	IV群4類
3	10 H・床直	深鉢形	縄文(LR) スス状炭付着	IV群4類
4	10 H・床直	深鉢形	縄文(RL) スス状炭付着 網代痕	IV群4類
5	10 H・1層	深鉢形	縄文(LR) スス状炭付着	IV群4類

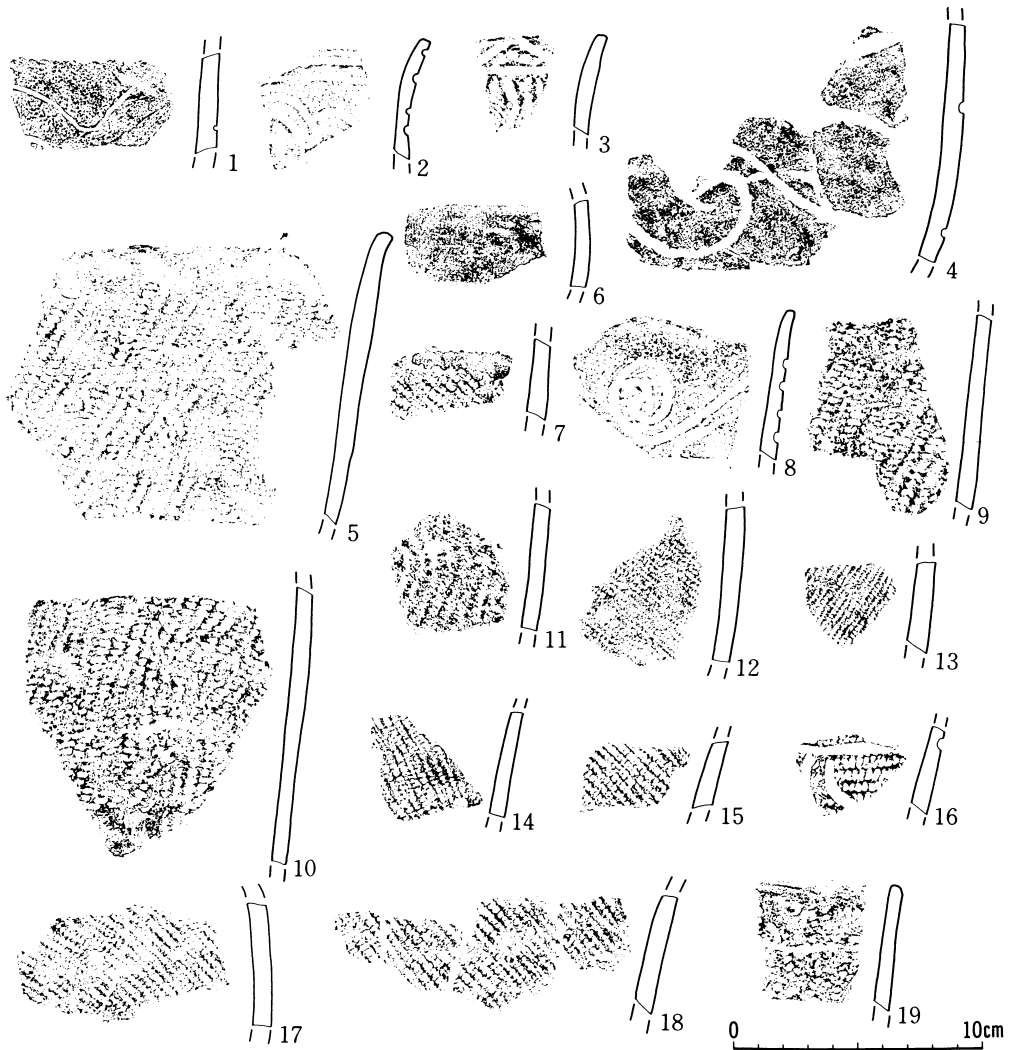
第47図 第10号竖穴住居跡出土遺物(1)



第10号竪穴住居跡土器観察表(2)

番号	地区・層位	部位	外面	施文	文様	分類
1	10 H・1 層	口縁部	渦巻文様	縄文 (LR)	スス状炭附着	IV群 2 類
2	10 H・1 層	口縁部	波状口縁	ボタン状突起	縄文 (LR) 磨消縄文	IV群 1 類
3	10 H・1 層	口縁部	波状口縁	頂端部の下部に渦巻文	縄文 (LR)	IV群 2 類
4	10 H・1 層	口縁部	波状口縁	縦位渦巻文		IV群 2 類
5	10 H・1 層	口縁部	磨消縄文	縄文 (RL)	スス状炭附着	IV群 1 類
6	10 H・1 層	胴部	磨消縄文	縄文 (RL)	スス状炭附着	IV群 1 類
7	10 H・1 層	口縁部	磨消縄文	縄文 (RL)	スス状炭附着	IV群 4 類
8	10 H・1 層	口縁部	縄文 (RL)	2条の撚糸圧痕	スス状炭附着	IV群 1 類
9	10 H・1 層	口縁部	縄文 (LR)	スス状炭附着		IV群 4 類
10	10 H・1 層	口縁部	縄文 (LR)	スス状炭附着		IV群 4 類
11	10 H・1 層	胴部	磨消縄文	縄文 (LR)	スス状炭附着	IV群 2 類
12	10 H・1 層	口縁部	横斜位沈線	縄文 (LR)		IV群 2 類
13	10 H・1 層	口頸部	横位沈線	縄文 (LR)	スス状炭附着	IV群 2 類
14	10 H・1 層	胴部	磨消縄文	縄文 (RL)	スス状炭附着	IV群 1 類
15	10 H・2 層	口縁部	横位沈線			IV群 2 類
16	10 H・1 層	口縁部	縦位曲線文、縄文 (RL)	磨消縄文	スス状炭附着	IV群 1 類
17	10 H・1 層	胴部	横位沈線	赤色顔料塗布		IV群 1 類

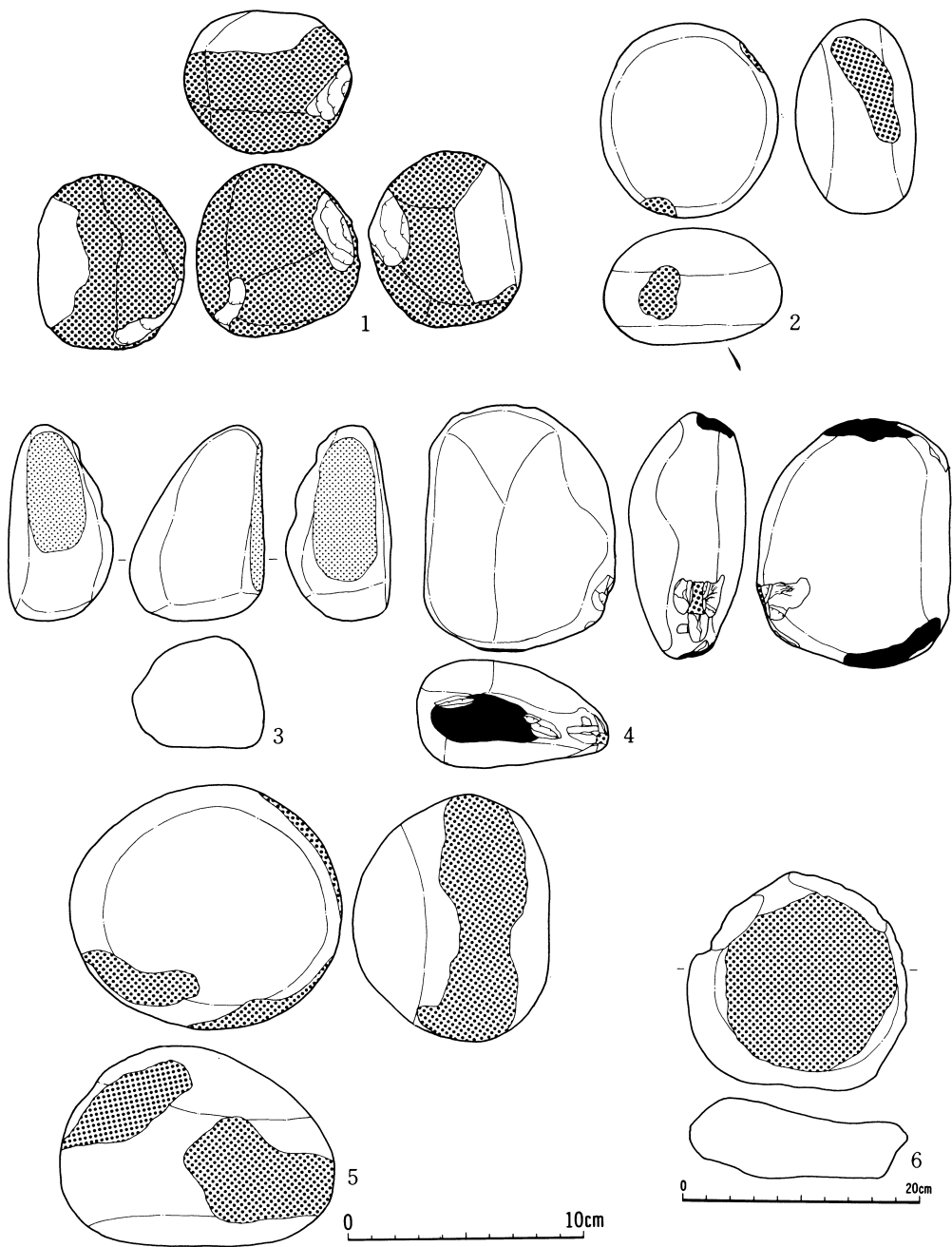
第48図 第10号竪穴住居跡出土遺物(2)



第10号竖穴住居跡土器観察表(3)

番号	地区・層位	部位	外面施文文様	分類
1	10 H・1層	胴部	逆山形状文 スス状炭附着	IV群1類
2	10 H・覆土	口縁部	縄文(LR) 曲線状文(沈線) スス状炭附着	IV群2類
3	10 H・覆土	口縁部	山形状連続竹管文 縄文(LR)	IV群1類
4	10 H・覆土	胴部	横位渦卷文様 赤色顔料塗布	IV群1類
5	10 H・床直	口縁部	縄文(LR) スス状炭附着	IV群4類
6	10 H・床直	胴部	無文 赤色顔料塗布	IV群4類
7	10 H・床直	胴部	縄文(RL)	IV群4類
8	10 H・床直	口縁部	波状口縁 頂端部の下部に渦卷文 縄文(LR)	IV群2類
9	10 H・床直	胴部	縄文(LRL) スス状炭附着	IV群4類
10	10 H・床直	底辺部	縄文(LRL) スス状炭附着	IV群4類
11	10 H・覆土	胴部	縄文(LR) スス状炭附着	IV群4類
12	10 H・床直	胴部	縄文(RL) スス状炭附着	IV群4類
13	10 H・床直	胴部	縄文(LR) スス状炭附着	IV群4類
14	10 H・床直	胴部	縄文(RL) スス状炭附着	IV群4類
15	10 H・床直	胴部	縄文(RL) スス状炭附着	IV群4類
16	10 H・床直	口頸部	縄文(LR) 横位弧状沈線 スス状炭附着	IV群2類
17	10 H・床直	胴部	縄文(RL) スス状炭附着	IV群4類
18	10 H・床直	胴部	縄文(RL) スス状炭附着	IV群4類
19	10 H・床面	口縁部	縄文(RL・LR)	IV群4類

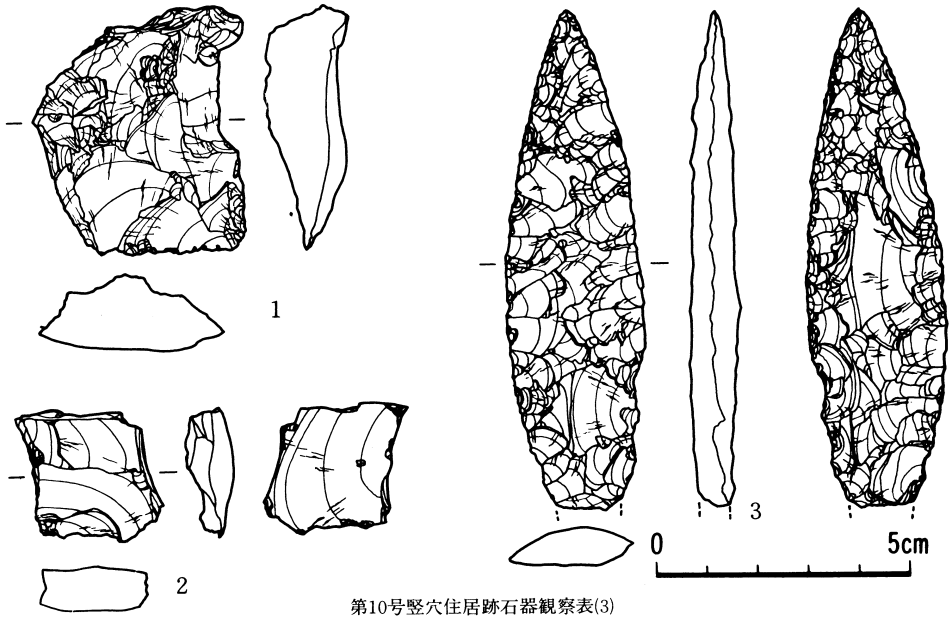
第49図 第10号竖穴住居跡出土遺物(3)



第10号竖穴住居跡石器観察表(2)

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)			
第50図-1	10H	1	(70)	74	61	(635)	安	J	欠損
第50図-2	10H	1	82	75	49	428	安	J	
第50図-3	10H	1	88	56	44	277	安	J	
第50図-4	10H	1	104	78	46	541	チャ	J	
第50図-5	10H	1	112	103	81	1200	安	J	
第50図-6	10H	1	(182)	185	65	(3000)	安	N	

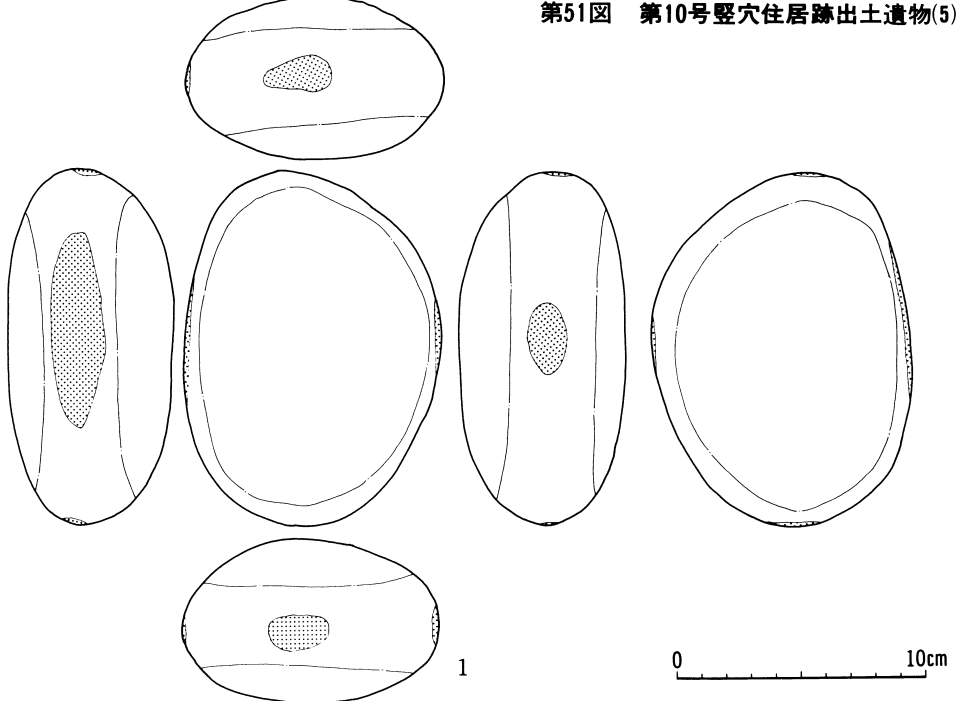
第50図 第10号竖穴住居跡出土遺物(4)



第10号竖穴住居跡石器観察表(3)

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)			
第51図-1	10H	床直	48	37	14	28.0	玉珪	F	
第51図-2	10H	1	26	25	9	7.0	珪	F	
第51図-3	10H	1	99	27	9	23.8	珪	B	

第51図 第10号竖穴住居跡出土遺物(5)



第10号竖穴住居跡石器観察表(4)

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)			
第52図-1	10H	床直	141	101	64	1300	安	J	

第52図 第10号竖穴住居跡出土遺物(6)

槍、不定形石器、敲・磨器類、石皿、砥石類が出土し、敲・磨器類の出土が多かった。

(津川・成田)

第11号竪穴住居跡(第53~55図)

位置と確認 本遺構は、調査地区北側の平坦面で、N・O-I・ウグリッドに位置し、基本層序 層を精査中に、黒色土の落ち込みを確認した。南西側約4mに第29号土壌、北側約4mに第35号土壌、南東側約8mに第17号竪穴住居跡が位置している。

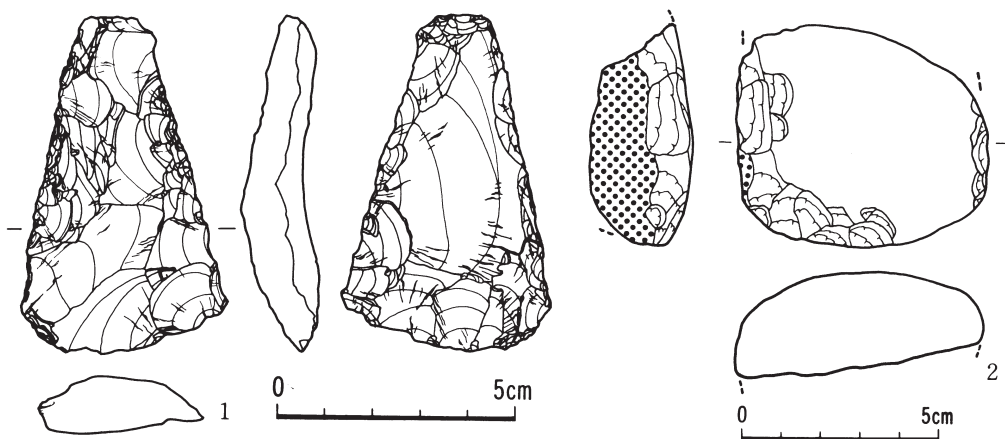
平面形・規模 平面形は、コーナー部分が丸みをもつ長方形を呈する。規模は、長径が580cm・短径360cmで床面積17.39㎡を測り、大型住居跡である。

壁・床 壁は、すべて上端から床面にかけて傾斜しており、軟弱なつりである。壁高は、東壁36cm・西壁36cm・南壁22cm・北壁14cmを測る。床面は、ほぼ平坦で中央部から南側にかけて一部貼り床がみられ、かたい面もみられるが、他は軟弱な構築である。

柱穴 ピットは6個検出しており、柱穴と思われる。柱穴の配置は、住居跡のコーナー部に各々1個位置し、東側と西側のコーナー部の中間に1個配置している。柱穴はすべて壁寄りに位置し、中央部には確認できなかった。

ピット計測表

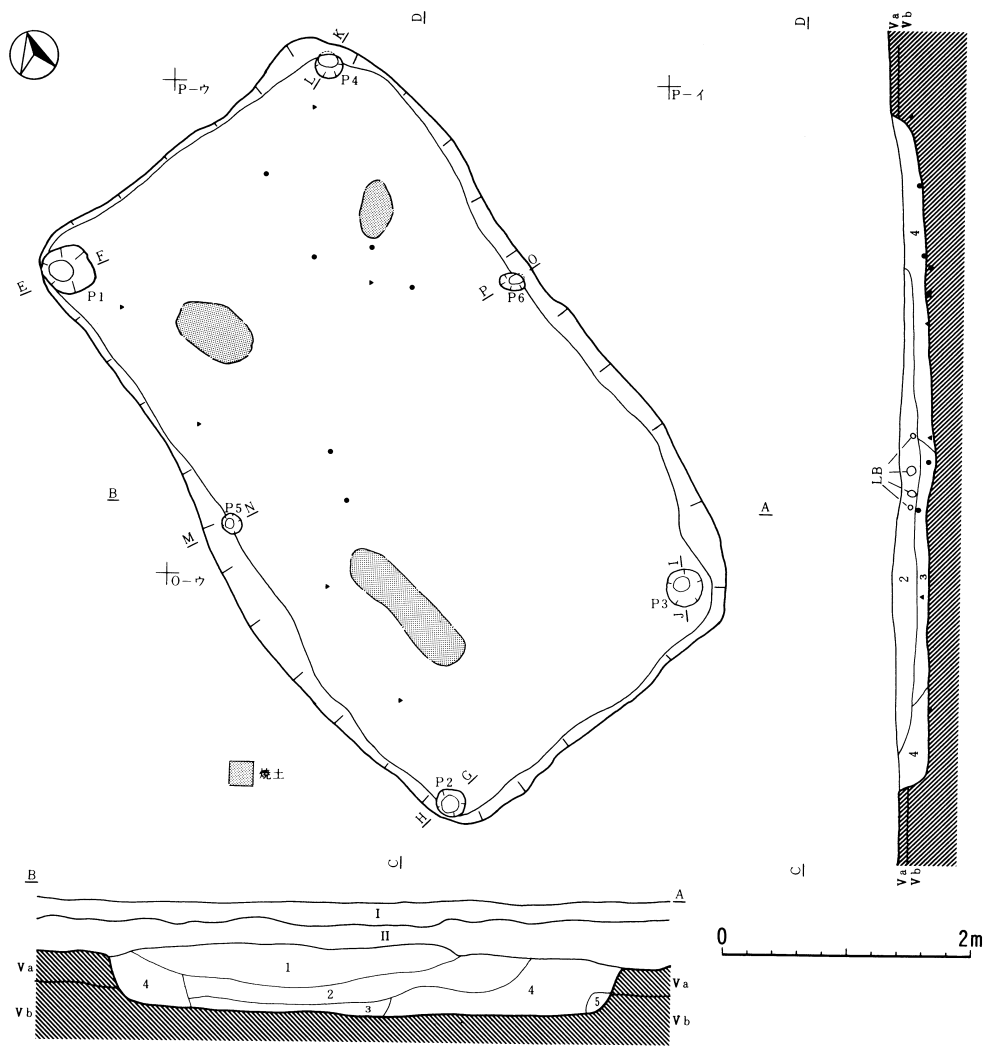
No.	形態	規模(cm)	深さ(cm)	No.	形態	規模(cm)	深さ(cm)	No.	形態	規模(cm)	深さ(cm)
1	円形	44×41	32.0	2	円形	24×23	16.0	3	円形	30×29	12.0
4	"	20×20	15.0	5	"	17×16	10.0	6	楕円形	21×14	10.0



第53図 第11号竪穴住居跡出土遺物(1)

第11号竪穴住居跡石器観察表

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)			
第53図-1	11H	4	70	43	14	33.2	頁	E	
第53図-2	11H	床面	(56)	(63)	(26)	(110)	閃	G	刃部残存



第11号竪穴住居跡ビット4 土層注記	
第1層	褐色 10YR4/6 炭化物を少量含む。粘性なし、しまりあり。
第2層	黄褐色 10YR5/6 炭化物を微量に含む。粘性なし、しまりあり。
第3層	黄褐色 10YR5/8 褐色土を少量含む。粘性ややあり、しまりなし。

第11号竪穴住居跡ビット5 土層注記	
第1層	暗褐色 10YR3/4 炭化物を少量含む。粘性なし、しまりあり。
第2層	黄褐色 10YR5/8 褐色土を微量に含む。粘性ややあり、しまりなし。

第11号住居跡ビット6 土層注記	
第1層	黄褐色 10YR5/6 炭化物を微量を含む。粘性、しまりなし。
第2層	黄褐色 10YR5/8 褐色土を少量含む。粘性ややあり、しまりなし。

第11号竪穴住居跡土層注記			
第1層	黒色	10YR2/1	ローム粒を少量含み、炭化物を3%含む。焼土粒を微量に混入する。粘性・しまりなし。
第2層	黒褐色	10YR2/3	ローム粒を少量含み、焼土粒を微量に含む。明黄褐色の砂状ブロックを含む。粘性・しまりなし。
第3層	暗褐色	10YR3/4	ローム粒を含む。炭化物を少量含む。焼土粒を少量混入する。粘性・しまりなし。
第4層	褐色土	10YR4/6	ローム粒を多量に含む。粘性ややあり。しまりなし。
第5層	明黄褐色	10YR7/6	混入物なし。粘性あり、しまりなし。
第LB層	明黄褐色	2.5YR6/8	オリブ灰色の砂状土を少量混入する。

第11号竪穴住居跡ビット1 土層注記			
第1層	褐色	10YR4/6	炭化物を少量含む。粘性なし、しまりあり。
第2層	黄褐色	10YR5/6	炭化物を微量に含む。粘性なし、しまりあり。
第3層	黄褐色	10YR5/8	炭化物を微量に含む。粘性ややあり、しまりなし。
第4層	明黄褐色	10YR6/8	褐色土を微量に含む。粘性あり、しまりなし。

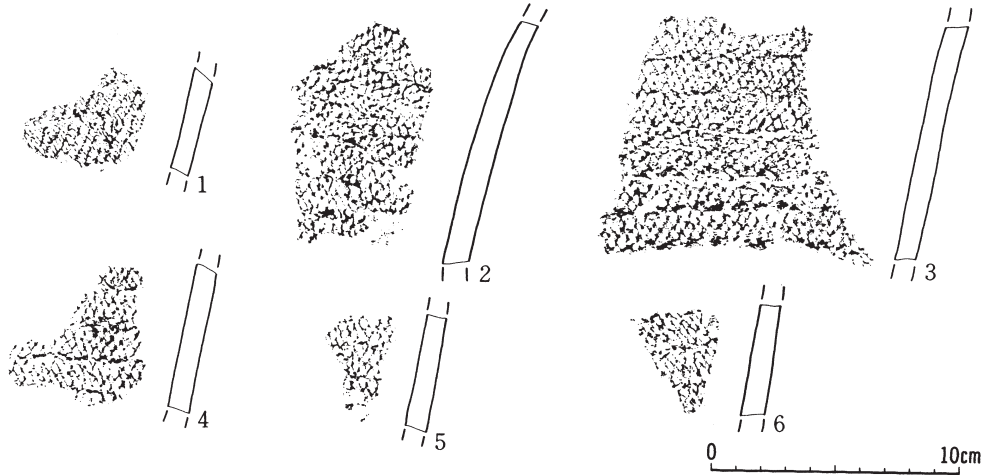
第11号竪穴住居跡ビット2 土層注記			
第1層	褐色	10YR4/6	炭化物を少量含む。粘性なし、しまりあり。
第2層	黄褐色	10YR5/8	炭化物を微量に含む。粘性ややあり、しまりなし。
第3層	明黄褐色	10YR6/8	混入物なし。粘性あり、しまりなし。

第11号竪穴住居跡ビット3 土層注記			
第1層	暗褐色	10YR3/4	炭化物を若干含む。粘性、しまりなし。
第2層	黄褐色	10YR5/6	ローム粒を若干混入する。粘性ややあり、しまりなし。
第3層	明黄褐色	10YR6/8	混入物なし。粘性あり、しまりなし。

第54図 第11号竪穴住居跡

出土遺物（第54・55図）本住居跡の出土遺物は、住居跡の北側から東側にかけて分布している。堆積土下位の第3・4層及び床面からの出土であり、遺物量は極端に少ない。

土器は、ループ文を横位方向に施文し、ループ文とループ文との間に稜がみられる土器1～5・6が多く、縄文時代前期早稲田6類の時期に併行すると思われる。また、ループ文施文の土器は同一個体の土器の可能性が高い。石器は、石筥、磨製石斧が出土した。（奈良・成田）



第11号竪穴住居跡土器観察表(1)

番号	地区・層位	部位	外面	施文	文様	分類
1	11 H・3層	胴部	ループ文（LR）	スス状炭附着		II群2類
2	11 H・4層	胴部	ループ文（LR）	スス状炭附着		II群2類
3	11 H・床面	胴部	ループ文（LR）	スス状炭附着		II群2類
4	11 H・床面	胴部	ループ文（LR）	スス状炭附着		II群2類
5	11 H・床面	胴部	縄文（LR）	スス状炭附着		II群2類
6	11 H・床面	胴部	ループ文（LR）	スス状炭附着		II群2類

第55図 第11号竪穴住居跡出土遺物(2)

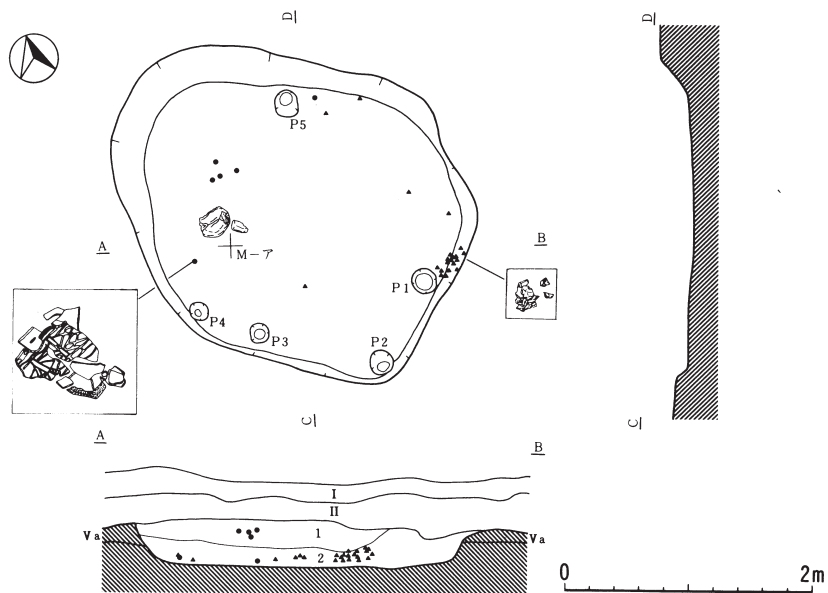
第12号竪穴住居跡（第56～59図）

位置と稚認 本住居跡は、調査区の北側台地平坦面から南側に傾斜する斜面上のL・M・ア・イグリッドに位置する。第a層中を精査中に、黒褐色土の円形の落ち込みを確認し、精査したところ竪穴住居跡を確認した。

平面形・規模 平面形は、西側が張りだす不整楕円形を呈する。規模は、長径310cm・短径244cmで床面積4.72m²を測る。住居跡の規模としては小型な住居跡である。

壁・床 壁は、全体的にやや緩やかに立ち上がっている。壁高は、東壁15cm・西壁11cm・南壁5cm・北壁24cmを測り、壁の構築は軟弱な作りである。床は、南に向って低く傾斜しており、全体的に堅緻な構築である。

柱穴 ピットは5個検出した。すべて柱穴と思われるが、いずれのピットからも柱痕は検出できなかった。ピットの配置は、すべて住居跡の壁寄りに位置し、P1～4までは南側に



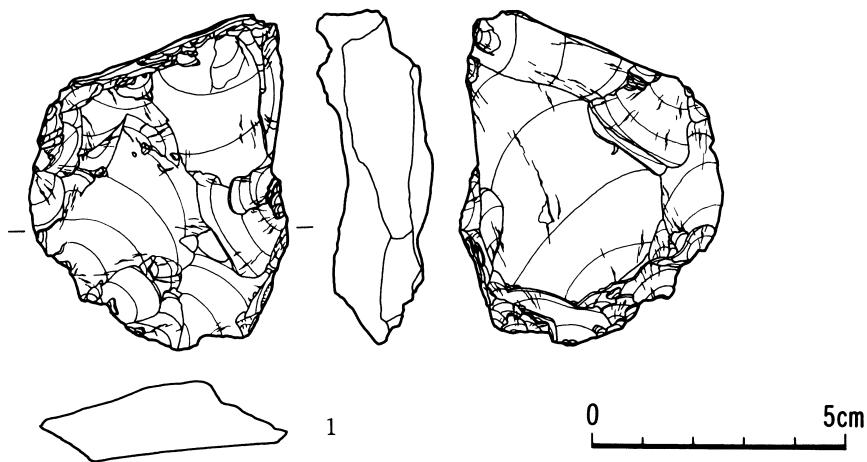
第12号竪穴住居跡土層注記			
第1層	黒褐色	10YR2/2	ローム粒をやや多量、炭化物を微量に含む。粘性・しまりあり。
第2層	黒褐色	10YR2/3	ローム粒を多量、炭化物を少量に含み、黄褐色土を混入。粘性・しまりあり。

第56図 第12号竪穴住居跡

位置し、P5のみ1個北側に位置する。

ピット計測表

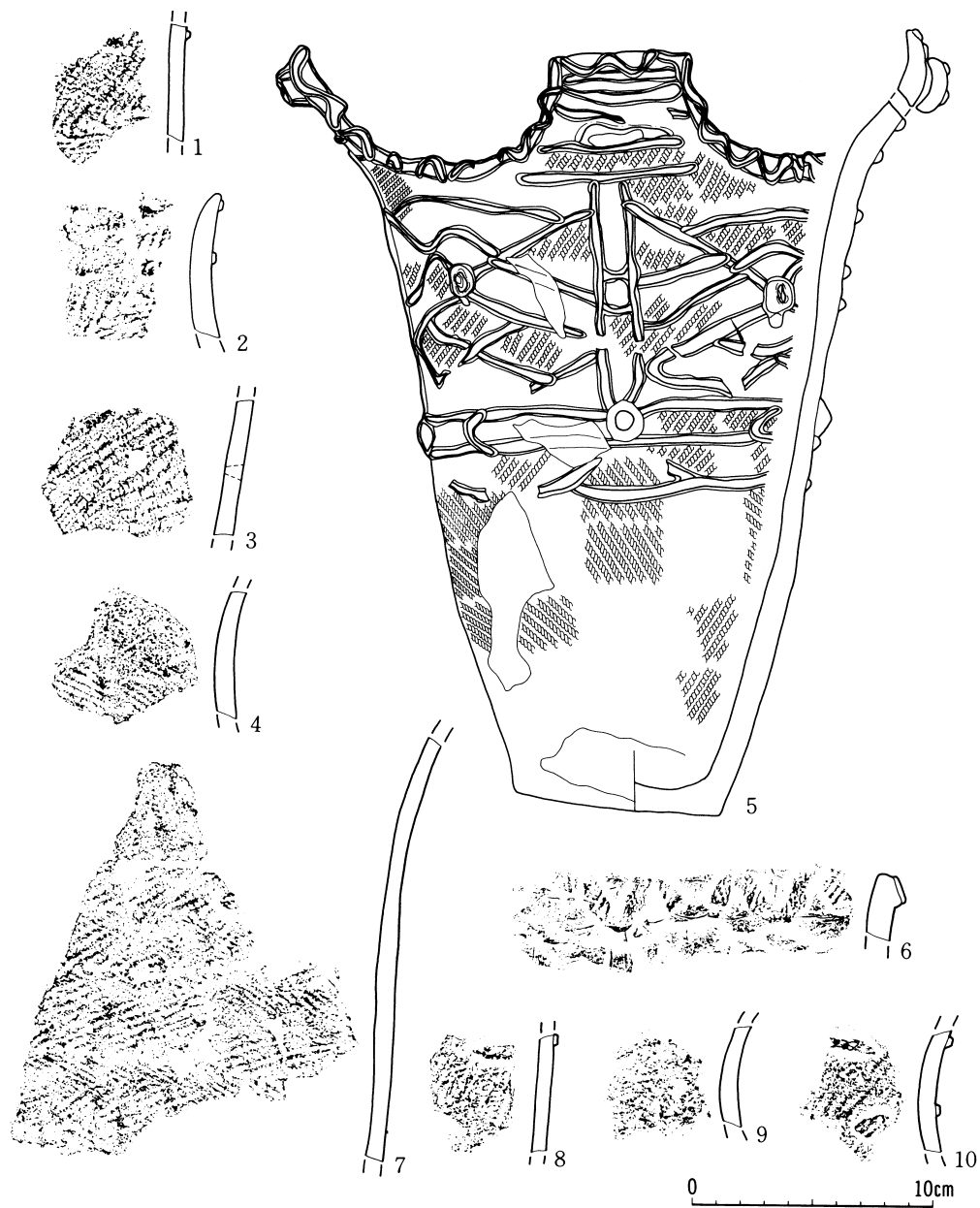
No.	形態	規模(cm)	深さ(cm)	No.	形態	規模(cm)	深さ(cm)	No.	形態	規模(cm)	深さ(cm)
1	円形	20×20	18.0	2	円形	20×18	9.6	3	円形	16×14	15.0
4	"	16×14	8.2	5	楕円形	22×18	24.6				



第12号竪穴住居跡石器観察表(1)

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)			
第57図-1	12H	2	62	51	21	64.8	珪	F	

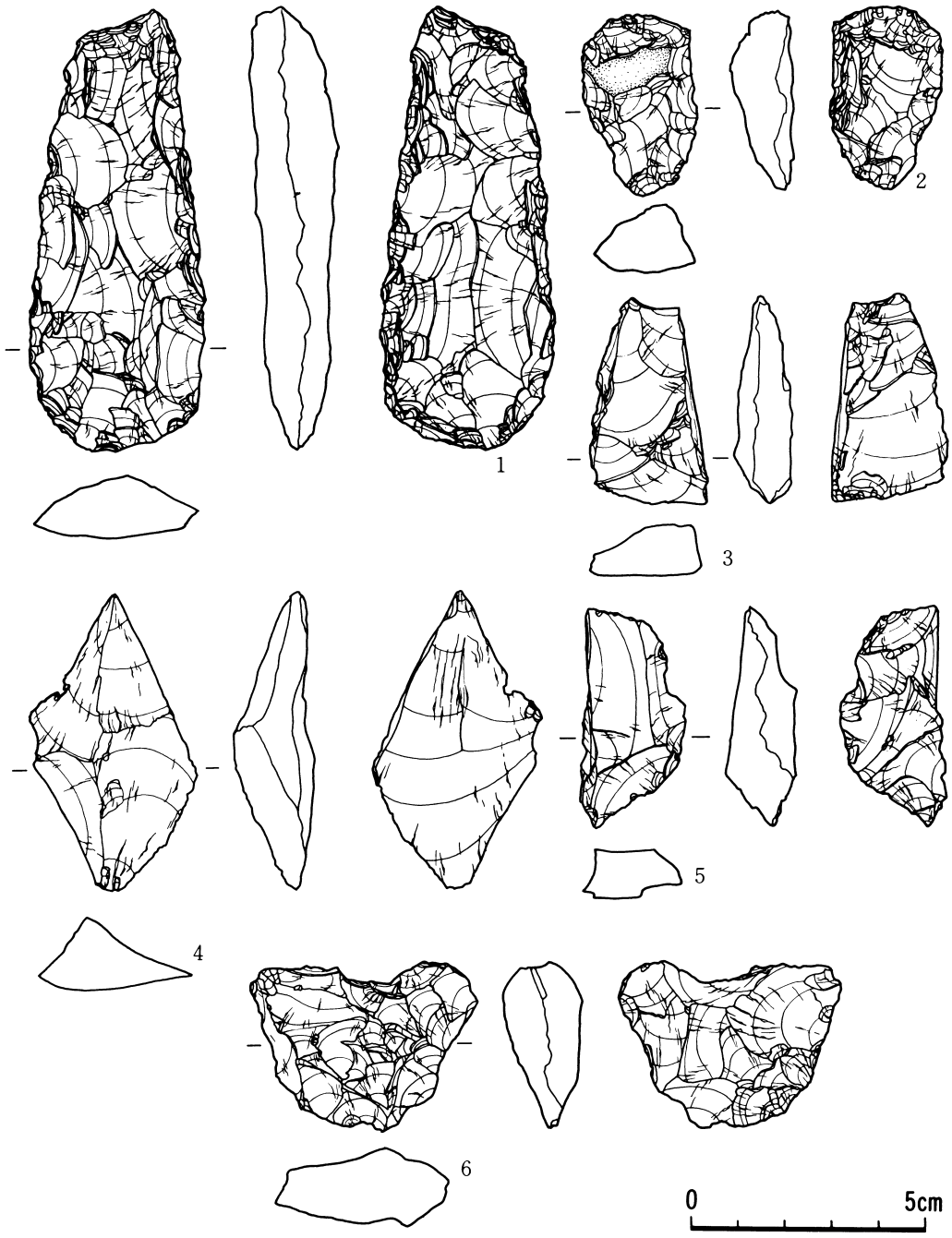
第57図 第12号竪穴住居跡出土遺物(1)



第12号竖穴住居跡土器観察表

番号	地区・層位	部位	外面施文文様	分類
1	12 H・1層	胴部	羽状縄文 粘土紐 スス状炭附着	Ⅲ群4類
2	12 H・2層	口縁部	波状口縁 縄文(LR) スス状炭附着	Ⅲ群4類
3	12 H・2層	胴部	縄文(LR) 補修孔 スス状炭附着	Ⅲ群4類
4	12 H・1層	胴部	縄文(RL) スス状炭附着	Ⅲ群4類
5	12 H・2層	深鉢形	弁状突起 4個の波状口縁 縄文(LR・RL) 粘土紐 スス状炭附着	Ⅲ群4類
6	12 H・2層	口頸部	羽状縄文(LR・RL) 粘土紐 スス状炭附着	Ⅲ群4類
7	12 H・2層	口縁部	平口縁 口唇部寄り山形状粘土紐 縄文(LR) スス状炭附着	Ⅲ群4類
8	12 H・1層	口頸部	縄文(LR) 横位粘土紐	Ⅲ群4類
9	12 H・1層	口頸部	縄文 スス状炭附着	Ⅲ群4類
10	12 H・1層	口頸部	横位・斜位粘土紐 縄文(LR) スス状炭附着	Ⅲ群4類

第58図 第12号竖穴住居跡出土遺物(2)



第12号竖穴住居跡石器観察表(2)

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)			
第59図-1	12H	2	95	38	16	59.9	頁	E	
第59図-2	12H	2	38	23	13	11.9	珪	F	
第59図-3	12H	2	43	25	9	11.2	珪	F	
第59図-4	12H	2	63	33	17	21.3	珪	F	
第59図-5	12H	2	47	21	14	12.4	珪	F	
第59図-6	12H	2	34	49	16	22.7	玉珪	F	

第59図 第12号竖穴住居跡出土遺物(3)

出土遺物（第57～59図）本住居跡の出土遺物は、住居跡壁寄りに多く分布し、住居跡の中央部からは出土していない。堆積土下位の第2層中からの出土が多く、床面には遺物はみられなかった。また、石器はすべて第2層中からの出土で、東壁寄りに集中して出土した。

土器は、1が完形土器で押しつぶされた横位状態で出土し、4個の弁状突起と胴部下半に文様区画帯を有し、区画帯内部に粘土紐を多用した文様構成の深鉢形土器であり、縄文時代中期（円筒上層d式）に併行すると思われる。石器は、石筥・不定形石器の剥片石器のみが出土した。（新谷・成田）

第13号竪穴住居跡（第60・61図）

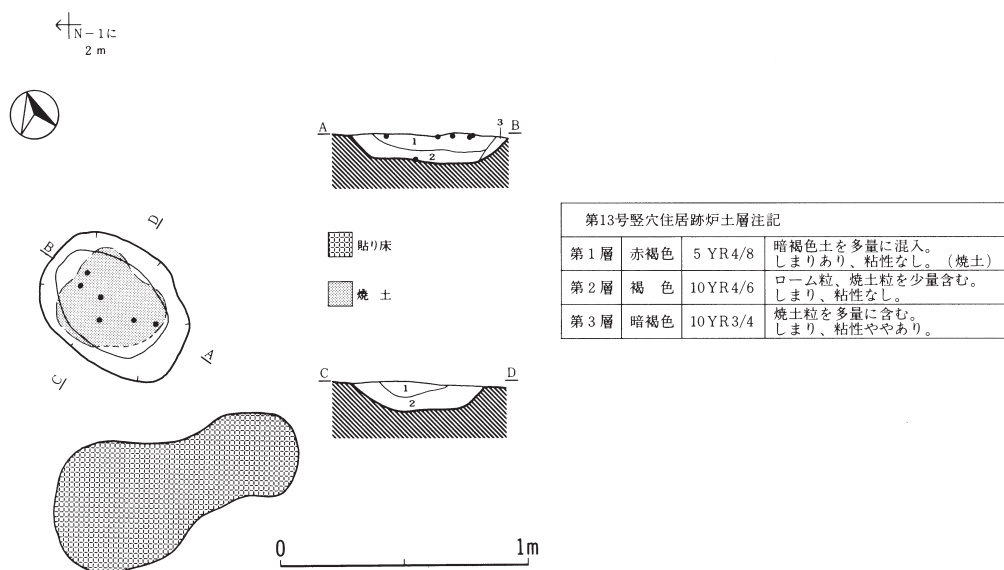
位置と確認 本住居跡は、調査区の北側台地平坦面から南側に傾斜する斜面の西側のM-1グリットに位置している。第a層中を精査中に、焼土と貼り床の一部を確認し、周辺を精査したところ竪穴住居跡を確認した。

平面形・規模 平面形・規模ともに不明である。

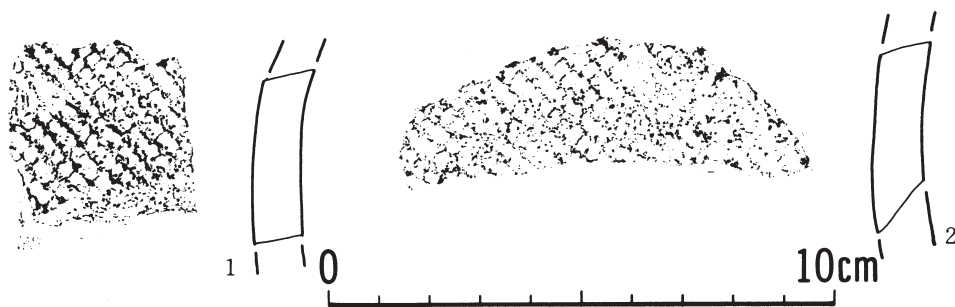
壁・床 壁は確認できなかった。床面は、炉の南側に幅約2mの貼り床の一部を確認した。貼り床部分は、かたく堅緻である。

炉 炉の底面及び壁はやわらかく、火熱面も判然とせず短期間使用した炉と思われる。全体的に丸みをもつ不整楕円形を呈する。規模は、長径65cm・短径50cmを測る。

出土遺物（第61図） 遺物は、すべて炉内からの出土である。第1層中からの出土が多く粗製土器破片である。（新谷・成田）



第60図 第13号竪穴住居跡



第13号竪穴住居跡土器観察表

番号	地区・層位	部位	外面	施文	文様	分類
1	13 H・炉覆土	胴部	縄文(RL)	スス状炭附着		IV群4類
2	13 H・炉覆土	胴部	縄文(RL)	スス状炭附着		IV群4類

第61図 第13号竪穴住居跡出土遺物

第14号竪穴住居跡(第62・63図)

位置と確認 本住居跡は、調査区北側の平坦面で、E・F - 0・1グリッドに位置している。第 a層を精査中に落ち込みを確認し、精査したところ竪穴住居跡を確認した。

重複 住居跡の東側で、第32号土壙と切り合っている。新旧関係は、本住居跡が古い。

平面形・規模 平面形は、全体に丸みを持つ円形を呈する。規模は、長径376cm・短径273cmで床面積(6.89)㎡を測る。住居跡の規模としては、小型な住居跡である。

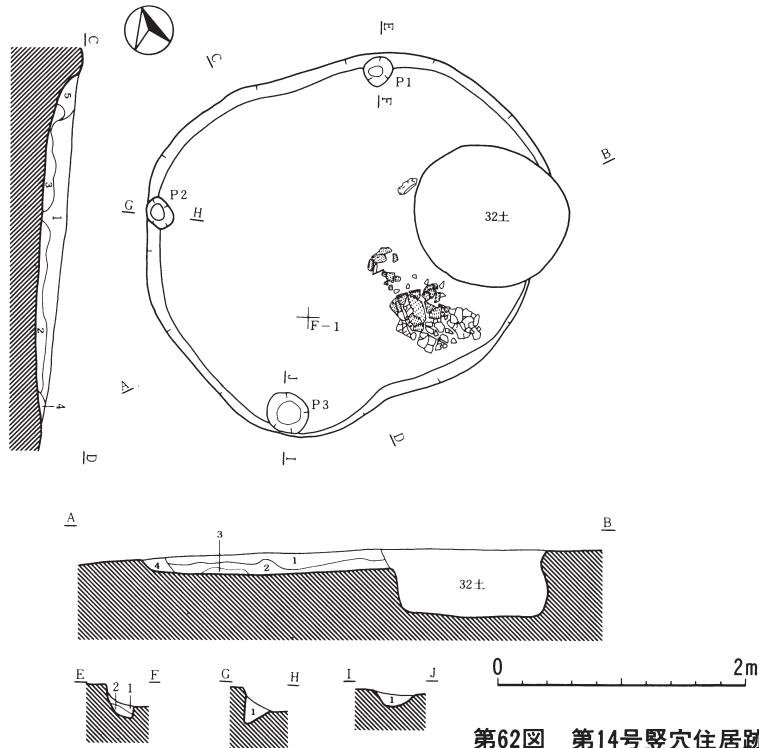
壁・床 壁は、すべて上端から床面にかけて、なだらかに傾斜している。北側の壁は、堅緻なつくりで明瞭であるが、南側の壁は軟弱で、壁の立ち上がりを検出するのに困難をきわめた。壁高は、東壁12cm・西壁17cm・南壁9cm・北壁11cmを測る。床面は、北側部分がやや高いが他はほぼ平坦であり、堅緻なつくりである。

柱穴 ピットは3個検出した。ピットの配置は、北壁寄りに間隔をあけて2個・南壁寄りに1個の位置である。配置等から考えると、4本柱(他の1本は第32号土壙と切り合っている為に検出できなかった)を主体とした主柱穴と思われる。

ピット計測表

No.	形態	規模(cm)	深さ(cm)	No.	形態	規模(cm)	深さ(cm)	No.	形態	規模(cm)	深さ(cm)
1	円形	24×23	10.1	2	楕円形	25×20	17.1	3	円形	34×32	12.4

出土遺物(第63図) 本住居跡の出土遺物は、住居跡の南壁寄りに集中して分布している。堆積土下位の第2層中の出土が多く、3は横位状態で出土している。石器は、自然礫は出土したが利石器は出土していない。土器は、形状が砲弾状を呈するほぼ完形の深鉢形土器で、器外面の口唇部寄りから底辺部寄りに至るまで、ループ文を全面に施文している。底辺部は、縄文(LR)を用いて回転方向を変えて施文している。時期は、縄文時代前期(早稲田6類)の時期



第62図 第14号竪穴住居跡

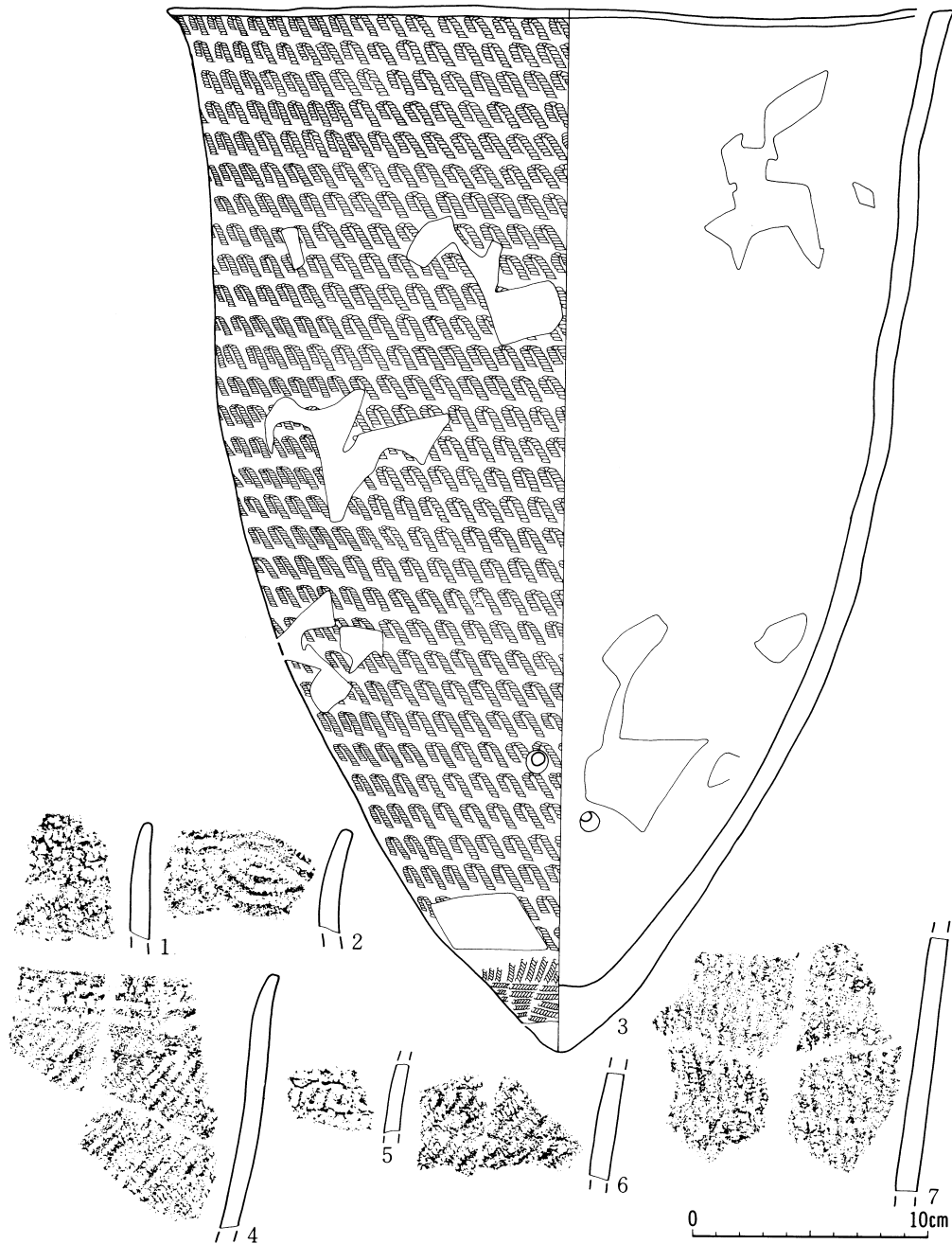
第14号竪穴住居跡土層注記			
第1層	黒褐色	10YR2/3	炭化物、ローム粒を多量に含む。粘性なし、しまりあり。
第2層	褐色	10YR4/6	炭化物、ローム粒を多量に含む。粘性、しまりなし。
第3層	にぶい黄褐色	10YR4/3	炭化物、ローム粒を少量含む。粘性、しまりなし。
第4層	暗褐色	10YR3/4	ローム粒を若干含む。粘性、しまりなし。
第5層	黄褐色	10YR5/8	炭化物、ローム粒を若干含む。粘性、しまりなし。
第14号竪穴住居跡ピット1土層注記			
第1層	黄褐色	10YR5/6	炭化物、ローム粒を少量含む。粘性なし、しまりあり。
第2層	黄褐色	10YR5/8	炭化物、ローム粒を若干含む。粘性なし、しまりあり。
第14号竪穴住居跡ピット2土層注記			
第1層	明黄褐色	10YR6/8	炭化物、ローム粒を若干含む。粘性なし、しまりあり。
第14号竪穴住居跡ピット3土層注記			
第1層	褐色	10YR4/6	ローム粒、炭化物を若干含む。粘性なし、しまりあり。

に併行する土器である。また、1・2・4は、竹管を用いた連続押し引き竹管文の土器であり、3の土器と同一時期に併行する土器と思われる。

第15号竪穴住居跡（第64～69図）

位置と確認 本遺構は、調査区北側のA・B - ア・0グリッドに位置する。調査の段階で掘り下げてしまい、広範囲に散在した焼土と、その周辺に環状に配置されたピットのみを検出し、竪穴住居跡と確認した。

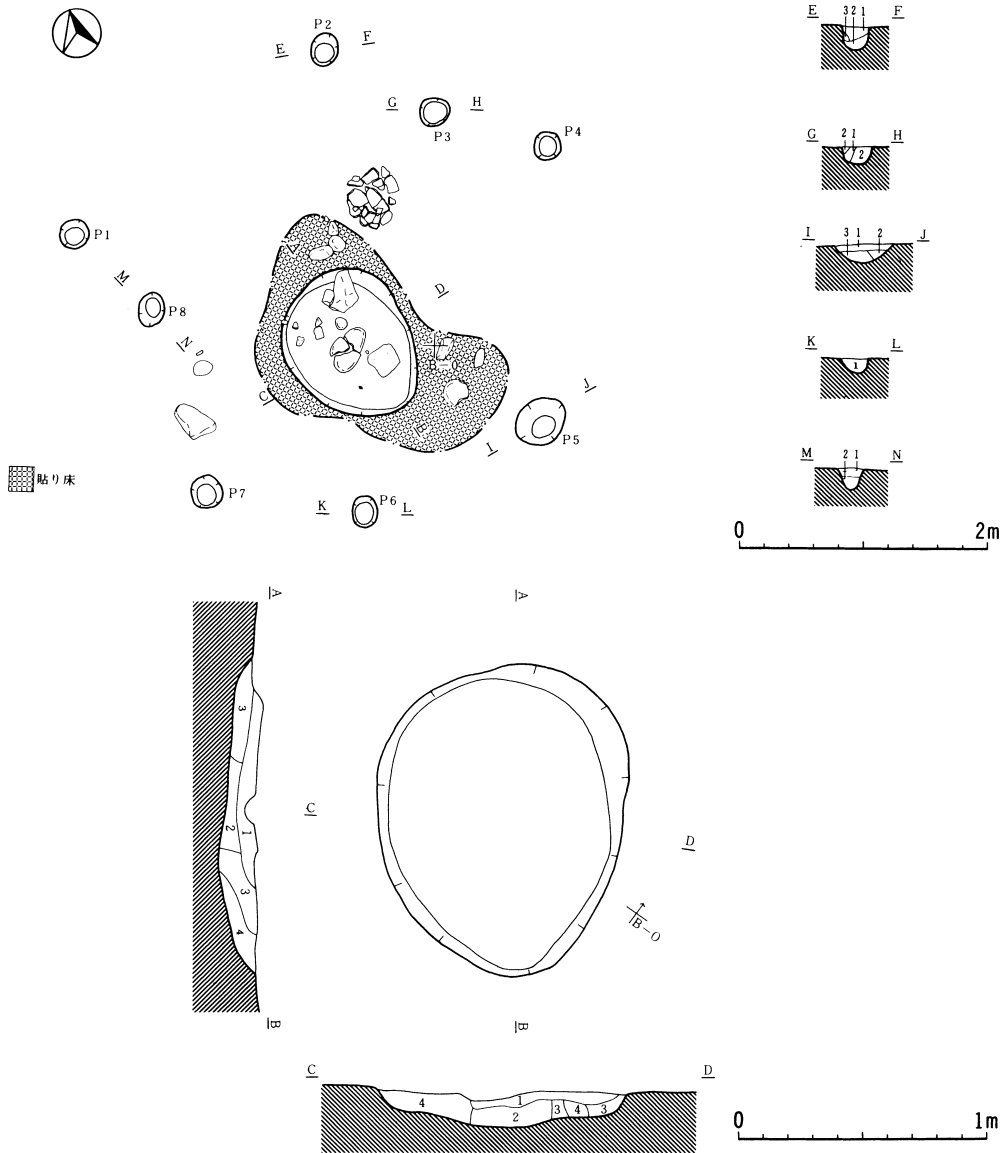
平面形・規模 壁が壊されているために、正確な規模はわからないが、ピットの配置等から堆定すると、長径460cm・短径440cm、床面積（11.90）㎡を測り、円形状のプランを呈すると思われる。



第14号竪穴住居跡土器観察表

番号	地区・層位	部位	外面施文文様	分類
1	14 H・2 層	口縁部	横位連続押し引き竹管文 縄文(LR) スス状炭附着	II群1類
2	14 H・2 層	口縁部	波状口縁 山形状文 連続押し引き竹管文 縄文(LR) スス状炭附着	II群2類
3	14 H・2 層	深鉢形	ループ文を底辺部寄りまで全面に施す 原体(LR) 底辺部は回転方向を変えて施す スス状炭附着	II群1類
4	14 H・2 層	口縁部	横位連続押し引き竹管文 縄文(LR) スス状炭附着	II群1類
5	14 H・2 層	胴部	短いループ文(LR) スス状炭附着	II群2類
6	14 H・2 層	胴部	縄文(LR) スス状炭附着	II群2類
7	14 H・2 層	胴部	縄文(LR) スス状炭附着	II群2類

第63図 第14号竪穴住居跡出土遺物



第1層	暗褐色	10 YR 3/4	炭化物及びローム粒を多量に混入。粘性、しまりあり。
第2層	褐色	10 YR 4/6	炭化物及びローム粒を多量に混入。粘性、しまりあり。
第3層	黄褐色	10 YR 5/8	暗褐色土が少量混入。粘性、しまりあり。

第1層	暗褐色	10 YR 3/4	ローム粒を少量混入。粘性、しまりあり。
第2層	褐色	10 YR 4/6	ローム粒及び炭化物が多量に混入。粘性、しまりあり。

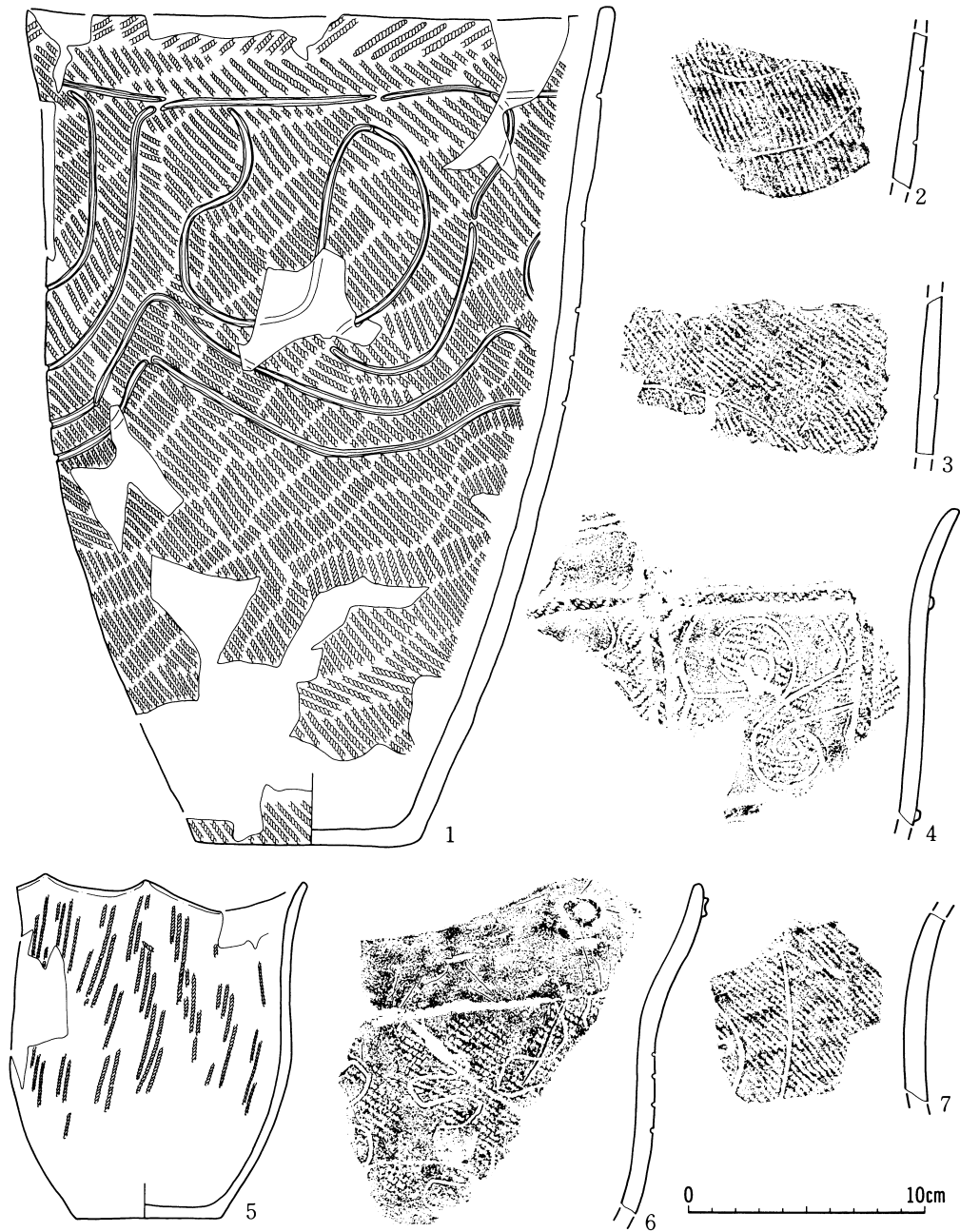
第1層	暗褐色	10 YR 3/4	ローム粒及び炭化物を少量混入。粘性、しまりあり。
第2層	褐色	10 YR 4/6	焼土粒及び炭化物を微量に混入。粘性、しまりあり。
第3層	暗褐色	10 YR 3/3	炭化物及びローム粒を少量混入。粘性あり、しまりなし。

第1層	暗褐色	10 YR 3/4	黄褐色土と暗褐色土の混合層である。締りやべ強、粘性あり。
-----	-----	-----------	------------------------------

第1層	暗褐色	10 YR 3/4	ロームブロックを少量混入。粘性、しまりあり。
第2層	褐色	10 YR 4/4	ロームブロック及び炭化物を多量に混入。粘性、しまりあり。

第1層	褐色	7.5 YR 4/4	焼土粒、炭化物を少量含む。粘性あり、しまりなし。
第2層	赤褐色	5 YR 4/6	赤褐色土をブロック状に含み、ガキガキと固く、粘性も強い。
第3層	褐色	7.5 YR 4/6	炭化物をブロック状に多量に含む。粘性、しまりあり。
第4層	明褐色	7.5 YR 5/6	ローム粒及び炭化物を少量含む。粘性ややあり、しまりあり。

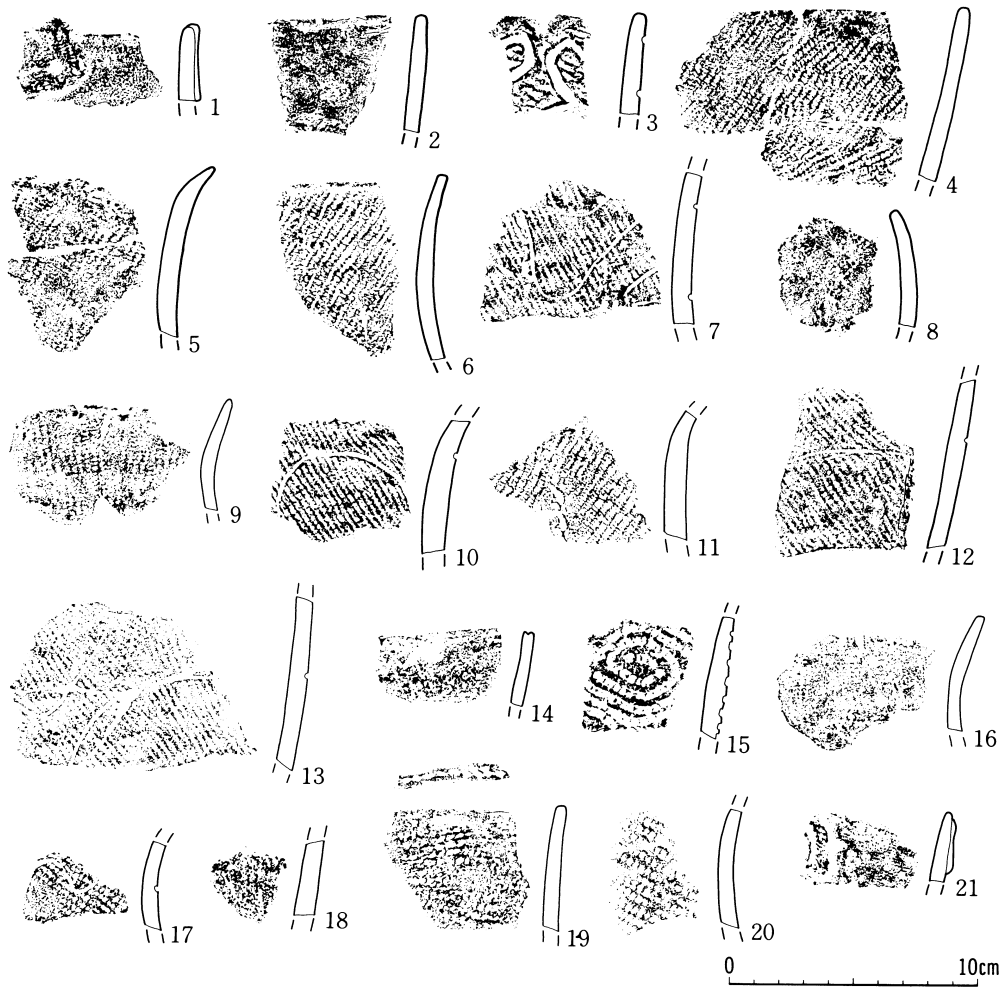
第64図 第15号竪穴住居跡



第15号竖穴住居跡土器観察表(1)

番号	地区・層位	部位	外面施文	文様	分類
1	15H・床直	深鉢形	縄文(RL)	J字状文様 波頭状文様区画 網代痕 スス状炭附着	Ⅲ群
2	15H・覆土	胴部	縄文(RL)	弧状沈線 スス状炭附着	Ⅳ群1類
3	15H・覆土	胴部	縄文(RL)	弧状沈線 スス状炭附着	Ⅳ群1類
4	15H・覆土	口縁部	波状口縁 縄文(LR)	スス状炭附着 粘土紐による文様区画帯 縦位渦巻文	Ⅳ群2類
5	15H・覆土	鉢形	縄文(LR)	スス状炭附着	Ⅳ群4類
6	15H・覆土	口縁部	波状口縁 撚糸圧痕 縄文(RL)	ボタン状突起 縦位曲線文 スス状炭附着	Ⅳ群2類
7	15H・覆土	口頸部	縄文(RL)	縦位沈線 スス状炭附着	Ⅳ群2類

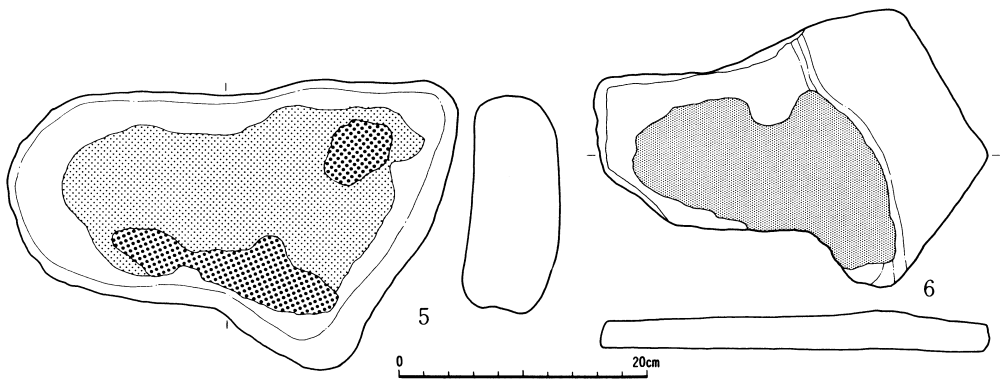
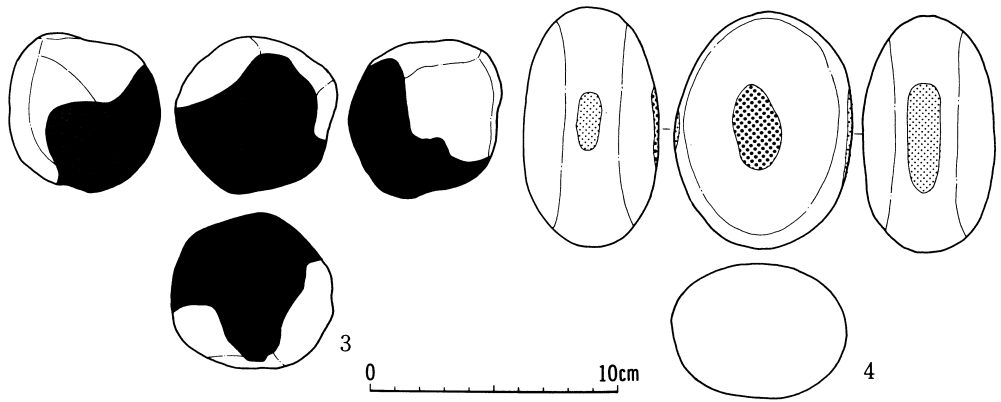
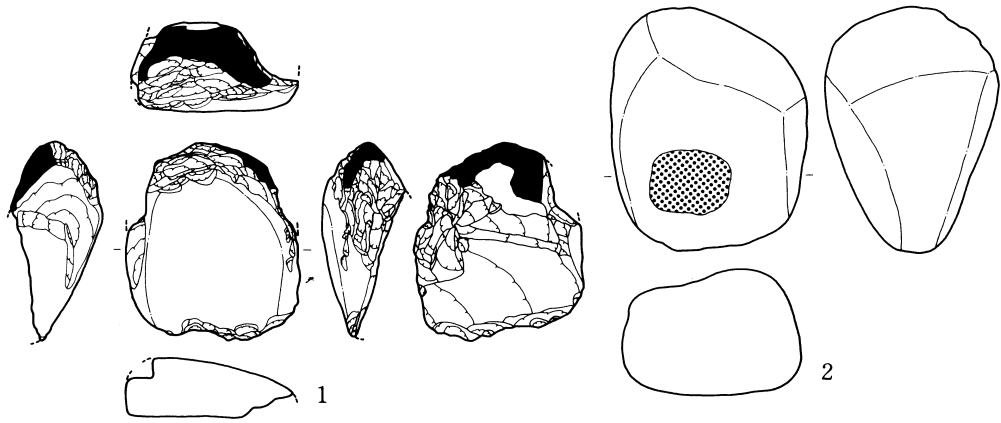
第65図 第15号竖穴住居跡出土遺物(1)



第15号竪穴住居跡土器観察表(2)

番号	地区・層位	部位	外面施文文様	分類
1	15 H・覆土	口縁部	縦位曲線粘土紐 縄文 (RL) スス状炭附着	IV群2類
2	15 H・覆土	口縁部	無文	IV群4類
3	15 H・覆土	口縁部	二又状突起口縁 曲線文 縄文 (RL)	IV群2類
4	15 H・覆土	口縁部	縄文 (LR) スス状炭附着	IV群4類
5	15 H・覆土	口縁部	縄文 (LR) スス状炭附着	IV群4類
6	15 H・覆土	口縁部	縄文 (LR) スス状炭附着	IV群4類
7	15 H・覆土	胴部	縄文 (RL) 曲線文 スス状炭附着	IV群1類
8	15 H・覆土	口縁部	無文	IV群4類
9	15 H・覆土	口縁部	口唇部に刻み 縄文 (RL) スス状炭附着	VI群4類
10	15 H・覆土	口頸部	縄文 (RL) 弧状沈線 スス状炭附着	IV群1類
11	15 H・覆土	胴部	縄文 (LR) 縦位綾絡文 スス状炭附着	IV群4類
12	15 H・覆土	胴部	縄文 (RL) 横位弧状沈線 スス状炭附着	IV群1類
13	15 H・覆土	胴部	縄文 (RL) 縦位弧状沈線 スス状炭附着	IV群1類
14	15 H・覆土	口縁部	無文 口唇部に連続刺突 スス状炭附着	IV群1類
15	15 H・覆土	口縁部	渦巻文様 連続押し引き竹管文	II群1類
16	15 H・覆土	口縁部	縄文 (RL) スス状炭附着	VI群4類
17	15 H・覆土	口頸部	縄文 (RL) 横位弧状沈線 スス状炭附着	IV群1類
18	15 H・床直	胴部	縄文 (RL)	IV群4類
19	15 H・床面	口縁部	縄文 (LR) 口唇部面に連続刺突 スス状炭附着	IV群4類
20	15 H・床直	口頸部	縄文 (RL) スス状炭附着	IV群4類
21	15 H・床直	口縁部	波状口縁 縦位粘土紐 縄文	IV群2類

第66図 第15号竪穴住居跡出土遺物(2)



第15号竖穴住居跡石器観察表(1)

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)			
第67図-1	15H	床直	(75)	(67)	(34)	(163)	チャ	J	欠損
第67図-2	15H	床直	100	75	68	659	安	J	
第67図-3	15H	覆土	62	62	59	327	チャ	J	
第67図-4	15H	床直	95	71	52	479	安	J	
第67図-5	15H	床直	373	232	82	8800	安	N	
第67図-6	15H	床直	317	(221)	37	(2400)	安	N	欠損

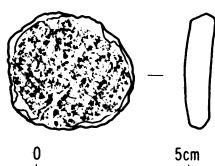
第67図 第15号竖穴住居跡出土遺物(3)

壁・床 壁は、確認できなかった。床は、炉の周辺が貼り床でたたくしまっているが、他の部分は、貼り床面がみられずやわらかい。

柱 穴 ピットは 8 個検出し、すべて柱穴と思われる。柱穴の配置は、東側・西側の一部で確認できなかったが、約 1 m 内外に等間隔に円形状に配置されている。

ピット計測表

No.	形態	規模(cm)	深さ(cm)	No.	形態	規模(cm)	深さ(cm)	No.	形態	規模(cm)	深さ(cm)
1	円形	24×24	18.0	2	楕円形	27×23	20.0	3	不整形	25×22	15.0
4	"	23×22	18.0	5	"	45×35	16.0	6	楕円形	25×21	12.0
7	"	27×25	8.0	8	"	28×22	19.0				



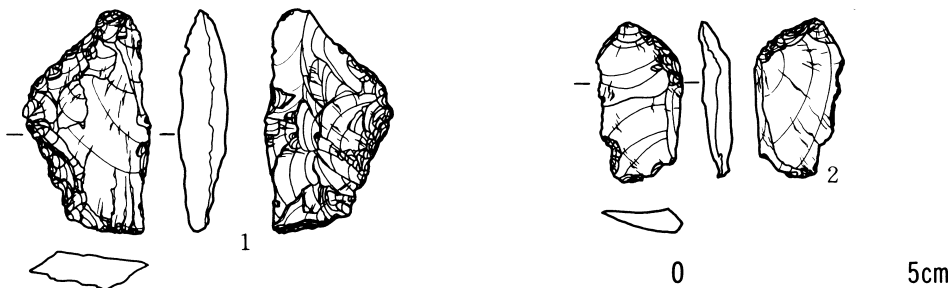
炉 炉は P 5 と 8 の間に位置し、長径126cm・短径101cmの楕円形を呈し、断面が鍋底状の大形の地床炉である。炉の確認面の中央部には、3 個の礫が確認された。

出土遺物 (第65~69図) 出土遺物は、炉を中心とした範囲から出

第68図 第15号竪穴住居跡出土遺物(4)

第15号竪穴住居跡土製品観察表

番号	地区・層位	部位	外面	施文	文様	分類
1	15H 覆土	胴部	縄文 (LR)	周縁部を調整		IV群 4類



第15号竪穴住居跡石器観察表(2)

図 版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	備 考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)			
第69図-1	15H	覆土	43	25	9	7.4	珪	F	
第69図-2	15H	覆土	31	17	6	2.5	珪	F	

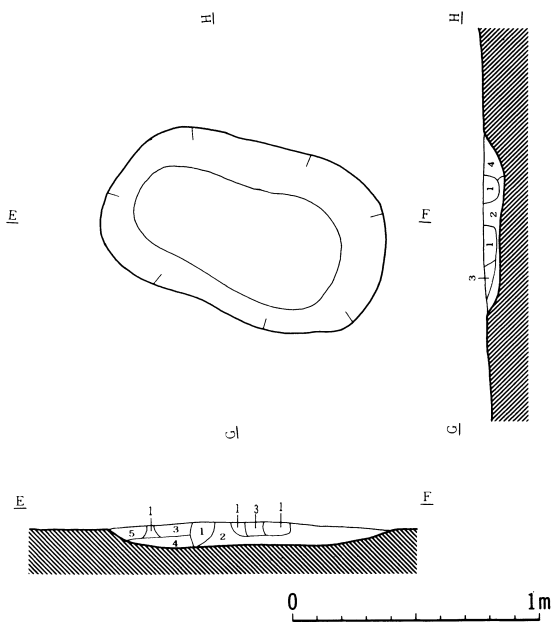
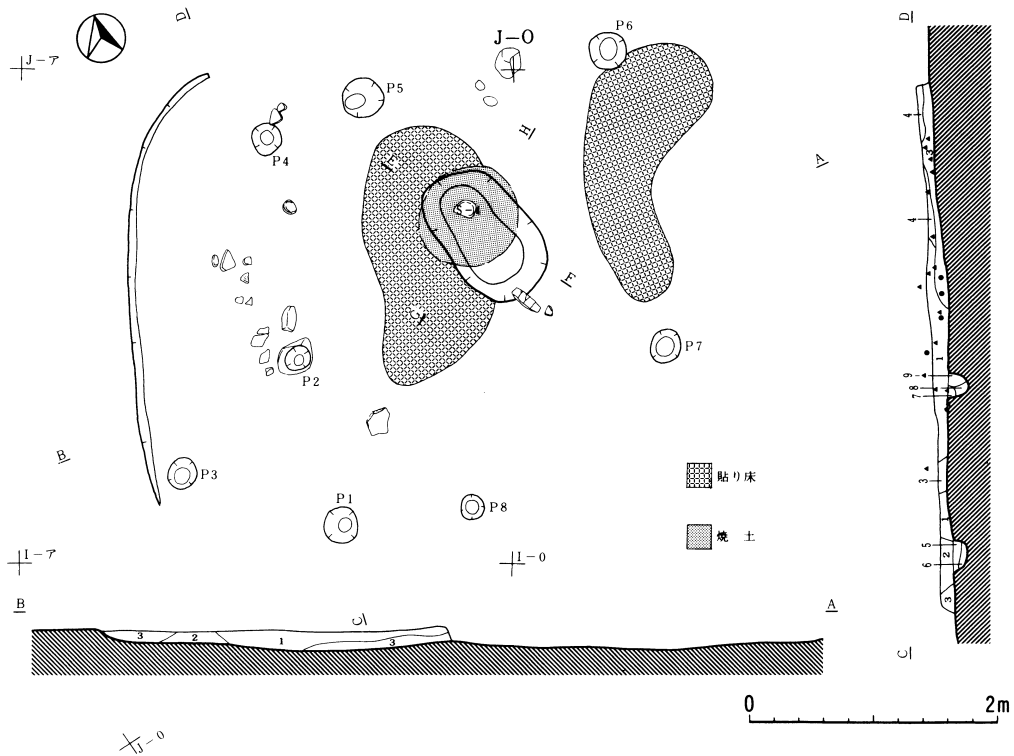
第69図 第15号竪穴住居跡出土遺物(5)

土した。土器は、床面から波頭状文で文様区画帯を構成し、区画帯内部に J 字状文を施文した深鉢形土器が出土し、石器は不定形石器・敲・磨器類等が出土し、円盤状土製品も 1 点出土した。
(津川・成田)

第16号竪穴住居跡 (第70~72図)

位置と確認 本住居跡は、調査区北側の I・J - ア・0 グリットに位置する。調査で掘り下げてしまい、焼土とその周辺の貼り床の一部を検出し、精査したところ竪穴住居跡を確認した。

平面形・規模 西壁の一部を除いては、壁を検出できず、ピットの配置も不規則なため、平面形・規模とも定かではない。



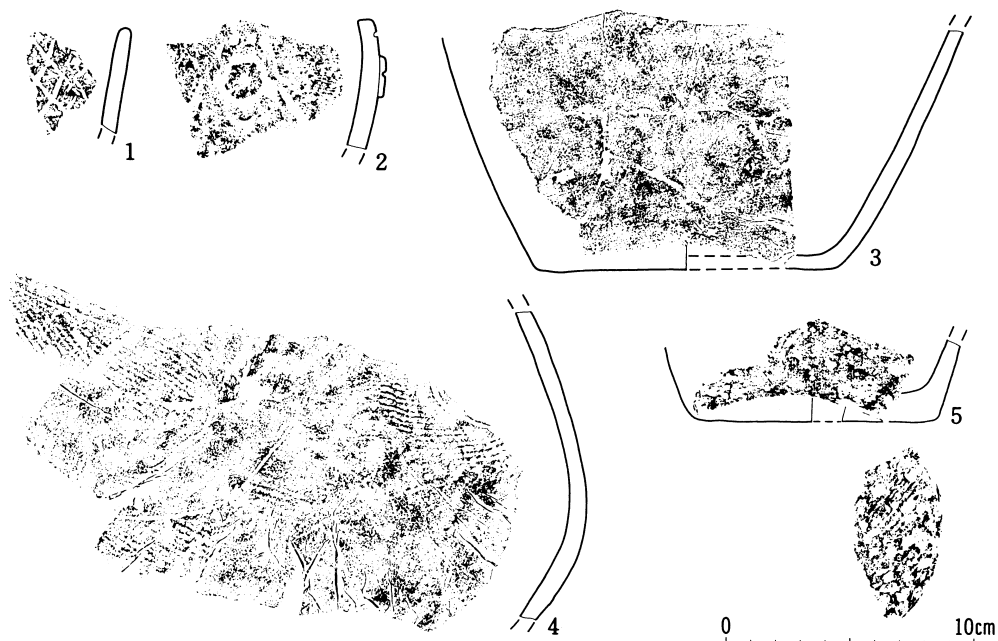
第16号竪穴住居跡土層注記			
第1層	黒褐色	10YR2/3	ローム粒及び炭化物少量混入。粘性あり、しまりなし。
第2層	褐色	10YR4/4	暗褐色土粒が混入。粘性、しまりあり。
第3層	暗褐色	10YR3/3	炭化物、ローム粒を若干含む。粘性、しまりあり。
第4層	黒褐色	10YR3/2	炭化物、ローム粒を少量混入。粘性あり、しまりなし。

第16号竪穴住居跡ピット1土層注記			
第5層	黒褐色	10YR3/2	ローム粒を少量混入。粘性あり、しまりなし。
第6層	暗褐色	10YR3/4	ローム粒を少量混入。粘性あり、しまりなし。

第16号竪穴住居跡ピット2土層注記			
第7層	黒褐色	10YR3/2	ローム粒を少量混入。粘性あり、しまりなし。
第8層	黒褐色	10YR3/2	ローム粒を混入。粘性あり、しまりなし。
第9層	黒褐色	10YR2/3	混入物なし。粘性あり、しまりなし。

第16号竪穴住居跡炉土層注記			
第1層	赤褐色	5YR4/8	粘性若干あり(焼土層)
第2層	褐色	10YR4/6	焼土が小ブロック状に多量に、炭化物を少量混入。粘性、しまりあり。
第3層	黒褐色	10YR2/3	炭化物が微量に混入。粘性あり、しまりなし。
第4層	暗褐色	10YR3/4	ローム粒及び炭化物を若干混入。粘性なし、しまりあり。
第5層	暗褐色	10YR3/3	焼土粒、炭化物を多量に混入。粘性若干あり、しまりあり。

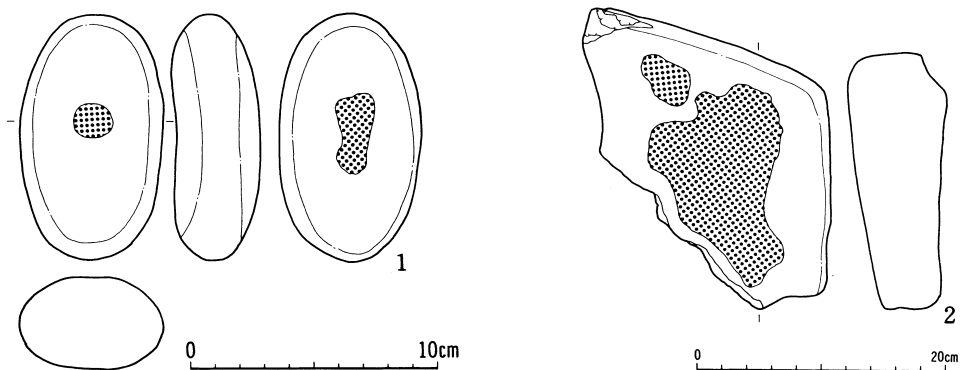
第70図 第16号竪穴住居跡



第16号竖穴住居跡土器観察表

番号	地区・層位	部位	外面施文文様		分類
			網目状捺糸文 (L)	スス状炭附着	
1	16 H・覆土	口縁部	網目状捺糸文 (L)	スス状炭附着	IV群 4類
2	16 H・床直	口縁部	波状口縁	磨消縄文 (LR) 円形刺突 ボタン状突起	IV群 2類
3	16 H・1層	底辺部	無文		IV群 5類
4	16 H・1層	胴部	磨消縄文 (RL)	渦巻状文様 赤色顔料塗布	IV群 5類
5	16 H・覆土	底部	縄文 (LR)	網代痕 スス状炭附着	IV群 4類

第71図 第16号竖穴住居跡出土遺物(1)



第16号竖穴住居跡石器観察表

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)			
第72図-1	16H	1	99	57	36	296	安	J	
第72図-2	16H	床面	(201)	(211)	79	(4900)	安	N	欠損

第72図 第16号竖穴住居跡出土遺物(2)

壁・床 壁は、西壁のみの検出で、床面から上端にかけて垂直に立ち上がり、もろいつくりである。床は、炉の西側に分布する貼り床面は、かたくしまっているが、他は判然としない。

柱 穴 ピットは 8 個検出できた。ピットの配置は、炉を中心として配置されており、南側に多く位置している。しかし、第15号竪穴住居跡の様な規則性はみられない。

ピット計測表

No.	形態	規模(cm)	深さ(cm)	No.	形態	規模(cm)	深さ(cm)	No.	形態	規模(cm)	深さ(cm)
1	円形	29×27	14.0	2	不整形	20×19	18.0	3	円形	25×24	13.0
4	不整形	25×23	17.0	5	円形	34×33	40.0	6	"	30×30	19.0
7	円形	28×24	16.0	8	"	20×19	14.0				

炉 炉は、平面形が丸みを有する楕円形の地床炉である。規模は、長径115cm・短径70cmを測り、第15号竪穴住居跡の炉と同様に大型地床炉である。

出土遺物（第71・72図） 本住居跡の出土遺物は、住居跡の西側からややまとまって出土した。2の土器は、床直から出土したボタン状突起をもつ土器であり、縄文時代後期前葉期に併行する土器と思われる。石器は、敲・磨器類、石皿、砥石類が出土した。（津川・成田）

第17号竪穴住居跡（第73図）

位置と確認 本住居跡は、調査地区北側の平坦面でM・N - 1グリッドに位置し、層を精査中に黒褐色土の落ち込みを確認した。

平面形・規模 平面形は、住居跡のプランを確認できず、柱穴配置等から判断した推定ラインとなっているが、西側にややふくらみをもつ楕円形を呈する。規模は、長径510cm・短径410cmで床面積（16.20）㎡である。

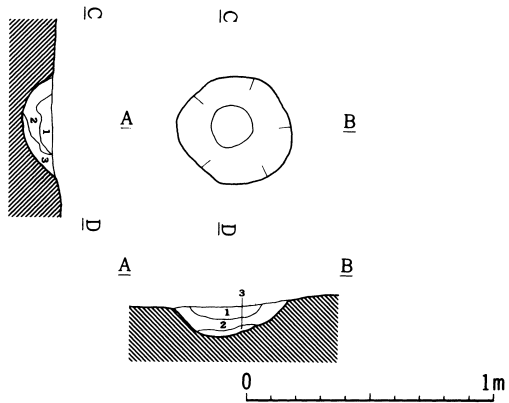
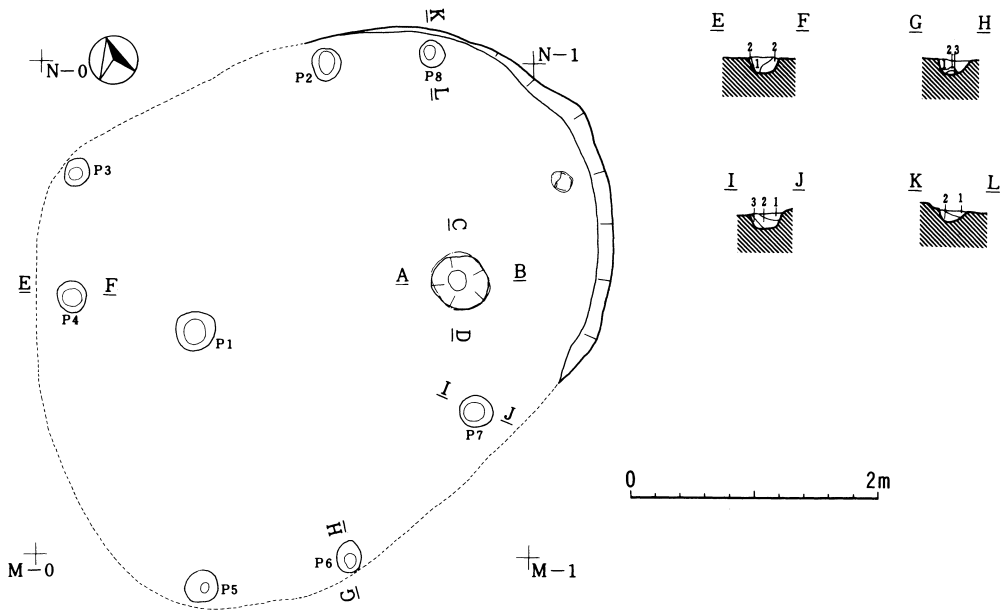
壁・床 壁は、東壁だけが存在するだけである。上端から床面にかけて傾斜しており、軟弱なつくりである。床面は、ほぼ平坦で、炉周辺が一部堅緻な貼り床を呈する。

柱 穴 ピットは 8 個検出した。配置等から柱穴と思われる。柱穴の配置は、北側に P 2・8、西側に P 3・4、南側に P 5・6、東側に P 7 が位置し、等間隔に配置しており、P 1 が住居跡の中央部に位置している。

ピット計測表

No.	形態	規模(cm)	深さ(cm)	No.	形態	規模(cm)	深さ(cm)	No.	形態	規模(cm)	深さ(cm)
1	円形	32×32	13.0	2	円形	26×24	9.0	3	円形	23×21	10.0
4	"	26×24	14.0	5	"	27×26	12.0	6	"	22×21	12.0
7	"	27×26	13.0	8	"	22×21	9.0				

炉 炉は、住居跡の中央部から東壁寄りに位置している。規模は、長径47cm・短径44cmのほぼ円形を呈する地床炉である。壁は、すべて上端から底面にかけて傾斜し、軟弱なつくりである。炉自体あまり火熱を受けていない。（奈良・成田）



第17号竪穴住居跡炉土層注記

第1層	明赤褐色	5 YR5/8	炭化物を少量含む。褐色土混入。粘性なし、しまりあり。
第2層	明褐色土	7.5 YR5/6	黒色土を混入し、焼土粒を少量含む。粘性ややあり、しまりなし。
第3層	明黄褐色	10 YR6/6	焼土粒を微量に含む。粘性ややあり、しまりなし。

第17号竪穴住居跡ビット4土層注記

第1層	褐色土	10 YR4/4	ローム粒を少量含む。粘性、しまりなし。
第2層	黄褐色土	10 YR5/6	ローム粒を多量に含む。粘性あり、しまりなし。

第17号竪穴住居跡ビット6土層注記

第1層	褐色土	10 YR4/4	ローム粒及び炭化物を少量含む。粘性、しまりなし。
第2層	黒褐色土	10 YR2/3	ローム粒を混入。粘性、しまりなし。
第3層	黄褐色土	10 YR5/8	ローム粒を多量に含む。粘性ややあり、しまりなし。

第17号竪穴住居跡ビット7土層注記

第1層	黒褐色土	10 YR2/3	炭化粒及びローム粒を少量含む。粘性、しまりなし。
第2層	褐色土	10 YR4/4	ローム粒を少量含む。粘性、しまりなし。
第3層	黄褐色土	10 YR5/6	ローム粒を多量に含む。粘性あり、しまりなし。

第17号竪穴住居跡ビット8土層注記

第1層	褐色土	10 YR4/4	ローム粒及び炭化物を少量含む。粘性、しまりなし。
第2層	黄褐色土	10 YR5/6	ローム粒を多量に含む。粘性ややあり、しまりなし。

第73図 第17号竪穴住居跡

(2) 土壌

第 1 号土壌

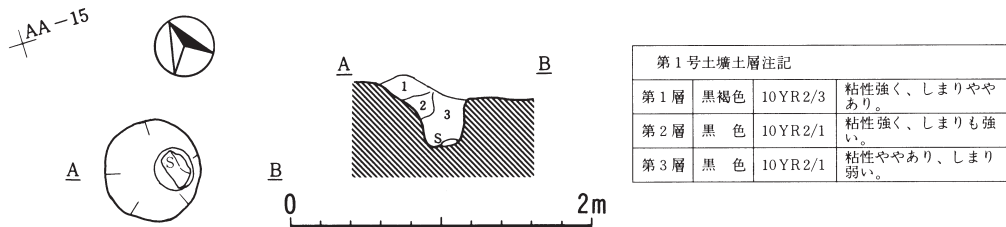
位置と確認 本遺構は、調査区北側台地中央の AB - 15グリッドに位置する。第 a 層上面で、小さな円形の黒色土の落ち込みを確認し土壌を検出した。

平面形・規模 平面形は、ほぼ円形のプランを呈する。規模は、開口部で長径68cm、短径64cm、底面で長径28cm、短径26cmを測る。

壁・底面 壁は、ややたたく締りがあり、壁高は北西壁42cm、南東壁32cmである。北西壁は緩やかに立ち上がり、南東壁は垂直に立ち上がりながら確認面に至る。底面は、締りは弱い。がほぼ平坦な構築である。底面直上に、大きな礫が 1 個残存していた。

出土遺物 底面から長径27cm、短径14cmの大きな自然礫 1 個が出土した。

(津川・奈良)

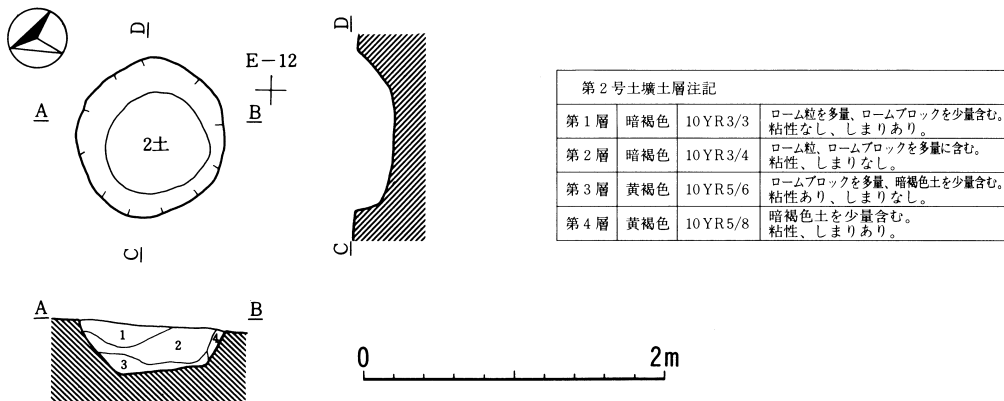


第74図 第1号土壌

第 2 号土壌

位置と確認 本遺構は、調査区北側台地緩斜面の E - 11・12グリッドに位置している。第 a 層を精査中に円形の暗褐色土の落ち込みを確認し、精査したところ土壌を検出した。

平面形・規模 平面形は、ややいびつな円形を呈する。規模は、開口部で長径106cm、短径98



第75図 第2号土壌

cm、底面で長径69cm、短径67cmを測る。断面形は、底面より外傾しながら開口部に至る形状を呈する。

壁・底面 壁は南側がやや急に立ち上がり、北側は比較的緩やかに立ち上がる。壁高は、南壁27cm、北壁36cmを測り、壁は軟弱なつくりである。底面は、ほぼ平坦に近く、やや堅緻なつくりである。

出土遺物 遺物は出土しなかった。

(新谷・奈良)

第4号土壌

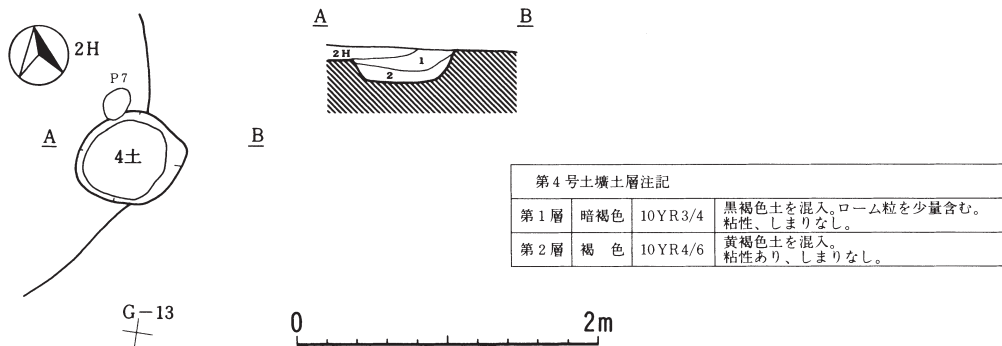
位置と確認 本遺構は、調査区北側の台地緩斜面にあるG - 12・13グリッドに位置している。第2号住居跡を精査中に落ち込みを確認し、精査したところ土壌を検出した。

重複 第2号竪穴住居跡の東壁寄りで切り合っており、新旧関係は本遺構が古い。

平面形・規模 平面形は、東側がやや張り出す円形を呈する。規模は開口部で長径72cm、短径62cm、底面で長径53cm、短径52cmを測る。断面形は、底が平坦で、緩やかに外傾しながら開口部に至る形状を呈する。

壁・底面 壁は、すべて開口部から底面にかけて緩やかに傾斜しており、軟弱な構築である。壁高は、東壁21cm、西壁24cm、南壁22cm、北壁22cmを測る。底面は、ほぼ平坦でやわらかく、堅緻な構築ではない。

(成田・奈良)



第76図 第4号土壌

第5号土壌

位置と確認 本遺構は、調査区北側の台地緩斜面にあるG - 11・12グリッドに位置している。第2号竪穴住居跡を精査中に落ち込みを確認し、精査したところ土壌を検出した。

重複 第2号竪穴住居跡の西壁寄りで切り合っており、新旧関係は本遺構が古い。

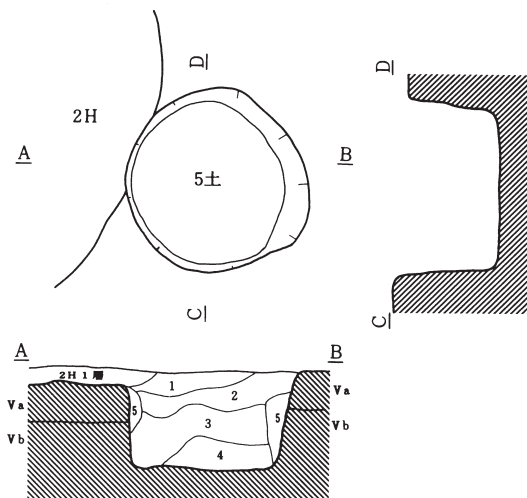
平面形・規模 平面形は、西側がやや張り出す円形を呈する。規模は、開口部で長径125cm、短径121cm、底面で長径105cm、短径100cmを測る。断面形は、開口部がやや開きぎみの円筒形

を呈する。

壁・底面 第 a、b層を掘り込んで作られ、底面は b層にあたる。東壁は垂直に立ち上がり、他の壁はやや傾斜している。壁高は、東壁50cm、西壁60cm、南壁56cm、北壁65cmを測る。底面は、ほぼ平坦で堅緻な構築である。 (成田・奈良)



Q-12



第1層	褐色	10YR4/4	炭化物・ローム粒を含む。粘性なし、しまりあり。
第2層	にぶい黄褐色	10YR5/4	黄褐色土を混入。炭化物・ローム粒を多量に含む。粘性なし、しまりあり。
第3層	黄褐色	10YR5/8	炭化物・ローム粒を多量に含む。粘性なし、しまりあり。
第4層	明黄褐色	10YR6/8	炭化物を少量含む。粘性、しまりあり。
第5層	明黄褐色	10YR4/8	混入物なし。粘性、しまりあり。

第77図 第5号土壌

第6号土壌

位置と確認 本遺構は、調査区北側の緩斜面にあるF-13グリッドに位置している。第 a層を精査中に落ち込みを確認し、精査したところ土壌を検出した。

平面形・規模 平面形は、南側がやや張り出す円形を呈する。規模は、開口部で長径78cm、短径69cm、底面で長径44cm、短径43cmを測る。断面形は浅い鍋底形を呈する。

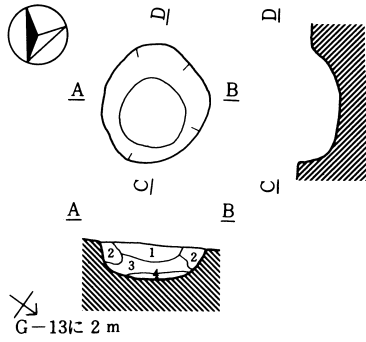
壁・底面 壁は、東・北壁が垂直に立ち上がり、西、南壁が緩やかに傾斜しており軟弱なつくりである。壁高は、東壁21cm、西壁18cm、南壁16cm、北壁22cmを測る。底面は、ほぼ平坦かたい構築である。

出土遺物 覆土中より土器3片が出土した。出土土器は第 群4類に比定される。

(成田・奈良)

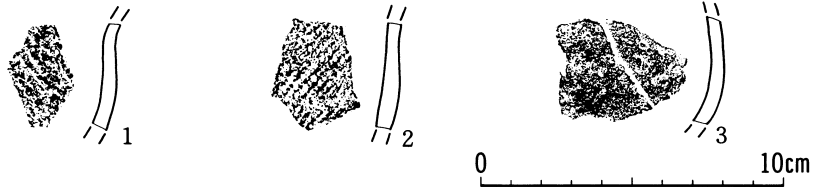
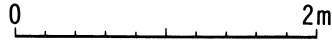
第7号土壌

位置と確認 本遺構は、調査区北側の台地平坦面にあるG・H-10・11グリッドに位置している。第 層を精査中に落ち込みを確認し、精査したところ土壌を検出した。



第6号土坑土層注記

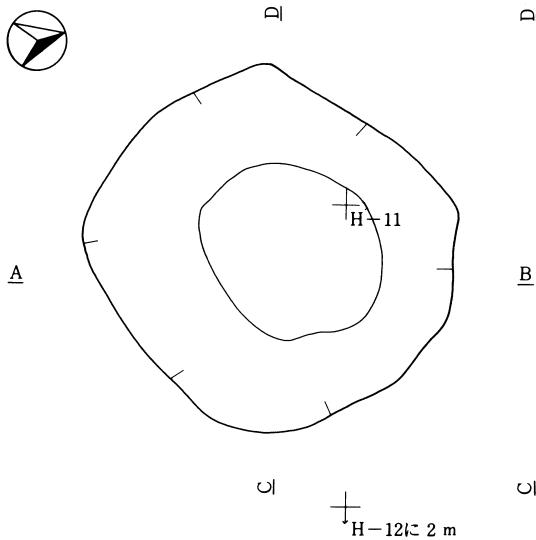
第1層	黒褐色	10YR2/3	ローム粒を微量に含む。粘性、し まりなし、湿性ややあり。
第2層	暗褐色	10YR3/3	ロームを含む。粘性、しまり弱く、 湿性ややあり。
第3層	黒褐色	10YR2/2	ローム粒を微量に含む。粘性ややあり、しま り2層より弱く、湿性あり。
第4層	褐色	10YR4/6	しまり強く、粘性ややあり。 湿性3層より強い。



第6号土坑土器観察表

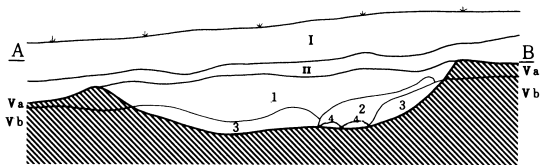
番号	地区・層位	部位	外面施文文様	分類
第78図-1	6土・覆土	胴部	無文	IV群4類
第78図-2	6土・覆土	胴部	縄文(LR) スス状炭化物付着	IV群4類
第78図-3	6土・覆土	胴部	無文	IV群4類

第78図 第6号土坑・出土遺物



第7号土坑土層注記

第1層	黒色	7.5YR2/1	炭化物及びローム粒を多量に含 む。粘性なし、しまりあり。
第2層	黒褐色	10YR2/3	炭化物及びローム粒を多量、若干褐色土 混入。粘性なし、しまり1層よりあり。
第3層	黒褐色	10YR2/2	炭化物及びローム粒を少量含む。 粘性なし、しまり2層と同じ。
第4層	にぶい 黄褐色	10YR5/4	炭化物を若干含む。粘性ややあ り、しまり2層と同じ。



第79図 第7号土坑

平面形・規模 平面形は、西側がやや鋭利に張り出し、他の部分が丸みをもつ不整形円形を呈する。規模は、開口部で長径246cm、短径242cm、底面で長径117cm、短径116cmを測る。断面形は、壁がなだらかに外傾する皿形を呈する。

壁・底面 第 a、 b層を掘り込んで構築されている。壁は、すべて開口部から底面にかけてなだらかに傾斜しており、軟弱なつくりである。壁高は、東壁19cm、西壁18cm、南壁35cm、北壁34cmを測る。底面は、ほぼ平坦であるが、やわらかく堅緻な構築ではない。

(成田・奈良)

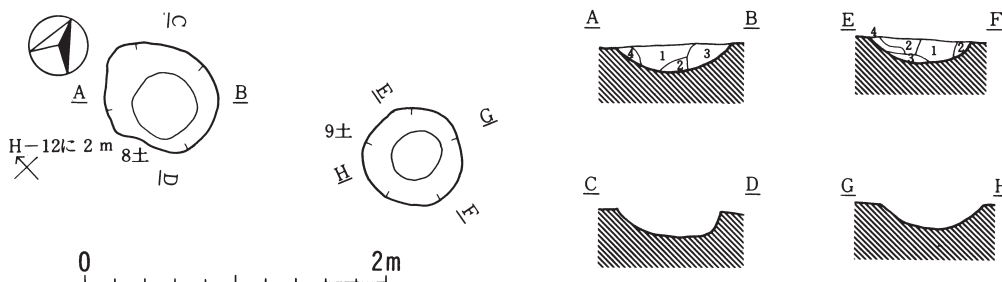
第8号土壌

位置と確認 本遺構は、調査区北側台地の緩斜面にあるH - 12グリッドに位置している。第 a層を精査中に褐色土の落ち込みを確認し、精査したところ土壌を検出した。

平面形・規模 平面形は、西側が比較的張り出した不整の楕円形を呈している。規模は、開口部で長径82cm、短径64cm、底面で長径44cm、短径40cmを測る。断面形は、東南壁がやや急に立ち上がる鍋底形を呈する。

壁・底面 壁は、東南壁がやや急に立ち上がり、他の壁は緩やかな立ち上がりである。壁高は、南壁10cm、北壁20cmを測る。壁、底面の構築はともに軟弱なつくりである。

(新谷・奈良)



層	色	色相	特徴
第1層	褐色	10YR4/6	炭化物及びローム粒を微量に含む。粘性なし、しまりあり。
第2層	にぶい黄褐色	10YR5/4	ローム粒及びロームを多量に含む。粘性ややあり、しまりあり。
第3層	暗褐色	10YR3/4	ローム粒及び炭化物を少量に含む。粘性なし、しまりあり。
第4層	褐色	10YR4/6	炭化物及びローム粒を少量に含む。粘性なし、しまりあり。

層	色	色相	特徴
第1層	黒褐色	10YR2/3	炭化物及びローム粒を少量に含む。粘性ややあり、しまりあり。
第2層	暗褐色	10YR3/3	炭化物及びローム粒を少量に含む。粘性ややあり、しまりあり。
第3層	黄褐色	10YR5/6	褐色土を混入。粘性あり、しまりあり。
第4層	暗褐色	10YR3/3	炭化物及びローム粒を微量に含む。粘性ややあり、しまりあり。

第80図 第8・9号土壌

第9号土壌

位置と確認 本遺構は、調査区北側台地緩斜面にあるH - 12グリッドに位置している。第 a

層を精査中に黒褐色土の落ち込みを確認し、精査したところ土壌を検出した。

平面形・規模 平面形は、ややいびつな円形を呈する。規模は、開口部で長径68cm、短径66cm、底面で長径35cm、短径31cmを測る。断面形は、壁が緩やかに傾斜する鍋底形を呈する。

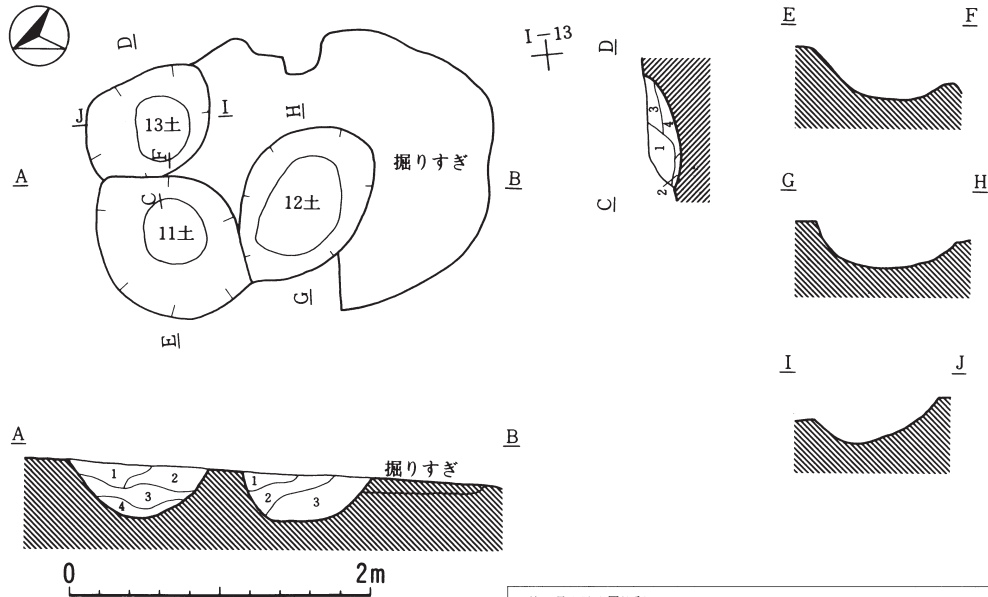
壁・底面 壁は、すべて緩やかな立ち上がりである。壁高は、南壁14cm、北壁17cmを測る。壁、底面の構築はともに軟弱なつくりである。

(新谷・奈良)

第11号土壌

位置と確認 本遺構は、調査区北側台地緩斜面にあるI-12グリッドに位置している。第 a 層を精査中に黒褐色土の落ち込みを確認し、精査したところ本遺構を検出した。また、精査中、第12、13号土壌もあわせて検出した。

重複 本遺構南壁は第12号土壌と切り合っているが、土層断面の位置がやや東側寄りで、本遺構と第12号土壌の土層接点になかったため、新旧関係は不明である。



層	色	Munsell	特徴
第1層	黒褐色	10YR 3/2	ローム粒をやや多量、ロームブロックを1個含む。粘性、しまりあり。
第2層	暗褐色	10YR 3/4	黄褐色土及びローム粒を少量に含む。粘性なし、しまりあり。
第3層	黒褐色	10YR 2/3	ロームブロックを多量に含み、暗褐色土を少量混入。粘性、しまりあり。
第4層	明黄褐色	10YR 6/8	暗褐色土を多量に混入。粘性、しまりあり。

層	色	Munsell	特徴
第1層	黒褐色	10YR 2/2	ローム粒を少量含む。粘性なし、しまりあり。
第2層	黒褐色	10YR 3/2	ローム粒を少量、ロームブロックを微量に含み、黄褐色土を混入。粘性、しまりあり。
第3層	褐色	10YR 4/4	ロームブロックを少量含み、黄褐色土を多量に混入。粘性、しまりあり。

層	色	Munsell	特徴
第1層	黒褐色	10YR 2/3	ローム粒を少量含む。粘性なし、しまりあり。
第2層	褐色	10YR 4/4	ロームブロックを微量、黄褐色をやや多量に含む。粘性、しまりあり。
第3層	暗褐色	10YR 3/3	ローム粒及びロームブロックを少量含む。粘性、しまりあり。
第4層	褐色	10YR 4/4	黄褐色土を多量、暗褐色土を微量に混入。粘性なし、しまりあり。

第81図 第11・12・13号土壌

平面形・規模 平面形は、南北にやや張り出した不整楕円形を呈している。規模は、開口部で長径122cm、短径84cm、底面で長径46cm、短径42cmを測る。断面形は、壁がやや緩やかに立ち上がる鍋底形である。

壁・底面 壁は、すべて緩やかに立ち上がって開口部に至る。壁高は、西壁30cm、北壁35cmを測る。壁、底面の構築は、ともに軟弱なつくりである。 (新谷・奈良)

第12号土壌

位置と確認 本遺構は、調査区北側台地緩斜面にあるⅠ-12グリッドに位置する。第 a層を精査中に黒褐色土の落ち込みを確認し、精査したところ土壌を検出した。

重複 本遺構北壁で、第11号土壌と切り合っているが、新旧関係は確認できなかった。

平面形・規模 平面形は、南北がやや張り出した不整楕円形を呈している。規模は、開口部で長径118cm、短径84cm、底面で長径72cm、短径49cmを測る。断面形は鍋底形を呈する。

壁・底面 壁は、北壁がやや急激に立ち上がり、その他の壁は比較的緩やかに立ち上がって開口部に至る。壁高は、西壁31cmである。他の壁高は、切り合い関係や掘り過ぎのために確認できなかった。壁、底面の構築は、ともに軟弱なつくりである。 (新谷・奈良)

第13号土壌

位置と確認 本遺構は、調査区北側台地緩斜面にあるⅠ-12・13グリッドに位置している。第 a層を精査中に黒褐色土の落ち込みを確認し、精査したところ土壌を検出した。

重複 本遺構の西壁で、第11号土壌と切り合っている。新旧関係は、第11号土壌が新しい。

平面形・規模 平面形は、ややいびつな円形を呈している。規模は、開口部で長径94cm、短径78cm、底面で長径44cm、短径35cmを測る。断面形は、北壁が緩やかに立ち上がる鍋底形である。

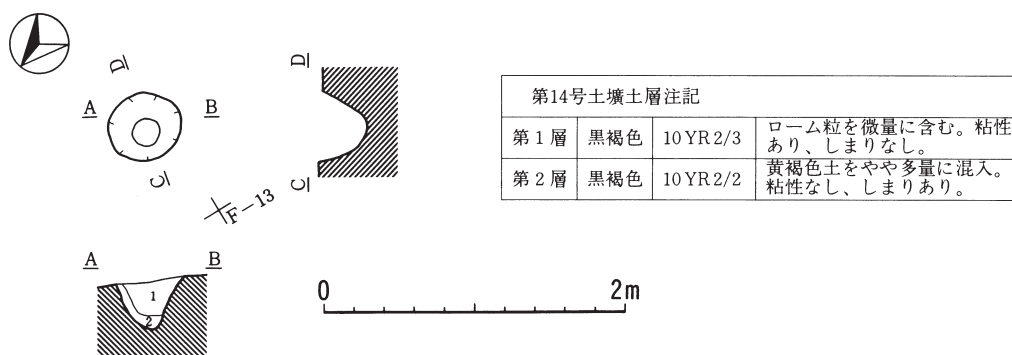
壁・底面 壁は、全般的に緩やかに立ち上がりながら開口部に至る。壁高は、東壁30cm、北壁38cmを測る。壁、底面の構築は、ともに軟弱なつくりである。 (新谷・奈良)

第14号土壌

位置と確認 本遺構は、調査区北側台地緩斜面にあるⅠ-13グリッドに位置している。第 a層を精査中に黒褐色土の落ち込みを確認し、精査したところ土壌を検出した。

平面形・規模 平面形は、ややいびつな円形を呈している。規模は、開口部で長径48cm、短径46cm、底面で長径19cm、短径18cmを測る。断面形は、底面がやや尖底ぎみで、壁がやや急激な立ち上がりをみせる擂鉢形を呈している。

壁・底面 壁は、全般的に急激に立ち上がりながら開口部に至る。壁高は、南壁32cm、北壁29cmを測る。壁、底面の構築は、ともにやや軟弱なつくりである。 (新谷・奈良)



第82図 第14号土壌

第15号土壌

位置と確認 本遺構は、調査区北側台地平坦面にあるO - 16グリッドに位置している。第 a 層を精査中に落ち込みを確認し、精査したところ土壌を検出した。

重複 本遺構の北側で第16号土壌と、東側で第17号土壌と切り合っている。新旧関係は、第16号土壌より古いが、第17号土壌との新旧関係はつかめなかった。

平面形・規模 平面形は、ほぼ円形を呈する。規模は、開口部で長径148cm、短径145cm、底面で長径155cm、短径153cmを測る。断面形は、壁の中端で張り出し、底面にかけて抉られているフラスコ状を呈する。

壁・底面 本遺構は、第 a、b層を掘り込んで作られ、底面は第 b層にあたる。壁は、堅緻なつくりである。壁高は、東壁 20 cm、西壁60cm、南壁76cm、北壁 50 cmを測る。底面は、ほぼ平坦で堅緻なつくりである。 (成田・奈良)

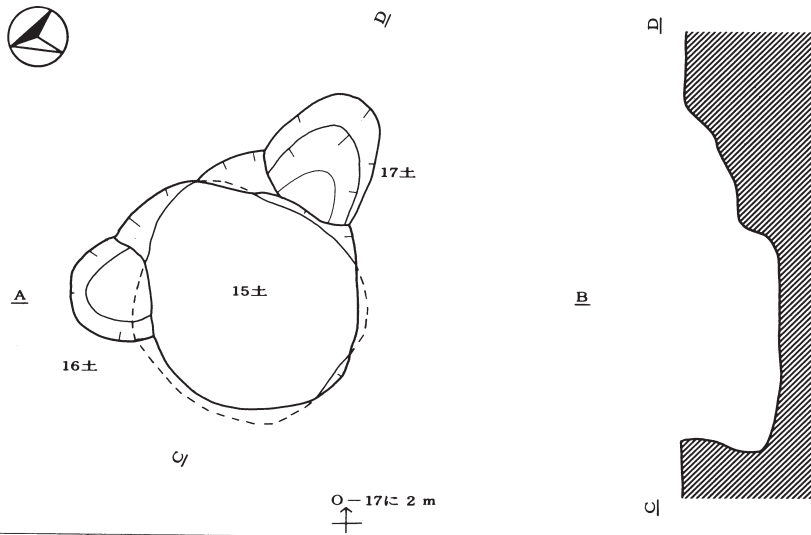
第16号土壌

位置と確認 本遺構は、調査区北側台地平坦面にあるO - 16グリッドに位置している。第 a 層を精査中に落ち込みを確認し、精査したところ土壌を検出した。

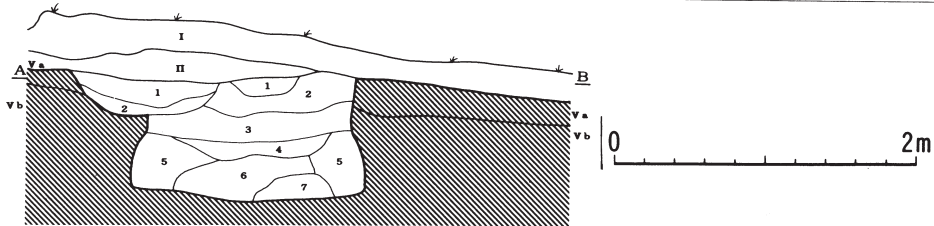
重複 本遺構の南側で、第15号土壌と切り合っている。新旧関係は、本遺構が新しい。

平面形・規模 平面形は、南北に長軸をもつ楕円形を呈する。規模は、開口部で長径98cm、短径 56 cm、底面で長径70cm、短径 46 cmを測る。断面形は、壁が緩やかに立ちあがる鍋底形を呈する。

壁・底面 壁は、すべて開口部から底部にかけてなだらかに傾斜しており、軟弱なつくりで



第15号土壌土層注記			
第1層	暗褐色	10 YR3/4	炭化物を少量含む。粘性なし、しまりあり。
第2層	褐色	10 YR4/4	炭化物及びローム粒を微量に含む。若干ローム混入。粘性なし、しまり1層より弱い。



第16号土壌土層注記			
第1層	黒褐色	10 YR2/3	ローム粒及び炭化粒を多量に含む。粘性なし、しまりあり。
第2層	暗褐色	10 YR3/4	ローム粒及び炭化粒を少量含む。粘性なく、しまり1層より弱い。
第3層	暗褐色	10 YR3/3	ローム粒及び黒褐色土を多量に含む。粘性なく、しまり2層より弱い。
第4層	褐色	10 YR4/4	ローム粒及び炭化物を多量に含む。粘性なく、しまり3層より弱い。
第5層	褐色	10 YR4/6	ローム粒を多量、炭化物を少量含む。粘性なし、しまり4層と同じ。
第6層	暗褐色	10 YR3/4	ローム粒を多量、黒色土を若干混入。粘性なし、しまり5層と同じ。
第7層	褐色	10 YR4/4	ローム粒及び暗褐色土を混入。粘性なし、しまり6層と同じ。

第83図 第15・16・17号土壌

ある。壁高は、東壁16cm、西壁17cm、南壁20cm、北壁26cmを測る。底面は、やわらかく、堅緻な構築ではない。 (成田・奈良)

第17号土壌

位置と確認 本遺構は、調査区北側台地の平坦面にあるN - 17グリッドに位置している。第15号土壌を精査中に落ち込みを確認し、精査したところ土壌を検出した。

重複 本遺構の西側で、第15号土壌と切り合っている。新旧関係は不明である。

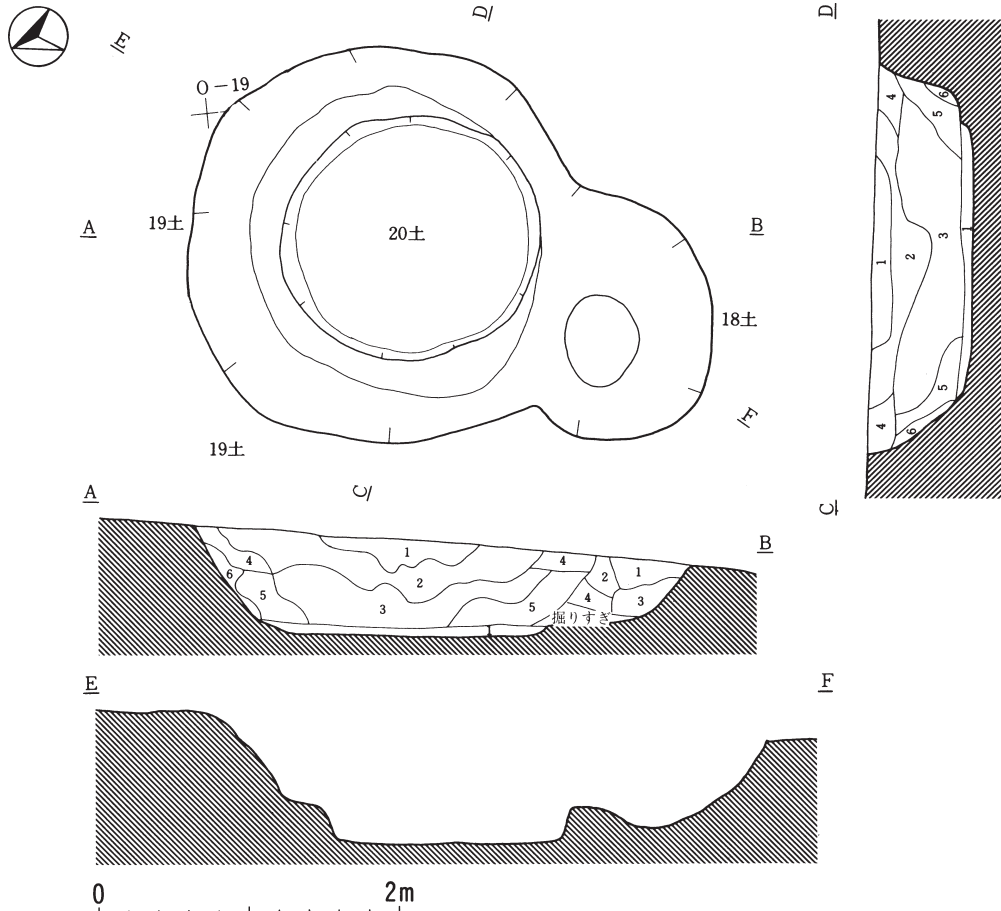
平面形・規模 平面形は、残存部から推定すると、ほぼ楕円形を呈すると思われる。規模は、開口部で長径 85 ㎝、短径 70 ㎝、底面で長径 35 ㎝、短径 28 ㎝を測る。

壁・底面 壁は、凹凸が著しく、また、軟弱なつくりである。壁高は、東壁19cm、南壁30cm、北壁20cmを測る。底面は、ほぼ平坦であるが、壁同様やわらかい。 (成田・奈良)

第18号土壌

位置と確認 本遺構は、調査区北側台地の平坦面にあるN - 18グリッドに位置している。第a層を精査中に落ち込みを確認し、精査したところ土壌を検出した。

重複 本遺構の北側で第19、20号土壌と切り合っている。新旧関係は、第19、20号土壌より古い。



第18号土壌土層注記			
第1層	暗褐色	10YR3/4	ロームブロックを微量に混入。粘性なし、しまりあり。
第2層	褐色	10YR4/6	黄褐色土を少量混入。粘性あり、しまりなし。
第3層	褐色	10YR4/4	黄褐色土及び炭化物を少量含む。粘性、しまりなし。
第4層	褐色	10YR4/6	ロームブロックを少量含む。粘性なし、しまりあり。

第19号土壌土層注記			
第1層	黒褐色	10YR2/2	ローム粒を少量含む。粘性なし、しまりあり。
第2層	黒褐色	10YR3/2	ローム粒及び暗褐色土を多量に含む。粘性ややあり、しまりあり。
第3層	いぶい黄褐色	10YR5/4	ローム粒及び炭化物を少量、焼土及び暗褐色土を若干混入。粘性、しまりあり。
第4層	暗褐色	10YR3/4	ローム粒を微量に含む。粘性1層よりあり、しまりあり。
第5層	黄褐色	10YR5/6	炭化物及び明黄褐色土を少量含む。粘性、しまりあり。
第6層	明黄褐色	10YR6/8	混入物なし。粘性、しまりあり。

第20号土壌土層注記			
第1層	明黄褐色	10YR6/8	暗褐色土をブロック状に混入。

第84図 第18・19・20号土壌

平面形・規模 平面形は、北側部分が不明であるが、残存部から推定すると、ほぼ円形を呈すると思われる。規模は、開口部で長径158cm、短径120cm、底面で長径62cm、短径49cmを測る。断面形は鍋底形と思われる。

壁・底面 壁は北側が不明であり、他の壁はすべて開口部から底面にかけてなだらかに傾斜している。その構築は軟弱なつくりである。壁高は、東壁35cm、西壁35cm、南壁36cmを測る。底面はやわらかく、堅緻な構築ではない。
(成田・奈良)

第19号土壌

位置と確認 本遺構は、調査区北側台地の平坦面にあるN - 18、19グリッドに位置している。第 a層を精査中に落ち込みを確認し、精査したところ土壌を検出した。

重複 第18、20号土壌と切り合っている。新旧関係は、第18、20号土壌より新しい。

平面形・規模 平面形は、ほぼ円形を呈する。規模は、開口部で長径264cm、短径262cm、底面で長径212cm、短径193cmを測る。断面形は、底面から緩やかに外傾しながら開口部に至る形状を呈する。

壁・底面 壁は、すべて開口部から底面にかけて傾斜しており、堅緻なつくりである。壁高は、東壁47cm、西壁57cm、南壁51cm、北壁54cmを測る。底面は、ほぼ平坦で、中央部がやわらかく周縁部はかたい。
(成田・奈良)

第20号土壌

位置と確認 本遺構は、調査区北側台地の平坦面にあるN - 18グリッドに位置している。第19号土壌を精査中に落ち込みを確認し、精査したところ土壌を検出した。

重複 第18、19号土壌と切り合っている。新旧関係は、第18号土壌より新しく、第19号土壌より古い。

平面形・規模 平面形は、第19号土壌に切られている為に、底面寄りのみ残存している。残存部はほぼ円形を呈する。規模は、開口部で長径175cm、短径166cm、底面で長径152cm、短径144cmを測る。

壁・底面 壁は、すべて開口部から底面にかけて傾斜しており、やわらかい。壁高は、東壁7cm、西壁8cm、南壁7cm、北壁8cmを測る。底面は、ほぼ平坦で堅緻な構築である。
(成田・奈良)

第21号土壌

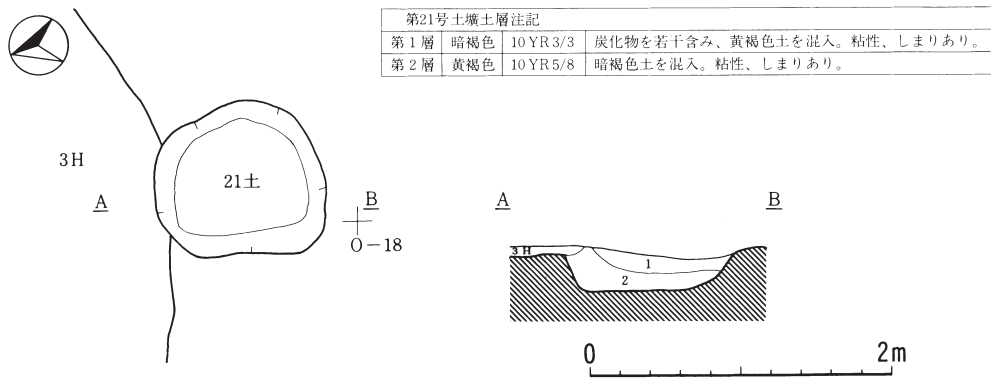
位置と確認 本遺構は、調査区北側台地の平坦面にあるO - 17・18グリッドに位置している。

第3号竪穴住居跡を精査中に落ち込みを確認し、精査したところ土壌を検出した。

重複 第3号竪穴住居跡の南壁で切り合っており、新旧関係は本遺構が古い。

平面形・規模 平面形は、南北が丸みをもち、東西が挟れる不整形円形を呈する。規模は、開口部で長径113cm、短径100cm、底面で長径88cm、短径73cmを測る。断面形は皿形を呈する。

壁・底面 壁は、開口部から底面にかけて緩やかに傾斜しており、軟弱なつくりである。壁高は、東壁24cm、西壁22cm、南壁24cm、北壁28cmを測る。底面はほぼ平坦でやわらかく、堅緻な構築ではない。(成田・奈良)

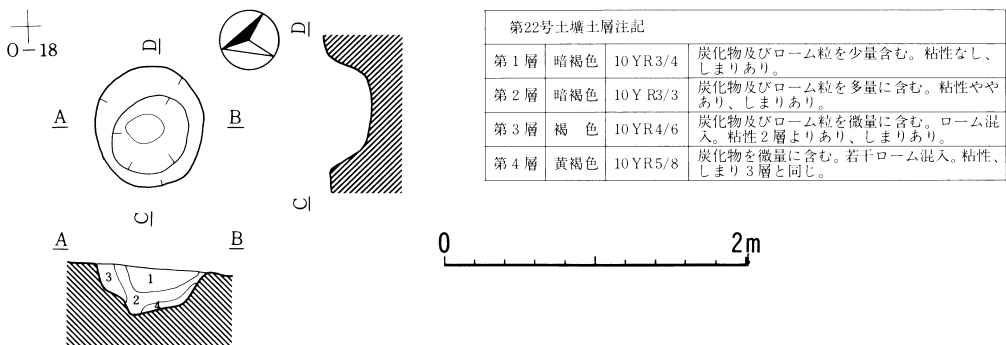


第85図 第21号土壌

第22号土壌

位置と確認 本遺構は、調査区北側台地の平坦面にあるN-17グリッドに位置している。第a層を精査中に落ち込みを確認し、精査したところ土壌を検出した。

平面形・規模 平面形は、東西がやや張り出す円形を呈する。開口部で長径81cm、短径75cm、底面で長径24cm、短径21cmを測る。断面形は、北壁がいびつな形状ではあるが、全体的に鍋底



第86図 第22号土壌

形を呈する。

壁・底面 壁は、北壁の底面寄りで段を有しており、他の壁は開口部から底面にかけてなだらかに傾斜している。その構築はやわらかくもろい。壁高は、東壁37cm、西壁25cm、南壁27cm、北壁35cmを測る。底面は平坦であるが壁と同じくやわらかく、堅緻な構築ではない。

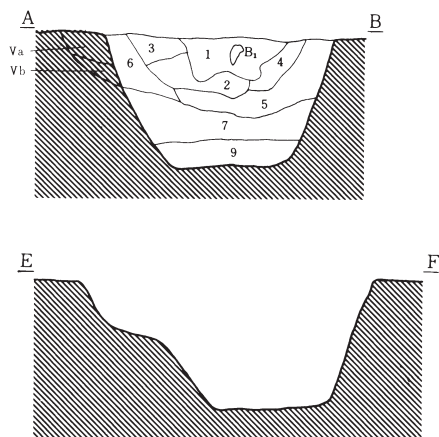
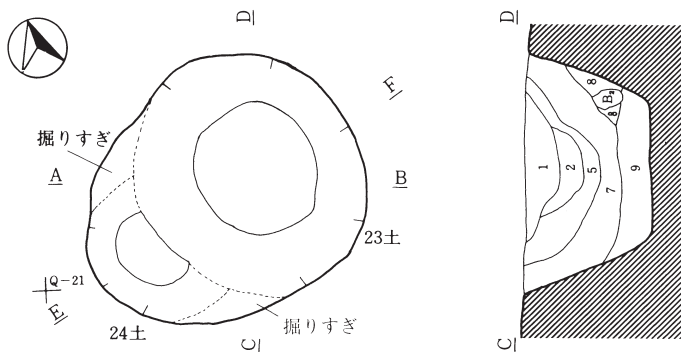
(成田・奈良)

第23号土壌

位置と確認 本遺構は、調査区北側台地の平坦面にあるQ - 12グリッドに位置している。第a層上面で黒色土の落ち込みを確認し、精査したところ土壌を検出した。周辺には第3号竪穴住居跡、第18・19号土壌が分布している。

重複 本遺構は、西南側で第24号土壌と切り合っており、新旧関係は本遺構が新しい。

平面形・規模 平面形は、西南側が不明であるが、残存部から推定するとほぼ円形を呈すると思われる。規模は、開口部で長径160cm、短径154cm、底面で長径88cm、短径82cmである。断



第23号土壌注記				
第1層	黒色	10YR1.7/1	ローム粒を若干含む。粘性ややあり、しまり弱い。	
第2層	黒褐色	10YR2/2	ローム粒及び炭化物を微量に混入。粘性あり、しまり1層よりあり。	
第3層	黒色	10YR2/1	ローム粒を微量に混入。粘性ややあり、しまり2層よりあり。	
第4層	黒褐色	10YR3/2	ローム粒を少量、炭化物を多量に含む。粘性なく、しまり弱い。	
第5層	黒褐色	10YR2/3	炭化物及びローム粒を少量含む。粘性ややあり、しまり弱い。	
第6層	暗褐色	10YR3/3	ローム粒を少量、機土粒を微量に含む。粘性、しまりややあり。	
第7層	暗褐色	10YR3/4	小ブロック状のロームを多量に混入。粘性なし、しまり弱い。	
第8層	褐色	10YR4/4	ロームを少量混入。粘性なく、しまり弱い。	
第9層	にぶい黄褐色	10YR4/3	ロームブロックを多量、炭化物を少量含む。粘性なく、しまり弱い。	
B1層	黒色	10YR2/1	ローム粒を多量に混入。粘性強く、しまり弱い。	
B2層	黒褐色	10YR3/2	ロームブロックを少量混入。粘性あり、しまり弱い。	

第87図 第23・24号土壌

面形は、壁がやや急激に立ち上がりながら開口部に至り、円筒形に近い形状である。

壁・底面 壁は、各壁とも底面からやや急激に立ち上がりながら開口部に至る。壁高は、南壁84cm、北壁80cmを測り、壁の構築は堅く、堅緻なつくりである。底面は平坦で、壁同様堅緻な構築である。 (奈良)

第24号土壌

位置と確認 本遺構は、調査地区北側台地の平坦面にあるQ - 21グリッドに位置している。第23号土壌を精査中に落ち込みを確認し、精査したところ土壌を検出した。

重複 東北側で第23号土壌と切り合っており、新旧関係は本遺構が古い。

平面形・規模 本遺構は、東北側が不明であるが、残存部から推定すると円形を呈すると思われる。規模は、開口部で長径 104 ㎝、短径 100 ㎝、底面で長径53cm、短径 30 ㎝を測る。

壁・底面 壁は、残存部の南壁、西壁が緩やかに立ち上がりながら確認面に至る。壁高は、南壁32cm、西壁28cmを測り、堅緻な構築である。底面は平坦で、壁同様堅緻である。

(奈良)

第25号土壌

位置と確認 本遺構は、調査区北側の緩斜面にあるAT・AS - 6 グリッドに位置している。第 a 層を精査中に落ち込みを確認し、精査したところ土壌を検出した。

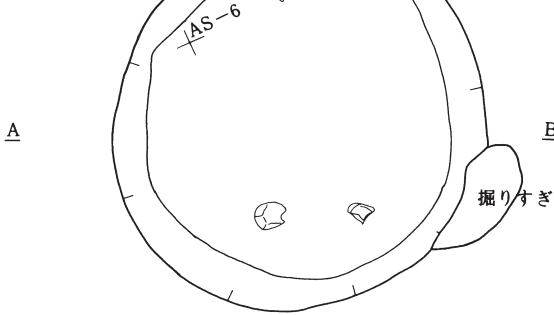
平面形・規模 平面形は、ほぼ円形を呈する。規模は、開口部で長径248cm、短径244cm、底面で長径206cm、短径203cmを測る。断面形は、底面が平坦で壁が緩やかに傾斜しながら開口部に至る形態を呈する。

壁・底面 第 a、 b層を掘り込んで作られ、底面は第 b層にあたる。南壁は中端で段を有しているが、他の壁は開口部から底面にかけて緩やかに傾斜している。また、その構築はかた、堅緻なつくりである。壁高は、東壁68cm、西壁36cm、南壁55cm、北壁48cmを測る。底面は、ほぼ平坦で堅緻な構築である。

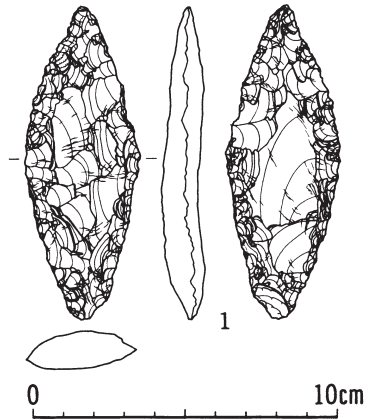
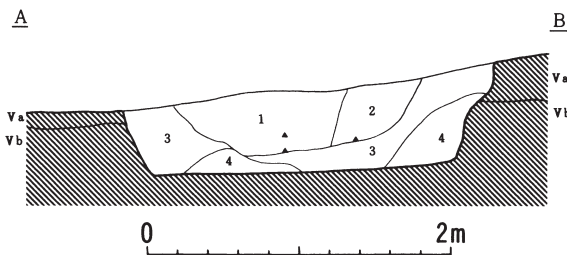
出土遺物 土壌内から、石槍 1 点、自然礫 2 点が覆土中から出土したが、土器は出土しなかった。 (成田・奈良)

第26号土壌

位置と確認 本遺構は、調査区北側台地の斜面にあるE - 3 グリッドに位置している。第 a 層上面で、均整のとれた円形の落ち込みを確認した。周辺には、南側に第10号竪穴住居跡、北側に第 9 号竪穴住居跡が分布している。



第1層	黒褐色	10YR2/2	ローム及び炭化物を微量に含む。粘性なし、しまり弱い。
第2層	黒褐色	10YR3/3	ローム粒を少量、炭化粒を微量に含む。粘性なし、しまり1層よりあり。
第3層	褐色	10YR4/4	ローム粒を多量、小ブロック状の炭化物及び焼土粒を微量に含む。粘性ややあり、しまり2層より強い。
第4層	褐色	10YR4/6	黄褐色土をやや多めに、炭化物を少量含む。粘性、しまりあり。



第25号土壌石器観察表

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)			
第88図-1	25土	3	103	37	13	47.7	珪	B	

第88図 第25号土壌・出土遺物

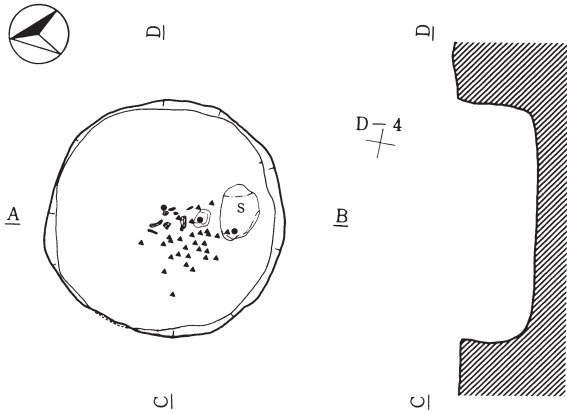
平面形・規模 平面形は、均整のとれた円形を呈している。規模は、開口部で長径156cm、短径155cm、底面で長径152cm、短径150cmを測る。断面形は、底面が平坦で壁がほぼ垂直に立ちあがる形状を呈する。

壁・底面 第 a、b層を掘り込んで作られ、底面は第 b層にあたる。西壁は底面から中端にかけて若干抉られ、内湾しながら立ち上がるが、他壁はほぼ垂直に立ち上がる。壁高は、東壁52cm、西壁44cm、南壁38cm、北壁49cmを測る。各壁とも堅緻な構築である。底面は、平坦で壁同様に堅緻なつくりである。

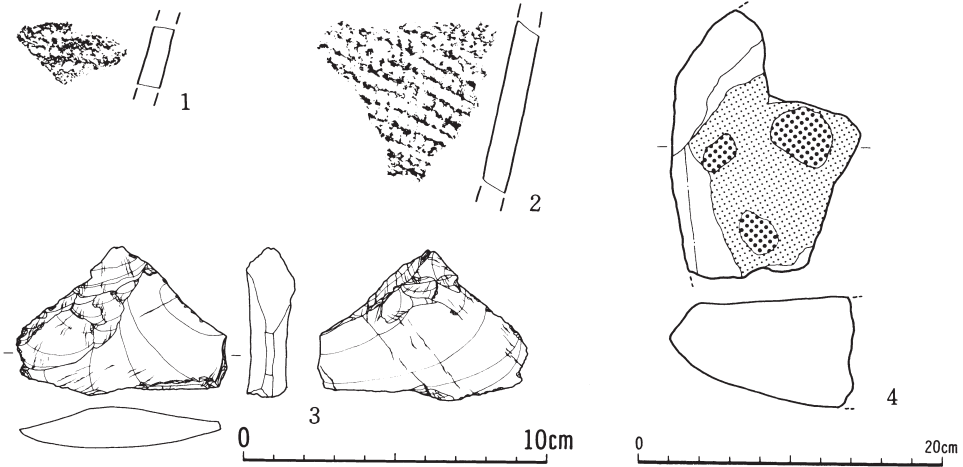
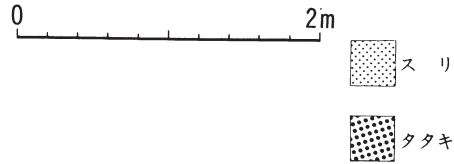
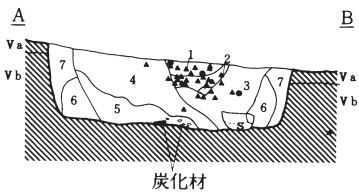
出土遺物 長径4～5cmの自然礫が第3、4層に集中し、底面からは大きな礫が1点出土した。また、剥片石器が若干出土した。土器の出土は3点である。さらに、底面中央部で、炭化材が約40cm四方に集中して出土した。出土土器は第 群2類に比定される。(奈良)

第27号土壌

位置と確認 本遺構は、調査区北側台地の斜面にあるH-1・2グリッドに位置している。最



第1層	黒色	10YR2/1	炭化物及びローム粒を少量含む。粘性なし、し まりあり。
第2層	黒褐色	10YR2/2	炭化物及びローム粒を微量に含む。粘性なし、 しまりあり。
第3層	暗褐色	10YR3/3	ローム粒を多量、炭化物を少量含む。粘性、し まりなし。
第4層	暗褐色	10YR3/4	ローム粒を多量、炭化物を少量含む。粘性、し まりなし。
第5層	にぶい 黄褐色	10YR4/3	炭化物を多量、ローム粒をやや多めに含む。粘 性、しまりなし。
第6層	褐色	10YR4/6	ローム粒及び炭化物を少量含む。粘性ややあり、 しまりなし。
第7層	黄褐色	10YR5/8	炭化物を少量、褐色土を若干混入。又、ローム粒 を多量に含む。粘性6層よりあり、しまりなし。



第26号土壌土器観察表

番号	地区・層位	部位	外面施文文様	分類
第89図-1	26土・覆土	胴部	複節縄文 (RLR)	II群2類
第89図-2	26土・覆土	胴部	複節縄文 (RLR)	II群2類

第26号土壌石器観察表

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)			
第89図-3	26土	覆土	47	68	15	43.7	珪	F	
第89図-4	26土	2	(174)	(122)	69	(1500)	安	N	欠損

第89図 第26号土壌・出土遺物

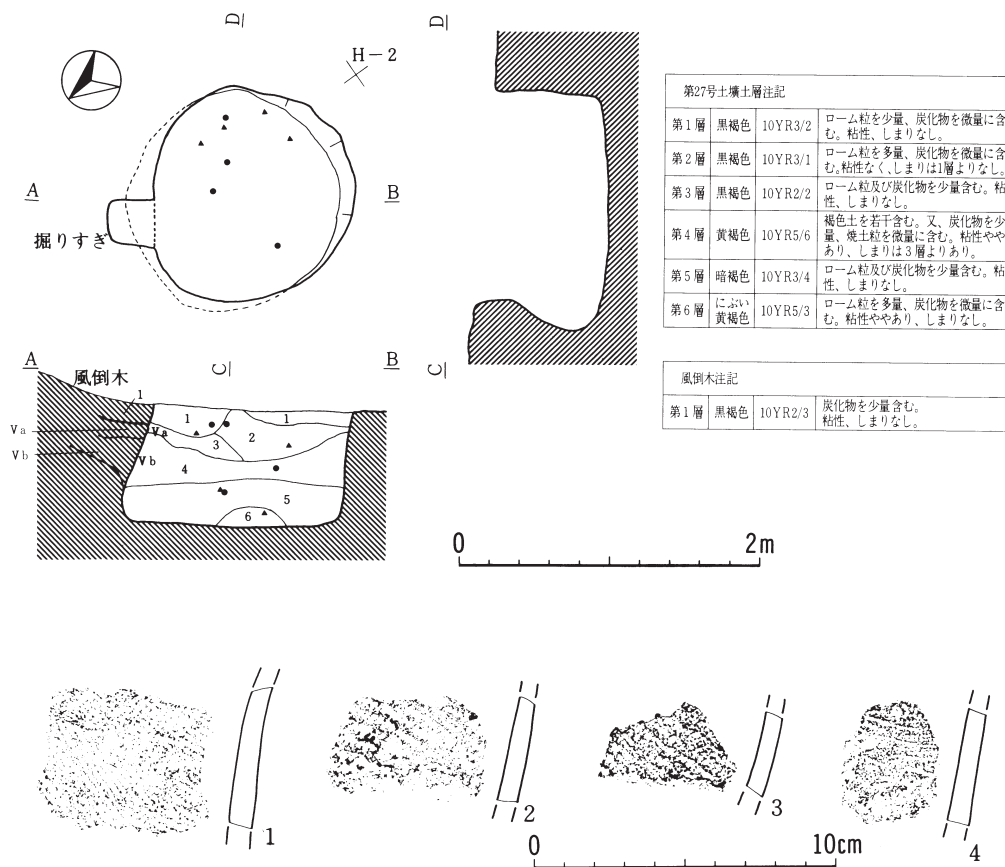
初、風倒木痕かと思われたが、精査したところ風倒木痕と切り合っている土壌を検出した。

重複 本遺構は、風倒木痕と切り合っており、新旧関係は本遺構が古い。

平面形・規模 平面形は、北側が不明であるが、不整な円形を呈すると思われる。規模は、開口部で長径142cm、短径140cm、底面で長径138cm、短径136cmを測る。

壁・底面 壁は、西壁が底面より中端にかけて張り出しており、東壁、南壁は底面よりほぼ垂直に立ち上がって開口部に至る。壁高は、東壁68cm、西壁80cm、南壁70cmを測り、壁の構築は堅緻である。底面は平坦で、壁同様に堅緻な構築である。

出土遺物 土器片 4 点、自然礫 4 点が覆土中より出土した。遺物は各層に分散している。出土土器は第 群 4 類に比定される。 (奈良)



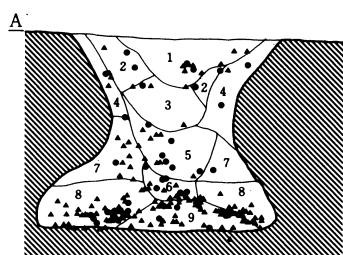
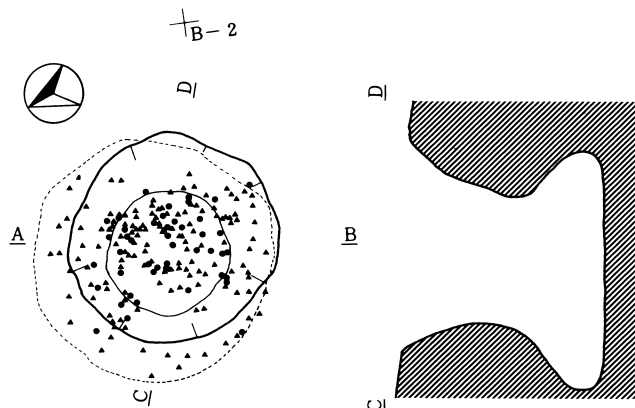
第27号土壌土器観察表

番号	地区・層位	部位	外面施文文様	分類
第90図-1	27 土・1 層	胴部	縄文 (LR) スズ状炭化物附着	IV 群 4 類
第90図-2	27 土・覆土	胴部	縄文 (LR)	IV 群 4 類
第90図-3	27 土・5 層	胴部	縄文 (LR)	IV 群 4 類
第90図-4	27 土・1 層	胴部	縄文 (LR)	IV 群 4 類

第90図 第27号土壌・出土遺物

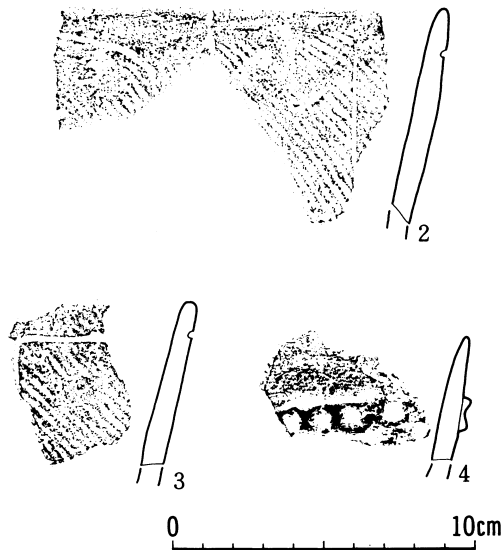
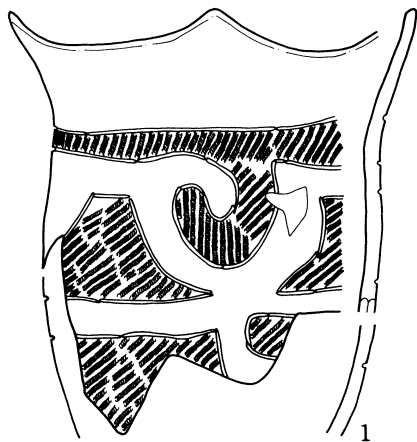
第28号土壌

位置と確認 本遺構は、調査区北側台地の斜面にある B - 1 グリッドに位置している。第 a



層	色	記号	特徴
第1層	黒褐色	10YR2/2	ローム粒及び炭化物を少量含む。粘性なし、しまりややあり。
第2層	"	10YR2/3	ローム粒を少量、炭化物を微量に含む。粘性なし、しまりなし。
第3層	暗褐色	10YR3/3	ローム粒及び炭化物を微量に含む。粘性、しまりなし。
第4層	"	10YR3/4	ロームをやや多めに、炭化物を微量に含む。粘性ややあり、しまりなし。
第5層	褐色	10YR4/4	ローム粒を微量、炭化物を少量含む。粘性ややあり、しまりなし。
第6層	暗褐色	10YR3/4	ローム粒及び炭化物を少量含む。粘性ややあり、しまりなし。
第7層	黄褐色	10YR5/6	ローム粒及び炭化物少量含む。粘性ややあり、しまりなし。
第8層	によい黄褐色	10YR5/4	ローム粒を少量、炭化物を微量に含む。粘性あり、しまりなし。
第9層	暗褐色	10YR3/4	ローム粒を少量、炭化物を多量に混入。粘性、しまりなし。

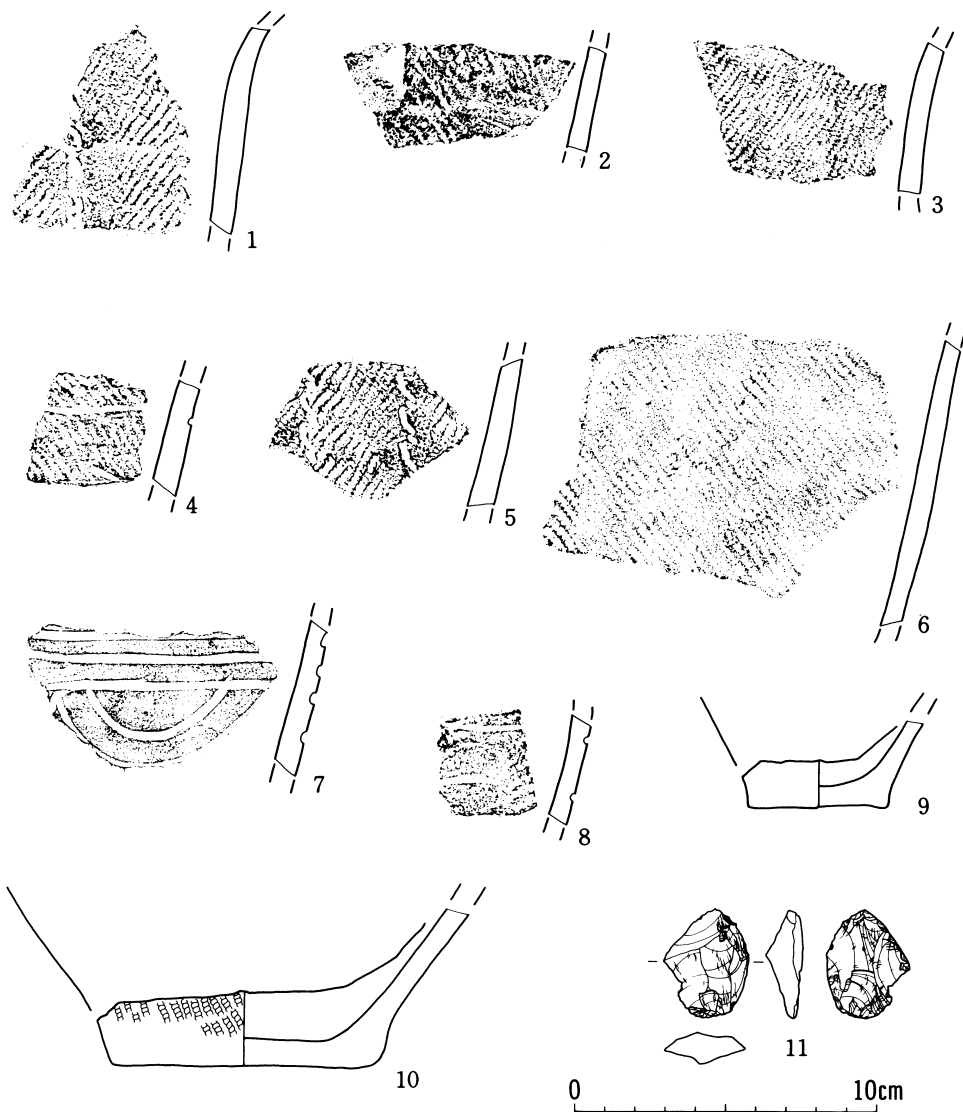
0 2m



第28号土壌土器観察表

番号	地区・層位	部位	外面施文	文様	分類
第91図-1	28土・4・9層・床直	口縁・胴部	口縁部無文、胴部磨消	縄文(LR)	IV群1類
第91図-2	28土・覆土	口縁部	縄文、弧状・縦位・横位	沈線	IV群1類
第91図-3	28土・5層	口縁部	縄文、横位	沈線	IV群1類
第91図-4	28土・1層	口縁部	横位	粘土紐、圧痕	IV群1類

第91図 第28号土壌・出土遺物(1)



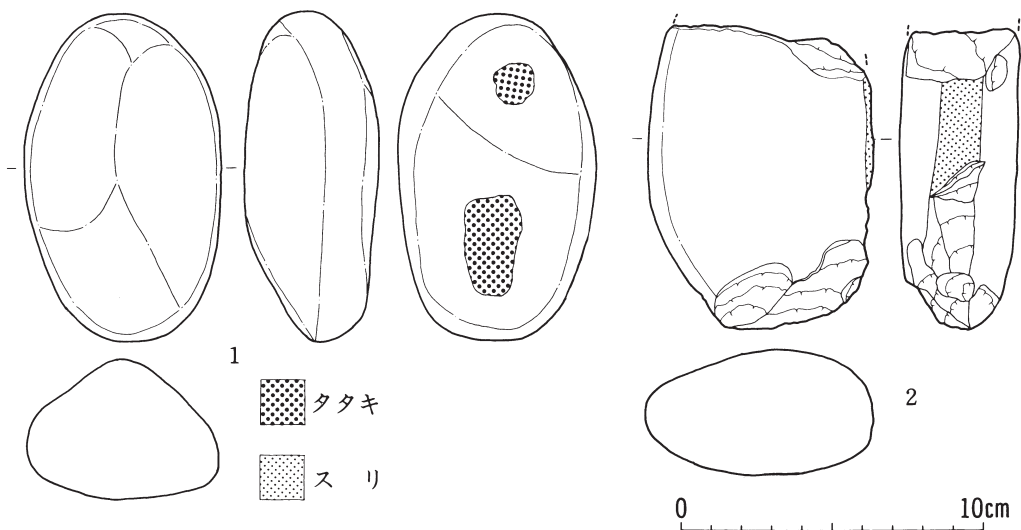
第28号土壙土器観察表

番号	地区・層位	部位	外面施文文様	分類
第92図-1	28 土・床直	胴部	縄文 (RL) スス状炭化物附着	Ⅳ群1類
第92図-2	28 土・7層	胴部	縄文 (RL)	Ⅳ群4類
第92図-3	28 土・6層	胴部	縄文 (RL) スス状炭化物附着	Ⅳ群4類
第92図-4	28 土・5層	胴部	縄文、横位沈線	Ⅳ群1類
第92図-5	28 土・床直	胴部	縄文 (LR) 縦位綾絡文、スス状炭化物附着	Ⅳ群1類
第92図-6	28 土・3層	胴部	縄文 (LR) スス状炭化物附着	Ⅳ群4類
第92図-7	28 土・7層	胴部	横位・弧状沈線	Ⅳ群3類
第92図-8	28 土・覆土	胴部	縄文 (RL) 横位・弧状沈線	Ⅳ群1類
第92図-9	28 土・覆土	底部	無文	Ⅳ群4類
第92図-10	28 土・覆土	底部	縄文 (RL)	Ⅳ群4類

第28号土壙土器観察表

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)			
第92図-11	28土	覆土	36	28	12	80	玉珪	F	

第92図 第28号土壙・出土遺物(2)



第28号土壌石器観察表

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)			
第93図-1	28土	床直	108	65	42	427	安	J	
第93図-2	28土	6	(100)	73	37	(411)	安	J	欠損、剥離あり。

第93図 第28号土壌・出土遺物(3)

層上面で黒褐色土の落ち込みを確認し、精査したところ土壌を検出した。

形態・規模 平面形は、凹凸のある不整円形を呈する。規模は、開口部で長径141cm、短径140cm、底面で長径162cm、短径158cmを測る。断面形は、底面寄りの壁が比較的張り出したフラスコ形を呈する。

壁・底面 壁は、底面寄りが張り出し、中端で内側に戻り、さらに中端より外傾しながら開口部に至る。壁高は、東壁128cm、西壁134cm、南壁126cm、北壁129cmで、堅緻な構築である。底面は平坦で、壁同様に堅緻な構築である。

出土遺物 遺物は土器片が約40点、自然礫が約140点出土している。土器は各層に分散した状態で出土した。石器は大部分が自然礫で、第6～9層に多く分布している。第91図-1の土器は、第4、9層、床直から出土した土器片が接合したものである。器形は胴部にふくらみをもち、口縁部が外反し、波状を呈している。第92図-11は不定形石器、第93図-1は敲打痕をもつ礫石器、第93図-2は擦痕のある礫石器である。出土土器は第群に比定される。

(奈良)

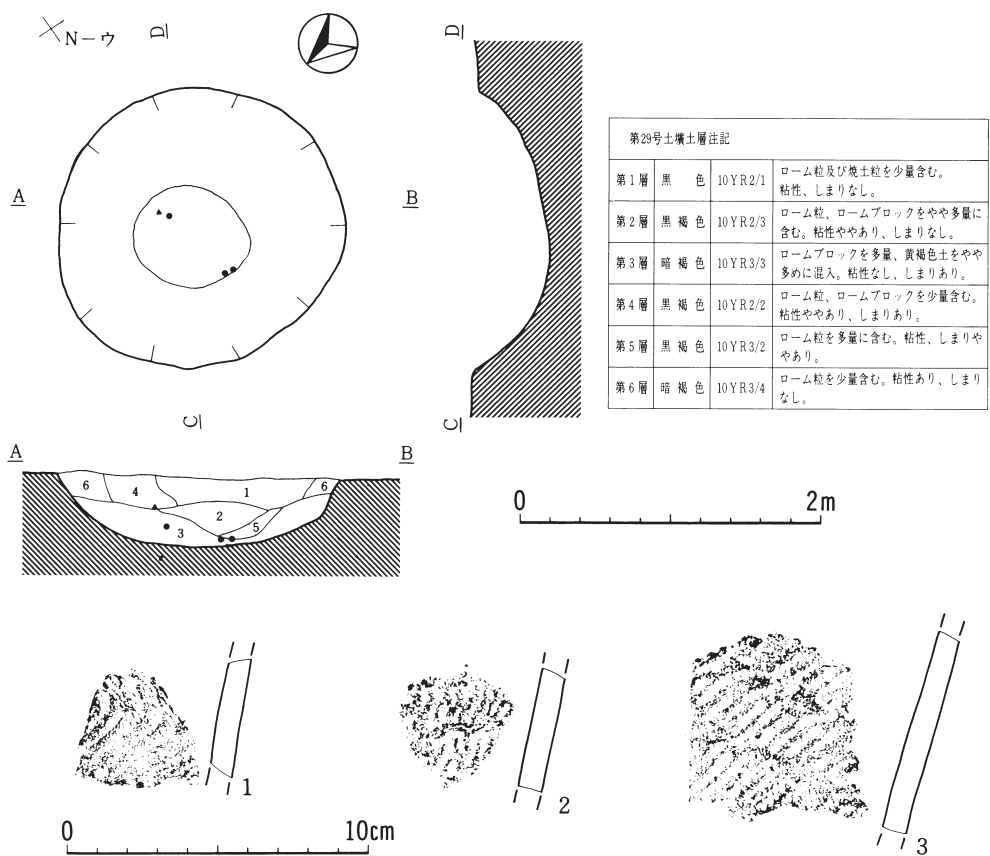
第29号土壌

位置と確認 本遺構は、調査区北側台地の平坦面にあるM・N-エグリッドに位置している。第a層上面で黒褐色土の落ち込みを確認し、精査したところ土壌を検出した。

平面形・規模 平面形は、ほぼ均整のとれた円形を呈する。規模は、開口部で長径192cm、短径184cm、底面で長径70cm、短径69cmである。断面形は鍋底形である。

壁・底面 壁は、全体的に緩やかな傾斜であるが、東南側がだらだらとした緩傾斜である。壁高は、北東壁40cm、南西壁38cm、北西壁40cm、南東壁30cmを測り、壁の構築は軟弱である。底面は、ほぼ平坦に近く、壁よりも堅緻なつくりである。

出土遺物 土器 3 点、自然礫 1 点が出土した。土器は第 3 層より、礫は第 4 層より出土した。出土土器は第 群 2 類に比定される。 (奈良)



層	色	10YR	土層記
第1層	黒色	10YR 2/1	ローム粒及び焼土粒を少量含む。粘性、しまりなし。
第2層	黒褐色	10YR 2/3	ローム粒、ロームブロックをやや多量に含む。粘性ややあり、しまりなし。
第3層	暗褐色	10YR 3/3	ロームブロックを多量、黄褐色土をやや多めに混入。粘性なし、しまりあり。
第4層	黒褐色	10YR 2/2	ローム粒、ロームブロックを少量含む。粘性ややあり、しまりあり。
第5層	黒褐色	10YR 3/2	ローム粒を多量に含む。粘性、しまりややあり。
第6層	暗褐色	10YR 3/4	ローム粒を少量含む。粘性あり、しまりなし。

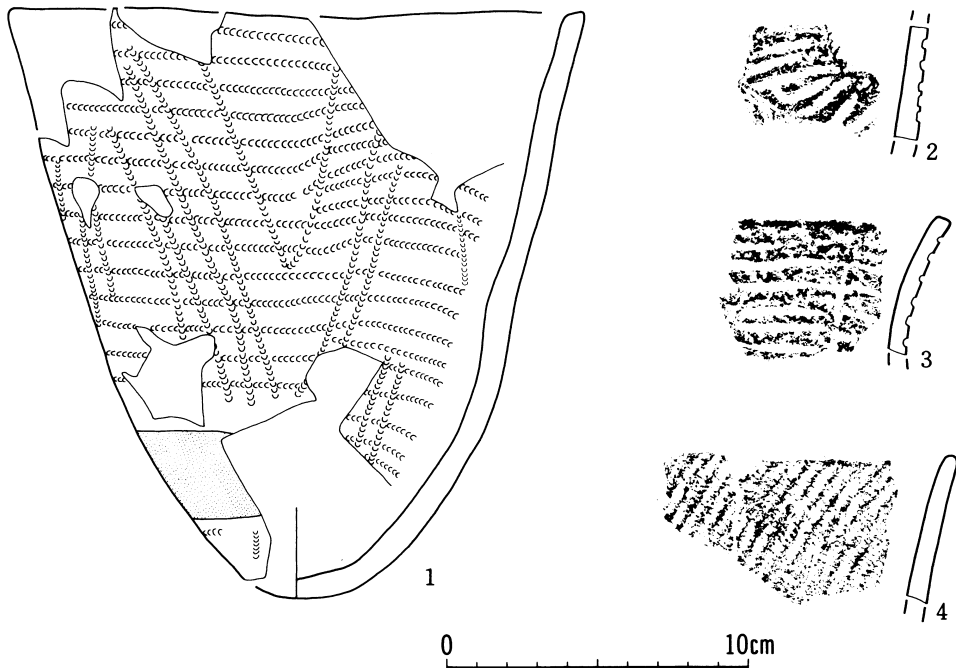
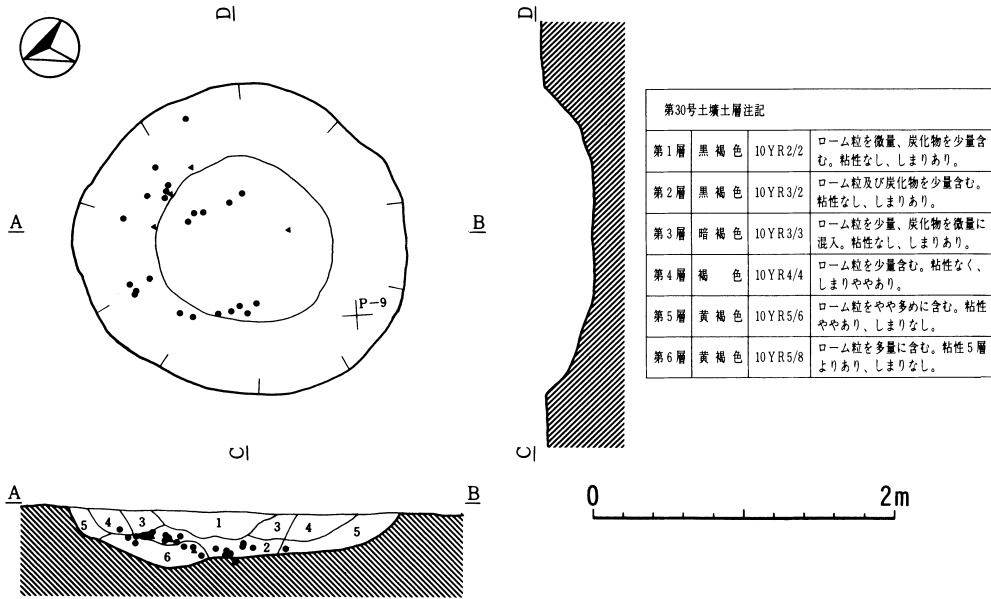
第29号土壌土器観察表

番号	地区・層位	部位	外面	施文	文様	分類
第94図-1	29 土・床直	胴部	ループ文	(原体はLR)		II群2類
第94図-2	29 土・床直	胴部	ループ文	(原体はLR)		II群2類
第94図-3	29 土・床直	胴部	ループ文	(原体はLR)		II群2類

第94図 第29号土壌・出土遺物

第30号土壌

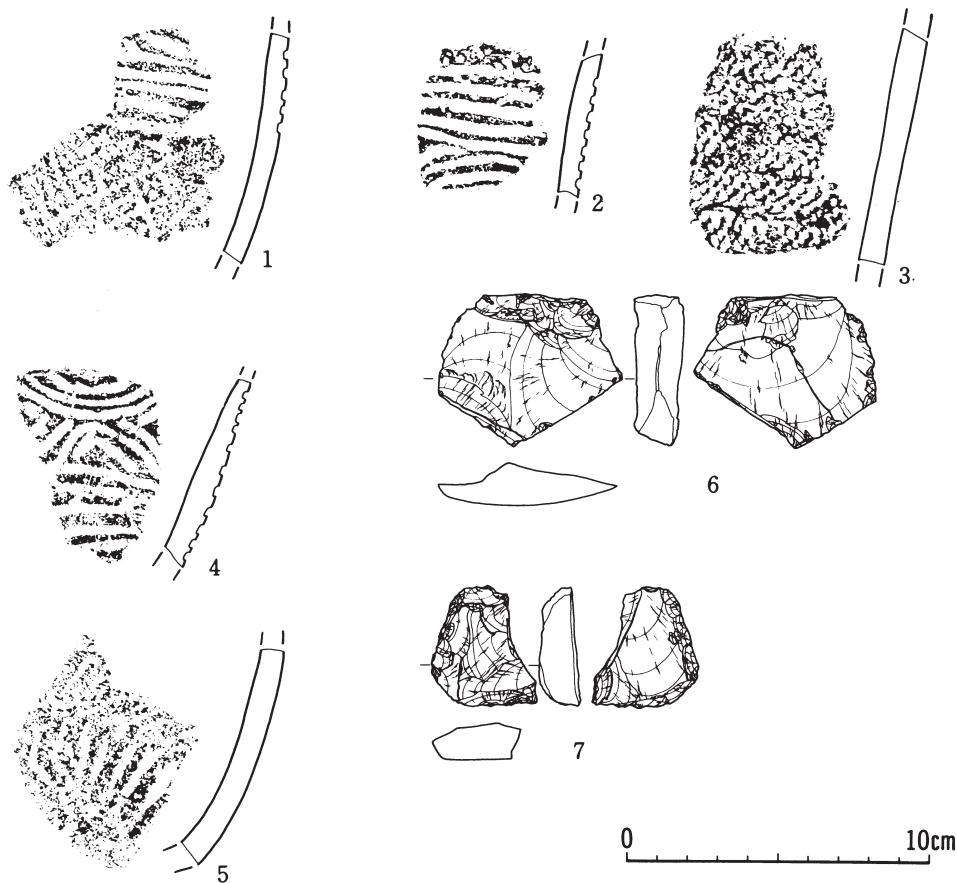
位置と確認 本遺構は、調査区北側台地の平坦面にあるP - アグリッドに位置している。第 a 層上面で黒褐色土の落ち込みを確認し、精査したところ土壌を検出した。



第30号土壌土器観察表

番号	地区・層位	部位	外面施文文様	分類
第95図-1	30 土・床直	口縁~底部	横位・斜位の連続押し引き竹管文	II群1類
第95図-2	30 土・4層	胴部	弧状の連続押し引き竹管文	II群1類
第95図-3	30 土・床直	口縁部	横位の連続押し引き竹管文	II群1類
第95図-4	30 土・2層	口縁部	縄文(LR)	II群2類

第95図 第30号土壌・出土遺物(1)



第30号土壙石器観察表

番 号	地 区・層 位	部 位	外 面 施 文 文 様	分 類
第96図-1	30 土・5 層	胴 部	横位方向に連続押し引き竹管文、縄文 (RL)	II群1類
第96図-2	30 土・5 層	胴 部	横位・弧状の連続押し引き竹管文	II群1類
第96図-3	30 土・床 直	胴 部	ループ文 (原体はLR)	II群2類
第96図-4	30 土・4 層	底 部	横位・弧状の連続押し引き竹管文	II群1類
第96図-5	30 土・床 直	底 部	縄文	II群2類

第30号土壙石器観察表

図 版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	備 考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)			
第96図-6	30土	床直	50	60	15	41.3	頁	F	
第96図-7	30土	4	39	34	13	16.5	珪	F	

第96図 第30号土壙・出土遺物(2)

平面形・規模 平面形は、若干凹凸のある円形を呈する。規模は、開口部で長径230cm、短径206cm、底部で長径116cm、短径110cmである。断面形は鍋底形に近い形態である。

壁・底面 壁は、底面より緩やかに立ち上がりながら開口部に至る。壁高は、東壁30cm、西壁30cm、南壁22cm、北壁34cmを測り、構築は軟弱である。底面は中央部より北側が凹み、他は平坦である。構築は壁同様に軟弱である。

出土遺物 遺物は、主に第4～6層より出土した。土器片は約20点、石器は4点出土した。

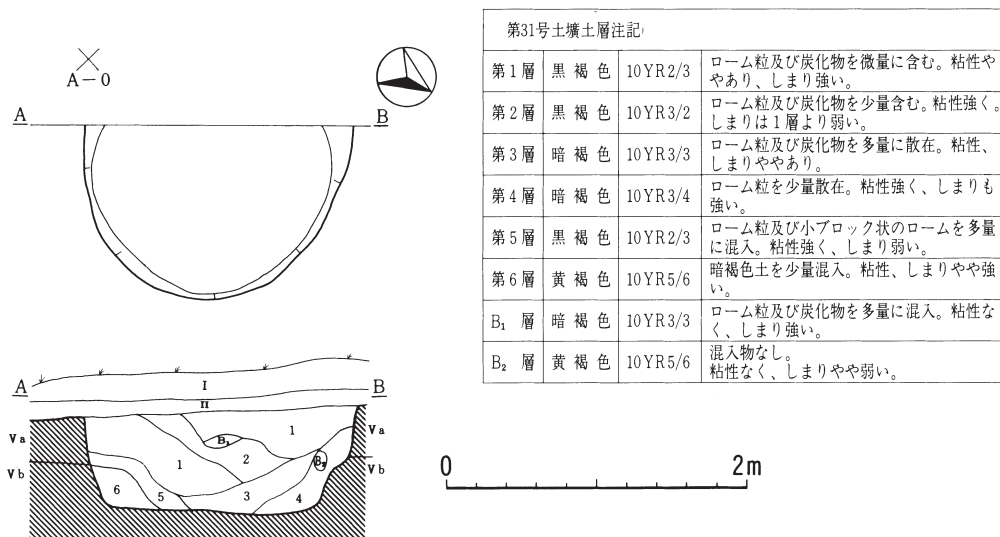
第95図 - 1 の土器は、口縁部が開きぎみに立ち上がり、尖底丸底形を呈する。施文文様は連続押し引き竹管文で、口縁部から底部に至るまで横位方向に施文されている。さらに、その上に口縁部から底部にいたるまで斜位方向に施文されている。出土遺物は第 群 1 類に比定される。(奈良)

第31号土壌

位置と確認 本遺構は、調査区北側台地の端部にある A - ア・O グリッドに位置し、第 a 層上面で黒褐色土の半円形プランを確認した。プランの約半分が調査区域外に該当するため、遺構は半分だけの精査である。

平面形・規模 本遺構は南北側半分程度の精査のため、全体の形態は不明であるが、ほぼ円形のプランを呈すると思われる。規模は、開口部で長径180cm、短径 114 cm、底面で長径158 cm、短径 110 cmを測る。

壁・底面 本遺構は第 a、 b 層を掘り込んで作られ、底面は b 層にあたる。壁高は、北壁70cm、南壁60cmを測る。壁は、やや垂直に立ち上がり、堅緻な構築である。底面はほぼ平坦で、壁同様がたく縮まっている。(津川・奈良)

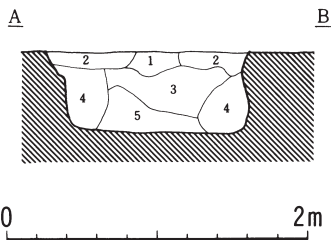
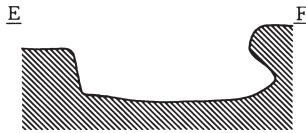
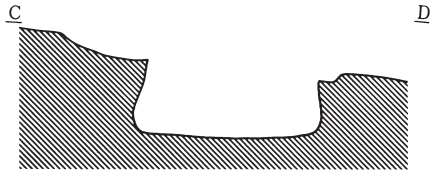
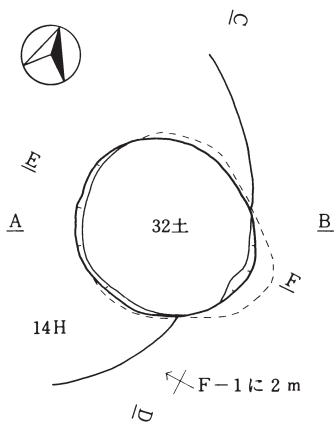


第97図 第31号土壌

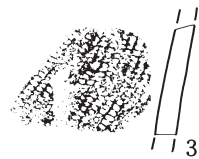
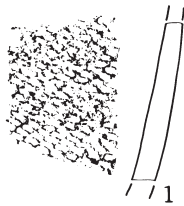
第32号土壌

位置と確認 本遺構は、調査区北側台地の平坦面にある F - 1 グリッドに位置している。第14号竪穴住居跡を精査中に円形の落ち込みを確認し、精査したところ土壌を検出した。

重複 第14号竪穴住居跡と切り合っており、新旧関係は本遺構が新しい。



第1層	黒褐色	10YR2/2	炭化物・ローム粒を多量に含む。粘性、しまりなし。
第2層	黒褐色	10YR2/3	炭化物・ローム粒を多量に含む。粘性なし、しまりあり。
第3層	暗褐色	10YR3/4	炭化物・ローム粒を多量、焼土粒若干含む。粘性なし、しまりあり。
第4層	暗褐色	10YR3/4	炭化物・ローム粒を多量に含む、明黄褐色土混入。粘性なし、しまりあり。
第5層	褐色	10YR4/4	ローム粒多量に含む。粘性なし、しまりあり。



第32号土壌土器観察表

番号	地区・層位	部位	外面施文文様	分類
第98図-1	32 土・覆土	胴部	縄文 (RL) スズ状炭化物付着	IV群4類
第98図-2	32 土・覆土	胴部	縄文 (RL)	IV群4類
第98図-3	32 土・覆土	胴部	縄文 (RL)	IV群4類

第98図 第32号土壌・出土遺物

平面形・規模 平面形は、ほぼ円形である。規模は、開口部で長径125cm、短径114cm、底面で長径134cm、短径124cmを測る。

壁・底面 壁は、西壁が開口部から底面にかけて緩やかに傾斜しており、他の壁は開口部から底面にかけて内傾している。特に、東壁の内傾度が高い。壁高は、東壁47cm、西壁29cm、南壁40cm、北壁48cmを測る。底面はほぼ平坦で堅緻な構築である。

出土遺物 覆土中より土器片が3点出土した。出土土器は第IV群4類に比定される。

(成田・奈良)

第33号土壌

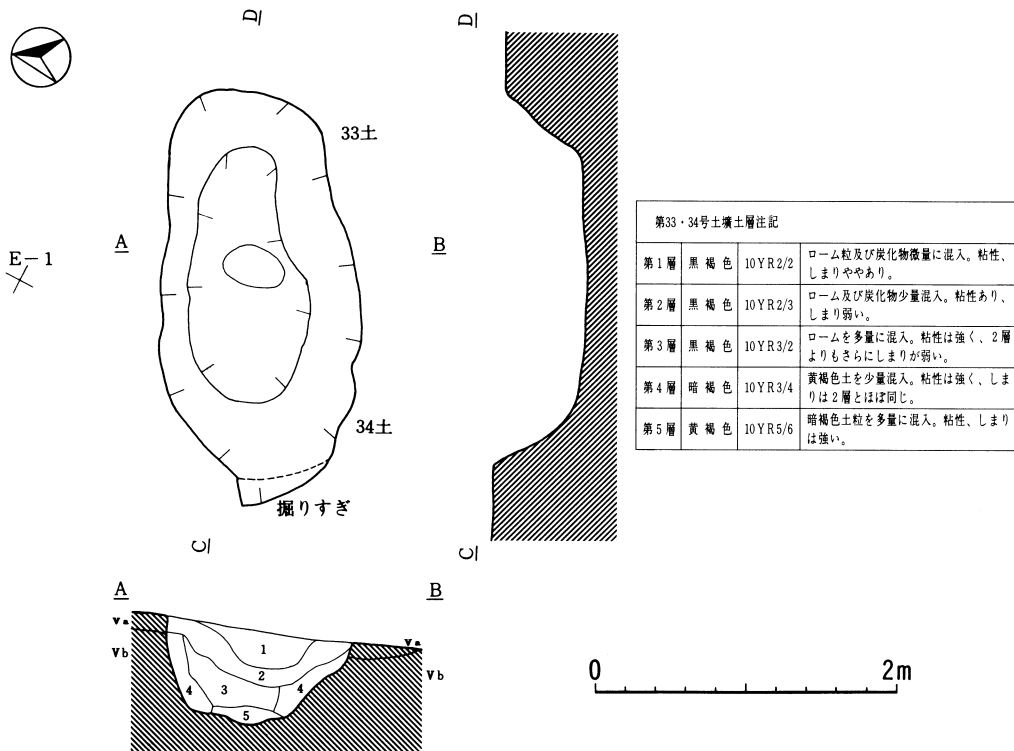
位置と確認 本遺構は、調査区北側台地の斜面にあるD - 0・1グリッドに位置している。第Va層上面で、黒褐色土の落ち込みを確認し、精査したところ土壌を検出した。

重複 本遺構は、第34号土壌と切り合っているが、新旧関係は不明である。

平面形・規模 平面形は、本遺構西側が切り合い関係にあるが、不整な楕円形を呈すると思われる。規模は、開口部で長径130㎝、短径108㎝、底面で長径60㎝、短径50㎝を測る。

壁・底面

壁は軟弱な構築である。壁高は、東壁50㎝、南壁55㎝、北壁58㎝を測る。底面は、凹凸があり、壁同様に軟弱な構築である。 (津川・奈良)



第99図 第33・34号土壌

第34号土壌

位置と確認 本遺構は、調査区北側台地の斜面にあるD - 0・1グリッドに位置している。第a層上面で黒褐色土の落ち込みを確認し、精査したところ土壌を検出した。

重複 本遺構は、第33号土壌と切り合っているが、新旧関係は不明である。

平面形・規模 平面形は、本遺構東側が切り合い関係にあるが、不整円形を呈すると思われる。規模は、開口部で長径160㎝、短径128㎝、底面で長径90㎝、短径78㎝を測る。

壁・底面 壁は、軟弱な構築である。壁高は、西壁52㎝、南壁55㎝、北壁58㎝を測る。底面

はほぼ平坦で、壁同様に軟弱なつくりである。

(奈良)

第35号土壌

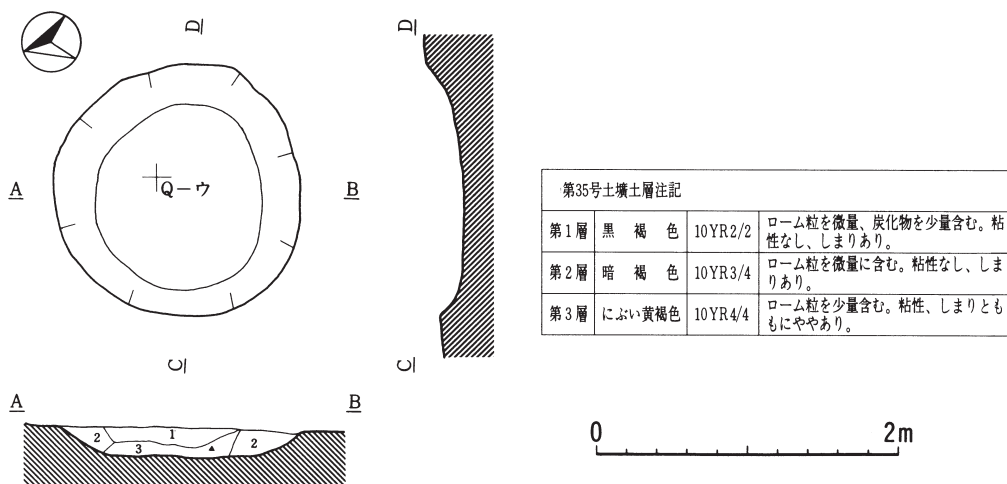
位置と確認 本遺構は、調査地区北側台地の平坦面にあるP・Q - ウ・エグリッドに位置している。第 a層上面で円形のプランを確認した。周辺には、南側に第11号竪穴住居跡が分布している。

平面形・規模 平面形は、均整のとれた円形を呈する。規模は、開口部で長径168cm、短径165cm、底面で長径123cm、短径110cmを測る。断面形は、浅い皿形を呈する。

壁・底面 壁は、すべて底面から緩やかに立ち上がりながら開口部に至り、軟弱な構築である。壁高は、東壁17cm、西壁16cm、南壁17cm、北壁18cmを測る。底面は若干の凹凸があり、壁同様に軟弱な構築である。

出土遺物 自然礫が1点出土した。

(奈良)



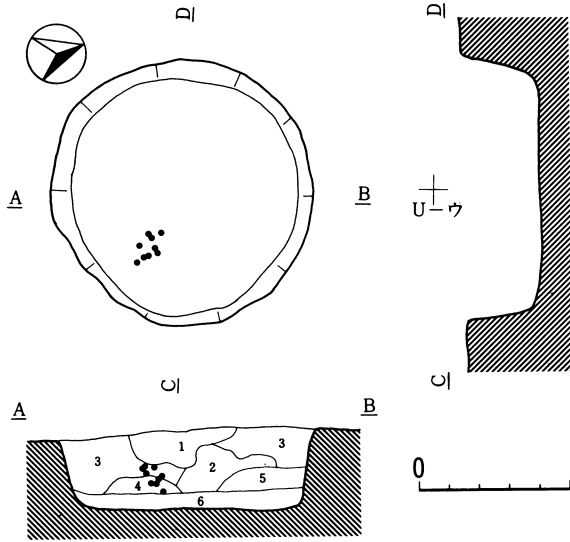
第100図 第35号土壌

第36号土壌

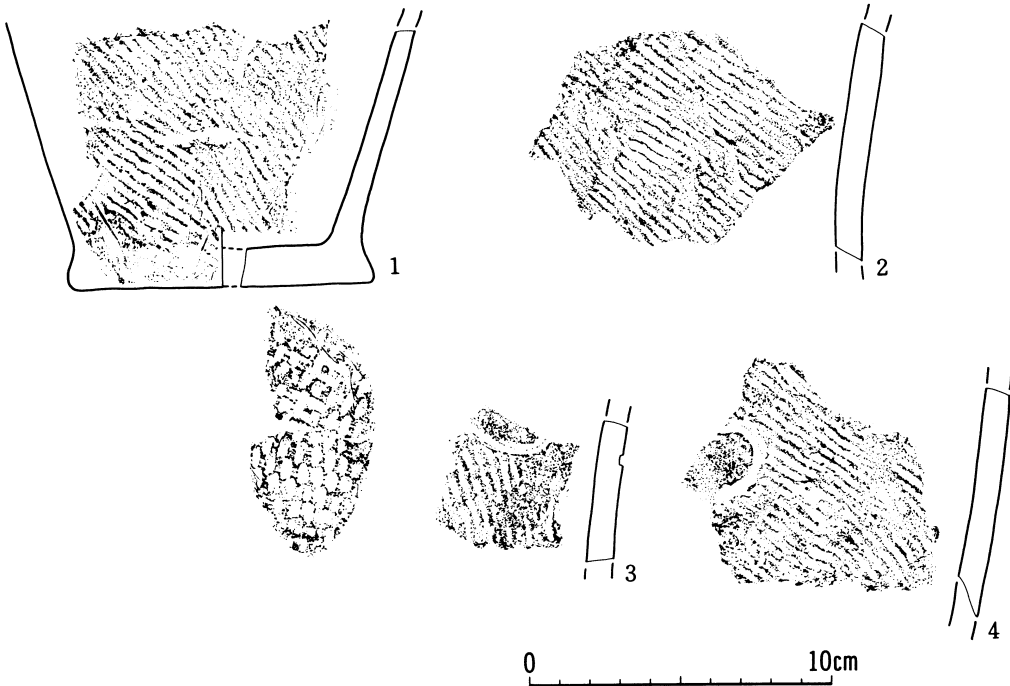
位置と確認 本遺構は、調査区北側台地の平坦面にあるT - ウ・エグリッドに位置している。第 a層上面で黒褐色土の落ち込みを確認し、精査したところ土壌を検出した。

平面形・規模 平面形は、若干の凹凸はあるがほぼ円形を呈する。規模は、開口部で長径178cm、短径174cm、底面で長径158cm、短径150cmを測る。断面形は、急激に立ちあがりながら開口部に至り、円筒形に近い形態を呈する。

壁・底面 第 a、 b層を掘り込んで構築され、壁は全体的に堅緻である。壁高は、東壁44cm、西壁52cm、南壁52cm、北壁46cmを測る。底面は平坦で、壁同様に堅緻な構築である。



第1層	黒色	10YR2/1	ローム粒を微量、炭化物を多量含む。粘性なし、しまりあり。
第2層	黒褐色	10YR2/2	ローム粒を微量、炭化物を少量含む。粘性なし、しまり1層よりなし。
第3層	暗褐色	10YR3/3	ローム粒を微量、炭化物を少量含む。粘性、しまりなし。
第4層	暗褐色	10YR3/4	ローム粒を少量含む。粘性、しまりなし。
第5層	褐色	10YR4/4	ローム粒を多量、炭化物を微量に混入。粘性ややあり、しまりなし。
第6層	明黄褐色	10YR6/6	黒褐色土を少量含む。粘性あり、しまりなし。



第36号土壌土器観察表

番号	地区・層位	部位	外面施文文様	分類
第101図-1	36 土・覆土	底部	縄文(L) 底面に網代痕	IV群4類
第101図-2	36 土・覆土	胴部	縄文(L)	IV群4類
第101図-3	36 土・覆土	胴部	縄文(L) 曲線の沈線	IV群1類
第101図-4	36 土・覆土	胴部	縄文(L) 曲線の沈線	IV群1類

第101図 第36号土壌・出土遺物

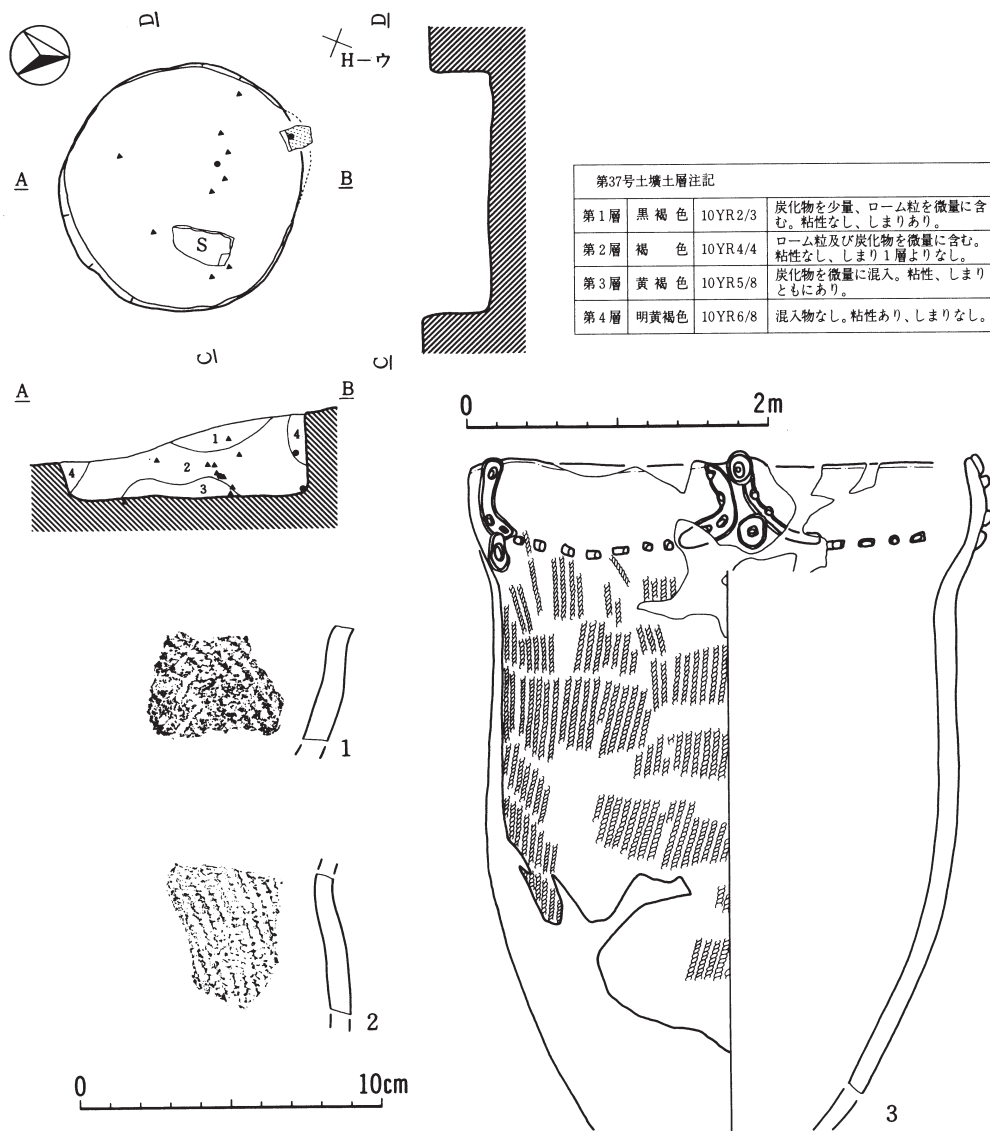
出土遺物 土器片が9点出土した。出土土器は第 群に比定される。

(奈良)

第37号土壌

位置と確認 本遺構は、調査区北側台地の斜面にあるG - ウグリッドに位置している。第 a 層上面で黒褐色土の落ち込みを確認し、精査したところ土壌を検出した。

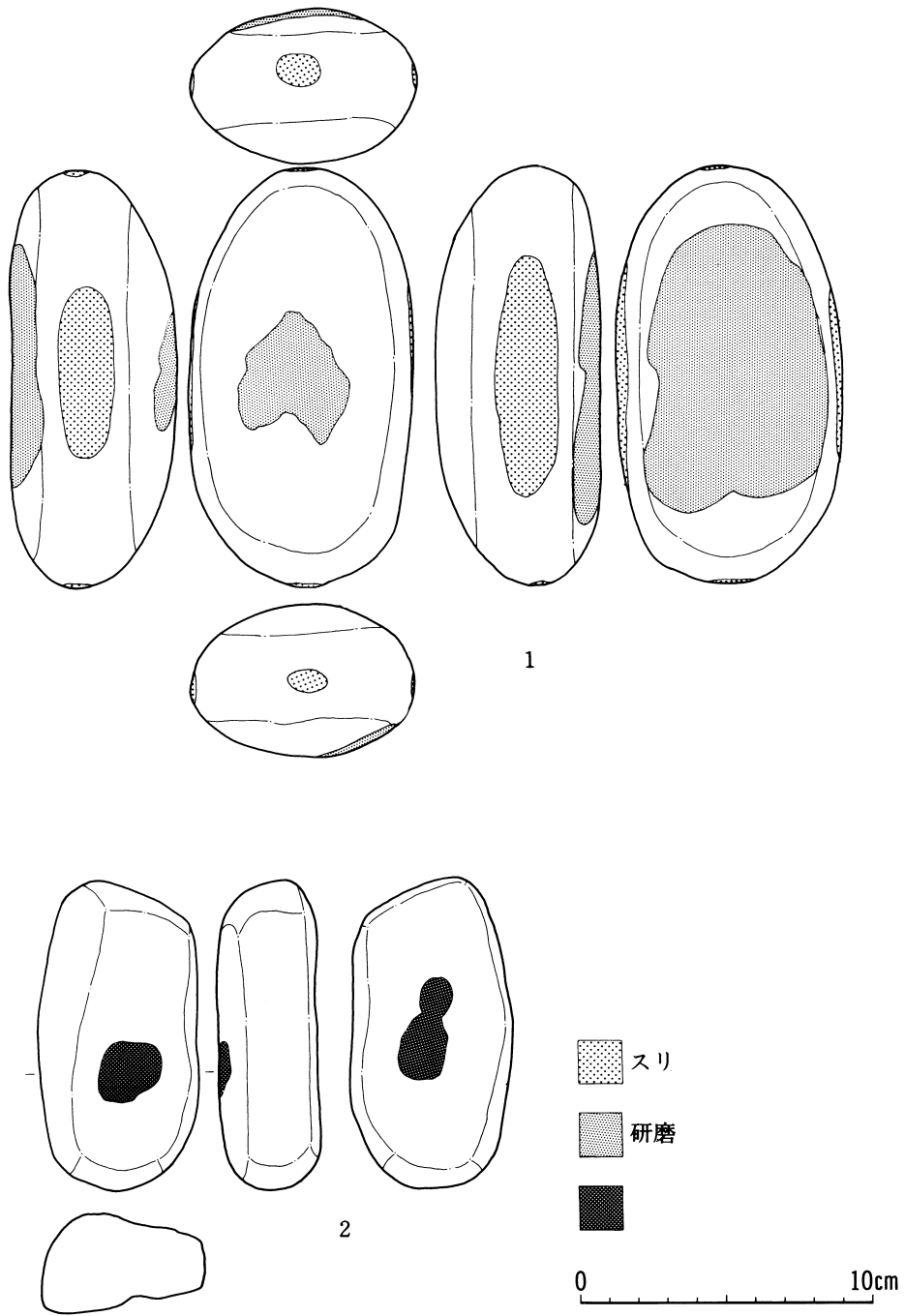
平面形・規模 平面形はほぼ円形を呈する。規模は、開口部で長径162cm、短径160cm、底面



第37号土壌土器観察表

番号	地区・層位	部位	外面施文	文様	分類
第102図-1	37 土・2 層	口縁部	縄文 (LR)	スス状炭化物付着	Ⅲ群4類
第102図-2	37 土・4 層	胴部	縄文 (LR)	スス状炭化物付着	Ⅲ群4類
第102図-3	37 土・2 層	口縁~底辺	縄文 (RL)	口縁部隆帯貼付 刺突	Ⅲ群(?)

第102図 第37号土壌・出土遺物(1)



第37号土壌石器観察表

図 版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	備 考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)			
第103図-1	37土	覆土	141	76	55	887	安	J	
第103図-2	37土	2	106	57	34	298	安	J	

第103図 第37号土壌・出土遺物(2)

で長径157cm、短径152cmを測る。

壁・底面 壁は、すべて底面から垂直に立ち上がりながら開口部に至る。壁の構築は、やや軟弱である。壁高は、東壁42cm、西壁38cm、南壁26cm、北壁54cmを測る。底面は、平坦で壁に較べてやや堅緻な構築である。

出土遺物 土器3点、石器10点が出土した。石器は、大部分が自然礫で、第2・3層からの出土が多い。また、敲磨器類が2点出土している。第102図-1の土器は、器体の約半分程度が残存し、横位状態で底面より出土した。地文は縄文(RL)で、口縁部には連続した刺突を巡らして口縁部文様帯を構成している。区画帯内部には、ボタン状・ひれ状の粘土紐を貼り付け、その内部に刺突痕がみられる。口唇部は緩やかな波状を呈する。出土土器は第1群土器に比定される。

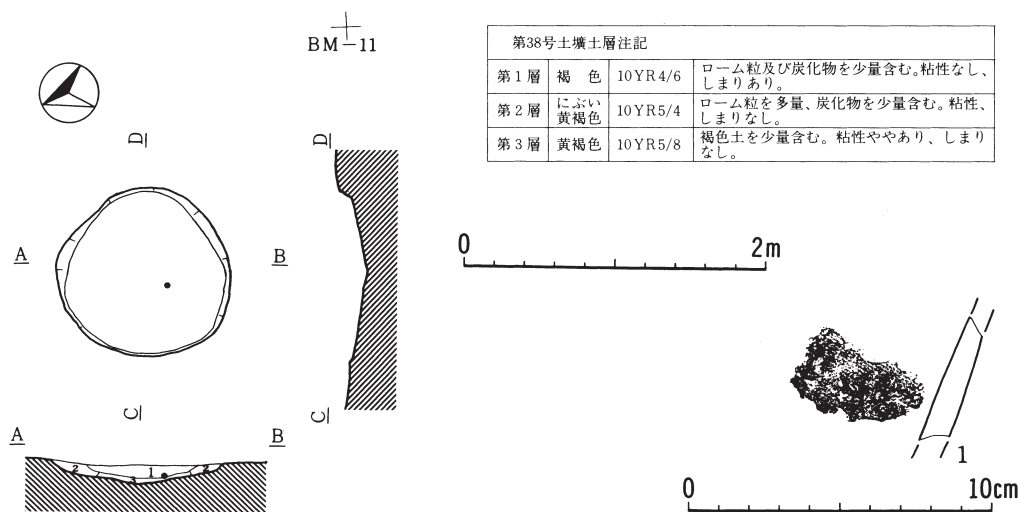
(奈良)

第38号土壌

位置と確認 本遺構は、調査区南側台地の平坦面にあるBM-10グリッドに位置している。第a層で褐色土の落ち込みを確認し、精査したところ土壌を検出した。

平面形・規模 平面形は、均整のとれた円形を呈する。規模は、開口部で長径115cm、短径111cm、底面で長径107cm、短径106cmを測る。断面形は、底面中央が若干凹んでいる皿形を呈する。

壁・底面 壁は、東側がやや垂直に、他は緩やかに立ち上がりながら開口部に至る。壁高は、



第38号土壌土器観察表

番号	地区・層位	部位	外面施文文様	分類
第104図-1	38 土・1層	底辺部	無文	I群9類

第104図 第38号土壌・出土遺物

東壁10cm、西壁 2 cm、南壁 4 cm、北壁 6 cmを測る。壁の構築は軟弱である。底面は中央部がわずかに凹み、壁同様軟弱な構築である。

出土遺物 遺物は土器片が 1 点出土し、第 群 9 類に比定される。 (奈良)

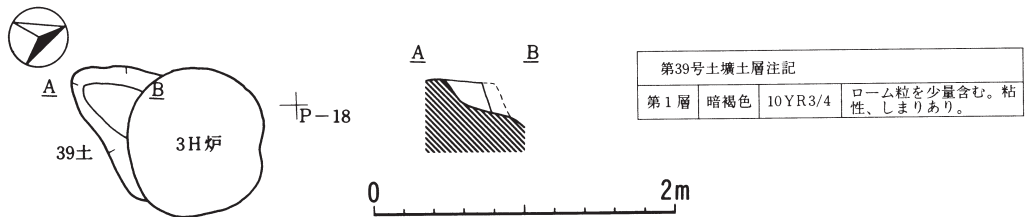
第39号土壇

位置と確認 本遺構は、調査区北側台地の平坦面にある O - 17・18グリッドに位置している。第 3 号竪穴住居跡の床面を精査中に落ち込みを確認し、精査したところ土壇を検出した。

重複 第 3 号竪穴住居跡の炉と切り合っており、新旧関係は本遺構が古い。

平面形・規模 平面形は、北側が炉によって切られているために不明であるが、残存部から推定すると南側が張り出す不整形を呈すると思われる。規模は、開口部で長径 83 cm、短径 (42) cm、底面で長径 45 cm、短径 27 cmを測る。

壁・底面 壁は北壁が不明であるが、他の壁はすべてなだらかに傾斜しており、軟弱なつくりである。壁高は、東壁13cm、西壁15cm、南壁14cmを測る。底面は南側から北側にかけて傾斜しており、やわらかく堅緻な構築ではない。 (成田・奈良)



第105図 第39号土壇

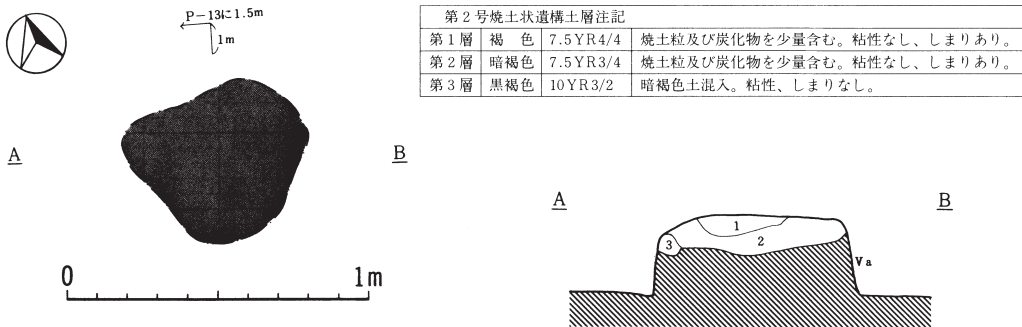
(3) 焼土状遺構

第2号焼土状遺構

位置と確認 本遺構は、調査区北側台地の平坦面にあるO - 13グリッドに位置している。第a層を精査中に焼土を確認し、精査したところ焼土状遺構を検出した。

平面形・規模 平面形は西側に張り出す不整形円形を呈する。規模は、長径60cm、短径53cmを測る。

堆積土 堆積土は3層に区分した。堆積土の観察から焼土の混入は微量であり、褐色及び黒褐色土の混入が著しい。また、火を焚いた痕跡もみられない事から、この焼土状遺構は焼土を廃棄したものと思われる。
(成田・奈良)



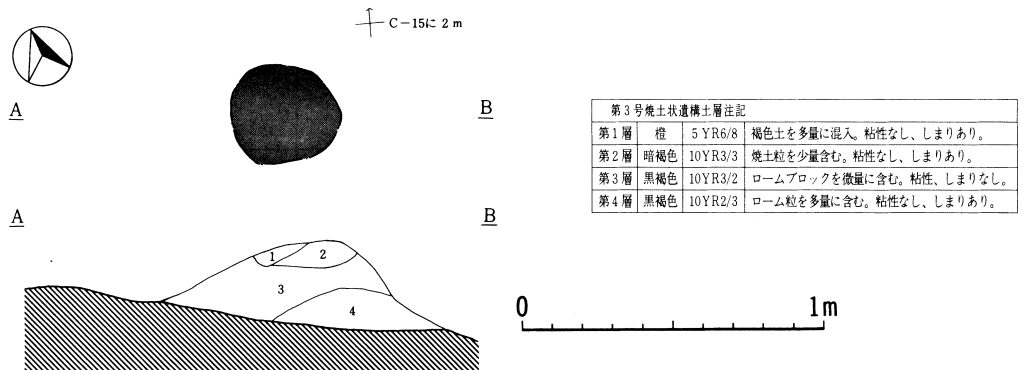
第106図 第2号焼土状遺構

第3号焼土状遺構

位置と確認 本遺構は、調査区北側台地の斜面にあるB - 14グリッドに位置している。第層を精査中、焼土ブロックを確認した。

平面形・規模 平面形はほぼ円形を呈している。規模は、長径35cm、短径32cmである。

堆積土 堆積土は4層に区分した。
(津川・奈良)



第107図 第3号焼土状遺構

第4号焼土状遺構

位置と確認 本遺構は、調査区北側台地にあるB - 0グリッドに位置する。焼土が密集しており、焼土状遺構と確認した。

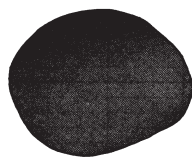
平面形・規模 平面形は楕円形を呈している。規模は、長径60cm、短径50cmである。

堆積土 堆積土は4層に区分した。各層とも炭化物が含まれており、第1層には大ブロック状の焼土がやや多めに混入している。 (津川・奈良)

f
B-1に1m



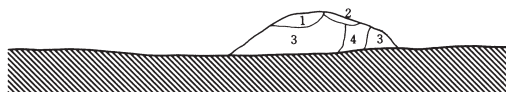
A



B

層	色	色番号	説明
第1層	黒褐色	10YR2/3	大ブロック状の焼土をやや多めに混入。又、炭化物を多量に混入。黒褐色土の部分ではしまりが弱い。焼土はガキガキしていて堅い。
第2層	黒褐色	10YR2/3	焼土粒及び炭化物を少量含む。粘性なし、しまりややあり。
第3層	暗褐色	10YR3/4	ローム及び炭化物を少量含む。粘性ややあり、しまり強い。
第4層	黒褐色	10YR3/2	ローム粒及び炭化物を微量に含む。3層よりしまりは弱い。粘性はやや強い。

A



B



第108図 第4号焼土状遺構

小結 焼土状遺構は本遺跡より3基検出され、調査区北側台地の斜面に分布している。第2・3号焼土状遺構は隣接し、第4号焼土状遺構はそこから西方約50mの第15号竪穴住居跡周辺に位置している。3基はいずれも掘り方をもっていない。第4号焼土状遺構は堆積土層の観察から、火を焚いた痕跡が認められるが、他の2基は焼土が廃棄されたものと思われる。各焼土状遺構から遺物は出土せず、時期を決定することはできなかった。 (奈良)

(4) 屋外炉

第 1 号屋外炉

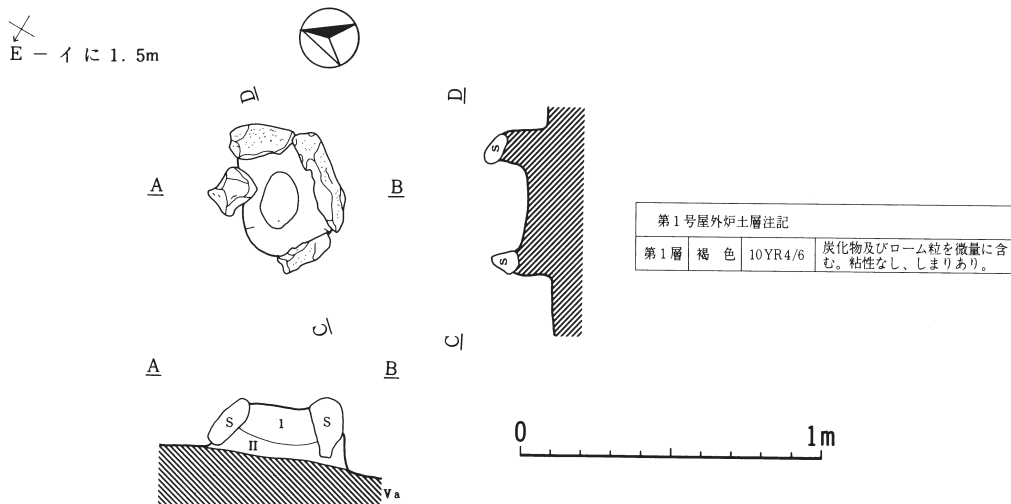
位置と確認 本遺構は、調査区北側台地の平坦面にある D - イグリッドに位置している。第 1 層を精査中に礫を確認し、精査したところ屋外炉を検出した。

形態・規模 4 個の角ばった自然礫（安山岩）を用いて、コの字状に配置している。規模は、長径50cm、短径40cm、深さ20cmを測り、小型な屋外炉である。

堆積土 炉内部の堆積土は 1 層のみであり、下面が火床面である。火床面はやわらかく、また、堆積土から、長期間使用された炉とは考えられない。

出土遺物 遺物は出土しなかった。炉石 1 点には敲打痕がみられるが、その範囲は小さい。

(成田・奈良)



第109図 第 1 号屋外炉

第 2 号屋外炉

位置と確認 本遺構は、調査区北側台地の平坦面にある E - ア・Oグリッドに位置している。第 a 層を精査中に礫を確認し、精査したところ屋外炉を検出した。

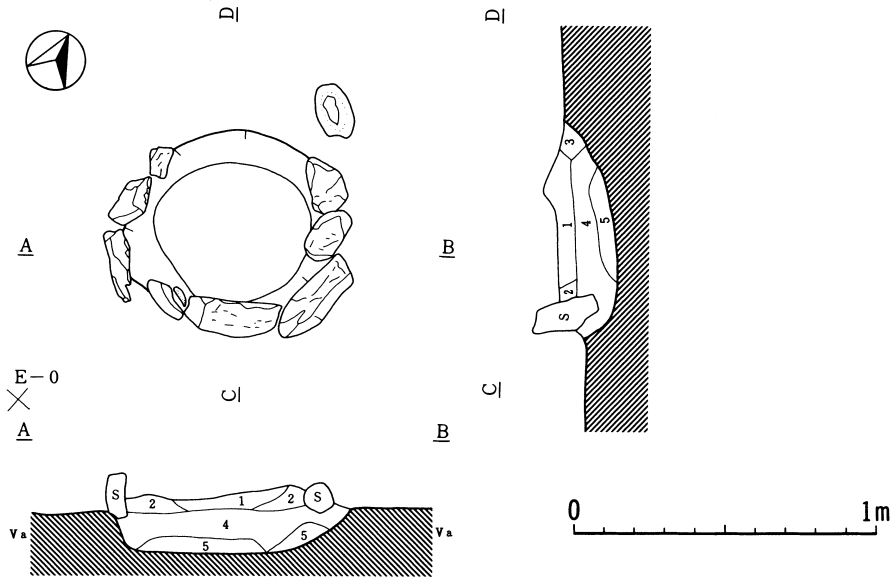
形態・規模 9 個の角ばった自然礫（安山岩）を用いて、円形状に配置しており、北側部分 40cmの間には礫がみられない。規模は径80cmを測る。

掘り方 屋外炉の下部には、南側が張り出す不整円形の掘り方を有している。規模は、長径 89cm、短径82cmを測る。

堆積土 炉内の堆積土は 5 層に区分した。第 1 ~ 3 層が炉内堆積土であり、第 4・5 層が掘り方の堆積土である。また、第 1 ~ 3 層が火床面である。火床面は薄く、長期間使用された

とは考えられない。

(成田・奈良)

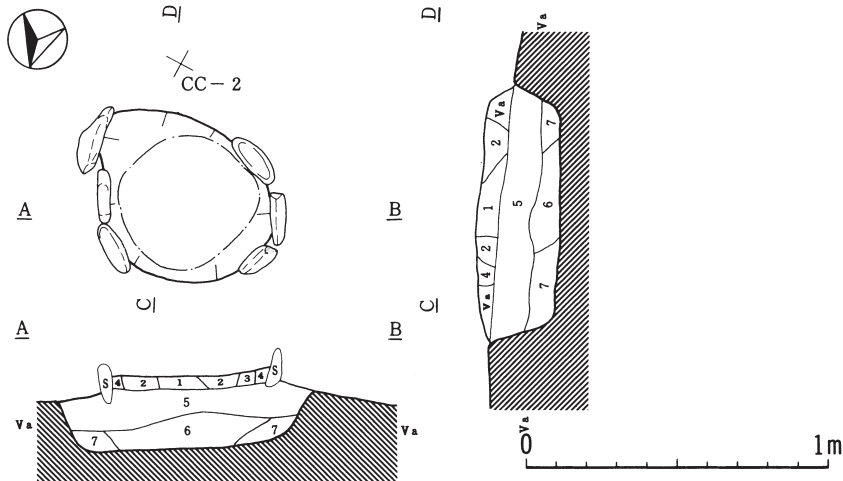


第1層	褐色	10 YR 4/6	炭化物、焼土粒及びローム粒を微量に含む。粘性なし、しまりあり。
第2層	暗褐色	10 YR 3/4	炭化物及びローム粒を微量に含む。粘性なし、しまり1層より弱い。
第3層	赤褐色	5 YR 4/6	炭化物を少量含む。粘性なし、しまりあり。
第4層	褐色	10 YR 4/6	炭化物及び焼土粒を微量、ローム粒を少量含む。粘性なし、しまりあり。
第5層	黄褐色	10 YR 5/8	焼土粒、炭化物及びローム粒を少量を含む。粘性ややあり、しまりは1層と同じ。

第3号屋外炉

第110図 第2号屋外炉

位置と確認 本遺構は、調査区台地北側の緩斜面にあるC - 1グリッドに位置している。第



第1層	褐色	10 YR 4/4	炭化物及び焼土粒を多量に混入。粘性あり、しまりややあり。
第2層	暗褐色	10 YR 3/3	ローム粒、焼土粒、炭化物を少量混入。粘性、しまりややあり。
第3層	〃	10 YR 3/4	焼土粒、ローム粒を少量混入。粘性強く、しまりはどの層よりも強い。
第4層	黒褐色	10 YR 2/3	焼土粒、炭化物を微量に混入。粘性若干あり、しまり弱い。
第5層	褐色	10 YR 4/4	焼土粒、炭化物を多量に混入。粘性あり、しまり強い。
第6層	〃	10 YR 4/6	炭化物を少量混入。粘性は強く、5層よりややしまりは弱い。
第7層	にぶい黄褐色	10 YR 4/3	炭化物を少量混入。粘性、しまりは5層と同じ。

第111図 第3号屋外炉

a層上面で礫を確認した。

形態・規模 長さ15～18cmの6個の礫（安山岩）を用いて作られた石囲炉で、楕円形状に配置している。遺構の北側と南側約30cmの間には、礫がみられない。規模は、長径75cm、短径60cmを測る。

掘り方 屋外炉の下部には、ほぼ円形を呈する掘り方を有している。断面形は浅い皿形を呈する。規模は、径170cm、深さ20cmを測る。

堆積土 堆積土は7層に区分した。第1～4層が炉内堆積土であり、第5～7層が掘り方の堆積土である。また、火床面は5層上面である。火床面はかたく締まり、多量の焼土が観察されることから、長期間使用したものと思われる。

出土遺物 遺物は出土しなかった。炉石3点中に敲打痕がみられるが、打面はいずれも小さい。
(津川・奈良)

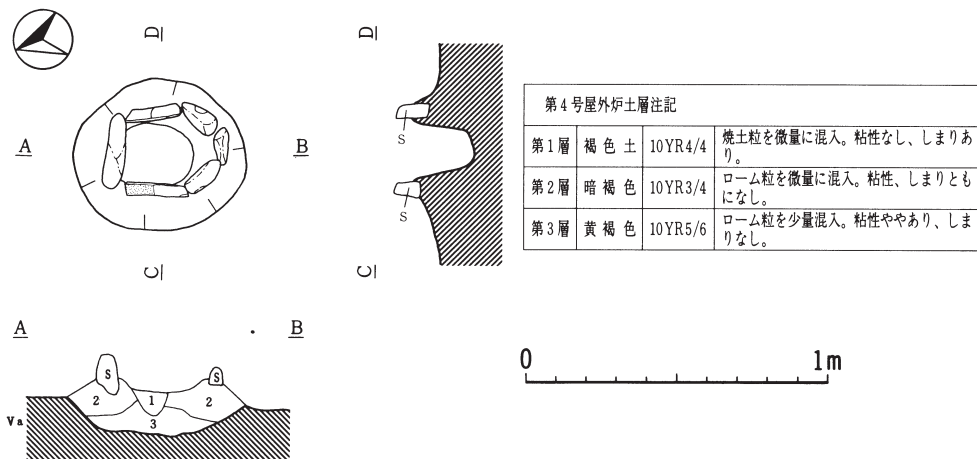
第4号屋外炉

位置と確認 本遺構は、調査区北側台地の平坦面にあるN-Oグリッドに位置している。第a層上面で礫を確認した。

形態・規模 長さ12～25cmの6個の自然礫（安山岩）を用いて作られた石囲炉で、楕円形状に配置されている。規模は、長径41cm、短径31cmを測る。

掘り方 屋外炉の下部には、円形を呈する掘り方を有している。断面形は鍋底形を呈している。規模は、径56cm、深さ15cmを測る。

堆積土 堆積土は3層に区分した。第1層は焼土粒を微量に混入し、第2・3層はローム粒を少量含んでいる。火床面は第1層上面と考えられるが、脆弱で、長期間使用されたとは



第112図 第4号屋外炉

考えられない。

(津川・奈良)

小結 屋外炉は本遺跡より4基検出され、調査区北側台地に分布している。第1・2号屋外炉は、第5号竪穴住居跡と第14号竪穴住居跡の間に存在し、第1号屋外炉は第5号竪穴住居跡寄り、第2号屋外炉は第14号竪穴住居跡寄りに位置している。第3号屋外炉は第10号竪穴住居跡の西側2mに位置している。第4号屋外炉は、第1・2号屋外炉より北側40mで、第17号竪穴住居跡の周辺に位置している。これらの屋外炉は、いずれも竪穴住居跡の近くに存在している。また、いずれの屋外炉も石組炉で、礎のレベルは、第1号屋外炉が第1層下部、第2～4号屋外炉が第1層上面に該当する。遺物はいずれの遺構にも全く出土していない。炉の周辺には、柱穴及び床面等は検出し得なかったため、単独で使用された屋外炉の性格をもつものと思われる。

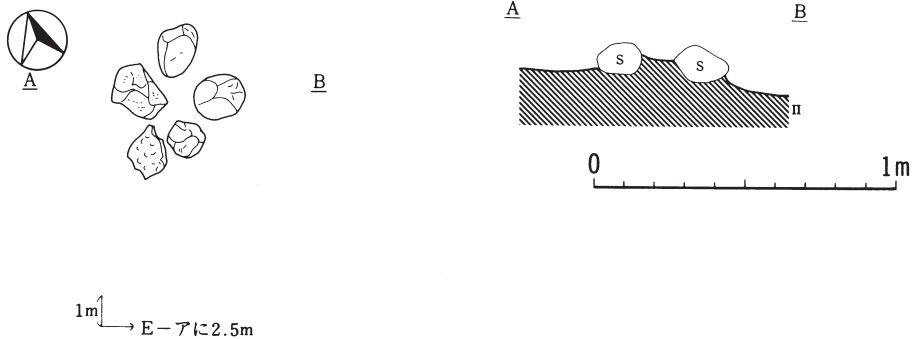
(奈良)

(5) 配石遺構

第1号配石遺構

位置と確認 本遺構は、調査区北側台地の平坦面にあるE - イグリッドに位置している。第層を精査中に礫を確認し、拡張して精査したところ配石遺構を確認した。

平面形・規模 本遺構は、南北105cm、東西90cmの範囲に、5個の丸みをもつ自然礫(安山岩)を用いて円形状に配置している。礫の大きさは最大のもので38cm、最小のもので24cmで、比較的大型の礫を多く使用している。礫には使用痕はみられなかった。また、礫は第層中に配置しており、礫の下部からは土壌を検出しなかった。(成田・奈良)



第113図 第1号配石遺構

小結 本遺構は、基本層序の第層とほぼ同レベルに位置している。本遺跡に伴う掘り方及び土壌は検出されなかった。また、本遺構に伴う遺物は出土しなかったために、時期は確定できない。周辺からは、縄文時代前期・中期・後期の竪穴住居跡が検出されているが、本遺構との関連性が薄いために、時期を断定することはできない。(奈良)

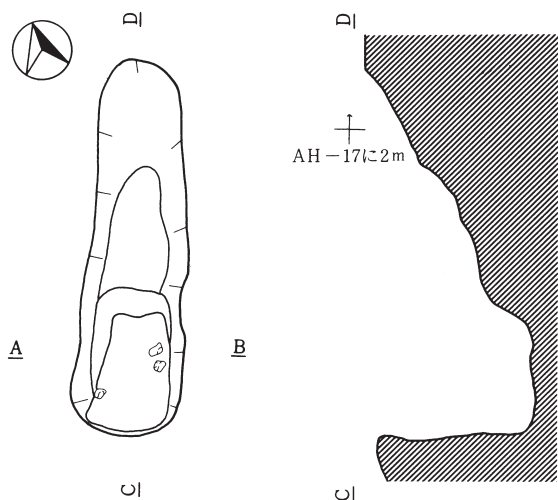
(6) 溝状ピット

第1号溝状ピット

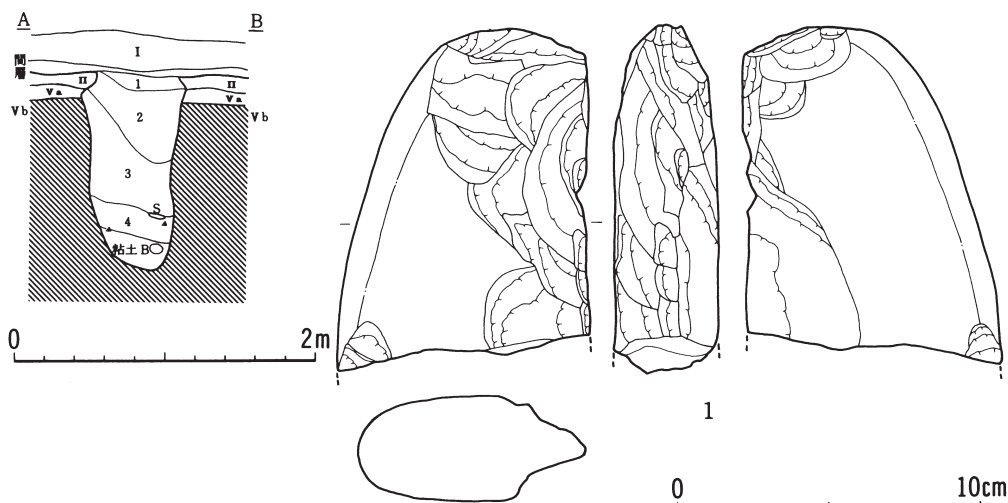
位置と確認 本遺構は、調査区中央部よりやや北寄りにあるAG-16グリッドに位置している。第a層上面で黒褐色土の落ち込みを確認し、精査したところ溝状ピットを検出した。

形態・規模 第a、b層を掘り込んで作られている。平面形は、南側が若干ふくらんだ葉巻形を呈している。規模は、開口部で長径150cm、短径65cm、底面で長径80cm、短径52cmを測る。

壁・底面 壁は、南壁が底面より垂直に立ち上がりながら開口部に至り、また、北壁は底面



層	色	YR	土質	備考
第1層	黒褐色	10YR3/2	ローム粒を微量に混入。しまり強く、湿性、粘性あり。	
第2層	にぶい黄褐色	10YR4/3	黄褐色土が粒状及びブロック状に少量混入。1層よりややしまり弱く湿性あり、粘性若干あり。	
第3層	暗褐色	10YR3/3	黄褐色土が小ブロック及びブロック状少量混入。2層よりしまり弱く、粘性ややあり。	
第4層	褐色	10YR4/6	黒褐色土を微量に混入。3層よりややしまり弱く湿性、粘性とも強い。	
第5層	黄褐色	10YR5/8	湿性、粘性は4層と同様強い。しまりは1層よりやや弱く、砂状にゴリゴリしている。	
第6層	灰オリーブ	7.5YR6/2	火山灰、かたく締っていて、粘土質。粘性あり。	



第1号溝状ピット石器観察表

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)			
第114図-1	溝状ピット	4	(110)	(83)	32	(444)	安	L	欠損

第114図 第1号溝状ピット・出土遺物

近 と中端に段を有し、緩やかに立ち上がりながら開口部に至る。壁にはすべて凹凸がみうけられ、その構築は堅緻である。底面は若干の凹凸があり、壁同様に堅緻な構築である。

堆積土 堆積土は4層に区分した。堆積層はレンズ状を呈しており、自然堆積である。

出土遺物 遺構底面より自然礫2点、欠損ではあるが半円状偏平打製石器が1点出土した。

(奈良)

小結 本遺跡で検出された溝状ピットは1基である。ピット群が、本遺構に隣接して東西方向に存在しているが、その他の遺構は、本遺構より約20m北側に位置している。平面形は葉巻形を呈し、断面形は南壁が垂直な立ち上がりを見せているが、北壁は緩やかな立ち上がりである。出土遺物は、半円状偏平打製石器1点が出土しているが、土層断面の観察から、流れ込みによる可能性も考えられる。本県において、溝状ピットを検出した主な遺跡としては、発茶沢遺跡(青森県1982)、和野前山遺跡(青森県1984)、長七谷地遺跡(青森県1980)、売場遺跡(青森県1985)などがあげられる。断面形に注目すれば、フラスコ状あるいは壁が底面から垂直に近い立ち上がりを見せる遺構が大部分である。本遺構のように、北壁が緩やかな傾斜をもつ例は希少と思われる。本遺構の用途、性格については明確な根拠がないので、詳細については不明である。

(奈良)

2. 遺構外出土遺物

(1) 土器

本遺跡では、縄文時代早期～弥生時代にかけての土器が出土した。本節では、各時期毎に群を用いて分類し、更に類別を行なって記載する。

第 群土器（縄文時代早期）第115図～120図

本群土器は、縄文時代早期中葉の貝殻文土器であり、本遺跡の第 a層で多く出土した、文様施文・文様構成・器形等から 1類～9類土器と分類し記載する。

1類土器（第115図）

本類土器は、沈線文を主体として施文するものを本類土器とする。本類は文様施文の組み合わせにより、A種～D種と細別を行なった。

A種 沈線文のみのも 第115図 - 1～8

A種の文様構成は、横位方向に施文するもの（1～3・5）と、交差状に施文するもの（4・7・8）がみられる。横位施文の土器は、口唇部寄りに2条のもの（2）と、沈線が浅く擦痕状のもの（1）がみられる。交差状施文の土器の中で櫛歯状文様の土器（8）もみられる。（4）は交差状沈線 横位沈線の文様手順を用いている。本種の口唇部上面の形状は、（5）が平坦な他は丸みをもつ形状を呈し上面に刻みを有している。

B種 沈線文と貝殻条痕文を施文するもの 第115図 - 9

貝殻条痕を施文後に口唇部寄りに2条の横位沈線を施文している。口唇部上面に刻みを有する。

C種 沈線と爪形刺突文を施文するもの 第115図 - 10～13

沈線間に爪形刺突文を施文しており、刺突文が口縁部に対して横位のもの（10）、縦位のもの（11）がみられる。（11）は、刺突文の文様帯と交差状文様を組み合わせたものである。

D種 沈線文と貝殻腹縁文を施文するもの 第115図 - 14～19

文様施文の手順は、沈線 貝殻腹縁文の手順である。貝殻腹縁文は、沈線で構成された文様帯に施文され縦位方向のものが多い。

2類土器（第116図 - 1～10）

本類土器は、爪形刺突文を主体に文様とするものを本類とした。文様施文は、（48）の土器を除き爪形刺突文を施文する以前に地文に貝殻条痕文を施文している。貝殻条痕文は横位方向が主体を占めるが、斜位方向に施文するものもみられる（8） 爪形刺突文は、2～3段の文様構成で横位方向に展開するものが多く、（3）は斜位方向に文様構成を行なっている。爪形文の長軸方向は、口縁部に対して縦位のもの（1・4～7）・横位のもの（2・10）・斜位のもの（3・8）がみられる。

3 類土器 (第116図 - 11 ~ 18・第117図・第118図 - 1 ~ 9)

本類土器は、縄文を施文するものを本類土器とする。本類は縄文と他の文様施文の組み合わせにより、A ~ F 種と細別を行なった。

A 種 縄文のみのも の 第116図 - 11 ~ 18、第117図 - 1 ~ 16

縄文のみ施文する土器には、単節・複節・結束第2種がみられる。単節の土器には、LR (1 ~ 3) ・RL (13 ~ 18) を使用し、回転方向を変えて施文する土器もみられる。LR とRL の比率はRL 使用頻度が高い。複節には、RLR を用いている。単節同様に回転方向を変えて施文するものもみられる。(16) は、結束第2種 綾絡文 を用いて横位方向に回転施文している。

B 種 縄文と爪形刺突文を施文するもの 第117図 - 17 ~ 20、第118図 - 1 ~ 3

縄文は、単節ではLR とRL を使用し、複節 12 もみられる。爪形文は、つまみ出しによる技法 (17 ~ 19) と、爪形文の長軸方向が口縁部に対して縦位のもの (20・2) 様位のもの 1) 横位と斜位のもの 3 がみられる。爪形文の文様構成は前記で分類した2類土器と類似する。

C 種 縄文と円形竹管文を施文するもの 第118図 - 4 ~ 6

縄文は、単節LR を用いて施文している。円形竹管は、口縁部に対して直角に間隔をあけて押捺している。

D 種 縄文・円形竹管文・爪形刺突文を施文するもの 第118図 - 7

縄文地に円形竹管文と爪形文を施文している土器である。焼成・施文方法など前記のC種の土器に類似しており、C種の土器の胴部破片の可能性が高い。

E 種 縄文・沈線・円形竹管文を施文するもの 第118図 - 8

縄文は単節RL を使用している。縄文の地に沈線で文様帯を構成し、文様帯内部に円形竹管を充填している。

F 種 縄文・沈線・爪形刺突文を施文するもの 第118図 - 9

縄文の地に交差状沈線を施文し、交差状沈線の文様帯の間に斜位の爪形文を施文している。

4 類土器 (第118図 - 10 ~ 15)

貝殻表圧痕文を施文するものを本類土器とする。貝殻表圧痕文を器外面の全面に押圧したものであり、押圧は不規則で押圧面は扇形を有する。口唇部上面には連続した刻みを施す。本類土器は同一個体の可能性が高い。

5 類土器 (第118図 - 16 ~ 19・第119図 - 1 ~ 8)

貝殻腹縁文を主体として施文するものを本類土器とする。貝殻腹縁文には、横位方向に施文するもの (17・19) ・斜位方向に施文するもの (16・18) と、貝殻腹縁押し引き文 (5・7・8) がみられる。

6 類土器 (第119図 - 9 ~ 20・第120図 - 1 - 10)

貝殻条痕文を主体として施文するものを本類土器とする。貝殻条痕文は、横位方向に施文するものが一般的である。貝殻条痕文は器外面のみで器内面には施文されていない。また、口唇部の上面に連続に刻みを有する特徴をもっている。(15)は、口唇部寄りに穿孔した補修孔である。

7類土器(第120図 - 11~12)

無文のものを本類土器とする。口唇部の形状は丸みをもっており、上面に連続した刻みを有する。

8類土器(第120図 - 13)

貫通孔を有するものを本類土器とする。土器焼成以前に穿孔された無文の土器である。

9類土器(第120図 - 14~17)

底部および底辺部の土器を一括として本類土器とする。底部は、やや丸みを有するもの(16)と先端部が突出した乳房状突起(14・15・17)の二種類があり、乳房状突起の形状をなすものが多い。器外面には、(15)が横位方向に展開する貝殻条痕文を施文し、他は無文である。(16)~(17)は先端部にかけて縦位調整によるナデがみられるものである。

第 群土器(縄文時代前期)第121図~125図

本群土器は、文様施文・時期差から1類~3類土器と類別を行ない記載する。

1類土器(第121・122・123図 - 1~8)

連続押し引き竹管文及び沈線を施文するものを本類とする。連続押し引き竹管文の土器は、口縁が波状口縁〔鷹架遺跡(青森県1980)では、波状口縁が頂端部が鋭利な角度であるが、本遺跡では鈍角な波状口縁である〕と平口縁があり、平口縁が主体を占める。口唇部上面は、整形時に口唇部面をプレスした際に生じた粘土のまくれがみられる。口唇部の断面形状は、円形とやや丸みを呈する形状である。底部は尖端が丸みをもつ尖底深鉢形土器である。文様構成については、(口縁部文様帯)・(胴部文様帯)・(底部文様帯)に分けて記載したい。

口縁部文様帯

口縁部文様帯は3~8cmと狭義の文様帯を構成している。文様帯内部には、器外面に対して竹管状工具をやや斜めにして施文した連続押し引き竹管文がみられる。文様構成は、横位方向に4~6条を単位として施文するもの(第121図 - 2~13)と横位と斜位を組み合わせる山形状に構成するもの(1・3・4・9)・菱形形状に構成するもの(2・5)がみられる。菱形・山形状は波状口縁の垂下部に文様を展開するものが多い。また、曲線状のモチーフ(17・18)のものもみられるが、出土量は少ない。

胴部文様帯

胴部文様帯には、ループ文を段状に施文するもの(4・5・8・9・12)か縄文を施文する

もの(19)が一般的な文様構成であるが、胴部文様帯にも連続押し引き竹管文を施文し、山形状及び弧状に施文している土器もみられる(20)

底部文様帯

底部文様帯は、口縁部文様帯と同様に狭義の文様帯を構成し、連続押し引き竹管文を同心円状に横位方向に展開して文様帯を構成している。

沈線施文(2)の土器は、口唇部寄りに横位の方向に巡らしており、沈線の幅は前記した押し引き竹管文の幅と類似し、同一工具を用いたと考えられる。

2 類土器 (第123図～125図)

縄文のみ施文されるものを本類とする。使用される原体の差でA～C種と3種に細別を行なった。

A種 ループ文を施文しているもの 第123図 - 9～19 第124図

第123図は、胴部下半部が不明であるが、胴部上半部がやや張りだす深鉢形を呈する。口唇部上面の整形は、1類土器同様に上面をプレスし、その際に生じた粘土のまくれがみられ1類土器の整形技法と類似している。ループ文は、(13)がRLの原体を使用している他はすべてLRの原体を使用しており、LRが主体を占めている。文様は、ループ文を横位方向に展開し段状に構成し、その際にループ文とループ文との間に稜がみられるのが特徴的である。

B種 縄文を施文しているもの 第125図 - 1～10

縄文には、単節と複節を使用している。口唇部の形状は、前記の1類土器・2類土器a類と類似している。縄文の施文には、LRかRLの原体を用いて横位方向に回転させ条が斜位方向のもの(1・4)・二種の原体を用いて羽状縄文を構成するもの(9)・菱形状に構成するもの(5・7)・交差状に施文するもの(10)がみられる。

C種 第125図 - 11・12

綾絡文を施文するもの。本種の土器は、綾絡文を横位方向に回転して施文するものであり、焼成は両土器共に良好ではない。

3 類土器 (第125図 - 13～18)

円筒下層d1式に併行すると思われるものを本類とする。本類の土器は、横位の粘土紐を巡らして狭義の口縁部文様帯を構成し、文様帯の内部に絡条体を施文しているものである。粘土紐の上面には連続した刻みを有する。胴部文様には、木目状撚糸文(16)と、羽状縄文地に綾絡文を横位方向に施文するものもみられる。(13・17・18) (成田)

第 群土器(縄文時代中期)第126図

第 群土器は縄文時代中期前半に位置付けられ、円筒上層式土器の範疇で扱われるもので

ある。 ~ a層にわたって出土しており、層中のものが最も多い。グリッドでみるとA - 3、M - 1区を中心に調査区北西部に集中する。同一個体のものはほとんどが1箇所のグリッドからまとまって出土しており、比較的に原位置を保った出土状況といえる。付近には該期の遺構として5号・12号竪穴住居跡が存在する。個体数は僅少で、7~8個体と思われる。また、器形が扱えられるような大型の資料にとぼしく、以下の1~4類の分類は主に口縁部付近の文様を基準にして行なった。

1類土器(126図 - 1~5)

縄文原体の側面圧痕、短線状の側面圧痕(以下、短線圧痕)によって文様を構成するもの。平口縁の深鉢形土器で、口縁部が緩やかに外反し、口唇部付近が若干内湾気味になる(1・2)。文様は、口唇部より縦位の連続短線圧痕、2~4条の横位の直線状側面圧痕が交互に繰り返して施文される。貼り付け隆帯は横走するもの(4)垂下するもの(5)があり、隆帯上には短線圧痕が連続施文される。原体は単節縄文で、(1)はRL、(2~5)はLRである。(3~4)は同一個体とみられる。胎土には少量の植物繊維が混入しており、焼成も良好である。また、外面に煤状炭化物の付着が認められるものが多い。

2類土器(126図 - 6~9)

1類と同様に縄文原体の側面圧痕が多用され、さらに口頸部に結節回転文が施されるもの。本類は全て同一個体である。平口縁の深鉢形土器で、口縁部は緩やかに外反する。口頸部で屈曲し、胴部上半が張り出す器形を呈する。貼り付け隆帯は波状をなし、波頂部には瘤状の貼り付けが施される。口唇部及び隆帯には縦位の短線圧痕が施され、また、口頸部の屈曲部直上に同様の圧痕を巡らして文様帯を区画している。口頸部以下の文様は、結節回転文と同一原体による斜行縄文で構成される。原体は単節LR縄文が用いられる。胎土には植物繊維を少量混入しており、内面も横位の篋調整が丹念に施されている。焼成も良好で、外面には煤状炭化物の付着が認められる。

3類土器(第126図 - 10~12)

刺突文が施されるもの。

本類は全て同一個体と思われる。断面が楕円形の円柱状を呈する突起が、やや内湾気味に付設され、直下に環状の貼り付け隆帯が施される(10)。口頸部の隆帯には、斜行もしくは鋸歯状を呈するもの(11)と横走するもの(12)があり、隆帯上には刻み目が付されている。また、隆帯間には棒状工具による方形の連続刺突文が施される。胎土には少量の白色鉱物粒及び微量の石英粒を混入しており、焼成も比較的的良好である。外面に煤状炭化物の付着が認められる。

4類土器(第126図 - 13~16)

比較的細めの貼り付け隆帯が波状もしくは網目状に施されるもの。

緩やかに外反する弁状突起が付設されており、口頸部の屈曲も顕著ではない。底部より緩やかに開く深鉢形を呈すると思われる(13)。この弁状突起にはボタン状の円形貼り付け文が施され、直下には盲孔が穿れている。口唇部には波状に、以下は網目状に隆帯が貼り付けられ、この隆帯には原体RLの単節縄文が横位回転施文される(13~16)。胎土には砂粒、少量の黒雲母片及び石英片を混入しており、焼成も良好である。また、外面に煤状炭化物の付着が認められるものもある(13~15)。(川岸)

第 群土器(縄文時代後期)第127図~第143図

本群土器は、時期差を考慮して1類~5類土器と類別を行ない、更に類別の中で種を用いて細別を行ない分類し記載する。

1類土器(第134図~137図)

本類土器は、縄文時代後期初頭~前葉期にかけて併行する土器である。文様要素・文様構成の差異でA~F種と6種に細別を行なった。

A種 縄文地に沈線が施文されるもの 第134図-1~6

本種の形状は、口頸部があまり内反せず口唇部の断面形状が丸みをもつ深鉢形土器である。縄文地に単節を用い縦位方向(2・3)、曲線状(1)に文様を施文している。本種は、全体の文様モチーフが不明瞭な為に群の縄文時代後期に分類したが、縄文時代中期末葉の大木10式併行土器(成田1985)に位置づけられる可能性もある。

B種 粘土紐を主体的に貼り付けているもの 第134図-7~15 第135図-1・2・5~12

粘土紐の貼り付けの位置は、横位と縦位の粘土紐を用いて口縁部及び胴部文様の区画帯に用いられるもの(7・14・15)、文様帯の終起点に貼り付けるもの(8)、波状口縁の垂下部にボタン状に貼り付けるもの(5~7)、口縁部文様帯に鱗状に貼り付けるもの(12・13)がみられる。粘土紐の断面形は、つまみだして断面が三角形状(8)、粘土紐の幅が狭く円形のもの(4)、粘土紐の幅が広く丸みを有するもの(1・2)に分かれる。粘土紐の上面には、連続した刻み目(14・15)、縄文(4・11)を施文している土器が多い。文様構成は、口縁部文様帯では粘土紐の両側を沈線で施文した楕円形文様(7)の他には文様を施文しない無文地が多い。胴部文様帯は、小破片の為に全体的な文様構成は定かでないが、縦位方向に展開する文様構成と思われる。ボタン状の貼り付けの土器は、縄文地の土器が多くみられる。

C種 撚糸圧痕を施文しているもの 第135図~137図

本種の文様構成は、波状口縁の垂下部にS字状・縦位状・ボタン状の貼り付けがありb種の貼り付け文と文様構成が類似している。撚糸圧痕は、口縁部文様帯に施文されるものが多く1~2条を横位に施文し、口唇部寄りに多く施文されるのが特徴である。撚糸圧痕の多くは無文

地に圧痕されるが、縄文地に圧痕(1・2)するものもみられる。(1)は、撚糸圧痕を多用し横位・曲線状に文様モチーフを構成しており類例は少ない。

D種 磨消縄文を施文しているもの 第137図 - 8 ~ 13

縄文は、すべて単節を使用している。文様構成は、逆J字状文様(13)、曲線状文様(10)、横位方向に展開する文様(9・12)がみられる。(8)は、口唇部寄りに一部分のみに磨消を施したものである。

E種 沈線施文の土器 第137図 - 14 ~ 16

本種は、4類の十腰内 式の土器とは異質で沈線の幅がひろく大柄な渦巻文様を施文しているものを本類とした。(15・16)は、器外面に赤色顔料塗布がみられる。

F種 切断蓋付土器 第127図 - 3

本種は、体部と蓋部を切り離している切断蓋付土器である。体部と蓋部に相対称して貫通孔のみみられる突起を有し、体部には横位方向に展開する楕円形文様を施文している。器外面に赤色顔料を塗布している。

2類土器(第138図)

本類は、縄文時代後期前葉期の弥栄平(2)タイプの土器を本類とした。

器形は、口頸部が内反し口唇部の断面が円形で器厚が厚い深鉢形土器である。口縁部は、波状口縁が多く(8)は波状口縁の頂端部が二股に分離している。

文様は、2~3条の横位沈線を巡らして文様区画帯を構成し、区画帯の内部に波状口縁の垂下部を中心として縦位の渦巻文様を施文している土器である。

3類土器(第127図 - 1・2・4 第128図 - 1 第139図)

本類土器は、十腰内 式に併行するものを本類とした。

本類土器は沈線文を主体とした土器である。(2)は、波状口縁の垂下部にY字状の粘土紐を貼り付け胴部下半に蛇行の縦位の沈線を連続状に施文しており、十腰内 式の古段階に併行すると思われる。

(1)~(4)の文様構成は、横位方向に展開する稚拙な入組状文及び弧状文が主体を占める。櫛歯状施文の土器は、櫛歯状施文のみのもものと、櫛歯状施文後に沈線で縁どりがみられる二種の施文方法がみられる。(9)は、波状口縁部のみに連続の刻み目がみられるもので十腰内 式の新段階によくみられる特徴である。

4類土器(第128図・129図・140図)

本類土器は、1類~3類土器に併行する粗製土器(縄文・無文)を一括として取り扱った。

縄文施文の土器は、無節・単節・綾絡文を用いている。無節の土器は、(L)を用いて口唇部寄りと下位とで回転方向を変えている土器であり、縄文時代後期前葉期によくみられ

る施文方法である。単節施文の土器は、LRとRLを用いておりLRの使用頻度が高い。

5類土器（第130～133図・第141～144図）

本類土器は、十腰内 式に併行するものを本類とした。

本類の器形は、深鉢形・鉢形・台付鉢形・壺形・注口形・香炉形の器種が存在する。各種の器形の形状は、深鉢形土器が口頸部が張り出し口唇部寄りが内反するタイプと胴部上半部が内反するタイプの二形状がある。鉢形土器は、深鉢形土器にみられた口唇部寄りが内反するタイプはみられずに胴部上半部及び口唇部寄りが内反するタイプがみられる。台付鉢形土器は、台部の上が鉢形土器のプロポーシオンと類似している。壺形土器は、口頸部が内反する短頸壺と長頸壺の二種の形状である。前記した器形には、底部があげ底を呈する土器が多い。注口土器は、口頸部と胴部上半が内反する形状であり、注口部は器外面に対して斜位方向のものが主体を占めるが、上向きのもの・平行のものもみられる。香炉形土器は、頂端部に二股状の突起をもち胴部が張り台部をもつ土器である。

文様の特徴としては、粘土粒を用いた瘤が一つのメルクマールとなっている。瘤は、狭義の帯状の横位文様帯に間隔をあけて位置しており、口唇部寄りに多くみられる。文様区画帯を形成しない土器は、胴部張り出し部に多く位置している。（第142図 - 17～19）は、楕円形文様の終起点に貼り付けている。文様手順は、瘤 縄文 磨消 沈線の文様手順方法を用いている。

縄文は、一種と二種の原体を用いている。一種の場合は段状に縄文を施文しており、二種の原体は、結束のない羽状縄文を構成している。口唇部の断面形状が、内側に削がれているのが特徴である。器形は深鉢形土器が主体を占め5は壺形土器と思われるが出土例は少ない。

無文の土器は、小型の鉢・壺形土器で焼成・整形が良好な土器が多く、一方、深鉢形土器は内面調整が荒いのが特徴である。 （成田）

第 群土器（縄文時代晩期）第145図

縄文時代晩期に比定される土器は、出土量が僅少で、器形の扱えられるものは2個体にすぎない。そこで口縁部の文様構成を主に以下の1・2類に分類した。なお出土状況は、1類は全てAI - 10区の 層中、2類はN - 1区の 層中よりまとまって出土している。

1類土器（第145図・1～5）

磨消縄文による雲形文を用いて、文様を構成するもの。

口縁部はやや把厚し、内湾する浅鉢形土器である。口縁部には、入組みの入った小突起が2個一対で付され、沈線と連続刺突文を横位に巡らしている。胴部には磨消縄文の手法を用いた雲形文によって、K字状のモチーフが展開される。磨消しは丹念に施されており、光沢を呈し、彫刻的效果が得られている（1～3）。縄文原体は3がRLの他は全てLRで、横位に回転施文

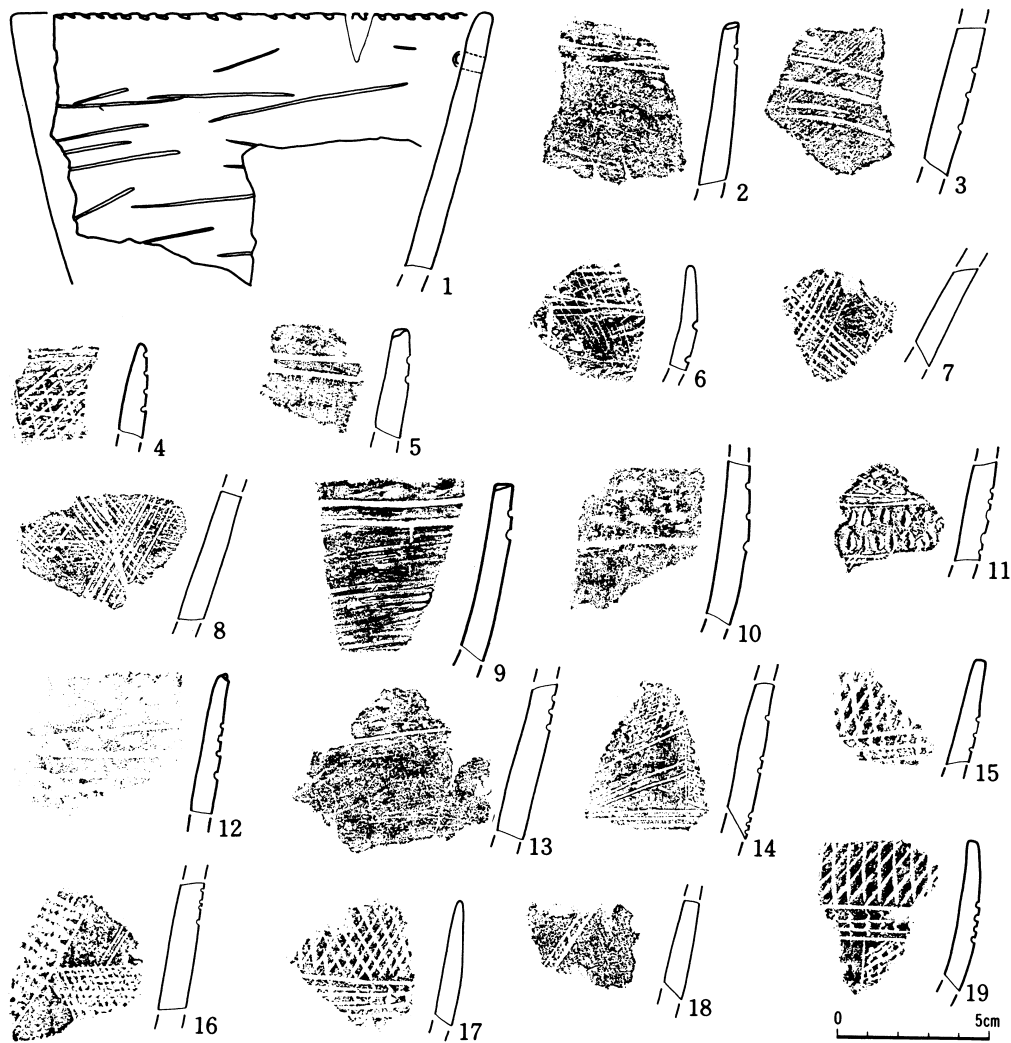
されている。胎土には細かい砂粒が混入し、焼成はいずれもやや不良である。

2類土器（第145図 - 6）

横位の平行沈線を主に、文様を構成するもの。

平口縁で、口縁部が緩やかに内湾する深鉢形土器である。口縁部内面には幅広の沈線が一条配され、口唇部を若干外反させている。この口唇部上には指頭圧痕が看取される。文様は、まず口唇部上面より胴部まで斜行縄文を施し、口唇部と胴部以下を残して磨消しを行なって無文帯を形成する。次にこの無文帯に幅広の平行沈線を三条巡らし、第二線目の沈線上に瘤状の貼り付けを2個一対に施し、工字文状のモチーフを構成している。地文は、原体RLの斜行縄文である。無文帯及び内面は、横位の篋磨きが丹念に施されており、光沢を呈している。胎土には細かい砂粒を少量混入し、焼成は良好である。

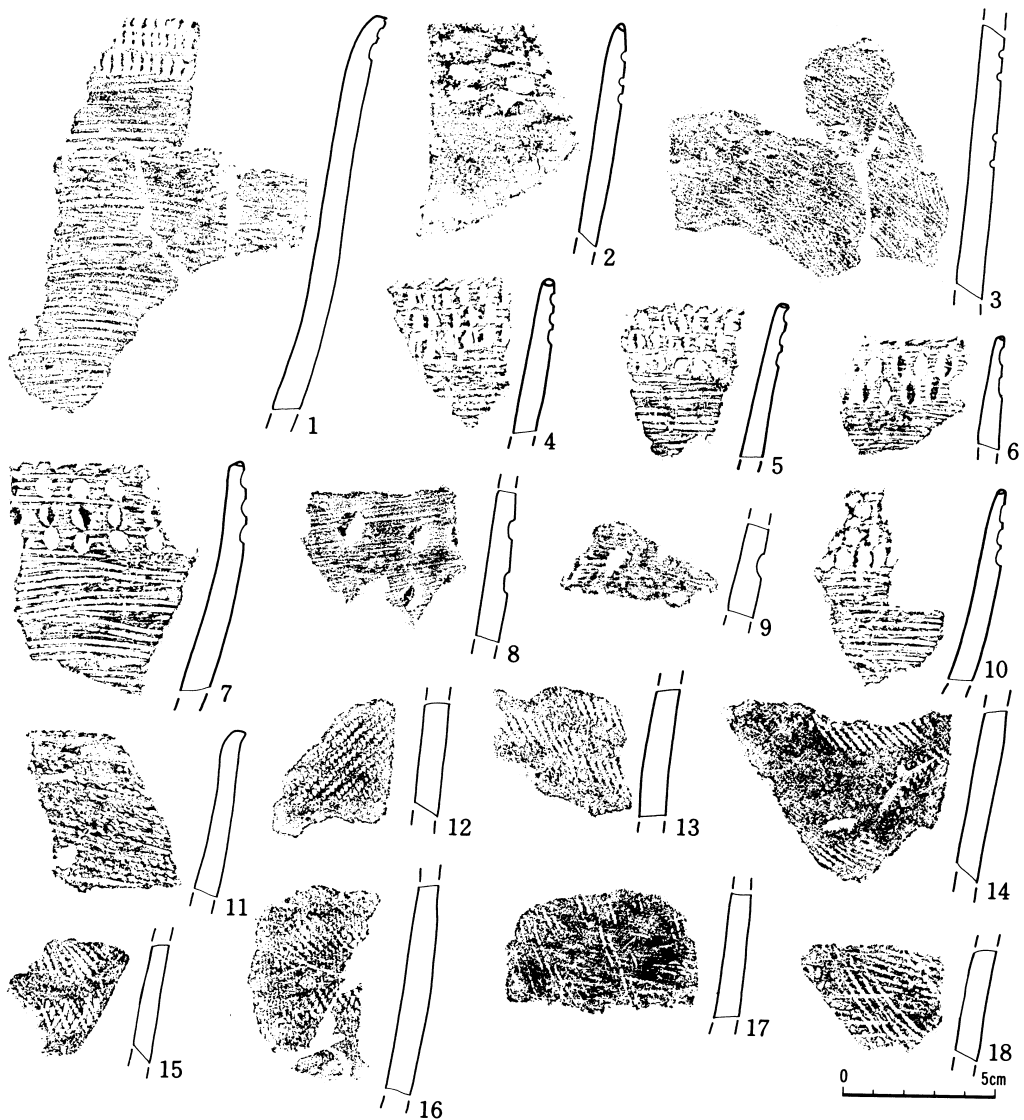
（川岸）



第I群土器観察表(1)

番号	地区・層位	部位	外面施文文様	分類
1	B0・BP-20・BM-21・IV層	口縁部	横位(沈線) 口唇部上面に連続刻み スス状炭附着	I群1類a種
2	B1-19・V層	口縁部	横位(沈線) 口唇部上面に刻み スス状炭附着	I群1類a種
3	BM-20・V層	胴部	横位弧状(沈線) スス状炭附着	I群1類a種
4	BO-11・Va層	口縁部	交差状(沈線) 口唇部上面に刻み スス状炭附着	I群1類a種
5	BN-20・IV層	口縁部	横位(沈線) 口唇部上面に刻み スス状炭附着	I群1類a種
6	BO-20・IV層	口縁部	横・斜位(沈線) 口唇部上面に刻み スス状炭附着	I群1類a種
7	BN-20・IV層	胴部	交差状(沈線) スス状炭附着	I群1類a種
8	CL-32・Va層	胴部	交差状(沈線) スス状炭附着	I群1類a種
9	BJ-19・Va層	口縁部	横位(沈線) 口唇部上面に連続刻み スス状炭附着	I群1類b種
10	BP-10・II層	胴部	横位(沈線) 爪形刺突文 スス状炭附着	I群1類c種
11	BE-11・II層	口縁部	交差状(沈線) 爪形刺突文 スス状炭附着	I群1類c種
12	BO-20・IV層	口縁部	横位(沈線) 棒状刺突 スス状炭附着	I群1類c種
13	BK-19・Va層	胴部	横位(沈線) 爪形刺突文 スス状炭附着	I群1類c種
14	BR-12・II層	口頸部	斜・縦位(沈線) 貝殻腹縁文 スス状炭附着	I群1類d種
15	BP-20・IV層	口縁部	交差状(沈線) 貝殻腹縁文	I群1類d種
16	BP-20・IV層	口頸部	爪形刺突文 貝殻腹縁文	I群1類d種
17	BO-20・IV層	口縁部	交差状(沈線) 貝殻腹縁文	I群1類d種
18	BO-20・IV層	胴部	斜位(沈線) 貝殻腹縁文	I群1類d種
19	BP-20・IV層	口縁部	交差状・横位・縦位(沈線) 貝殻腹縁文	I群1類d種

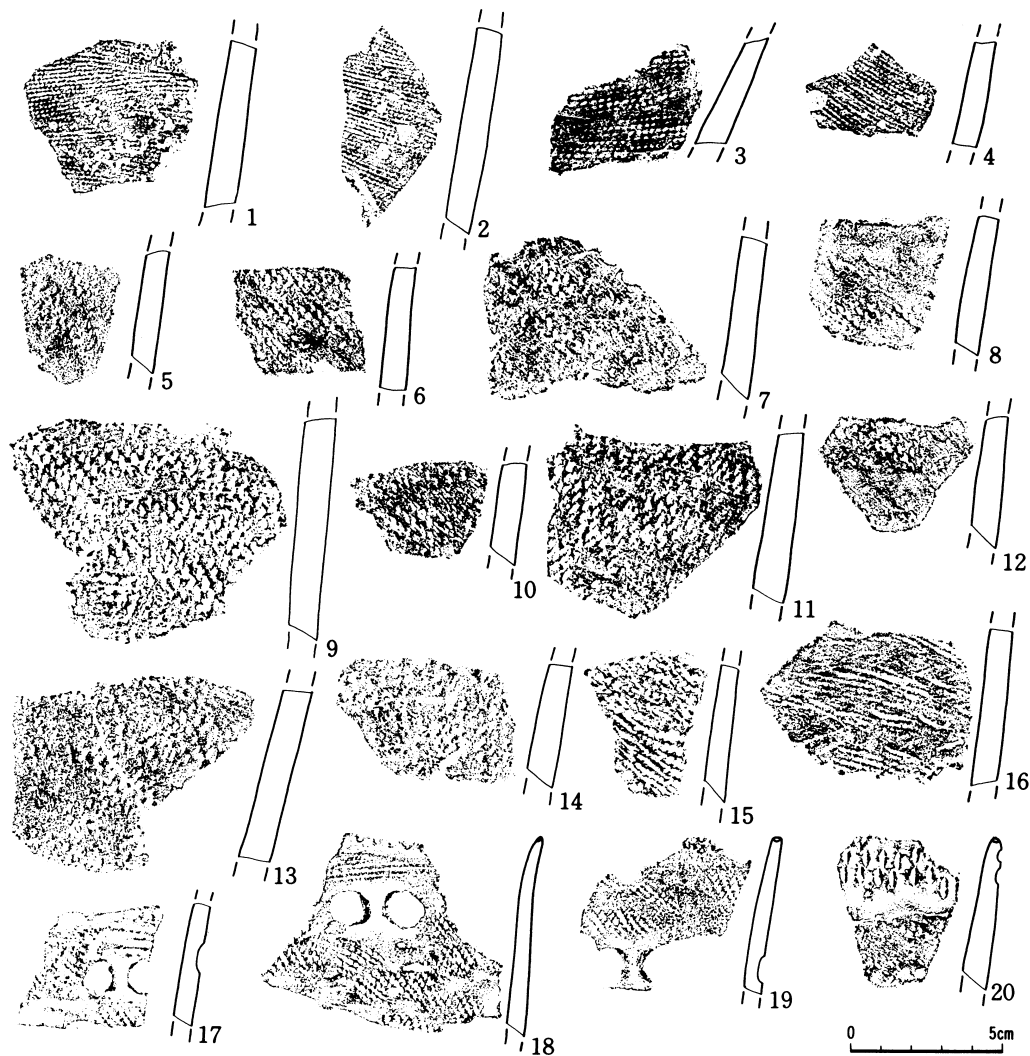
第115図 遺構外出土土器(1)



第I群土器観察表(2)

番号	地区・層位	部位	外面施文文様	分類
1	BU-20・I層	口縁部	爪形刺突文 横位 (貝殻条痕文)	I群2類
2	BC-10・II層	口縁部	爪形刺突文 口唇部上面に刻み スス状炭附着	I群2類
3	BP-20・IV層	胴部	爪形刺突文 貝殻条痕文	I群2類
4	BO-11・Va層	口縁部	爪形刺突文 貝殻条痕文 口唇部上面に刻み スス状炭附着	I群2類
5	BS-12・Va層	口縁部	爪形刺突文 貝殻条痕文 口唇部上面に刻み スス状炭附着	I群2類
6	BC-12・Va層	口縁部	爪形刺突文 貝殻条痕文 口唇部上面に刻み スス状炭附着	I群2類
7	BS-12・Va層	口縁部	爪形刺突文 貝殻条痕文 口唇部上面に刻み 繊維含む スス状炭附着	I群2類
8	BM-20・Va層	口頸部	爪形刺突文 貝殻条痕文 繊維含む スス状炭附着	I群2類
9	BM-20・Va層	胴部	爪形刺突文 貝殻条痕文 スス状炭附着	I群2類
10	BS-12・Va層	口縁部	爪形刺突文 貝殻条痕文 口唇部上面に刻み スス状炭附着	I群2類
11	BP-20・Va層	口縁部	縄文 繊維含む 口唇部上面に刻み	I群3類a種
12	BI-19・Va層	胴部	縄文 (LR)	I群3類a種
13	BM-19・Va層	胴部	縄文 (RL)	I群3類a種
14	BK-19・Va層	胴部	縄文 (RL) 繊維含む	I群3類a種
15	BO-11・Va層	胴部	縄文 (RL) スス状炭附着	I群3類a種
16	BK-19・Va層	胴部	縄文 (RL) 繊維含む スス状炭附着	I群3類a種
17	BD-17・II層	胴部	縄文 (RL)	I群3類a種
18	BD-19・II層	胴部	縄文 (RL) 繊維含む スス状炭附着	I群3類a種

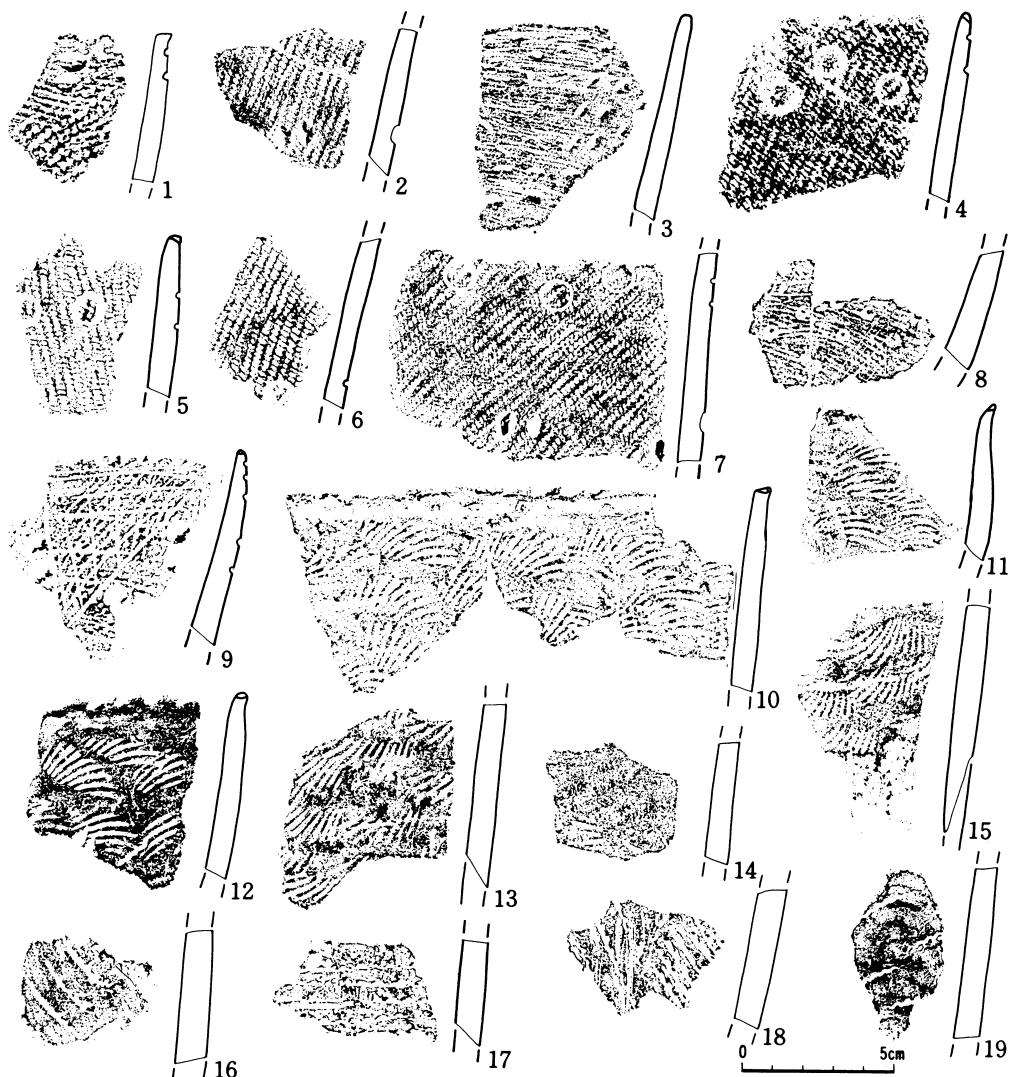
第116図 遺構外出土土器(2)



第I群土器観察表(3)

番号	地区・層位	部位	外面施文文様	分類
1	B I-19・Va層	胴部	縄文(LR) 繊維含む スス状炭附着	I群3類a種
2	B P-20・Va層	胴部	縄文(LR) 繊維含む スス状炭附着	I群3類a種
3	B M-20・Va層	胴部	縄文(LR) 繊維含む スス状炭附着	I群3類a種
4	B L-19・Va層	胴部	縄文(RL) スス状炭附着	I群3類a種
5	B R-11・Va層	胴部	縄文(RLR) 繊維含む スス状炭附着	I群3類a種
6	B R-11・Va層	胴部	縄文(RLR) スス状炭附着	I群3類a種
7	B P-20・Va層	胴部	縄文(RLR) 繊維含む スス状炭附着	I群3類a種
8	B P-20・II層	胴部	縄文(RLR) スス状炭附着	I群3類a種
9	B P-19・Va層	胴部	縄文(RLR) 繊維含む スス状炭附着	I群3類a種
10	B I-19・Va層	胴部	縄文(RLR)	I群3類a種
11	B T-12・II層	胴部	縄文(RLR)	I群3類a種
12	B O-11・Va層	胴部	縄文(RLR) 繊維含む スス状炭附着	I群3類a種
13	B Q-19・Va層	胴部	縄文(RLR) 繊維含む スス状炭附着	I群3類a種
14	B P-20・Va層	胴部	縄文(RLR) 繊維含む スス状炭附着	I群3類a種
15	B D-19・II層	胴部	縄文(RL) 繊維含む スス状炭附着	I群3類a種
16	B I-19・Va層	胴部	縄文(RL) 綾絡文 スス状炭附着	I群3類a種
17	B K-20・Va層	口頸部	縄文(RL) 指頭によるつまみだし スス状炭附着	I群3類b種
18	B P-22・Va層	口縁部	縄文(RL) 口唇部上面に連続の刻み 指頭によるつまみだし 繊維含む スス状炭附着	I群3類b種
19	B M-20・Va層	口縁部	縄文(RL) 指頭によるつまみだし 口唇部上面に刻み スス状炭附着	I群3類b種
20	B P-10・II層	口縁部	縄文(RLR) 口唇部上面に刻み 爪形刺突文 繊維含む スス状炭附着	I群3類b種

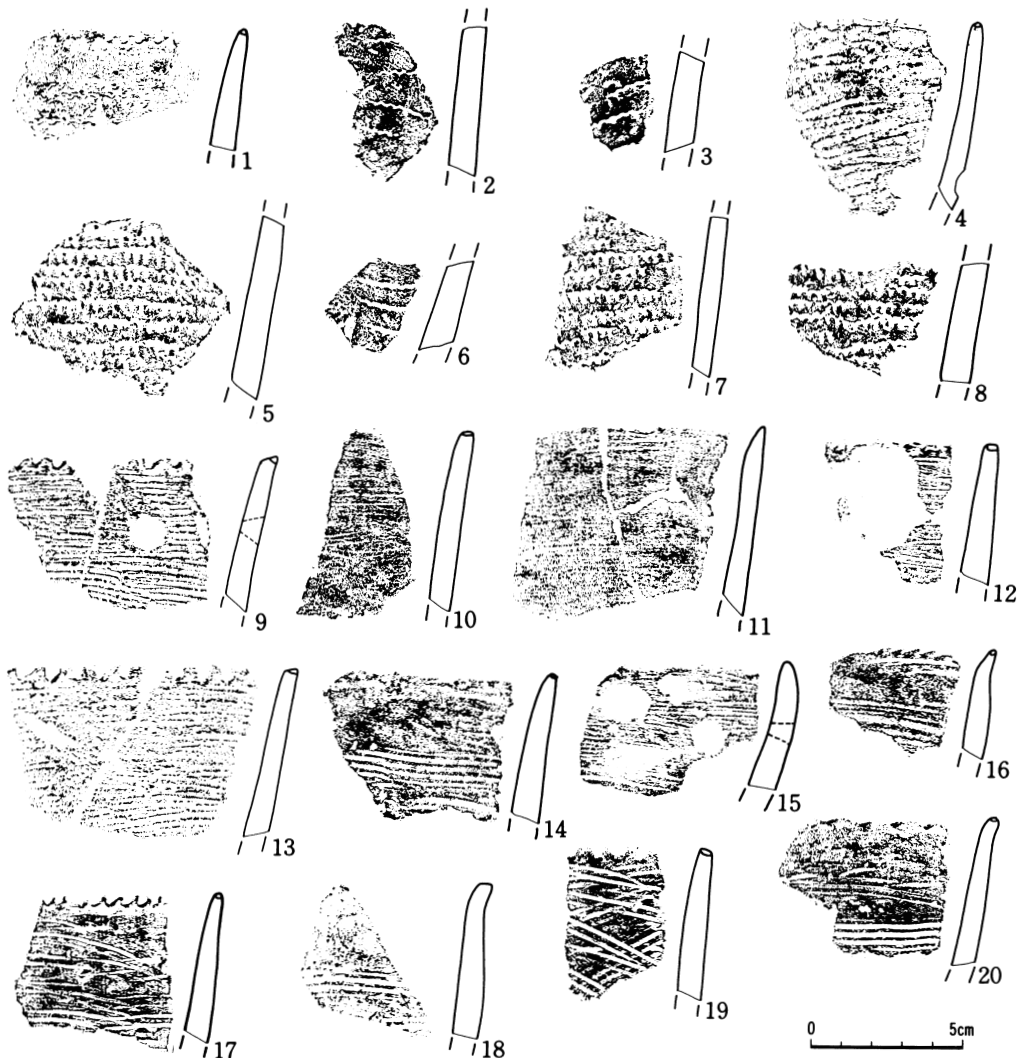
第117図 遺構外出土土器(3)



第I群土器観察表(4)

番号	地区・層位	部位	外面施文文様	分類
1	BD-19・II層	口縁部	縄文(RL) 爪形刺突文 スス状炭附着	I群3類b種
2	BH-19・Va層	胴部	縄文(LR) 爪形刺突文 スス状炭附着	I群3類b種
3	BP-20・Va層	口縁部	縄文 爪形刺突文 スス状炭附着	I群3類b種
4	BP-20・Va層	口縁部	縄文(LR) 円形竹管文 口唇部上面に連続刻み スス状炭附着	I群3類c種
5	BP-20・Va層	口縁部	縄文(LR) 円形竹管文 口唇部上面に連続刻み スス状炭附着	I群3類c種
6	BP-20・Va層	口頸部	縄文(LR) 円形竹管文 スス状炭附着	I群3類c種
7	BP-19・Va層	胴部	縄文(LR) 円形竹管文 爪形刺突 スス状炭附着	I群3類d種
8	BE-11・II層	口頸部	縄文(RL) 円形竹管文 斜位 横位(沈線) スス状炭附着	I群3類e種
9	BO-11・Va層	口縁部	交差状(沈線) 爪形刺突文 縄文 口唇部上面に連続刻み スス状炭附着	I群3類f種
10	BP-10・II層	口縁部	貝殻表圧痕文 口唇部上面に刻み スス状炭附着	I群4類
11	BP-10・II層	口縁部	貝殻表圧痕文 口唇部上面に刻み スス状炭附着	I群4類
12	BP-10・II層	口縁部	貝殻表圧痕文 口唇部上面に刻み スス状炭附着	I群4類
13	BQ-19・Va層	胴部	貝殻表圧痕文 スス状炭附着	I群4類
14	BP-10・II層	口頸部	貝殻表圧痕文 スス状炭附着	I群4類
15	BP-10・II層	胴部	貝殻表圧痕文 スス状炭附着	I群4類
16	BQ-9・II層	胴部	貝殻腹縁文 スス状炭附着	I群5類
17	BH-19・Va層	胴部	貝殻腹縁文 スス状炭附着	I群5類
18	BK-19・Va層	胴部	貝殻腹縁文 スス状炭附着	I群5類
19	BH-19・Va層	胴部	貝殻腹縁文 スス状炭附着	I群5類

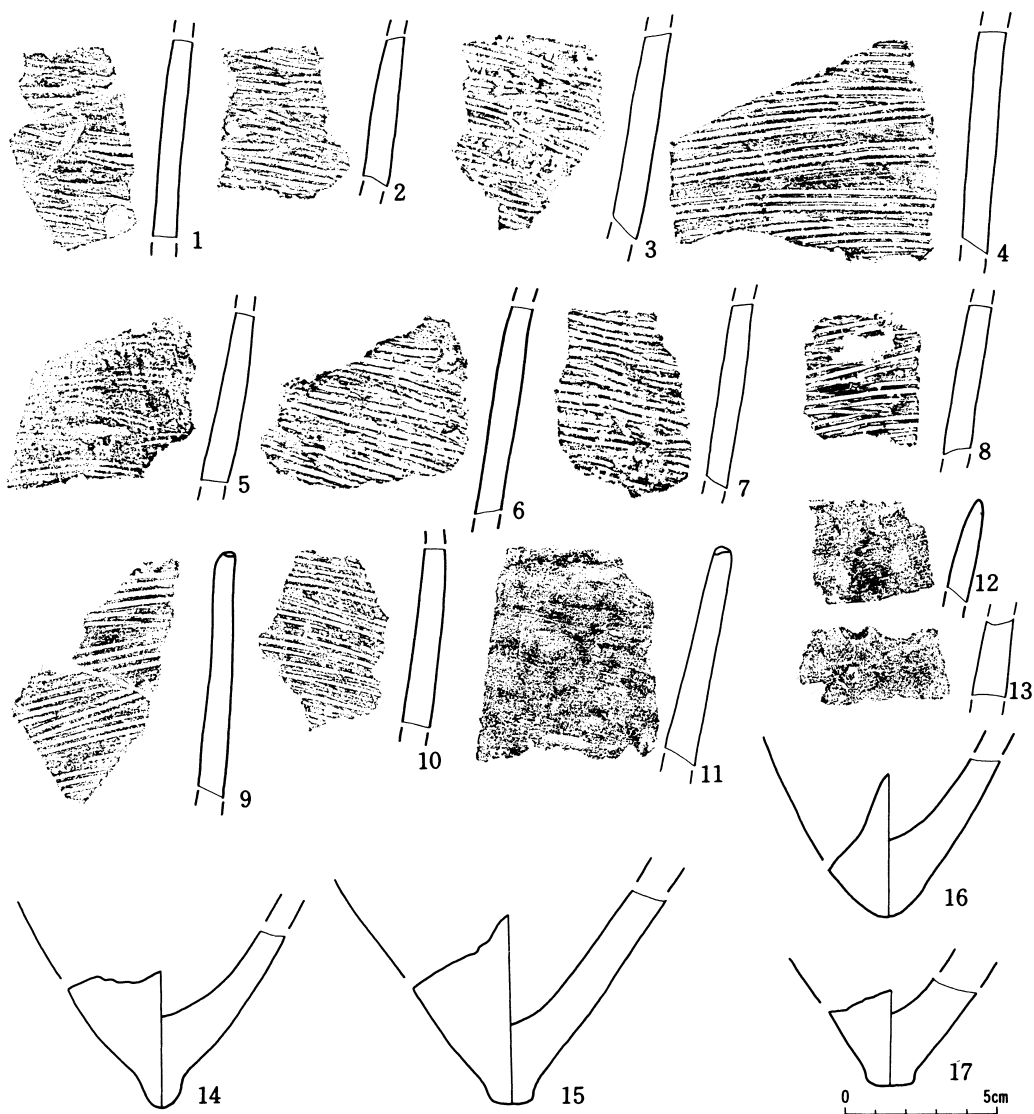
第118図 遺構外出土土器(4)



第I群土器観察表(5)

番号	地区・層位	部位	外面施文文様		分類
1	BH-19・Va層	口縁部	貝殻腹縁文	口唇部上面に刻み スス状炭附着	I群5類
2	BJ-19・Va層	胴部	貝殻腹縁文		I群5類
3	BO-24・Va層	胴部	貝殻腹縁文		I群5類
4	BI-21・Va層	口縁部	貝殻腹縁文	口唇部上面に刻み スス状炭附着	I群5類
5	BO-22・II層	胴部	貝殻腹縁文	スス状炭附着	I群5類
6	BQ-9・II層	胴部	貝殻腹縁文	スス状炭附着	I群5類
7	BC-8・Va層	胴部	貝殻腹縁文	スス状炭附着	I群5類
8	BC-19・II層	胴部	貝殻腹縁文	スス状炭附着	I群5類
9	BQ-19・Va層	口縁部	貝殻条痕文(横位)	口唇部上面に刻み 補修孔 スス状炭附着	I群6類
10	BO-11・Va層	口縁部	貝殻条痕文(横位)	口唇部上面に刻み 繊維含む スス状炭附着	I群6類
11	BR-11・Va層	口縁部	貝殻条痕文(横位)	スス状炭附着	I群6類
12	BJ-20・Va層	口縁部	貝殻条痕文(横位)	口唇部上面に刻み スス状炭附着	I群6類
13	BP-19・Va層	口縁部	貝殻条痕文(横位)	口唇部上面に刻み スス状炭附着	I群6類
14	BO-11・Va層	口縁部	貝殻条痕文(横位)	口唇部上面に刻み スス状炭附着	I群6類
15	BP-10・II層	口縁部	貝殻条痕文(横位)	口唇部上面に刻み 繊維含む スス状炭附着	I群6類
16	BH-19・Va層	口縁部	貝殻条痕文(横位)	口唇部上面に刻み スス状炭附着	I群6類
17	BO-11・Va層	口縁部	貝殻条痕文(横位)	口唇部上面に刻み スス状炭附着	I群6類
18	BI-19・Va層	口縁部	貝殻条痕文(斜位)	スス状炭附着	I群6類
19	BC-19・II層	口縁部	貝殻条痕文(交差状)	口唇部上面に刻み	I群6類
20	BJ-19・Va層	口縁部	貝殻条痕文(横位)	口唇部上面に刻み	I群6類

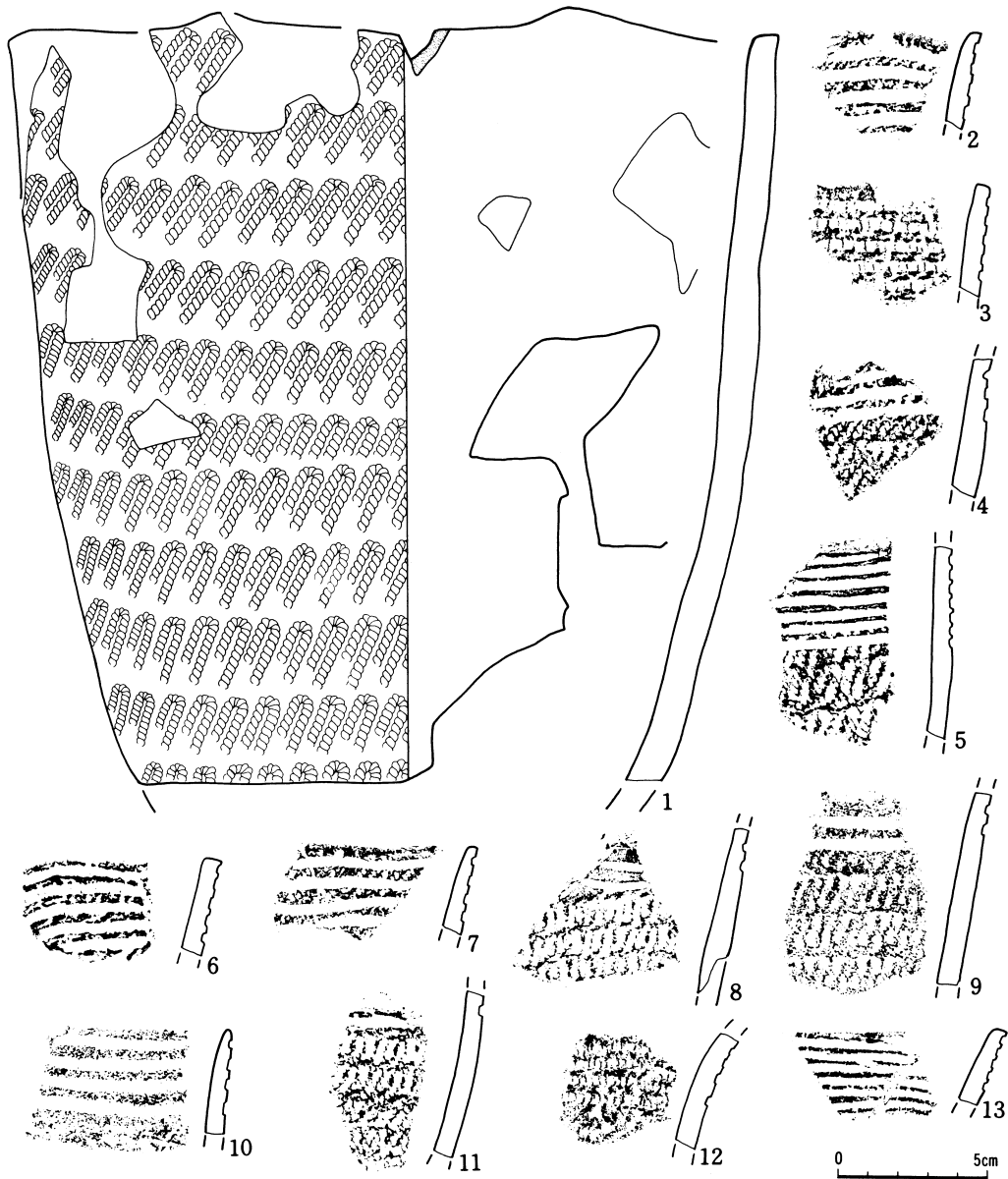
第119図 遺構外出土土器(5)



第I群土器観察表(6)

番号	地区・層位	部位	外面施文文様	分類
1	BZ-35・II層	胴部	貝殻条痕(斜位) スス状炭付着	I群6類
2	BH-19・Va層	胴部	貝殻条痕(斜位) スス状炭付着	I群6類
3	BI-21・Va層	胴部	貝殻条痕(斜位)	I群6類
4	BS-12・Va層	胴部	貝殻条痕(横位) スス状炭付着	I群6類
5	BO-11・Va層	胴部	貝殻条痕(横位)	I群6類
6	BP-10・III層	胴部	貝殻条痕(横位) スス状炭付着	I群6類
7	BQ-9・II層	胴部	貝殻条痕(横位)	I群6類
8	BJ-22・II層	胴部	貝殻条痕(横位)	I群6類
9	BD-19・II層	口縁部	貝殻条痕(横・斜位) 口唇部上面に刻み	I群6類
10	BI-20・Va層	胴部	貝殻条痕(斜位)	I群6類
11	BH-21・Va層	器内外面に横位調整	口唇部上面に刻み スス状炭付着	I群7類
12	BG-9・II層	口縁部	器内外面に横位調整	I群7類
13	BI-19・Va層	胴部	胴部に一孔の貫通孔 スス状炭付着	I群8類
14	AZ-18・I層	底部	乳房状尖底 器内面横位調整 スス状炭付着	I群9類
15	BH-20・Va層	底部	乳房状尖底 器内面横位調整 器外面縦位調整 スス状炭付着	I群9類
16	BK-19・Va層	底部	器外面縦位調整 スス状炭付着	I群9類
17	BM-20・Va層	底部	器外面横位調整	I群9類

第120図 遺構外出土土器(6)



第II群土器観察表(1)

番号	地区・層位	部位	外面施文文様	分類
1	J-2・II層	深鉢形	ループ文(LR) 繊維含む スス状炭附着	II群2類 a種
2	K-I・I層	口縁部	波状口縁 横位状文様 連続押し引き竹管文 繊維含む スス状炭附着	II群1類
3	L-I・I層	口縁部	横位状文様 連続押し引き竹管文 繊維含む	II群1類
4	J-0・I層	口頸部	ループ文(LR) 連続押し引き竹管文 繊維含む	II群1類
5	M-1・II層	口頸部	横位状文様 ループ文(LR) 連続押し引き竹管文 繊維含む スス状炭附着	II群1類
6	L-I・I層	口縁部	横位状文様 連続押し引き竹管文 繊維含む	II群1類
7	L-A・I層	口縁部	波状口縁 横位状文様 連続押し引き竹管文 スス状炭附着	II群1類
8	G-I・II層	口頸部	横位状文様 連続押し引き竹管文 ループ文(LR)	II群1類
9	K-A・I層	口頸部	ループ文(LR) 連続押し引き竹管文	II群1類
10	K-A・I層	口縁部	横位状文様 連続押し引き竹管文 スス状炭附着	II群1類
11	G-I・II層	口頸部	横位状文様 連続押し引き竹管文 ループ文(LR) 繊維含む	II群1類
12	N-0・II層	口頸部	横位状文様 連続押し引き竹管文 スス状炭附着	II群1類
13	J-0・II層	口縁部	横位状文様 連続押し引き竹管文 スス状炭附着	II群1類

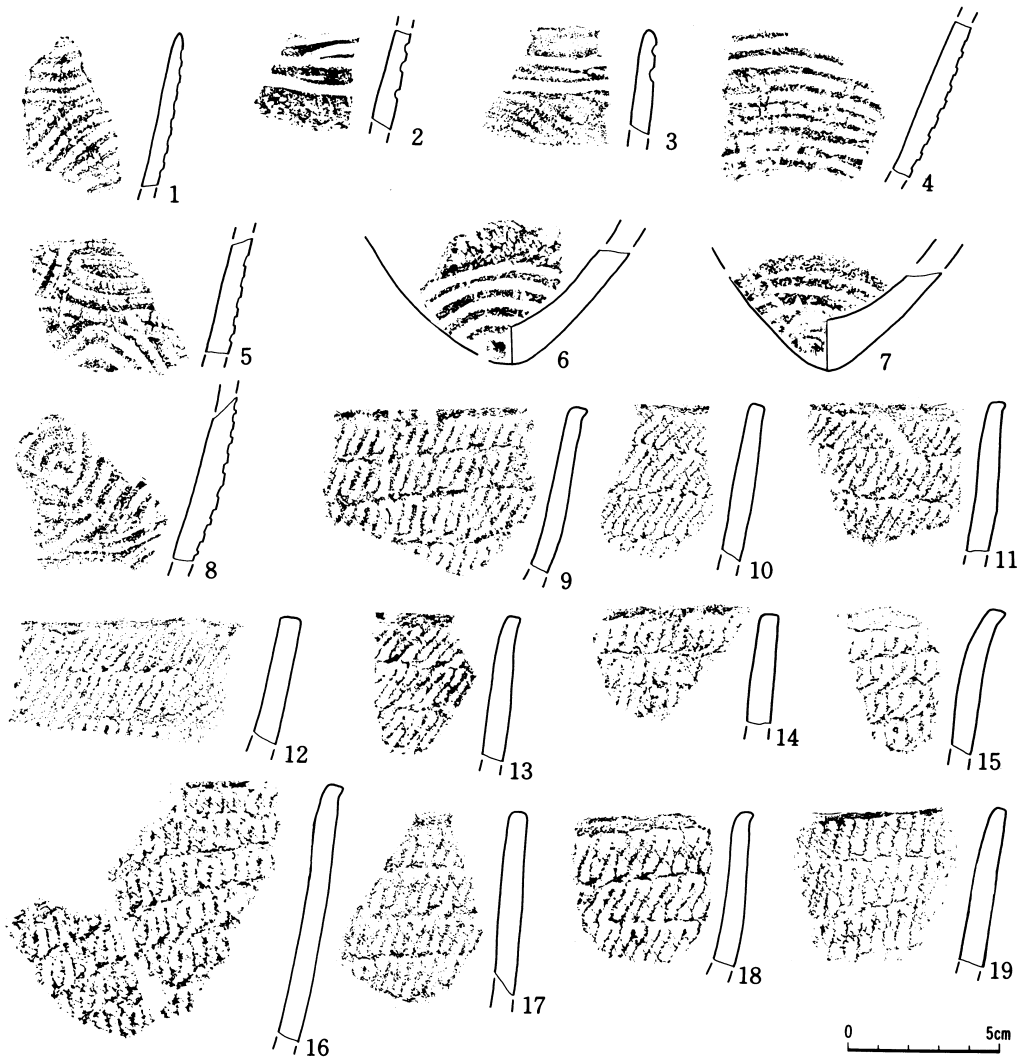
第121図 遺構外出土土器(7)



第II群土器観察表(2)

番号	地区・層位	部位	外面施文文様	分類
1	L-ウ・I層	口縁部	波状口縁 V字状文様 連続押し引き竹管文 繊維含む	II群1類
2	M-1・I層	口縁部	波状口縁 横位・V字状文様 連続押し引き竹管文 繊維含む スス状炭付着	II群1類
3	G-イ・II層	口縁部	波状口縁 横・斜位状文様 連続押し引き竹管文 繊維含む スス状炭付着	II群1類
4	H-ウ・II層	口縁部	横・斜位状文様 連続押し引き竹管文 スス状炭付着	II群1類
5	A-5・II層	口縁部	横・斜位状文様 波状口縁 連続押し引き竹管文 スス状炭付着	II群1類
6	O-9・I層	口縁部	波状口縁 V字状文様 縄文 連続押し引き竹管文 スス状炭付着	II群1類
7	Q-ア・II層	口縁部	横・斜位状文様 連続押し引き竹管文 繊維含む	II群1類
8	P-1・II層	口縁部	曲線状文様 連続押し引き竹管文 繊維含む	II群1類
9	K-ア・I層	口縁部	横・斜位状文様 縄文(LR) 連続押し引き竹管文 繊維含む	II群1類
10	C-5・I層	口頸部	山形状文様 縄文(RL) 連続押し引き竹管文 繊維含む	II群1類
11	L-ア・I層	口縁部	横・斜位状文様 連続押し引き竹管文 繊維含む	II群1類
12	B-ア・I層	口頸部	曲線状文様 連続押し引き竹管文 繊維含む	II群1類
13	G-ウ・II層	口縁部	波状口縁 横・V字状文様 連続押し引き竹管文	II群1類
14	I-2・I層	口縁部	波状口縁 菱形状文様 連続押し引き竹管文 繊維含む	II群1類
15	B-ア・I層	口縁部	横・斜位状文様 連続押し引き竹管文 繊維含む	II群1類
16	M-1・Va層	胴部	縄文(LR・RL) 山形状文様 連続押し引き竹管文 繊維含む	II群1類
17	J-0・I層	口縁部	縄文(LR) 曲線状文様 連続押し引き竹管文 繊維含む	II群1類
18	B-ア・I層	口縁部	横位・曲線状文様 連続押し引き竹管文 スス状炭付着 繊維含む	II群1類
19	S-ア・II層	胴部	縄文(LR) 横位状文様 連続押し引き竹管文 繊維含む	II群1類
20	B-ア・I層	口頸部	横・斜位状文様 連続押し引き竹管文 スス状炭付着 繊維含む	II群1類

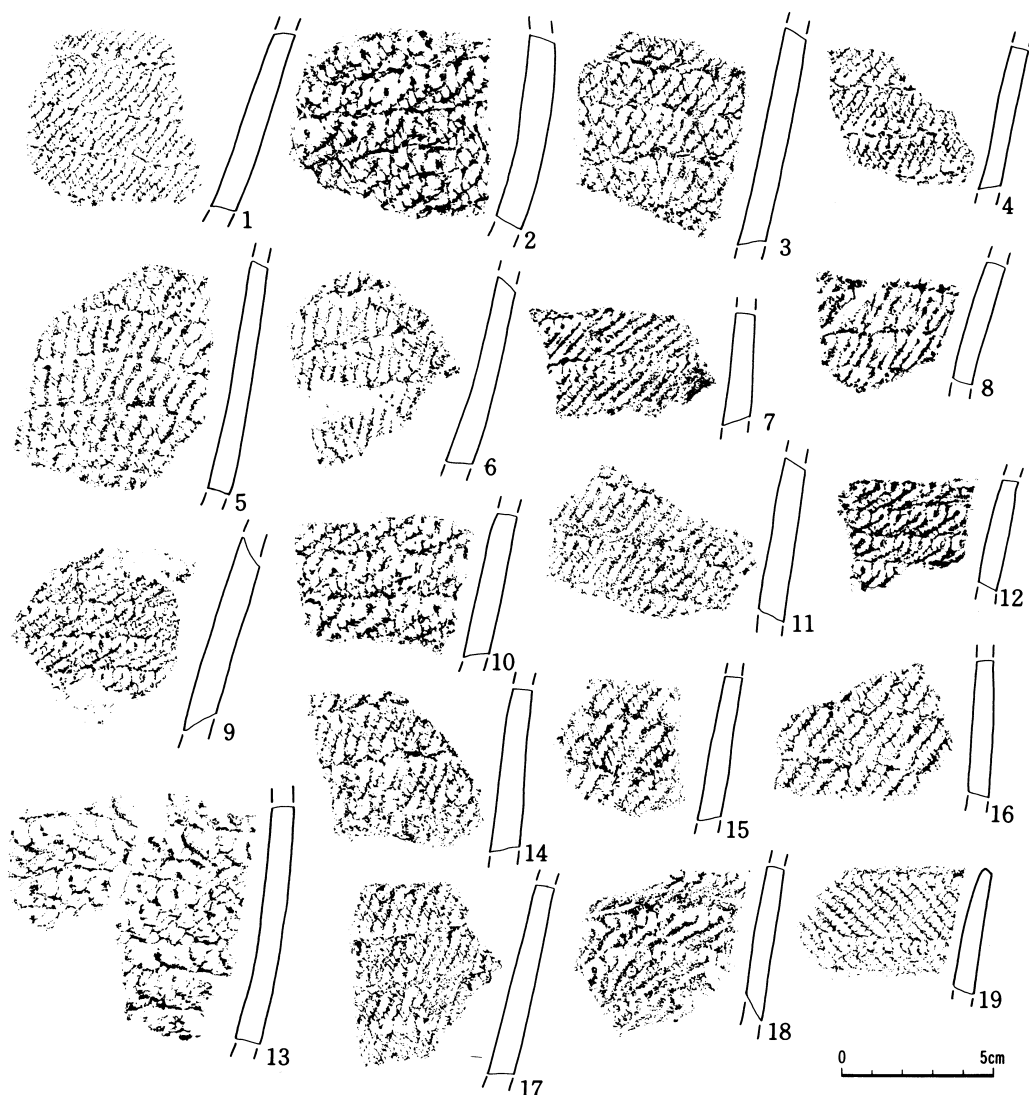
第122図 遺構外出土土器(8)



第II群土器観察表(3)

番号	地区・層位	部位	外面施文文様	分類
1	AA-0・II層	口縁部	斜位状文様 連続押し引き竹管文 繊維含む スス状炭附着	II群1類
2	A-2・II層	口頸部	横・斜位状(沈線) 縄文 スス状炭附着	II群1類
3	C-ウ・II層	口縁部	横位(沈線) 縄文(RL) スス状炭附着	II群1類
4	CI-18・I層	底辺部	横位状文様 連続押し引き竹管文 スス状炭附着	II群1類
5	Q-ア・II層	底辺部	曲線状文様 連続押し引き竹管文 スス状炭附着	II群1類
6	J-1・I層	底部	横位状文様 繊維含む 連続押し引き竹管文 縄文(LR)	II群1類
7	F-7・II層	底部	横位状文様 連続押し引き竹管文 繊維含む	II群1類
8	Q-ア・II層	底辺部	斜位・山形状文様 連続押し引き竹管文 繊維含む	II群1類
9	K-1・II層	口縁部	ループ文(LR) スス状炭附着	II群2類a種
10	J-0・I層	口縁部	ループ文(LR) スス状炭附着	II群2類a種
11	J-0・I層	口縁部	ループ文(LR) スス状炭附着	II群2類a種
12	K-1・I層	口縁部	ループ文(LR) 繊維含む スス状炭附着	II群2類a種
13	J-0・I層	口縁部	ループ文(LR) スス状炭附着	II群2類a種
14	J-0・I層	口縁部	ループ文(LR) スス状炭附着	II群2類a種
15	B-1・I層	口縁部	ループ文(LR) 繊維含む スス状炭附着	II群2類a種
16	J-0・I層	口縁部	ループ文(LR) 繊維含む スス状炭附着	II群2類a種
17	R-ウ・II層	口縁部	ループ文(LR) 繊維含む スス状炭附着	II群2類a種
18	H-イ・II層	口縁部	ループ文(LR) 繊維含む スス状炭附着	II群2類a種
19	J-0・I層	口縁部	ループ文(LR) スス状炭附着	II群2類a種

第123図 遺構外出土土器(9)



第II群土器観察表(4)

番号	地区・層位	部位	外面施文文様		分類
1	J-1・Va層	胴部	ループ文 (LR)	スス状炭附着	II群2類a種
2	S-ア・II層	胴部	ループ文 (LR)	繊維含む スス状炭附着	II群2類a種
3	P-イ・II層	胴部	ループ文 (LR)	繊維含む スス状炭附着	II群2類a種
4	J-0・I層	胴部	ループ文 (LR)	スス状炭附着	II群2類a種
5	K-ア・I層	胴部	ループ文 (LR)	スス状炭附着	II群2類a種
6	L-ア・I層	胴部	ループ文 (LR)	繊維含む スス状炭附着	II群2類a種
7	A-1・II層	胴部	ループ文 (LR)	スス状炭附着	II群2類a種
8	K-0・I層	胴部	ループ文 (LR)	繊維含む	II群2類a種
9	A-1・II層	胴部	ループ文 (LR)	繊維含む	II群2類a種
10	S-ア・II層	胴部	ループ文 (LR)	繊維含む スス状炭附着	II群2類a種
11	J-1・Va層	胴部	ループ文 (LR)	繊維含む スス状炭附着	II群2類a種
12	B-1・I層	胴部	ループ文 (LR)	繊維含む	II群2類a種
13	D-2・II層	胴部	ループ文 (RL)	スス状炭附着	II群2類a種
14	J-0・I層	胴部	ループ文 (LR)	スス状炭附着	II群2類a種
15	J-0・I層	胴部	ループ文 (LR)	繊維含む	II群2類a種
16	J-0・I層	胴部	ループ文 (LR)	スス状炭附着	II群2類a種
17	K-ア・I層	胴部	ループ文 (LR)	繊維含む	II群2類a種
18	A-3・II層	胴部	ループ文 (LR)	繊維含む	II群2類a種
19	B-ア・I層	口縁部	ループ文 (RL)		II群2類a種

第124図 遺構外出土土器(10)



第II群土器観察表(5)

番号	地区・層位	部位	外面施文文様	分類
1	K-1・II層	口縁部	縄文(LR) スス状炭附着	II群2類b種
2	B-1・I層	口縁部	縄文(LR) 繊維含む スス状炭附着	II群2類b種
3	C-U・II層	口縁部	縄文(RLR) 口唇部上面に縄文	II群2類b種
4	O-I・I層	口縁部	縄文(LRL) スス状炭附着	II群2類b種
5	J-I-U・I層	胴部	菱形状文様 縄文(LR・RL) 繊維含む スス状炭附着	II群2類b種
6	B-2・II層	胴部	ループ文(LR) 繊維含む スス状炭附着	II群2類a種
7	J-0・I層	胴部	菱形状文様 縄文(LR・RL) 繊維含む	II群2類b種
8	J-2・II層	口縁部	山形状文様 縄文(LR・RL) 繊維含む スス状炭附着	II群2類b種
9	C-2・II層	口縁部	結束のある羽状縄文 縄文(LR・RL) 繊維含む スス状炭附着	II群2類b種
10	J-I・I層	胴部	羽状縄文 縄文(LR・RL) スス状炭附着	II群2類b種
11	H-U・II層	口縁部	横位方向の綾絡文 スス状炭附着	II群2類c種
12	AM-8・II層	口縁部	横位方向の綾絡文 スス状炭附着	II群2類c種
13	N-15・II層	口縁部	単軸絡条体(L) 粘土帯(連続刺突) 縄文 綾絡文 繊維含む	II群3類
14	N-15・I層	口縁部	単軸絡条体(L) 粘土帯(連続刺突) 縄文 繊維含む	II群3類
15	N-15・I層	口縁部	単軸絡条体(L) 粘土帯(連続刺突) 捺糸圧痕 綾絡文 繊維含む	II群3類
16	C-I・II層	胴部	木目状捺糸文(R・L、L・R)	II群3類
17	N-15・I層	胴部	羽状縄文(LR・RL) 綾絡文 繊維含む スス状炭附着	II群3類
18	M-1・II層	胴部	縄文(LR) 綾絡文 スス状炭附着	II群3類

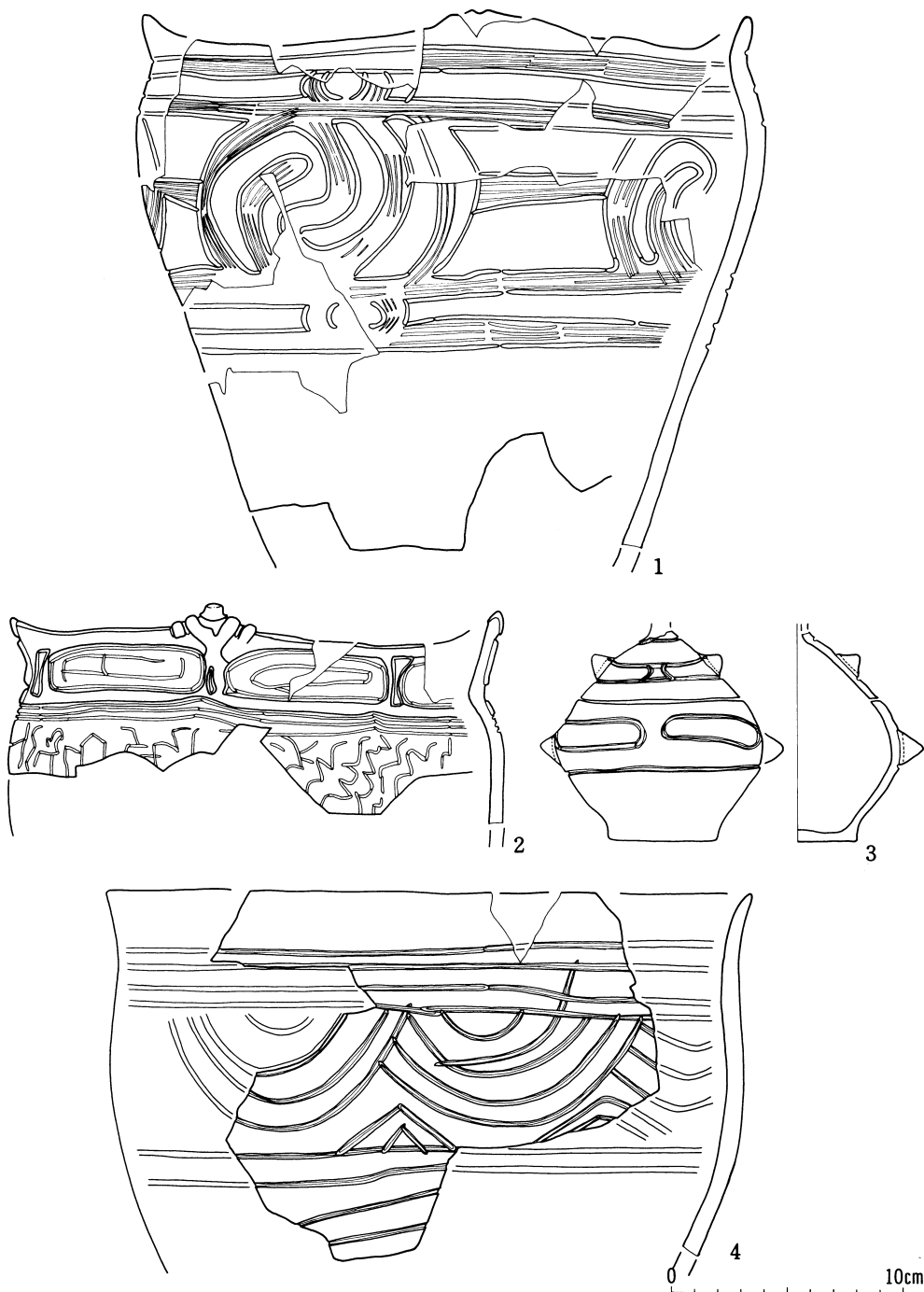
第125図 遺構外出土土器(1)



第Ⅲ群土器観察表

番号	地区・層位	部位	外面施文	文様	分類
1	E-ウ・II層	口縁部	RL縄文側面圧痕	短線状側面圧痕	Ⅲ群1類
2	C-ウ・II層	口縁部	LR縄文側面圧痕	短線状側面圧痕	Ⅲ群1類
3	M-1・Va層	頸~胴部	LR縄文側面圧痕	短線状側面圧痕	Ⅲ群1類
4	M-1・Va層	頸~胴部	LR縄文短線状側面圧痕	貼付隆帯	Ⅲ群1類
5	M-1・Va層	頸~胴部	LR縄文側面圧痕	短線状側面圧痕 貼付隆帯	Ⅲ群1類
6	風倒木	口縁~胴部	LR縄文側面圧痕	短線状側面圧痕 貼付隆帯 結節回転文	Ⅲ群2類
7	風倒木	口縁~胴部	LR縄文側面圧痕	短線状側面圧痕 貼付隆帯 結節回転文 斜行縄文	Ⅲ群2類
8	風倒木	口縁部	LR縄文側面圧痕	短線状側面圧痕 貼付隆帯	Ⅲ群2類
9	風倒木	頸部	LR縄文側面圧痕	短線状側面圧痕 貼付隆帯 結節回転文	Ⅲ群2類
10	N-0・II層	突起部	環状貼付隆帯	刻目 連続刺突文	Ⅲ群3類
11	N-0・II層	頸部	貼付隆帯	刻目 連続刺突文	Ⅲ群3類
12	表採	頸部	貼付隆帯	刻目 連続刺突文	Ⅲ群3類
13	A-3・II層	突起~口縁部	ボタン状円形貼付け	盲孔 貼付隆帯 RL斜行縄文	Ⅲ群4類
14	A-3・II層	頸部	貼付隆帯	RL斜行縄文	Ⅲ群4類
15	M-イ・I層	口縁部	貼付隆帯	RL斜行縄文	Ⅲ群4類
16	A-3・II層	頸~胴部	(地文) RL斜行縄文	貼付隆帯 刻目	Ⅲ群4類

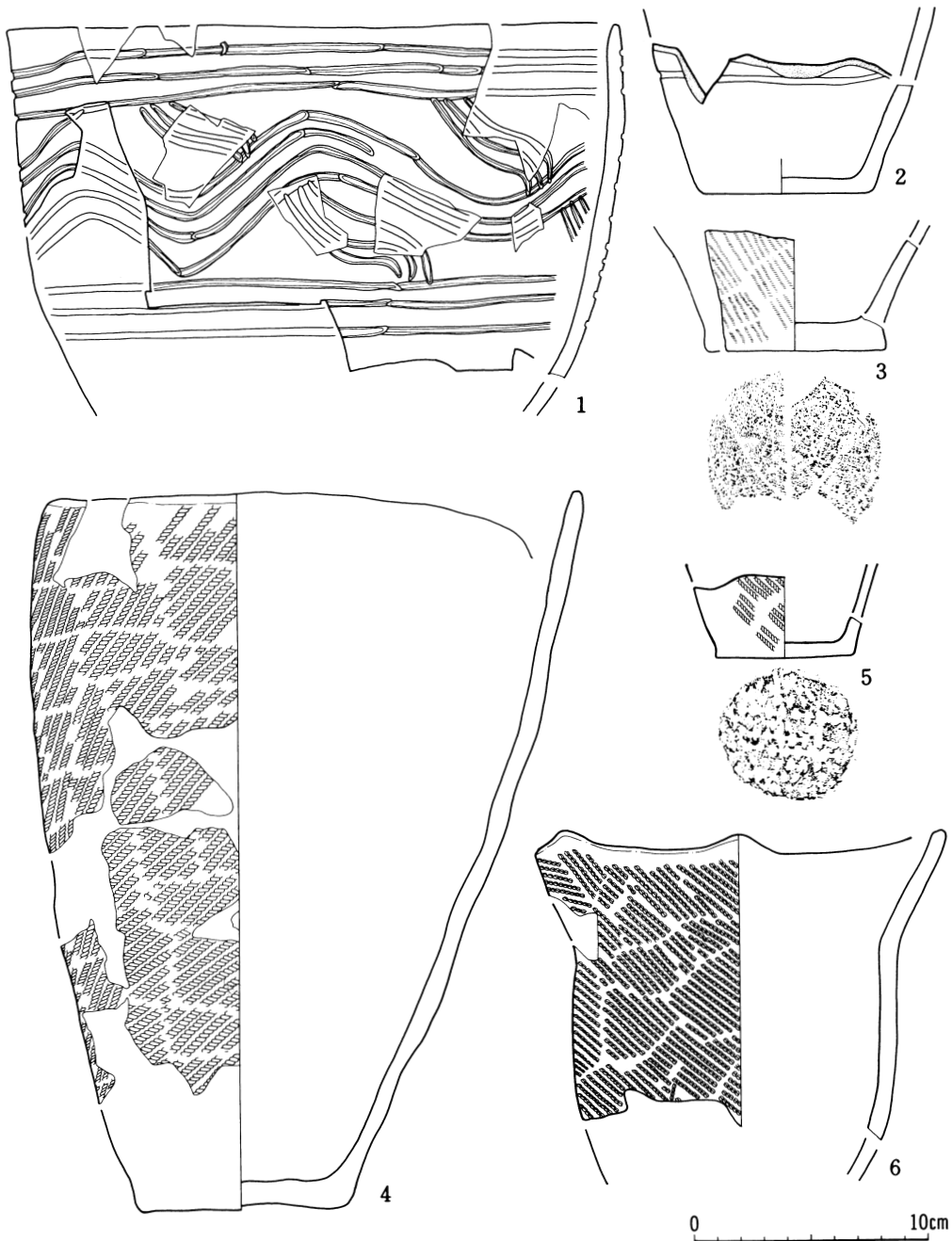
第126図 遺構外出土器(12)



第IV群土器観察表(1)

番号	地区・層位	部位	外面施文文様	分類
1	AC-6・II層	深鉢形	波状口縁 入組状文様 櫛歯状沈線 スス状炭附着	IV群3類
2	AO-9・II層	深鉢形	波状口縁 Y字状粘土紐 蛇行状文様(沈線) スス状炭附着	IV群3類
3	B-3・II層	壺形	切斷蓋付土器 楕円形文様(沈線) 4個の突起 赤色顔料塗布	IV群1類b種
4	AD-7・II層	深鉢形	弧状文様(沈線) スス状炭附着	IV群3類

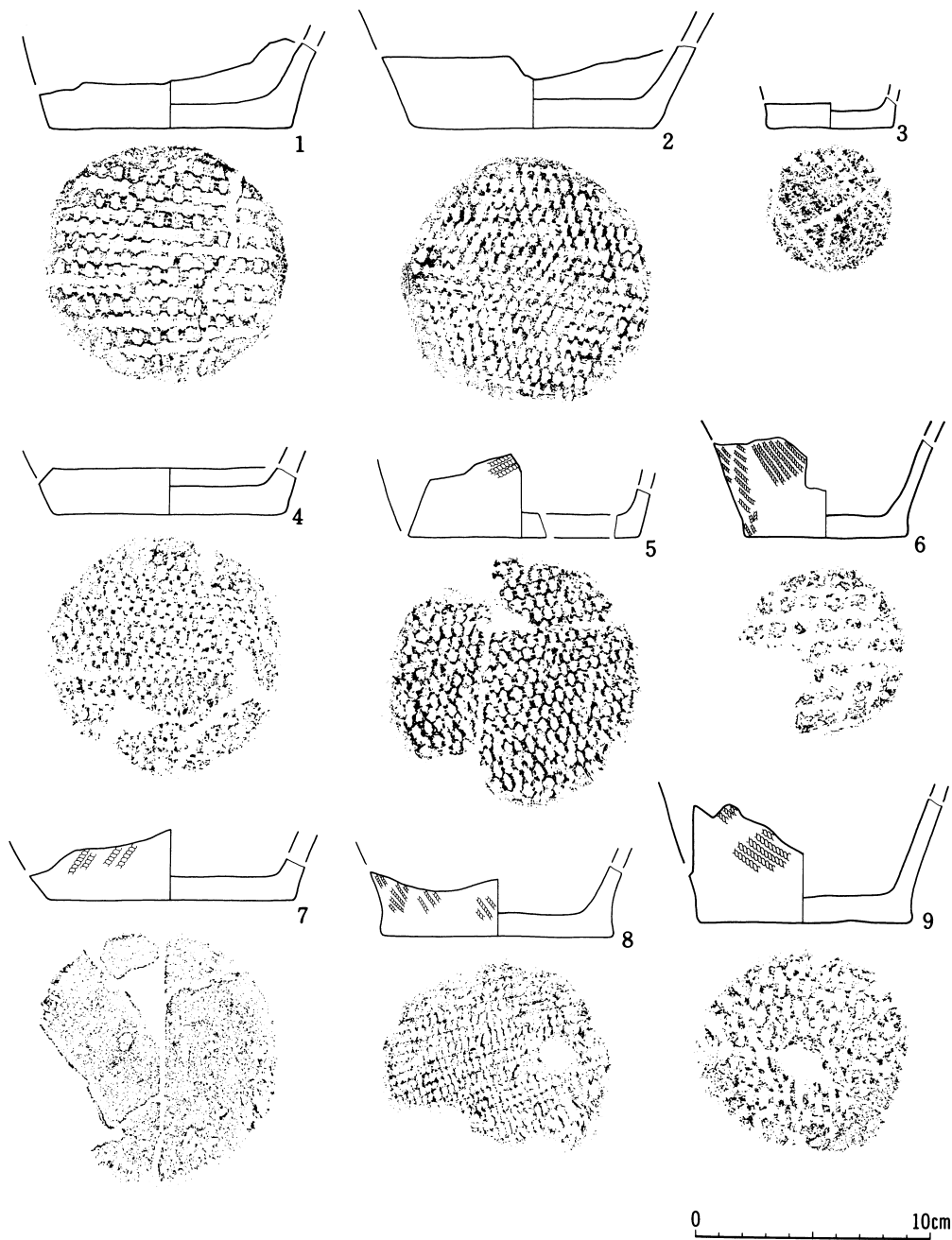
第127図 遺構外出土土器(13)



第IV群土器観察表(2)

番号	地区・層位	部位	外面施文文様	分類
1	AB-7・I層	深鉢形	入組状文様(沈線) スス状炭附着	IV群3類
2	AG-10・II層	深鉢形	横位(沈線) スス状炭附着	IV群4類
3	R-ウ・II層	深鉢形	縄文(L) 底面に木葉痕 スス状炭附着	IV群4類
4	CM-28・II層	深鉢形	縄文(LR) スス状炭附着	IV群4類
5	A-1・I層	深鉢形	縄文(RL) 網代痕 スス状炭附着	IV群4類
6	O-ウ I層	深鉢形	波状口縁(波状6個) 縄文(RLR) スス状炭附着	IV群4類

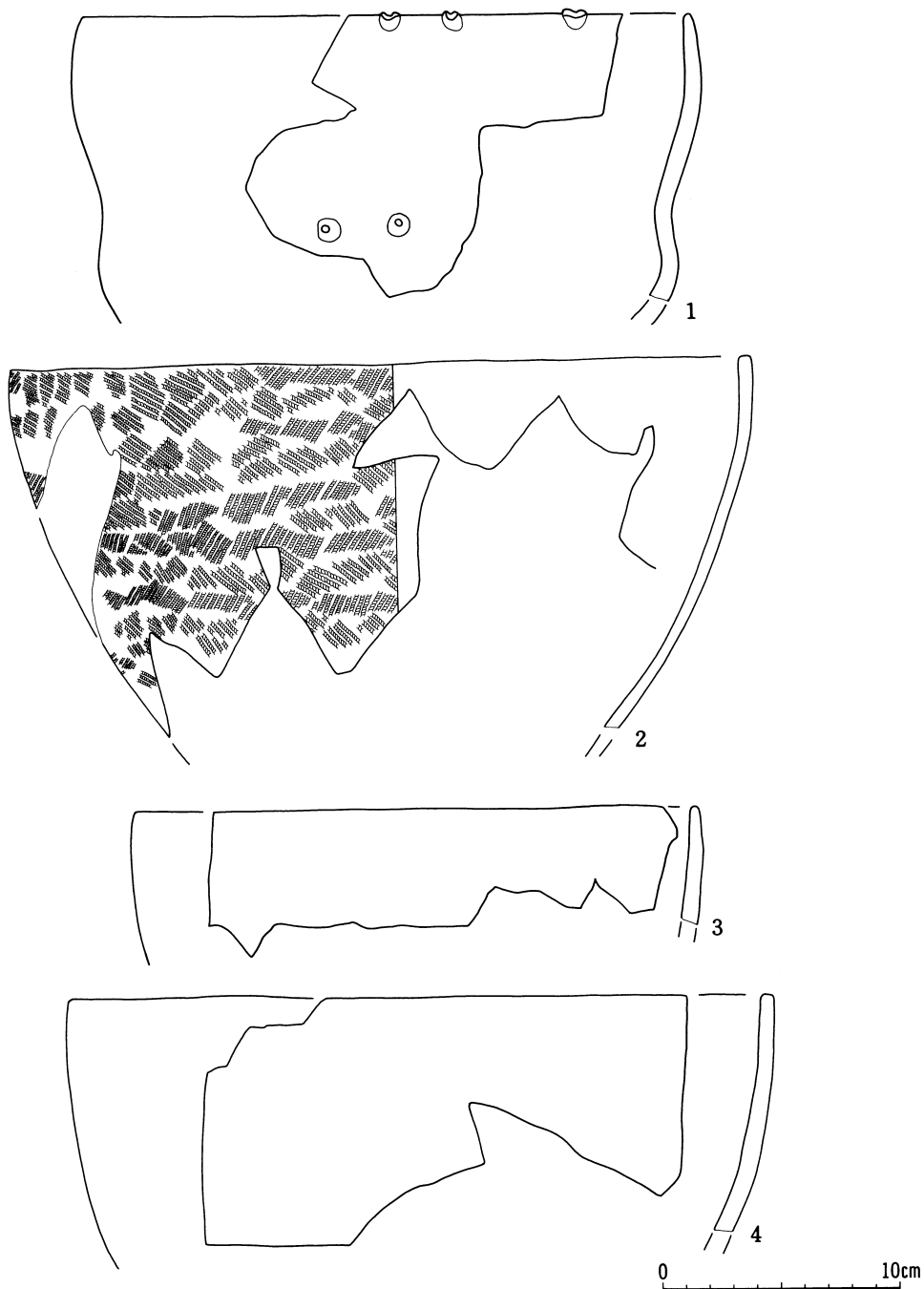
第128図 遺構外出土土器(14)



第IV群土器観察表(3)

番号	地区・層位	部位	外面施文文様	分類
1	AS-8・II層	底部	網代痕 スス状炭附着	IV群4類
2	CJ-24・I層	底部	網代痕 スス状炭附着	IV群4類
3	J-1・I層	底部	擦痕 スス状炭附着	IV群4類
4	C-イ・II層	底部	網代痕	IV群4類
5	B-4・II層	底部	網代痕 縄文(LR)	IV群4類
6	B-1・II層	底部	網代痕 縄文(RL) スス状炭附着	IV群4類
7	G-ウ・II層	底部	木葉痕 スス状炭附着	IV群4類
8	P-イ・II層	底部	網代痕 縄文(RL)	IV群4類
9	F-ウ・Va層	底部	網代痕 縄文(RL) スス状炭附着	IV群4類

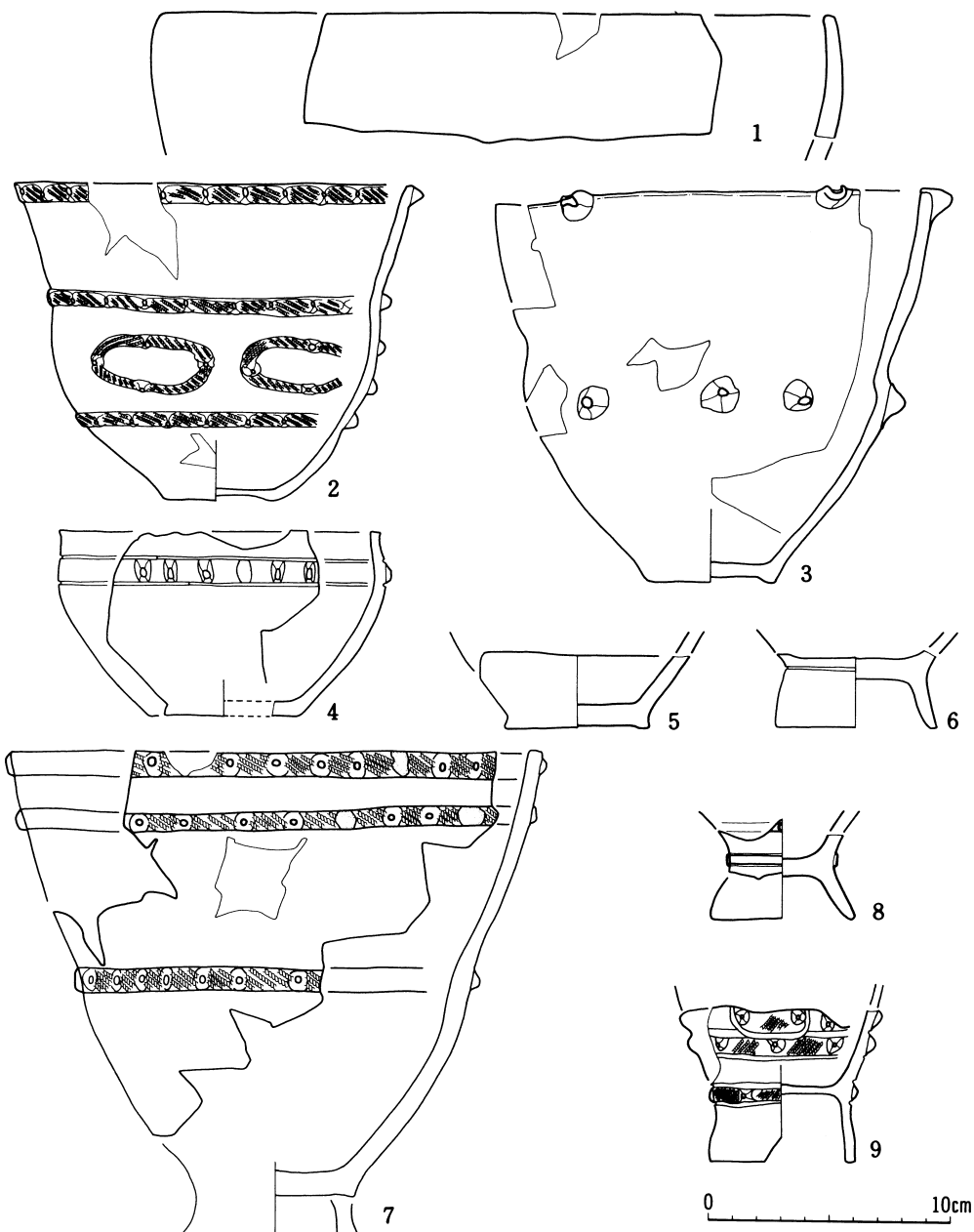
第129図 遺構外出土土器(15)



第IV群土器観察表(4)

番号	地区・層位	部位	外面施文文様	分類
1	AF-9・II層	深鉢形	瘤の貼り付け スス状炭附着	IV群5類
2	AD-18・II層	深鉢形	羽状縄文(LR・RL) スス状炭附着	IV群5類
3	AB-7・II層	深鉢形	器内外面横位調整 スス状炭附着	IV群5類
4	AA-7・II層	深鉢形	器内外面横位調整 スス状炭附着	IV群5類

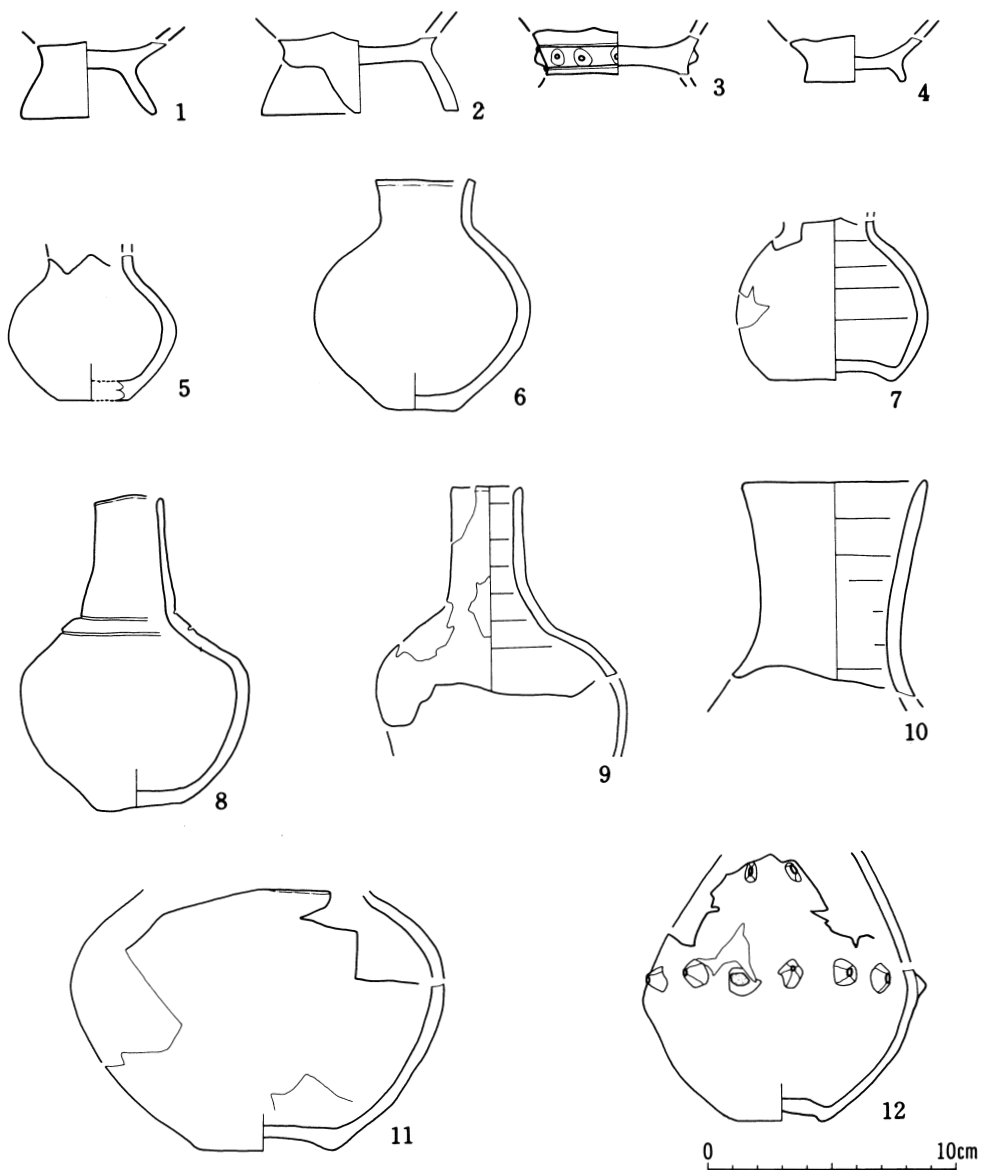
第130図 遺構外出土土器(16)



第Ⅳ群土器観察表(5)

番号	地区・層位	部位	外面施文文様	分類
1	AD-16・Ⅰ層	深鉢形	器内外面横位調整 スス状炭附着	Ⅳ群5類
2	AD-18・Ⅱ層	鉢形	縄文(RL) 带状文様帯 楕円形文様 瘤の貼り付け	Ⅳ群5類
3	AF-9・Ⅱ層	鉢形	口唇部寄りと胴部張り出し部に瘤の貼り付け スス状炭附着	Ⅳ群5類
4	G-Ⅰ・Ⅱ層	鉢形	横位(沈線) 区画帯内部に瘤の貼り付け スス状炭附着	Ⅳ群5類
5	AB-6・Ⅱ層	鉢形	器内外面横位調整	Ⅳ群5類
6	AG-9・Ⅱ層	台付鉢形	横位(沈線)	Ⅳ群5類
7	R-ア・Ⅱ層	台付鉢形	带状文様 縄文(RL) 文様帯に瘤の貼り付け スス状炭附着	Ⅳ群5類
8	C-2・Ⅱ層	台付鉢形	横位(粘土帯) 瘤の貼り付け	Ⅳ群5類
9	AF-9・Ⅱ層	台付鉢形	縄文(LR) 文様区画帯に瘤の貼り付け	Ⅳ群5類

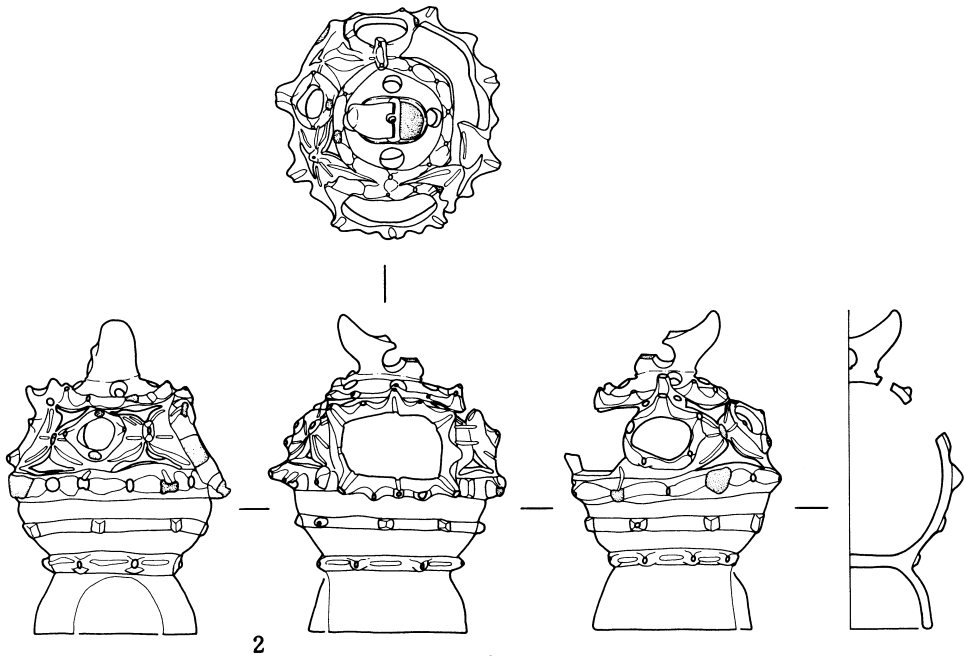
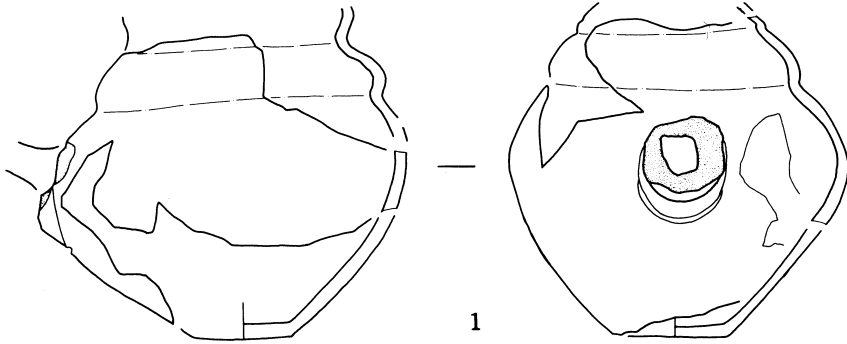
第131図 遺構外出土土器(17)



第IV群土器観察表(6)

番号	地区・層位	部位	外面施文文様	分類
1	AC-16・I層	台付鉢	スス状炭附着	IV群5類
2	AB-7・II層	台付鉢	器内外面横位調整 スス状炭附着	IV群5類
3	C-1・I層	台付鉢	瘤の貼り付け	IV群5類
4	AG-10・II層	台付鉢	器外面横位調整	IV群5類
5	G-13・I層	壺	あげ底	IV群5類
6	AD-18・II層	壺	器外面にミガキ	IV群5類
7	AB-7・II層	壺	あげ底 器内外面横位調整 器内面に輪積み痕	IV群5類
8	AD-18・II層	壺	あげ底 頸部に一条の粘土帯	IV群5類
9	AD-18・II層	壺	無文 器内面に輪積み痕	IV群5類
10	AC-13・I層	壺	器内面に輪積み痕	IV群5類
11	AG-15・I層	壺	あげ底	IV群5類
12	AD-18・II層	壺	胴部と頸部に瘤の貼り付け あげ底	IV群5類

第132図 遺構外出土器(10)



0 10cm

第IV群土器観察表(7)

番号	地区・層位	部位	外面	施文	文様	分類
1	F-12・I層	注口	無文	頸部がふくらむ		IV群5類
2	AD-18・II層	香炉	頂端部に二又状突起	瘤の貼り付け	窓5個	焼成良好 IV群5類

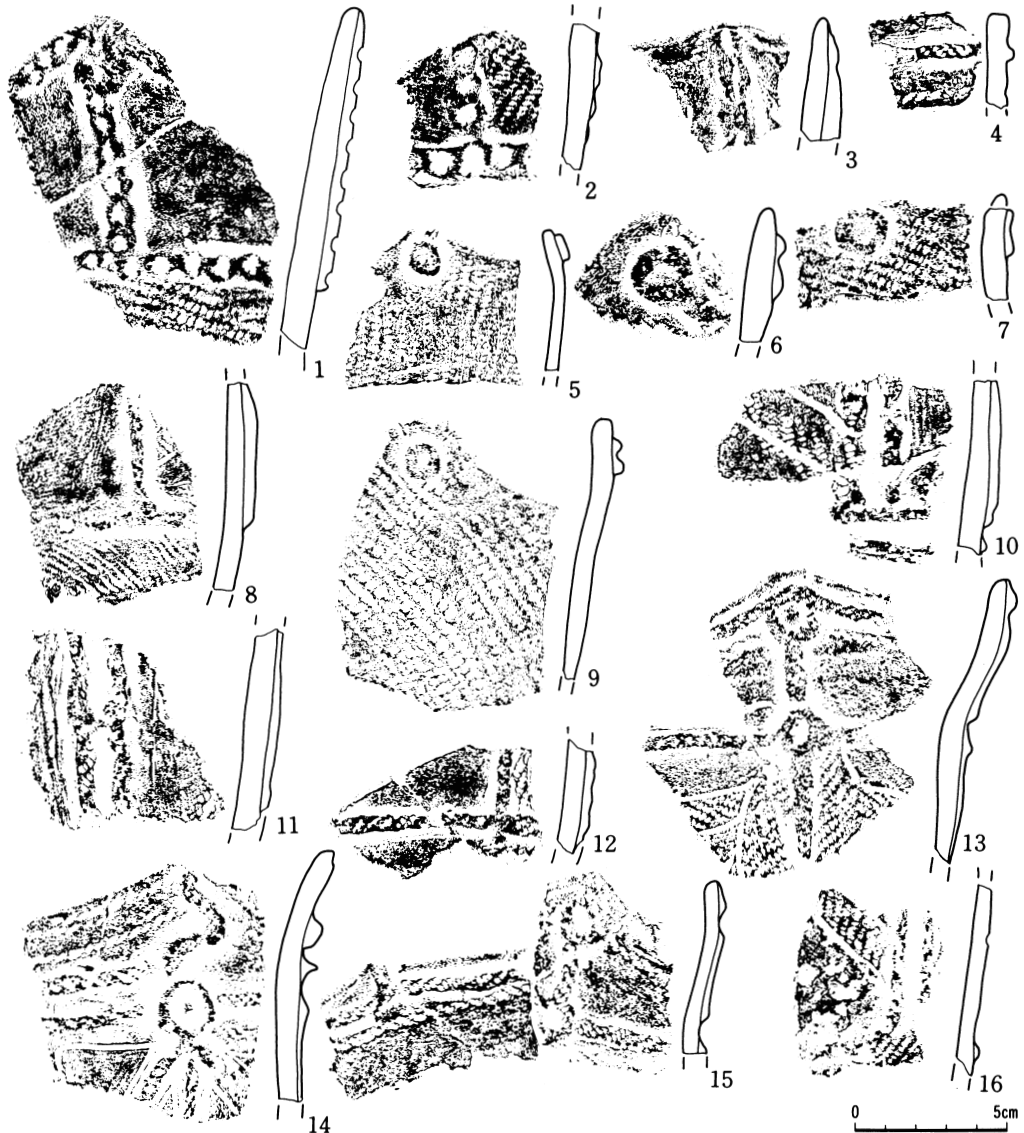
第133図 遺構外出土土器(19)



第IV群土器観察表(8)

番号	地区・層位	部位	外面施文文様	分類
1	A-1・I層	口縁部	縄文(RL) 横位・縦位曲線(沈線)	IV群1類a種
2	N-0・II層	口縁部	縄文(RL) 縦位沈線 スス状炭附着	IV群1類a種
3	K-1・II層	口縁部	縄文(RL) 縦位沈線	IV群1類a種
4	B-1・I層	口縁部	縄文(LR) 斜位沈線 スス状炭附着	IV群1類a種
5	L-10・I層	口頸部	縄文(LR) 縦位沈線 スス状炭附着	IV群1類a種
6	A-5・II層	口縁部	縄文(LR) 横位沈線 スス状炭附着	IV群1類a種
7	T-ウ・II層	口縁部	波状口縁 縄文(RL) 鍵状沈線 横・縦位粘土紐 スス状炭附着	IV群1類b種
8	H-ウ・II層	胴部	鱗状粘土紐 縄文(LR) 横位磨消縄文 スス状炭附着	IV群1類b種
9	J-2・I層	口縁部	波状口縁 スス状炭附着	IV群1類b種
10	F-ウ・II層	胴部	粘土粒 縄文(RL) 縦位曲線沈線 スス状炭附着	IV群1類b種
11	G-ウ・II層	口縁部	横位粘土紐 縄文(RL) スス状炭附着	IV群1類b種
12	F-ウ・I層	口縁部	波状口縁 鱗状粘土紐 スス状炭附着	IV群1類b種
13	J-ア・II層	口縁部	波状口縁 鱗状・ボタン状粘土紐 スス状炭附着	IV群1類b種
14	J-0・II層	口縁部	波状口縁 横位粘土紐 擦糸圧痕 スス状炭附着	IV群1類b種
15	R-イ・II層	口頸部	横・縦位粘土紐 連続刺突 スス状炭附着	IV群1類b種

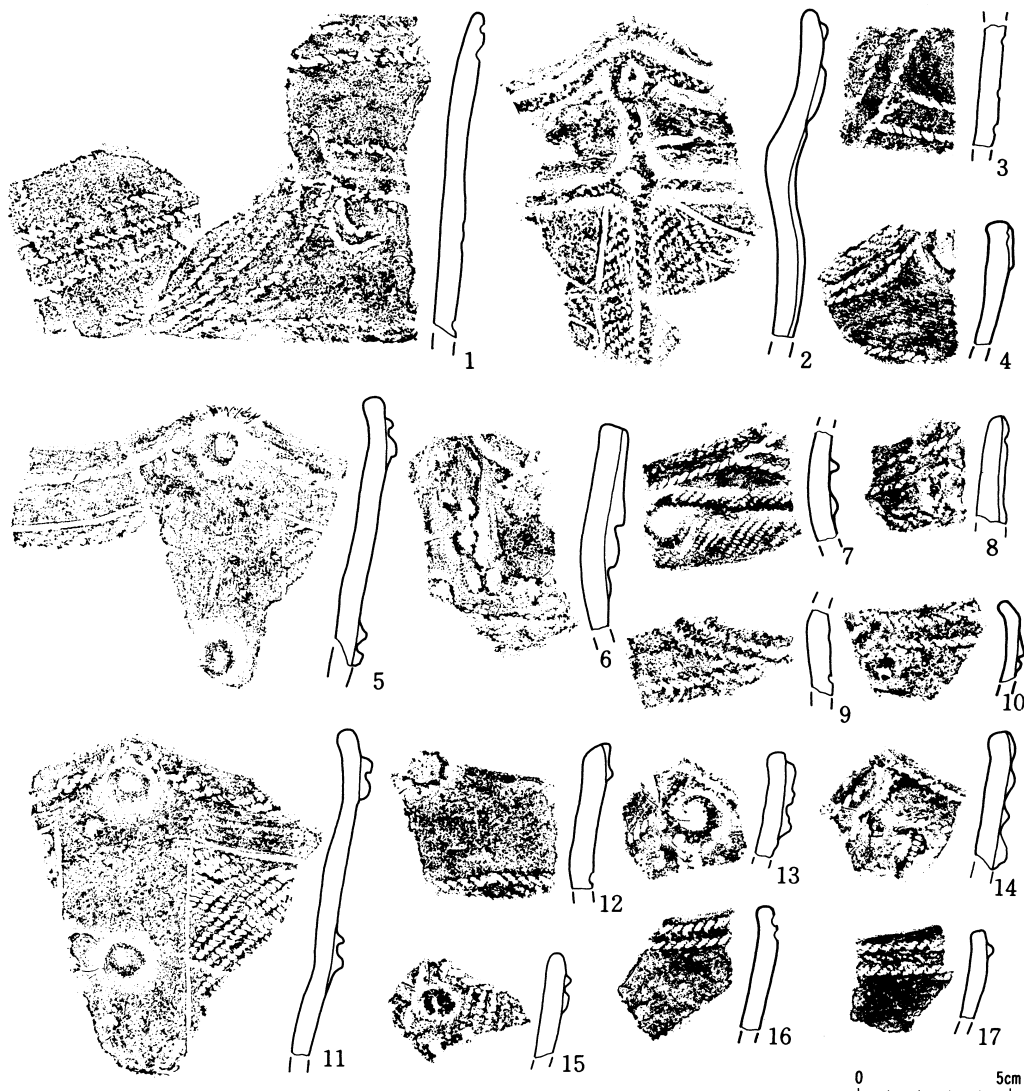
第134図 遺構外出土土器(20)



第IV群土器観察表(9)

番号	地区・層位	部位	外面施文文様	分類
1	S-ア・イ・II層	口縁部	波状口縁 横・縦位粘土紐 連続刺突 縄文(RL) スス状炭附着	IV群1類b種
2	C-イ・I層	口頸部	横・縦位粘土紐 連続刺突痕 縄文(LRL) スス状炭附着	IV群1類b種
3	H-ウ・II層	口縁部	波状口縁 縦位粘土紐 捺糸圧痕 スス状炭附着	IV群1類c種
4	A-14・II層	口縁部	横位粘土紐 縄文(RL) 捺糸圧痕 スス状炭附着	IV群1類b種
5	F-ウ・I層	口縁部	波状口縁 縄文(RL) ボタン状突起 スス状炭附着	IV群1類b種
6	J-2・I層	口縁部	波状口縁 ボタン状突起 縦位沈線	IV群1類b種
7	G-16・II層	口縁部	ボタン状突起 縄文(RL)	IV群1類b種
8	F-11・I層	胴部	横・縦位粘土紐区画 縄文(RL)	IV群1類b種
9	L-イ・I層	口縁部	波状口縁 縄文(RL) ボタン状突起 スス状炭附着	IV群1類b種
10	I-2・I層	胴部	横・縦位粘土紐区画 縄文(RL) 縄文→沈線	IV群1類b種
11	J-2・I層	胴部	横・縦位粘土紐 縄文(LR)	IV群1類b種
12	B-ア・I層	胴部	横・縦位粘土紐区画 縄文(LR)	IV群1類b種
13	B-ア・I層	口縁部	波状口縁 横・縦位粘土紐区画 磨消縄文 縄文(LR) 捺糸圧痕	IV群1類c種
14	C-1・I層	口縁部	波状口縁 蛇行・円形粘土紐 捺糸圧痕 縄文(RL) スス状炭附着	IV群1類c種
15	B-ア・I層	口縁部	波状口縁 円形・縦位粘土紐 捺糸圧痕 縄文(RL)	IV群1類c種
16	D-ア・I層	胴部	縄文(LR) 横・縦位粘土紐区画帯 磨消縄文	IV群1類c種

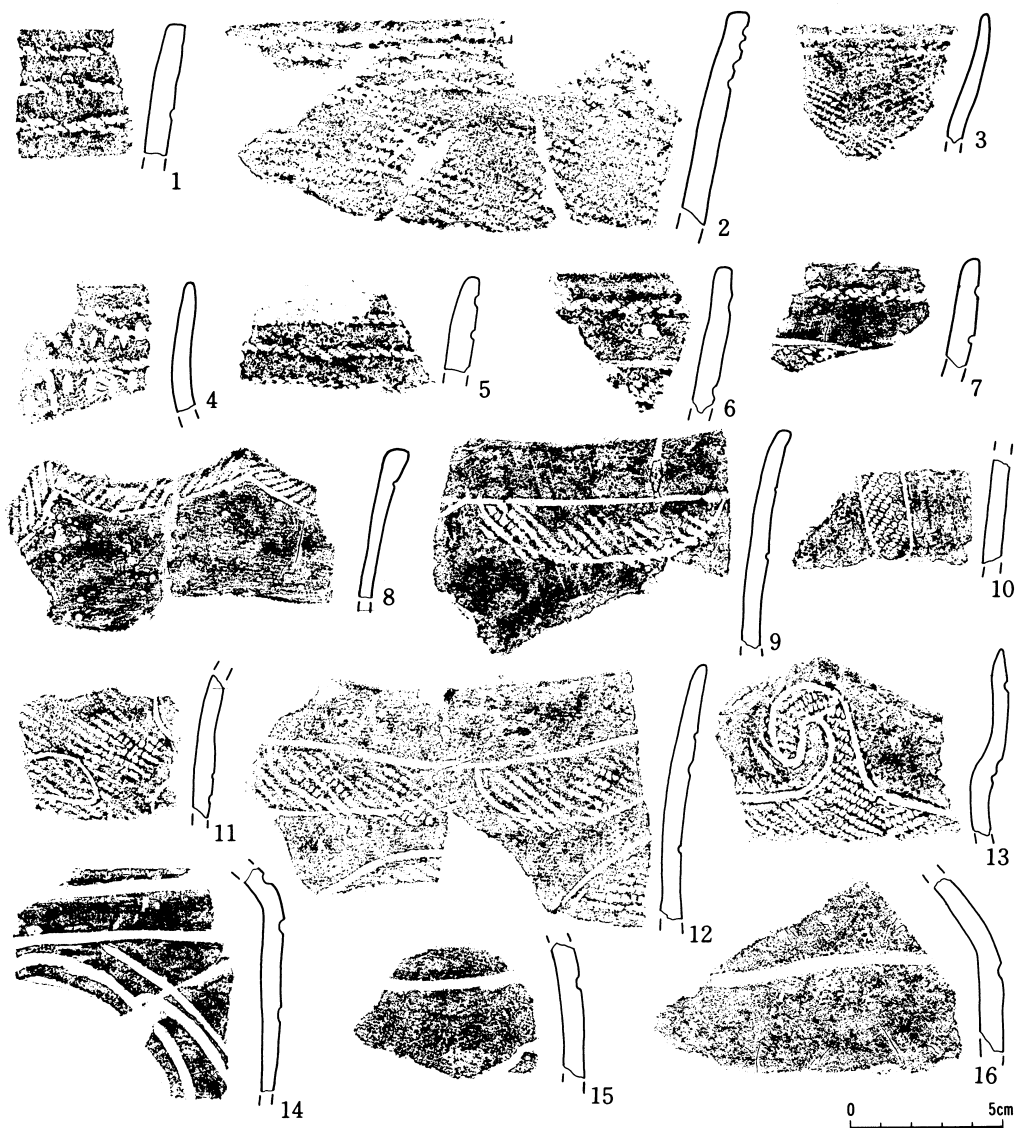
第135図 遺構外出土器(2)



第IV群土器観察表(10)

番号	地区・層位	部位	外面施文文様	分類
1	B-ウ・I層	口縁部	横位・曲線状(捺糸圧痕) スス状炭附着	IV群1類c種
2	B-ア・I層	口縁部	波状口縁 横・縦位粘土紐区画 縄文(LR) 捺糸圧痕	IV群1類c種
3	D-ア・I層	口頸部	横・斜位(捺糸圧痕) スス状炭附着	IV群1類c種
4	B-2・II層	口縁部	横・斜位(捺糸圧痕) 粘土紐 スス状炭附着	IV群1類c種
5	O-ウ・I層	口縁部	波状口縁 充填技法 ボタン状突起	IV群1類c種
6	M-1・Va層	口縁部	波状口縁 横・縦位粘土紐区画 連続刺突 スス状炭附着	IV群1類c種
7	A-5・II層	口頸部	捺糸圧痕 縄文(LR) 横位S字状粘土紐 スス状炭附着	IV群1類c種
8	C-1・I層	口縁部	波状口縁 捺糸圧痕 横・縦位粘土紐区画 スス状炭附着	IV群1類c種
9	E-イ・I層	口頸部	横・斜位捺糸圧痕	IV群1類c種
10	O-イ・I層	口縁部	波状口縁 捺糸圧痕 ボタン状突起 刺突 スス状炭附着	IV群1類c種
11	O-ウ・I層	口縁部	波状口縁 ボタン状突起 刺突 縄文(LR) 捺糸圧痕 スス状炭附着	IV群1類c種
12	B-ア・I層	口縁部	波状口縁 捺糸圧痕 頂端部にボタン状突起 スス状炭附着	IV群1類c種
13	B-2・II層	口縁部	波状口縁 捺糸圧痕 頂端部にL字状粘土紐 スス状炭附着	IV群1類c種
14	E-3・I層	口縁部	波状口縁 縦位蛇行状粘土紐 縄文 捺糸圧痕	IV群1類c種
15	F-12・II層	口縁部	波状口縁 ボタン状突起 刺突 縄文(LR) 捺糸圧痕 スス状炭附着	IV群1類c種
16	A-5・II層	口縁部	横・斜位(捺糸圧痕) スス状炭附着	IV群1類c種
17	I-2・I層	口縁部	横位(粘土紐・捺糸圧痕)	IV群1類c種

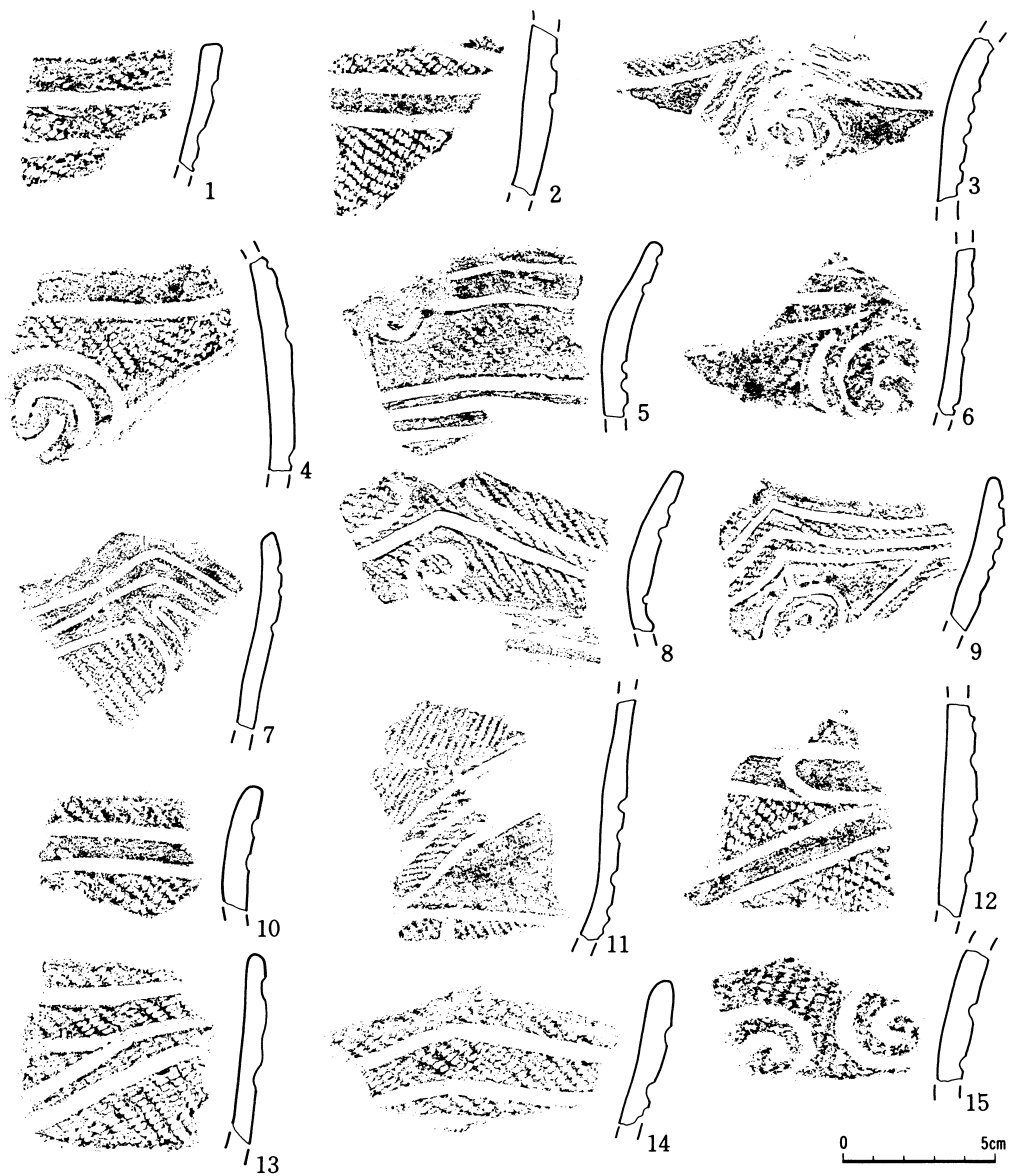
第136図 遺構外出土土器(22)



第IV群土器観察表(11)

番号	地区・層位	部位	外面施文文様	分類
1	K-0・I層	口縁部	横位(捺糸圧痕)	IV群1類c種
2	F-U・I層	口縁部	縄文(RL) 横位(捺糸圧痕) スス状炭附着	IV群1類c種
3	CM-29・I層	口縁部	横位(捺糸圧痕) 縄文(RL) スス状炭附着	IV群1類c種
4	J-2・II層	口縁部	横・縦位(捺糸圧痕) スス状炭附着	IV群1類c種
5	J-1・I層	口縁部	横位(捺糸圧痕) スス状炭附着	IV群1類c種
6	O-U・I層	口縁部	横位(捺糸圧痕) 縄文(LR) スス状炭附着	IV群1類c種
7	I-2・I層	口縁部	横位(捺糸圧痕) 縄文	IV群1類c種
8	G-I・II層	口縁部	波状口縁 帯縄文 縄文(LR) スス状炭附着	IV群1類d種
9	B-1・I層	口縁部	横・曲線状沈線 縄文→沈線 スス状炭附着	IV群1類d種
10	AA-14・II層	胴部	縦位楕円形文様 縄文(LR) スス状炭附着	IV群1類d種
11	B-A・I層	口頸部	縄文(RL) 楕円形沈線 縄文→沈線→磨消 スス状炭附着	IV群1類d種
12	C-1・I層	口縁部	横位楕円形文様 縄文(RL) スス状炭附着	IV群1類d種
13	N-9・I層	口縁部	波状口縁 縄文(LR) 縦位S字状文様 スス状炭附着	IV群1類d種
14	B-A・I層	口頸部	横位・弧状沈線	IV群1類e種
15	B-3・I層	胴部	横・斜位沈線 赤色顔料塗布	IV群1類e種
16	B-3・I層	胴部	横位沈線 赤色顔料塗布	IV群1類e種

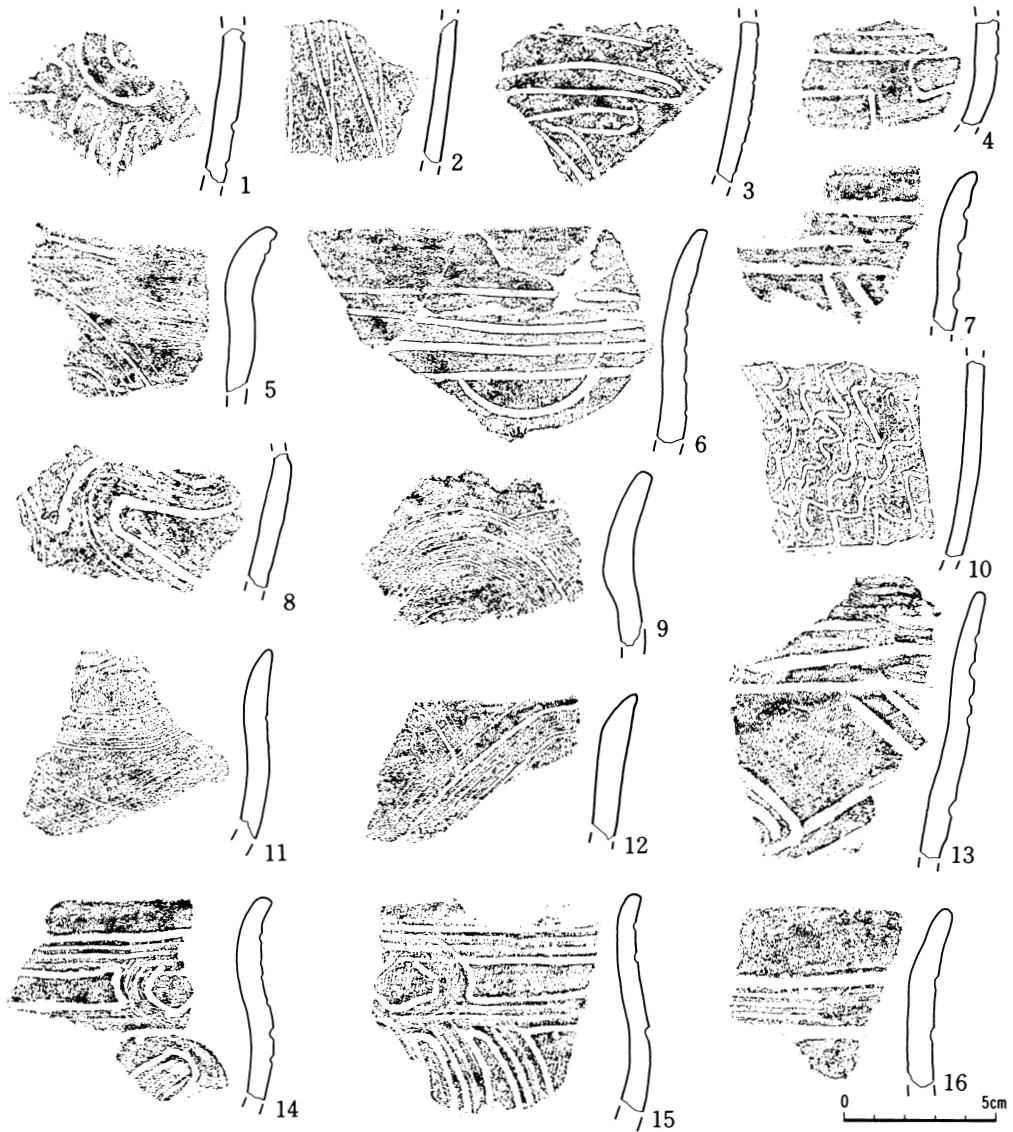
第137図 遺構外出土土器(23)



第IV群土器観察表(12)

番号	地区・層位	部位	外面施文文様	分類
1	F-ウ・I層	口縁部	縄文(RL) 横位沈線	IV群2類
2	H-1・Va層	胴部	縄文(RL) 横位沈線 磨消縄文	IV群2類
3	CN-29・I層	口頸部	縦位S字状文様 縄文(RL)	IV群2類
4	F-1・II層	胴部	縦位S字状文様 縄文(RL) スス状炭附着	IV群2類
5	CN-29・I層	口縁部	横位・弧状沈線 縄文(RL) スス状炭附着	IV群2類
6	B-3・I層	胴部	縦位S字状文様 縄文 スス状炭附着	IV群2類
7	G-1・Va層	口縁部	波状口縁 横位・弧状沈線 縄文(RL) スス状炭附着	IV群2類
8	AQ-8・Va層	口縁部	波状口縁 縦位S字状文様 縄文(RL) スス状炭附着	IV群2類
9	CN-29・I層	口縁部	波状口縁 縄文(RL) 横・斜位沈線 スス状炭附着	IV群2類
10	C-イ・II層	口縁部	縄文(RL) 横位沈線 磨消縄文	IV群2類
11	CN-29・I層	胴部	縄文(LR) 横・斜位沈線 磨消縄文 スス状炭附着	IV群2類
12	F-1・Va層	口頸部	縄文(RL) 横・弧状・斜位沈線 磨消縄文 スス状炭附着	IV群2類
13	F-ウ・I層	口縁部	縄文(RL) 横・斜位沈線 縄文→沈線 スス状炭附着	IV群2類
14	F-ウ・I層	口縁部	波状口縁 横位沈線 縄文(RL) 縄文→沈線	IV群2類
15	B-ア・I層	口頸部	渦卷文様 縄文(LR) 縄文→沈線	IV群2類

第138図 遺構外出土土器(24)



第IV群土器観察表(13)

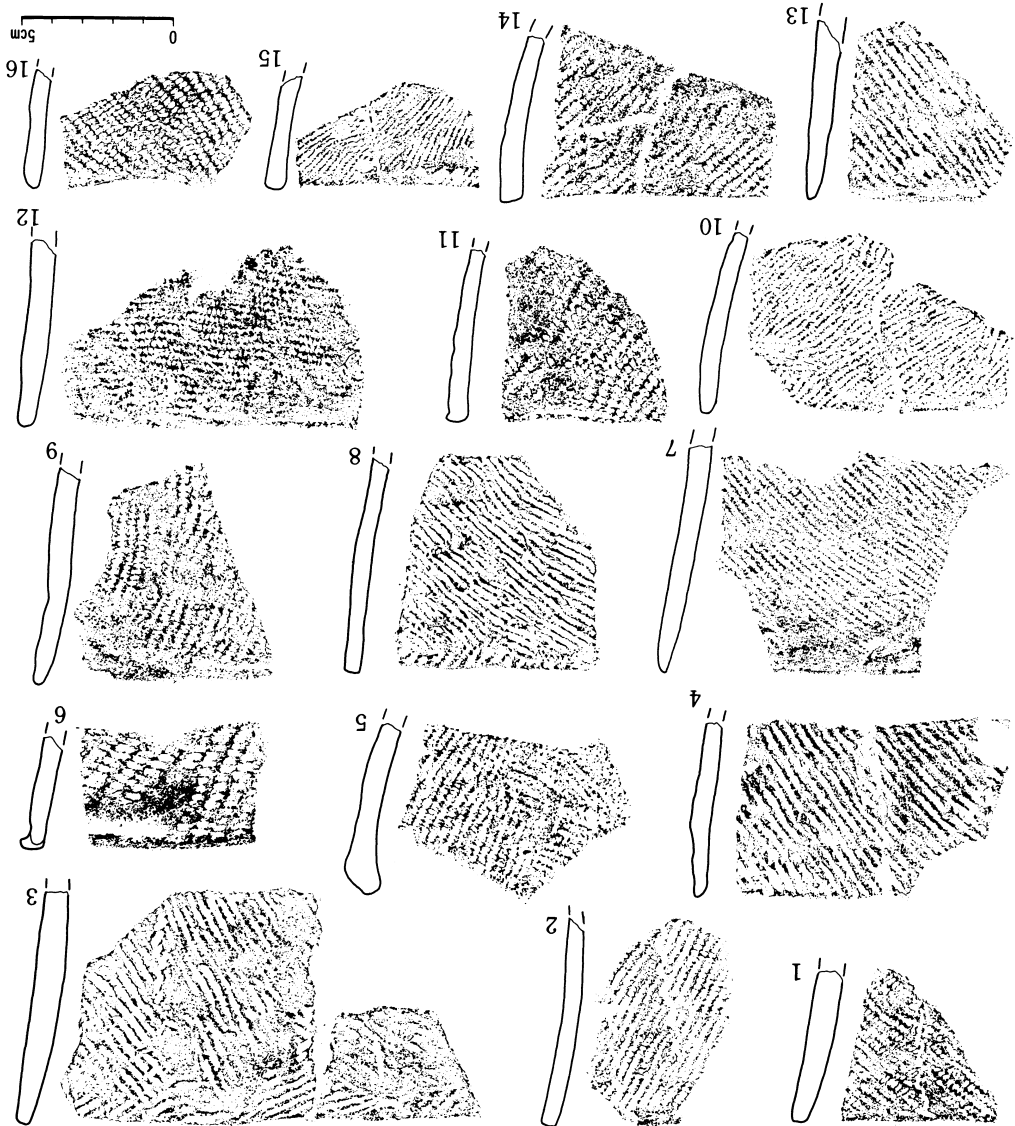
番号	地区・層位	部位	外面施文文様	分類
1	H-11・I層	胴部	縦位・横位楕円形文様(沈線) スス状炭附着	IV群3類
2	AQ-10・I層	胴部	交差状(沈線) スス状炭附着	IV群3類
3	AR-11・I層	胴部	横位楕円形文様(沈線)	IV群3類
4	AG-10・II層	胴部	鍵状(沈線) スス状炭附着	IV群3類
5	A-20・II層	口縁部	波状口縁 横位・斜位(楕歯状沈線) スス状炭附着	IV群3類
6	F-9・II層	口縁部	横位・弧状(沈線) スス状炭附着	IV群3類
7	A-7・II層	口縁部	横位・斜位(沈線)	IV群3類
8	F-ア・Va層	口頸部	入組状文様(楕歯状沈線) スス状炭附着	IV群3類
9	P-20・II層	口縁部	波状口縁 弧状(楕歯状沈線) 頂端部に刻み	IV群3類
10	AO-9・II層	胴部	縦位蛇行状文様(沈線) スス状炭附着	IV群3類
11	A-20・II層	口縁部	横・斜位状文様(楕歯状沈線) スス状炭附着	IV群3類
12	B-20・I層	口縁部	斜位(楕歯状沈線)	IV群3類
13	AC-6・II層	口縁部	横・斜位(沈線) スス状炭附着	IV群3類
14	AC-6・II層	口縁部	円形・横位文様(楕歯状沈線) スス状炭附着	IV群3類
15	AC-6・II層	口縁部	円形・横位・縦位弧状文様(楕歯状沈線) スス状炭附着	IV群3類
16	F-ア・Va層	口縁部	横位(沈線・楕歯状沈線)	IV群3類

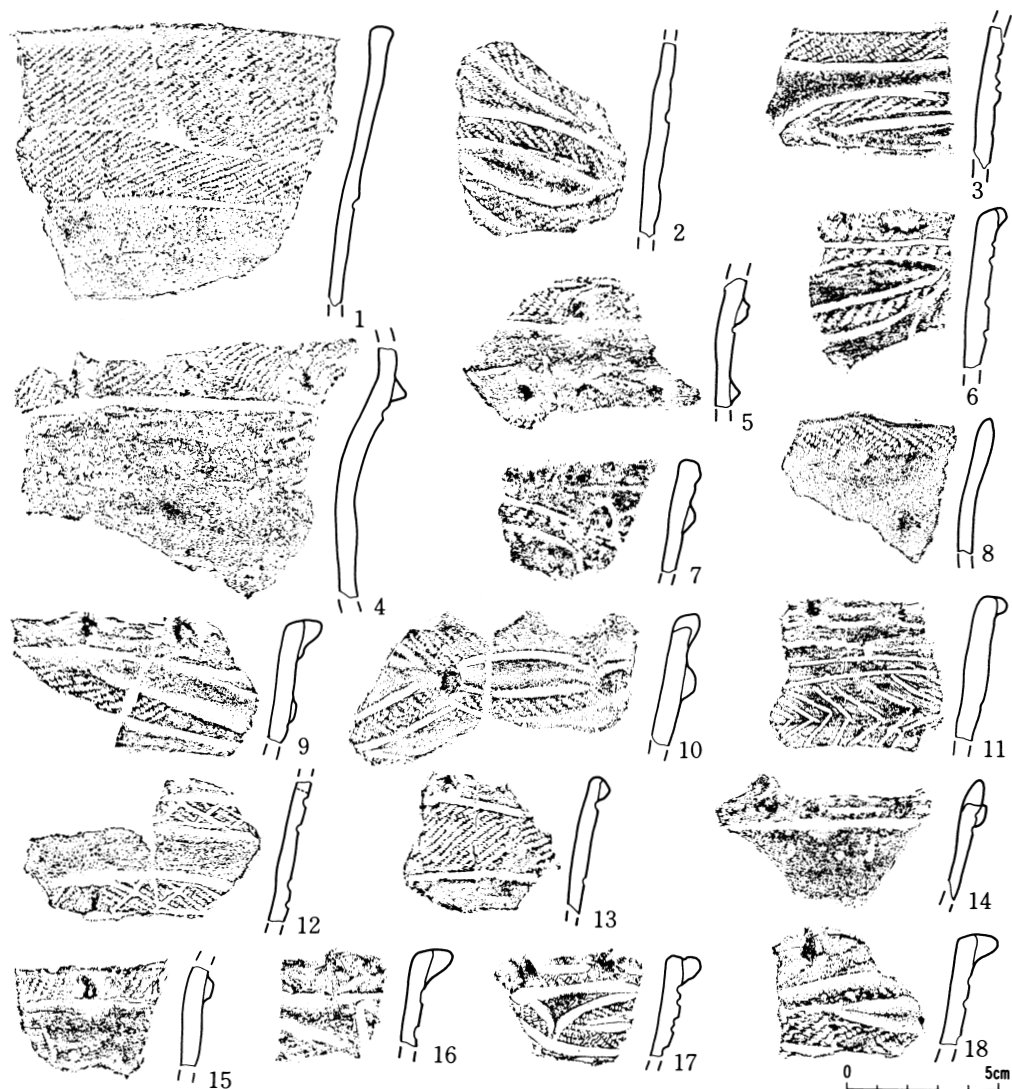
第139図 遺構外出土土器(25)

第140図 遺構外出土土器(26)

番号	地区・層位	部位	外面施文様	分類
1	V-7・Va層	口縁部	縦文(RL) 縦位綾絡文 又又状炭付着	IV群4類
2	H-3・II層	口縁部	縦文(LR) 縦位綾絡文	IV群4類
3	AE-6・II層	口縁部	縦文(L) 縦位綾絡文	IV群4類
4	R-7・II層	口縁部	縦文(L) 又又状炭付着	IV群4類
5	R-7・II層	口縁部	波状口縁 縦文(LR・RL)	IV群4類
6	B-3・I層	口縁部	縦文(0段多糸) 又又状炭付着	IV群4類
7	V-7・Va層	口縁部	縦文(RL) 又又状炭付着	IV群4類
8	A-3・II層	口縁部	縦文(L) 又又状炭付着	IV群4類
9	W-7・II層	口縁部	縦文(LR) 又又状炭付着	IV群4類
10	A-14・I層	口縁部	縦文(LR) 又又状炭付着	IV群4類
11	D-14・I層	口縁部	縦文(LR) 又又状炭付着	IV群4類
12	C-1・I層	口縁部	縦文(LR) 又又状炭付着	IV群4類
13	B-3・I層	口縁部	縦文(LR) 又又状炭付着	IV群4類
14	C-11・I層	口縁部	縦文(LR) 又又状炭付着	IV群4類
15	AF-8・II層	口縁部	縦文(LR)	IV群4類
16	B-7・I層	口縁部	縦文(RL) 又又状炭付着	IV群4類

第IV群土器観察表(14)

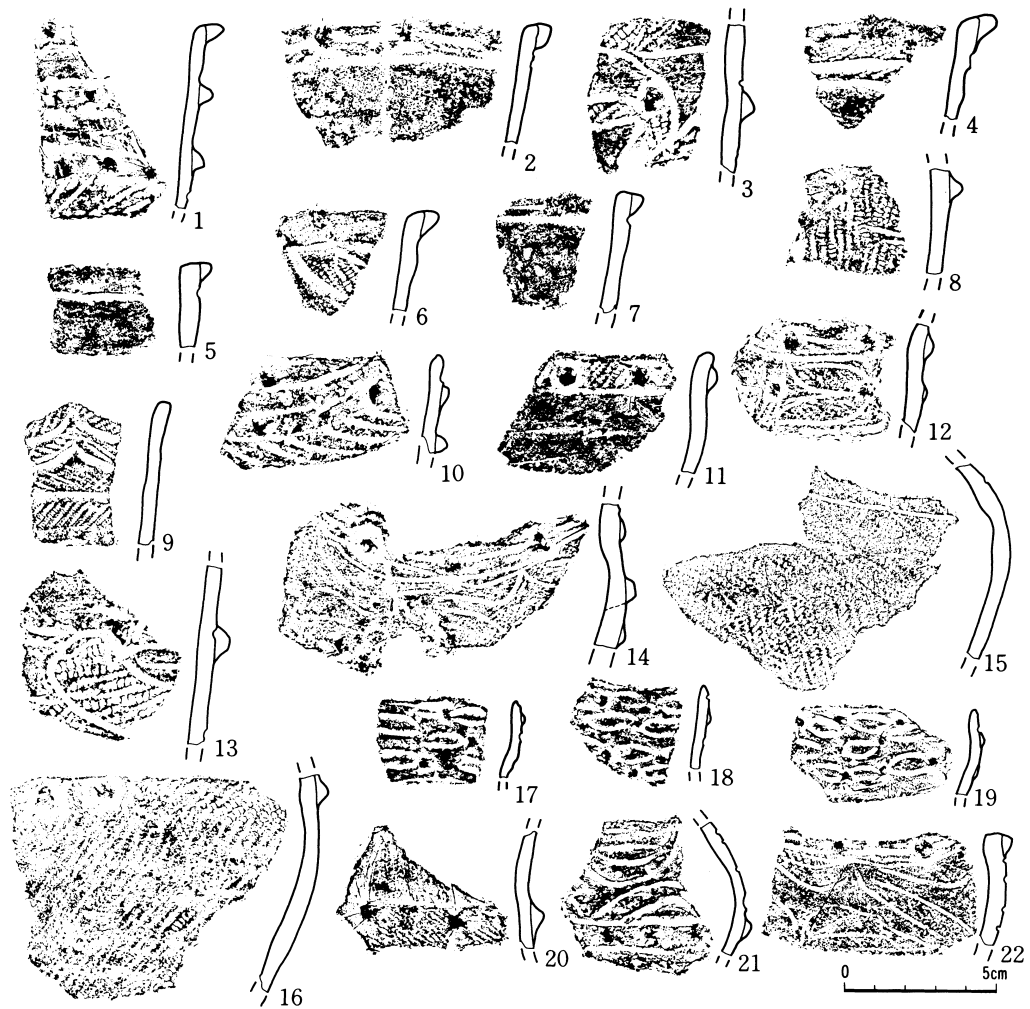




第IV群土器観察表(15)

番号	地区・層位	部位	外面施文文様			分類
1	C-13・I層	口縁部	縄文(LR)	磨消縄文	横位文様 スス状炭附着	IV群5類
2	A F-9・II層	口頸部	縄文(RL)	横位弧状文様	磨消縄文 スス状炭附着	IV群5類
3	A F-9・II層	口頸部	縄文(LR)	带状文様	磨消縄文 スス状炭附着	IV群5類
4	C-12・I層	口頸部	縄文(LR)	带状文様	瘤貼り付け スス状炭附着	IV群5類
5	C-2・I層	口頸部	縄文(LR)	带状文様	瘤貼り付け スス状炭附着	IV群5類
6	A F-10・II層	口縁部	縄文(LR)	横位弧状文様	瘤貼り付け スス状炭附着	IV群5類
7	A F-8・II層	口縁部	縄文(LR)	斜位文様	瘤貼り付け 磨消縄文 スス状炭附着	IV群5類
8	B-13・I層	口縁部	縄文(RL)	スス状炭附着		IV群5類
9	A F-10・II層	口縁部	縄文(LR)	斜位文様	口唇部寄りに瘤貼り付け スス状炭附着	IV群5類
10	D-1・I層	口縁部	縄文(RL)	メガネ状文様	文様の終起点に瘤貼り付け スス状炭附着	IV群5類
11	A A-16・I層	口縁部	>状・横位(沈線)	口唇部寄りに瘤貼り付け	スス状炭附着	IV群5類
12	A E-19・I層	口頸部	带状文様	縄文(RL)	交差状沈線 瘤貼り付け スス状炭附着	IV群5類
13	B-14・I層	口縁部	縄文(LR)	磨消縄文	口唇部寄りに瘤貼り付け	IV群5類
14	C-12・I層	口縁部	小突起をもつ口縁	口唇部寄りに瘤貼り付け	横位沈線 スス状炭附着	IV群5類
15	A D-8・II層	口頸部	带状文様	縄文(LR)	瘤貼り付け スス状炭附着	IV群5類
16	A F-9・II層	口縁部	带状文様	縄文(RL)	口唇部寄りに瘤貼り付け	IV群5類
17	A E-19・II層	口縁部	横位弧状文様	縄文(RL)	口唇部寄りに瘤貼り付け	IV群5類
18	A F-10・II層	口縁部	縄文(LR)	口唇部寄りに瘤貼り付け	スス状炭附着	IV群5類

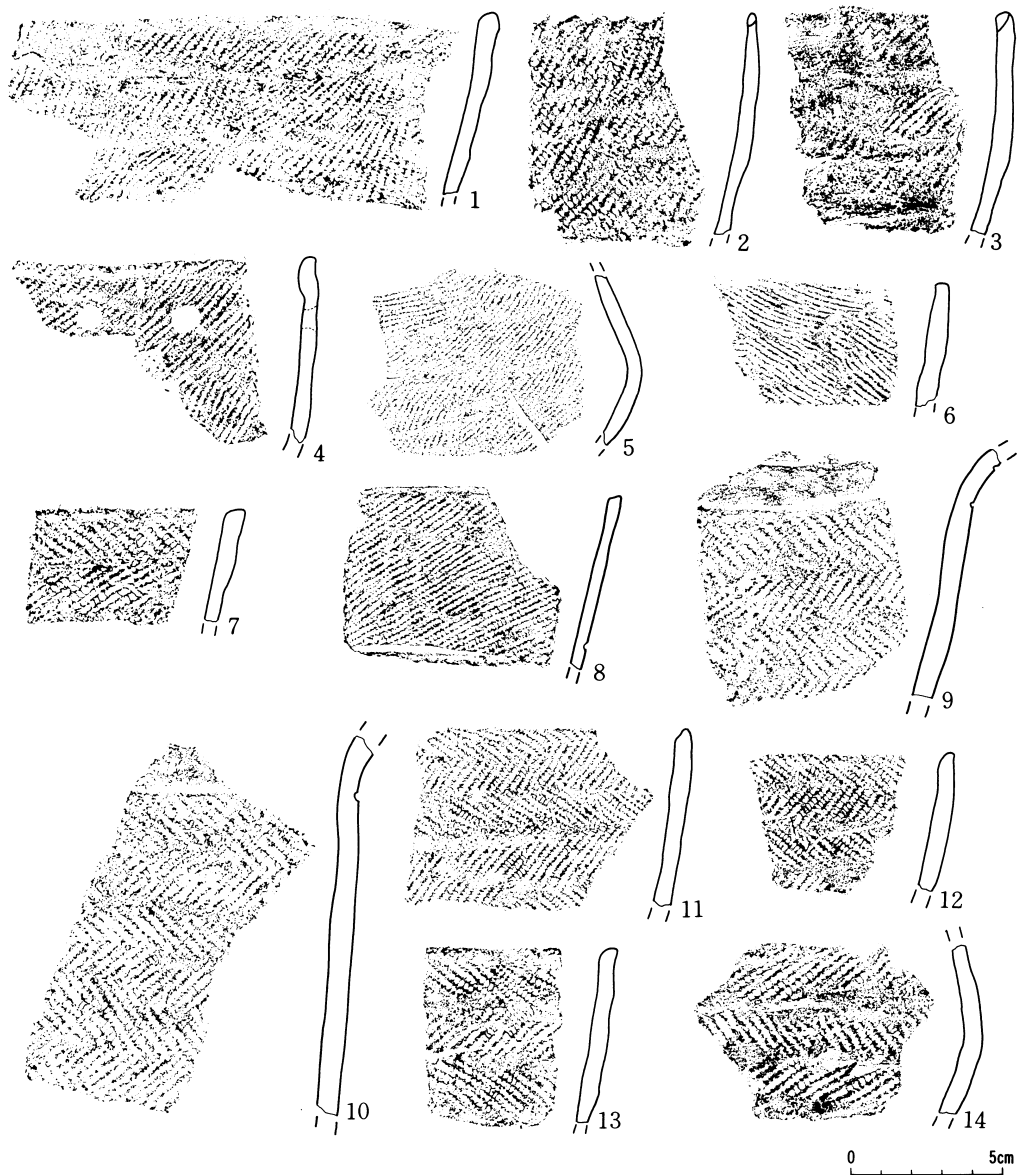
第141図 遺構外出土土器(27)



第IV群土器観察表(16)

番号	地区・層位	部位	外面施文文様	分類
1	C-2・II層	口縁部	帯状文様 斜位(沈線) 瘤貼り付け	IV群5類
2	B-14・I層	口縁部	横位(沈線) 縄文 口唇部寄りに瘤貼り付け	IV群5類
3	A F-10・II層	胴部	縄文(LR) 横位弧状文様 磨消縄文 文様帯に瘤貼り付け スス状炭附着	IV群5類
4	A F-9・II層	口縁部	帯状文様 口唇部寄りに瘤貼り付け 縄文 スス状炭附着	IV群5類
5	A F-9・II層	口縁部	帯状文様 口唇部寄りに瘤貼り付け スス状炭附着	IV群5類
6	A F-9・II層	口縁部	斜位文様 縄文(RL) 口唇部寄りに瘤貼り付け	IV群5類
7	C-12・II層	口縁部	横位(沈線) 口唇部寄りに瘤貼り付け スス状炭附着	IV群5類
8	C-2・II層	胴部	縄文(LR) 瘤貼り付け スス状炭附着	IV群5類
9	C-1・I層	口縁部	波状口縁 縄文(LR・RL) 磨消縄文	IV群5類
10	D-1・I層	胴部	斜位(沈線) 瘤貼り付け	IV群5類
11	B-15・I層	口縁部	帯状文様 瘤貼り付け 縄文(LR) 磨消縄文 スス状炭附着	IV群5類
12	G-9・II層	口頸部	縄文(RL) 瘤貼り付け 横位弧状文様	IV群5類
13	F-10・II層	胴部	縄文(LR) 磨消縄文 瘤貼り付け スス状炭附着	IV群5類
14	G-9・II層	胴部	横位・弧状(沈線) 貫通孔 瘤貼り付け	IV群5類
15	A F-9・II層	胴部	縄文(RL) 横位(沈線) スス状炭附着	IV群5類
16	A A-7・II層	胴部	縄文(LR) 瘤貼り付け スス状炭附着	IV群5類
17	C-22・I層	口縁部	メガネ状文様(沈線) 文様帯の終起点に瘤貼り付け	IV群5類
18	C-12・I層	口縁部	メガネ文様(沈線) 文様帯の終起点に瘤貼り付け	IV群5類
19	C-12・I層	口縁部	メガネ状文様(沈線) 文様帯の終起点に瘤貼り付け	IV群5類
20	A B-7・II層	口頸部	帯状文様 縄文(RL) 文様帯に瘤貼り付け スス状炭附着	IV群5類
21	A F-9・II層	胴部	横位弧状文様(沈線) 瘤貼り付け	IV群5類
22	A G-9・II層	胴部	横位弧状文様 瘤貼り付け 磨消縄文 縄文(RL)	IV群5類

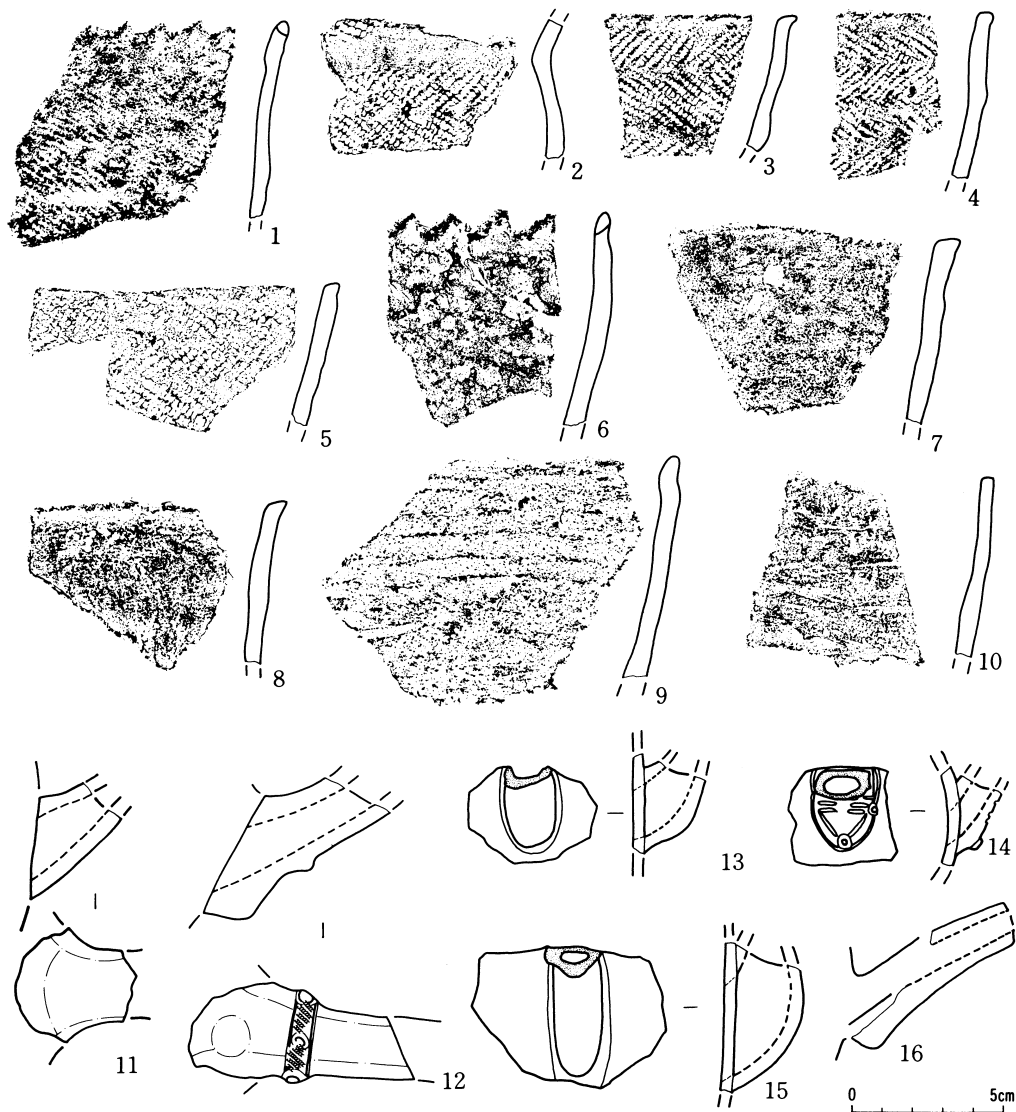
第142図 遺構外出土土器(28)



第IV群土器観察表(17)

番号	地区・層位	部位	外面施文文様	分類
1	AF-9・II層	口縁部	縄文(LR) 一部磨消 スス状炭附着	IV群5類
2	AD-13・I層	口縁部	縄文(LR) 一部磨消 口唇部上面に指頭圧痕 スス状炭附着	IV群5類
3	AB-7・II層	口縁部	縄文(LR) 口唇部に刻み スス状炭附着	IV群5類
4	D-2・II層	口縁部	縄文(LR) 補修孔 スス状炭附着	IV群5類
5	AC-15・I層	胴部	縄文(LR)	IV群5類
6	C-2・I層	口縁部	縄文(RL) スス状炭附着	IV群5類
7	C-12・I層	口縁部	縄文(LR・RL) スス状炭附着	IV群5類
8	C-12・I層	口縁部	縄文(LR) 横位(沈線) スス状炭附着	IV群5類
9	B-13・I層	口頸部	縄文(LR・RL) 横位(沈線)	IV群5類
10	表採	口頸部	縄文(LR・RL) 横位(沈線)	IV群5類
11	AC-15・間層	口縁部	縄文(LR・RL)	IV群5類
12	C-15・I層	口縁部	縄文(LR・RL)	IV群5類
13	AA-16・I層	口縁部	縄文(LR・RL) スス状炭附着	IV群5類
14	A-14・I層	胴部	縄文(LR・RL) スス状炭附着	IV群5類

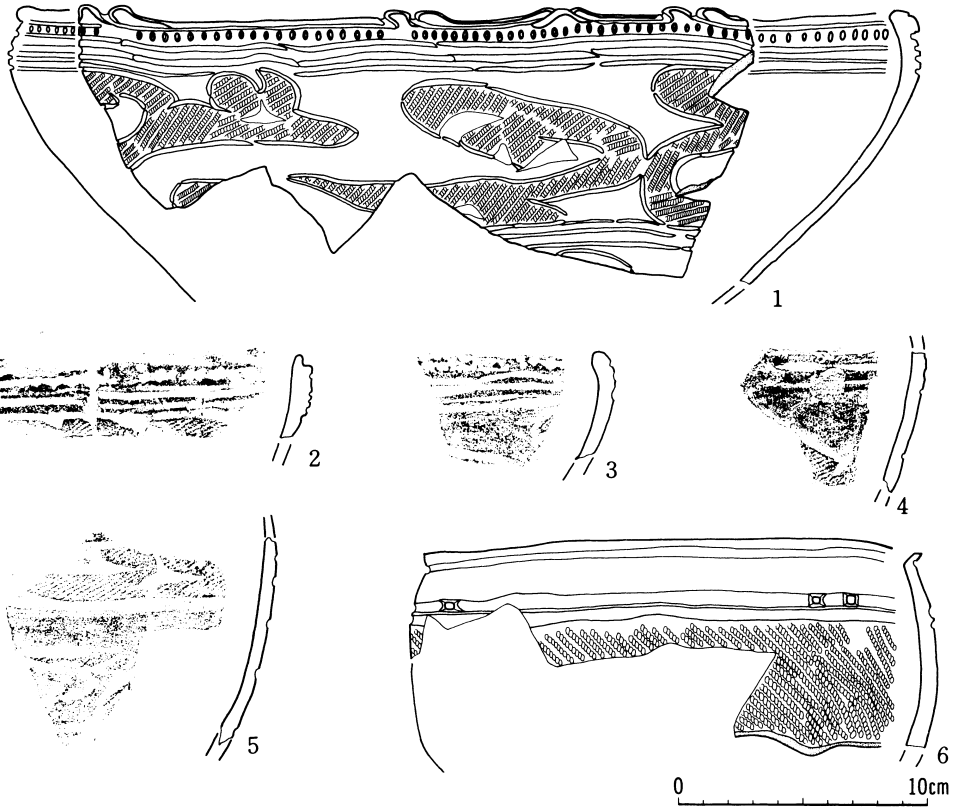
第143図 遺構外出土土器(29)



第IV群土器観察表(18)

番号	地区・層位	部位	外面	施文	文様	分類
1	A-13・I層	口縁部	口唇部に小突起	縄文 (RL)	スス状炭附着	IV群5類
2	A F-9・II層	口頸部	縄文 (LR・RL)	スス状炭附着		IV群5類
3	A B-6・II層	口縁部	縄文 (LR・RL)	スス状炭附着		IV群5類
4	A F-8・II層	口縁部	縄文 (LR・RL)	スス状炭附着		IV群5類
5	B-5・II層	口縁部	縄文 (LR・RL)	スス状炭附着		IV群5類
6	A-13・I層	口縁部	口唇部に連続小突起	器内外面に横位調整	スス状炭附着	IV群5類
7	A G-9・II層	口縁部	器内外面に横位調整	スス状炭附着		IV群5類
8	C-14・I層	口縁部	器内外面に横位調整	スス状炭附着		IV群5類
9	A F-16・I層	口縁部	器内外面に横位調整	スス状炭附着		IV群5類
10	A B-7・II層	口縁部	器内外面に横位調整	スス状炭附着		IV群5類
11	A C-16・I層	注口部	無	文		IV群5類
12	C-13・I層	注口部	瘤貼り付け	縄文 (RL)		IV群5類
13	B-14・I層	注口部	無	文		IV群5類
14	A G-10・II層	注口部	横・斜位 (沈線)	文様の終起点に瘤貼り付け		IV群5類
15	A A-7・II層	注口部	無	文		IV群5類
16	C-12・I層	注口部	無	文		IV群5類

第144図 遺構外出土土器(30)



第V群土器観察表

番号	地区・層位	部位	外面施文文様	分類
1	A I - 10・II層	口縁部	突起 刺突 平行沈線 雲形文 (LR横位)	V群1類
2	A I - 10・II層	口縁部	突起 刺突 平行沈線 雲形文 (LR横位)	V群1類
3	A I - 10・II層	口縁部	刺突 平行沈線 雲形文 (LR横位?)	V群1類
4	A I - 10・II層	頸~胴部	平行沈線 雲形文 (LR横位)	V群1類
5	A I - 10・II層	胴部	雲形文 沈線 (LR横位)	V群1類
6	N I - 1・I層	口縁部	縄文 平行沈線 貼瘤 (RL横位)	V群2類

第145図 遺構外出土土器(3)

第 群土器（弥生時代）

弥生時代の土器を一括した。土器の分布は、本調査区北側台地に散在し、特定の地域に集中する傾向はみられなかった。大部分は第 Ⅰ 層からの出土である。完形土器は 1 点もなく、約 1/4 程度復原したものか、あるいは土器片が大部分である。ここでは、施文文様に注目して、次のように 1 類から 10 類まで分類をおこなった。

第 1 類土器 平行沈線と連続山形文により文様帯を構成するもの（第 146 図、第 147 図 - 1 ~ 8）

本類の土器は、口縁部から肩部にかけて、横位の平行沈線と連続山形文を併用して文様を構成している。本遺跡で出土した弥生時代の土器群の中では、主体的な文様である。

第 146 図 - 1・3 は同一個体である。口縁部と頸部の区別は明瞭ではない。施文文様は、平行沈線と連続山形文を交互に配置している。沈線は細く鋭角的である。胴部は、斜位方向の縄文（LR）である。胎土・焼成は良好で、色調は器内外面ににぶい黄橙色である。第 146 図 - 2・5・6 は鉢形で、口縁部欠損のため文様構成を把握できないが、いずれも沈線の下部に不明瞭な連続山形文を施している。胴部の施文は、縦位方向の縄文（RL）である。胎土・焼成は良好である。

第 146 図 - 9・10・12 は鉢形と思われ、施文文様等が類似する。口縁部から口唇部にかけて若干内湾している。口唇部には、口縁寄りに工具による刻目があり、口縁部から口頸部にかけては三条の沈線・連続山形文が施文されている。第 146 図 - 13・14、第 147 図 - 1 は壺形で、13・14 は縄文（RL）を施文した後に工具で沈線・連続山形文を施文している。第 147 図 - 1 は二重の沈線で区画され、その間に二重の連続山形文が施文されている。第 147 図 - 2 は、薄手の土器片で、口縁は小波状を呈し、その頭頂部の口唇部に 3 箇所の刻目が観察される。口縁部から頸部にかけて、沈線と連続山形文が施文されている。

第 2 類土器 磨消縄文で文様帯を構成するもの（147 図 - 9 ~ 13、148 図、149 図 - 1 ~ 9・11・12）

本類は、1 類と同様に比較的多く出土した。沈線で区画された文様は、波状形・三角形・方形等多種多様である。第 147 図 - 9 は深鉢形で、口頸部から口縁部にかけて外反している。施文文様は、口頸部から肩部にかけては沈線で区画されている。その間は、二重の波状沈線で区画され、磨消縄文が施されている。また、器内面口縁部には縄文（RL）が施されている。器形・文様等は大石平 群土器に極めて類似している。第 147 図 - 12 は、口縁部の外反する深鉢型と思われる。平縁で、口唇部には縄文（RL）を回転させ、口縁部には二条の縄文の圧痕が観察される。施文文様は 9 と類似している。第 148 図 - 2 は肩部から胴部にかけて曲線の沈線・三条の平行沈線・不規則な連続山形文が施文され、胴部は縦走する縄文（RL）が施文されている。第 148 図 - 3・6 は同一個体で、深鉢形を呈する。弧状の沈線で区画され、その間に磨消縄文を施文している。第 148 図 - 5・8 は同一個体で、浅鉢形と思われる。曲線による沈線で区

画されているが、全体の文様構成は不明である。また、朱塗りの土器である。第149図 - 2・3は鉢形と思われる。口縁部と頸部に沈線を施文し、その間を磨消している。肩部には斜位方向の縄文（RL）を施文している。第149図 - 4は地文の縄文（RL）に、三条の平行沈線・連続山形文を施し、その上面を磨消している。

第3類土器 充填縄文により文様を構成するもの（第149図 - 10・13～18）

本類は断片的な土器が多いため、器形の不明なものも存在する。施文文様は沈線による区画帯が三角形・弧状を呈するものなど多様である。10は沈線を用いて三角形に区画し、中に縦位方向の縄文（RL）を充填している。

第4類土器 縄文のみを施文するもの（第150、151図、152図 - 1～7・10～13）

本類では約 $\frac{1}{4}$ 程度復原できたものもあるが、大部分は断片的なものである。第150図 - 1は深鉢形の土器である。肩部から胴部は縦位方向の縄文（RL）、底辺部は斜位方向の縄文を施している。底部は上げ底である。また、第150図 - 2は肩部から口縁部にかけて緩やかに外反する深鉢形の土器である。文様は縦位方向の縄文（RL）である。

口縁部破片については次のように細分した。

(a) 口縁が平縁のもの（第150、151図 - 1）

頸部から口縁部にかけて緩やかに外反する深鉢形のものが多い。文様は、縦位あるいは斜位方向の縄文を施文している。第151図 - 1は、口唇部に縄文を施文している。第150図 - 9は、口縁部に指によるナデ調整を施している。

(b) 口唇部に刻み目を有するもの、あるいは押圧したもの（第151図 - 2～12）

4は、肩部から口縁部にかけて緩やかに外反する深鉢形土器である。口唇部から口縁部上面に、押圧刺突による刻みが並列して施されている。文様は、斜位方向に縄文（RL）を施文している。焼成は良好で、胎土に粗砂粒が混入している。2・3・5は同一個体と思われ、器形は深鉢形を呈する。B字状突起をもつ波状口縁で、縦位方向に縄文（RL）が施されている。B字状突起の真下の口縁部に穿孔をもつ。口縁部内面には、口唇部に沿って縄文（RL）が施文されている。他の土器片は、口唇部より口縁部上面にかけて押圧刺突による刻目をもつ。11、12は同一個体で、深鉢形を呈すると思われる。大石平1群土器に類似している。

(c) 波状口縁、B字状突起、折り返し口縁をもつもの（第152図 - 1・2・3・5・6）

1・2は同一個体で、小波状口縁をもつ。斜位方向に縄文（RL）を施文したのちに、頸部及び肩部をナデ調整している。焼成は良好で、胎土には粗砂粒を混入する。5は、口縁の形態は不明ではあるが、2個併列のB字状突起をもつ。3は折り返し口縁で、口縁部に指あるいは工具による圧痕が観察される。

(d) 複合口縁をもつもの（第152図 - 4・7）

同一個体である。器形は、肩部で一旦内湾し、頸部から口縁部にかけて緩やかに外反して口唇部付近で再度内湾する。文様は、胴部と頸部は縦位方向の縄文（RL）、肩部（胴部上面を含む）と口縁部は横位方向の縄文を施文している。焼成は良好で、胎土は堅緻である。色調は器内外面ともに橙色である。

なお、底部は、上底のもの（第152図 - 12）、平底のもの（第152図 - 10・11・13）があり、地文縄文は斜位方向のもの（第152図 - 10・13）、縦位方向のもの（第152図 - 11・12）がある。

第5類土器 交互刺突をもつもの（第152図 - 8・9、153図 - 1、3～11）

第152図 - 8・9の施文文様は、沈線で隅丸方形に区画されている。また、施文方法としては、沈線で区画したのちに縄文を施文している。

第153図 - 1の形状は、肩部で一旦段を有し、頸部から口縁にかけて内湾している。折り返し口縁で、口縁部には圧痕と刺突が交互に並列している。口唇部も同様に、圧痕と刺突による刻目を交互に並列している。頸部は斜位方向の縄文（RL）が施文され、工具によるナデ調整が認められる。焼成は良好で、胎土には細砂粒を含む。色調は器外面が黒褐色、内面はにぶい黄褐色である。

第6類土器 刺突を用いているもの（第153図 - 2、12～17）

本類は、工具等による刺突のある土器片を一括した。12・13・14は同一個体で、縄文（RL）、沈線、刺突が施文されている。

第7類土器 重菱形文を施文しているもの（第153図 - 18）

沈線による3～4重の菱形文が施文されている。沈線は細く鋭角的で、形は若干くずれている。

第8類土器 綾絡文を施文しているもの（第153図 - 19）

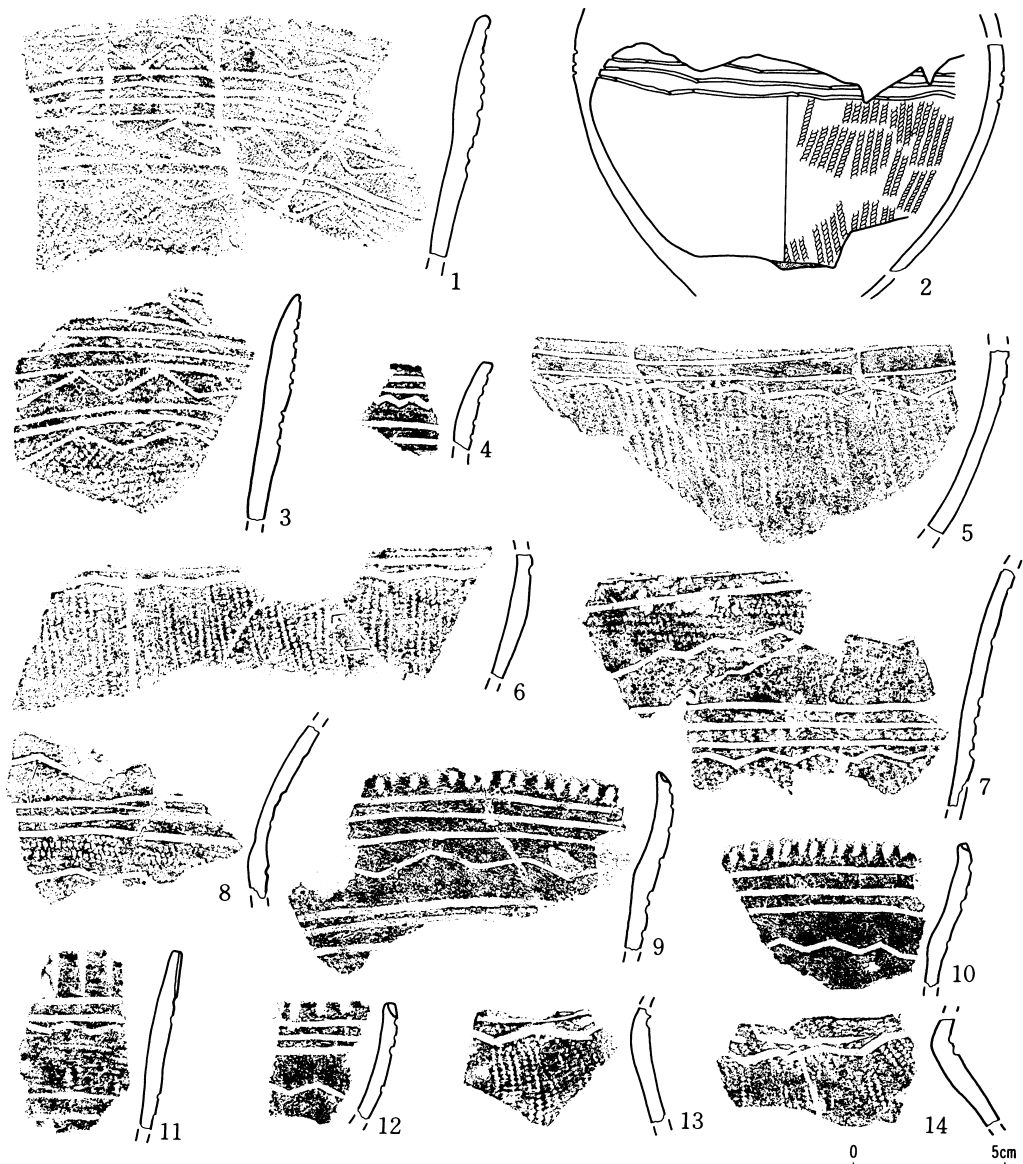
口縁部破片で、二段の綾絡文を施文している。縄文原体はLRである。平縁で口縁には沈線・連続山形文が観察される。

第9類土器 撚糸文を施文しているもの（第153図 - 20）

縦位・横位方向の平行沈線に撚糸文を施文している。焼成は良好で、胎土には細砂粒が包含されている。

第10類土器 無文あるいは縄文に沈線を施しているもの（第153図 - 21、154図）

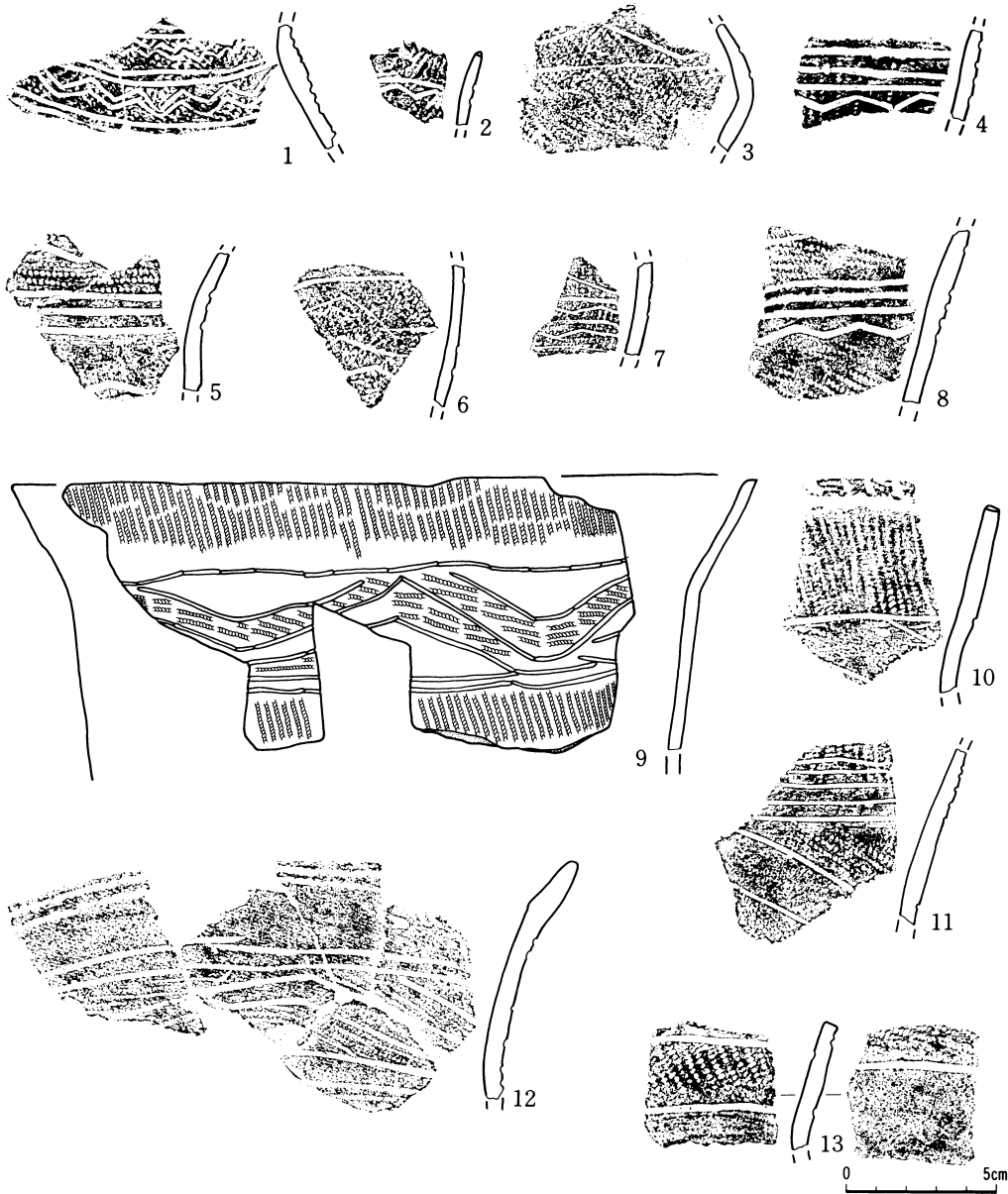
本類は断片的なもので、全体の文様構成を把握できないものが多い。第153図 - 21は折り返し口縁で、その部位に三条の平行沈線を施し、粘土粒を貼付している。口唇部は工具による刻みが施されている。第154図 - 1は壺形土器で、文様は変形工字文に近いと思われる。5は弧状の沈線と思われる。17は台部と思われる。斜位方向の縄文（RL）を施文し、台部の底面寄りに二条の平行沈線がみられる。 （奈良）



第VI群土器観察表

番号	地区・層位	部位	外面施文文様	分類
第146図-1	C-ウ・II層	口縁・頸部	横位方向の沈線 連続山形文 斜位方向の縄文(LR)	1類
第146図-2	S-ア・II層	頸部・胴部	横位方向の沈線 連続山形文 縦位方向の縄文(RL)	1類
第146図-3	C-ウ・II層	口縁・頸部	横位方向の沈線 連続山形文 斜位・横位方向の縄文(LR)	1類
第146図-4	A-16・I層	口縁部	横位方向の沈線 連続山形文	1類
第146図-5	L-14・I層	頸部・胴部	横位方向の沈線 連続山形文 縦位方向の縄文(RL)	1類
第146図-6	A-16・I層	頸部・胴部	横位方向の沈線 連続山形文 縦位方向の縄文(RL)	1類
第146図-7	I-1・II層	頸部	横位方向の沈線 連続山形文 横位・縦位方向の縄文(RL)	1類
第146図-8	I-イ・II層	頸部・胴部	横位方向の沈線 連続山形文 横位方向の縄文(RL)	1類
第146図-9	I-イ・II層	口縁部	横位方向の沈線 連続山形文 口唇部刻目	1類
第146図-10	I-イ・II層	口縁部	横位方向の沈線 連続山形文 口唇部刻目	1類
第146図-11	U-1・II層	口縁部	縦位・横位方向の沈線 連続山形文	1類
第146図-12	E-ウ・II層	口縁部	横位方向の沈線 連続山形文 口唇部刻目	1類
第146図-13	H-ウ・I層	頸部・胴部	横位方向の沈線 連続山形文 縦位方向の縄文(RL)	1類
第146図-14	H-ウ・I層	頸部・胴部	横位方向の沈線 連続山形文 縦位方向の縄文(RL)	1類

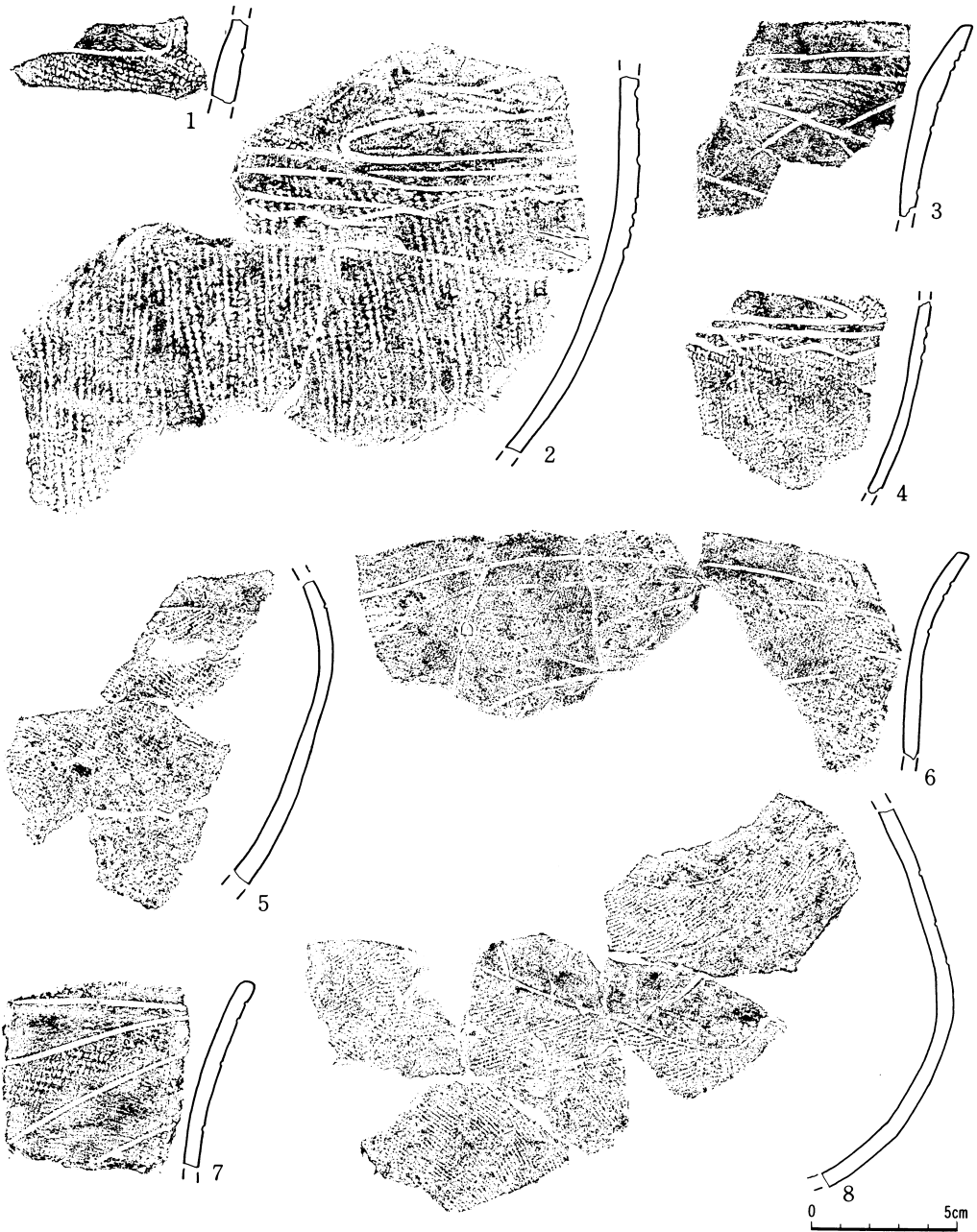
第146図 遺構外出土土器(32)



第VI群土器観察表

番号	地区・層位	部位	外面施文文様	分類
第147図-1	B-11・II層	頸部	横位方向の沈線 連続山形文 斜位方向の縄文(LR)	1類
第147図-2	A E-10・II層	口縁部	横位方向の沈線 連続山形文 波状口縁 口唇部刻目	1類
第147図-3	A F-9・II層	胴部	横位方向の沈線 連続山形文 斜位方向の縄文(RL)	1類
第147図-4	C-1・I層	口縁部	横位方向の沈線 連続山形文	1類
第147図-5	I-イ・II層	頸部	横位方向の沈線 連続山形文(?)	1類
第147図-6	A F-9・II層	胴部	横位方向の沈線 連続山形文 斜位方向の縄文(RL)	1類
第147図-7	A A-15・I層	胴部	横位方向の沈線 連続山形文	1類
第147図-8	R-ア・II層	頸部	横位方向の沈線 連続山形文 斜位方向の縄文(RL)	1類
第147図-9	H-13・I層	口縁・頸部	波状の沈線 横位方向の沈線 斜位・横位方向の縄文(RL)	2類
第147図-10	B-ア・I層	口縁部	横位・斜位方向の沈線 斜位方向の縄文(RL)	2類
第147図-11	B-ア・I層	頸部	横位・斜位方向の沈線 縦位・斜位方向の縄文(RL)	2類
第147図-12	B-14、C-15・I層	口縁・頸部	波状の沈線 横位方向の沈線 斜位方向の縄文(LR) 縄文の圧痕	2類
第147図-13	A E-9・II層	口縁部	横位方向の沈線 斜位方向の縄文(RL)	2類

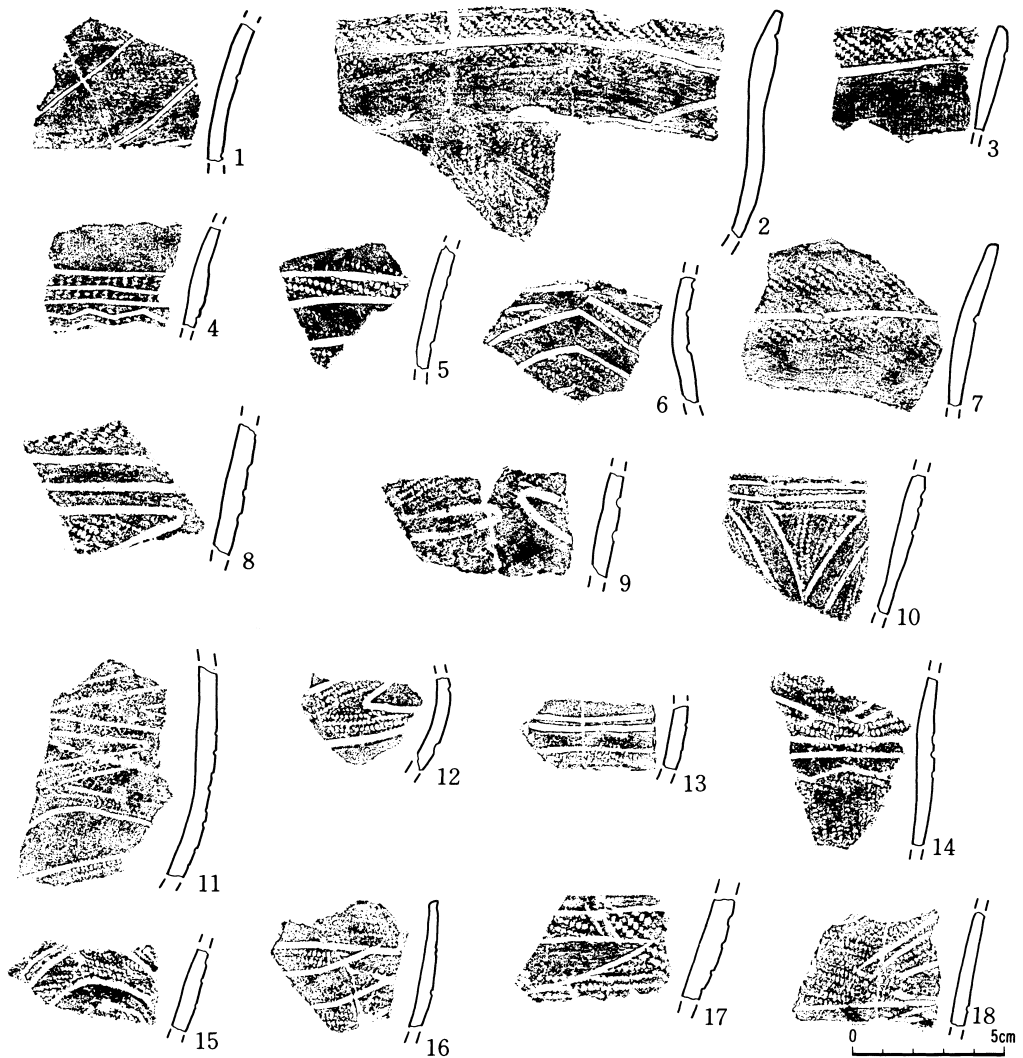
第147図 遺構外出土土器(33)



第VI群土器観察表

番号	地区・層位	部位	外面施文文様	分類
第148図-1	D-ウ・I層	頸部	横位・縦位方向の沈線 横位方向の縄文 (RL)	2類
第148図-2	N-18・I層	頸部・胴部	横位方向の沈線 連続山形文 縦位方向の縄文 (RL) スス状炭化物付着	2類
第148図-3	B-3・I層	口縁・頸部	波状の沈線 横位方向の沈線 斜位方向の縄文 (RL) スス状炭化物付着	2類
第148図-4	E-イ・I層	胴部	曲線・横位方向の沈線 連続山形文 斜位・縦位方向の縄文 (RL)	2類
第148図-5	M-1・Va層	胴部	曲線沈線 斜位方向の縄文 (LR)	2類
第148図-6	B-3・I層	口縁・頸部	波状の沈線 横位方向の沈線 斜位方向の縄文 (RL) スス状炭化物付着	2類
第148図-7	B-ア・I層	口縁部	斜位方向の沈線 横位方向の縄文 (RL)	2類
第148図-8	M-1・Va層	胴部	曲線沈線 斜位方向の縄文 (LR)	2類

第148図 遺構外出土土器34)



第VI群土器観察表

番号	地区・層位	部位	外面施文文様	分類
第149図-1	B-ア・I層	頸部	斜位方向の沈線 横位方向の縄文 (RL)	2類
第149図-2	B-ア・I層	口縁・頸部	横位・斜位方向の沈線 斜位・縦位方向の縄文 (RL)	2類
第149図-3	B-ア・I層	口縁部	横位方向の沈線 斜位方向の縄文 (RL)	2類
第149図-4	A E-10・II層	頸部	横位方向の沈線 連続山形文 縦位方向の縄文 (RL)	2類
第149図-5	A B-16・I層	頸部	横位方向の沈線 横位方向の縄文 (RL)	2類
第149図-6	N-ア・I層	胴部	波状 (?) の沈線 斜位方向の縄文 (RL)	2類
第149図-7	A A-15・I層	口縁部	横位方向の沈線 斜位方向の縄文 (RL) スス状炭付着	2類
第149図-8	G-1・Va層	胴部	曲線沈線 横位方向の沈線 斜位方向の縄文 (RL)	2類
第149図-9	M-13・I層	頸部	曲線沈線 斜位方向の縄文 (LR) スス状炭付着	2類
第149図-10	C-ウ・II層	胴部	横位方向の沈線 曲線沈線 縦位方向の縄文 (RL)	3類
第149図-11	A A-16・I層	胴部	曲線沈線 斜位方向の沈線 斜位方向の縄文 (RL)	2類
第149図-12	A E-10・II層	胴部	曲線沈線 斜位方向の縄文 (RL)	2類
第149図-13	N-15・I層	胴部	横位方向の沈線 斜位方向の縄文 (RL)	3類
第149図-14	D-ア・I層	胴部	横位・斜位方向の沈線 連続山形文 縦位・斜位の縄文 (RL)	3類
第149図-15	B-1・II層	胴部	曲線沈線 斜位方向の縄文 (RL)	3類
第149図-16	O-イ・I層	胴部	横位方向・弧状沈線 横位方向の縄文 (RL)	3類
第149図-17	L-14・I層	胴部	横位方向・弧状沈線 斜位方向の縄文 (RL)	3類
第149図-18	D-ア・I層	頸部	斜位・横位方向の沈線 斜位方向の縄文 (RL)	3類

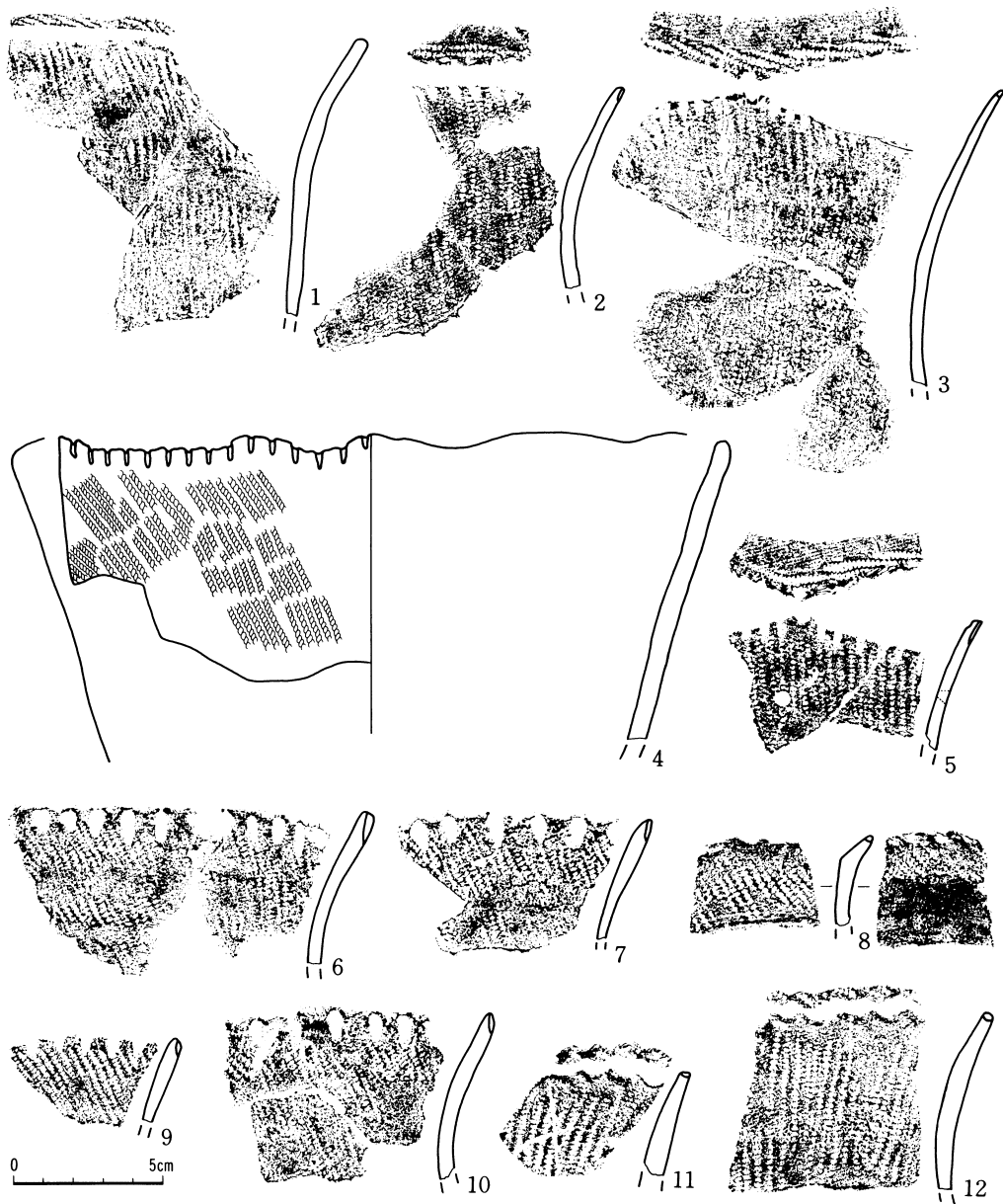
第149図 遺構外出土土器(35)



第VI群土器観察表

番号	地区・層位	部位	外面施文文様	分類
第150図-1	H-13・I層	頸部・底部	縦位・斜位方向の縄文(RL)	4類
第150図-2	K-14・I層	口縁・胴部	縦位方向の縄文(RL)	4類
第150図-3	C-1・I層	口縁・胴部	縦位方向の縄文(RL) スス状炭付着	4類
第150図-4	AG-14・I層	口縁部	縦位方向の縄文(RL) スス状炭付着	4類
第150図-5	AE-10・II層	口縁・胴部	斜位方向の縄文(LR)	4類
第150図-6	G-15・I層	口縁・頸部	縦位方向の縄文(RL)	4類
第150図-7	AE-10・II層	口縁部	斜位方向の縄文(LR)	4類
第150図-8	C-1・I層	口縁部	縦位方向の縄文(RL)	4類
第150図-9	AE-10・II層	口縁部	斜位方向の縄文(LR) 口唇部寄り指ナデ	4類

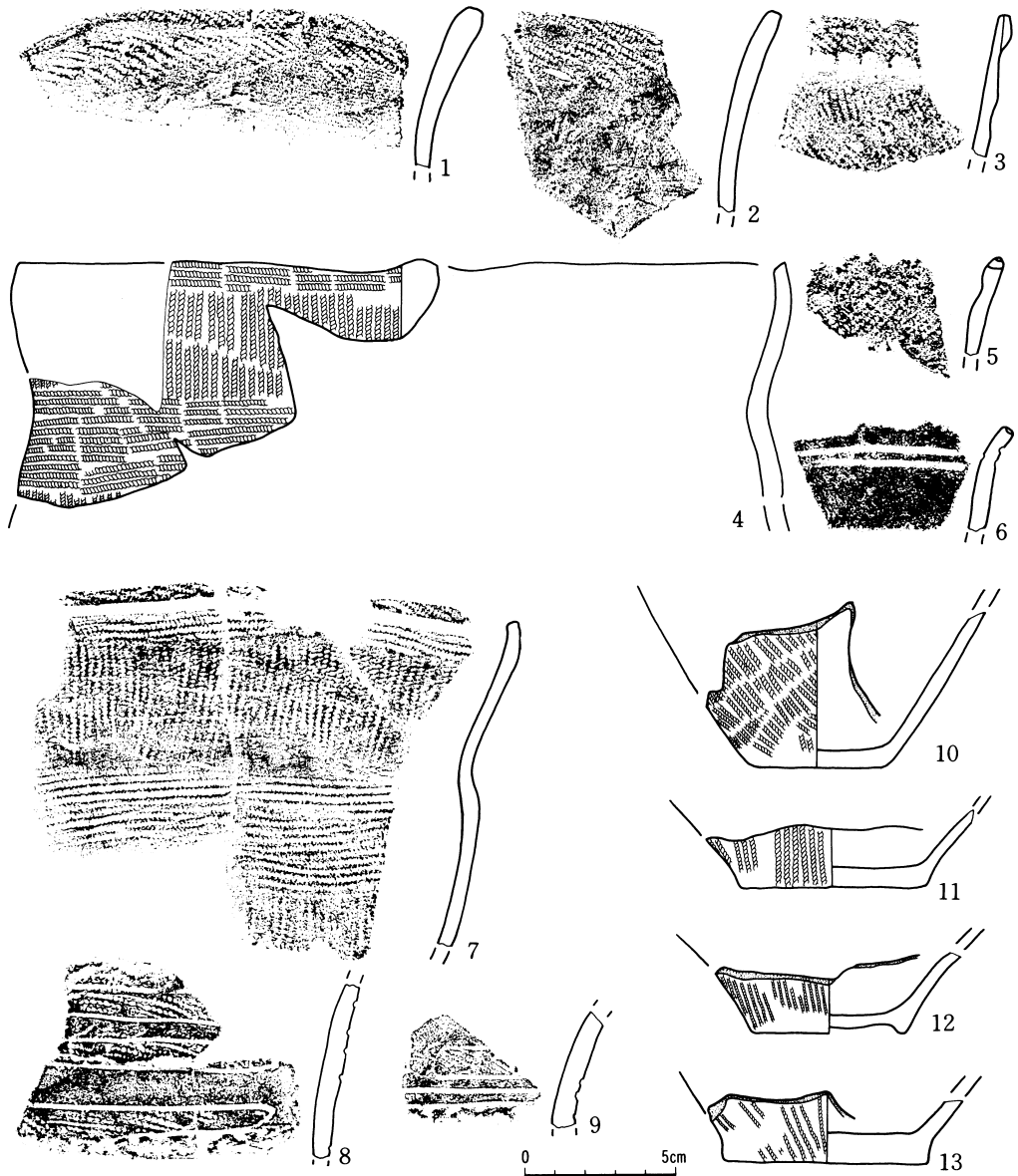
第150図 遺構外出土土器(36)



第VI群土器観察表

番号	地区・層位	部位	外面施文文様	分類
第151図-1	G-15・I層	口縁・頸部	斜位・縦位方向の縄文(RL) 口唇部縄文	4類
第151図-2	C-1・I層	口縁・頸部	口唇部刻目 波状口縁 縦位方向の縄文(RL)	4類
第151図-3	D-1・I層	口縁・頸部	口唇部刻目 波状口縁 縦位方向の縄文(RL)	4類
第151図-4	D-3・II層	口縁・頸部	口唇部刻目 斜位方向の縄文(RL)	4類
第151図-5	C-1・I層	口縁部	口唇部刻目 波状口縁 縦位方向の縄文(RL)	4類
第151図-6	H-13・I層	口縁部	口唇部刻目 斜位方向の縄文(RL) スス状炭化物附着	4類
第151図-7	H-13・I層	口縁部	口唇部刻目 斜位方向の縄文(RL) スス状炭化物附着	4類
第151図-8	H-U・I層	口縁部	口唇部押圧 斜位方向の縄文(RL)	4類
第151図-9	H-13・I層	口縁部	口唇部刻目 斜位方向の縄文(RL)	4類
第151図-10	H-13・I層	口縁部	口唇部刻目 斜位方向の縄文(RL)	4類
第151図-11	E-11・I層	口縁部	口唇部押圧 斜位方向の縄文(RL) スス状炭化物附着	4類
第151図-12	E-11・I層	口縁部	口唇部押圧 斜位方向の縄文(RL) スス状炭化物附着	4類

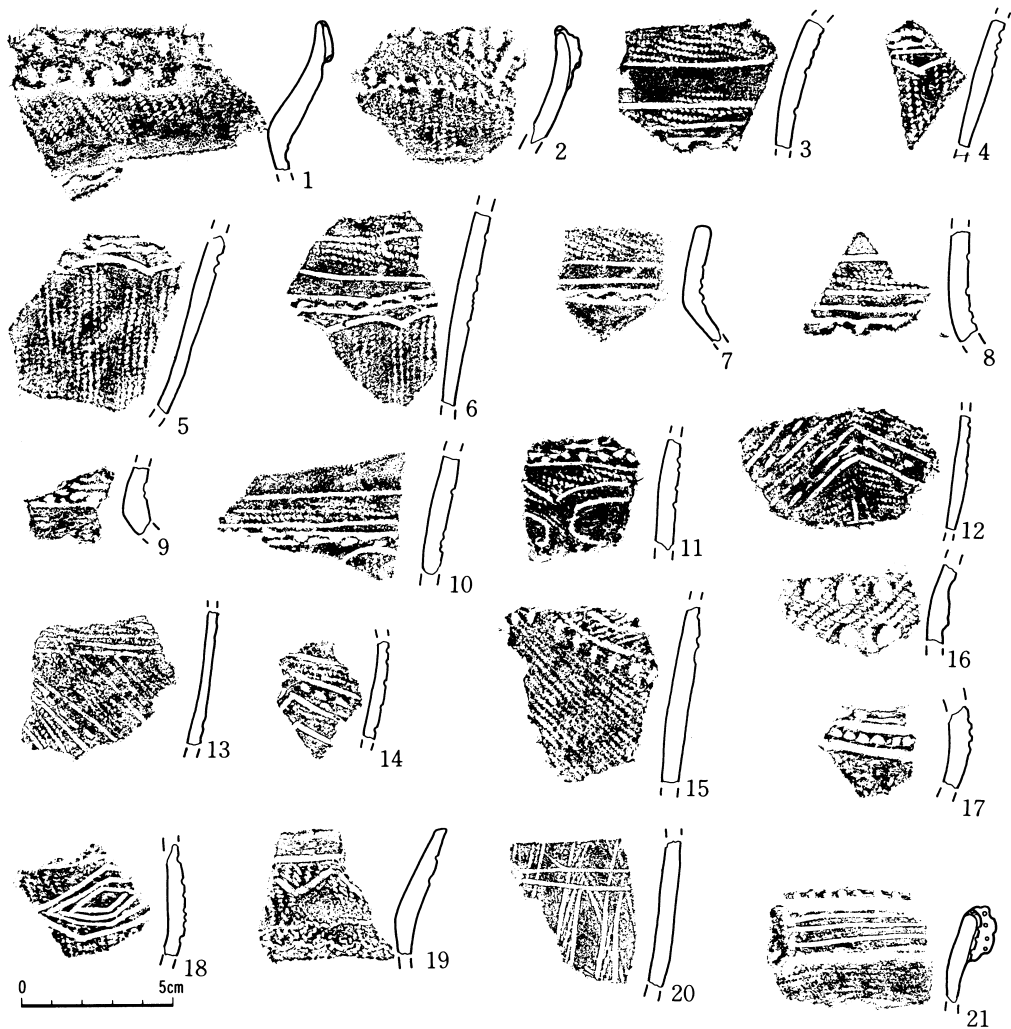
第151図 遺構外出土器(37)



第VI群土器観察表

番号	地区・層位	部位	外面施文文様	分類
第152図-1	C-13・I層	口縁部	波状口縁 斜位方向の縄文 (RL) スス状炭化物付着	4類
第152図-2	C-12・I層	口縁部	波状口縁 斜位方向の縄文 (RL) スス状炭化物付着	4類
第152図-3	F-ア・II層	口縁部	折り返し口縁 斜位方向の縄文 (RL) スス状炭化物付着	4類
第152図-4	E-3・I層	口縁・頸部	複合口縁 縦位・横位方向の縄文 (RL)	4類
第152図-5	M-13・I層	口縁部	B字状突起 斜位方向の縄文 (RL) スス状炭化物付着	4類
第152図-6	AB-16・I層	口縁部	B字状突起 横位方向の沈線	4類
第152図-7	D-3・II層	口縁・胴部	複合口縁 縦位・横位方向の縄文 (RL)	4類
第152図-8	C-1・I層	頸部	交互刺突 横位・曲線沈線 斜位方向の縄文 (RL)	5類
第152図-9	C-1・I層	頸部	交互刺突 横位・曲線沈線 斜位方向の縄文 (RL)	5類
第152図-10	D-ア・I層	底部	斜位方向の縄文 (RL)	4類
第152図-11	P-12・II層	底部	縦位方向の縄文 (RL)	4類
第152図-12	J-14・I層	底部	縦位方向の縄文 (RL)	4類
第152図-13	E-12・I層	底部	斜位方向の縄文 (RL)	4類

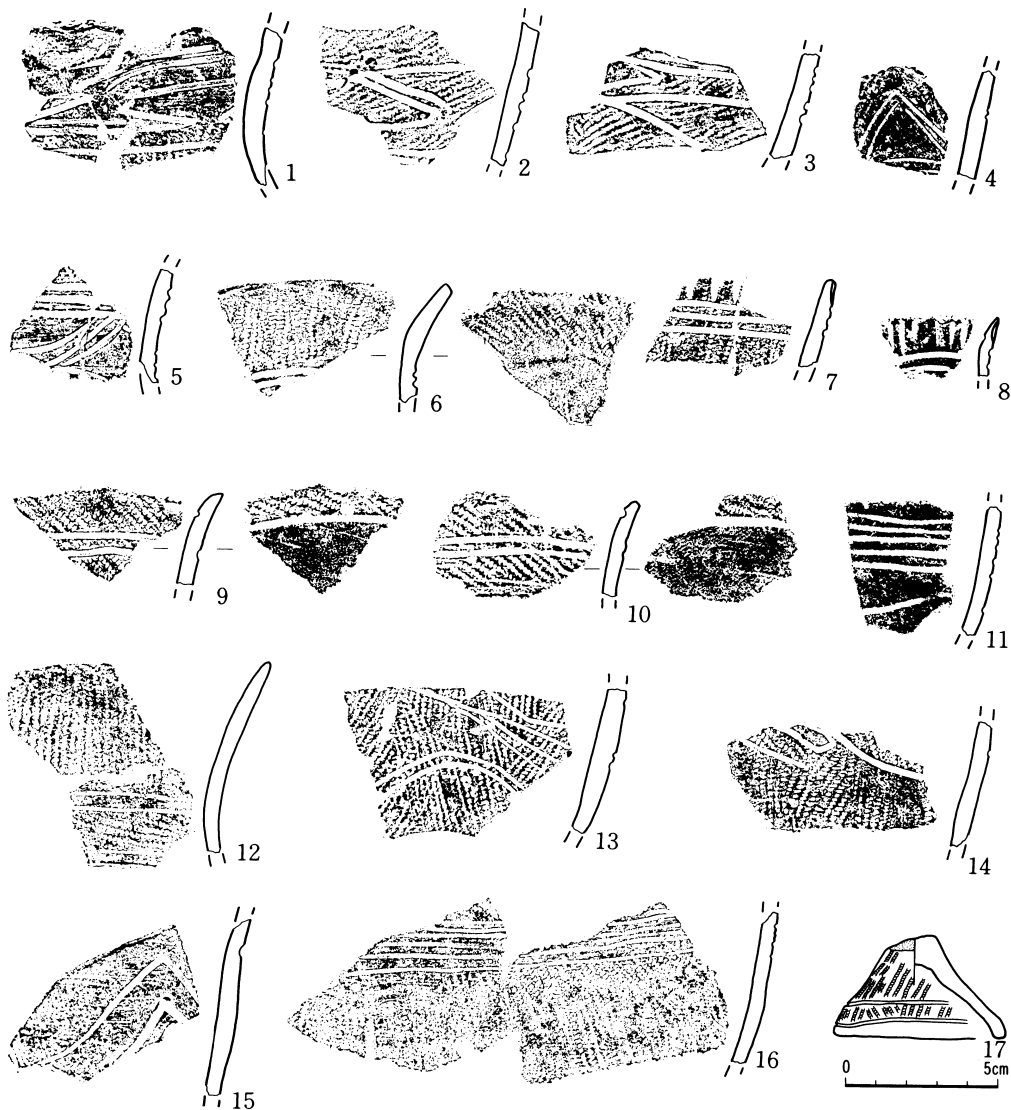
第152図 遺構外出土土器(38)



第VI群土器観察表

番号	地区・層位	部位	外面施文文様	分類
第153図-1	D-ウ・I層	口縁部	交互刺突 刺突 斜位方向の縄文 (RL)	5類
第153図-2	C-1・I層	口縁部	刺突 縦位方向の縄文 (RL)	6類
第153図-3	C-1・I層	頸部	交互刺突 横位方向の沈線 縄文 (RL)	5類
第153図-4	C-1・I層	頸部	交互刺突 連続山形文 (?) 縦位方向の縄文 (RL)	5類
第153図-5	C-1・I層	胴部	交互刺突 連続山形文 縦位方向の縄文 (RL)	5類
第153図-6	D-ウ・I層	頸部	交互刺突 横位沈線 連続山形文 横位・縦位縄文 (RL)	5類
第153図-7	C-1・I層	頸部	交互刺突 横位沈線 斜位方向の縄文 (RL)	5類
第153図-8	D-ウ・I層	頸部	交互刺突 横位沈線 横位方向の縄文 (RL)	5類
第153図-9	C-1・I層	頸部	交互刺突 横位沈線	5類
第153図-10	C-1・I層	頸部	交互刺突 横位・曲線沈線 横位方向の縄文 (RL)	5類
第153図-11	B-1・I層	頸部	交互刺突 曲線沈線 横位方向の縄文 (RL)	5類
第153図-12	O-9・I層	胴部	刺突 斜位方向の沈線 縄文 (RL)	6類
第153図-13	O-9・II層	胴部	刺突 横位・斜位の沈線 斜位方向の縄文 (RL)	6類
第153図-14	O-9・I層	胴部	刺突 斜位の沈線・縄文 (RL)	6類
第153図-15	H-ウ・II層	頸部	刺突 曲線沈線 斜位方向の縄文 (RL)	6類
第153図-16	O-ウ・I層	頸部	刺突 斜位方向の縄文 (RL)	6類
第153図-17	Q-19・II層	胴部	刺突 横位沈線	6類
第153図-18	AB-16・I層	胴部	重菱形文 斜位方向の縄文 (LR)	7類
第153図-19	B-15・I層	口縁部	綾絡文 横位沈線 連続山形文	8類
第153図-20	B-3・II層	胴部	捺糸文 横位・縦位沈線	9類
第153図-21	D-ア・I層	口縁部	横位沈線 折り返り口縁 粘土粒貼付	10類

第153図 遺構外出土土器(39)



第VI群土器観察表

番号	地区・層位	部位	外面施文文様	分類
第154図-1	A-13・I層	頸部	変形工字文(?) 斜位方向の縄文(LR)	10類
第154図-2	A C-15・II層	胴部	変形工字文(?) 斜位方向の縄文(RL)	10類
第154図-3	A C-15・I層	胴部	曲線・弧状沈線 斜位方向の縄文(LR)	10類
第154図-4	N-ア・I層	頸部	三角形文	10類
第154図-5	H-イ・II層	頸部	横位・弧状沈線	10類
第154図-6	B-13・I層	口縁部	横位方向の沈線 縦位方向の縄文(RL)	10類
第154図-7	F-2・II層	口縁部	縦位・横位方向の沈線 縦位方向の縄文(RL)	10類
第154図-8	A-17・I層	口縁部	縦位・横位方向の沈線	10類
第154図-9	B-13・I層	口縁部	横位方向の沈線 斜位方向の縄文(RL)	10類
第154図-10	B-13・I層	口縁部	横位方向の沈線 斜位方向の縄文(RL)	10類
第154図-11	A D-8・II層	口縁部	横位・斜位方向の沈線	10類
第154図-12	H-13・I層	口縁・頸部	横位沈線 縦位・斜位方向の縄文(RL)	10類
第154図-13	N-15・I層	胴部	曲線沈線 斜位方向の縄文(RL)	10類
第154図-14	N-15・I層	胴部	曲線沈線 斜位方向の縄文(RL)	10類
第154図-15	C-ウ・II層	胴部	斜位方向の沈線	10類
第154図-16	H-12・I層	頸部	横位方向の沈線 縦位方向の縄文(RL)	10類
第154図-17	G-11・I層	台部	二条の横位沈線 斜位方向の縄文(RL)	10類

第154図 遺構外出土土器(40)

(2) 石器

本遺跡より出土した石器は、18種384点である（第2表）。石器の分布状況は、遺構が検出された地域に集中する傾向がみられた。

第2表 出土石器一覧表

	石 鏃	石 槍	石 錐	石 匙	石 筥	不定形 石 器	磨 製 石 斧	打 製 石 斧	石 錘	敲 磨 器 類	石 冠	半円状偏 平打製石 器	石 皿	三角 形 岩 版	有 孔 石 製品	棒 状 石 製品	石 刀
遺構内	3	4	1	1	5	34	2	0	0	31	0	2	0	8	0	0	0
遺構外	3	3	4	4	10	120	37	1	1	91	3	3	1	7	1	1	1
合 計	6	7	5	5	15	154	39	1	1	122	3	5	1	15	1	1	1

A類 石鏃（第17図 - 1、20図 - 1、24図 - 1、157図 - 1～3）

石鏃は6点出土した。完形品3点、欠損品3点である。それらを形態から次のように分類した。

類 いわゆる有茎石鏃に属するもの（第20図 - 1、24図 - 1）

類 いわゆる無茎石鏃に属するもの（第157図 - 1）

類 基部と尖頭部の境が不明瞭なもの、あるいは基部欠損のもの（第17図 - 1、157図 - 2・3）

類 2点の出土である。第20図 - 1は二等辺三角形を基調とし、基部形態はT字形を呈している。第24図 - 1は尖頭部を欠損している。基部形態はY字形を呈している。

類 1点の出土である。第157図 - 1は縦長の二等辺三角形を基調としている。基部に浅い抉りが観察される。

類 3点の出土である。第17図 - 1は尖頭部と茎部の区別が不明瞭で、肉厚である。未製品と思われる。第157図 - 2・3はともに基部を欠損しているが、3は残存部分から円基鏃に近いと思われる。

調整 石鏃はすべて両面調整が施されている。第17図 - 1はおおまかな調整で、不規則な剥離面が観察される。第20図 - 1、第157図 - 1・3は、全体的に丁寧で規則正しい剥離調整が施されている。第157図 - 2は剥離方向が若干不規則ではあるが、全体的に微細な調整である。第24図 - 1は、関部から尖頭部方向にかけておおまかな調整であるが、基部には丁寧で微細な調整が施されている。石錐の錐部とつくりが近似しており、あるいは石錐の可能性も考えられる。

大きさ 完形品を対象とする。長さは最大で5.5cm、最小2.5cm、平均値は3.57cmである。幅は最大で1.7cm、最小で0.4cm、平均値は1.4cmである。厚さは最大で1.2cm、最小で0.4cm、平均値は0.7cmである。重さは最大で4.1g、最小で0.5g、平均値は2.5gである。

石材 すべて珪質頁岩である。

B類 石槍（第24図 - 2・3、51図 - 3、88図 - 1、157図 - 4～6）

石槍は7点出土した。完形品4点、欠損品3点である。

形態 第88図 - 1はいわゆる柳葉形を呈し、幅広・厚手である。第51図 - 3は柳葉形に近く、基部の一部分を欠損していると思われる。細身・薄手である。第24図 - 2は基底部形態が円基で、幅広・薄手である。第24図 - 3は基部側縁にそれぞれ対称的に、2箇所ずつ（合計4箇所）のノッチが加えられている。幅広・薄手である。第157図 - 4は尖頭部と基部の一部を欠損している。両面には加熱による焼けはじけの痕跡が観察される。第157図 - 6・5は尖頭部と基部両方を欠損している。

調整 石槍はすべて両面調整が施されている。第88図 - 1、第157図 - 5の両側縁には、微細は剥離調整が施されているが、両面の調整はおおまかである。その他は、入念な調整が両面全体に施され、剥離方向も規則的である。

大きさ 完形品を対象とする。長さは最大で10.4cm、最小で8cmを測り、平均値は9.65cmである。幅は最大で3.7cm、最小で2.7cm、平均値は3.28cmである。厚さは最大で1.3cm、最小で0.7cmを測り、平均値は0.95cmである。重さは最大で47.7g、最小で23.8gを測り、平均値は34.0gである。

C類 石錐（第30図 - 1、157図 - 7・8、158図 - 1・2）

石錐は5点出土した。形態から次のように分類した。

類 つまみ状の頭部を作出しているもの（第157図 - 7・8、158図 - 1）

類 頭部を欠損しているもの（第30図 - 1、158図 - 2）

類 3点出土した。第157図 - 7の錐部には、磨耗痕が観察される。第158図 - 1は錐部から器体中央にかけて一側縁が抉られ、その片面に丁寧な調整が施されている。あるいは、スクレイパーとして使用された可能性も考えられる。第157図 - 8は錐部先端に若干の両面調整を施しており、磨耗痕が観察される。

類 2点出土した。第30図 - 1は錐部に丁寧な調整が施されているが、錐部以外の部位には主要剥離面を残している。また、錐部先端に磨耗痕が観察される。第158図 - 2は細長い棒状の形状を呈している。錐部には丁寧な調整が施されている。

D類 石匙（第24図 - 6、158図 - 3～6）

石匙は5点出土した。つまみ部と刃部との関係から、縦形石匙（類）と横形石匙（類）に分類した。

類 縦形のもの。4点出土し、先端部の平面形態から、先端部が平坦となるもの(第24図 - 6) 先端部が斜行しながら先細となるもの(第158図 - 6) 先端部が丸みをもつもの(第158図 - 3) に細分することができる。第24図 - 6の腹面には全面に丁寧な平行細部調整が施され、側縁にはさらに微細な極浅形細部調整が施されている。背面は、右側縁及びつまみ部に微細な調整が施されているのみで、他は平坦な主要剥離面をそのまま残している。第158図 - 6の腹面は、つまみ部から刃部にかけて丁寧な調整が施されている。腹面左刃部に原石面が観察される。背面は平坦な主要剥離面が残存しているが、刃部及び側縁には微細な極浅細部調整が施されている。3は、両面に主要剥離面を残存している。腹面のつまみ部から刃部にかけて、また、背面のつまみ部と右側縁に浅形細部調整が施されている。背面右刃部寄りにバルブが観察される。5は、刃部の一部が欠損している。残存部分から推測して、平坦なものか、斜行しながら先細となるものと考えられる。両面ともに、つまみ部から刃部にかけて微細な調整が施されている。刃部には擦痕が観察される。

類 横形のもの。1点出土した。4は両面に主要剥離面が残存している。腹面にはつまみ部から左右側縁にかけて丁寧な極浅形細部調整が、刃部には浅形細部調整が施されている。刃部角は52°とやや急傾斜である。背面は、左つまみ部と側縁に丁寧な調整が施されている。磨耗痕や擦痕などの使用痕は観察できない。

これら5点の石質は、すべて珪質頁岩である。

E類 石筥(第24図 - 4・5、25図 - 1、53図 - 1、59図 - 1、158図 - 7~10、159図1~6) 15点出土した。完形品は12点、欠損品は3点である。欠損品は刃部欠損が1点、基部欠損が2点である。

形態 平面形は基部が幅狭で三角形ないし台形状を呈するもの() 基部から刃部への開きが大きいばち形を呈するもの()がある。さらに断面形は、凸レンズ状で湾曲の比較的強いもの(a) 湾曲の度合が弱く偏平気味のもの(b) 片面が平坦で他方の面が盛りあがっているもの(c)がある。平面形と断面形から分類すると、

a型 3点(第53図 - 1、159図 - 1・2)

b型 5点(第24図 - 4、59図 - 1、158図 - 8、159図 - 3・5)

c型 2点(第158図 - 10、159図 - 4) a型 1点(第24図 - 5)

b型 2点(第25図 - 1、158図 - 7)

不明 2点(第158図 - 9、159図 - 6)

となる。第159図 - 4は基部欠損ではあるが、残存部分から、c型に区分した。

大きさ 完形品11点を対象とした。長さは最大で9.5cm、最小で2.2cmを測り、平均値は5.

98cmである。幅は最大で4.3cm、最小で1.9cmを測り、平均値は3.12cmである。厚さは最大で1.9cm、最小で0.6cmを測り、平均値は1.11cmである。重さは最大で65.0g、最小で2.3gを測り、平均値で24.6gである。

調整 一般的に両面調整が多い。両面の調整状態から、両面がほぼ全面調整のもの（第24図 - 4・5、第25図 - 1、第53図 - 1、第59図 - 1、第158図 - 7・8・9）片面が全面調整で他方の面が縁辺のみ調整されているもの（第158図 - 10、第159図 - 3・4・5・6）片面が縁辺のみ調整され、他方の面が主要剥離面を残存させているもの（第159図 - 1・2）に分類できる。第24図 - 4・5、25図 - 1、158図 - 7はとりわけ丁寧な調整が施されている。第159図 - 2の片面には、刃部に原石面を残存させている。第159図 - 1の背面基部にバルブが観察される。

刃部 刃部調整は両面調整8点、片面調整4点である。第158図 - 1は、背面の刃部が極浅形調整となっている。第159図 - 5は、背面刃部の一部に調整が施されているが、おおまかな調整である。刃部角は最大で78°、最小で30°を計測し、平均値は52°である。（第155図）

石材 第53図 - 1、59図 - 1、159図 - 1は頁岩、その他はすべて珪質頁岩である。

F類 不定形石器（第159図 - 7・8、第160、161、162、163、164、165図）

ここでは不整な剥片石器を「不定形石器」として一括して取りあげた。調整の状況によって、連続した調整が加えられているもので、いわゆるスクレイパー類（類）定形的な刃部をもたないもの及び極浅形調整がみられるもの（類）使用痕のみられるもの（類）に分類できる。また、類はさらに調整の度合いによって、 $\frac{1}{2}$ 以上の調整が施されているもの（a） $\frac{1}{2}$ 以下の調整が施されているもの（b）剥片の一部にノッチ状の調整が施されているもの（c）に分類できる。

a類 $\frac{1}{2}$ 以上の調整が施されているもの、9点。第160図 - 1、159図 - 8は、ほぼ片面の全縁辺部に丁寧に調整が施されている。第160図 - 2は縦長の剥片を素材とし、上端部を欠損している。縁辺部には微細な調整が施されている。第160図 - 6は片面の側縁に丁寧な調整が施され、他方の面は主要剥離面を残存させている。上端部は欠損しているが、残存部から石匙の可能性も考えられる。第160図 - 10は縦長の剥片を素材とし、上下端部を欠損している。両面の側縁にはやや粗雑な調整が施されている。

石質は珪質頁岩が7点、頁岩が1点、鉄石英が1点である。

b類 $\frac{1}{2}$ 以下の調整が施されているもの、28点である。両面の側縁に調整が施されているものが1点（第160図 - 3）で、他は、片面の側縁に調整が施されている。とりわけ、第160図 - 4・5・7、第161図 - 1・2は丁寧な調整である。これに対して第161図 - 3は比較のおおざっぱな調整である。

石質は珪質頁岩26点、頁岩2点である。

c類 剥片の一部にノッチ状の調整が施されているもので、4点出土した。第162図 - 3は、片面の一側縁に丁寧な極浅形調整が施され、その末端部にノッチ状の調整がみられる。定形にするため意図的に作出したものと思われる。第162図 - 4・5・6は、挟りの部分が比較のおおまかな調整で、しかも片面にのみ施されている。

石質は、珪質頁岩3点、頁岩1点である。

類 定形的な刃部をもたないもの及び極浅調整がみられるもの。合計23点の出土である。そのうち、定形的な刃部をもたないものが10点、極浅調整がみられる剥片が13点である。第162図 - 7・8、163図 - 2は片面の一側縁に丁寧な極浅調整が施され、他方の面は主要剥離面でバルブが残存している。第162図 - 8は、バルブ面に若干の剥離がみられる。

石質は、珪質頁岩が18点、頁岩が5点である。

類 使用痕のみられるもの。90点の出土である。両極石核、剥片を素材としたものは5点（第163図 - 4・7、第164図 - 1・3）である。第163図 - 5・6は一側縁をカッティングし、その面に使用痕がみられることから、彫器（高橋1982）とも考えられる。これらはその大きさから

長さが4.9cm以下のもの。67点。

長さが5.0cm以上5.9cm以下のもの。12点。

長さが6.0cm以上のもの。11点。

と分類できる。

石質は、珪質頁岩が65点、頁岩が21点、緑色凝灰岩が1点、玉髄質の珪質頁岩が3点である。

G類 磨製石斧（第26図 - 1、53図 - 2、第166、167図、168図 - 1・2・5）

39点の出土である。全体的に定角式磨製石斧に属するものが多い。器体の研磨、剥離、敲打の痕跡状況により、次のように細分した。

類 全面研磨のもので、剥離、敲打の痕跡が完全に磨消されているもの。

類 全面研磨のもので、剥離、敲打の痕跡が比較的にみられるもの。

類 剥離、敲打の痕跡を主体とするもの。

類 剥離痕を主体とするもの。

類 偏平片刃石斧に属するもの。

類 16点の出土である。すべて遺構外である。定角式磨製石斧に属するものが多い。第166図 - 6は片刃で、全面に線条痕がみられる。アツズ的機能をもつものと思われる。

類 遺構内1点、遺構外11点の出土である。第166図 - 4・8は剥離痕が器体主面及び側縁にみられ、十分な研磨が施されなかったものと思われる。第166図 - 5・9・10、第167図 - 1

は刃部に敲打痕及び剥離痕が観察され、器体の使用によって形成されたものと思われる。

類 遺構内1点、遺構外6点で、合計7点の出土である。第167図 - 4・7・8は比較的厚さがあり、石斧の形状に近い段階のものである。石斧は、「粗割」、「調整剥離」、「敲打」、「研磨」の製作工程を経て作出されるが、第167図 - 4・7・8は「敲打」の段階と思われる。第167図 - 6は欠損で、敲打痕がほぼ全面に観察され、主面の一部が研磨されている。

類 2点出土している。いずれも製作工程の「粗割」の段階である。第168図 - 1・2は、主面的一方に原石面を残存している。1は石斧としての形状をまだなしていない。

類 1点(第168図 - 5)で、遺構外の出土である。刃部が欠損し、おおまかな剥離痕が残存している。主面、側面ともに線条痕が観察される。この種の石斧は、弥生時代に特徴的に出土するもので、弥生時代前葉の二枚橋式期から後葉の念仏間式期に至る時期に使用されている(村越1988)。

刃部使用痕 円刃及び円刃に近いものが10点、直刃及び直刃に近いものが6点である。また、両刃が大部分で、片刃は2点のみである。使用痕跡としては、第166図 - 9・10、第167図 - 1が刃部先端に剥離痕及び敲打痕を残し潰れている。全体的に刃部の両側端に小さい剥離を有するものが多い。

折損、再利用、接合

折損部分は、刃部寄りが9点、基部寄りが8点である。やや斜位の折損が比較的多い。また、第26図 - 1、166図 - 7、167図 - 2・3・6は再利用していると思われる。第167図 - 2は基部側面に、第26図 - 1は両主面中央部に敲打痕がそれぞれ観察される。接合は、第26図 - 1の1点である。

石材 閃緑岩19点、緑色細粒凝灰岩9点、頁岩4点、安山岩3点、凝灰岩2点、粘板岩1点である。

H類 打製石斧(第168図 - 4)

1点で、遺構外の出土である。側縁の $\frac{3}{4}$ を打ち欠き刃部を作出している。偏平な礫を素材にしていると思われ、両面ともに自然面を残存している。側縁の一部に敲打痕が観察され、「たたく」機能を合わせもった可能性もある。大きさは、長さ17.7cm、幅7.8cm、厚さ3.4cm、重さ780gである。

類 石錘(第168図 - 8)

1点の出土である。隅丸方形の偏平な礫を素材としている。長軸の一側縁部を打ち欠いて抉りを作成している。抉りは両面からの打ち欠きで形成されている。大きさは、長さ9.9cm、幅7.

2cm、厚さ3.0cm、重さは342gである。

J類 **敲磨器類** (第169、170、171、172、173図、174図 - 1・4・5)

磨(擦)痕、敲打痕が器面に残された礫石器をここで取り扱う。使用痕に主眼を置いて、次のように分類した。

類 主要痕跡が磨(擦)痕のもの(第169、170図、171図 - 1・2・3・5)

類 主要痕跡が敲打痕のもの(第171図 - 4・6・7・8、172図 - 1・2)

類 主要痕跡が凹みのもの(第172図 - 3～6)

類 磨(擦)痕と敲打痕をともに有するもの(第173図、174図 - 1)

類 主要痕跡が磨(擦)痕のもの。使用痕としては、全体的に滑らかな磨痕とザラザラした擦痕がある。形態から7つに細分した。

(a) 楕円形及びその形状に近似のもの。29点出土した。遺構内8点、遺構外21点である。また、完形品26点、欠損品3点である。さらに、使用箇所をみると、1箇所のもの14点、2箇所のもの14点、3箇所以上のもので1点となっている。第169図 - 1・2・3・5・6は1側面のまた、第169図 - 7、第170図 - 1・5は2側面の使用頻度が高いために、円礫の側縁の形状が変化したと考えられる。第170図 - 5は器体中央部が折れており、接合できたものである。第41図 - 4は全体的に加熱によるヤケがみられ、一部剥離している。第93図 - 2、第169図 - 4・7は、器体側面に磨(擦)痕とともに剥離痕がみられる。

(b) 隅丸方形及びその形状に近似するもの。4点出土した。すべて遺構外である。また、完形品3点、欠損品1点である。使用痕が1箇所のもの1点、2箇所のもの2点、3箇所以上が1点で、第170図 - 3・4は剥離痕が観察される。

(c) 卵形のもの。4点出土した。遺構内1点、遺構外3点である。すべて完形品である。第42図 - 1は、器体約 $\frac{1}{3}$ 程度の剥離痕がみられるが、スス状炭化物が付着し、加熱によるハジケの可能性も考えられる。

(d) 円形のもの。第171図 - 3が1点出土した。小さな円礫で、遺構外の出土である。器体の約半分程度が欠損し、その欠損面が擦られている。

(e) 棒状のもの及びその形状に近似のもの。3点出土した。すべて遺構外の出土である。完形品1点、欠損品2点である。第171図 - 1は欠損しているが、断面形が三角形状を呈し、いわゆる三角柱状磨石と思われる。1稜を使用し、その使用面はザラザラしている。

(f) 三角形及びその形状に近似のもの。4点出土した。遺構内2点、遺構外2点である。また、完形品2点、欠損品2点で、いずれも側面に磨(擦)痕がある。

(g) その他。7点出土し、不整形4点、欠損により形状が不明瞭なもの3点である。また、

使用痕が1箇所のもの6点、3箇所以上のものは1点である。

類 主要痕跡が敲打痕のもの。33点の出土である。素材の形状から次のように細分した。

(a) 偏平なもの。

(b) 球状・卵状のもの。

(c) 不定形なもの。

(d) 欠損により形状不明のもの。

(a) 完形品4点、欠損品1点。すべて遺構外である。大部分は側縁に敲打痕がみられる。第171図-6は、側縁が敲打によって形成された凸凹が著しく、使用頻度が高いと思われる。

(b) 完形品17点、欠損品2点。遺構内8点、遺構外11点である。全体的に側縁に敲打痕がみられる。第50図-1、第172図-1は器体全面が敲打されている。

(c) 三角形、長方形、棒状に近い形状のものである。完形品6点、欠損品1点。遺構内2点、遺構外5点である。全体的に敲打痕の面積は小さい。

(d) すべて遺構外で、2点の出土である。

類の石材は、安山岩24点、チャート4点、砂岩3点、玉髓1点、粘板岩1点である。

類 主要痕跡が凹みのもの。

7点の出土である。明瞭な凹みをもつ石器で、敲打痕をもつ石器と区別した。使用面の箇所より細文した

(a) 1面使用のもの。

(b) 2面使用のもの。

(c) 3面以上使用のもの。

(a) 2点出土し、すべて遺構外である。敲打痕もみられる。

(b) 遺構内2点、遺構外2点。完形品3点、欠損品1点。第172図-4は敲打痕、剥離痕がみられる。

(c) 第172図-5、1点の出土で、遺構外である。6面使用され、各面の凹みは上下側縁が1個ずつで、他面は2個ずつ、長軸方向に存在している。

類の石材は、安山岩6点、凝灰岩1点である。

類 磨(擦)痕と敲打痕を有するもの。29点出土した。磨(擦)痕を中心にして次のように細分した。

(a) 1面が磨(擦)痕で、敲打痕を有するもの。

(b) 2面が磨(擦)痕で、敲打痕を有するもの。

(c) 3面以上が磨(擦)痕で、敲打痕を有するもの。

(a) 完形品11点、欠損品5点。遺構内4点、遺構外12点である。形状からみれば、偏平のも

の7点、球状・卵形状のもの4点、不定形のもの3点で、残り2点は欠損によって形状の不明なものである。

(b) 完形品9点、欠損品2点。遺構内4点、遺構外7点である。形状から、偏平のもの3点、卵形のもの4点、不定形のもの3点、欠損によって形状の不明なもの1点である。

(c) 2点の出土で、すべて遺構外、完形品である。形状は、備平ぎみのものと卵形に近いものである。

類の石材は、安山岩13点、チャート12点、閃緑岩3点、緑色凝灰岩1点である。

K類 石冠 (第174図 - 2・3・6)

3点出土した。すべて遺構外である。3点とも楕円形状の礫を素材としており、底面はザラザラしたすり面のものである。また、3点のうち2点は、体部を横環する溝が作出されているが、残り1点は長軸の両端に溝を作出しているだけである。すり幅は3.5~1.6cmである。大きさは、長さ15.6~11.5cm、幅は8.1~7.8cm、厚さ4.9~2.7cm、重さ964~434gである。石材は、安山岩2点、閃緑岩1点である。

L類 半円状偏平打製石器 (第31図 - 1、114図 - 1、174図 - 4・5、175図 - 1)

5点出土した。遺構内2点、遺構外3点である。一側面を打ち欠いているもの(類)と、二側面を打ち欠いているもの(類)に分類できる。

類 3点の出土である。いずれも自然礫の一側面を打ち欠いている。第175図 - 1は機能面に敲打痕が残存している。第114図 - 1は約半分程度を欠損しており、側縁から体部にかけて大幅な打ち欠きをおこなっている。

類 2点の出土である。いずれも欠損しており、板状節理でできた素材の両側面を打ち欠いている。しかし、機能面は一側面で、その端部には擦痕が観察される。第31図 - 1は板状節理面の一方を研磨している。

大きさ 大きさは、長さ14.5~13.0cm、幅9.8~6.0cm、厚さ3.4cm~1.9cm、重さ594~231gである。

石材 すべて安山岩である。

M類 礫器 (第168図 - 6)

遺構外から1点の出土である。形態は偏平な隅丸方形を呈する。一端を打ち欠き、刃部を作出している。大きさは、長さ8.5cm、幅7.4cm、厚さ2.8cm、重さ264gを測る。石材はチャートである。

N類 石皿 (第175図 - 2 ~ 5、176図 - 1)

15点出土した。遺構内 8 点、遺構外 7 点である。縁取りの有無、利用面の素材等により次のように区分した。

類 白然礫の平坦面を利用しているもの。

類 板状節理による面を利用しているもの。(第42図 - 5)

類 縁取りのあるもの。(第67図 - 6、175図 - 3)

類 12点出土した。敲打痕のあるもの 7 点、磨(擦)痕のあるもの 3 点、敲打痕、磨(擦)痕両方を有するもの 2 点である。第175図 - 5 は、すりによる凹みが機能面中央部にできている。

類 1 点出土した。平盤状で面が研磨されている。

類 2 点出土した。いずれも欠損である。第67図 - 6 は若干盛りあがった縁取りである。ほぼ全面に研磨された痕跡を有している。第175図 - 3 は明瞭な縁取りで、敲打痕が観察される。

石皿の石材はすべて安山岩である。

O類 三角形岩版 (第168図 - 9)

1 点の出土である。平面形態は三角形を呈している。表裏面には文様がなく、擦痕が観察される。器面は比較的つやつやしている。大きさは長さ3.4cm、幅3.0cm、厚さ1.0cm、重さ10gを測る。石材はチャートである。

P類 有孔石製品 (第168図 - 3)

遺構外から 1 点の出土である。平面形は隅丸の長方形であり、断面形は正方形に近い形状を呈する。長軸の両端寄りで、長軸と直交する方向に 2 箇所貫通する穿孔が施されているが、その内部には擦痕が認められる。穿孔の大きさは、幅 7 ~ 8 mm、中央部分が 5 mm程度である。また、長軸方向の一面に深さ 6 mm程の穿孔が、長軸に対して斜位に施されている。その内部は、円錐状の擦痕が認められる。大きさは、長さ11.3cm、幅2.3cm、厚さ2.4cm、重さ88gで、石材は頁岩である。

Q類 棒状石製品 (第176図 - 2・3)

2 点で、いずれも遺構外の出土である。3 は平面形が棒状、断面形が楕円形を呈する。顕著な擦痕、敲打痕等の使用痕はみられない。大きさは、長さ23.2cm、幅4.5cm、厚さ4.5cmを測る。石材は凝灰岩である。2 は欠損品で、平面形は棒状、断面形は三角形を呈する。3 と同様に顕著な使用痕は認められない。大きさは、長さ(17.8)cm、幅8.4cm、厚さ7.0cm、重さ(1400)gを測る。

る。石材は流紋岩である。

R類 石刀 (第176図 - 4)

遺構外より1点出土した。欠損及び剥落がみられる。背に相当する部分は平坦で、刃に相当する部分は大きく剥落しているが、残存部分から断面はV字状を呈している。剥離面を除いて、全体的に擦痕が観察される。石材は粘板岩である。

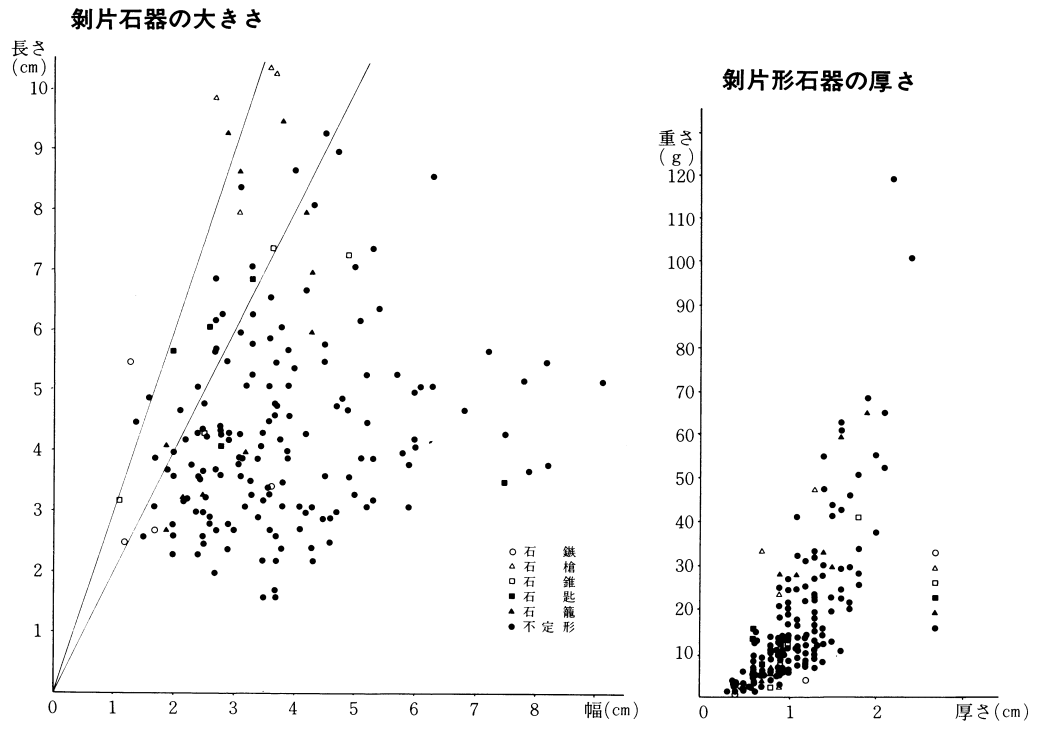
(奈良)

第3表遺構外出土石器計測表

出土地点	層	最大計測値				石質	分類	備考
		長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)			
A F-9	II	24	43	8	6.1	真	F	
B-4	II	30	25	4	2.8	真	F	
D-イ	I	38	82	14	47.5	珪	F	
K-ア	I	43	42	11	16.8	珪	F	
M-21	I	40	39	14	16.7	珪	F	
O-1	II	90	47	21	52.4	珪	F	
O-1	II	57	72	14	55.2	珪	F	
A B-15	I	30	42	11	11.0	珪	F	
A A-7	II	25	46	12	8.2	珪	F	
B-12	I	31	59	15	23.4	珪	F	
C-ウ	II	41	28	9	9.9	珪	F	
C-ウ	II	37	19	7	5.6	珪	F	
C-ウ	II	35	38	9	12.2	真	F	
C-13	I	33	36	10	8.6	珪	F	
F-2	II	52	78	11	41.0	真	F	
F-ウ	I	22	43	10	6.8	真	F	
O-1	II	55	82	19	68.3	珪	F	
O-1	II	30	47	13	17.0	珪	F	
A F-9	II	45	52	13	32.3	珪	F	
C-12	I	34	36	9	9.5	珪	F	
I-イ	II	55	37	13	9.2	真	F	
A A-6	II	34	36	5	6.0	珪	F	
A C-6	II	36	20	9	5.8	真	F	
A F-8	II	39	31	11	7.7	珪	F	
O-1	II	39	53	20	31.7	珪	F	
O-イ	I	33	50	9	18.3	珪	F	
O-1	II	43	75	20	55.2	珪	F	
O-1	II	31	43	6	5.2	珪	F	
D-ア	I	58	28	10	16.8	珪	F	
B O-20	IV	39	51	6	4.5	珪	F	
G-1	Va	36	31	13	13.2	珪	F	
I-1	II	32	53	16	24.4	珪	F	
C-イ	II	27	41	13	10.9	真	F	
K-ア	II	38	59	13	22.6	真	F	
M-14	I	32	22	7	5.7	珪	F	
M-21	I	29	45	8	11.3	珪	F	
K-ア	I	51	39	18	28.3	真	F	
A F-9	II	32	35	11	9.2	珪	F	
I-ア	Va	45	36	9	12.6	真	F	
J-1	I	29	46	6	8.7	緑凝	F	
J-1	I	42	29	9	8.2	珪	F	
J-1	I	62	27	11	10.3	真	F	
F-13	I	29	26	7	5.7	珪	F	
C-12	I	22	35	9	6.8	珪	F	
F-1	Va	36	49	11	13.7	珪	F	
K-0	I	43	24	10	6.4	真	F	
A B-7	II	28	20	8	3.2	珪	F	
A B-16	I	23	20	5	2.3	珪	F	
A B-15	I	22	37	4	2.5	真	F	

出土地点	層	最大計測値				石質	分類	備考
		長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)			
A F-8	II	26	15	4	1.3	珪	F	
A F-9	II	16	37	8	4.4	頁	F	
C-1	I	24	29	6	3.5	珪	F	
G-ウ	II	45	14	8	6.7	頁	F	
J-1	I	33	25	6	3.9	珪	F	
L-0	I	28	29	4	2.2	珪	F	
A C-8	II	16	35	5	3.2	珪	F	
A B-16	I	17	37	7	3.1	珪	F	
B M-20	Va	41	34	12	14.4	頁	F	
H-13	I	49	48	17	30.1	頁	F	
O-1	II	53	54	10	27.4	珪	F	
O-1	II	57	27	17	20.5	珪	F	
O-1	II	59	36	13	23.9	珪	F	
A-13	I	37	25	6	5.2	頁	F	
A D-8	II	39	31	8	11.6	珪	F	
S-ア	II	28	26	6	5.9	珪	F	
S-ア	II	54	40	9	9.6	珪	F	
B-2	II	24	38	12	8.6	珪	F	
B-ア	I	41	60	14	30.4	珪	F	
I-2	I	37	27	9	5.8	頁	F	
P-ウ	II	57	27	9	12.1	珪	F	
A B-16	I	(52)	49	28	(73)	閃	G	欠損
C L-34	I	(53)	(33)	14	(27)	緑細	G	欠損
B-12	II	(31)	24	9	(10)	頁	G	欠損
T-イ	II	(57)	39	21	(72)	緑細	G	欠損
L-イ	I	(64)	(43)	28	(93)	緑細	G	欠損
B-12	II	(85)	50	25	(178)	閃	G	欠損
B I-19	Va	(47)	54	22	(92)	緑細	G	欠損
H-イ	II	(116)	47	29	(262)	閃	G	欠損
K-ア	II	(74)	51	27	(60)	安	G	欠損
H-1	Va	(41)	35	19	(43)	緑細	G	欠損
E-10	I	(47)	33	22	(42)	頁	G	欠損
M-21	I	(60)	43	29	(102)	凝	G	欠損
A D-18	I	(65)	36	23	(72)	安	G	欠損
D-イ	I	(99)	43	29	(182)	閃	G	欠損
A B-16	I	102	25	10	49	粘	G	
B-13	I	128	97	67	1100	安	J	
A A-15	I	(71)	68	40	(285)	安	J	欠損
J-1	I	121	61	60	652	凝	J	
G-ア	Va	127	85	58	931	安	J	
A B-6	II	91	75	42	448	安	J	
M-1	II	97	65	(34)	(301)	安	J	欠損
E-3	I	100	77	32	400	安	J	
V-ウ	Va	94	61	30	252	安	J	
I-1	Va	(121)	90	53	(684)	安	J	欠損
F-2	II	99	91	49	647	凝	J	
X-イ	II	93	86	46	564	安	J	
B M-22	Va	(83)	57	50	(370)	安	J	欠損
J-ア	I	78	50	40	232	チャ	J	
E-イ	I	147	62	41	595	安	J	
G-ウ	II	(72)	56	43	(206)	安	J	欠損
G-ウ	II	(71)	50	25	(107)	砂	J	欠損
C-ウ	II	157	65	41	697	安	J	
C-ウ	II	179	81	53	1109	凝	J	
A C-6	II	116	82	44	641	安	J	
C-4	II	113	80	59	836	安	J	
D-イ	I	110	68	46	503	安	J	
O-1	II	130	70	38	383	安	J	
H-2	Va	(78)	69	46	(286)	安	J	欠損
M-イ	I	102	78	70	796	安	J	
M-イ	I	103	73	68	712	安	J	
B-14	I	113	(98)	(78)	(1200)	安	J	欠損
N-11	I	149	73	64	664	安	J	
L-ア	I	105	90	61	852	安	J	
F-2	II	75	72	46	341	安	J	
A F-8	II	75	55	41	213	チャ	J	

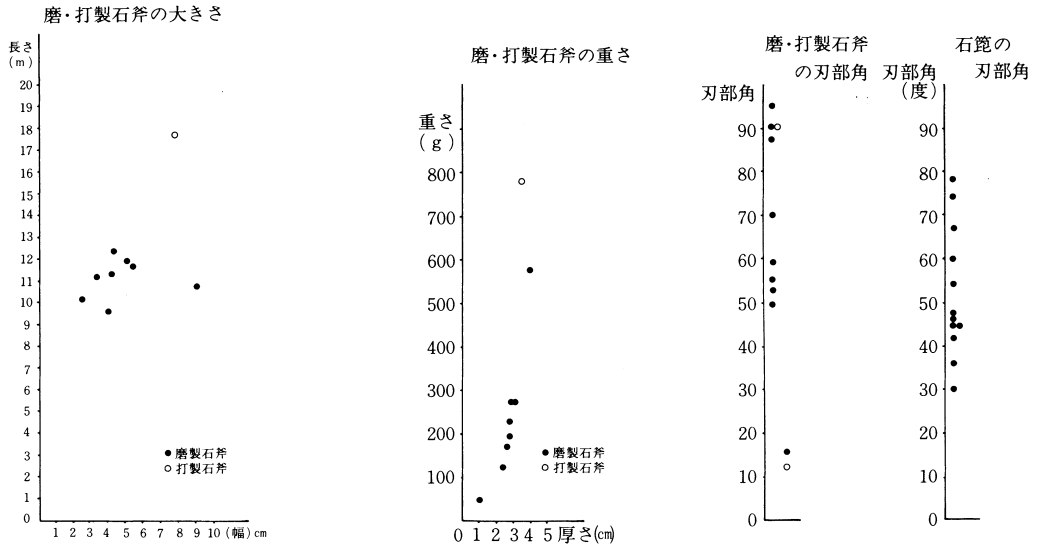
出土地点	層	最大計測値				石質	分類	備考
		長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)			
B-16	I	(83)	(66)	(36)	(238)	安	J	欠損
C-16	I	(69)	47	(34)	(129)	チャ	J	欠損
AA-15	I	(75)	87	30	(290)	安	J	欠損
I-イ	II	(78)	74	50	(408)	チャ	J	欠損
J-1	I	105	78	26	314	安	J	
BP-11	Va	110	100	38	625	安	J	
D-1	II	64	58	47	230	安	J	
D-ウ	I	154	50	32	420	安	J	
D-1	II	155	50	41	469	安	J	
AB-6	II	(64)	67	45	(320)	安	J	欠損
I-イ	II	136	91	64	966	安	J	
L-ウ	I	82	78	58	515	安	J	
I-2	I	95	88	48	608	安	J	
P-ウ	II	141	65	56	753	安	J	
E-3	I	106	82	57	698	チャ	J	
N-15	I	164	77	43	938	安	J	
V-ウ	Va	55	55	(30)	(121)	緑凝	J	欠損
C-イ	II	74	50	40	207	チャ	J	
AB-6	II	(85)	66	36	(343)	安	J	欠損
B-ア	I	110	58	35	357	安	J	
F-3	II	116	83	61	866	安	J	
J-イ	I	75	44	(42)	(223)	チャ	J	欠損
G-ウ	II	(55)	(88)	47	(394)	閃	J	欠損
M-1	II	105	69	28	207	凝	J	
Q-ア	II	297	202	61	6000	安	N	
O-ウ	I	(156)	(125)	62	(1900)	安	N	欠損



石鏃の石器傾向	珪 質 頁 岩			
石錐の石材傾向	珪 質 頁 岩			頁 岩
石匙の石材傾向	珪 質 頁 岩			
石籠の石材傾向	珪 質 頁 岩			頁 岩
石槍の石材傾向	珪 質 頁 岩			
不定形石器の石材傾向	珪 質 頁 岩			頁 岩
礫器の石材傾向	チ ャ ー ト			
石刀の石材傾向	粘 板 岩			

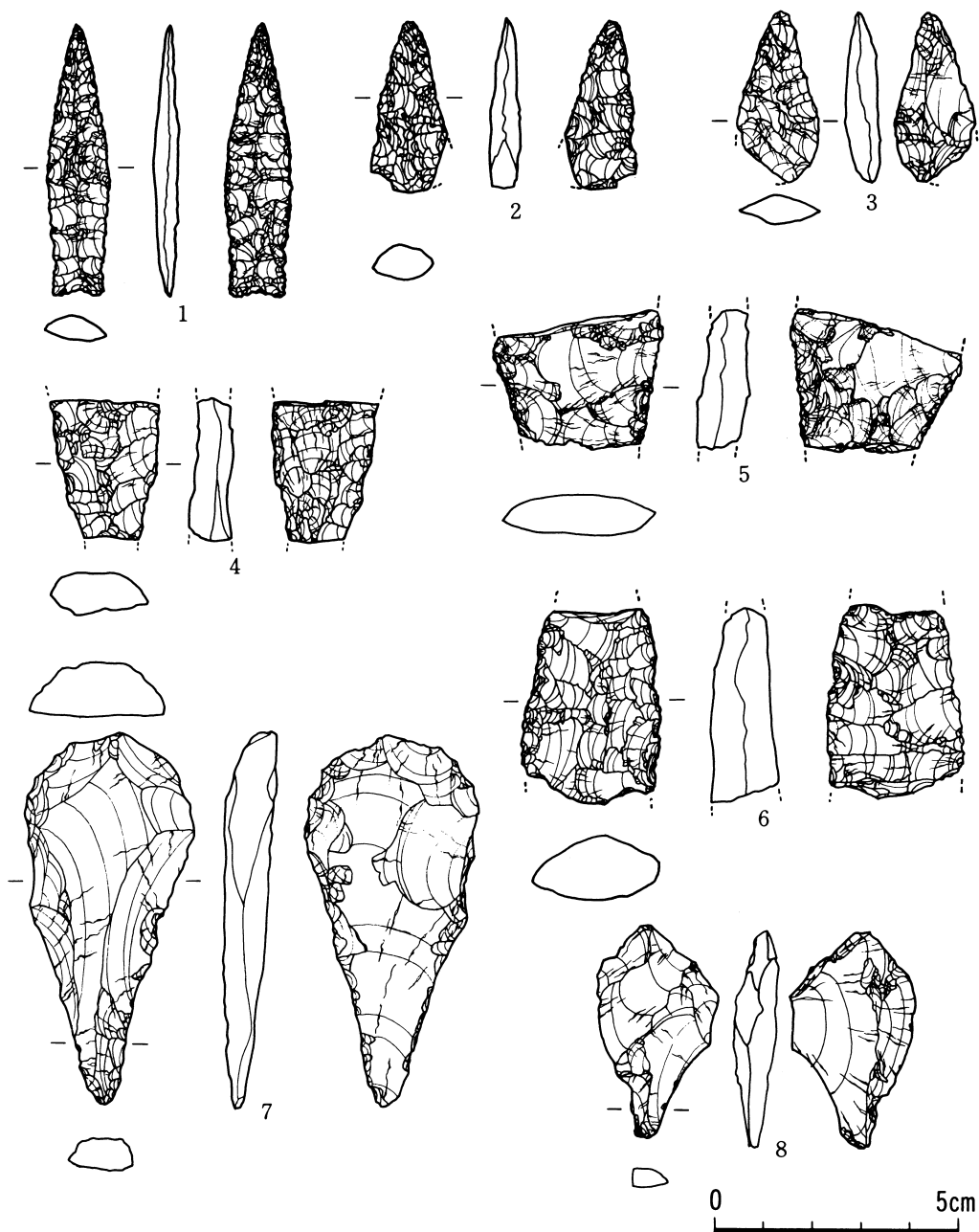
玉髄質の珪質頁岩
鉄石英
緑色凝灰岩

第155図 石器の大きさ・重さと石材傾向(1)



磨製石斧の石材傾向	閃 緑 岩	綠色細粒凝灰岩	頁岩	安山岩	凝灰岩	粘板岩	チャート
打製石斧の石材傾向	安 山 岩						
敲磨器類の石材傾向	安 山 岩	チャート	凝灰岩	閃緑岩	砂岩	粘板岩	玉髓
石錘の石材傾向	安 山 岩						
石冠の石材傾向	安 山 岩	閃 緑 岩					
半円状偏平打製石器の石材傾向	安 山 岩						
石皿の石材傾向	安 山 岩						
三角形岩板の石材傾向	チ ャ ー ト						
有孔石製品の石材傾向	頁 岩						
棒状石製品の石材傾向	凝 灰 岩	流 紋 岩					

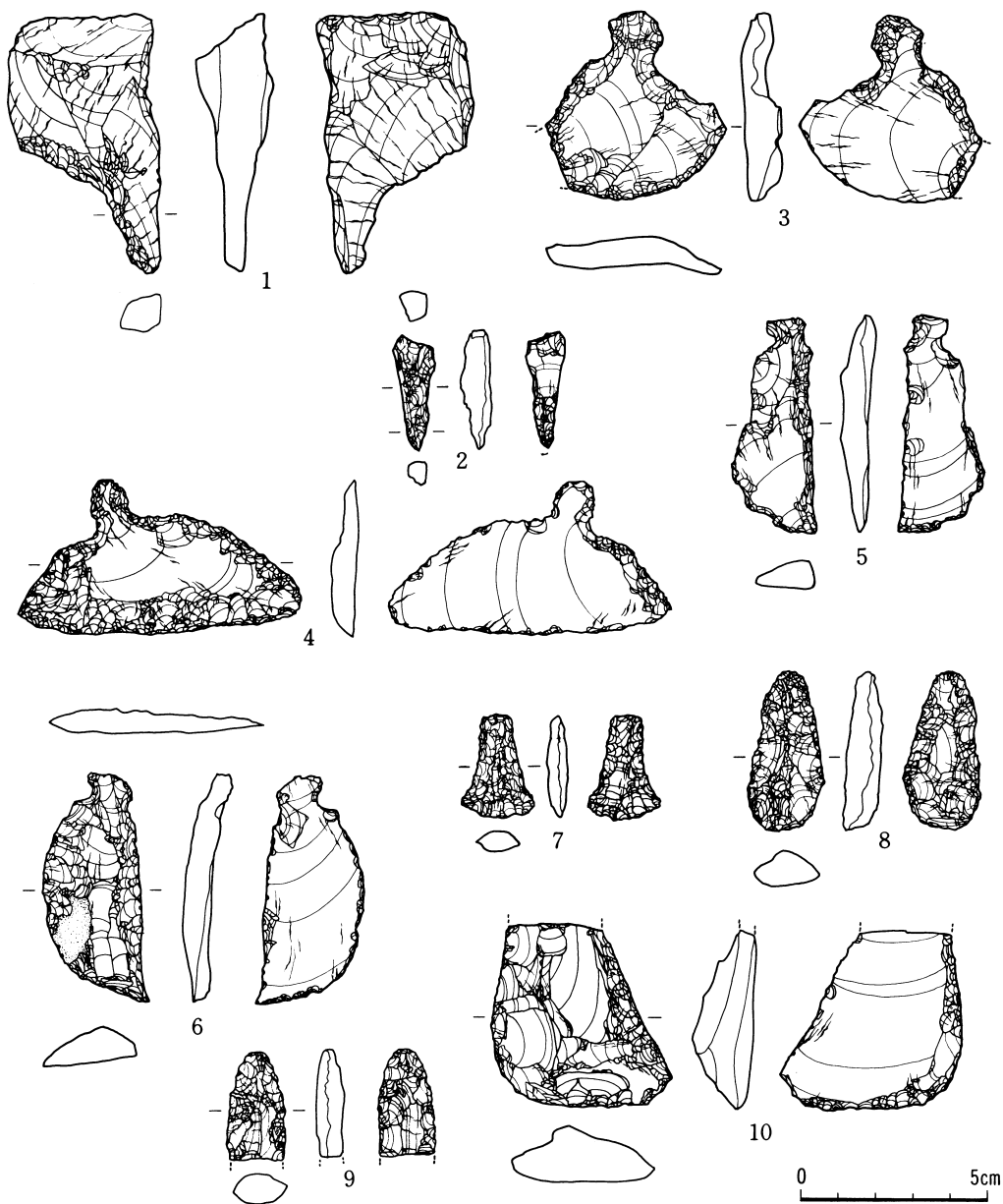
第156図 石器の大きさ・重さと石材傾向(2)



石器観察表

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)			
第157図-1	AM-10	II	55	13	5	2.8	珪	A	
第157図-2	AR-5	II	(35)	14	7	(3.0)	珪	A	欠損
第157図-3	AP-6	II	(35)	17	6	(2.8)	珪	A	欠損
第157図-4	B-3	I	(28)	22	8	(5.7)	珪	B	欠損 焼けによるハジケ
第157図-5	J-ア	II	(25)	34	9	(9.5)	珪	B	欠損
第157図-6	E-0	I	(37)	27	13	(15.8)	珪	B	欠損
第157図-7	L-0	I	74	34	10	12.4	頁	C	
第157図-8	C-ウ	II	43	25	9	7.8	珪	C	

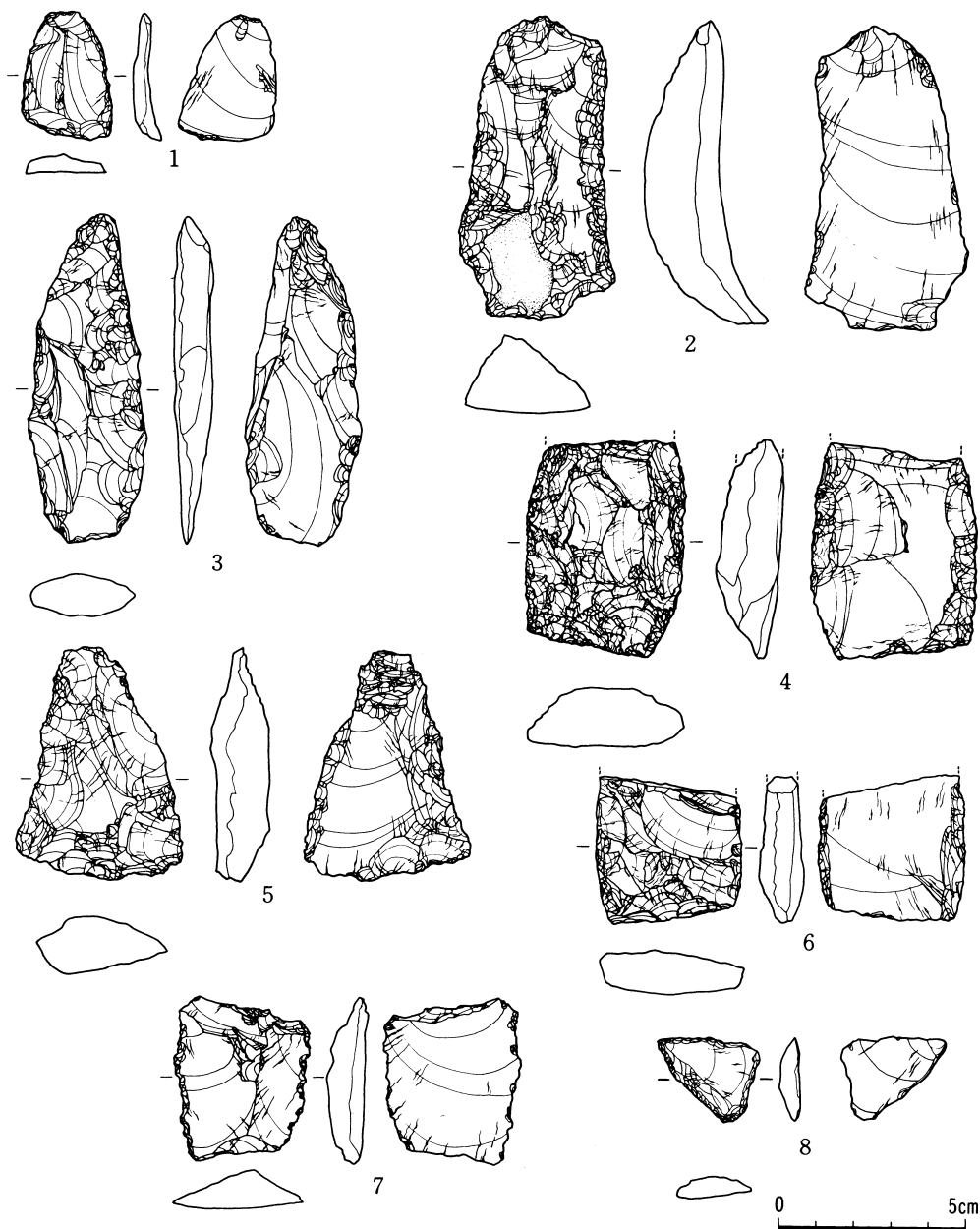
第157図 遺構外出土石器(1)



石器観察表

図 版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	備 考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)			
第158図-1	AF-9	II	73	49	18	41.0	珪	C	
第158図-2	A-13	I	32	11	8	2.4	珪	C	
第158図-3	C-13	I	48	(46)	7	(14.6)	珪	D	欠損
第158図-4	AC-18	I	40	75	6	17.5	珪	D	
第158図-5	F-2	II	57	20	7	7.6	珪	D	
第158図-6	F-2	II	61	26	9	11.9	珪	D	
第158図-7	E-ウ	II	27	19	6	2.3	珪	E	
第158図-8	H-ウ	Va	41	19	9	7.5	珪	E	
第158図-9	AF-9	II	(28)	15	8	(4.0)	珪	E	欠損
第158図-10	K-ア	I	(49)	47	16	(30.8)	珪	E	欠損

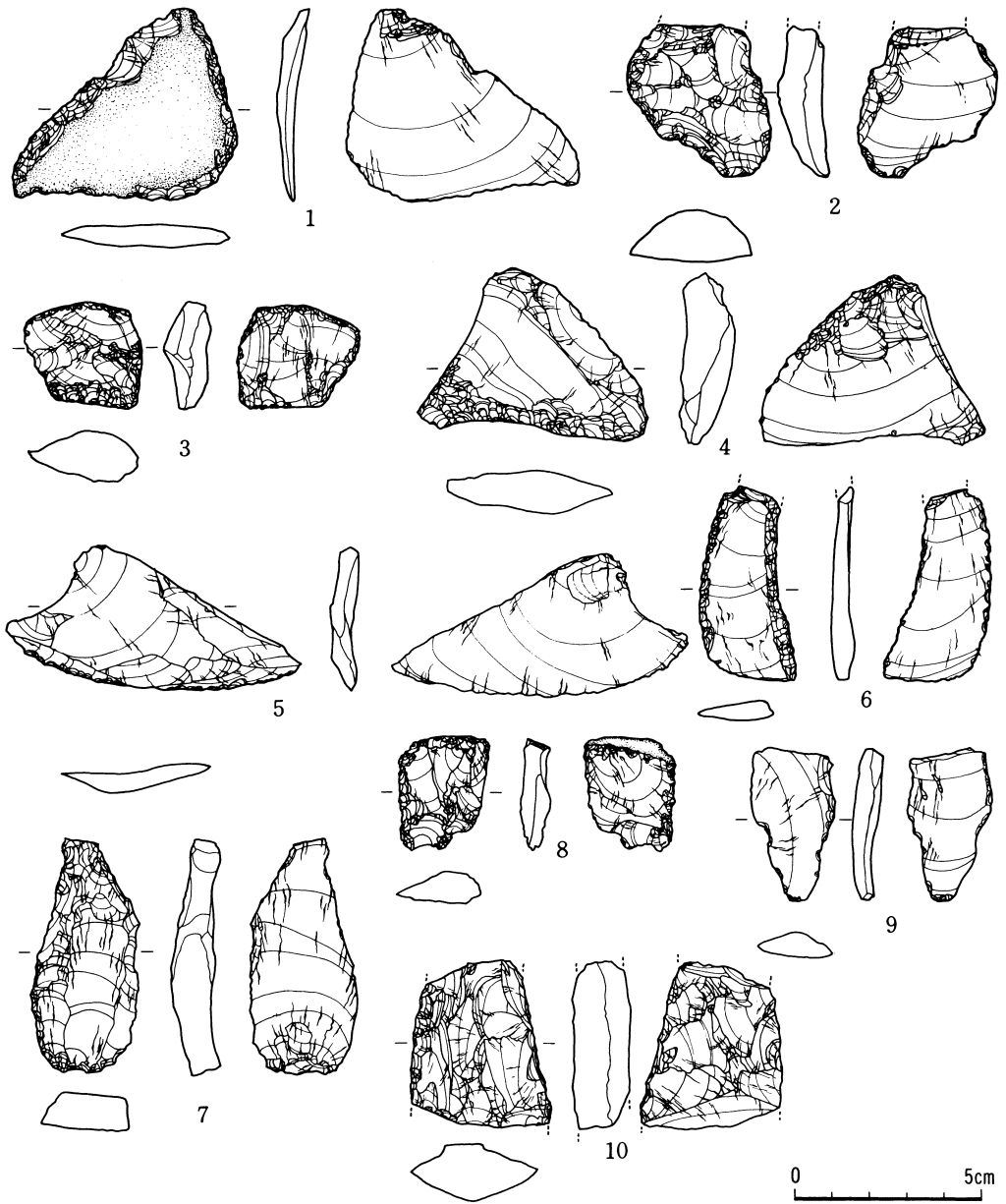
第158図 遺構外出土石器(2)



石器観察表

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)			
第159図-1	D-ウ	I	33	25	8	5.9	珪	E	
第159図-2	F-13	I	80	42	19	65.0	珪	E	
第159図-3	O-1	II	87	31	11	28.1	珪	E	
第159図-4	L-ア	I	(55)	40	15	(26.0)	眞	E	欠損
第159図-5	AG-8	II	60	43	15	29.8	珪	E	
第159図-6	B-2	II	(39)	39	11	(21.0)	珪	E	欠損
第159図-7	M-1	Va	43	35	10	13.7	珪	F	
第159図-8	C-1	I	20	27	6	2.3	珪	F	

第159図 遺構外出土石器(3)



石器観察表

図 版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	備 考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)			
第160図-1	AF-9	II	51	61	6	13.6	珪	F	
第160図-2	K-0	I	36	45	11	17.3	珪	F	
第160図-3	C-12	I	27	30	12	10.1	珪	F	
第160図-4	K-ア	II	42	60	10	21.6	珪	F	
第160図-5	C-イ	II	37	79	6	13.5	珪	F	
第160図-6	A-13	I	(52)	24	6	(6.9)	珪	F	欠損
第160図-7	C-11	I	63	28	10	20.4	頁	F	
第160図-8	AG-10	II	30	24	9	6.2	珪	F	
第160図-9	F-ウ	I	(39)	22	6	(4.5)	頁	F	欠損
第160図-10	B-1	II	(45)	36	14	(25.2)	珪	F	欠損

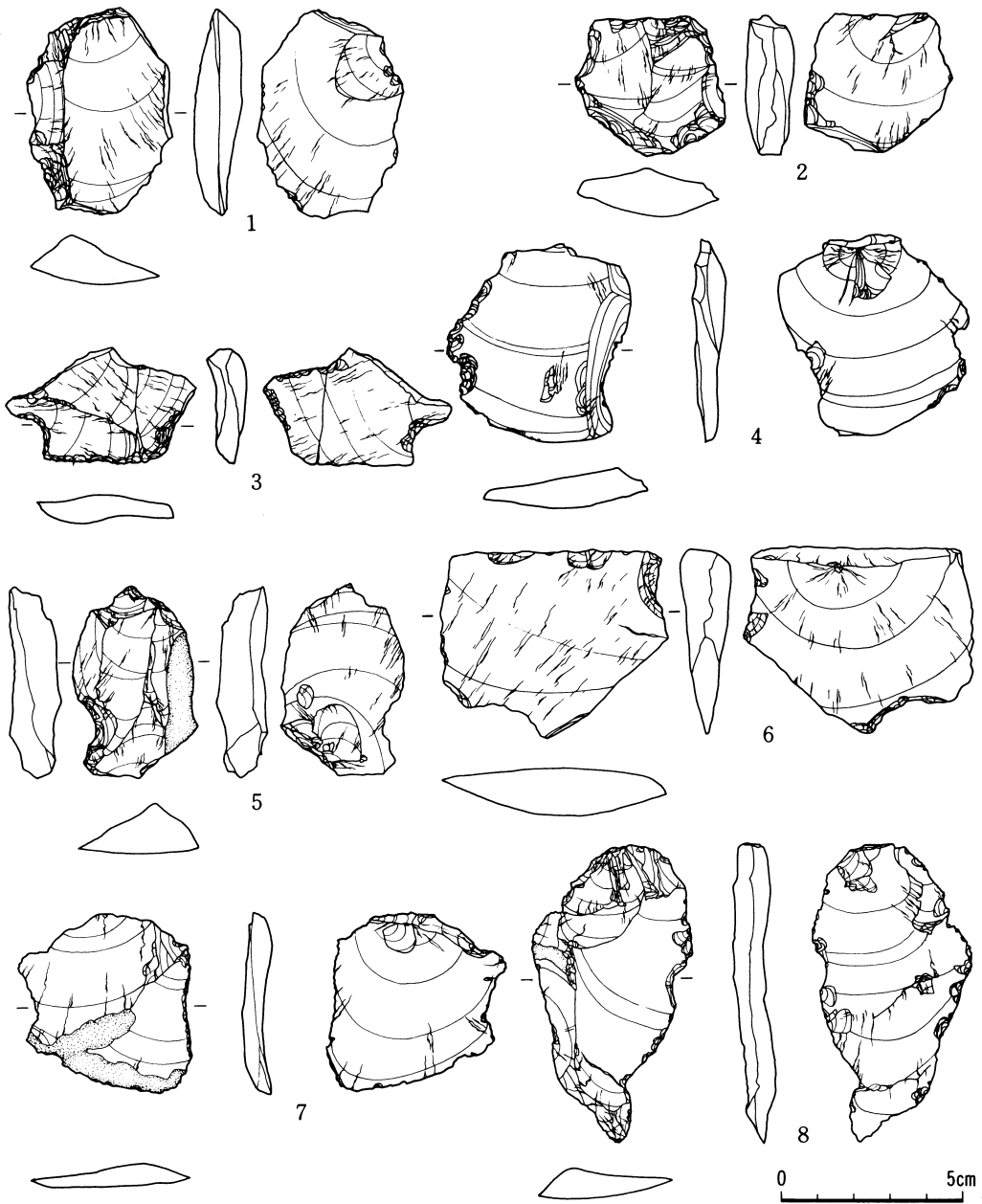
第160図 遺構外出土石器(4)



石器觀察表

図 版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	備 考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)			
第161図-1	B-2	II	51	36	18	26.1	珪	F	
第161図-2	K-ア	I	87	40	9	21.1	珪	F	
第161図-3	C-イ	II	62	91	16	60.5	珪	F	
第161図-4	B-12	II	36	24	9	6.6	珪	F	
第161図-5	AB-7	II	46	39	13	27.3	珪	F	
第161図-6	A-14	I	46	37	14	15.7	鉄石	F	
第161図-7	C-13	I	43	28	8	9.0	珪	F	
第161図-8	D-イ	I	43	29	9	11.2	珪	F	

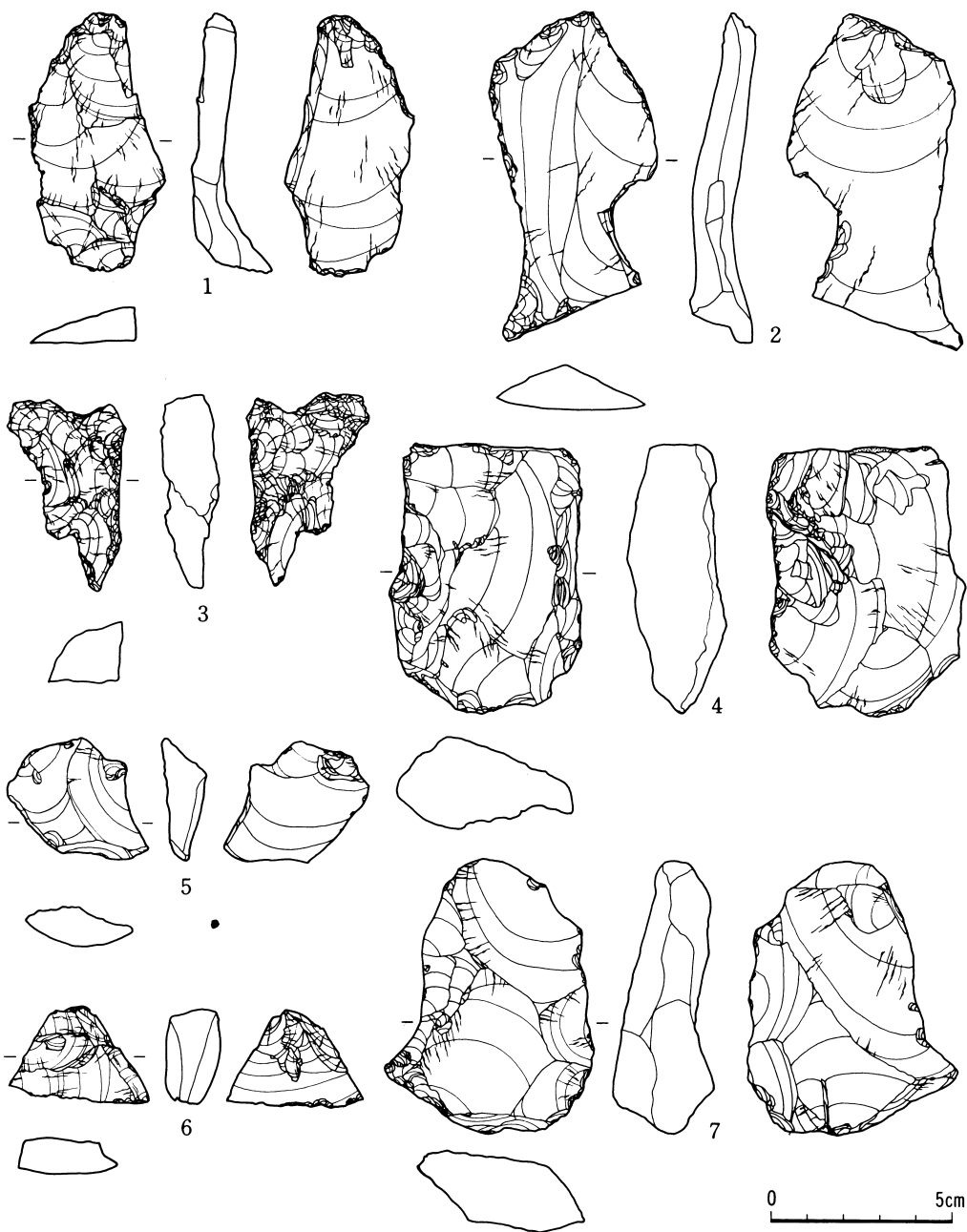
第161図 遺構外出土石器(5)



石器観察表

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)			
第162図-1	O-1	II	57	39	12	22.0	珪	F	
第162図-2	A-13	I	39	39	13	18.9	珪	F	
第162図-3	E-12	II	31	52	9	11.1	珪	F	
第162図-4	A-15	I	55	45	10	24.4	珪	F	
第162図-5	B-ア	I	53	33	13	18.2	珪	F	
第162図-6	E-3	I	51	63	13	32.9	頁	F	
第162図-7	C-14	I	48	47	6	15.1	珪	F	
第162図-8	P-ウ	II	81	43	9	24.3	珪	F	

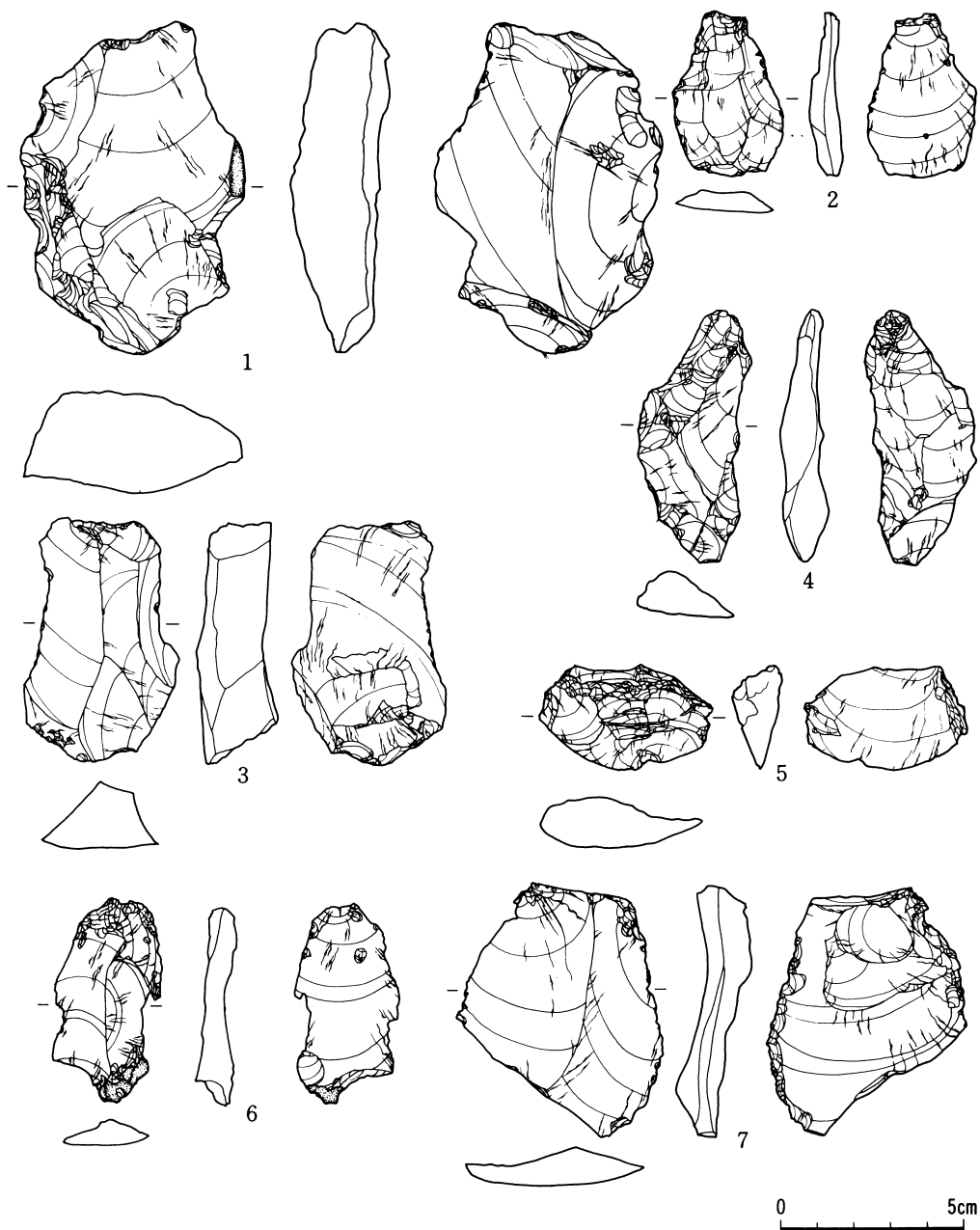
第162図 遺構外出土石器(6)



石器観察表

図 版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	備 考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)			
第163図-1	D-イ	I	71	33	13	22.5	頁	F	
第163図-2	W-ウ	II	93	45	12	25.6	頁	F	
第163図-3	B-14	I	51	32	15	19.2	珪	F	
第163図-4	O-1	II	74	53	24	100.9	珪	F	
第163図-5	J-0	I	33	33	11	10.4	珪	F	
第163図-6	F-2	II	26	37	16	10.4	珪	F	
第163図-7	O-1	II	71	50	16	63.0	珪	F	

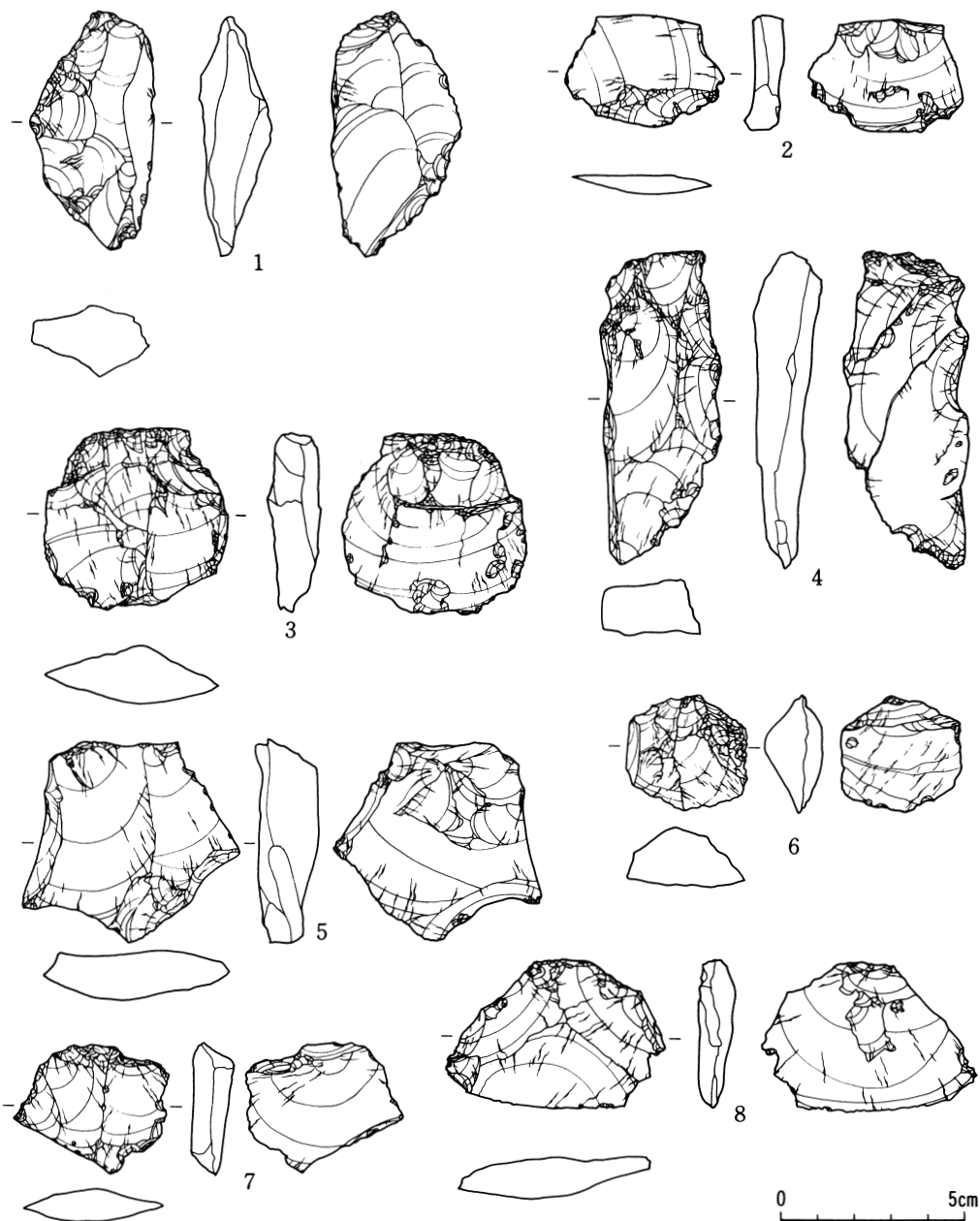
第163図 遺構外出土石器(7)



石器観察表

図 版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	備 考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)			
第164図-1	O-1	II	86	63	22	119.1	珪	F	
第164図-2	D-1	I	44	28	7	5.9	頁	F	
第164図-3	O-1	II	67	42	18	50.5	珪	F	
第164図-4	AB-15	I	69	27	10	13.7	珪	F	
第164図-5	I-1	I	43	28	13	12.4	珪	F	
第164図-6	A-15	I	55	29	8	10.5	珪	F	
第164図-7	D-イ	I	64	54	11	32.3	珪	F	

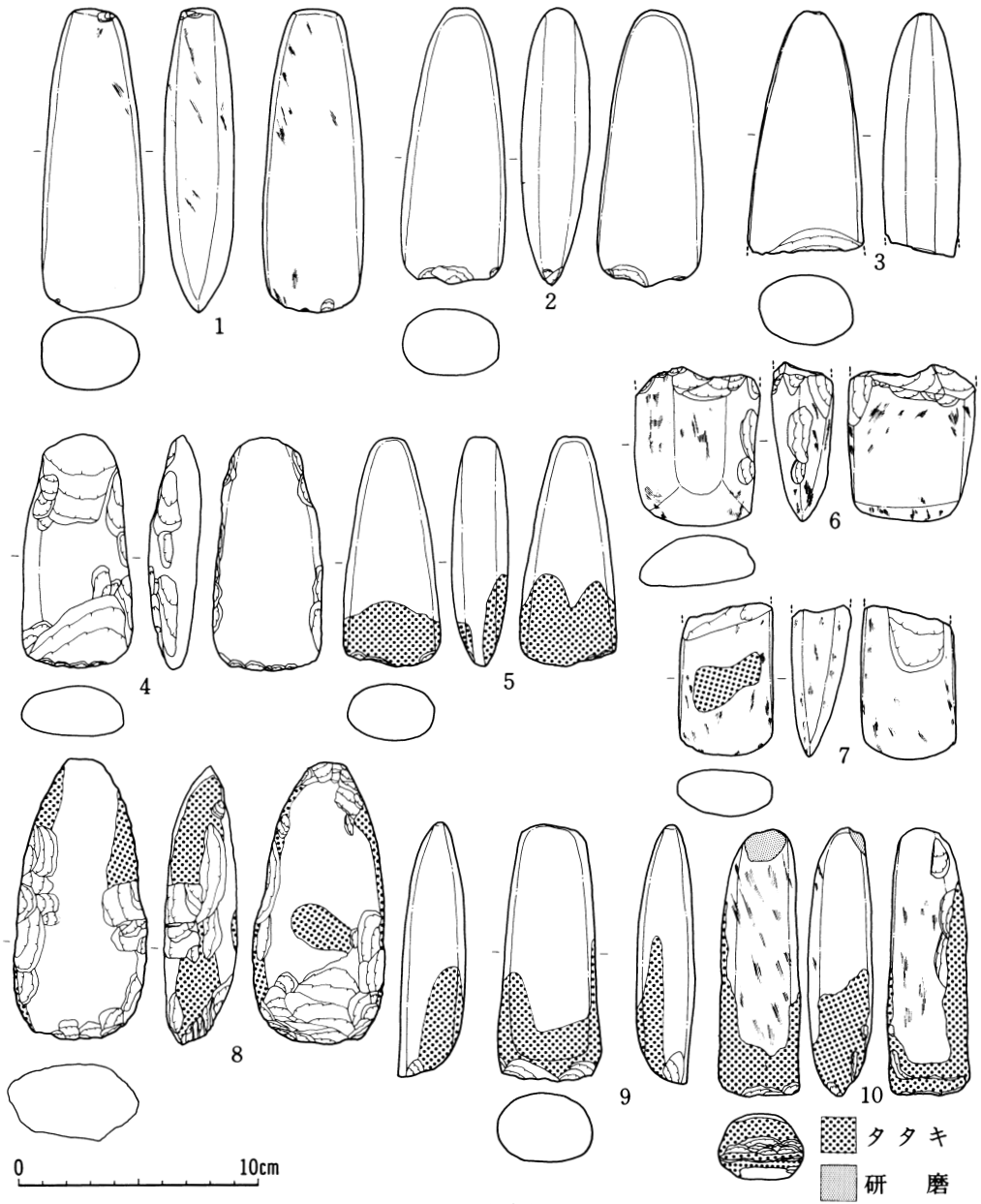
第164図 遺構外出土石器(8)



石器観察表

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)			
第165図-1	O-1	II	66	36	18	34.0	珪	F	
第165図-2	F-2	II	31	41	7	9.0	珪	F	
第165図-3	B-1	II	47	49	16	29.7	珪	F	
第165図-4	AU-8	II	84	31	17	46.1	頁	F	
第165図-5	Y-4	II	53	57	16	42.7	珪	F	
第165図-6	AD-8	II	31	32	15	12.8	珪	F	
第165図-7	B-3	I	31	38	9	12.0	珪	F	
第165図-8	M-1	Va	40	58	10	19.4	頁	F	

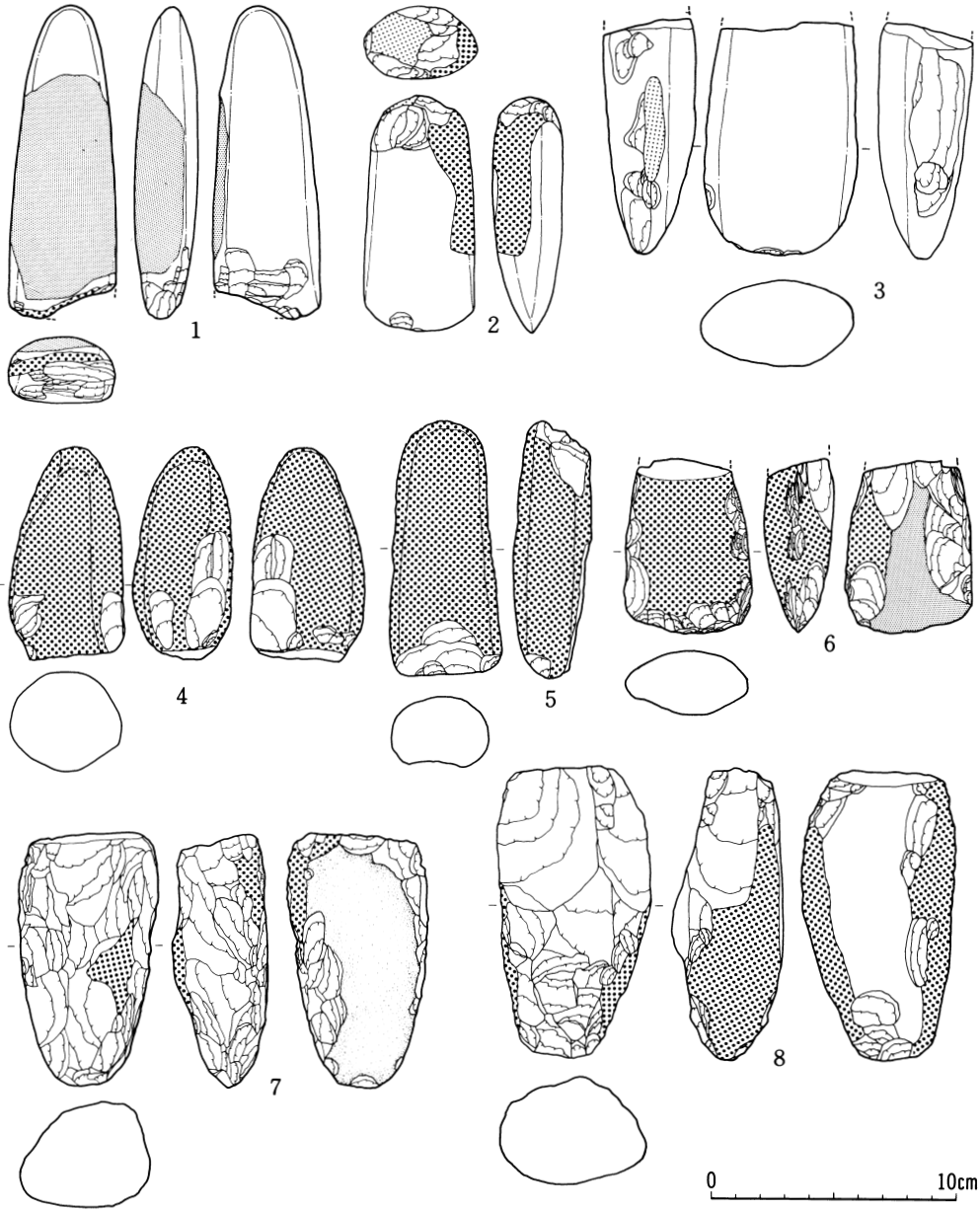
第165図 遺構外出土石器(9)



石器観察表

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)			
第166図-1	R-1	II	124	43	29	275	緑細	G	
第166図-2	AD-8	II	114	42	27	196	閃	G	
第166図-3	C-12	I	97	45	29	198	閃	G	
第166図-4	C-1	II	95	43	20	121	閃	G	
第166図-5	C-1	II	96	40	23	123	閃	G	
第166図-6	BR-11	Va	(62)	48	22	(97)	緑細	G	欠損
第166図-7	BI-23	Va	(63)	39	22	(93)	頁	G	欠損
第166図-8	J-1	II	117	54	29	275	凝	G	
第166図-9	Q-ア	II	106	45	28	207	閃	G	
第166図-10	F-ア	II	112	33	25	169	緑細	G	

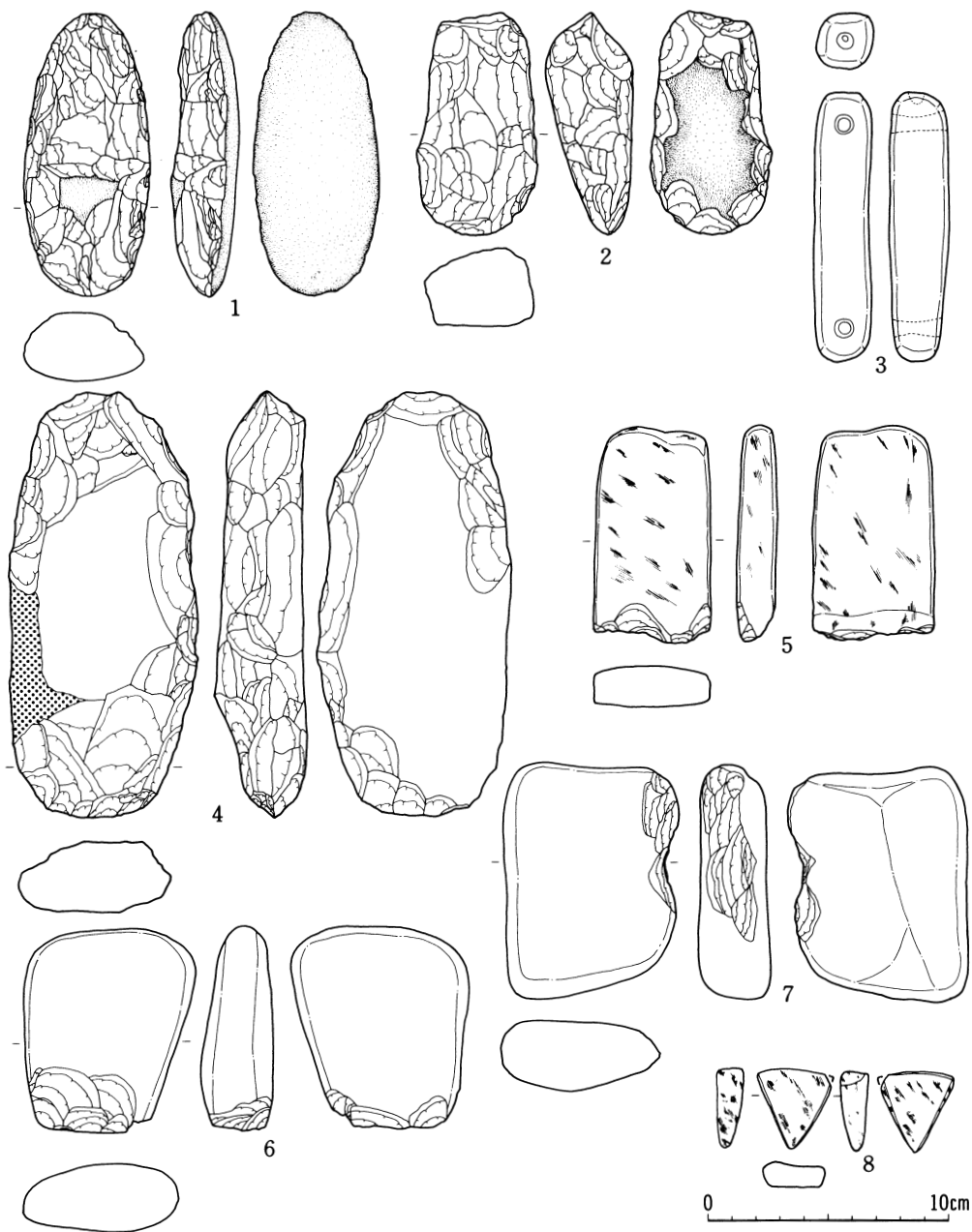
第166図 遺構外出土石器(10)



石器観察表

図 版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	備 考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)			
第167図-1	J-1	I	108	91	39	577	閃	G	
第167図-2	F-ア	II	96	46	29	215	閃	G	
第167図-3	F-ア	I	(97)	62	38	(328)	安	G	欠損
第167図-4	E-イ	I	85	46	39	222	閃	G	
第167図-5	C-14	I	103	44	29	208	閃	G	
第167図-6	R-ウ	II	(71)	51	27	(127)	頁	G	欠損
第167図-7	F-ウ	I	104	56	40	351	閃	G	
第167図-8	F-2	II	118	60	44	393	閃	G	

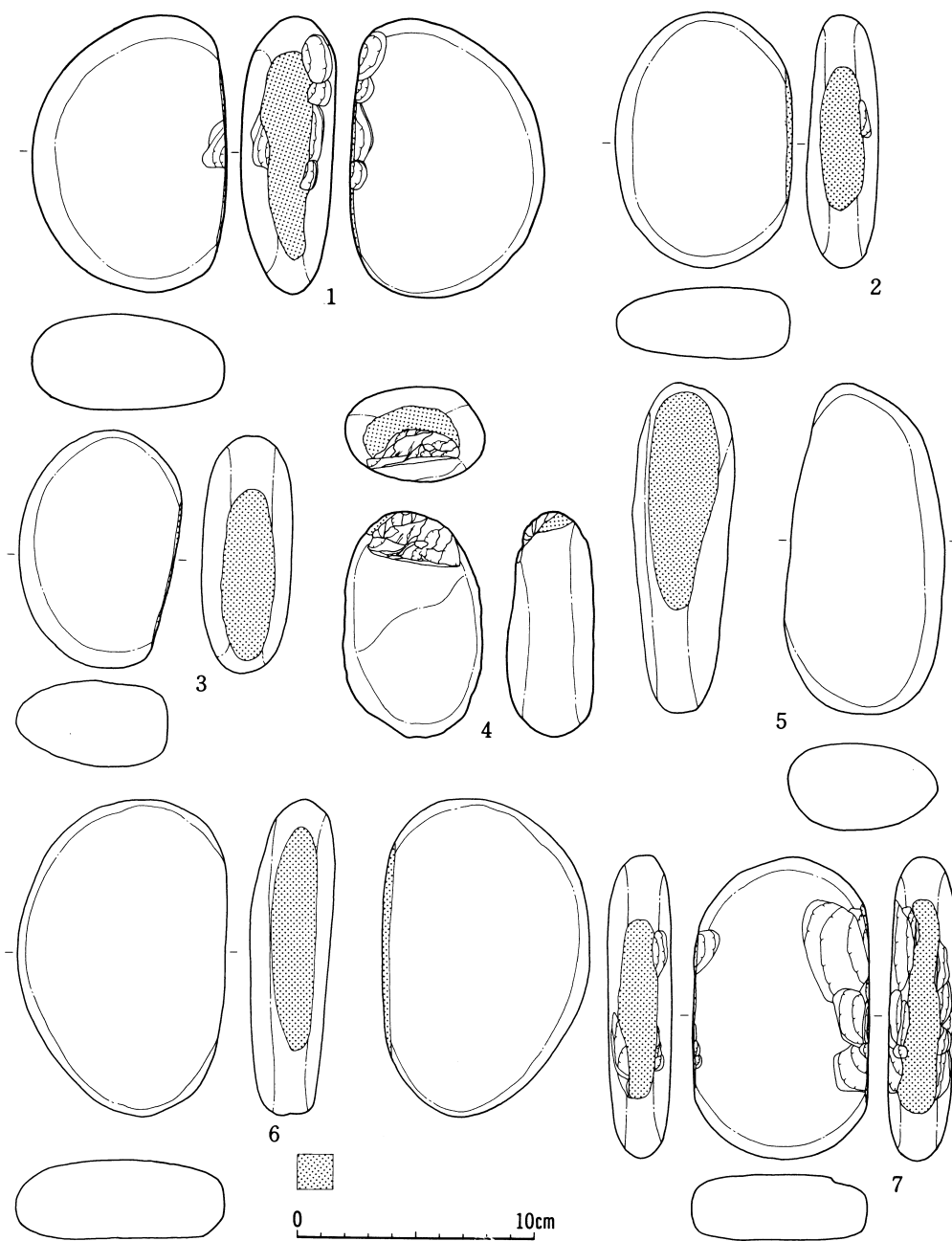
第167図 遺構外出土石器(1)



石器観察表

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)			
第168図-1	C-11	I	119	51	27	230	閃	G	
第168図-2	B-ア	I	93	49	37	203	閃	G	
第168図-3	C-イ	I	113	23	24	88	頁	P	
第168図-4	I-2	I	177	78	34	780	安	H	
第168図-5	P-12	II	86	50	17	169	緑細	G	
第168図-6	C-1	I	85	74	28	264	チャ	M	
第168図-7	AU-5	II	99	72	30	342	安	I	
第168図-8	H-1	Va	34	30	10	10	チャ	O	

第168図 遺構外出土石器(12)



石器観察表

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)			
第169図-1	C-イ	II	117	82	38	573	安	J	
第169図-2	B-ア	I	106	75	30	391	安	J	
第169図-3	O-1	II	99	65	34	363	安	J	
第169図-4	B-ア	I	95	58	37	295	チャ	J	
第169図-5	BC-12	II	139	66	41	564	安	J	
第169図-6	表採		133	88	31	618	安	J	
第169図-7	Z-イ	Va	127	72	30	458	凝	J	

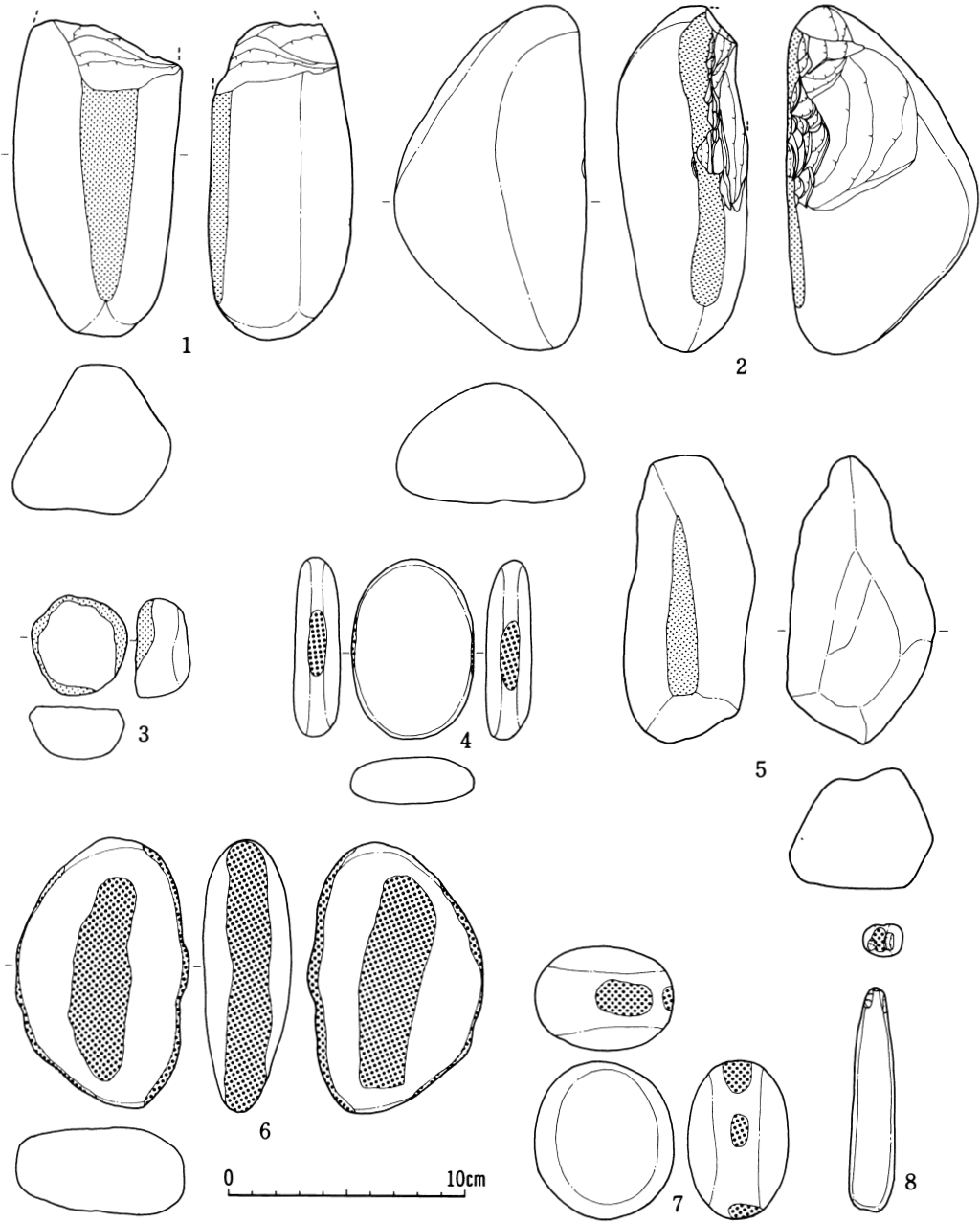
第169図 遺構外出土石器(13)



石器観察表

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)			
第170図-1	C-1	I	102	52	34	333	安	J	
第170図-2	G-13	I	100	78	57	576	凝	J	
第170図-3	G-ウ	II	59	48	40	150	安	J	
第170図-4	R-ウ	II	148	73	50	733	安	J	
第170図-5	B-ア	I	128	43	26	234	安	J	接合
	C-ウ	II							
第170図-6	S-ア	II	85	58	42	300	チャ	J	
第170図-7	E-3	I	76	58	29	170	安	J	
第170図-8	E-3	I	102	78	36	498	安	J	

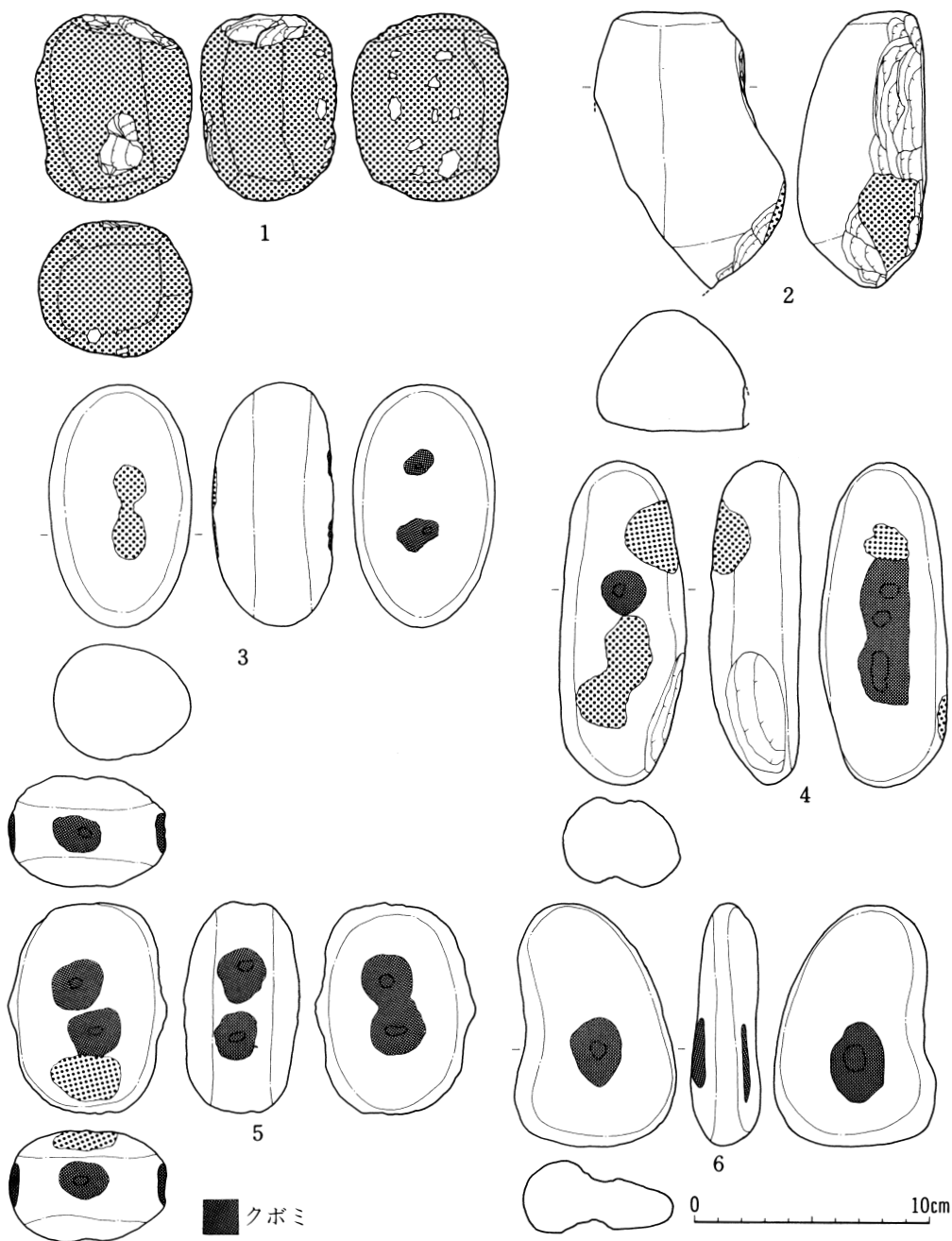
第170図 遺構外出土石器(14)



石器観察表

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)			
第171図-1	BJ-20	Va	(135)	67	59	(730)	安	J	欠損
第171図-2	L-ア	I	146	78	50	788	安	J	
第171図-3	C-ウ	II	40	41	22	51	チャ	J	
第171図-4	AA-19	I	75	52	20	130	砂	J	
第171図-5	AT-10	Va	121	60	48	474	安	J	
第171図-6	AB-16	I	114	73	37	426	砂	J	
第171図-7	L-ウ	I	66	59	42	230	安	J	
第171図-8	U-1	II	94	18	13	35	粘	J	

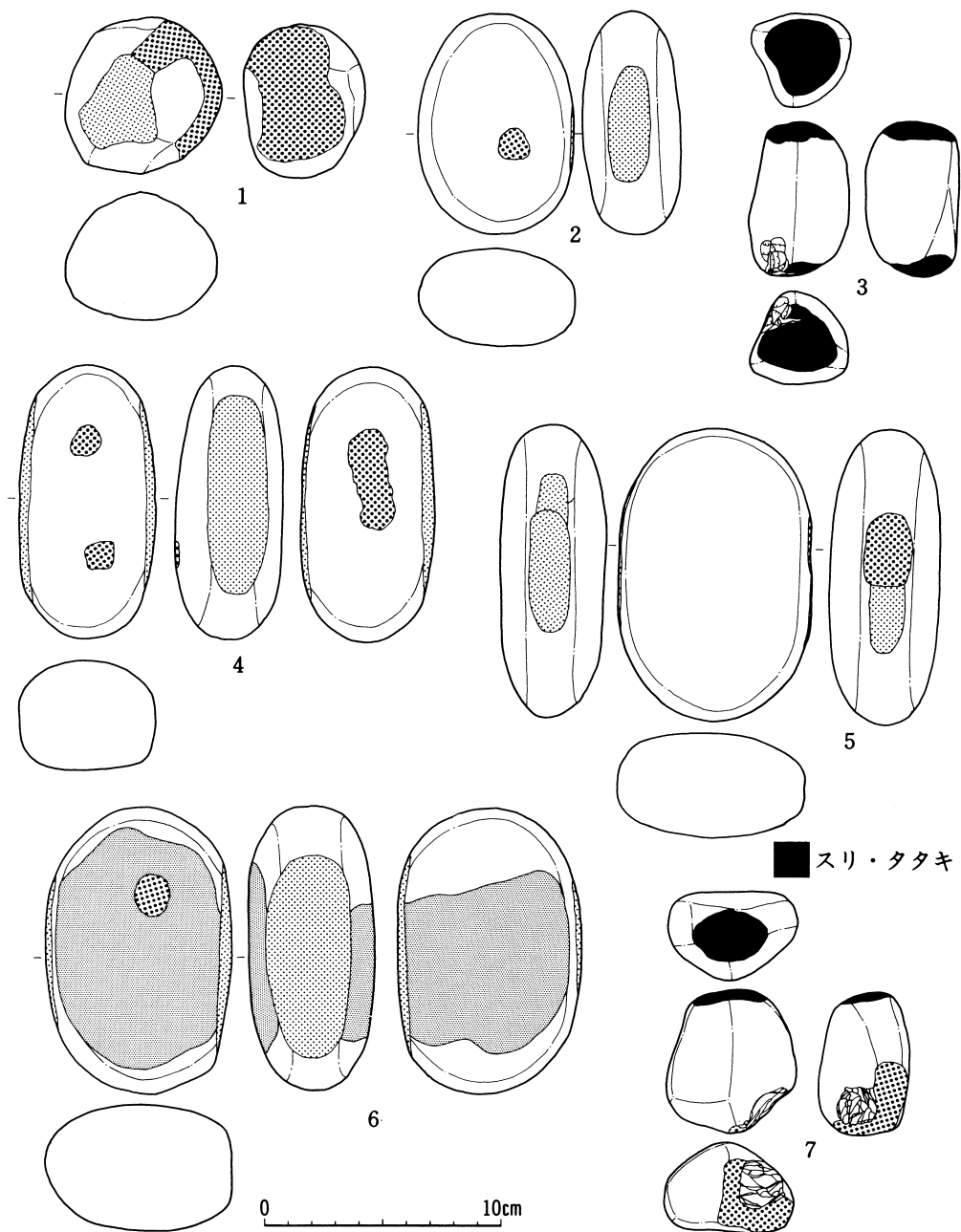
第171図 遺構外出土石器(15)



石器観察表

図 版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	備 考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)			
第172図-1	AG-9	II	79	63	58	437	玉	J	
第172図-2	Q-ア	II	(118)	(64)	54	(596)	砂	J	欠損
第172図-3	D-1	II	103	61	52	432	安	J	
第172図-4	CE-12	I	138	52	36	360	安	J	
第172図-5	E-3	I	88	67	47	326	安	J	
第172図-6	M-1	II	105	69	28	207	凝	J	

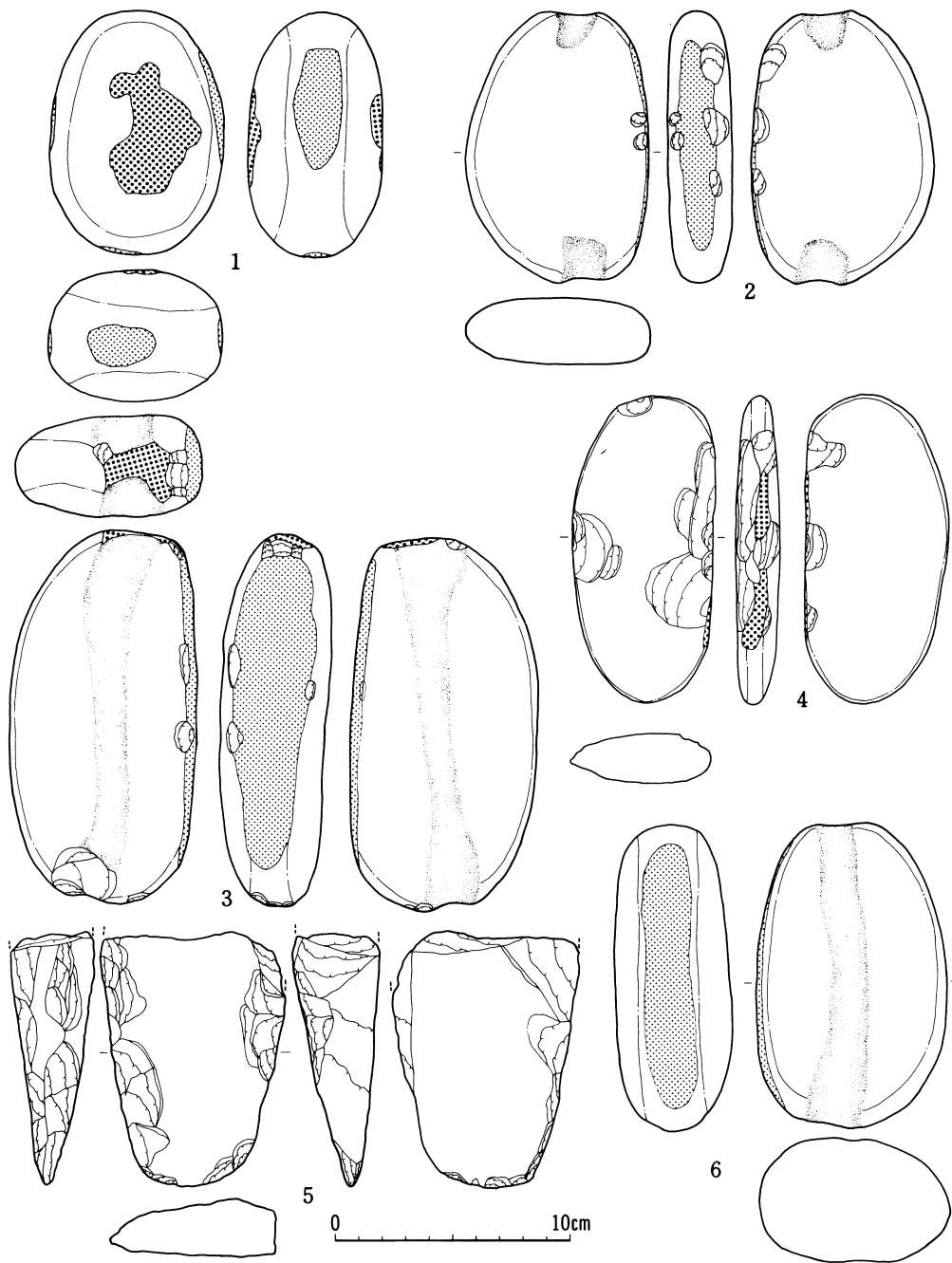
第172図 遺構外出土石器(16)



石器観察表

図 版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	備 考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)			
第173図-1	K-ア	I	68	66	53	282	チャ	J	
第173図-2	N-15	I	94	65	41	412	閃	J	
第173図-3	Q-ア	II	65	39	39	152	チャ	J	
第173図-4	A F-8	II	115	56	45	476	安	J	
第173図-5	D-1	II	123	79	45	771	閃	J	
第173図-6	B-ア	I	120	80	53	792	安	J	
第173図-7	C-12	I	60	52	36	169	チャ	J	

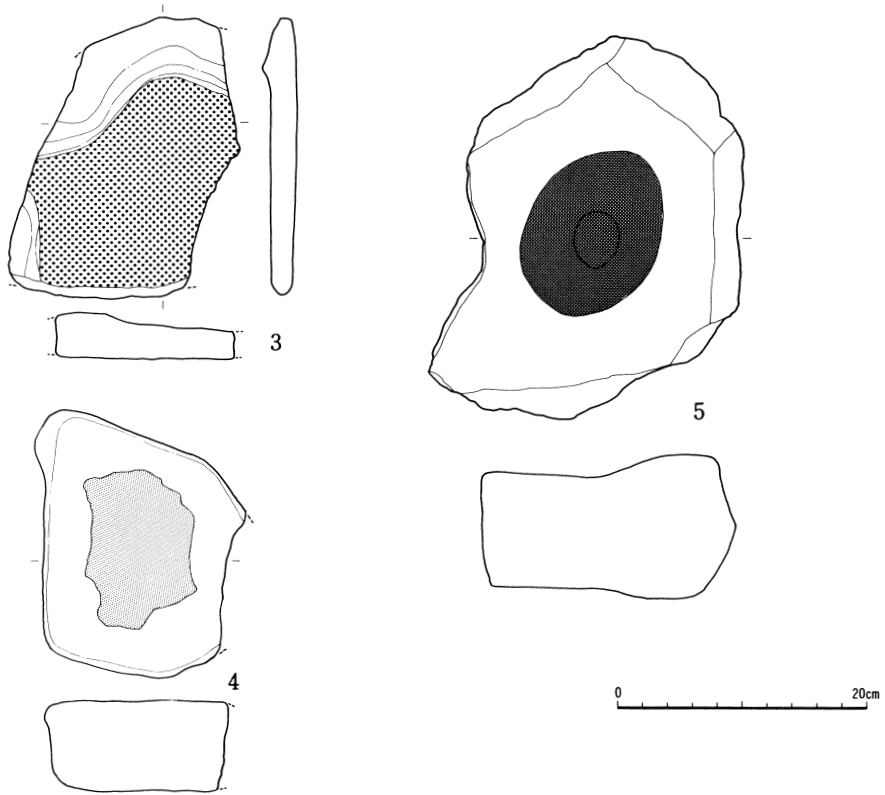
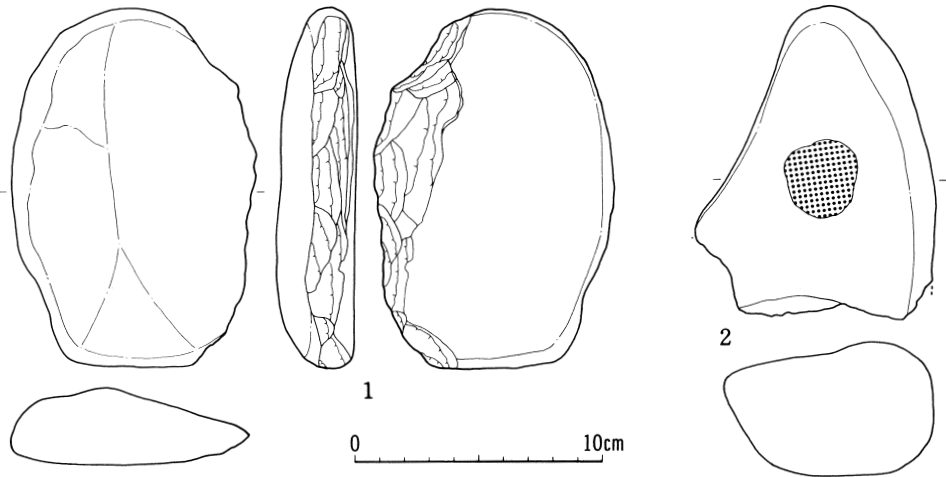
第173図 遺構外出土石器(17)



石器観察表

図 版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	備 考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)			
第174図-1	B-12	I	103	73	56	630	安	J	
第174図-2	A U-5	II	115	78	27	434	閃	K	
第174図-3	L-イ	I	156	78	45	964	安	K	
第174図-4	C-1	I	102	52	34	333	安	L	
第174図-5	G-ウ	II	(59)	48	40	(150)	安	L	欠損
第174図-6	N-11	I	130	81	49	871	安	K	

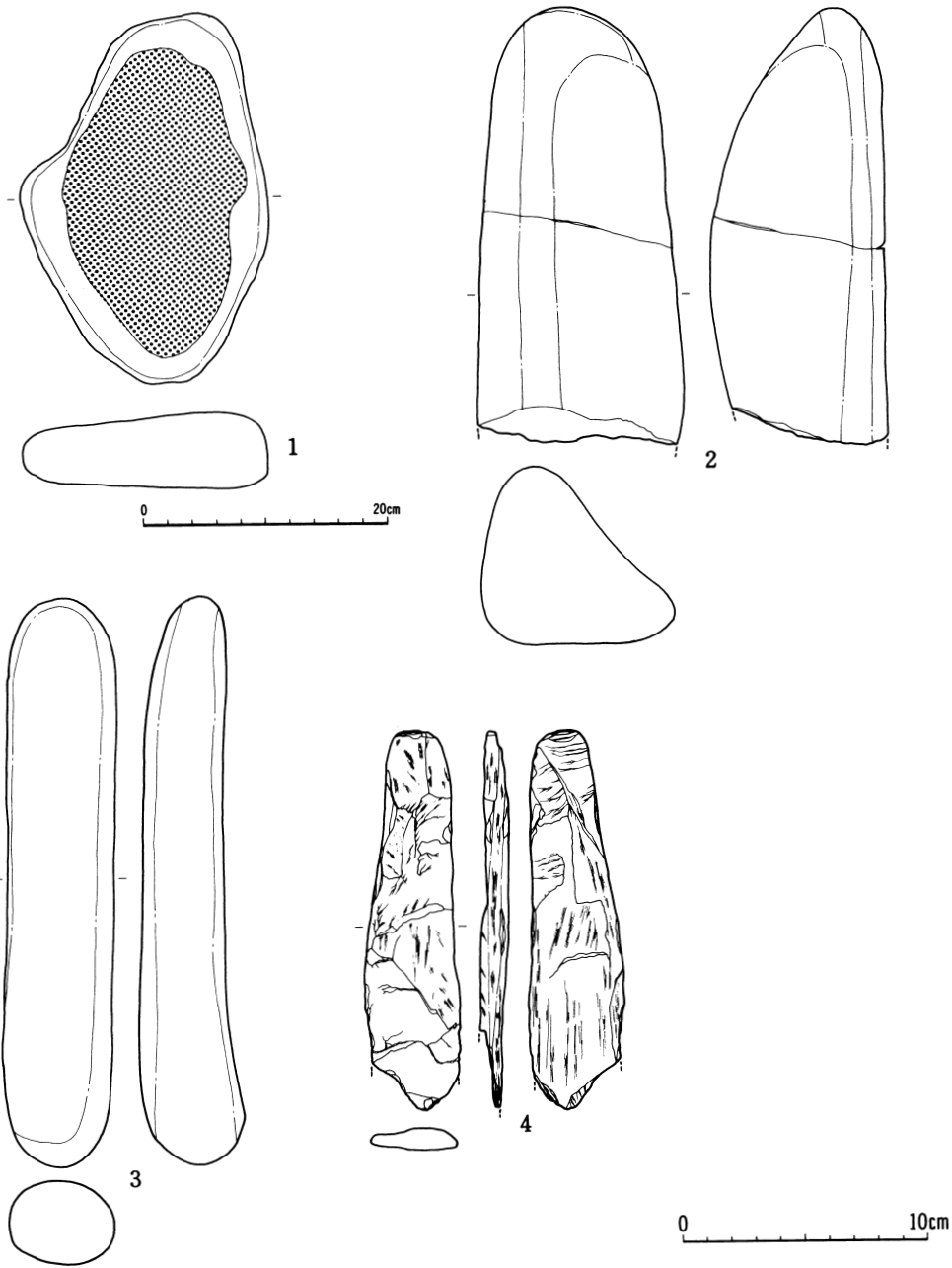
第174図 遺構外出土石器(18)



石器観察表

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)			
第175図-1	AA-7	II	145	98	30	594	安	L	
第175図-2	C-12	I	(256)	185	110	(7000)	安	N	欠損
第175図-3	AF-9	II	(244)	(147)	35	(1600)	安	N	欠損
第175図-4	G-13	I	197	(159)	74	(4500)	安	N	欠損
第175図-5	AA-15	I	326	254	107	12500	安	N	

第175図 遺構外出土石器(19)



石器観察表

図版	出土地点	層	最大計測値				石質	分類	備考
			長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)			
第176図-1	Q-ア	II	297	202	61	6000	安	N	
第176図-2	N-I	I	(178)	84	70	(1400)	流	Q	欠損
第176図-3	L-10	間層	232	45	45	584	凝	Q	
第176図-4	A A-7	II	(155)	39	10	(68)	粘	R	欠損

第176図 遺構外出土石器(20)

(3) 土製品 (第177～179図)

本遺跡から、土偶3点、鐙形土製品1点、苺形土製品1点、ミニチュア土器3点、不明土製品2点、土器片錘28点が出土した。

土偶 (第177図・1～3)

(1)はF-I区の 層出土のものとAE-U区の 層出土のものとが接合した例である。両グリッド特約40mの距離を隔てている。(2)はE-U区の 層出土のもので、(1)の胴部下半と思われる。付近では円筒上層a式期に位置付けられている第5号竪穴住居跡が検出されている。頭部・左腕部及び右半身を欠損しており、腹部から下半部に向かって器厚が薄くなる板状土偶である。文様は、乳房部分を表出する粘土の貼り付けと断面形が長方形で、やや薄手の篋状工具による連続刺突文を用いて施される。肩部から胸部は格子目状に、以下は側縁部に沿って弧状に、下半部は十字状に連続刺突がなされる。刺突は、上半部でやや上方より斜位に、下半部では体部に対してほぼ直角方向に施文される。胎土にはやや粗い砂粒が混入しており、焼成は良好である。

鐙形土器製品 (第177図・4)

C-13区の 層中より出土しており、鐙身部分を欠損している。鈕部は隅丸の長方形を呈し、貫通孔はやや斜行している。胎土には粗い砂粒が混入しており、焼成は不良である。本例は、小破片のため、器形が判然としない。鈕部から鐙身に至る部分の湾曲度が、鐙状土製品としてはやや緩やかすぎるように思われ、蓋形を呈する土製品の可能性もあることを指摘しておきたい。

苺形土製品 (第177図・5)

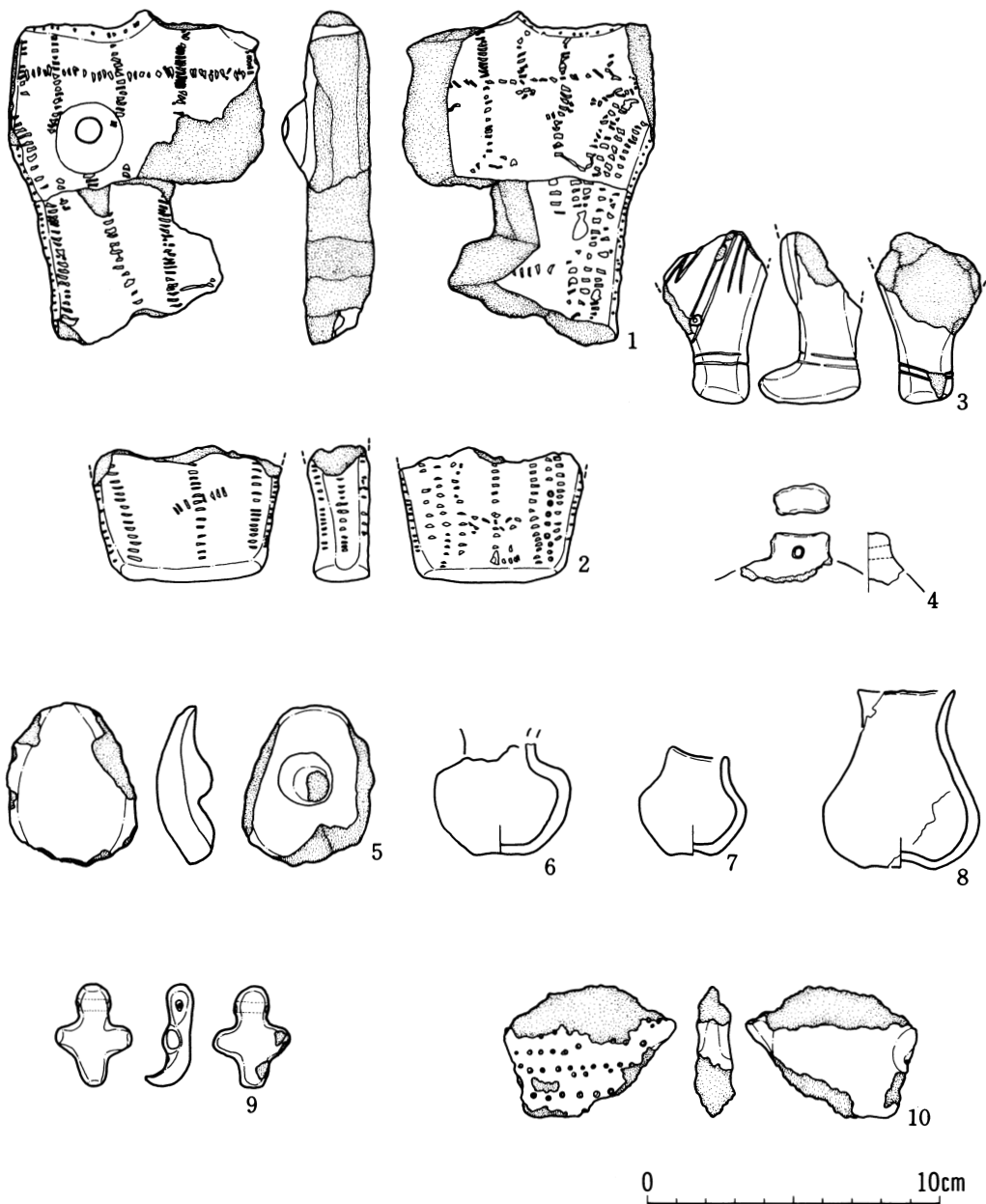
P-I区の 層中より出土しており、茎部分を欠損している。手捏ねによって成形されたものと思われ、かさ部分外面には指頭による調整痕が顕著に認められる。内面はナデ調整が施される。胎土には少量の黒雲母片及び白色鉱物粒が混入しており、焼成はやや不良である。

ミニチュア土器 (第177図・6～8)

壺形土器で、長頸壺(8)もみられる。口縁部の外反はさほど顕著でなく、(6)は肩部の張り出しが著しい。いずれも底辺の周縁を隆起させており、上げ底状を呈している。形成は手捏ねによるものだが、(6)は篋状工具による丹念な調整を外面に施している。胎土には少量の細かい砂粒が混入しており、焼成は(6)が良好、(7・8)はやや不良である。

不明土製品 (第177図・9・10)

(9)は完形品で、AA-8区の 層中より出土している。同グリッドからは他に土偶の脚部(3)も出土している。形態は十字形を呈し、下半部にて大きく湾曲している。頭部には貫



土製品観察表

名称	グリッド	層位	計測値(mm)	遺存状況(部位)	文様・調整
1 土 偶	F-イ A E-ウ	II I	長(11) 幅(8) 厚23	体部 上半	格子目状、弧状の連続刺突文、乳房は粘土貼り付け
2 土 偶	E-ウ	I	長(4) 幅(6) 厚21	体部 下半	十字状に直交する連続刺突文
3 土 偶	AA-8	I	長(6)	右側 脚部	足首周囲と斜行する隆帯に沿って平行沈線
4 鐙形土製品	C-13	I	17×11の隅丸長方形	鈕部	
5 葺形土製品	P-イ	I	径57	かさ部	手捏ねによる調整
6 ミニチュア土器	B-16	I	口径(-) 底径19 器高(3)	壺形土器、口縁部欠損	手捏ねによる調整 横位の範調整
7 ミニチュア土器	AA-15	I	口径20 底径16 器高38	壺形土器、略完形	手捏ねによる調整
8 ミニチュア土器	C-13	I	口径(3) 底径(2) 器高62	壺形土器、口縁・胴~底部欠損	手捏ねによる調整
9 不明土製品	AA-8	I	長35 幅26 厚10	完形	
10 不明土製品	J-1	I	長(4) 幅59 厚11	上半及び下半部欠損	横位の連続刺突文

第177図 遺構外出土土製品(1)

通孔が穿たれており、側面形で見ると限りにおいては勾玉状を呈している。胎土にはやや粗粒の砂粒を混入しており、器外面の調整・焼成ともに良好である。形態・貫通孔の位置からみて、装身具の一種として扱われるであろう。

(10)はJ-1区の層中より出土しており、形状を知り得ない破片資料である。内面に大きく湾曲し、両側縁の上部には屈曲部が残されている。文様は外面にのみ施されており、尖頭状の棒状工具による円形の連続刺突文が横位に施文されている。この刺突はやや右の方向から斜位になされている。胎土には粗い砂粒が混入しており、焼成は良好である。

土器片錘(第178・179図)

本遺跡における土器片錘は、全て遺構外の出土であり、完形品9点・一部欠損品15点・破片4点の計28点である。文様・胎土・伴出遺物から縄文時代前期初頭の早稲田6種に比定される土器より作出されている。これまで、県内で土器片錘が出土した遺跡は13遺跡を数え、その全んどが、前期初頭に位置付けられている。なかでも発茶沢遺跡(青森県1981)と和野前山遺跡(青森県1983)では、比較的まとまった資料が得られ、詳細な分析が試みられている。本遺跡出土の土器片錘も該期の生業を検討するうえで、良好な情報を提供するものと思われる。以下に諸属性の分類・検討を試みるが、前述した発茶沢・和野前山両遺跡の分類法・観察の視点を参考にしている。

1) 出土状況

出土地区でみると、13箇所のグリッドに亘って散在しており、L-A区が7点(25%)、M-I区が5点(18%)、L-0区が3点(11%)と、隣接して集中区が存在する。全体的に調査区北西部に偏在しており、付近には該期の遺構として第11号・14号竪穴住居跡、第26号・29号・30号土壌がある。出土層は層のものが18点(64%)、a層がそれぞれ5点(18%)で、5点の一括出土をみたM-1区では、すべてa層中の出土という点で、a層がプライマリーな包含層といえそうである。

2) 計測値(第179図)

計測に際しては、完形品9点を主に各項目毎に推定可能な欠損品、破片を加えて行なった。なお、長軸とは切り込みが施される方向の最大値で、短軸はそれに直交する部分の最大値である。

長軸(対象資料は完形品9点、欠損品3点の計12点である。)

最大値が101mm、最小値が51mmで、平均値は68.2mmである。50~75mmのものが多数を占めるが、短軸と比較してばらつきが認められる。

短軸(対象資料は完形品9点、欠損品3点の計12点である。)

最大値が65mm、最小値が39mmで、平均値は50.9mmである。45~60mmのものが多数を占める。

長・短比

最大値が1.70、最小値が0.9で、平均値は1.3である。1.2が最も多く、1.4～1.5がこれに次ぐ。

厚さ（対象資料は全28点である。）

最大値が13mm、最小値が6mmで、平均値は9.3mmである。9～10mmのものが多数を占める。

重量（対象資料は完形品9点である。）

最大値が60g、最小値が22gで、平均値は35.3gである。20～35gのものが多数を占める。

3) 形態

本遺跡の資料の場合、発茶沢遺跡（1981）和野前山遺跡（1983）等と比較して、破損率が高いように思われる。特に平均値を超えるような大型のもの、あるいは極めて小型のもので破損率が高く、全体の形状が判然としないものが多い。よって以下の形態については、長方形かそれに近いもの、楕円形、その他という4類に分類した。

類...長方形または方形を呈するもの（1～15）

類...長方形に近いが、周縁部の形状が判然としないもの（不正長方形 16～23）

類...楕円形を呈するもの（24～26）

類...その他（菱形を呈するもの、不明のもの 27・28）

内訳をみると、類が最も多く50%強を占め、類を合わせると80%強の値を示す。ただし前述したように本遺跡出土資料は破損率が高く、形態の把握が困難であることから、土器片錘の形態は長方形の比率が高いということを指摘するに止めたい。

4) 土器片錘は、元来は容器として機能していた土器片に調整を加えて、錘としての機能を与えて再利用したものである。従ってその加工工程の中で、形態、大きさ等の属性が規定されていくものと考えられる。この加工の工程は素材の選択（ ）第一次調整（ ）第二次調整（ ）切り込みの付設（ ）という段階で進められる。なかには を省 ものも多く認められる。

素材の選択（第179図）

素材となる土器の部位及び加工方向（切り込みの付される方向）から以下のように分類できる。なお、切り込みの付される方向を長軸、直軸に直交する部分の最大値を短軸とする。（第178図の土器片錘の拓影は土器の本来の正位の方向にて掲載している。）

A...口縁部破片、B...胴部破片

a...土器の縦位方向に長軸をとるもの、b...直交させるもの、c...右傾にて斜行させるもの、d...左傾にて斜行させるもの。

以上のように部位から2類、方向から4類に大別され、この内訳はA a... 1点、A b... 6点、B a... 9点、B b... 6点、B c... 2点、B d... 4点である。口縁部破片については、直交させるものが多数を占めるのに対して、胴部破片については、軸を一致させるものが多いという傾向が把握される。前者は口唇部を残すことにより、一部周縁の調整を省いた可能性がある。後

者は土器片の湾曲に由来する可能性もあるが、Baが大多数を占めるものでもなく、数値にはらつきがみられる。本遺跡の資料の場合、比較的大型の土器から土器片錘が製作されたとみられ、土器片の縦位、横位の湾曲比は顕著なものではない。胴部破片の加工方向については、それほど厳格な規定は無かったものと思われる。

第一次調整（打ち欠きによる成形） 錘としての大まかな形態・大きさ・重量等の属性が規定される工程である。素材の選択の後、打ち欠きによって第一次調整が施される。打ち欠きは通例、外面及び側縁からの打撃・加圧によってなされるようだが、さらに内面から施すものも若干みられる（11・13）。この段階にて調整が終了し、切り込みが施されるものも多い。その内訳は前述の形態の 類が13点、 類が3点、 ・ 類がそれぞれ1点で、計18点（64%）を数える。

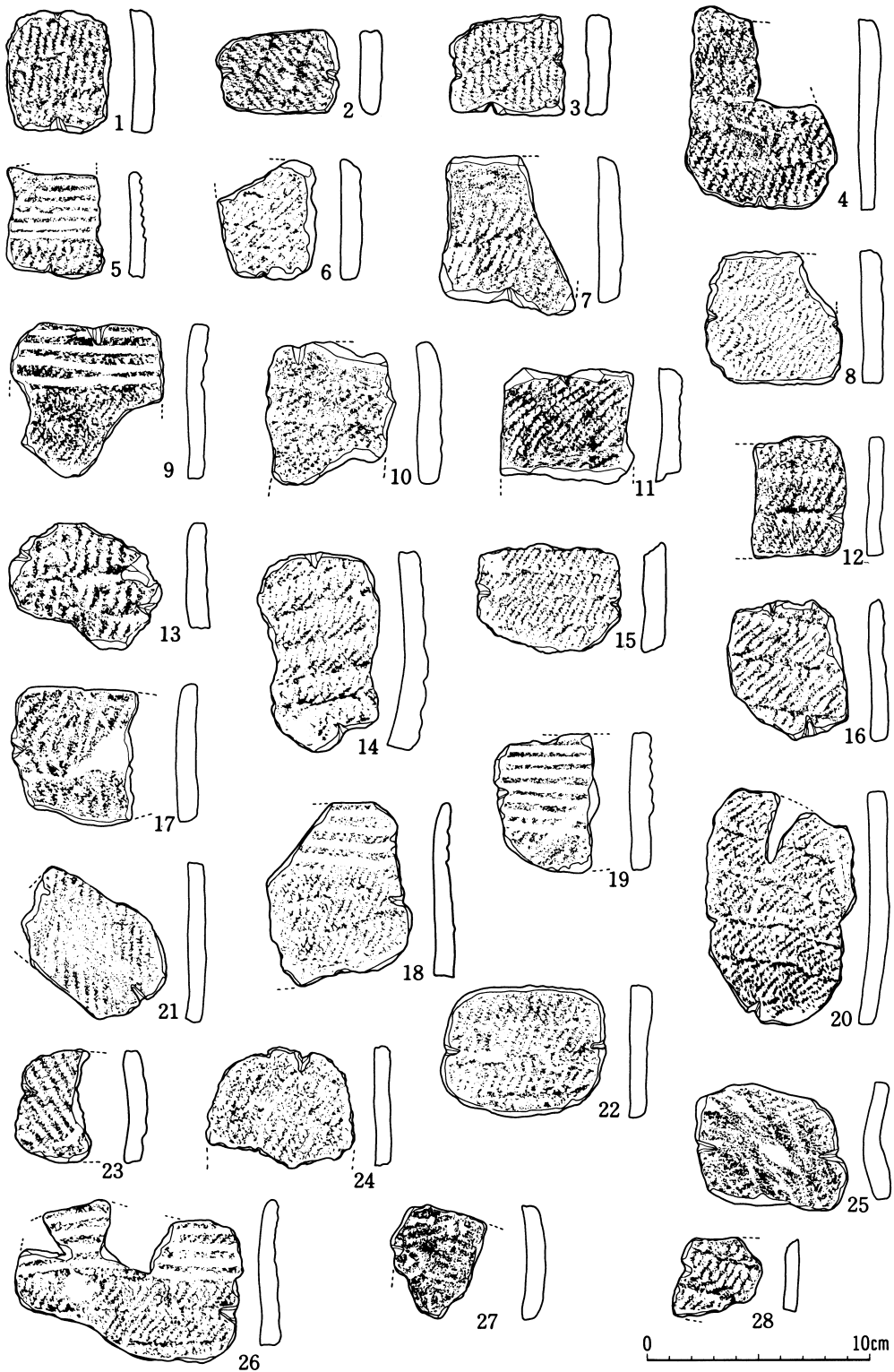
第二次調整（擦りによる整形）

打ち欠きにより作出されたものに擦りを施し、周縁の調整を行なう工程である。この工程が施されるものは10点（36%）を数え、そのうち調整が全周に及ぶものが3点認められる。この3点を含めて、周縁の調整が比較的広範囲に及び、かつ丹念になされているものは、 類に多く、 類・ 類の順で粗雑になっていく傾向が窺える。このことは第一次・第二次を合わせた調整の度合によって、形態が 類 類 類と変容することを示していると考えられる。

切り込みの付設（第179図）

縄掛けのためのものとされる切り込みは、一方向からのみのものは18点、2方向からのものが9点、3方向からのものが1点で合計39例が観察される。切り込みは1～3段階に亘って施されており、ア～エの4種の手法が看取される。（ア）外面より斜位に切り込みを施すもの。（イ）外面より縦位に切り込みを施すもの。（ウ）アとイが組み合わされるもの。（エ）ウに対して更に内面からの切り込みを施すもの。これら4種のうちで最も多いのはウの手法で約46%を占め、以下ア（31%） エ（18%） イ（5%）の順になる。ウの手法は長・短軸共に平均値を超えるような大型のものに多く、エの手法は第二次調整により、周縁に擦りが施されたものに多いという傾向が把握される。

切り込み部分の断面形はU字状のものとV字状のものがあり、U字状のものが多数を占める。幅は3～5mm、深さは2～6mmで、いずれも3mm前後のものが多い。切り込みの角度は23～95度の幅をもつが、多くは35～50度前後に収まり、平均は43度である。（川岸）

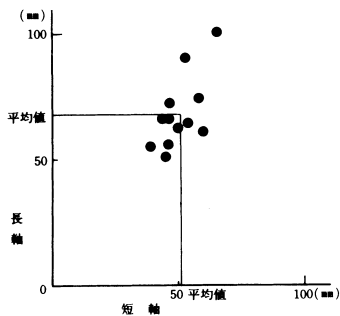


第178図 遺構外出土土製品(2)

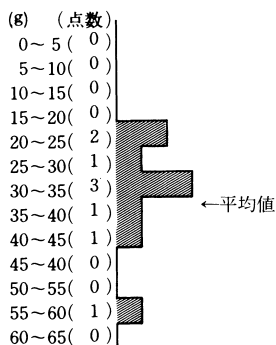
土器片錘計測表

() は現存値

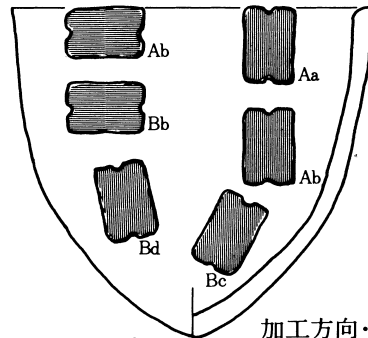
	グリット	層位	長(mm)	短(mm)	長短比	厚さ(mm)	重量(g)	形態	素 材	第二次調整	切り込み	備 考
1	N-0	II	56	47	1.2	9	31	I	Ba	—	イ・ウ	完形品
2	S-ア	I	55	39	1.4	10	22	I	Bb	全 周	ア・ウ	完形品
3	S-ア	I	51	45	1.1	10	29	I	Bb	—	ア・イ・エ	完形品
4	L-ア	I	(85)	64	(1.3)	9	(39)	I	Ba	—	ア	一部欠損品
5	K-ア	I	(46)	44	(1.0)	7	(18)	I	Ba	—	ウ	一部欠損品
6	H-イ	II	(54)	37	(1.5)	9	(21)	I	Ba	—	エ	一部欠損品
7	O-ウ	I	(63)	(60)	(1.1)	11	(44)	I	Ba	—	ウ	破 片
8	J-2	II	71	60	(1.0)	10	(42)	I	Bb	—	エ・エ	一部欠損品
9	L-ア	I	(70)	68	(1.0)	9	(38)	I	Aa	—	ウ	一部欠損品
10	M-1	Va	(64)	(53)	(1.2)	11	(42)	I	Ba	—	ア	破 片
11	M-1	Va	(51)	57	(0.9)	10	(35)	I	Ba	—	ア	一部欠損品
12	L-ア	I	(53)	40	(1.3)	6	(20)	I	Ba	—	ア	一部欠損品
13	M-1	Va	66	45	1.5	10	34	II	Ab	一 部	ウ・エ	完形品
14	L-0	I	90	53	1.7	13	60	II	Ba	一 部	ウ・ウ	完形品
15	K-1	I	66	47	1.4	10	37	II	Bb	—	ア・ウ	完形品
16	L-0	I	62	50	1.2	8	29	II	Bd	一 部	ア・ア	完形品
17	J-1	I	(55)	62	(0.9)	10	(33)	II	Ab	一 部	エ	一部欠損品
18	L-ア	I	(63)	(83)	(0.8)	9	(46)	II	Ab	—	ウ	破 片
19	G-ウ	II	(47)	(63)	(0.7)	10	(32)	II	Ab	—	ウ	破 片
20	L-ア	I	(96)	64	(1.5)	9	(58)	II	Bc	—	エ	一部欠損品
21	J-0	I	72	47	1.5	8	(35)	II	Bd	一 部	ウ	一部欠損品
22	M-1	Va	74	59	1.3	10	42	III	Bb	全 周	ウ・ウ	完形品
23	K-1	I	(34)	51	(0.7)	10	(14)	III	Bb	全 周	ア	一部欠損品
24	L-ア	I	(54)	66	(0.8)	8	(28)	III	Bc	—	ウ	一部欠損品
25	L-0	I	64	54	1.2	9	34	IV	Ab	一 部	ア・ウ	完形品
26	L-ア	I	101	65	1.6	9	(58)	IV	Ab	—	ア	一部欠損品
27	M-1	Va	(48)	(39)	(1.2)	9	(17)	IV	Bd	一 部	ウ	破 片
28	N-0	II	(36)	(35)	(1.0)	7	(10)	IV	Bd	—	ウ	破 片



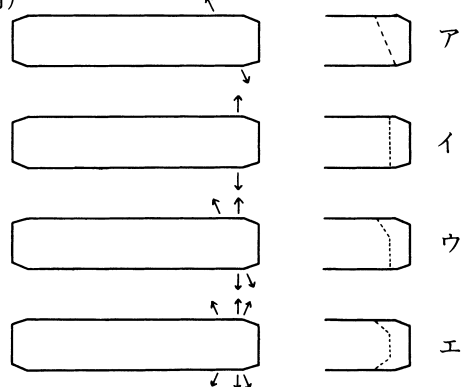
土器片錘の大きさ(12例)



土器片錘の重量(9例)



加工方向・部位



切り込み手法の分類

第179図 土器片錘計測グラフ・加工工程模式図

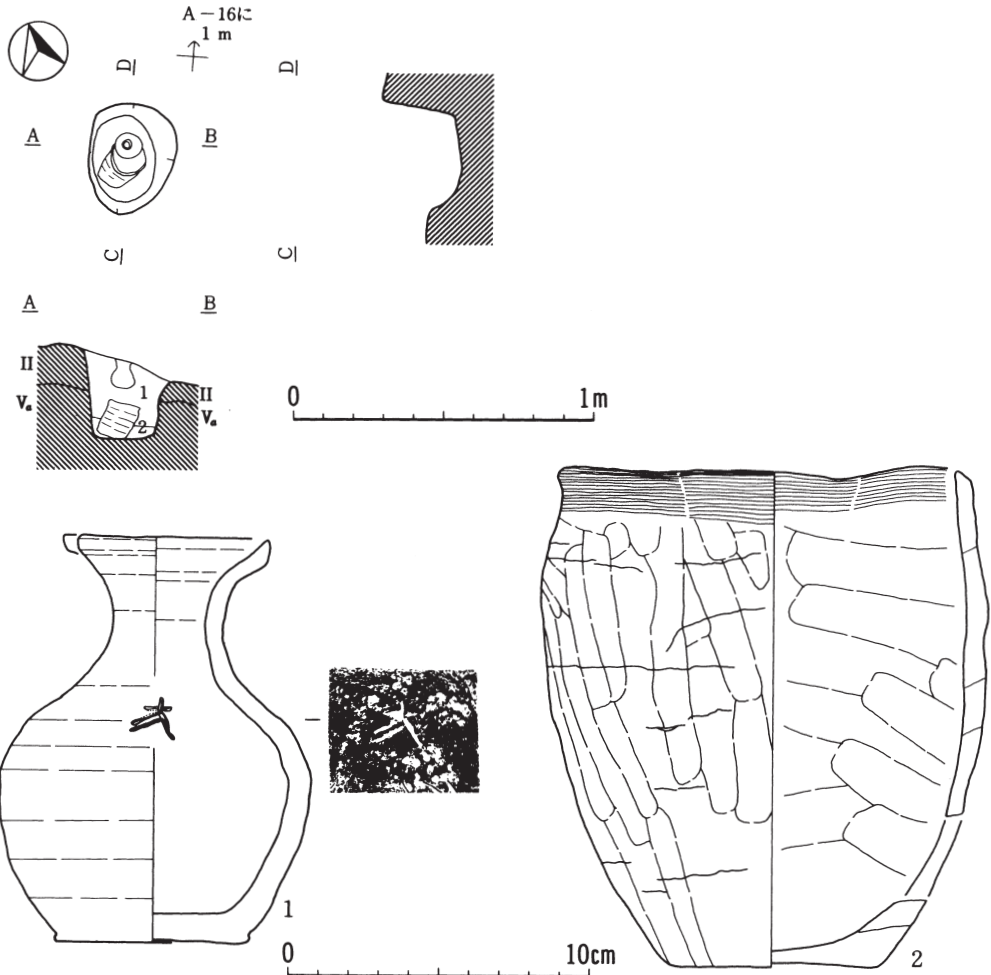
第2節 平安時代の検出遺構と出土遺物

1、検出遺構と遺構内出土遺物

(1) 埋設土器

位置と確認 本遺構は調査区北側台地の平坦面にあるA A - 15グリッドに位置している。第層を精査中に本遺構を確認した。本遺跡からは1基のみの検出である。

出土状況・形態・規模 埋設土器は2個出土し、上位に器高13.6cmの壺形土器が出土し、その壺形土器から4cm下位に斜位状態で甕形土器が出土した。掘り方の平面形態は、南側が張り出す楕円形であり、断面形態は円筒形に近い。規模は、長径38cm、短径28cm、深さ29cmを測



埋設土器遺構土器観察表

図版	出土地点	層	種類	器種	部位	法量(mm)			調整			胎土	焼成	色調	備考
						口径	底径	器高	口縁部	胴部	底辺部				
第180図-1	埋設土器遺構	1	須恵器	長頸壺	完形	67	63	136			ヘラナテ	精練されている	堅緻	赤褐色	ロクロ成形「大」宛書記号有り。
第180図-2	埋設土器遺構	1・2	土師器	甕	完形	144	78	166	ナデ(横)	ヘラナテ	ヘラナテ	砂礫多量混入	良好	浅黄橙色	スス状炭付物付着

第180図 第1号埋設土器

る。土器内部からは遺物は出土しなかった。

堆積土 堆積土は2層に区分した。第1層には若干の炭化物が包含されており、締めりがある。粘性は1・2層ともにある。

出土土器 壺形土器、甕形土器2個体が完形で出土した。壺形土器は、口径6.7cm、底径6.3cm、器高13.6cmを測り、口縁成形である。底面はヘラナデである。色調は赤褐色を呈し、酸化焰焼成によるものである。胎土は精練されており、肩部に「太の篋書記号がみられる。この土器は酸化焰焼成で、赤褐色を呈する点では土師器であり、器形、精練された胎土、篋書記号がみられる点では須恵器に近い。ここでは、須恵器としてとらえ、報告する。

土師器の甕形土器は、口径14.4cm、底径7.8、器高16.6cmで、粘土紐巻き上げ成形である。口縁部は、器内外面とも横ナデ、胴部は横位方向のヘラナデで調整している。底面はヘラナデである。色調は浅黄橙色で、口縁部内外面に炭化物が付着し、また、胴部下半には二次火熱を受けた痕跡がみられる。胎土には直径2～3mmの砂礫が多数量に混入されている。

(成田、奈良)

小 結 本遺構は、甕形土師器と壺形須恵器が同時に埋設された状態で検出されたが、このような出土例は本県においては極めて希である。木造町石上神社遺跡(青森県1977)では、埋甕と思われる土師器が一個体直立した状態で出土しているが、その性格は不明とされている。県外では、土師器甕を埋設する例として、火葬墓があげられる。また、岩手県西根遺跡(岩手県1982)、宮城県色麻古墳(宮城県1982)では、土師器あるいは土師器甕が倒立の状態で検出され、いわゆる蔵骨器として使用されている。さらに、秋田県湯向火葬墓では、土師器の甕を本体とし、坏を使用した出土例(庄内1984)が報告されている。しかし、本遺構は、出土状態等からこれらの出土例と相違しており、現段階ではその性格は不明と言わざるを得ない。

(奈良)

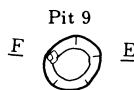
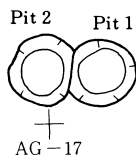
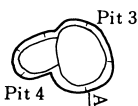
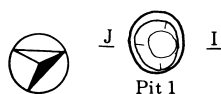
(2)ピット群

位置と確認 本遺構は、調査区中央部よりやや北寄りにあるA F・A G-16・17・18グリッドに位置している。11個の小さな円形の黒褐色土の落ち込みを確認し、精査したところピットを検出した。

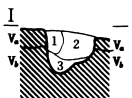
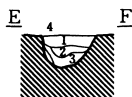
重 複 P 1とP 2が、P 3とP 4がそれぞれ切り合っているが、新旧関係はそれぞれ不明である。

平面形・規模 小ピットは11個検出した。ピット間の距離は、約120cmと一定の間隔で配置されている。ピットの形態及び規模は次のとおりである。

P 1...円形(42×44)cm、深さ21cm P 2...不整円形(42×46)cm、深さ18cm



AG-18



Pit-1 土層注記

第1層	黒褐色	10YR2/2	しまり弱く、粘性なし。
第2層	褐色	10YR4/4	

Pit-2 土層注記

第1層	暗褐色	10YR3/4	しまりややあり、粘性なし。
-----	-----	---------	---------------

Pit-3 土層注記

第1層	黒褐色	10YR2/3	黄褐色土を粒状に少量含む。しまり強く、粘性ややあり。
-----	-----	---------	----------------------------

Pit-5 土層注記

第1層	褐色	10YR4/4	しまりややあり、粘性ややあり。
-----	----	---------	-----------------

Pit-6 土層注記

第1層	暗褐色	10YR3/4	しまり若干あり、粘性なし。
-----	-----	---------	---------------

Pit-7 土層注記

第1層	褐色	10YR4/4	しまりなし、粘性なし。
-----	----	---------	-------------

Pit-8 土層注記

第1層	褐色	10YR4/4	しまり弱く、粘性ややあり。
-----	----	---------	---------------

Pit-9 土層注記

第1層	黒褐色	10YR2/3	しまり強く、粘性ややあり。
第2層	黒褐色	10YR3/2	1層よりややしまり弱く、粘性は1層よりやや強い。黄褐色土が小ブロック状に混入。
第3層	褐色	10YR4/4	2層よりしまり弱く、粘性は強い。黄褐色土が大ブロック状に黒色土粒が少量混入。
第4層	黄褐色	10YR5/6	しまり弱く、粘性は強い。

Pit-10 土層注記

第1層	黒褐色	10YR2/3	しまりややあり、粘性ややあり。
第2層	暗褐色	10YR3/3	しまりは1層と同じで粘性はやや強い。黄褐色土粒散在。

Pit-11 土層注記

第1層	黒褐色	10YR2/3	しまりなく粘性なし。
第2層	黒褐色	10YR3/2	しまりややあり、粘性ややあり。
第3層	褐色	10YR4/4	2層よりややしまり弱く、粘性は強い。黒褐色土粒が微量に混入。



ピット群土器観察表

図版	出土地点	層	種類	器種	部位	法量(mm)			調整			胎土	焼成	色調	備考
						口径	底径	器高	口縁部	胴部	底辺部				
第181図-1	ピット群	覆土	土師器	手づくね	完形	66	44	53	ナ デ ナ デ	ナ デ		粗粒砂含む	良好	灰白色	粘土紐巻き 上痕あり

第181図 第1号ピット群

P 3...楕円形(42×48)cm、深さ30cm P 4...楕円形(24×30)cm、深さ13cm
P 5...楕円形(24×34)cm、深さ16cm P 6...楕円形(28×29)cm、深さ16cm
P 7...不整形(39×39)cm、深さ26cm P 8...楕円形(34×42)cm、深さ10cm
P 9...楕円形(35×40)cm、深さ24cm P 11...不整形(25×29)cm、深さ19cm
P 11...楕円形(36×40)cm、深さ27cm

堆積土 一般的に、堆積土は褐色土・黒褐色土が主体で炭化物等の混入物はない。

出土遺物 第181図 - 1の土師器が、ピット9の覆土から直立の状態出土した。口縁部及び底部に剥落がみられるが、ほぼ完形に近い土器である。法量は、口径6.6cm、底径4.4cm、器高5.3cmを測る。調整は、口縁部内外面及び胴部外面にナデをおこない、粘土紐巻きあげ痕が口縁及び胴部にみられる。色調は灰白色で、胎土には粗短砂を若干包含している。

(津川、奈良)

小 結 本遺構は、調査区北側の平坦地に分布し、構状ピットに隣接している。ピットの規模は、径約36cm、深さ約20cmを平均としている。ピットは東西方向に2列に配置されているが、北側の列はピットが8基あり、南側の列はピットが3基と短い。西側のピットを除いて、ピット間は約120cm間隔で配置されている。遺物としては、第181図 - 1の土師器が出土しており、本遺構北側約20mに位置する埋設土器遺構との関連性が指摘されようが、現段階では、本遺構の用途・性格については不明である。

(奈良)

2、遺構外出土遺物

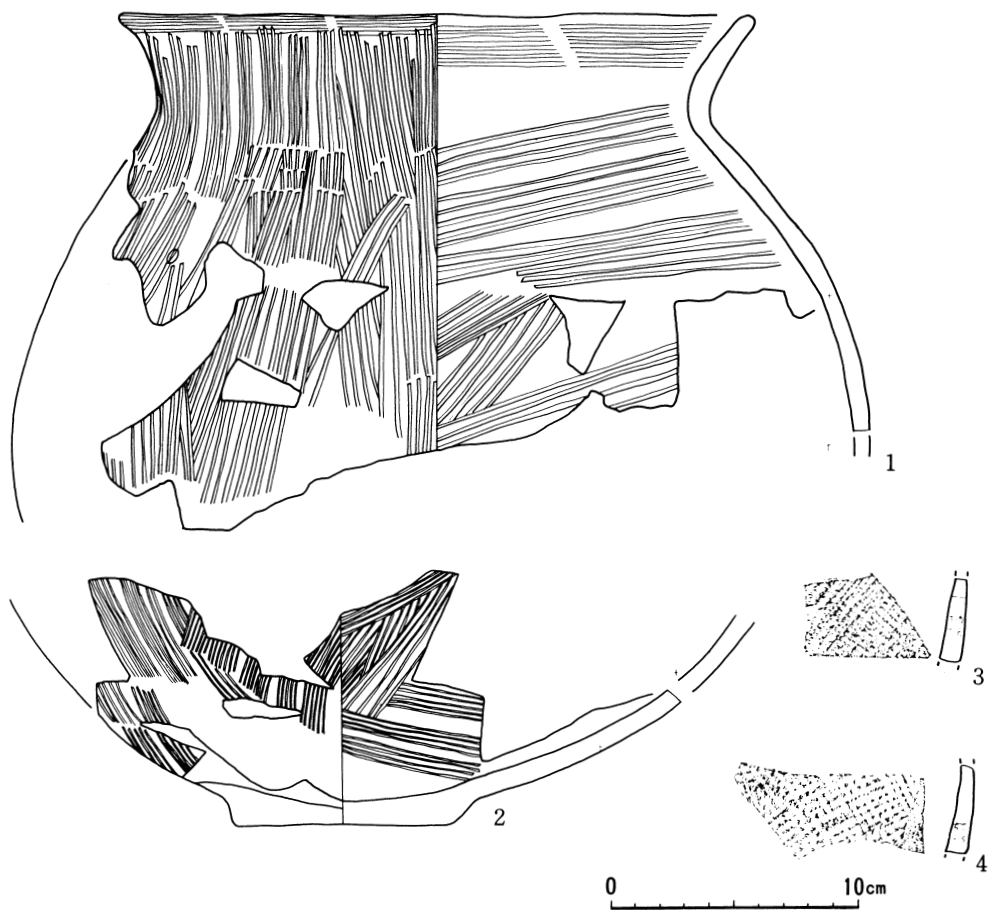
(1)土師器・須恵器

本遺跡では、遺構外より土師器・須恵器が若干出土した。

土師器は3点で、いずれも接合によるものである。第182図 - 1と2は同一個体と思われる。頸部から口縁部にかけて外反し、胴部中央で最大径をもつ球胴の甕である。口径は24cmを測る。底面は平底で、底面からいったんやや垂直ぎみに立ち上がって段をなし、さらに球形を描いて胴部に至る。底径は7cmである。器外面と内面(頸部から底部にかけて)は刷毛目状の工具で調整され、内面口縁はヨコナデ調整が施されている。焼成は良好で、胎土には細砂粒の混入が認められる。色調は外面がにぶい赤褐色、器内面が灰黄褐色を呈する。

須恵器は破片3点で、そのうち接合が1点あった。第182図 - 3・4は別個体ではあるが、調整・焼成・色調は類似する。器外面は格子様叩き目で調整され、焼成は良好である。色調は内外面ともに灰色を呈する。胎土の色調はにぶい赤褐色である。

(奈良)



土師器・須恵器観察表

図版	出土地点	層	種類	器種	部位	法量(mm)			調整			胎土	焼成	色調
						口径	底径	器高	口縁部	胴部	底部			
第182図-1	BH-23	II	土師器	甗	口縁 胴	240			ナ テ ヨコナテ	ハケメ ハケメ		細砂粒混入	良好	におい赤褐色 灰黄褐色
第182図-2	BH-23	II	土師器	甗	底辺		70				ハケメ ハケメ	細砂粒混入	良好	におい赤褐色 灰黄褐色
第182図-3	T-ウ	Va	須恵器		胴					格子様叩目			良好	灰色
第182図-4	AC-15	I	須恵器		胴					格子様叩目			良好	灰色

第182図 遺構外出土土器（土師器・須恵器）

第 章 調査の成果

1. 縄文・弥生時代の遺構

(1) 竪穴住居跡

本遺跡の調査結果から竪穴住居跡を17軒検出した。竪穴住居跡は、調査区の北側で調査グリッドA Uラインから北側の台地平坦面及び緩斜面に位置している。本章では、竪穴住居跡17軒の内、構築年代が不明な第6・7・17号竪穴住居跡の3軒を除いた14軒の竪穴住居跡について若干のまとめを行ないたいと思う。なお、14軒の竪穴住居跡の構築年代が縄文時代前期・中期・後期・弥生時代と各時代にわたっている為、各時代毎に竪穴住居跡を区分し記載する。

(縄文時代前期の竪穴住居跡)

縄文時代前期に構築された竪穴住居跡は、第11・14号竪穴住居跡の2軒である。第11・14号竪穴住居跡の2軒は、規模こそ違いが共通する面をもっている。例記すると、竪穴住居跡の平面プランが方形で柱穴が壁寄りに位置し、コーナー部に配置しており炉をもたない点あげられる。構築時期は、群1・2類(早稲田6類)の時期である。本県での早稲田6類の時期の竪穴住居跡の検出はみられず本遺跡での検出例が唯一の検出例である。

本県での縄文時代前期初頭～前葉期にかけての竪穴住居跡の検出例は、長七谷地第群土器の時期の売場遺跡(青森県1985)・長七谷地遺跡(青森県1980)と、表館遺跡(青森県1985)があげられる。3遺跡で検出された竪穴住居跡は、前記で例記した本遺跡の竪穴住居跡の諸特徴と類似性をもっている。特に、表館遺跡で検出された竪穴住居跡は、規模が長径3mと小型な住居跡であり、本遺跡で検出した第14号竪穴住居跡と共通性がみられる。

(縄文時代中期の竪穴住居跡)

縄文時代中期の竪穴住居跡は、第4・5・12・15号竪穴住居跡の4軒である。4軒の竪穴住居跡は、各型式にわたっている。第5号住居跡は、円筒上層a式に構築された住居跡であり、本県での唯一の検出例であり、円形のプランで地床炉をもち、壁柱穴という特徴を有する。村越潔氏は、円筒土器文化(村越1974)の本文中で『...上層b式土器を出土する住居跡のプランは、すべて円形を呈している。...』と記載し、円筒上層式初期の段階で、竪穴住居跡の平面形が円形のプランになることを示唆した。しかし、前段階の前期円筒下層d式の竪穴住居跡の平面形プランは、石持納屋遺跡(東通村1985)の検出例など、卵形・隅九方形とバラエティーに富み統一性がみられず、中期の段階に、すべて円形プランに変化するかどうかについては、次の円筒上層式の初期段階の検出例が少なく、今後の資料にまちたいと思う。

第3・12号竪穴住居跡の2軒は、円筒上層d式に構築された竪穴住居跡である。本県での円筒上層式期に於ける竪穴住居跡の検出例は、円筒上層d式以前の検出例は少なく、円筒上層d式以降、検出例が多くみられる。県内では、近野遺跡(青森県1979)・富ノ沢遺跡(青森県1974)・

蛭沢遺跡 青森市1979)などが、円筒上層d式土器に伴う竪穴住居跡の検出例である。

本遺跡で検出した第12号竪穴住居跡は、炉を有していない。このような竪穴住居跡内に炉を有さない住居跡は、近野遺跡に於いても検出例がみられ、円筒上層e式～最花式に至る期間にみられる。また、大石平遺跡(青森県1986)の後期の十腰内式の段階でも検出例があり、円筒上層d式以降～十腰内式の期間の中で、竪穴住居跡内に炉を有するものと、炉を有さないものの二者の竪穴住居跡の存在があったといえる。第4号竪穴住居跡の壁寄り直下にみられたピットは、ピットの周縁部が盛りあがった特別な施設である。このような施設は、近野遺跡・三内沢部遺跡(青森県1978)でも検出例がみられるが、性格・用途に関しては、いまだ明確な結論に達していない。しかし、第4号竪穴住居跡内の付属施設は、炉と50cmしか離れておらず、炉との関連性も十分に考えられる。

第15号竪穴住居跡は、大木10式併行期の住居跡である。炉と柱穴のみの検出であり、明確なプランを検出し得なかった住居跡である。六ヶ所村内では、大石平遺跡・弥栄平(1)遺跡(青森県1986)から良好な竪穴住居跡及び集落を検出している。

(縄文時代後期の竪穴住居跡)

縄文時代後期の竪穴住居跡は、十腰内式以前の時期で、縄文時代後期初頭～前葉期にかけてのグループと、十腰内式の後期後葉の2つのグループに分かれる。

後期前葉期のグループは、第8・10・13・16号竪穴住居跡の4軒である。4軒の住居跡の炉は、地床炉・石組炉・石囲炉とみられるが、後期前葉期の炉はバラエティに富み、後期前葉期の集落跡を検出した沖附(2)遺跡(青森県1986)も同様に、炉の変化に富んでいる。炉の形態で指摘できる点は、石組炉及び石囲炉のつくりが雑である点があげられる。

後期後葉期のグループは、第1・2・9号竪穴住居跡の3軒である。特徴としては、規模が7㎡と3軒ともに小型な住居跡で、第1・2号住居跡の炉の下部にフラスコ状ピットを有し、柱穴は壁柱穴が主体で、第9号竪穴住居跡では、2本柱の柱穴がみられる点などがあげられる。後期後葉期の時期に構築された住居跡は、県内でも類例が増加している。大湊近川遺跡(青森県1987)・水木沢遺跡(青森県1977)・蛭沢遺跡(青森市1979)・丹後谷地遺跡(八戸市1986)・尻高(2)遺跡(青森県1985)で良好な資料が増加している。

(弥生時代の竪穴住居跡)

弥生時代に構築されたものは、第3号竪穴住居跡の1軒のみ検出した。住居跡の中央部に地床炉をもち、4本柱の主柱穴をもつ竪穴住居跡である。ただし、第3号竪穴住居跡内の出土遺物は、土器が数片と少なく、土器文様の施文から縄文時代晩期の可能性も考えられる。

(成田)

第4表 竪穴住居跡一覧表

竪穴住居跡番号	平面形	規模()は推定			炉	構築時期
		長径m	短径m	床面積㎡		
第1号竪穴住居跡	円形	3.54	2.96	7.38	地床炉	後期 十腰内Ⅳ・Ⅴ式
第2号竪穴住居跡	不整形円形	(3.50)	2.95	7.77	地床炉	後期 十腰内Ⅳ・Ⅴ式
第3号竪穴住居跡	円形	4.75	4.38	15.58	地床炉	弥生時代(?)
第4号竪穴住居跡	長方形	7.50	4.90	28.14	地床炉	中期 円筒上層式期
第5号竪穴住居跡	円形	4.74	4.46	15.28	地床炉	中期 円筒上層a式
第6号竪穴住居跡	長方形	(7.51)	(4.30)	(28.11)	地床炉	不明
第7号竪穴住居跡	不整形	(3.84)	(3.76)	(12.38)	地床炉	不明
第8号竪穴住居跡	円形	4.40	4.32	14.72	石組炉	後期前葉期(?)
第9号竪穴住居跡	楕円形	3.42	2.68	6.59	地床炉	後期 十腰内Ⅳ・Ⅴ式
第10号竪穴住居跡	円形	6.0	5.9	(29.05)	石囲炉	後期前葉期(弥生平タイプ)
第11号竪穴住居跡	長方形	5.8	3.6	17.39	無	前期 早稲田6類
第12号竪穴住居跡	不整形楕円形	3.1	2.44	4.72	無	中期 円筒上層d式
第13号竪穴住居跡	不明	不明	不明	不明	地床炉	後期
第14号竪穴住居跡	方形	3.76	2.73	(6.89)	無	前期 早稲田6類
第15号竪穴住居跡	円形	4.6	4.4	(11.90)	地床炉	中期 大木10式併行
第16号竪穴住居跡	不明	不明	不明	不明	地床炉	後期前葉期
第17号竪穴住居跡	楕円形	(5.1)	(4.1)	(16.20)	地床炉	不明

(2) 土壌

本遺跡では、37基の土壌を検出した。ここでは、土壌の分布状況、形態、規模、出土遺物、構築時期について順次取りあげ、まとめとしたい。

分布状況

本遺構の遺構分布状況は、調査区北側台地に集中する傾向にある。その北側台地に出土した土壌についてみると、土壌の集中する度合から、おおよそ4つのグループに区分することができる。すなわち、1つは第2・3号竪穴住居跡の周辺(A)、2つは第3号竪穴住居跡の周辺(B)、3つは比較的竪穴住居跡が散在している地点で、E-0グリッドを中心とした約20cm四方(C)、4つは第11号竪穴住居跡の周辺(D)である。

(A)(B)では、竪穴住居跡を中心として、その周辺に土壌が集中している。竪穴住居跡と土壌の関係については、第4・5号土壌が第2号竪穴住居跡と、また、第21号土壌は第3号竪穴住居跡と切り合っている。

(C)では、縄文時代前期、中期、後期に比定される住居跡が散在しており、土壌もまたそれらの竪穴住居跡の周辺に散在している。ここでは、第32号土壌が第14号竪穴住居跡と切り合い関係にある。

(D)では、竪穴住居跡の周辺に土壌が数基存在しているが、竪穴住居跡と土壌の切り合いはない。

形態

平面形態は、円形及び円形に近い楕円形を呈する土壌が大部分である。断面形態は、底部から緩やかに立ちあがりながら開口部に至る鍋底形や舟底形を呈するものが大部分である。いわゆるフラスコ状あるいはフラスコ状に近い形態の土壌は、全体の約8%にすぎない。

規 模

土壌の規模は、最大のもので開口部長径264cm、最小のもので長径48cmを測り、平均値は、開口部長径135.8cm、短径122.0cm、底面で長径94.4cm、短径85.7cm、深さ38.7cmである。中規模の土壌が比較的多い傾向にある。

出土遺物

土壌から出土した遺物は、土器、剥片石器、礫、礫石器である。

土器は、第6号・26号・27号・28号・29号・30号・32号・36号・37号・38号土壌の10基の土壌より出土している。また、石器、礫などは、第1号・25号・26号・27号・28号・29号・30号・37号土壌の8基より出土している。石器の種類としては、石槍、不定形石器、磨石、敲石、石皿あるいは台石で、合計10点が出土している。石器の破損率は20%である。さらに、炭化材が第26号土壌下部より出土している。

遺物の出土状況を見ると、土器のみ出土の土壌は13.5%、石器、礫のみ出土の土壌は8.1%、土器、石器、礫を出土する土壌は13.5%である。

構築時期

土器出土の土壌は10基である。各土壌の土器出土状況について概観すれば、第6号・32号・36号土壌出土の土器は、覆土中からのものである。第38号土壌出土の土器は、第1層出土であるが、堆積土層の観察から、流れ込みの可能性も考えられる。第27号・28号・29号・30号・37号土壌では、おおむね土壌中下部より土器が出土し、土壌に共伴すると思われる。

構築時期については、出土土器から、第38号土壌は縄文時代早期（群 - 9類）、第30号土壌は縄文時代前期（群 - 2類）、第37号土壌は縄文時代中期（群）、第6・27・28・32号土壌は縄文時代後期に該当すると思われる。しかし、第38号土壌は、土器出土状況、堆積土層の観察から、構築時期を断定できない。

竪穴住居跡と土壌との関連性について概観すれば、第4号土壌は第2号竪穴住居跡に切られており、竪穴住居跡が縄文時代後期（群 - 4類）と考えられることから、それよりも古いと考えられる。第6号土壌は第2号竪穴住居跡に隣接し、ともに縄文時代後期（群 - 4類）の土器を伴出している。第21号土壌は第3号竪穴住居跡の一部を切って構築されているが、竪穴住居跡の時期が弥生時代？と考えられることから、それより新しいと思われる。第26号・27号・28号・32号土壌は、縄文時代前期～後期の散在している竪穴住居跡周辺に存在することから、土壌の時期も縄文時代前期～後期にわたり、時間的な隔りがある。第29・30号土壌は第11号竪穴住居跡周辺に位置し、いずれも縄文時代前期の土器が出土している。

以上、本遺跡で検出された土壌は、縄文時代早期～後期と幅広い時期にわたっている。

（奈良）

第5表 土壌観察表

土壌 番号	グリッド	重 複	平面形	断面形	計 測 値 (cm)			備 考
					開 口 部	底 面	深 さ	
1	AB-15	無	円 形		68×64	28×26	32~42	
2	E-11・12	無	不整円形	舟 底 形	106×98	69×67	27~36	
4	G-12・13	有	円 形	舟 底 形	72×62	53×52	21~24	2 Hと切り合い
5	G-11・12	有	円 形		125×121	105×100	50~65	2 Hと切り合い
6	F-13	無	円 形	鍋 底 形	78×69	44×43	16~22	
7	G・H-10・11	無	不整円形	鍋 底 形	246×242	117×116	18~35	
8	H-12	無	不整楕円形	鍋 底 形	82×64	44×40	10~20	
9	H-12	無	不整円形	鍋 底 形	68×66	35×31	14~17	
11	I-12	有	不整楕円形	鍋 底 形	122×84	46×42	30~35	12、13号土壌と切り合い
12	I-12	有	不整楕円形	鍋 底 形	118×84	72×49	31	11号土壌と切り合い
13	I-12・13	有	不整円形	(鍋底形)	94×78	44×35	30~38	11号土壌と切り合い
14	E-13	無	不整円形	播 鉢 形	48×46	19×18	29~32	
15	O-16	有	円 形	フラスコ形	148×145	155×153	60~76	16、17号土壌と切り合い
16	O-16	有	楕 円 形	鍋 底 形	98×(56)	70×(46)	16~26	15号土壌と切り合い
17	N・O-17	有	楕 円 形	(鍋底形)	(85)×(70)	(35)×(28)	19~30	15号土壌と切り合い
18	N-18	有	円 形	(鍋底形)	158×(120)	62×49	35~36	19、20号土壌と切り合い
19	N-18・19	有	円 形	(舟底形)	264×262	212×193	47~57	18、20号土壌と切り合い
20	N-18	有	円 形	(皿 形)	175×166	152×144	7~8	18、19号土壌と切り合い
21	O-17・18	有	不整円形	舟 底 形	113×100	88×73	22~28	3 Hと切り合い
22	N-17	無	円 形	不 整 形	81×75	24×21	25~37	
23	Q-21	有	円 形		160×(154)	88×82	80~84	24号土壌と切り合い
24	Q-21	有	円 形	(鍋底形)	(104)×(100)	53×(30)	28~32	23号土壌と切り合い
25	AT・AS-6	無	円 形	舟 底 形	248×244	206×203	36~68	
26	E-3	無	円 形	円 筒 形	156×155	152×150	38~52	
27	H-1・2	有	不整円形	円 筒 形	142×140	138×136	68~80	風倒木と切り合い
28	B-1	無	不整円形	フラスコ形	141×140	162×158	126~134	
29	M・N-エ	無	円 形	鍋 底 形	192×184	70×69	30~40	
30	P-ア	無	円 形	鍋 底 形	230×206	116×110	22~34	
31	A-ア・O	無	(円 形)	舟 底 形	180×(114)	158×(110)	60~70	
32	F-1	有	円 形	フラスコ形	125×114	134×124	29~48	14 Hと切り合い
33	D-O・1	有	(不整楕円形)	(舟底形)	(130)×108	(60)×50	50~58	34号土壌と切り合い
34	D-O・1	有	(不整楕円形)	(舟底形)	(160)×128	(90)×78	52~58	33号土壌と切り合い
35	P・Q-ウ・エ	無	円 形	皿 形	168×165	123×110	16~18	
36	T-ウ・エ	無	円 形	舟 底 形	178×174	158×150	44~52	
37	G-ウ	無	円 形	円 筒 形	162×160	157×152	26~54	
38	BM-10	無	円 形	皿 形	115×111	107×106	2~10	
39	O-17・18	有	不整形	(鍋底形)	(83)×(42)	(45)×(27)	13~14	3 Hと切り合い

2. 縄文・弥生時代の遺物

(1) 土 器

第 群土器 (縄文時代早期)

本群土器は、貝殻文を多用する土器であり縄文時代早期中葉の白浜・小船渡平式に併行する土器群と思われる。

白浜・小船渡平式は、江坂輝弥氏(江坂1954)が型式設定をなされたが、資料の少なさと型式設定のあいまいさから土器編年のいまだ不明な一つの型式である。その後、白浜・小船渡平式の両型式が分離され各々の独立した型式となり得るかどうかについては、数多くの報告書に於ける研究者の分類をみる時、白浜・小船渡平式を分離して扱っている報告書は表われていない。本報告書に於いても白浜・小船渡平式を分離せず群として一括として取り扱った。なお、

江坂輝弥氏の型式設定を行なった文様要素にみいだせられないものについても本群土器として取り扱っている。この事は、白浜・小船渡平式が江坂輝弥氏の型式の範疇でとらえきれない文様要素を表出しており、江坂編年の再考が必要と思われる。

次に本遺跡から出土した第 群土器の特徴を列記したいと思う。

1．文様要素について

文様要素の特徴としては、 類土器の沈線を施文する土器が多く交差状に構成するパターンが多い。また、 2 類土器の爪形刺突文土器と胎土・整形等を比較すると差はみられない。貝殻腹縁文の使用頻度が少ない点や他にはみられない 4 類土器の貝殻表圧痕文施文の土器がみられるという特徴を有する。

2．縄文を多用している。

3 類土器に分類した縄文には、単節・複節・綾絡文を施文しており、爪形文や沈線との組み合わせによって施文される。他の遺跡では、根城跡(八戸市1983)・新納屋 1 遺跡(青森県1976)・館平遺跡(杉山1980)・千歳 13 遺跡(青森県1976)・西股遺跡(北海道1974)から出土し、本遺跡で出土しなかった撚糸文が根城跡・館平遺跡から出土している。列記した遺跡の縄文施文の土器は、主体的文様要素ではなく副次的な文様要素である。

3．文様の組み合わせパターンが多い。

本群の文様組み合わせは、9 類の底部を除き15種の組み合わせが確認された。組み合わせの多い新納屋 1 遺跡では、貝殻腹縁文と他の文様要素の組み合わせが、根城跡では、丸棒状刺突と他の文様要素の組み合わせと各々の遺跡内に於ける様相を異にしている特徴がみられる。

一方、幸畑 1 遺跡(青森県1977)では、組み合わせのバリエーションが少ない遺跡も存在する。

4．口唇部上面の刻みについて

本遺跡での出土土器の口唇部上面には、斜位及び直行に連続した刻み目を有する土器が多い。一方、上尾駸 2 遺跡 B・C^{注(1)}地区では、口唇部上面の刻みは少なく口唇部寄りの器外面に連続して圧痕した土器が多く相反した関係がみられる。

5．底部の形状

9 類に分類した底部の形状は、乳房状突起を有する点があげられる。他の遺跡では先端部が丸みをもつ形状であるのに対して本遺跡の底部形状は特色をもっている。

以上が、第 群土器の特徴を列記した。

六ヶ所村内では、半径 7 km 以内に白浜・小船渡平式の出土する遺跡が新納屋 1 遺跡・上尾駸(2 遺跡 B・C と位置している。これらの遺跡は、貝殻腹縁文を多用する新納屋 1 遺跡、爪形刺突文を多用する上尾駸 2 遺跡 B・C、縄文を多用する本遺跡と遺跡内に於ける文様要素・文様構成に差がみられる。この事実は、半径 7 km という狭い範囲内での地域性とは考えにくい。今

後、本遺跡を含めた3遺跡の比較検討が必要と思われる。

注1) 上尾駸2遺跡B・Cは、本遺跡から約700m離れた所に位置しており、白浜・小船渡平式を多量に出土した遺跡である。今年度報告書刊行の予定である。

第 群土器（縄文時代前期）

本群土器は、文様施文の差異から第1類土器～第3類土器と類別を行なった。本章では、1類土器～3類土器についての時期的な問題及び文様施文の特徴について若干のまとめを記載する。

1類土器に分類した連続押し引き竹管文施文の土器と第2類土器の縄文施文の土器の相関関係は、本遺跡から検出した第14号竪穴住居跡（ループ文と連続押し引き竹管文）・第30号土壇（縄文と連続押し引き竹管文）の遺物の共伴関係及び1・2類土器の製作技法等から同一時期の所産と考えられる。ただし、本報告書で分類した2類土器C種の綾絡文を施文の土器は、和野前山遺跡 青森県1984からも同様のモチーフをもつ土器が出土しており、本類に含めたが、やや製作技法・焼成の面から1類土器・2類土器a種・b種の土器と異質の様相を呈している。

これら1・2類土器は、早稲田6類（佐藤他1961）・尾駸（佐藤他1961）・春日町式（児玉他1954）という型式名称で呼ばれ把握されてきたものである。

県内に於ける類例の資料は、鷹架遺跡第 群土器（青森県1981）・表館遺跡第 群土器（青森県1985）・和野前山遺跡第8群土器（青森県1984）が相当すると思われる資料が増加している。これらの早稲田6類に併行する土器は、和野前山遺跡の報告書中で三宅徹也氏が指摘した様に和野前山第8群土器と鷹架第 群土器とでは様相を異にしている。和野前山第8群土器は、波状口縁が鈍角であり、文様帯を胴部下半にまで施文し山形状及びV字形に文様が展開する。また、連続竹管文間に刺突痕を施文しているものもみられる。原体には、単節・複節・ループ文・綾絡文など多種の原体を使用している点が特徴である。一方、鷹架第 群土器は、波状口縁部が鋭利で文様区画帯の幅が狭く収束される傾向がある。文様は、山形状のモチーフが基本であるが全体的に横位方向に展開し、竹管文の終起点に円形竹管文を施文するなどの特徴を有する。また、ループ文の使用が少ないという点があげられる。

これらの和野前山第8群土器と鷹架第 群の土器と本遺跡の資料を比較すると、鷹架第 群土器の様相を含むものは、1類土器a種の横位方向に展開する土器があげられるが、鷹架第 群土器の竹管文は幅が広く本資料と相違する。また、波状口縁の形状・ループ文の多用という点についても様相を異にする面をもっている。一方、本資料は和野前山第8群土器の文様モチーフと類似している面をもつが、沈線間に刺突痕を有さない・綾絡文使用が少ない・文様区画帯の幅が狭い・縄文の使用頻度が少ない点などが本資料と相違する面である。

上記では、和野前山第8群土器と鷹架第 群と比較したが本遺跡の1類・2類土器の位置づけを考えると和野前山第8群土器と鷹架第 群土器との中間型式の可能性も考えられる。しかし、現段階での位置づけは和野前山第8群土器にちかい様相を呈しているという点に止めたいと思う。

昨今、従来の長七谷地 群 - 早稲田6類(尾駁) - 表館式(芦野1群)の編年序列(加藤1982)に対して早稲田6類と表館式(芦野1群)を逆転した編年が熊谷常正氏(熊谷1983)・大沼忠春氏(大沼1986)の両氏から相次いで発表された。今回の調査に於いては、編年序列が逆転し得るかどうかについては本遺跡の資料をもって判断する事ができなかった。ただし、三宅徹也氏が表館遺跡報告書中で指摘した早稲田6類内に於ける和野前山第8群土器と鷹架第 群土器の細別は妥当性があると思われる。しかし、和野前山遺跡報告書中に記載した鷹架第 群土器から和野前山第8群土器に移行するという点については承服できない。今後、本遺跡を含めた県内の資料の再吟味が必要と思われる。

3類土器は、文様のモチーフから江坂輝弥氏(江坂他1970)の円筒下層d₁式に併行すると思われる。

(成 田)

第 群土器(縄文時代中期)

本遺跡出土の第 群土器は、全て縄文時代中期前半の円筒上層式土器(以下、上層式)に位置付けられるものである。円筒土器の編年については、山内清男(山内1929)・江坂輝弥(江坂1970)・村越潔(村越1974)・三宅徹也(三宅1977)・鈴木克彦(鈴木1982)等の研究があるが、ここでは江坂・村越両氏の分類基準に沿って、本遺跡の資料について編年的位置付けを検討してみたい。

1類土器は縄文原体の横位側面圧痕と縦位の短線側面圧痕で文様を構成するもので、江坂の上層a₁式、村越氏の上層a式に比定されるものである。

2類土器は、1類土器と同様の側面圧痕文に加えて、隆帯文・結節回転文をもって文様を構成するもので、江坂氏の上層a₂式、村越氏の上層a式に比定されるものである。

3類土器は隆帯文と刺突文で文様を構成するもので、江坂・村越両氏の上層c式に比定される。

4類土器は隆帯文を波状・網目状に配して文様を構成するもので、さらに突起下部のボタン状装飾がみられることから江坂・村越両氏の上層d式に比定される。

本遺跡では該期に比定される住居跡が3軒検出されており、第4号竪穴住居跡が上層a式期、第3・12号竪穴住居跡が上層d式期に該当する。分布状況は住居跡の占地と直接重なるものではないが、比較的隣接して出土している。

六ヶ所村周辺において、円筒上層式期の集落遺跡は本遺跡を除くと、富ノ沢2遺跡が掲げら

れるのみで、該期の土器を出土する遺跡も概して多くはない。また、あっても散在する程度で、器形を知り得るような大型破片は少ないようである。管見の範囲では富ノ沢2遺跡、大石平遺跡、表館遺跡 で出土している。富ノ沢2遺跡では上層c・d・e式が(青森県1974)、大石平遺跡では上層a・c・d式が(青森県1985・1986・1987)、表館遺跡 では上層a₂式が(青森県1985)それぞれ出土している。そのうち富ノ沢2遺跡で5群土器としたものの中に本遺跡の4類に極めて類似するものが認められる。(川岸)

第 群土器(縄文時代後期)

本群土器は、1類～5類に分類した。本章では分類した土器の編年的な位置づけを検討したい。

1類土器のB～D類を中心とした土器は、縄文時代後期初頭期～前葉期にかけての土器である。県内の後期初頭期の資料は、県南の丹後谷地遺跡(八戸市1986)・牛ヶ沢3遺跡(青森県1984)から出土し、粘土紐上面の圧痕及び撚糸圧痕を多用するという特徴を有し、後期初頭期に於けるメルクマールではないかと考えられる。しかし、丹後谷地遺跡第1群と牛ヶ沢3遺跡第1群土器は、分類した中で文様構成に差異がみられ細分の可能性は十分に考えられる。E類の沈線施文の土器を1類土器に分類したのは、後期前葉期に位置づけられる沖附2遺跡(青森県1986)から前葉期の土器と沈線施文の土器が共伴して出土しており、沈線施文の土器は数こそ少ないが、後期の初期の段階に存在した事は事実と思われる。F類の切断蓋付土器(成田1986)は、県内一円に分布しており、出土しなかった北海道南部に於いても出土例が知られる様になった。また、秋田県大湯遺跡(鹿角市1986)では、発見されなかった十腰内式(?)の段階にも存在するとの事であり、時期的に幅広く使用された土器と思われる。

2類土器は、十腰内式以前に位置づけられる土器であり、北海道の涌元式(北海道1986)に併行する。弥栄平2遺跡(青森県1984)から良好な資料が出土している。

3類土器は、十腰内式(磯崎1968)に比定される土器である。特に櫛歯状施文土器は、新道(4遺跡(北海道1986)で大津式の古い段階という狭い位置づけを行なっている。一方、本県の場合は、十腰内式の古い段階(縦位の縁取りなしの文様)～十腰内式の新段階に深鉢形に多く施文され、本県も時期的に幅が狭い段階に施文される文様である。

4類土器は、十腰内式(磯崎1986)に比定される土器である。十腰内式は、県内で類例が増加し、尻高4遺跡(青森県1986)・水木沢遺跡(青森県1977)・大湊近川遺跡(青森県1987)・丹後谷地遺跡等から集落を伴って良好な資料が出土している。特に磯崎正彦氏の設定した十腰内式内で処理し得ない面や、北海道の堂林式土器との関係、県内に於ける十腰内式の地域差など十腰内式内部の問題が多い。その中で岡田康博氏(岡田1986)は、十腰内式の細分を取

り組み第 期～ 期に細分をこころみている。岡田氏の細分は、妥当性があり高く評価されるものである。本遺跡の第 4 類土器も岡田氏の 期に併行すると思われる。 (成田)

第 群土器 (縄文時代晩期)

本遺跡出土の第 群土器は、縄文時代晩期中葉～後葉に位置付けられるものである。本群は 1・2 類に細別されたが、乏しい個体数の割には比較的良好な資料といえるだろう。ここでは本遺跡出土資料の編年的位置付けについて検討を加えてみたい。

1 類土器は浅鉢形を呈し、口縁部文様は 2 個一対の小突起の付設と平行沈線、連続刺突文の組み合わせにより構成されている。胴部には磨消縄文による雲形文で K 字状のモチーフが展開される。口縁部の小突起は上から見ると 8 の字状を呈しており、所謂 B 突起と称されるものである。以下に描出される平行沈線・刺突文との組み合わせで、通例、大洞 c₁ 式の各器種に認められる属性である。また、胴部に展開される K 字状の雲形文も大洞 c₁～c₂ 式に多用される文様で、最も類似する例としては浪岡町細野遺跡出土の第 4 群・椀形 1・2 類とされたものがある。(高橋 1981)。以上の観点からみて 1 類土器は大洞 c₁ 式に比定される。

2 類土器は深鉢形を呈し、平行沈線と斜行縄文で文様を構成するものである。研磨が施された口縁の無文部には、平行沈線が巡り、沈線には粘土の貼り付けが施され、工字文状のモチーフが描出されている。これらの文様構成の要素から 2 類土器は大洞 A 式に比定される。

本遺跡で縄文時代晩期に位置付けられる遺構は検出されておらず、これらの遺物は単独で出土したものである。調査区内に限って言えば、該期に人々の生活の痕跡は認められず、これらの土器は何らかの要因で当地にもたらされ、遺棄されたものと思われる。

六ヶ所村周辺においては縄文時代晩期の集落遺跡はみられず、遺物の出土も僅少である。近年の調査では大石平遺跡で土壌が三基、大洞 B C～C₁ 式土器が 17 点出土している(青森県 1984) にすぎない。本遺跡においても散発的な出土ではあるが、遺存状況が比較的良好な資料であり、注目されよう。 (川 岸)

第 群土器 (弥生時代)

弥生時代の土器は、本調査区北側台地の遺構外から出土した。主にその文様から 10 類に分類したが、次に特徴的な文様についての類例を概観したい。

本遺跡の弥生時代の土器は、念仏間式あるいは大石平遺跡(青森県 1985) 第 1 群土器に比定されるものが大部分である。

念仏間式土器の特徴としては、(1) 平行沈線を多段とし連続山形文を施文するもの、(2) 磨消縄文を主体とするもの、(3) 磨消縄文と重菱形文を組み合わせたもの、(4) 口唇部に刻目を施文した

もの、(5)列点文のあるもの、と指摘している(橋1979)。本遺跡出土の土器分類と対比すれば、1、2、4、6、7類が相当する。また、2類の第147図-9と4類の第151図-11は大石平遺跡1群土器と極めて類似するものである。

連続山形文は、田舎館3群土器(須藤1982)、外崎沢1遺跡(脇野沢村1979)、蛭沢遺跡(青森市1979)、北海道の瀬棚町南川遺跡(瀬棚町1983)の第1群と第2群等でみられ、また、磨消縄文は、田舎館2群(須藤1982)、外崎沢1遺跡、蛭沢遺跡等でみられる。さらに、重菱形文は、外崎沢1遺跡、秋田県志藤沢遺跡(半田1959)、字津ノ台遺跡(須藤1969)等で認められる。ちなみに、岩手県上野遺跡(一戸町1985)では、平行沈線文、連続山形文、磨消縄文などの文様構成の土器が出土し、念仏間式あるいは大石平1群に極めて類似するものである。

次に交互刺突文であるが、これは天王山式の特徴とされている(中村1976)。本県では千歳遺跡(13)青森県1976)、鳥海山遺跡(青森県1977)、平賀町掘合1号遺跡(平賀町1972)でみられ、また、岩手県湯舟沢遺跡(滝沢村1986)の第1類土器は天王山式の特徴を備えており、良好な資料となっている。綾絡文・捺糸文は鳥海山遺跡にみられ、広義の天王山式とされている。

なお、本類4dの複合口縁は、関東地方後期前半の久ヶ原式などにみられ(神沢1966)、湯舟沢遺跡第1類土器に散見される。

さて、以上、本遺跡出土土器とそれに類似する土器を出土する遺跡について述べた。次に本遺跡の編年上の位置づけについて若干述べたい。

須藤隆氏は、念仏間式の土器を田舎館2群・3群土器に後続し、恵山B式(南川1群)との類似関係を指摘しており、東北地方の5期に位置づけている(須藤1982)。また、橋善光氏は、弥生時代後期前半のものとして指摘している(橋1979)。また、天王山式の土器は、恵山B式に後続する恵山C式と一致する特徴をもつ(中村1973)としている。

このことから、本遺跡出土の土器は弥生時代後期に位置づけられ、念仏間式(大石平遺跡第1群土器)とそれに後続すると考えられる天王山式の土器を包含しており、時間的な幅があると思われる。(奈良)

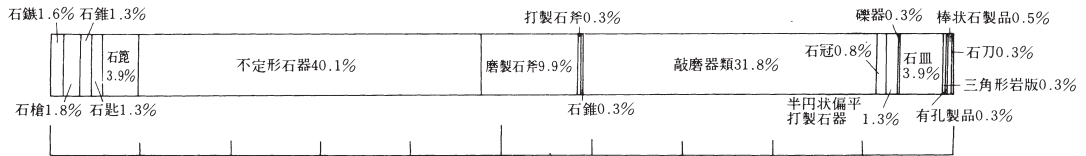
(2) 石器

本遺跡で出土した石器は、石鏃、石槍、石錐、石匙、石籠、不定形石器、磨製石斧、打製石斧、礫器、石皿、三角形岩版、有孔石製品、棒状石製品、石刀の18種類で、総計383点の出土である。

石器の出土状況は各遺構の配置に沿って分布し、特に縄文時代前期、中期、後期に及ぶ竪穴住居跡の散在する地域に出土量が多い傾向を示している。

石器組成の比率を概観すると、不定形石器が40.1%、敲磨器類が31.8%と出土率が高く、本

遺跡出土石器の主体を占めている。磨製石斧は9.9%ではあるが、他の器種と比較した場合多い方である（第183図）。



第183図 石器組成

石器に用いられている石材は、剥片石器では珪質頁岩が多く、頁岩、玉髓質の珪質頁岩、鉄石英、緑色凝灰岩は少ない。礫石器では安山岩が多く、他にチャート、凝灰岩、閃緑岩、砂岩、流紋岩、玉髓、粘板岩等がある。磨製石斧は、バラエティに富んだ石材の構成を示し、閃緑岩、緑色細粒凝灰岩、粘板岩、チャートがある。

本遺跡出土の石器の中で、基部にノッチが加えられている石槍が1点出土しているが、次にこの種の石器について若干述べ、まとめとしたい。

ノッチのある石槍は、第4号竪穴住居跡（縄文時代中期中葉に比定）第1層から出土した。この層からは他に石槍1点、石匙1点、石篋2点が出土し、いずれも入念な調整が施されている。共伴の石槍は、長さ8cmと比較的大型である。縄文時代前期には大型の石槍が多くなり、縄文時代中期後半頃から小型化する（工藤1977）傾向があり、本竪穴住居跡に伴うものとすれば、縄文時代中期中葉に該当すると思われる。

ノッチのある石槍は、県内では浮橋貝塚（村越1968）、熊沢遺跡（青森県1978）、表館遺跡（青森県1981）、山崎遺跡（青森県1981）、鶉窪遺跡（青森県1983）で出土し、また、県外では函館市サイベ沢遺跡（児玉他1958）で出土している。これらの遺跡で出土しているノッチのある石槍の時期は、縄文時代早期～前期に比定されているようである。熊沢遺跡では4点出土しており、長さが約6～13cmと幅がある。大型のものは押圧剥離により薄身の作りとなっている。また、表館遺跡では、長さ6cmで入念な二次加工が施されている。本遺跡出土のものは、大きさ、形状、調整が熊沢遺跡・表館遺跡と類似するが、時代的には新しいと思われる。

さて、基部にノッチがあり形状の類似する、いわゆるアメリカ式石鏃との関連性が問題となる。アメリカ式石鏃は、宇鉄遺跡（青森県立郷土館1979）、大面遺跡（青森県1980）で出土している。大面遺跡では3点出土し、弥生時代終末期の土器と共伴している。弥生時代の遺物として把握されている。

両者が系統的に連続性があるのか、あるいは全く関連性がないのかについては、現段階では不明である。仮に連続性があるとすれば、どの時代に大型から小型へ変化したのか、注目される所である。

（奈良）

(3) 土製品

土偶

第177図 - 1・2 は全面に連続刺突文を施した板状土偶で、類例として千歳13遺跡(青森県1976)、長者森遺跡(青森県1982)があげられる。前者は縄文時代後期初頭から十腰内式の時期に、後者は縄文時代中期後葉から後期前葉の時期に比定されている。本資料は腕部に貫通孔が認められるなど長者森遺跡の資料との類似性が高い。従って、本資料についても縄文時代中期後葉から後期前葉の範囲で扱えられると思われる。

第177図 - 3 は土偶の脚部で、中実である。斜行する隆帯と、それに平行する沈線によって装飾が施されている。調整は丹念になされており、焼成も良好である。本資料は文様・胎土・整形等からみて縄文時代後期後葉の十腰内式土器に伴うものと思われる。

鐔形土製品

貫通孔を有する鈕部のみ遺存する資料である。貫通孔はつまみの短軸方向に平行して穿たれており、大石平遺跡の分類(青森県1987)によればA類に該当する。文様は不明であるが、通例、縄文時代後期前葉に位置付けられる資料である。

甕形土製品

かさ部分のみ遺存する資料である。かさ部分は内湾するタイプのもので、本資料も通例、縄文時代後期前葉に位置付けられているものである。

ミニチュア土器

3点出土している。全て壺型土器で、若干上げ底気味の形状を呈する。器形・調整・胎土・焼成から縄文時代後期後葉の十腰内式土器に伴うものと考えられる。

不明土製品

第177図 - 9 は頭部に貫通孔を有する十字形の土製品で、完形品である。類例は求め得なかったが、前述したように装身具の一種として扱っておきたい。本資料は調整・胎土・焼成から縄文時代後期後葉の十腰内式土器に伴うものと考えられる。

第177図 - 10 は外面にのみ構位の連続刺突が施される土製品で、上部及び下部を欠損する。内面に湾曲し、両側縁が抉れている。類例は求め得なかった。文様・胎土・焼成から縄文時代中期末葉から後期前葉の所産と肥えられよう。

土器片錘

本遺跡より28点が出土しており、全て縄文時代前期初頭の早稲田6類期に帰属するものである。これら土器片錘の諸属性の基礎的な分析を通して、以下の諸点について理解された。

1) 出土状況を見ると、直接遺構に伴う例はないが、3～7点の小規模な集中域が隣接して存在し、この付近からは該期に属する竪穴住居跡・土壌が検出されている。居住空間との密接な関連性が認められよう。

2) 計測値をみると、長軸・短軸・重量のいずれも数値にばらつきが認められ、規格性は窺えない。

3) 形態は、破片・一部欠損の資料が多数を占めるということで厳密な細分は差し控え、大まかな分類を行なった。長方形(類)、不正長方形(類)が主体となっている。

4) 加工の工程は～に分け、段階的に肥えた。

素材の選択：口縁部破片を用いたものは、土器の縦位方向に直交させて長軸をとるもの(Ab)が多数を占め、胴部破片を用いたものは、平行させて長軸をとるもの(Ba)が多いという結果を得たが、この数値でみる限りでは素材の選択とその方向についての規格性は、さほど厳格なものではなかったと思われる。

第一次調整：打ち欠きによる本段階で調整を終えるものが多数(64%)を占める。

第二次調整：擦りによる周縁の整形は、形態分類の～類に多くみられた。このうちで整形が全周に及ぶものなど、比較的丹念な整形は特に～類に多い。このことから第一・二次調整の度合と、形態分類との間に相関性が認められるようである。すなわち調整の進度に伴って、～類という変容がたどれると思われる。

切り込みの付設：切り込みの手法はア～エの4類に細別された。ウは長・短軸共に平均値を超えるような大型のものに多く、エは第二次調整が加えられるものに多いという傾向が把握される。

以上のように本遺跡出土の土器片錘は、計測値・重量・形状・加工の方向といった属性については各個体間の偏差が大きく、規格性は把握されない。一方、形態と調整については相関性が認められるように思われる。

土器片錘は、縄文時代草創期の夏島式土器片を利用した神奈川県横須賀市平坂貝塚の出土例を最古とし、以後後期まで連続して存在している。関東地方では中期に至ってピークを迎えるが、現在まで知られている県内の12遺跡、137点の出土例は全んどが前期初頭の時期に位置付けられている(第6表^{注1})。また、これらは遺跡数あるいは調査密度によるものかもしれないが、太平洋沿岸、特に六ヶ所村に集中する傾向が窺える。(川岸)

第6表 県内土器片錘出土遺跡

()は現存値

	遺跡名	所在地	時期(型式)	点数	計測値(cm)			重量(g)	備考
					長さ	幅	厚さ		
1	一王寺貝塚	八戸市	中期(榎林)	1	60ほど	40ほど		不明	(宮坂, 1940)
2	野口貝塚	三沢市	前・初(早稲田6)	2.3				"	(岡本・加藤, 1963)
3	オセドウ貝塚	市浦村	不明	1	直径1.7寸、厚さ0.3寸			"	(清野, 1963)
4	芦野遺跡	金木町	前期初頭	8				"	(名久井, 1971)
5	新納屋遺跡(2)	六ヶ所村	早・中(吹切沢)	1	80	72	8	75.5	(青森県教育委員会, 1981)
6	102号遺跡(注2)	"	前期初頭	1	59.5	72	8	36.5	(" , 1979)
7a	発茶沢遺跡	"	前期初頭	2	(42) 96	63 65	10 10	(37) (82.6)	(" , 1979)
7b	"	"	"	41	55~115	35~79	8~13	24~114	(" , 1981)
8	鷹架遺跡	"	"	1	95	60	8	不明	(" , 1981)
9	山崎遺跡	今別町	"	17				"	(" , 1981)
10	和野前山遺跡	八戸市	"	20	58~104	48~68	7~10	31~62	(" , 1983)
11	表館遺跡II	六ヶ所村	"	10	55~87	46~68	8.3~11.8	29.4~60.1	(" , 1984)
12a	大石平遺跡I	"	前・初(尾駁・芦野I)	15	36~74	35~65	8~10	7.35~51.95	(" , 1984)
12b	" II	"	前・初(早稲田6)	14	57~78	44~56	7~10	30~41	(" , 1985)
12c	" III	"	不明	2				不明	(" , 1986)

注1 第6表は発茶沢遺跡(青森県1982)の報文に集録された一覧表に一部加筆し、掲載に充てたものである。

注2 六ヶ所村 102号遺跡は、同村上尾駁(2)遺跡と改称されており、同遺跡のB・C地区にあたる。

3. 平安時代の遺物

(1) 平安時代の遺物

本遺跡では、平安時代の遺構・遺物は極めて少ない検出・出土であった。

第180図 - 2 の甕形土師器は埋設土器遺構より出土した。この土器の特徴としては、(1) 平底で木葉痕がない、(2) 最大径を胴部にもつ、(3) 胎土には小礫を含むなどの点があげられる。本遺跡周辺の沖附1遺跡(青森県1986)、弥栄平(4)・(5)遺跡(青森県1987)出土の甕形土師器と比較すれば、底辺部の張り出しの有無、木葉痕の有無、胎土中の小礫の多少、最大径の位置などの諸点から、本遺構出土の甕形土師器は、弥栄平(4)・(5)遺跡出土のものよりはむしろ沖附1)遺跡出土のものに近似していると言えよう。

岡田康博氏は苦小牧火山灰を鍵層として、弥栄平(4)遺跡から沖附1)遺跡への変遷を指摘し、さらに出土遺物の年代を9世紀末葉~10世紀初頭に位置づけている(青森県1987)。このことから、本遺跡出土の甕形土師器は10世紀初頭に位置づけられると思われる。

第180図 - 1 の壺形須恵器は、第180図 - 2 と共件しており、同様の年代の位置づけが可能と思われる。

第182図 - 1・2 の球状の甕形土師器は遺構外出土である。この土器の特徴としては、(1) 器内外面ともに刷毛目調整であり、(2) 口縁・頸部は段をもたずに「く」の字状に外反し、(3) 底面径は小さい、などの諸点があげられる。

刷毛目調整の土器については、松原遺跡(青森県1983)、鶉窪遺跡(青森県1983)、八戸市根城跡(八戸市1982)、浅瀬石遺跡(青森県1976)などで、奈良時代の遺構に共伴する甕形あるいは壺形土器に顕著にみられる。特に鶉窪遺跡では、器形・調整など類似する壺(球状の窯)が1点出土し、国分寺下層式の範疇に含めて把握している。しかし、鶉窪遺跡出土の土器は口縁部に沈線と段を有しており、本遺跡出土のものとは相異なる。

本遺跡出土の球状の甕形土師器は、口縁・頸部が段をもたずに「く」の字状に外反する点、胎土・焼成などの諸点から、8世紀末葉~9世紀初頭(三浦1979)に位置づけられると思われる。

(奈良)

第 章 自然科学分析

1. 炭化材樹種同定 (第 8 号竪穴住居跡について)

嶋倉 巳三郎

青森県上北郡六ヶ所村大字尾駮字上尾駮にある上尾駮 2 遺跡 A 地区から出土した炭火木の樹種を調査した。

試料の多くは 1 - 3 cm 大の木炭で、適当に硬く、材組織は炭火による変形したものもかなりあるが、保存状態はかなりよかった。各炭片から木口、板目 柁目方向の破断面をつくり、反射顕微鏡で観察した。

試料の出土地点・遺構 上尾駮 2 遺跡 A 地区 第 8 号竪穴住居跡 (縄文時代中期)

調査結果

試料No. 1	出土層位	覆土	樹種	クリ
2	出土層位	覆土	樹種	サクラ類の 1 種 (図 3, 6)
3	出土層位	覆土	樹種	クルミ (図 4, 5)
4	出土層位	覆土	樹種	クリ (図 1, 2)
5	出土層位	覆土	樹種	クリ
6	出土層位	覆土	樹種	クリ
7	出土層位	覆土	樹種	クリ
8	出土層位	覆土	樹種	クリ
9	出土層位	床直	樹種	クリ
10	出土層位	床直	樹種	クリ

炭火木の構造

クリ *Castanea crenata* SIEB. et ZUCC.

環孔材、道管は早材部では甚だ大きい、晩材部に移ると急に小さくなり、多数集まって火炎状または斜め方向に配列する。周囲仮道管の有縁壁孔は明瞭放射組織は同性、単列のみで、試料の示す限りでは幅広い複合のものは見あたらなかった、クリとした。

クルミ *Juglans* sp.

散孔材、道管は大きく単穿孔、やや疎らに分布するが、炭火による収縮のため、分布が密になった部分もある。柔細胞は接線方向に 1 列に連なって並んでいる。放射組織は同性で、1 - 4 細胞幅。

サクラ類 *Prunus* sp.

散孔材、道管はやや小さく、2 - 3 個接続して斜めまたは放射方向に並び、単穿孔、側壁にラセン肥厚がある。放射組織は異性で 1 - 3(4) 細胞幅。この細胞数は多くのサクラ類より少な

く、エゾヤマザクラなどに近いように思われる。

試料の大部分はクリ炭となった。これはコナラ炭と共に県下の多くの遺跡の住居跡などから出土している。クルミ炭は時々出土するが、あまり多くなく、縄文時代の例として、八戸市売場遺跡，南郷村三合山遺跡などがある。

サクラ炭もあまり多く出土例はないが、八戸市葦窪遺跡や黒石市一ノ渡遺跡などが知られている。

2. 放射性炭素年代測定

学習院大学教授 木越 邦彦

¹⁴C年代測定の結果を下記の通り御報告致します。

なお年代値の算出には¹⁴Cの半減期として Libby の半減期5570年を使用しています。また付記した誤差は 線計数値の標準偏差 にもとずいて算出した年数で、標準偏差 (one sigma) に相当する年代です。試料の 線計数率と自然計数率の差が2 以下のときは、3 に相当する年代を下限とする年代値(B.P.)のみを表示してあります。また、試料の、線計数値と現在の標準炭素についての計数率との差が2 以下のときは、Modern と表示し、¹⁴C %付記してあります。

Code No.	試料	B.P.年代(1950年よりの年数)
GeK - 13176.	Charcoal from Kamiobuchi	4410 ± 240
	Sample No. 1	2460B.C
	第26号土壌底面	
GeK - 13177.	Charcoal from Kamiobuchi	3950 ± 180
	Sample No. 2	2000B.C
	第8号竪穴住居跡	

第 章 まとめ

上尾敷 2 遺跡 A はむつ小川原開発事業に係る造成地部分を昭和60・61年の 2 箇ヶ年にわたって16.736㎡を発掘調査した。調査結果を下記に記載する。

検出した遺構は、縄文・弥生時代の竪穴住居跡17軒・縄文時代の土壇37基・焼土状遺構 3 基・屋外炉 4 基・配石遺構 1 基・溝状ピット 1 基、平安時代の埋設土器 1 基・ピット群 1 基の総数65基である。

竪穴住居跡は縄文時代前期・中期・後期、弥生時代と多岐にわたっており、特に県内での検出例がなかった縄文時代前期前葉（早稲田 6 類）で柱穴配置がわかる第11・14号竪穴住居跡、縄文時代中期初頭（円筒上層 a 式）の第 5 号竪穴住居跡を検出した事は注目される。また、縄文時代後期後葉（十腰内 式）の第 1・2・9 号竪穴住居跡は、地床炉で規模が小さいのが特徴であり、他遺跡から検出される十腰内 式の竪穴住居跡と相反する構造面をもっている、今後、比較・検討すべき住居跡と思われる。縄文時代中期の第 4 号竪穴住居跡は、調査以前の段階で埋まりきらない凹地として確認されたものである。このような埋まりきらない状態の縄文期の竪穴住居跡は、村内の弥栄平 4)・(5 遺跡の104号竪穴住居跡・家ノ前遺跡でも確認されている。村内では平安時代の竪穴住居跡が埋まりきらない状態で確認されている例が多いが、当該地域の縄文期に於いても埋まりきらない状態で存在している事は注目される。

平安時代の遺構では、埋設土器の出土が県内初であり貴重な資料と思われる。

これらの遺構は、調査区の A V ラインから北側に位置しており、調査区の西側地域に集落の中心部が存在していると思われる。今回の調査では、各期にわたる遺構を検出しながら集落の一部分（外側地域）を検出したのみに止まり、集落の全体的構造を把握する事はできなかった。

遺物は、縄文時代早期～晩期・弥生・平安時代の土器が出土した。各記の時期を記載すると縄文時代早期（白浜・小船渡平式）前期（早稲田 6 類・円筒下層 d₁式）中期（円筒上層 a・c・d 式、大木10式併行）後期（初頭期～前葉期・前十腰内 式・十腰内 式）晩期（大洞 C₁・A 式）弥生時代（田舎館式・念仏間式・天王山式）が出土した。特に第 群土器（縄文時代早期）の白浜・小船渡平式、第 群 1・2 類土器（縄文時代前期）の早稲田 6 類、第 群 1・2 類土器の縄文時代後期初頭～前葉期の資料は、県内の土器編年上いまだ明確に位置づけられていない資料であり、土器編年を研究する際に良好な資料を提出したと思われる。

土製品は、土偶・装飾品・土器片錘等が出土した。土器片錘はすべて縄文時代前期の早稲田 6 類の時期である。村内の発茶沢・表館遺跡からも同時期の土器片錘が出土しており、縄文時代前期前葉期に漁労活動が活発であった事が伺える資料である。

最後に本遺跡の発掘調査で得た成果が、調査研究の一助となりえたなら喜びにたえない次第です。
(成田滋彦・奈良昌毅・川岸敏男)

引用・参考文献

ア行

- 江坂輝弥 1954 「各地域の縄文土器 東北」 『日本考古学講座』3
- 岡本勇・加藤晋平 1963 「青森県野口貝塚の発掘」 『MOUSEION』第9号
- 磯崎正彦 1968 「十腰内遺跡」 『岩木山』所収
- 江坂輝弥 1970 『石神遺跡』 ニューサイエンス社
- 青森県教育委員会 1974 『富ノ沢2遺跡』 『むつ小川原開発予定地域内埋蔵文化財試掘調査概報』
青森県埋蔵文化財調査報告書第24集
- 青森県教育委員会 1976 『浅瀬石遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書第26集
- 青森県教育委員会 1976 『千歳遺跡13発掘調査報告書』 青森県埋蔵文化財調査報告書第27集
- 青森県教育委員会 1976 『むつ小川原開発予定地域内埋蔵文化財試掘調査概報 - 新納屋1遺跡』
青森県埋蔵文化財調査報告書第28集
- 青森県教育委員会 1977 『鳥海山遺跡発掘調査報告書』 青森県埋蔵文化財調査報告書第32集
- 青森県教育委員会 1977 『水木沢遺跡発掘調査報告書』 青森県埋蔵文化財調査報告書第34集
- 青森県教育委員会 1978 『むつ小川原開発予定地域内埋蔵文化財試掘調査概報 - 幸畑1遺跡』
青森県埋蔵文化財調査報告書第36集
- 青森県教育委員会 1978 『熊沢遺跡発掘調査報告書』 青森県埋蔵文化財調査報告書第38集
- 青森県教育委員会 1978 『三内沢地遺跡発掘調査報告書』 青森県埋蔵文化財調査報告書第41集
- 青森県立郷土館 1979 『字鉄 遺跡発掘調査報告書』
- 青森県教育委員会 1979 『近野遺跡 発掘調査報告書』 青森県埋蔵文化財調査報告書第47集
- 青森県教育委員会 1979 「102号遺跡」 『むつ小川原開発予定地域内埋蔵文化財試掘調査概報』
青森県埋蔵文化財調査報告書第48集
- 青森県教育委員会 1979 「発茶沢1遺跡」 『むつ小川原開発予定地域内埋蔵文化財試掘調査概報』
青森県埋蔵文化財調査報告書第50集
- 青森市螢沢遺跡発掘調査団 1979 『螢沢遺跡』
- 青森県教育委員会 1980 『大面遺跡発掘調査報告書』 青森県埋蔵文化財調査報告書第55集
- 青森県教育委員会 1980 『長七谷地遺跡発掘調査報告書』 青森県埋蔵文化財調査報告書第57集
- 青森県教育委員会 1981 『表館遺跡発掘調査報告書』 青森県埋蔵文化財調査報告書第61集
- 青森県教育委員会 1981 『新納屋遺跡2発掘調査報告書』 青森県埋蔵文化財調査報告書第62集
- 青森県教育委員会 1981 『鷹架遺跡発掘調査報告書』 青森県埋蔵文化財調査報告書第63集
- 青森県教育委員会 1982 『発茶沢遺跡発掘調査報告書』 青森県埋蔵文化財調査報告書第67集
- 青森県教育委員会 1982 『山崎遺跡発掘調査報告書』 青森県埋蔵文化財調査報告書第68集
- 青森県教育委員会 1982 『長者森遺跡発掘調査報告書』 青森県埋蔵文化財調査報告書第74集
- 岩手県教育委員会 1982 『西根遺跡』 東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書
- 青森県教育委員会 1983 『鶉窪遺跡発掘調査報告書』 青森県埋蔵文化財調査報告書第76集
- 青森県教育委員会 1983 『松原遺跡発掘調査報告書』 青森県埋蔵文化財調査報告書第77集
- 大沼忠春 1980 「道南の縄文前期土器群の編年について」 『北海道考古学』第20号
- 青森県教育委員会 1984 『弥栄平2遺跡発掘調査報告書』 青森県埋蔵文化財調査報告書第81集
- 青森県教育委員会 1984 『和野前山遺跡発掘調査報告書』 青森県埋蔵文化財調査報告書第82集
- 一戸町教育委員会 1974 『上野遺跡』 一戸町文化財調査報告書第13集

- 青森県教育委員会 1985 『尻高 2)・(3)・(4) 遺跡発掘調査報告書』 青森県埋蔵文化財調査報告書第 89 集
- 青森県教育委員会 1985 『大石平遺跡発掘調査報告書』 青森県埋蔵文化財調査報告書第 90 集
- 青森県教育委員会 1985 『表館遺跡 発掘調査報告書』 青森県埋蔵文化財調査報告書第 91 集
- 青森県教育委員会 1985 『売場遺跡発掘調査報告書』 青森県埋蔵文化財調査報告書第 93 集
- 青森県教育委員会 1986 『大石平遺跡 発掘調査報告書』 青森県埋蔵文化財調査報告書第 97 集
- 青森県教育委員会 1986 『沖附 1 遺跡発掘調査報告書』 青森県埋蔵文化財調査報告書第 100 集
- 青森県教育委員会 1986 『沖附 2 遺跡発掘調査報告書』 青森県埋蔵文化財調査報告書第 101 集
- 岡田康博 1986 「十腰内第 群・第 群・第 群土器の再検討」 『弘前大学考古学研究』 第 3 号
- 青森県教育委員会 1987 『大石平遺跡 発掘調査報告書』 青森県埋蔵文化財調査報告書第 101 集
- 青森県教育委員会 1987 『大湊近川遺跡発掘調査報告書』 青森県埋蔵文化財調査報告書第 104 集
- 青森県教育委員会 1987 『弥栄平 4)・(5) 遺跡発掘調査報告書』 青森県埋蔵文化財調査報告書第 106 集

カ行

- 児玉左衛門・大場利夫 1954 「函館市春日町出土の遺物について」 『北方文化研究報告』 第 9 号
- 児玉左衛門・大場利夫 1958 『サイベ沢遺跡』 市立函館博物館
- 清野謙次 1963 「陸奥国北津軽郡相内村才セドウ貝塚」 『日本貝塚の研究』 岩波書店
- 神沢勇一 1966 「5 関東」 『日本の考古学 弥生時代』
- 工藤竹久 1977 「北日本の石槍・石鏃について」 『北奥古代文化』 第 9 号
- 加藤邦雄 1982 「縄文尖底土器」 『縄文文化の研究』 第 3 巻
- 熊谷常正 1983 「岩手県における縄文時代前期土器群の成立」 『岩手県立博物館研究報告』 第 1 号
- 鹿角市教育委員会 1987 『大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書 3』 鹿角市文化財調査資料 32

サ行

- 佐藤達夫・二本柳正一・角鹿扇三 1957 「青森県上北郡早稲田貝塚」 『考古学雑誌』 第 43 巻 2 号
- 桜井清彦 1958 「東北地方北部における土師器と竪穴に関する諸問題」 『館址』
- 佐藤達夫・二本柳正一 1961 「六ヶ所村尾駮出土の土器」 『上北考古会誌』 2
- 須藤隆 1969 「秋田県大曲市字津ノ台遺跡の弥生土器について」 『文化』 第 33 巻 第 3 号
- 杉山武 1980 「白浜式・小舟渡平式土器にかかわる館平遺跡出土の早期貝殻文土器について」
『奥南』 創刊号
- 須藤隆 1982 「北辺の弥生文化」 『縄文土器大成 5 続縄文』
- 鈴木克彦 1982 「円筒土器に後続する土器の編年」 『考古風土記』 第 7 号
- 杉山武 1982 「白浜式・小舟渡平式土器にかかわる館平遺跡出土の早期貝殻文土器について 2」
『奥南』 第 2 号
- 瀬柵町教育委員会 1983 『瀬柵南川』
- 庄内昭男 1984 「秋田県における古代・中世の火葬墓」 『秋田県立博物館研究報告』 第 9 号

タ行

- 橘善光 1979 「入門講座・弥生土器 北東北 3」 『考古学ジャーナル』 第 166 号
- 高橋龍三郎 1981 「亀ヶ岡式土器の研究」 『北奥古代文化』 第 12 号 北奥古代文化研究会
- 高橋文夫 1982 「縄文時代の彫器」 『岩手県埋蔵文化財センター研究紀要』
- 滝沢村教育委員会 1986 『湯舟沢遺跡』

ナ行

- 名久井文明 1971 「青森県芦野遺跡の土器群について」 『考古学雑誌』第57巻2号 日本考古学会
中村五郎 1973 「北海道南部の続縄文土器編年」 『北海道考古学』第9輯
中村五郎 1976 「東北地方南部の弥生式土器編年」 『東北考古学の諸問題』
成田滋彦 1985 「東北地方北部の大木10式土器の周辺」 『奥南』第3号
成田滋彦 1986 「切断蓋付土器考」 『弘前大学考古学研究』第3号

ハ行

- 半田市太郎 1959 『志藤沢遺跡発掘調査報告書』 『秋大史学』第9号
平賀町教育委員会 1972 『堀合 号遺跡』
北海道第四紀研究会 1974 『函館市字紅葉山西股遺跡発掘調査報告書』
八戸市教育委員会 1983 『史跡根城跡発掘調査報告書』 八戸市埋蔵文化財調査報告書第11集
東通村教育委員会 1985 『石持納屋遺跡発掘調査報告書』
八戸市教育委員会 1986 『八戸新都市区域内埋蔵文化財発掘調査報告書 丹後谷地遺跡』
八戸市埋蔵文化財調査報告書第15集
北海道埋蔵文化財センター 1986 『津軽海峡（北海道方）建設工事埋蔵文化財発掘調査報告書3』
新道4遺跡 北海道埋蔵文化財センター調査報告書第33集

マ行

- 宮坂光次 1940 「青森県是川村 王寺史前時代遺跡発掘調査報告書」 『史前学雑誌』第2巻6号 史前学会
村越潔 1968 「浮橋貝塚」 『岩木山』
村越潔 1974 『円筒土器文化』 「考古学選書」10
三宅徹也 1974 「円筒土器の再検討」 『調査研究年報』第3号 青森県立郷土館
三浦圭介 1982 「青森県における奈良・平安時代土器編年一覧」 青森県考古学会資料
宮城県教育委員会 1983 「色麻古墳群」 宮城県文化財調査報告書第95集
村越潔 1988 「東北北部における石器・石製品の出現と消滅」 『考古学ジャーナル』第287号

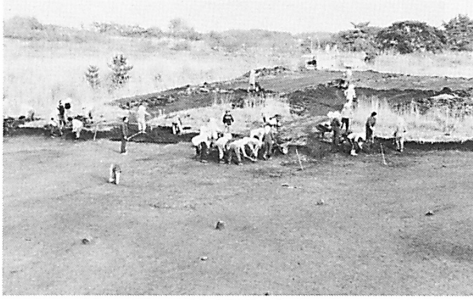
ヤ行

- 山内清男 1929 「関東北に於ける繊維土器」 『史前学雑誌』第1巻2号 史前学会

ワ行

- 脇野沢村教育委員会 1979 『家の上・外崎沢1遺跡』

写真図版



遠景写真



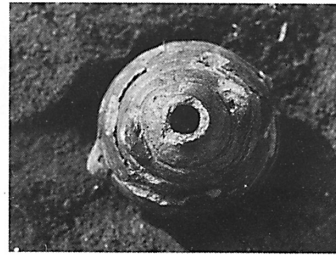
遠景写真



遠景写真



土器出土状況



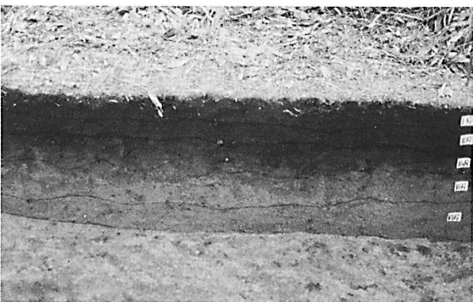
切断蓋付土器



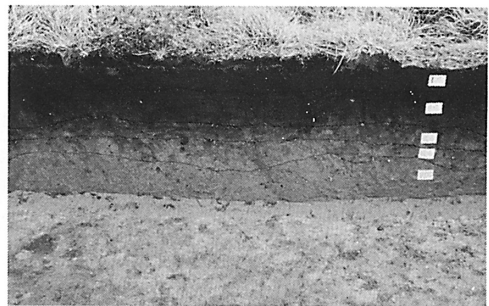
遠景写真



香炉型土器



基本層序 (W→)

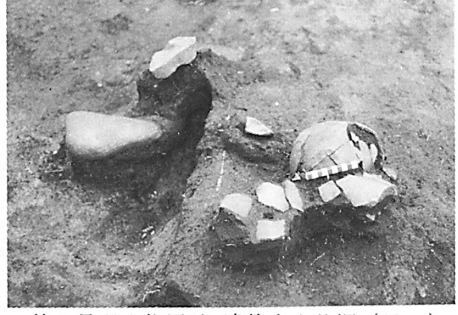


基本層序 (W→)

写真1 遠景・基本層序



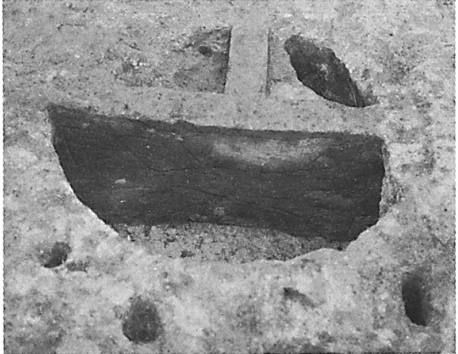
第1号竖穴住居跡 (S→)



第1号竖穴住居跡・遺物出土状況 (N→)



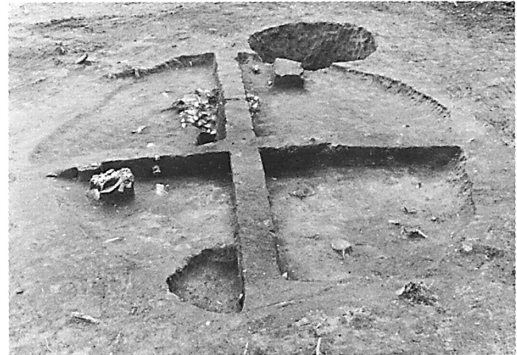
第1号竖穴住居跡・遺物出土状況 (S→)



第1号竖穴住居跡・炉 第3号土壙 (S→)



第2号竖穴住居跡 (W→)



第2号竖穴住居跡 (E→)



第2号竖穴住居跡・遺物出土状況 (S→)



第2号竖穴住居跡・遺物出土状況 (S→)

写真2 竖穴住居跡(1)



第3号竖穴住居跡・第21号土坑 (S→)



第3号竖穴住居跡炉 (W→)



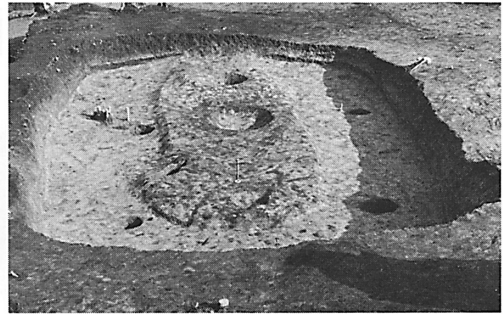
第4号竖穴住居跡遺物出土状況 (E→)



第4号竖穴住居跡 (W→)



第4号竖穴住居跡 (S→)



第4号竖穴住居跡 (S→)



第5号竖穴住居跡遺物出土状況 (N→)



第5号竖穴住居跡 (N→)

写真3 竖穴住居跡(2)



第6・7号竖穴住居跡 (S→)



第8号竖穴住居跡 (S→)



第8号竖穴住居跡・遺物出土状況 (E→)



第9号竖穴住居跡 (W→)



第10号竖穴住居跡
遺物出土状況 (N→)



第10号竖穴住居跡・炉 (N→)



第11号竖穴住居跡 (N→)

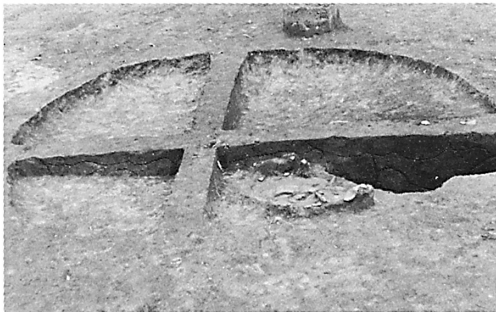
写真4 竖穴住居跡(3)



第12号竖穴住居跡 (S→)



第13号竖穴住居跡 (N→)



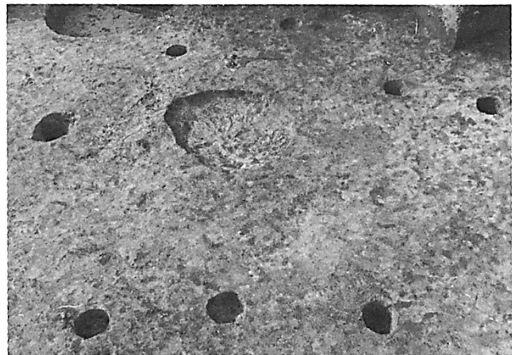
第14号竖穴住居跡・第32号土壙 (S→)



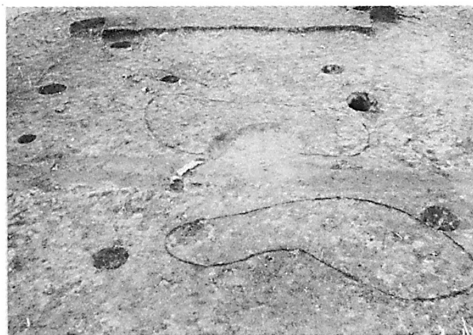
第14号竖穴住居跡・第32号土壙 (S→)



第14号竖穴住居跡 (S→)



第15号竖穴住居跡 (N→)



第16号竖穴住居跡 (E→)



第17号竖穴住居跡 (W→)

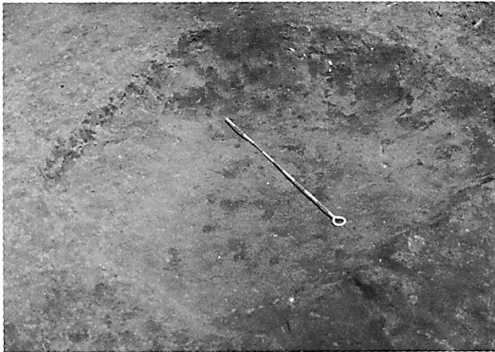
写真5 竖穴住居跡(4)



第2号土壙 (S→)



第6号土壙



第7号土壙 (S→)



第5号土壙 (N→)



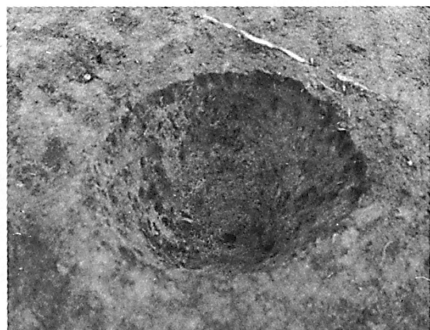
第8号土壙 (S→)



第9号土壙 (S→)



第11・12・13号土壙 (W→)

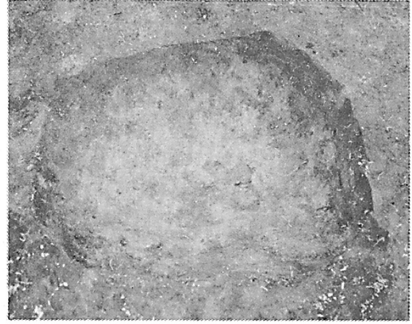


第14号土壙 (N→)

写真6 土壙(1)



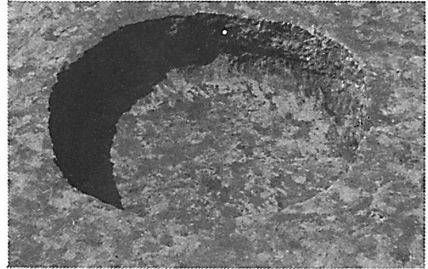
第18・19号土壙 (W→)



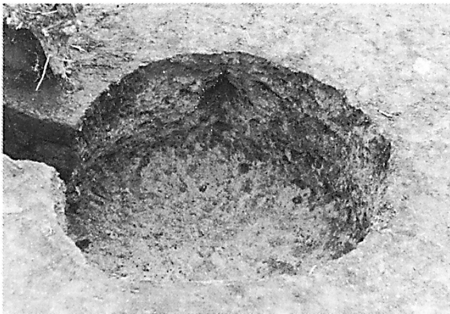
第21号土壙 (W→)



第25号土壙 (S→)



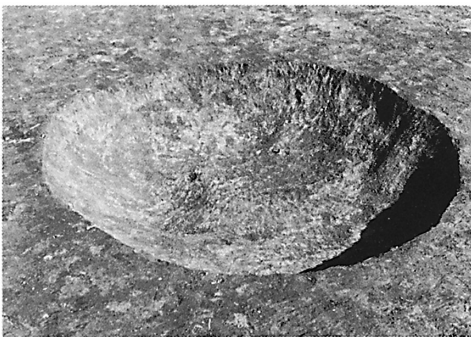
第26号土壙 (E→)



第27号土壙



第28号土壙 (W→)



第30号土壙 (W→)



第31号土壙 (E→)

写真7 土壙(2)



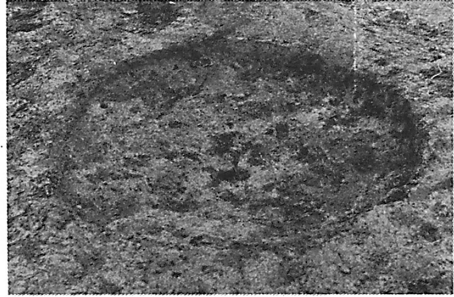
第35号土坑 (E→)



第36号土坑 (E→)



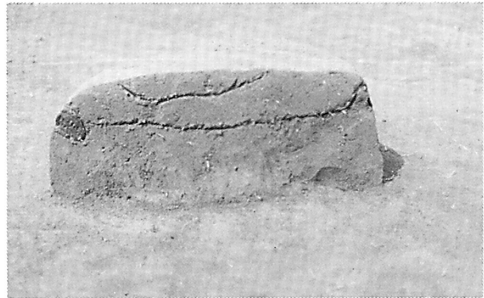
第37号土坑 (E→)



第38号土坑 (S→)



第3号烧土状遺構 (S→)



第2号烧土状遺構 (S→)



第1号屋外炉 (W→)

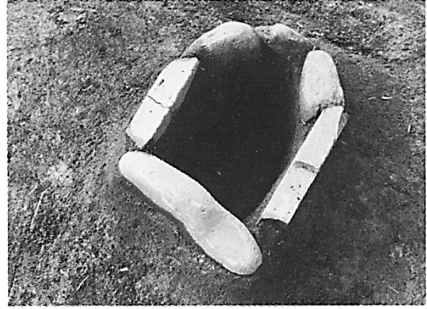


第2号屋外炉 (N→)

写真8 土坑・烧土状遺構・屋外炉



第3号屋外炉



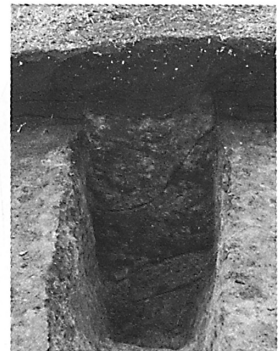
第4号屋外炉 (N→)



第1号配石遺構 (S→)



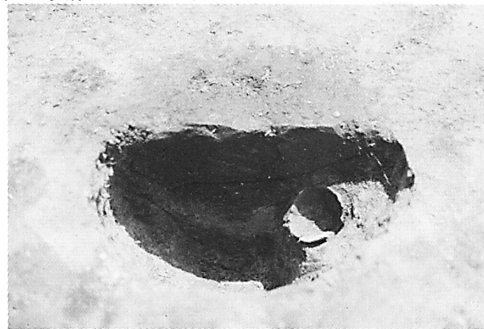
第1号溝状ピット (N→)



第1号溝状ピット (N→)



第1号溝状ピット及び第1号小ピット群



第1号小ピット群Pit 9 (W→)



第1号埋設

写真9 屋外炉・配石遺構・溝状ピット・ピット群・埋設土器

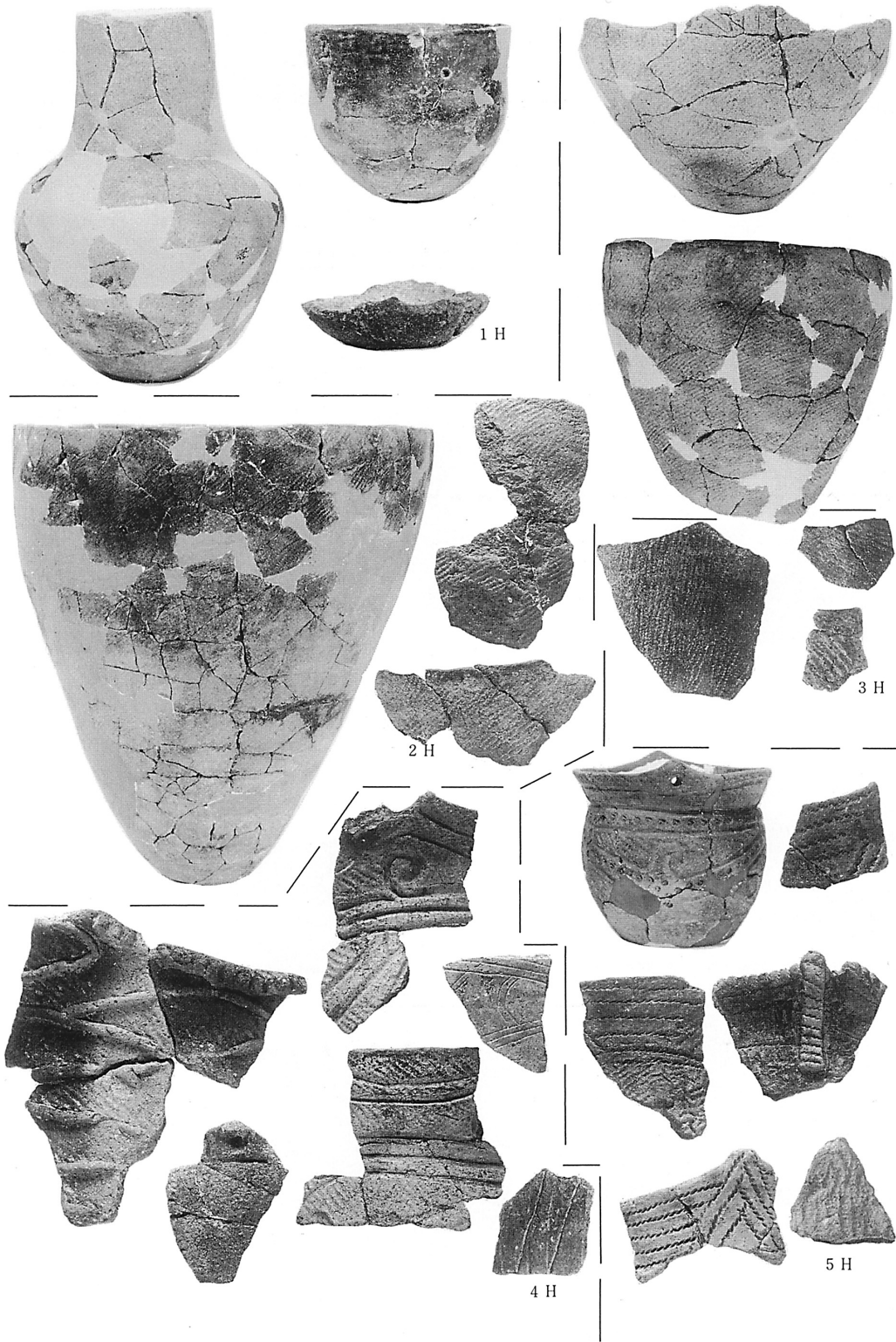


写真10 遺構内出土土器(1)

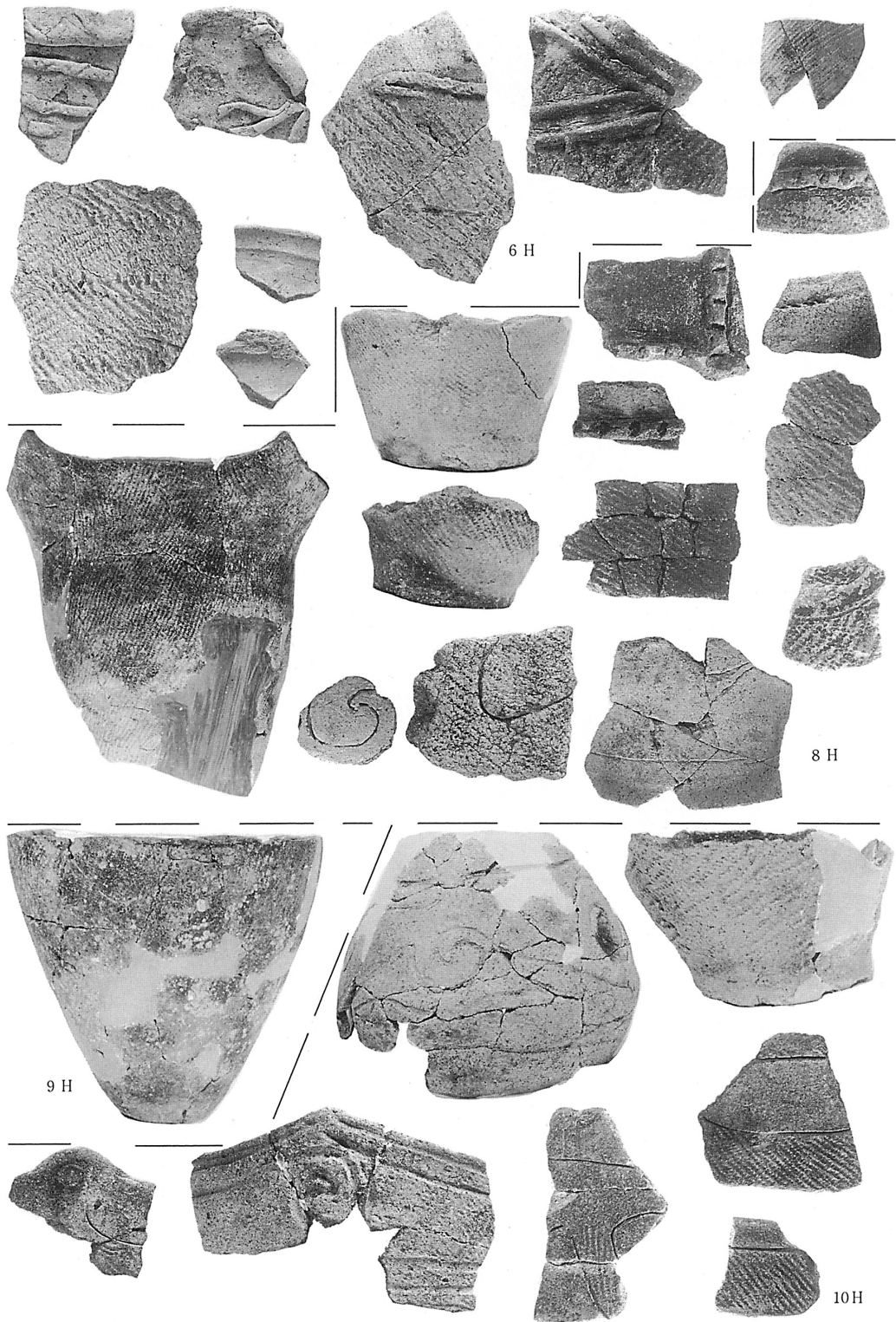


写真11 遺構内出土土器(2)

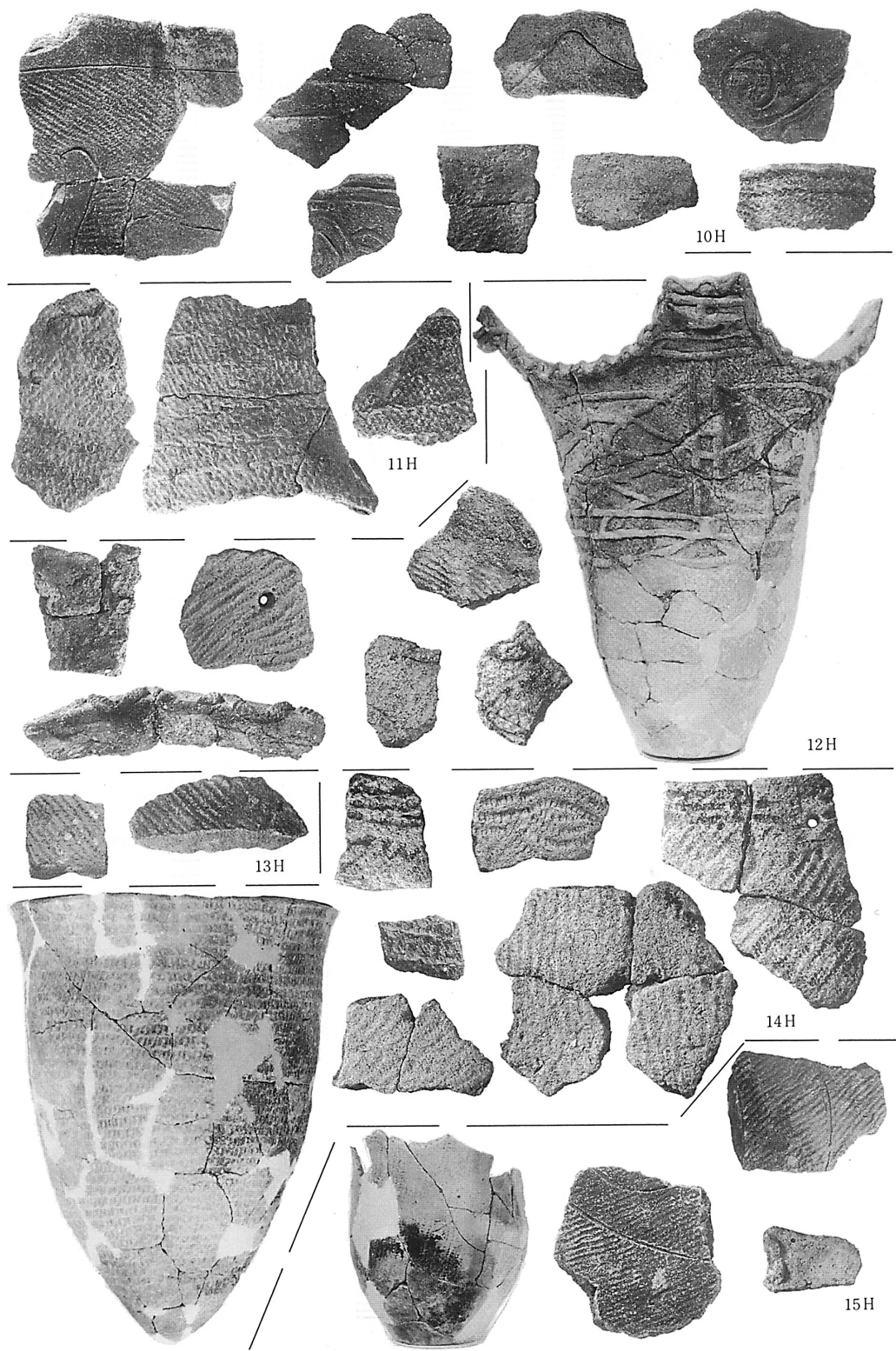


写真12 遺構内出土土器(3)

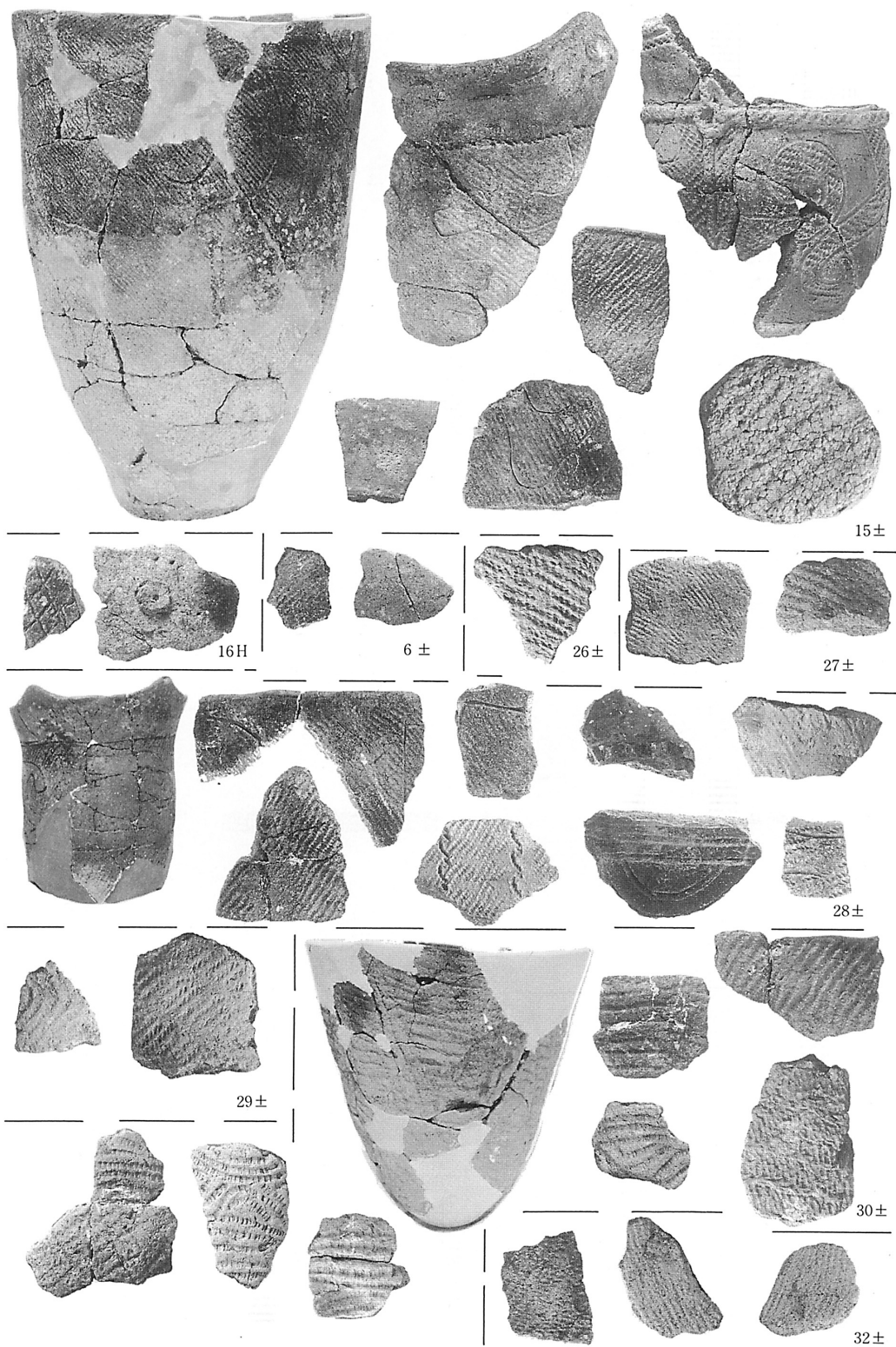


写真13 遺構内出土土器(3)

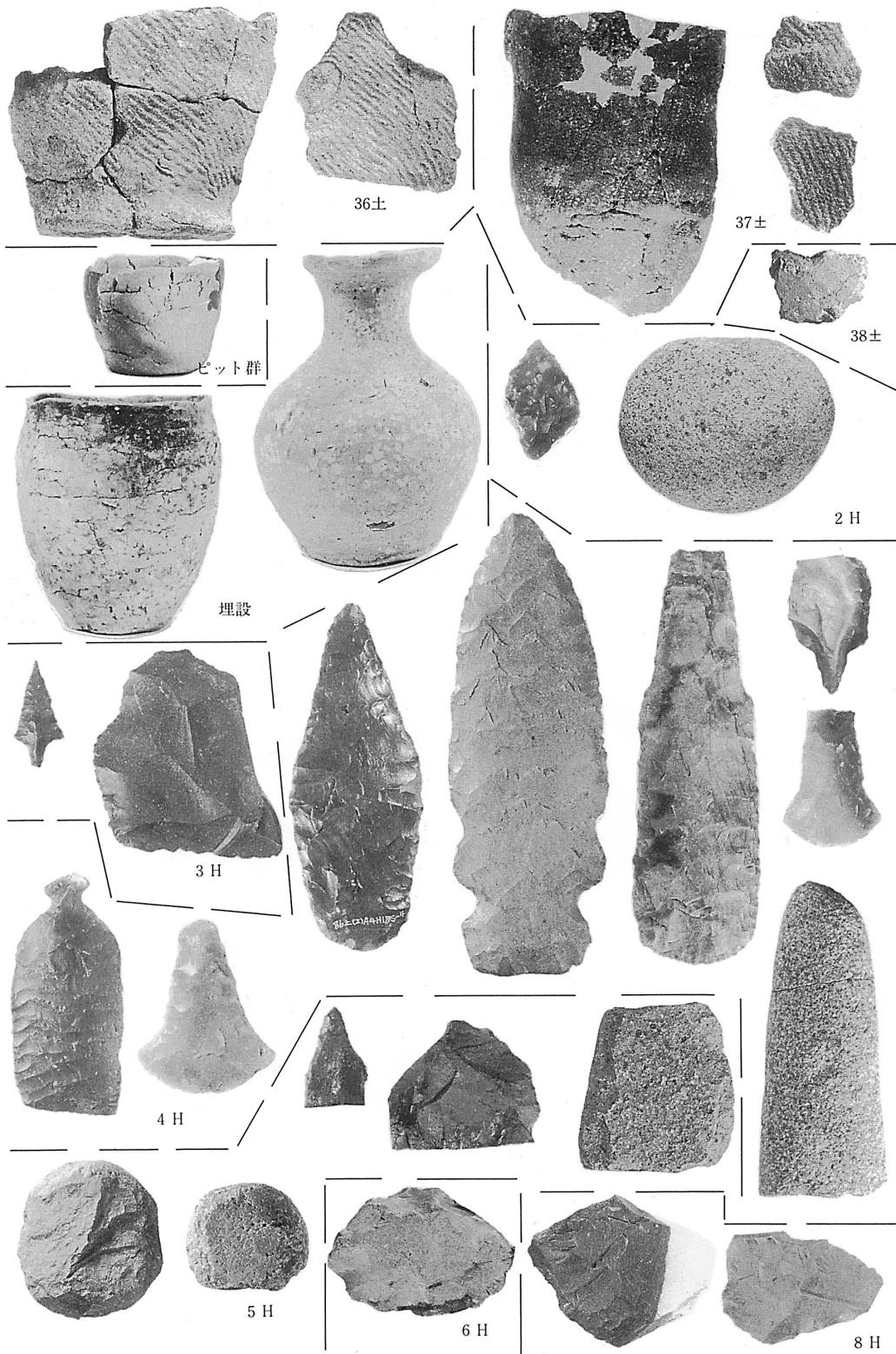


写真14 遺構内出土土器・石器

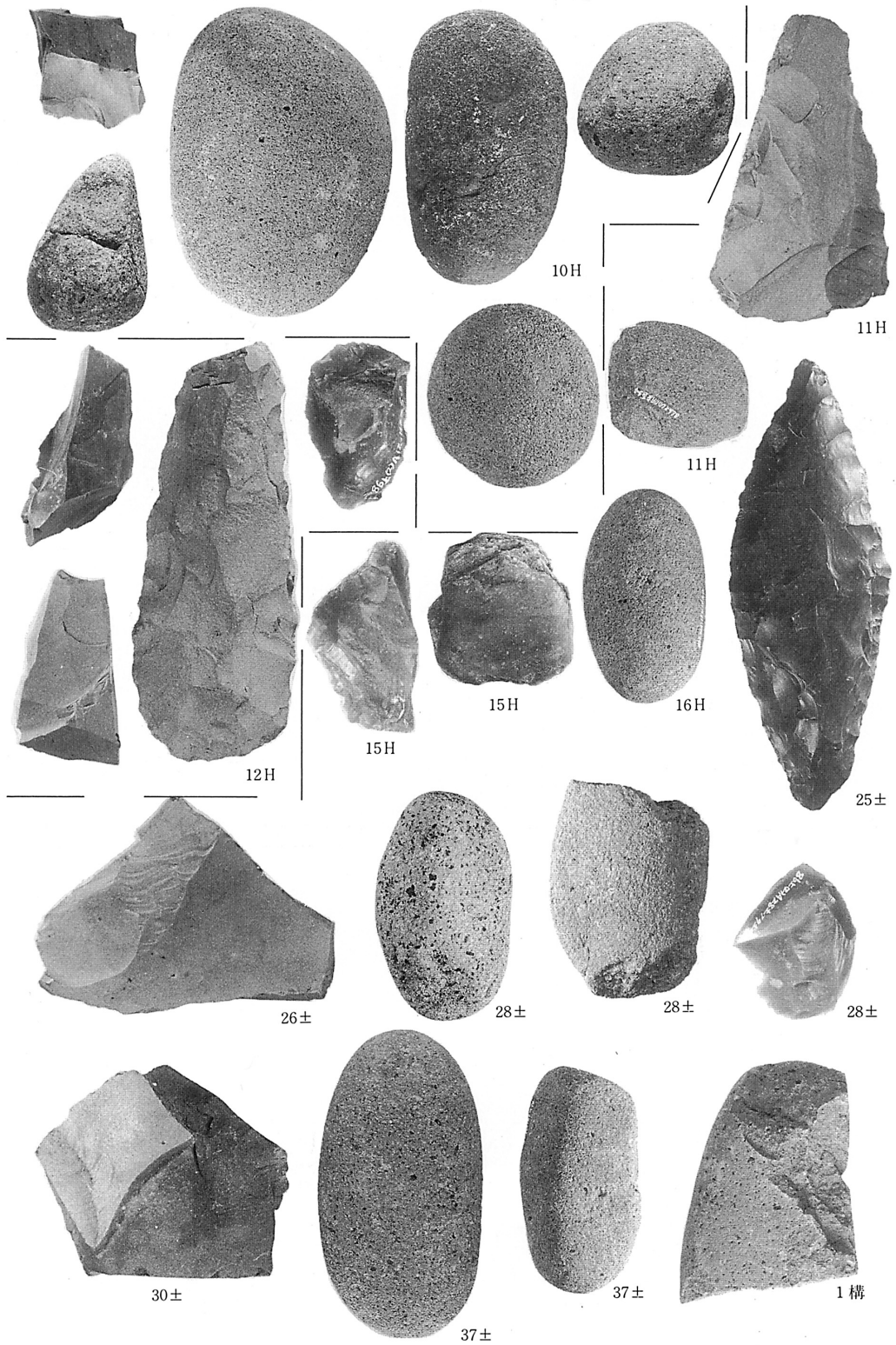
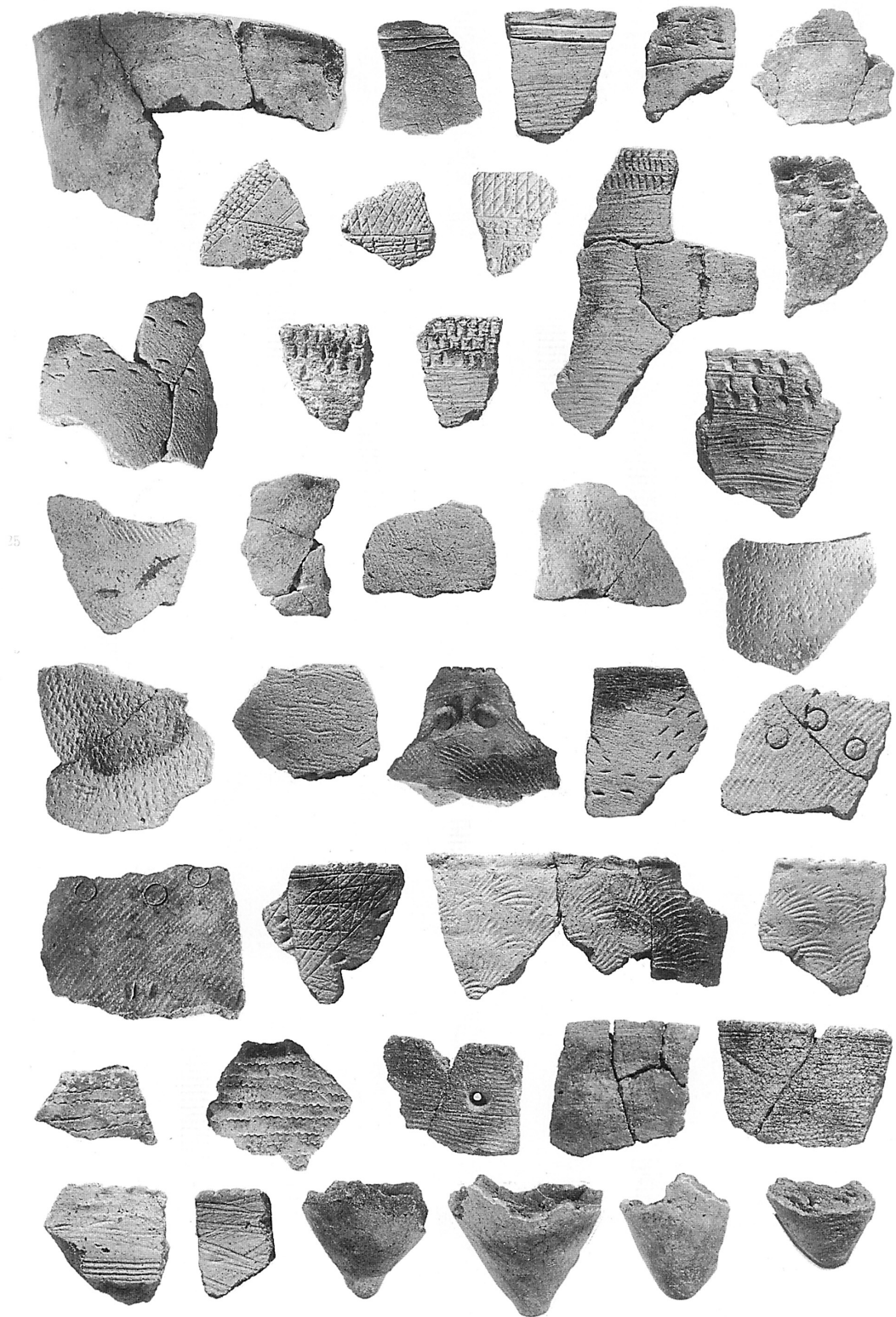


写真15 遺構内出土石器



35

写真16 遺構外出土土器(1) 第I群土器



写真17 遺構外出土土器(2) 第II群土器

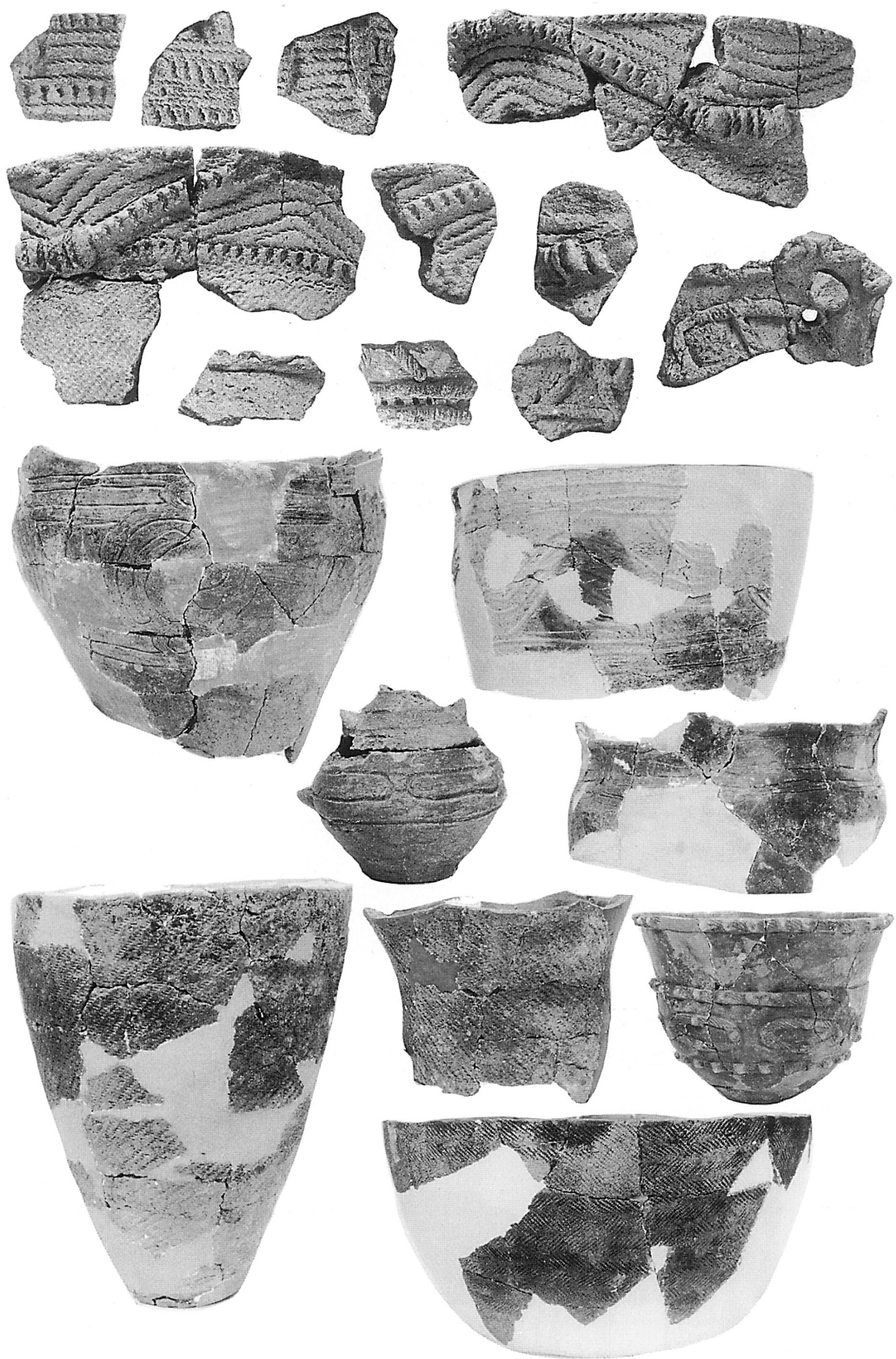


写真18 遺構外出土土器(3) 第Ⅲ・Ⅳ群土器

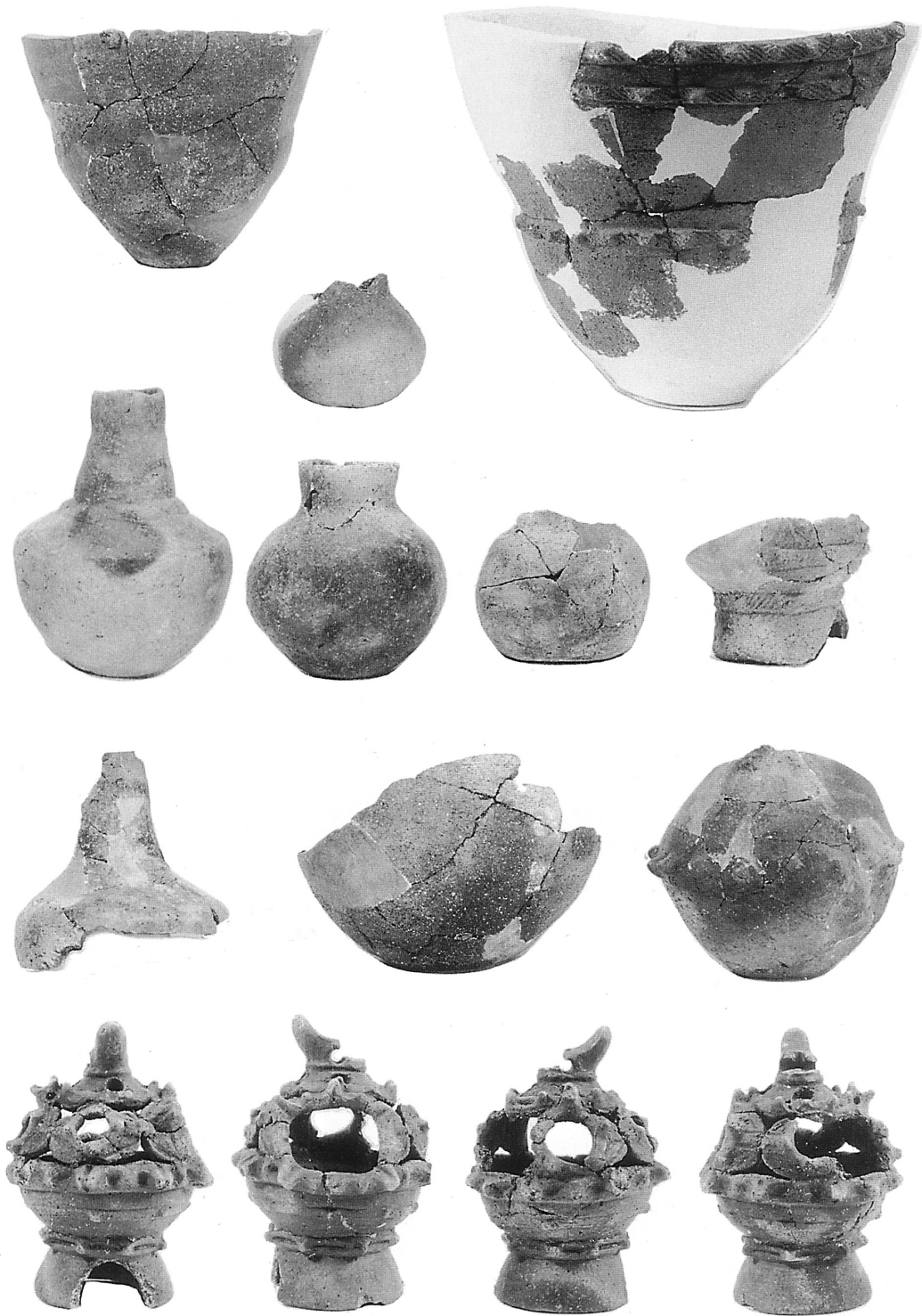


写真19 遺構外出土土器(4) 第Ⅳ群土器

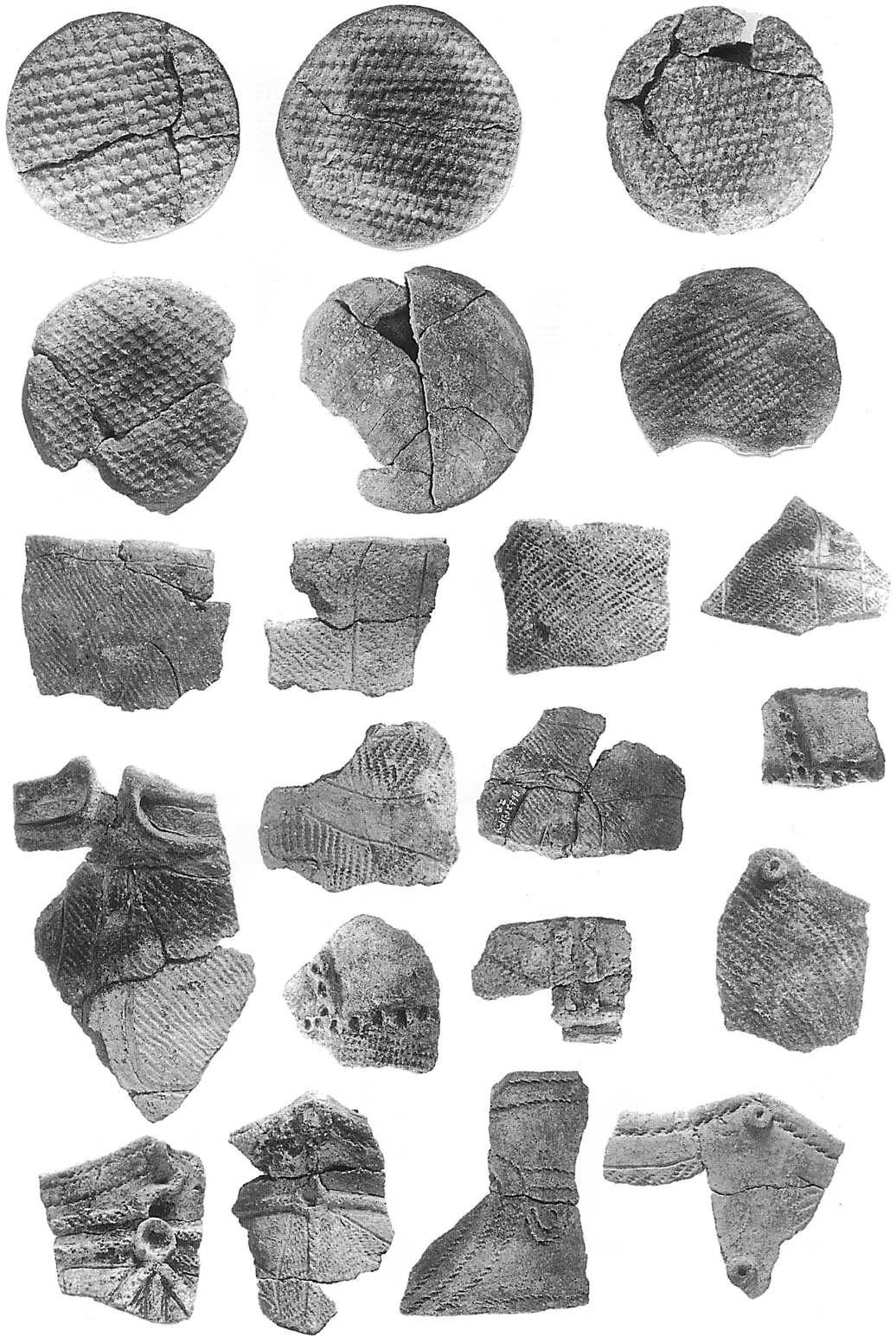


写真20 遺構外出土土器(5) 第Ⅳ群土器

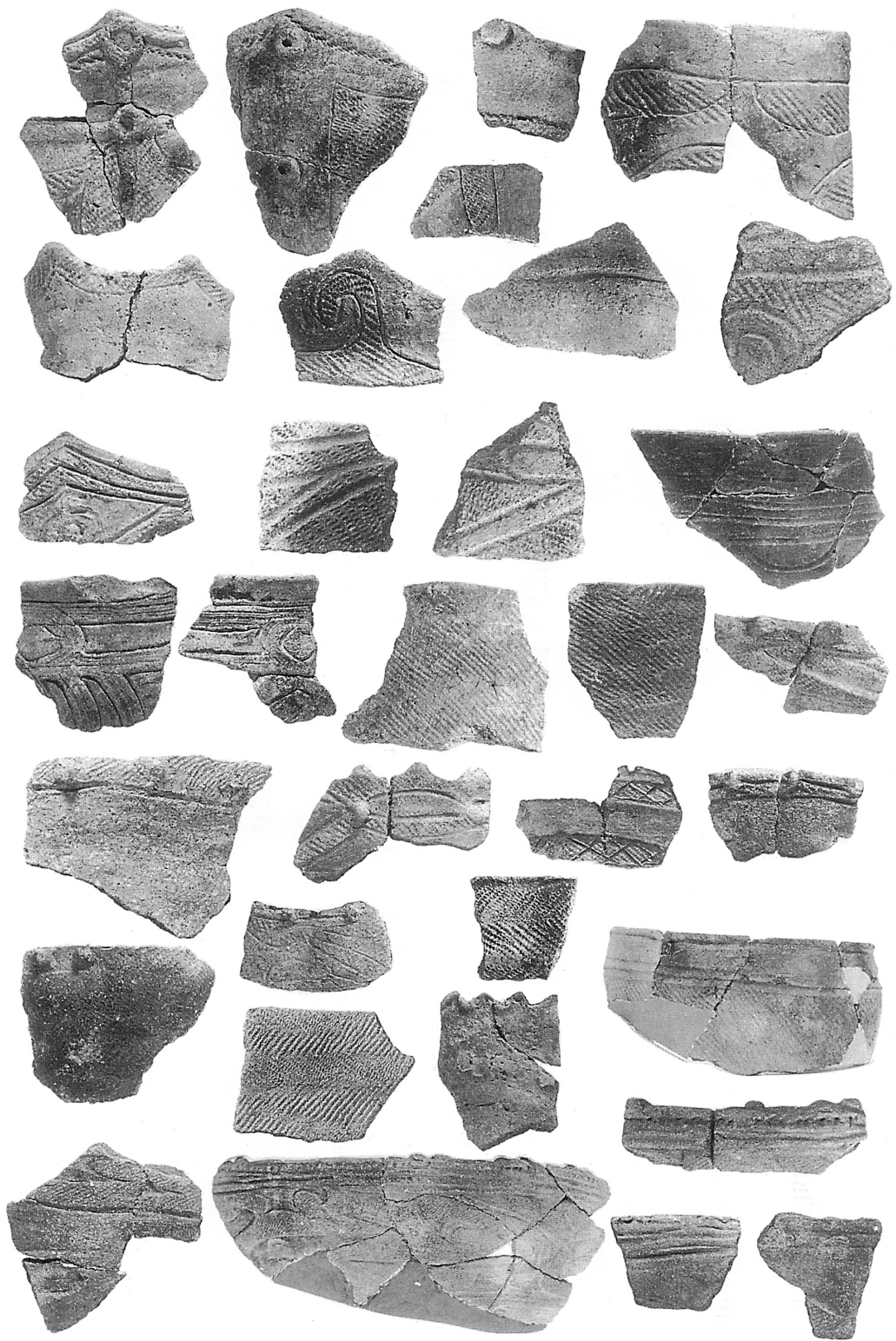


写真21 遺構外出土土器(6) 第IV・V群土器

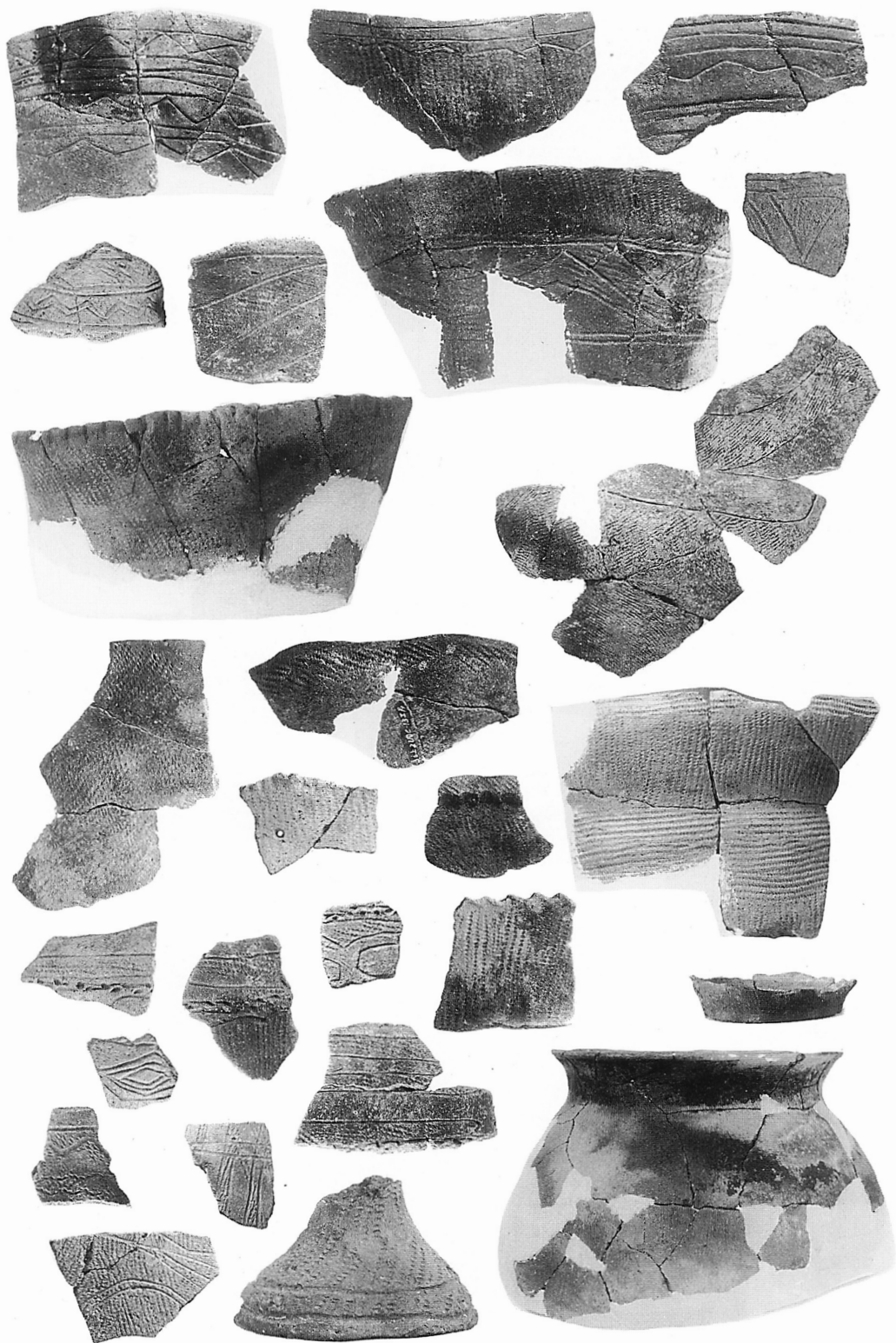


写真22 遺構外出土土器(7) 第VI群土器・土師器

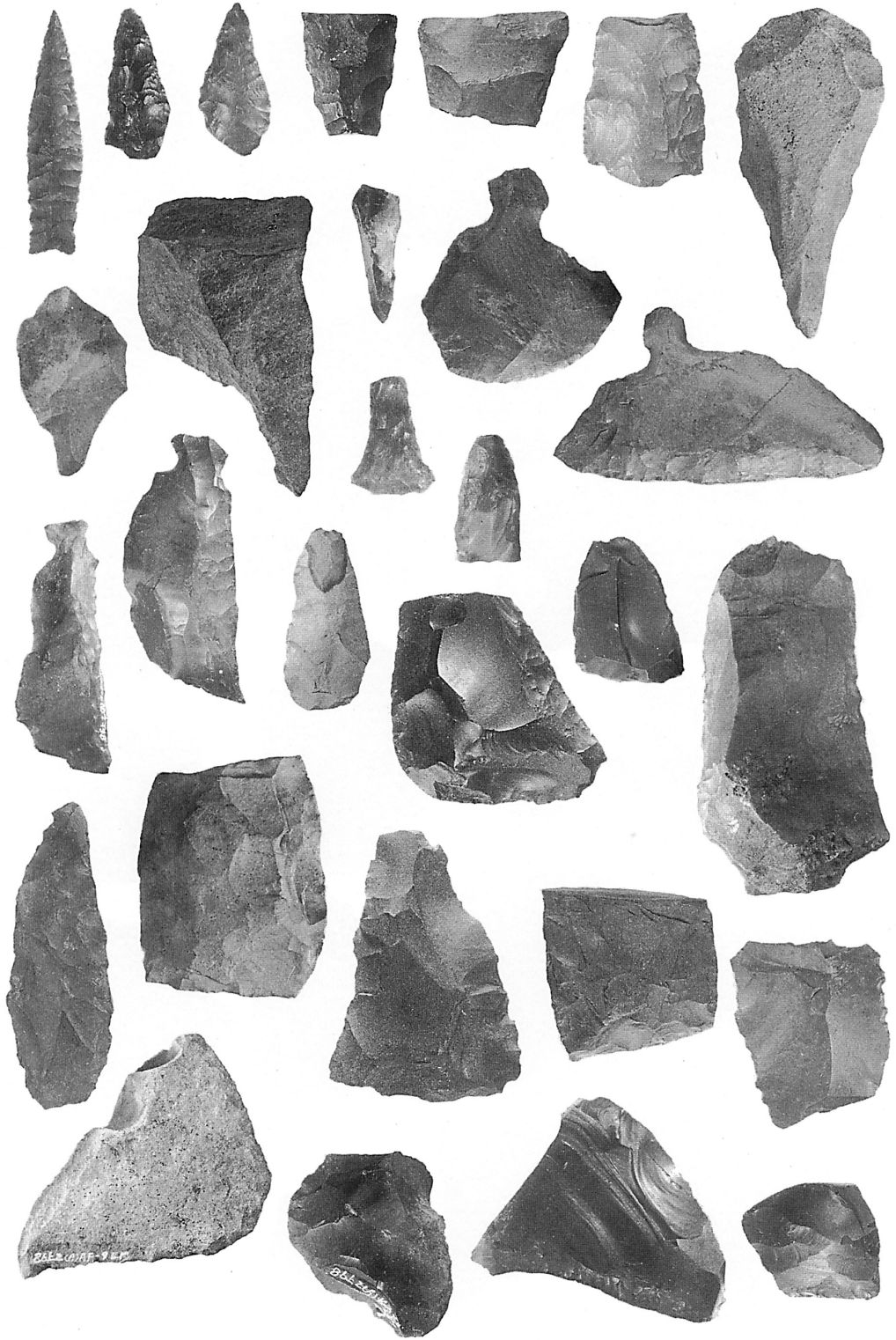


写真23 遺構外出土石器(1)

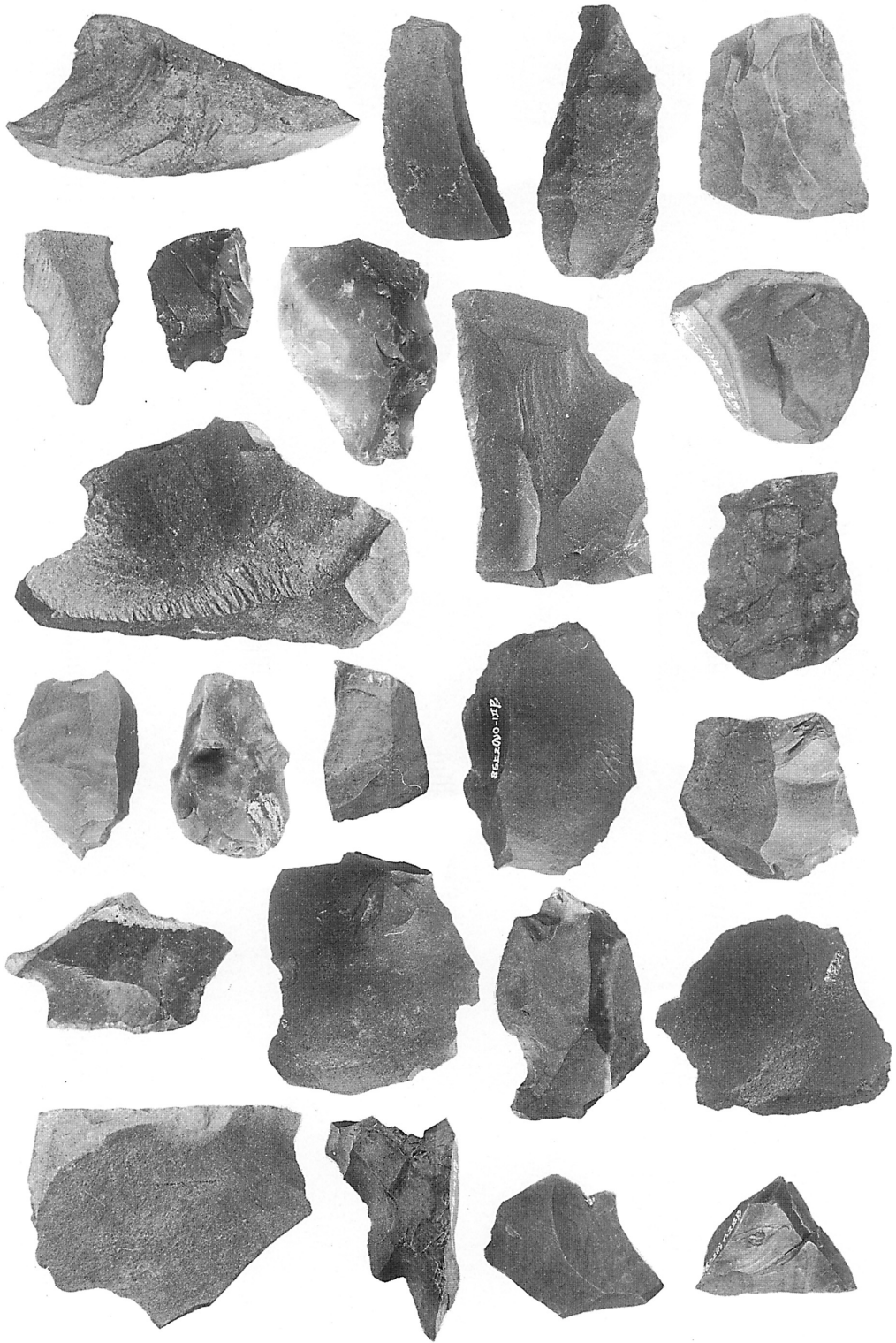


写真24 遺構外出土石器(2)

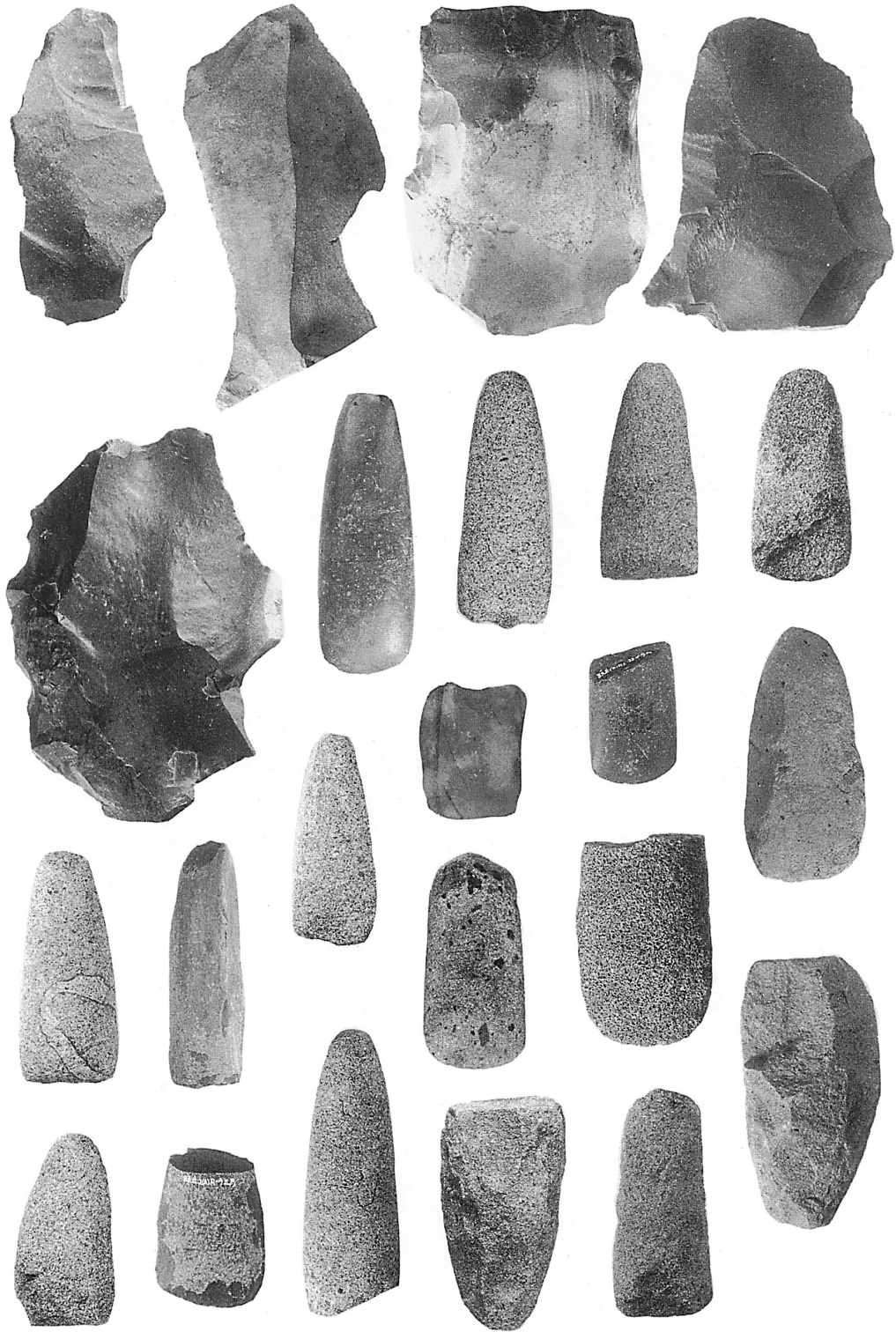


写真25 遺構外出土石器(3)

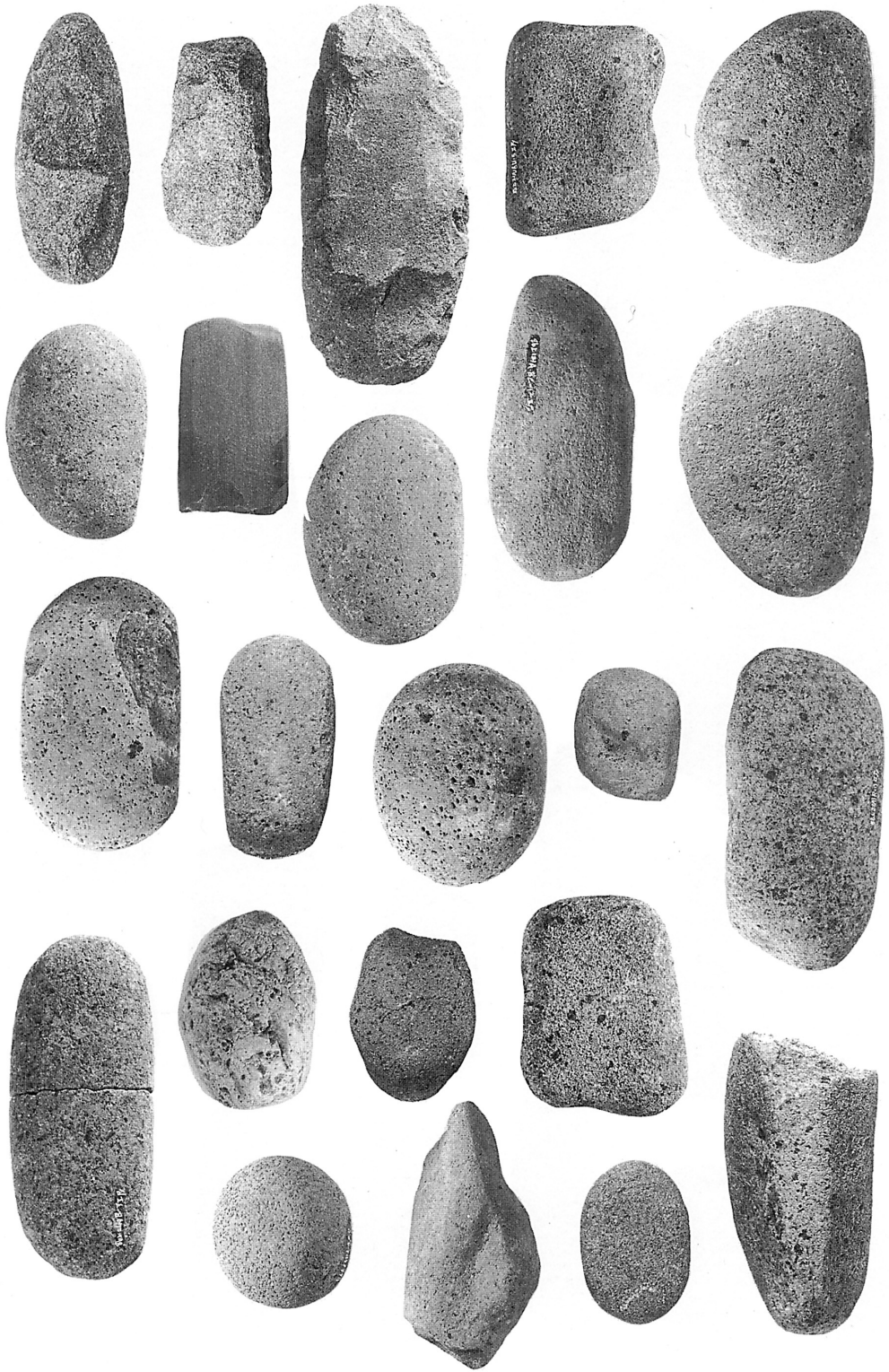


写真26 遺構外出土石器(4)

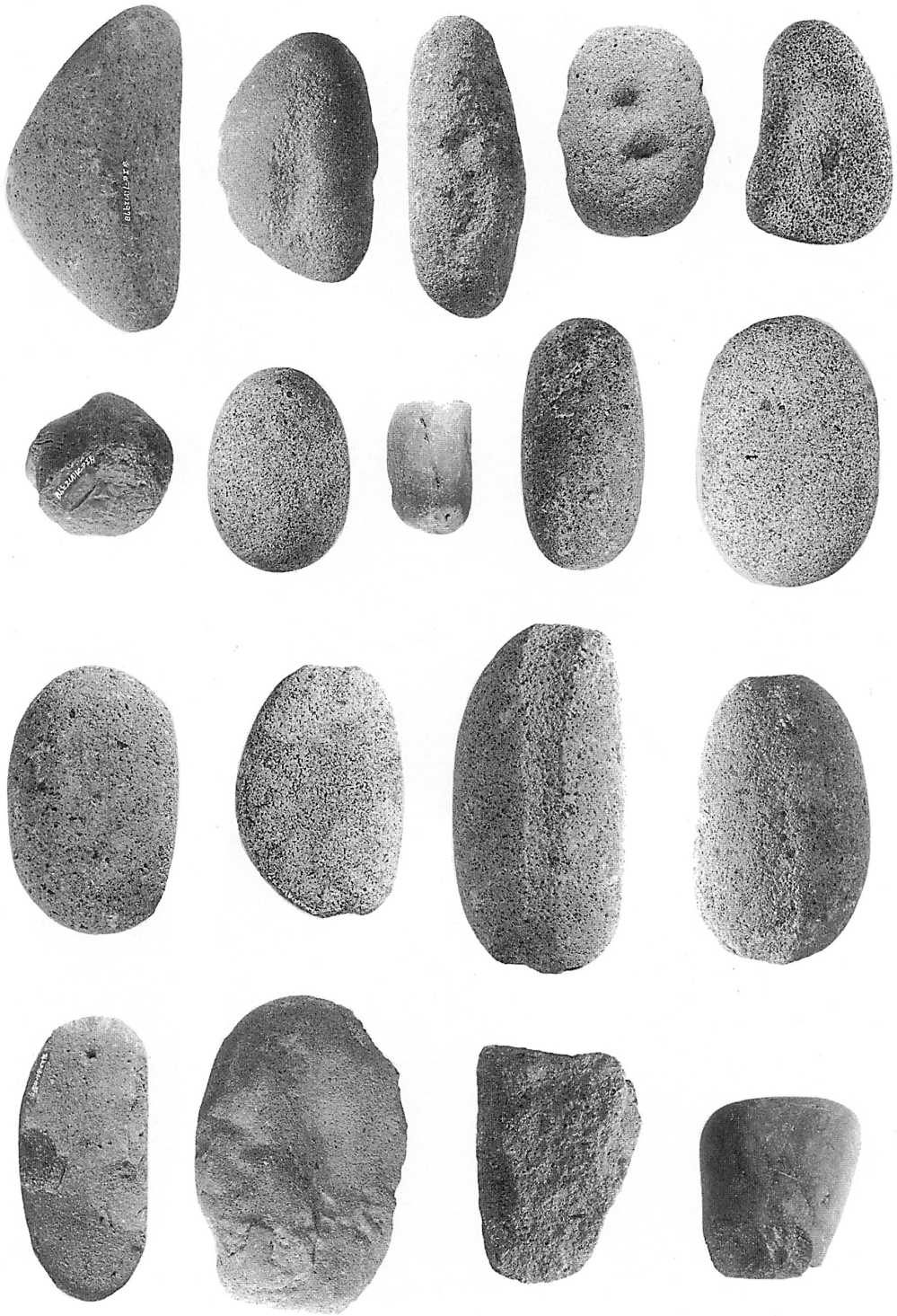


写真27 遺構外出土石器(5)



写真28 遺構外出土石器(6)

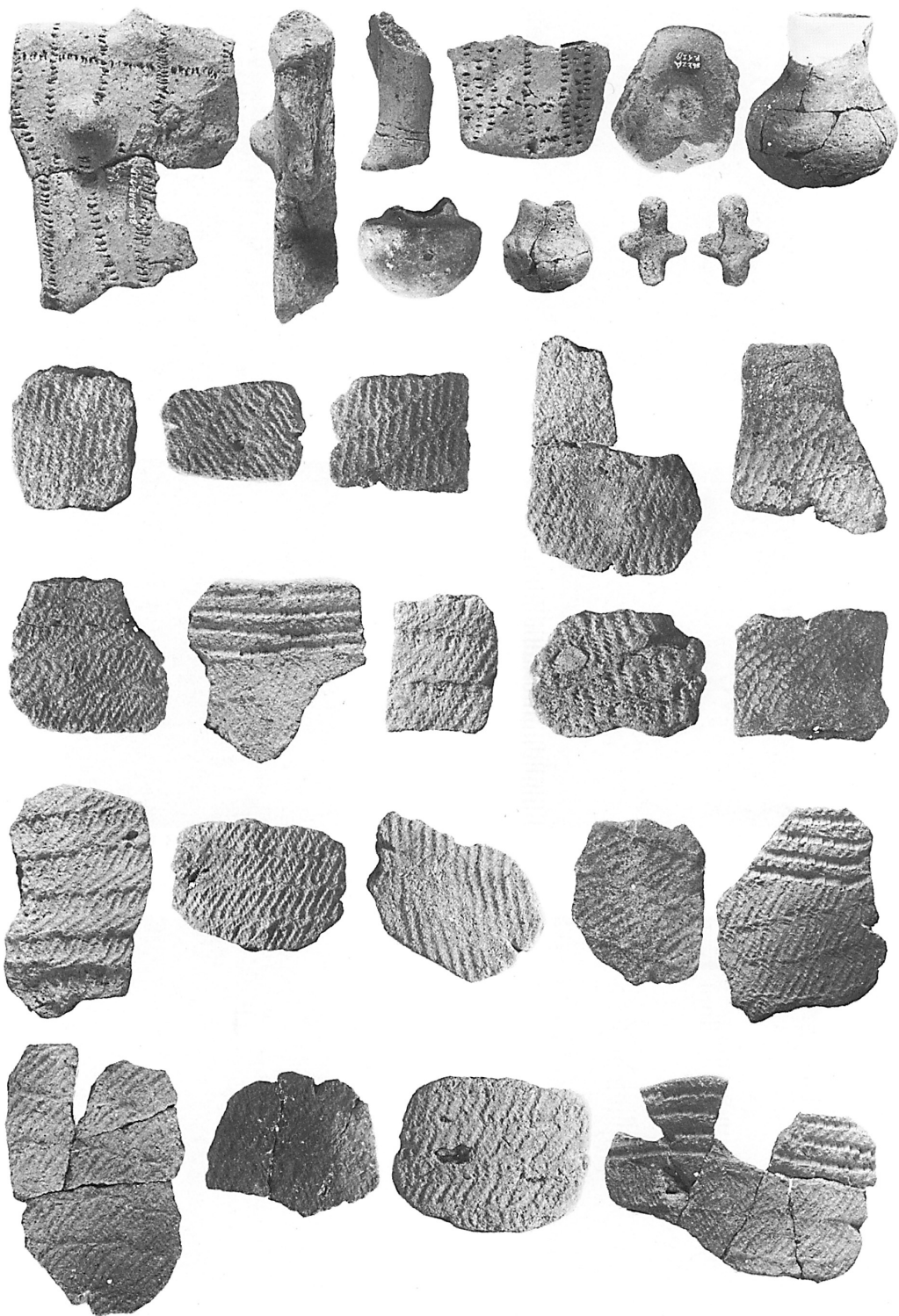
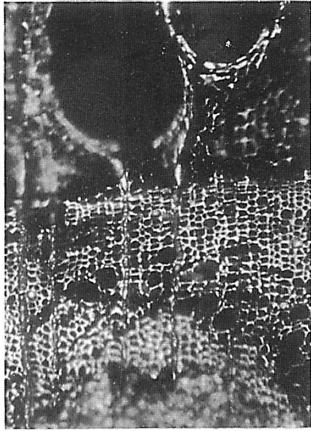


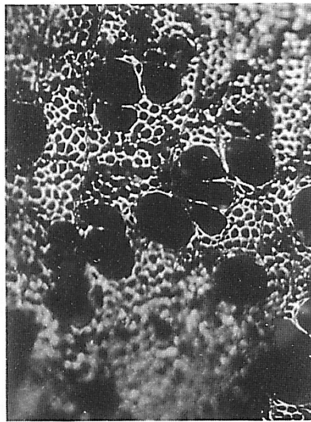
写真29 遺構外出土土製品



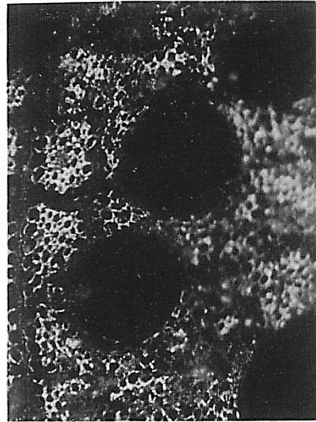
1. クリ (No. 2) 木口



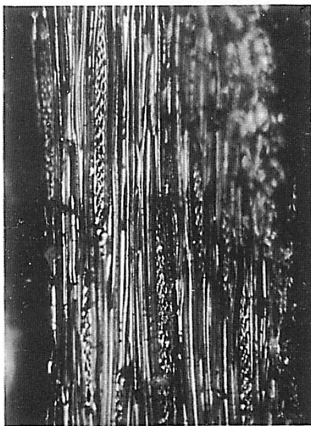
2. クリ (No. 4) 板目



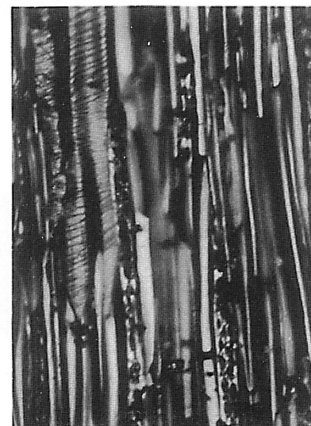
3. サクラ類 (No. 2) 木口



4. グルミ (No. 3) 木口



5. グルミ (No. 3) 板目



6. サクラ類 (No. 2) 板目
すべて×50

写真30 上尾駁(2)遺跡A出土の炭化木

青森県埋蔵文化財調査報告書 第114集

上尾駮(2)遺跡(I)

—むつ小川原開発事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—

発行年月日 昭和63年 3 月31日

発行 青森県教育委員会

編集 青森県埋蔵文化財調査センター

〒030-02 青森市大字新城字天田内152-15

電話 0177-88-5701・5702

印刷 青森コロニー印刷

〒030 青森市大字幸畑字松元78

電話 0177-38-2021(代)